

豊 後 府 内 8

中世大友府内町跡第34・43次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

2 0 0 8

大分県教育庁埋蔵文化財センター



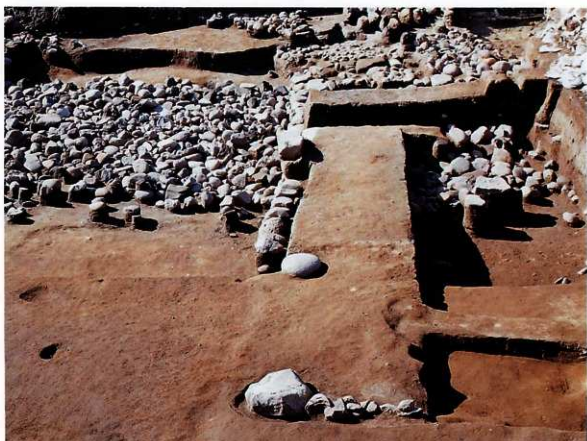
府内町跡第34次調査区全景（南から）



府内町跡第34次調査区SD066堀及びSX047石列



府内町跡第43次調査区SX023全景（南から）



府内町跡第43次調査区SX023と礎石建物



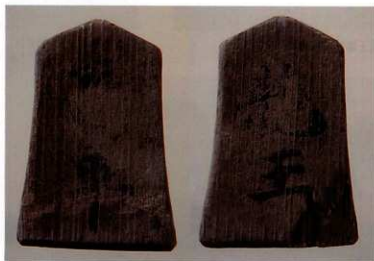
府内町跡第34次調査区 SD066出土木簡
(2-36-194)



府内町跡第34次調査区
SD066出土木簡？
(2-36-196)



府内町跡第34次調査区
SD066出土ひとがた
(2-36-197)



府内町跡第34次調査区SD066出土将棋の駒
(飛車・龍王) (2-36-195)



府内町跡第34次調査区
SD066出土ひとがた (2-36-198)



府内町跡第43次調査区
SD012出土ガラス製小皿 (3-27-11)



府内町跡第43次調査区
SK046出土指輪 (3-134-12)



府内町跡第43次調査区 SD012出土火縄銃部品 (3-27-1)



府内町跡第43次調査区SD012出土漆器 (3-20-8・17・18)



府内町跡第43次調査区
SD012出土土鎖 (3-27-12)



府内町跡第43次調査区SK004出土鍛冶道具 (3-78・3-79・3・4・6)

序 文

本書は県教育委員会が国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受けて、平成15・16年度に実施した国道10号古国府拡幅事業に伴う中世大友城下町跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分川河口付近の左岸は、九州の有力な戦国大名で自らキリシタンとなり南蛮貿易を行った大友宗麟の守護所が置かれていたところです。

近年、都市整備に伴う発掘調査により、守護所である「大友館」やその菩提寺である「万寿寺」をはじめ中世の府内町跡の様子が次第に明らかになってきました。

本書に収録した第34・43次調査区は、戦国時代の府内の町の景観を描いたとされる「府内古図」によれば万寿寺の西側にあたります。

発掘調査では、万寿寺境内の一部と西側の堀の跡、「府内」の中心部を南北に貫く街路の跡などが検出されました。遺構の中からは、当時南蛮貿易でもたらされた陶磁器類などたくさんの遺物が出土し大きな成果をあげることができました。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深めるための一助となるとともに学術研究資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書作成に至るまで多くの方々の御理解と御協力をいただきましたことに対し、衷心から感謝申し上げます。

平成 20 年 3 月 25 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 福 田 快 次

例 言

1. 本書は、大分市元町に所在する中世大友府内町跡第34・43次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道10号古国府城址事業の実施に伴い、国土交通省九州地方整備局大分河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 中世大友府内町跡第34次調査は平成15年5月から平成15年3月にかけて実施した。また、中世大友府内町跡第43次調査は平成16年6月から平成17年2月にかけて実施した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測は調査担当者が行ったほか、貿易陶磁器は雅企画と岡三リビック株式会社に委託した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については調査員のほか、大分県教育庁埋蔵文化財センターの整理作業員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。座標値については、旧日本測地系と世界測地系の数値を併記している。
8. 本書で使用する遺構略号は、以下の通りとする。
SD：溝、SK：土坑、SE：井戸、SF：道路および道路状遺構、SP：柱穴および小穴、SX：その他の遺構（不明遺構・集石遺構・整地層など）
9. 本書で使用了出土遺物の分類については、以下の文献による。
青花 小野正敏「15～16世紀の染付陶・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
青磁 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
白磁 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982年）
備前系陶器
栗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼鉢鉢の編年案」（『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』所収 2000年）
中国南部産焼締陶器鉢
吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003年）
京都系土師器および土師質土器
塩地潤一「九州出土の京都系土師器Ⅲ」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999年）
坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」（『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）
吉備系土師器碗
山本悦代「吉備系土師器碗の成立と展開」（『鹿田遺跡—第5次調査—』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年）
瓦 森田 克「屋瓦」（『撰津高槻城』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会）
挽白 三輪茂雄「白」ものと人間の文化史25 法政大学出版局 1978年
10. 本書の執筆は第1・3・5章を坂本嘉弘、第2章を友岡信彦が行った。また第4章の自然科学的分析には松井章（奈良文化財研究所）・平尾良光（別府大学）・金原正明（奈良教育大学）の各先生から原稿をいただいた。
11. 本書の編集は、坂本嘉弘・友岡信彦で協議して行った。

目 次

第1章	はじめに	
第1節	調査の経緯	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の経過	1
3.	調査の体制	4
第2節	遺跡の立地と環境	6
1.	地理的環境	6
2.	歴史的環境	6
第3節	報告書作成にあたって	8
1.	報告書の刊行順序	8
2.	府内古図と街路の名称	8
第2章	中世大友府内町跡第34次調査	
第1節	調査の経過と概要	9
1.	調査の経過	9
2.	遺構の概要	9
第2節	遺構と遺物	14
1.	溝及び関連遺構	14
2.	土坑	55
3.	道路状遺構	69
4.	礎石建物跡	71
5.	石列	75
6.	築石遺構	81
7.	遺物集中区	98
8.	柱穴出土遺物	105
9.	整地層	105
第3節	小結	124
第3章	中世大友府内町跡第43次調査	
第1節	調査の概要	127
1.	調査の経過	127
2.	遺構の概要	129
3.	土層	130
第2節	遺構と遺物	133
1.	井戸	133
2.	溝及び関連遺構	134
3.	建物及び関連遺構	186
4.	土坑	197
5.	柱穴状遺構	232
6.	その他	233

7. 包含層出土遺物	236
第3節 小 結	253
第4章 自然科学的分析	
第1節 大友城下町跡34次・43次調査出土の動物遺存体	259
	丸山真史 (京都大学大学院人間・環境学研究科)
	松井 章 (奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)
1. 概要	259
2. 種類別の特徴	259
3. 骨角器の特徴	261
4. 考察	261
5. まとめ	264
第2節 第43次調査、万寿寺堀における環境考古学調査	276
	金原正明 (奈良教育大学) 古環境研究所
1. はじめに	276
2. 試料と方法	276
3. 結 果	276
4. 考 察	278
第3節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査	291
	魯礎 ^{ルソ} 苙 ^{ルソ} ・平尾良光 (別府大学大学院 文学研究科)
1. はじめに	291
2. 資 料	291
3. 鉛同位体比の原理	291
4. 分析方法	292
5. 測定値の表し方	292
6. 化学組成	292
7. 鉛同位体比の測定結果	293
8. 考 察	293
第5章 総 括	
1. 永祿年間 (1558~1570) の「府内」	299
2. 元龜年間から天正10年頃の万寿寺	300
3. 柴田礼能と「府内」	300
4. 「萬寿寺築地之内并西之屋敷」と礎石建物群	301
遺物観察表	305
写真図版	337
報告書名抄録	351

第2-90図	SX063出土遺物実測図	80	第2-120図	SX040出土遺物実測図	99
第2-91図	SX021実測図	81	第2-121図	SX041実測図	100
第2-92図	SX021出土遺物実測図	82	第2-122図	SX041出土遺物実測図1	101
第2-93図	SX022実測図	82	第2-123図	SX041出土遺物実測図2	102
第2-94図	SX022出土遺物実測図	83	第2-124図	SX041出土遺物実測図3	103
第2-95図	SX023実測図	84	第2-125図	SX041出土遺物実測図4	104
第2-96図	SX023出土遺物実測図1	84	第2-126図	SX060実測図及び出土遺物実測図	104
第2-97図	SX023出土遺物実測図2	85	第2-127図	柱穴出土遺物実測図	104
第2-98図	SX023出土遺物実測図3	86	第2-128図	竪地層出土遺物実測図1	106
第2-99図	SX023出土遺物実測図4	86	第2-129図	竪地層出土遺物実測図2	107
第2-100図	SX024実測図	87	第2-130図	竪地層出土遺物実測図3	108
第2-101図	SX024出土遺物実測図1	87	第2-131図	竪地層出土遺物実測図4	109
第2-102図	SX024出土遺物実測図2	88	第2-132図	竪地層出土遺物実測図5	110
第2-103図	SX028実測図	89	第2-133図	包合層・竪地層出土遺物実測図6	111
第2-104図	SX028出土遺物実測図1	90	第2-134図	竪地層出土遺物実測図7	112
第2-105図	SX028出土遺物実測図2	91	第2-135図	竪地層出土遺物実測図8	113
第2-106図	SX028出土遺物実測図3	92	第2-136図	竪地層出土遺物実測図9	114
第2-107図	SX028出土遺物実測図4	93	第2-137図	竪地層出土遺物実測図10	115
第2-108図	SX028出土遺物実測図5	94	第2-138図	竪地層出土遺物実測図11	116
第2-109図	SX035実測図	94	第2-139図	竪地層出土遺物実測図12	117
第2-110図	SX035出土遺物実測図	94	第2-140図	竪地層出土遺物実測図13	118
第2-111図	SX038実測図	95	第2-141図	竪地層出土遺物実測図14	119
第2-112図	SX038出土遺物実測図	95	第2-142図	竪地層出土遺物実測図15	120
第2-113図	SX046実測図	95	第2-143図	竪地層出土遺物実測図16	121
第2-114図	SX054実測図	96	第2-144図	竪地層出土遺物実測図17	122
第2-115図	SX054出土遺物実測図1	96	第2-145図	竪地層出土遺物実測図18	123
第2-116図	SX054出土遺物実測図2	97	第2-146図	府内町跡第34次調査区 主要遺構実測図1(16世紀後葉以前)	125
第2-117図	SX039実測図	98	第2-147図	府内町跡第34次調査区 主要遺構実測図2(16世紀後葉遺構)	126
第2-118図	SX039出土遺物実測図	98			
第2-119図	SX040実測図	98			

第3章

第3-1図	府内町跡第43次調査区位置図	127	第3-21図	SD012出土遺物実測図13	148
第3-2図	府内町跡第43次調査区完備状態実測図	129	第3-22図	SD012出土遺物実測図14	149
第3-3図	府内町跡第43次調査区SX023上層土層実測図	131・132	第3-23図	SD012出土遺物実測図15	150
第3-4図	府内町跡第43次調査区西壁土層実測図	131・132	第3-24図	SD012出土遺物実測図16	151
第3-5図	府内町跡第43次調査区H-63区南壁土層実測図	131・132	第3-25図	SD012出土遺物実測図17	152
第3-6図	SE036実測図	133	第3-26図	SD012出土遺物実測図18	153
第3-7図	SE036出土遺物実測図	133	第3-27図	SD012出土遺物実測図19	155
第3-8図	府内町跡第43次調査区H-64区北壁土層実測図	134	第3-28図	SD012出土遺物実測図20	156
第3-9図	SD012出土遺物実測図1	135	第3-29図	SD012出土遺物実測図21	157
第3-10図	SD012出土遺物実測図2	136	第3-30図	SD012出土遺物実測図22	158
第3-11図	SD012出土遺物実測図3	137	第3-31図	SD012出土遺物実測図23	159
第3-12図	SD012出土遺物実測図4	138	第3-32図	SD012鋼鉄出土状態実測図	160
第3-13図	SD012出土遺物実測図5	139	第3-33図	SD012出土鋼鉄実測図1	160
第3-14図	SD012出土遺物実測図6	140	第3-34図	SD012出土鋼鉄実測図2	161
第3-15図	SD012出土遺物実測図7	141	第3-35図	SD012出土鋼鉄実測図3	162
第3-16図	SD012出土遺物実測図8	142	第3-36図	府内町跡第43次調査区SX022実測図	163
第3-17図	SD012出土遺物実測図9	143	第3-37図	府内町跡第43次調査区H-63区の万寿寺西側の堀の埋立状況の 趾上面と第2南北路の整備状況	164
第3-18図	SD012出土遺物実測図10	144	第3-38図	府内町跡第43次調査区SX023の初期石積実測図	165
第3-19図	SD012出土遺物実測図11	145	第3-39図	SX023出土遺物実測図1	166
第3-20図	SD012出土遺物実測図12	147	第3-40図	SX023出土遺物実測図2	167

挿 図 目 次

第 1 章

第1-1図	中世大友城下町跡発掘調査状況	2	第1-3図	中世大友城下町跡と主要中世道跡	7
第1-2図	中世大友城下町跡の周辺の地形と道跡	5	第1-4図	府内古図と街路名称の設定	8

第 2 章

第2-1図	府内町跡第34次調査区位置図	9	第2-45図	SD066出土遺物実測図25	51
第2-2図	府内町跡第34次調査区道構配置図	10	第2-46図	SD066出土遺物実測図26	52
第2-3図	府内町跡第34次調査区東壁土層図	11・12	第2-47図	SD066出土遺物実測図27	53
第2-4図	SD029A実測図	14	第2-48図	SD066出土遺物実測図28	54
第2-5図	SD029B実測図	15	第2-49図	SK004実測図及び出土遺物実測図	55
第2-6図	SD029A・029B出土遺物実測図	16	第2-50図	SK005実測図	55
第2-7図	SD080実測図	16	第2-51図	SK010実測図及び出土遺物実測図	55
第2-8図	SD018実測図	16	第2-52図	SK011・013実測図	56
第2-9図	SD026実測図	16	第2-53図	SK014実測図及び出土遺物実測図	56
第2-10図	SD026出土遺物実測図	17	第2-54図	SK015実測図	57
第2-11図	SD031出土遺物実測図	18	第2-55図	SK017実測図	57
第2-12図	SD031実測図	18	第2-56図	SK020・027実測図	57
第2-13図	SD032実測図	19	第2-57図	SK030実測図	58
第2-14図	SD032出土遺物実測図	20	第2-58図	SK030出土遺物実測図	58
第2-15図	SD033実測図	20	第2-59図	SK036実測図	59
第2-16図	SD052実測図	21	第2-60図	SK045実測図	59
第2-17図	SD079実測図及び出土遺物実測図	21	第2-61図	SK045出土遺物実測図1	59
第2-18図	SD066実測図	23	第2-62図	SK045出土遺物実測図2	60
第2-19図	SD066土層1 (59-60区間北壁)	24	第2-63図	SK049実測図	61
第2-20図	SD066土層2 (60-61区間南壁)	25	第2-64図	SK049出土遺物実測図	62
第2-21図	SD066出土遺物実測図1	27	第2-65図	SK050・051・055実測図	62
第2-22図	SD066出土遺物実測図2	28	第2-66図	SK055出土遺物実測図	62
第2-23図	SD066出土遺物実測図3	29	第2-67図	SK066実測図及び出土遺物実測図	63
第2-24図	SD066出土遺物実測図4	30	第2-68図	SK067実測図	64
第2-25図	SD066出土遺物実測図5	31	第2-69図	SK068実測図及び出土遺物実測図	64
第2-26図	SD066出土遺物実測図6	32	第2-70図	SK061実測図及び出土遺物実測図	65
第2-27図	SD066出土遺物実測図7	33	第2-71図	SK072実測図	66
第2-28図	SD066出土遺物実測図8	34	第2-72図	SK072出土遺物実測図	67
第2-29図	SD066出土遺物実測図9	35	第2-73図	SK075実測図及び出土遺物実測図	68
第2-30図	SD066出土遺物実測図10	36	第2-74図	SK076実測図	68
第2-31図	SD066出土遺物実測図11	37	第2-75図	SK076出土遺物実測図	69
第2-32図	SD066出土遺物実測図12	38	第2-76図	SK081実測図	69
第2-33図	SD066出土遺物実測図13	39	第2-77図	SP012第2南北街路土層実測図	70
第2-34図	SD066出土遺物実測図14	40	第2-78図	礎石建物跡配置図	71
第2-35図	SD066出土遺物実測図15	41	第2-79図	SB001実測図	72
第2-36図	SD066出土遺物実測図16	42	第2-80図	SB002実測図	73
第2-37図	SD066出土遺物実測図17	44	第2-81図	SB003実測図	74
第2-38図	SD066出土遺物実測図18	45	第2-82図	SX077実測図	75
第2-39図	SD066出土遺物実測図19	46	第2-83図	SX077出土遺物実測図1	75
第2-40図	SD066出土遺物実測図20	47	第2-84図	SX077出土遺物実測図2	76
第2-41図	SD066出土遺物実測図21	48	第2-85図	SX047実測図	78
第2-42図	SD066出土遺物実測図22	49	第2-86図	SX084実測図	79
第2-43図	SD066出土遺物実測図23	50	第2-87図	SX074実測図	79
第2-44図	SD066出土遺物実測図24	51	第2-88図	SX074出土遺物実測図	80
			第2-89図	SX063実測図	80

第3-139図	SK017出土物実測図 1	234	第3-152図	府内町跡第43次調査出土銅銭実測図 2	249
第3-140図	SK017出土物実測図 2	235	第3-153図	府内町跡第43次調査出土瓦実測図	250
第3-141図	H-63区出土物実測図	237	第3-154図	府内町跡第43次調査出土瓦・埴実測図	251
第3-142図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 1	238	第3-155図	府内町跡第43次調査出土メダイ実測図	252
第3-143図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 2	239	第3-156図	府内町跡第43次調査 出土石造品及び礎石実測図	252
第3-144図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 3	240	第3-157図	府内町跡第43次調査初期石積み	254
第3-145図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 4	241	第3-158図	府内町跡第43次調査万寿寺西側の 堀の埋立て状況 (SX023) と礎石建物	255
第3-146図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 5	242	第3-159図	府内町跡第43次調査第 I 期礎石建物	256
第3-147図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 6	243	第3-160図	府内町跡第43次調査第 II 期礎石建物	257
第3-148図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 7	244			
第3-149図	府内町跡第43次調査出土土物実測図 8	245			
第3-150図	府内町跡第43次調査出土金属器実測図	247			
第3-151図	府内町跡第43次調査出土銅銭実測図 1	248			

第 4 章

第4-1図	へら状製品の加工痕	260	第4-18図	木材 III	290
第4-2図	オモゲと鹿角	261	第4-19図	中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	295
第4-3図	哺乳類遺存体の組成	261	第4-20図	第4-19図の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	295
第4-4図	シュランドの馬具の模式図	263	第4-21図	中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	296
第4-5図	竹角器	272	第4-22図	第4-21図の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	296
第4-6図	動物遺存体 (1) 魚類・鳥類	272	第4-23図	今回の資料とこれまで測定された中世大友府内町跡出土の 金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	297
第4-7図	動物遺存体 (2) イヌ・ネコ・タヌキ	273	第4-24図	第4-23図の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	297
第4-8図	動物遺存体 (3) イノシシ下顎骨	273	第4-25図	今回の資料とこれまで測定された中世大友府内町跡出土の 金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	298
第4-9図	動物遺存体 (4) イノシシ	274	第4-26図	第4-25図の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$)	298
第4-10図	動物遺存体 (5) ニホンジカ	275			
第4-11図	万寿寺堀跡、H-63、S-012南壁における花粉ダイアグラム	279			
第4-12図	万寿寺堀跡、H-63、S-012南壁における寄生虫卵ダイアグラム	280			
第4-13図	万寿寺堀跡、H-63、S-012南壁における土壌堆積ダイアグラム	280			
第4-14図	花粉・胞子	286			
第4-15図	稲稈	287			
第4-16図	木材 I	288			
第4-17図	木材 II	289			

表 目 次

第1-1表	中世大友府内町発掘調査一覽 (1)	3	第4-8表	動物遺存体一覽表 (3)	270
第1-2表	中世大友府内町発掘調査一覽 (2)	4	第4-9表	動物遺存体一覽表 (4)	271
第2-1表	遺構一覽表	13	第4-10表	万寿寺堀跡、H-63、S-012南壁の花粉分析結果①	281
第2-2表	SX047上層一覽	79	第4-11表	万寿寺堀跡、H-63、S-012南壁の花粉分析結果②	282
第3-1表	府内町跡第43次調査遺構一覽表	128	第4-12表	万寿寺堀跡、H-63、S-012における稲実測定結果	282
第3-1表	種名表	266	第4-13表	万寿寺堀跡における土上木材の樹種同定結果	283
第4-2表	哺乳類の部位別集計表	266	第4-14表	万寿寺堀跡、H-63、S-012における土層分析結果①	284
第4-3表	イヌの下顎骨計測表	267	第4-15表	万寿寺堀跡、H-63、S-012における土層分析結果②	285
第4-4表	イノシシの下顎骨計測表	267	第4-16表	中世大友府内町跡34次・43次調査区から出土した 金属製品の化学組成 (%)	294
第4-5表	イノシシの各臼歯の咬痕段階および計測値	267	第4-17表	中世大友府内町跡34次・43次調査区から出土した 金属製品の鉛同位体比値	294
第4-6表	動物遺存体一覽表 (1)	268			
第4-7表	動物遺存体一覽表 (2)	269			

第3-41図	SX023出土遺物実測図 3	168	第3-89図	府内町跡第43次調査SK010実測図	202
第3-42図	SX023出土遺物実測図 4	169	第3-90図	SK010出土遺物実測図 1	203
第3-43図	SX023出土瓦・埴実測図	170	第3-91図	SK010出土遺物実測図 2	204
第3-44図	SX023出土土鏡白実測図 1	171	第3-92図	SX011出土銅銭実測図	204
第3-45図	SX023出土土鏡白実測図 2	172	第3-93図	SK011出土遺物実測図	205
第3-46図	SX023出土土鏡白実測図 3	173	第3-94図	SK013出土遺物実測図	206
第3-47図	SX023出土土鏡白実測図 4	174	第3-95図	SK013出土瓦実測図	206
第3-48図	SX023出土土鏡白実測図 5	175	第3-96図	SK013出土銅銭実測図	207
第3-49図	SX023出土土鏡白実測図 6	176	第3-97図	SK013出土土鏡白実測図	207
第3-50図	SX023出土土鏡白実測図 7	177	第3-98図	SK013出土石造品実測図	207
第3-51図	SX023出土土鏡白実測図 8	178	SP014出土遺物実測図・焼白	208	
第3-52図	SX023出土土鏡白実測図 9	179	第3-100図	SP014出土瓦・埴実測図	209
第3-53図	SX023出土土鏡白実測図10	180	第3-101図	府内町跡第43次調査SK015実測図	210
第3-54図	SX023出土土鏡白実測図11	181	第3-102図	SK015出土遺物実測図 1	211
第3-55図	SX023出土土鏡白実測図12	182	第3-103図	SK015出土遺物実測図 2	212
第3-56図	SX023出土石造品実測図 1	183	第3-104図	SK015出土石造品実測図	213
第3-57図	SX023出土石造品実測図 2	184	第3-105図	SK015出土銅銭実測図	213
第3-58図	SX023出土石造品実測図 3	185	第3-106図	SK015出土タイ実測図	214
第3-59図	SX023出土銅銭実測図	185	第3-107図	SK015出土鉄器実測図	214
第3-60図	第 I 期礎石建物実測図	186	第3-108図	SK015出土土鏡白実測図	214
第3-61図	SD012を覆めたSX023原石・石造品実測図	187・188	第3-109図	SP018出土遺物実測図 1	215
第3-62図	第 I 期礎石建物と第 II 期礎石建物の 垂直差実測図	187・188	第3-110図	SP018出土瓦実測図	216
第3-63図	府内町跡第43次調査第 II 期礎石建物の 下部南北方向土層実測図	189	第3-111図	SP018出土銅銭	216
第3-64図	府内町跡第43次調査第 II 期礎石建物の 飯案内出土銅銭	189	第3-112図	SP018出土遺物実測図 2	216
第3-65図	府内町跡第43次調査第 II 期礎石建物の 下部東西方向土層実測図	189	第3-113図	SK019出土遺物実測図	217
第3-66図	府内町跡第43次調査第 II 期礎石建物実測図	190	第3-114図	SK020出土遺物実測図	218
第3-67図	府内町跡第43次調査SX003実測図	191	第3-115図	SK021出土遺物実測図	218
第3-68図	SX003出土遺物実測図 1	192	第3-116図	府内町跡第43次調査SK024・025実測図	219
第3-69図	SX003出土遺物実測図 2	193	第3-117図	SK024出土遺物実測図	220
第3-70図	SX003出土金属製品実測図	194	第3-118図	SK025出土遺物実測図	220
第3-71図	SX003出土銅銭実測図	194	第3-119図	SK020・024・025出土銅銭実測図	220
第3-72図	SX003出土石造品実測図	194	第3-120図	SK026出土遺物実測図	221
第3-73図	SX003出土瓦・埴実測図	195	第3-121図	SK030実測図	221
第3-74図	SX003出土埴実測図	196	第3-122図	SK030出土遺物実測図	222
第3-75図	府内町跡第43次調査SK002実測図	197	第3-123図	府内町跡第43次調査SK032実測図	222
第3-76図	SK002出土遺物実測図	197	第3-124図	府内町跡第43次調査SK033実測図	223
第3-77図	府内町跡第43次調査SK004実測図	198	第3-125図	SK034実測図	223
第3-78図	SK004出土鉄製品実測図	198	第3-126図	府内町跡第43次調査SK035実測図	224
第3-79図	SK004出土遺物実測図	198	第3-127図	府内町跡第43次調査SK039実測図	224
第3-80図	SK005出土銅銭実測図	199	第3-128図	SK032・033・034・035・037・039 出土遺物実測図	225
第3-81図	府内町跡第43次調査SK005実測図	199	第3-129図	府内町跡第43次調査SK046実測図	226
第3-82図	府内町跡第43次調査SK006実測図	200	第3-130図	府内町跡第43次調査SK047実測図	226
第3-83図	SK006出土遺物実測図	200	第3-131図	府内町跡第43次調査SK048実測図	227
第3-84図	府内町跡第43次調査SK007実測図	200	第3-132図	府内町跡第43次調査SK049実測図	227
第3-85図	SK007出土遺物実測図	200	第3-133図	SK043・046出土銅銭実測図	228
第3-86図	府内町跡第43次調査SK008実測図	201	第3-134図	SK040・043・044・046・048・050 出土遺物実測図	228
第3-87図	SK008出土遺物実測図	201	第3-135図	SK049出土遺物実測図 1	229
第3-88図	SK009出土遺物実測図	201	第3-136図	SK049出土遺物実測図 2	230
			第3-137図	SK049出土銅銭実測図	231
			第3-138図	小土坑出土遺物実測図	232

遺物観察表目次

遺物観察表1	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)①	305	遺物観察表21	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑥	321
遺物観察表2	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)②	306	遺物観察表22	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑦	322
遺物観察表3	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)③	307	遺物観察表23	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑧	323
遺物観察表4	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)④	308	遺物観察表24	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑨	324
遺物観察表5	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤	309	遺物観察表25	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑩	325
遺物観察表6	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥	310	遺物観察表26	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑪	326
遺物観察表7	第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦	311	遺物観察表27	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑫	327
遺物観察表8	第34次調査区遺物観察表(土製品)	311	遺物観察表28	第43次調査区遺物観察表(土製品)①	327
遺物観察表9	第34次調査区遺物観察表(木製品)①	311	遺物観察表29	第43次調査区遺物観察表(土製品)②	328
遺物観察表10	第34次調査区遺物観察表(木製品)②	312	遺物観察表30	第43次調査区遺物観察表(土製品)③	328
遺物観察表11	第34次調査区遺物観察表(石製品)	313	遺物観察表31	第43次調査区遺物観察表(石製品)①	329
遺物観察表12	第34次調査区遺物観察表(ガラス製品)	313	遺物観察表32	第43次調査区遺物観察表(石製品)②	329
遺物観察表13	第34次調査区遺物観察表(金属製品)	314	遺物観察表33	第43次調査区遺物観察表(植物製品)	330
遺物観察表14	第34次調査区遺物観察表(瓦)	314	遺物観察表34	第43次調査区遺物観察表(木製品・骨角器)①	330
遺物観察表15	第34次調査区遺物観察表(銅銭)	315	遺物観察表35	第43次調査区遺物観察表(木製品・骨角器)②	331
遺物観察表16	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)①	316	遺物観察表36	第43次調査区遺物観察表(ガラス製品)	331
遺物観察表17	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)②	317	遺物観察表37	第43次調査区遺物観察表(金属製品)①	331
遺物観察表18	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)③	318	遺物観察表38	第43次調査区遺物観察表(金属製品)②	332
遺物観察表19	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)④	319	遺物観察表39	第43次調査区遺物観察表(瓦)	332
遺物観察表20	第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑤	320	遺物観察表39	第43次調査区遺物観察表(銅銭)①	333
			遺物観察表40	第43次調査区遺物観察表(銅銭)②	334

写真図版目次

巻頭図版 1	府内町跡第34次調査区全景(南から)	SD066 編	59-60区間上村	SD066 編	木製品出土状況
	府内町跡第34次調査区SD066編及びSX047石列			SD066 編	土器及び骨出土状況
巻頭図版 2	府内町跡第43次調査区SX023全景(南から)	写真図版 2 (府内町跡第34次調査)			338
	府内町跡第43次調査区SX023と礎石建物	SK010	土坑	SK011	土坑
巻頭図版 3	府内町跡第34次調査区SD066出土木簡	SK014	土坑	SK015	土坑
	府内町跡第34次調査区SD066出土木簡?	SK036	土坑	SK045	土坑
	府内町跡第34次調査区SD066出土ひとがた	SK056	土坑	SK072	土坑
	府内町跡第34次調査区SD066出土ひとがた	写真図版 3 (府内町跡第34次調査)			339
巻頭図版 4	府内町跡第43次調査区SD012出土ガラス製小皿	SX077	石列	SX063	石列
	府内町跡第43次調査区SK046出土指輪	SX047	石列	SX047	石列及び下部土坑
	府内町跡第43次調査区SD012出土火縄銃部品	SX084	石列	SX074	石列
	府内町跡第43次調査区SD012出土漆器	SX021	集石	SX022	集石
	府内町跡第43次調査区SD012出土鎗	写真図版 4 (府内町跡第34次調査)			340
	府内町跡第43次調査区SK004出土鍛冶道具	SX023	集石	SX023	集石
写真図版 1 (府内町跡第34次調査)	調査区全景(南から)	SX025	集石	SX024	集石
	SD029B 溝状道槽				
	SD032 溝状道槽				
	SD033 溝状道槽				
	SD066 編				

SX028 集石		SK006	
SX054 集石SX040 遺物集中区		SK007	
SX041 遺物集中区		SK010	
SX060 遺物集中区		SK024	
写真図版 5 (府内町跡第34次調査)	341	SK025	
SD066出土罽		写真図版11 (府内町跡第43次調査)	347
SD066出土罽		SK032	
SD066出土漆器碗		SK033	
SD066出土漆器碗		SK032とSK033	
SD066出土草鞋		SK046の指輪出土状況	
SD066出土草鞋		SK048	
写真図版 6 (府内町跡第34次調査)	342	SK049	
SD066出土薬匙?		H-63区の土坑群と南壁	
SD066出土竹製網籃		SF018 (第2南北街路) の敷石整備	
SD066出土草履下駄		写真図版12 (府内町跡第43次調査)	348
SD066出土鳥形人形?		SK023のⅠ区とⅡ区の境の石積み	
整地層出土 曲形分銅		第Ⅱ期礎石建物の南北街路からの入口	
SX041出土香炉		第Ⅱ期礎石建物の第2南北街路からの入口(北から)	
写真図版 7 (府内町跡第43次調査)	343	第Ⅱ期礎石建物の基礎の版築状遺構とその下部の第Ⅰ期礎石建物の礎石	
豊後府内の万寿寺跡と第2南北街路		第Ⅱ期礎石建物の東端の礎石と石列	
府内町跡第43次調査区と「府内」		SX011 (焼土層) 遺物出土状況	
写真図版 8 (府内町跡第43次調査)	344	SX023の上部の土層Ⅰ	
SD012 完履状況		SX023の上部の土層Ⅱ	
SD012 完履状況 2		写真図版13 (府内町跡第43次調査)	349
SD012の底面で検出されたSE026の井戸		SX003 敷石状況	
SE036の井戸		SX003の石積み(西から)	
SX022の石積み		SX003の石積み(南から)	
SX017の埋め立て石		SX003の石積みとSX023の埋立	
SX023の初期石積みと裏側の埋め立て石		棕櫚出土状況	
SX023の初期石積み		下駄出土状況	
写真図版 9 (府内町跡第43次調査)	345	罽出土状況	
SD012とSX023の初期石積み		葎蓋出土状況	
SX023のⅠ区の石積みと手前Ⅰ区の石積み		写真図版14 (府内町跡第43次調査)	350
SX023の石積みと埋立ての石群		鹿角製品出土状況	
SX023のⅠ区の石積みと第Ⅰ期と第Ⅱ期の礎石建物		燈(小札)出土状況	
SX023のⅡ区と境の石積み		笄(金剛製)出土状況	
第Ⅰ期礎石建物		木製品出土状況	
第Ⅰ期礎石建物の入口部分		曲物出土状況	
第Ⅰ期礎石建物の入口部分と第2南北街路		刀の鈔出土状況	
写真図版10 (府内町跡第43次調査)	346	火繩銃の火燄み出土状況	
SK002 埋立遺構		漆輪出土状況	
SK004 鍛冶遺構			
SK005			

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経過

別府湾沿岸は、瀬戸内海を通じて古代から、九州の玄関口としての役割を果たしてきた。中でも大分川左岸地域は、中世・近世・近代を通じ、豊後国・大分県の行政・経済の中心地として発展してきた。特に明治以降、瀬戸内海路に加え、鉄道の敷設や道路網の整備など、陸上交通の発達が顕著になると、県庁所在地である大分市は、東九州の交通の要衝となった。そうした中、明治44年に大分駅が近世城下町の外堀の南に建設されると、周辺は大分県の物流の中心地となり、以後太平洋戦争による空襲の打撃を受けながらも、今日まで発展を遂げた。

ところが、昭和40年代以降の自動車交通量の増加は、大分駅周辺の交通状況に変化を起し、鉄道と道路の平面交差部分では交通障害を引き起こす結果となった。そこで、これらを解消するため昭和45年、「大分市国鉄路線高架化促進期成同盟会」が設立され、25年後の平成7年に大分駅周辺総合整備事業の「大分駅付近連続立体交差事業」として採択された。このため、国道10号線も鉄道の跨線橋である万寿橋を解消する必要が生じた。国土交通省ではこれに併せ、道路幅を拡幅し、顕徳町交差点付近の交通混雑の緩和、沿道環境の改良、交通事故の防止など、道路交通の安全と円滑化を計るため、「国道10号古園府拡幅事業」を計画した。

一方、大分川左岸沿いには、自らキリスト教に改宗し、南蛮貿易を行った戦国大名である大友宗麟の城下町「府内」があることが、古絵図から知られていた。この古絵図には、大友館・万寿寺など当時の主要な建物の位置や、街路・町屋の配置などが明瞭に描かれ、都市の構造を伝えるものであった。その位置は昭和31年に刊行された大分市史の段階で、大友館や万寿寺をほぼ特定できたが、使用できる地形図の問題もあり、精度に欠けた。その後、昭和63年に刊行された大分市史・中巻では新たに府内古園が確認されたこともあり、明治時代の地籍図と照し、さらに現在の地図に置き換えた。その結果、現在の地図上に高い精度で、大分川に沿った東西約0.7km、南北2.2kmの規模の戦国時代の「府内」を再現することができ、「中世大友城下町跡」として周知道跡となった。

「一般国道10号古園府拡幅事業」は、この戦国時代の「府内」を南北に貫く土木工事となり、しかもこの町の中核部である大友館の東側を通過するものであった。そこで、大分県教育委員会は、事業主体者である国土交通省と協議を行い、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

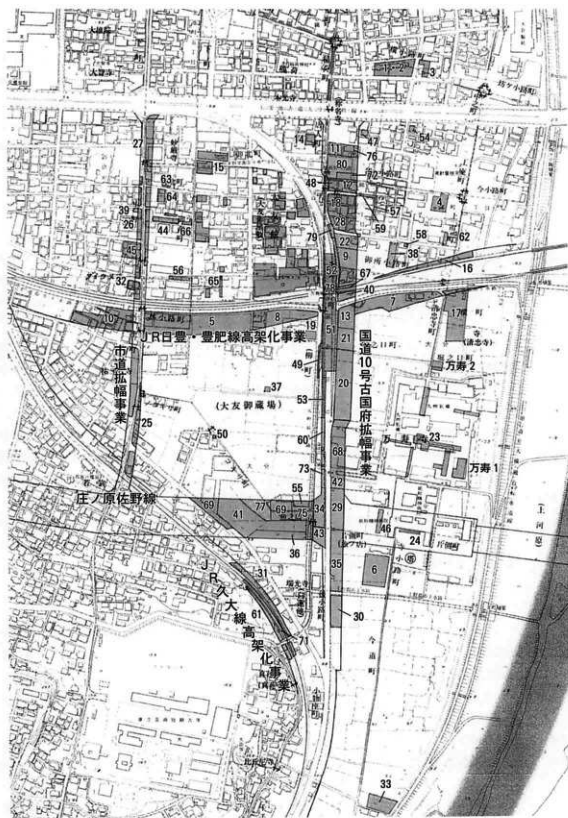
2. 調査の経過

大分県教育委員会は「一般国道10号古園府拡幅事業」に伴う、中世大友城下町跡の発掘調査を、平成12年6月から開始した。しかし、この道跡に対する発掘調査は、平成8年から大分市教育委員会が大分駅南地区の区画整理事業に伴う、移転先の宅地造成地や民間開発などに対応し実施していた。また、前年度から「大分駅付近連続立体交差事業」に伴う調査も開始されており、同じ道跡を2つの組織が発掘調査する状況であった。そこで大分市教育委員会と協議を行い、道跡全体を「中世大友城下町跡」とするが、大友氏館部分は「大友氏館跡」、町屋跡部分は「府内町跡」として県教育委員会と市教育委員会が重複することなく発掘調査若手順に調査次数を重ねることとした。

こうして、「一般国道10号古園府拡幅事業」の最初の調査として「府内町跡9次調査」が、開始された。そして、平成13年度から「府内町跡11次調査」・「府内町跡12次調査」・「府内町跡13次調査」・「府内町跡18次調査」が加わり、平成14年度には「府内町跡20次調査」・「府内町跡21次調査」・「府内町跡22次調査」を実施しており、平成16年度からは文化課から独立した調査組織となった大分県教育庁埋蔵文化財センターが調査を担当し、平成19年度現在もこの事業に伴う発掘調査を継続している。

中世大友城下町跡

大友氏館跡
府内町跡



第1-1図 中世大友城下町跡発掘調査状況 (番号は調査次数)

第1-1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧(1)

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成16年3月	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成16年3月	
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	区画整理移転事業	横小路町	平成15年3月	10基の筒筒積の裏掘
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	マンション建設	上市町	平成14年3月	名々小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県庁	平成11～13年度	JR日豊・豊肥線高架	御蔵場	平成17年3月	御蔵場の土塁
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	J A 祭場	寺小路町・万寿寺		万寿寺の南側の堀?
府内町跡7次	大分県教委	平成12・13年度	JR日豊・豊肥線高架	清忠寺町	平成18年3月	第1南北街路・履蔵基
府内町跡8次	大分市教委	平成12年度	JR日豊・豊肥線高架	藤町・館の南側	平成17年3月	15世紀の礎・土塁
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	国道10号拡幅	御所小路町	平成17年3月	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	JR日豊・豊肥線高架	上市・祐内寺	平成19年3月	クリスタン基
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	称名寺		称名寺の西側の礎
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・松町・名々小路町	平成18年3月	大友館の東側・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	御内町	平成17年3月	ウロコニカダイ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	マンション建設	唐人町	平成15年3月	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	スーパー建設	御北町		
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	JR日豊・豊肥線高架	上市町	平成18年3月	堀田形地割の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	ポンプ場建設	横町・清忠寺	平成19年3月	横町の街路・堀池跡
府内町跡18次西	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・街路	平成18年3月	大友館と第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	松町	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成13年度	国庫補助 範囲確認	御蔵??		御蔵井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	万寿寺	平成19年3月	礎石建物・北地の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	堀之口町	平成17年3月	府内町ノイ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	松町・御所小路町	平成18年3月	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺		
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺・寺小路町ノコギリ町		万寿寺の堀の確認
府内町跡25次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐内町	平成19年3月	16世紀代の礎立建物群
府内町跡25-20次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐内町	平成18年3月	
府内町跡25-30次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上市町	平成19年3月	
府内町跡25-40次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上市町	平成19年3月	16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-50次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	町外	平成19年3月	
府内町跡25-60次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	上市町	平成18年3月	
府内町跡25-70次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	上市町	平成19年3月	
府内町跡25-80次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上市町	平成19年3月	
府内町跡25-90次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上市町	平成19年3月	
府内町跡26次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	平成18年3月	
府内町跡27次	大分市教委	平成16・17年度	市道拡幅	妙蔵寺	平成19年3月	
府内町跡28次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	松町	平成18年3月	大友館の東側の町屋
府内町跡29次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺		万寿寺内区画遺構
府内町跡30次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	後小路町		14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	平成15年度	JR久大線高架	瑞光寺	平成17年3月	堀池跡
府内町跡32次	大分市教委	平成15年度	個人・市道拡幅	中町・デウス堂付近	平成18年3月	
府内町跡33次	大分市教委	平成15年度	国庫補助 範囲確認	府内の南限付近		15・16世紀後半の大溝
府内町跡33-2次	大分市教委	平成15年度	個人住宅	府内の南限付近		
府内町跡34次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	御町	平成20年3月	万寿寺西御地の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	後小路町・万寿寺		井戸・瓦多数
府内町跡36次	大分市教委	平成15年度	庄原佐野橋	魚ノ店・ノコギリ町	平成20年3月	町屋跡
府内町跡37次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御蔵場		
府内町跡38次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御所小路町		推定御所小路跡・南北大溝
府内町跡39次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	中町		
府内町跡40次	大分県教委	平成16年度	JR日豊・豊肥線高架	御内町	平成20年3月	
府内町跡41次	大分県教委	平成16年度	庄原佐野橋	魚ノ店・ノコギリ町		
府内町跡42次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺		御蔵場の周辺の新路と町屋
府内町跡43次	大分市教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺	平成20年3月	万寿寺跡
府内町跡44次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	御西町		高寿寺西御地の堀・礎石建物
府内町跡45次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	中町・コレジオ堂付近		
府内町跡46次	大分市教委	平成16年度	駐車場建設	万寿寺		
府内町跡47次	大分市教委	平成16年度	店舗建設	称名寺		
府内町跡48次	大分県教委	平成16年度	工業用水管	妙々小路	平成18年3月	名々小路
府内町跡49次	大分県教委	平成16年度	工業用水管	藤町・街路		
府内町跡50次	大分市教委	平成16年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街路		御蔵場の西側の街路と御蔵
府内町跡51次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	御内町		万寿寺西北隅・大友館東南隅
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・大友氏館		第2南北街路・大友館の東部
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	浄化槽	称名寺の堀		
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	庄原佐野橋	花原佐野橋	平成20年3月	御蔵場
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	国庫補助 範囲確認	御西町		
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	市下水道	名々小路町		
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御所小路町		
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	市下水道	松町		
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	J R 久大線高架	瑞光寺	平成20年3月	
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	確認調査	第1南北街路		新路跡

第1節 調査の経緯

第1-2表 中世大友府内町跡発掘調査一覧(2)

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	報告書刊行	調査内容
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	確認調査	御西町		
府内町跡64次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御西町		
府内町跡65次	大分市教委	平成17年度	確認調査	御西町		
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	確認調査	御西町・大友館		
府内町跡67次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町		
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	万寿寺		
府内町跡69次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		A・B区
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	市下水道工事	来迎寺		
府内町跡71次	大分県教委	平成18年度	JR久大線高架	瑞光寺		
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺		
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀		
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	民間共同住宅建築	大徳院の北側	平成19年3月	
府内町跡75次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店		
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺		
府内町跡77次	大分県教委	平成19年度	庄原佐野線	御蔵場・ノコギリ町		
府内町跡78次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北街路		
府内町跡79次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北街路		
府内町跡80次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	称名寺		第2南北街路・称名寺
府内町跡81次	大分市教委	平成19年度	民間共同住宅建築	中之町付近		遺状遺構・井戸

3. 調査の体制

「一般国道10号古国府拡幅事業」の発掘調査は平成11年8月から開始されたが、この事業区域の西側に隣接して「大友館」跡が想定されており、この遺跡に対して平成11年度から国指定史跡にするための確認調査を大分市教育委員会が実施することになった。このように、大規模な土木事業が重要遺跡に近接して実施されることとなり、土木事業と遺跡保存の調整が行われる場面も想定できることから文化庁と協議を行い、調査指導者会を平成12年度から大分県教育委員会と大分市教育委員会が各1回、年2回開催し、その指導を受けながら調査を実施することとなり、平成12年度は、大分駅付近連続立体交差事業の一部として開催した。平成13年度以降は本格的に開始された、国土交通省の国道10号古国府拡幅事業に伴う発掘調査の事業で開催し、指導を受けた。

調査指導者会

本書に報告する平成15・16年度に発掘調査した府内町跡34・43次調査は以下の調査体制で実施した。役職名は調査当時のものである。

平成15・16年度

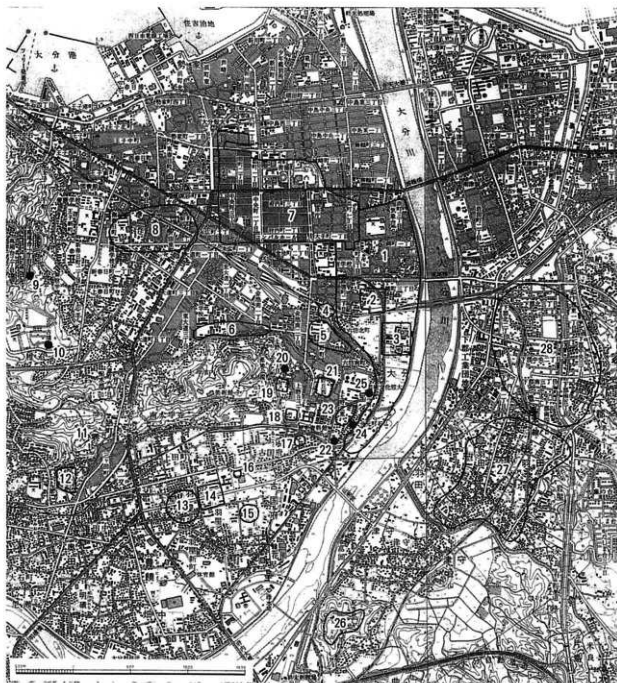
調査指導者 河原純之(川村学園女子大学教授)
後藤宗俊(別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員)
小野正敏(国立歴史民俗博物館助教授)
坂井秀弥(文化庁記念物課埋蔵文化財担当主任調査官)

平成15年度

文化課長 今永一成
参事兼課長補佐 麻生祐治
参事兼課長補佐 清水宗昭
受託事業担当主幹 坂本嘉弘(府内町跡第35次調査担当)
副主幹 友岡信彦(府内町跡第34次調査担当 本番掲載)
主査 吉田 寛(府内町跡第28次調査担当)
主査 矢部勝徳(府内町跡第35次調査担当)
主査 後藤晃一(府内町跡第29次調査担当)
主事 恒賀健太郎(府内町跡第30次調査担当)
囑託 加藤美成子
囑託 服部真知
囑託 井上素裕
囑託 畔津宏幸

平成16年度

埋蔵文化財センター所長	伊藤正行	
調査第二課長	坂本嘉弘 (府内町跡第43次調査)	本書掲載・第49次調査担当)
主査	後藤晃一 (府内町跡第42次調査)	府内町跡第48次調査担当)
嘱託	加藤美成子	
嘱託	畔津宏幸	



- | | | | | | |
|-------------|------------|-----------|--------------|-----------|----------|
| 1. 中世大友城下町跡 | 2. 大友館跡 | 3. 万寿寺跡 | 4. 上野町・顕徳町遺跡 | 5. 若宮八幡遺跡 | 6. 東大道遺跡 |
| 7. 府内城・城下町 | 8. 東田室遺跡 | 9. 龜甲山古墳 | 10. 古宮古墳 | 11. 千人塚古墳 | 12. 永興遺跡 |
| 13. 羽屋遺跡群 | 14. 金剛宝戒寺跡 | 15. 石明遺跡 | 16. 町口遺跡 | 17. 岩屋寺遺跡 | 18. 弥栄神社 |
| 19. 金剛宝戒寺 | 20. 上野廃寺 | 21. 大友上原館 | 22. 岩屋寺石仏 | 23. 龍玉畑遺跡 | 24. |
| 25. 大友塚古墳 | 26. 守岡遺跡 | 27. 羽田遺跡群 | 28. 下郡遺跡群 | | |

第1-2図 中世大友城下町跡の周辺の地形と遺跡

第2節 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

大分はその名称が示すように、平野を丘陵や河川が分断した地形をしており、各所に小規模な平野が展開する。そうした中、中世以降今日に至るまで、大分川の左岸から西側にかけて広がる小地域は、政治経済の中心地となる。この地域は、東側を大分川が北流し、北側には別府湾が広がり、南側は高崎山系から東に延びる標高約40～30mの上野丘陵が横たわり、西側は高崎山(628m)へと続く標高80mから100mの起伏の激しい丘陵に囲まれている。

こうした、地域の中で、中世大友城下町跡は東部の大分川沿いに形成された都市遺跡である。府内古図に描かれている範囲は、北は現在に比べ西側に大きく曲がっている河口部から、南は上野丘陵の先端部と大分川が接する部分にあたる。現在の標高は河口に近い北部で約4m、上流の南部地域で約6mの自然堤防上に立地する。

北と東側は別府湾と大分川に限られるが、遺跡の南西部から西側の限りは、試掘調査の結果や、元地形が残されている部分からの観察から、低湿地の広がりか確認された。この部分は1950年代までレンコンを栽培していたと伝えられている。この低湿地は上野丘陵の裾を巡り、北の別府湾方向に伸び、府内古図に描かれる舟入に続いている。

中世大友城下町跡が立地する自然堤防は、発掘調査の結果、検出面は粘質土層であるが下部には砂層が厚く堆積している。下部の砂層から縄文時代晩期から古墳時代前期の土器が出土しており、上部からは8～9世紀頃の遺物が出土している。おそらくこの間に2～3m堆積し形成されたものと考えられる。

2. 歴史的環境

古宮古墳
壬申の乱
大分君
評

別府湾に近い大分川左岸地域化が、豊後のなかでも政治的に特別な地域として注目されるのは7世紀後半である。その代表的な遺跡として国指定史跡として整備されている古宮古墳である。西側の急峻な丘陵地にあるこの古墳は、壬申の乱(672年)で大真人皇子(天武天皇)側について活躍した大分君恵尺(えさか)・稚臣(わかみ)の墓と想定されている。また同時期の重要な遺跡として上野丘陵の南側平野で調査された羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡がある。この遺跡からは、7世紀後半～8世紀初頭の方形の掘り方をもつ大型独立柱建物や総柱の倉庫群が確認されており、「評」段階の遺構と想定されている。

豊後国府
龍王畑遺跡

その後の設置された豊後国府については、羽屋井戸遺跡・羽屋園遺跡の東側に「古国府」の地名が残るものの、政庁本体が未だ不明である。しかし、上野丘陵の東端部で調査された龍王畑遺跡では9世紀から10世紀前半にかけての庇をもつ獨立柱建物や築地跡、道路状遺構が検出され、その配置から、国司の館跡の可能性が指摘されている。この遺跡の東北部には8世紀～9世紀にかけての版築基壇に瓦葺の礎石建物が建てられている。さらに、この丘陵の東端部の南側崖面に岩屋寺石仏、東側崖面に元町石仏が刻まれており、平安時代後期の藤原様式の作風と言われている。このように上野丘陵の南側の羽屋地区から古国府地区、そして上野丘陵東部は7世紀後半から10世紀頃にかけて、豊後の政治の中心地であったと考えられている。

勝津留置
高国府

11世紀から13世紀代になると、注目される文書が残されている。まず「宇佐神領大鏡」の天喜元年(1053)、康平2年(1069)、承保4年(1077)に「勝津留置四至」として登場する。その示す範囲は、上野丘陵東部から北に広がる沖積地にあたり、16世紀に大友館が置かれる場所が含まれている。その中で天喜元年の申文に西の限りとして「高国府」の地名が見られ、上野丘陵東端部が想定されている。13世紀中頃、大友氏3代目の大友頼泰が豊後に守護職として下向した際、「高(隆)国府」の割譲を強引に求める。このため「高国府」「勝津留置」については守護所の設置場所と関わる

る重要な問題となっている。さらに、この申文の中に「東院北廻り、ニ方市河」とあり、すでに大分川沿いで河原市があり、府内古図に描かれた「府内」の初元的な位置づけがなされている。こうした様子を裏付けるような豊後府中の状況を表す文書がある。それは仁治3年(1242)の新御成敗状で、都市の規範を示す条項が書かれている。この文献資料は、13世紀代に豊後府の中心地である府中が、都市として成立していたことを示している。

しかし、こうした状況は考古資料で証明できているわけではない。「勝津留島」の範囲の中で新御成敗状が描く「府中」の状況は現時点で考古学的には不明である。ただ、上野丘陵の南側の平野部で調査された石明道跡では13世紀を中心とした大規模な溝とその内側をさらに小規模な溝で区画する遺構が確認されており、「国府」に隣接した位置でもあり、初期の守護館の指摘もある。

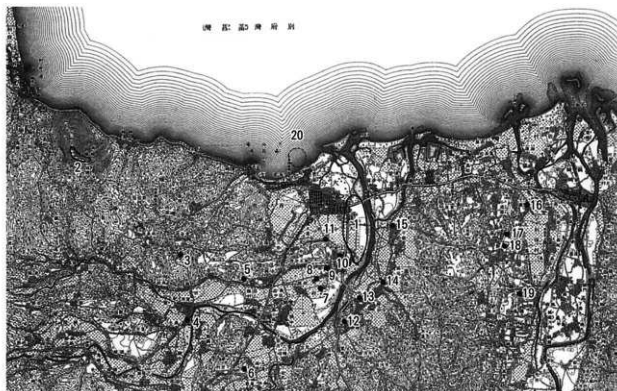
守護館
万寿寺

14世紀代になると、徳治元年(1306)に万寿寺が大分川を東に望む自然堤防上に建立されると、この地域での本格的な町づくりが開始される。これまでの中世大友城下町跡の発掘調査で確認されるのはこの時期からで、以降16世紀中頃から後半に最盛期を迎え、17世紀初頭に「府内」が近世の府内城下町建設に伴い移転するまでの遺物や遺構が継続して出土する。

下部遺跡群

この時期の遺跡は、府内周辺でも多く確認されている。大分川の右岸にある下部遺跡群や津守・片島地区でも16世紀の方形館や方形区割りをもつ遺構が確認されている。独立性の強い守岡丘陵には山城的な存在である。一方上野丘陵には土塁と堀を廻らす上原館があり、その南の古国府地区には町口遺跡、北側にも16世紀の遺跡がある。さらに西方の高崎山の山頂は大友氏の詰城として知られている。このように、16世紀代の府内は、府内古図に描かれていない部分も含め、その構造が論じられている。

高崎城



- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|-----------|-------------|
| 1. 中世大友城下町跡 | 2. 高崎城跡 | 3. 金谷迫城跡 | 4. 賀来氏館跡 | 5. ニヶ城跡 |
| 6. 雄城城跡 | 7. 石明道跡 | 8. 町口遺跡 | 9. 岩屋寺遺跡 | 10. 大友上原館跡 |
| 11. 大道東遺跡 | 12. 守岡城跡 | 13. 津守遺跡 | 14. 片島遺跡群 | 15. 下部遺跡群 |
| 16. 千歳城跡 | 17. 猪野新土居遺跡 | 18. 猪野中原遺跡 | 19. 横尾遺跡 | 20. 沖ノ浜(推定) |

第1-3図 中世大友城下町跡と主要中世遺跡

第3節 報告書作成にあたって

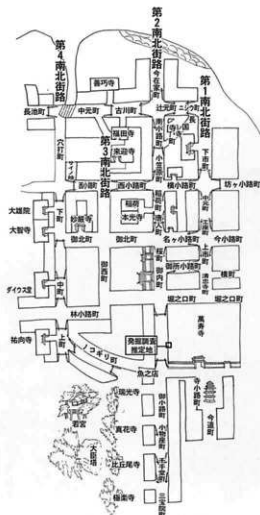
1. 報告書の刊行順序

中世大友城下町跡の発掘調査は、土地収用状況に合わせて、国土交通省から委託を受け実施している。このため、連続して隣接地を発掘調査することは稀である。そこで、報告書を作成するにあたっては、遺構の連続性を考慮し、平成16年度は、調査がほぼ完了した御所小路町～万寿寺跡間の御内町にあたる「府内町跡9・13・21次調査」の成果を報告した。平成17年度の本報告書はその北側で平成13年度から平成16年度にかけて調査した名ヶ小路町～御所小路町間の桜町にあたる「府内町跡9・12・18・22・28・48次調査」の成果を報告し、平成18年度は平成14年度に調査した万寿寺跡の北西隅にあたる「府内町跡20次調査」を刊行した。そして、平成19年度は万寿寺の西側沿いの調査区である平成15年に調査した「府内町跡34次調査」とその南側の平成16年度に調査した「府内町跡43次調査」の報告書を刊行する。

2. 府内古図と街路の名称

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古図」は、現在3種類12枚が確認されている。「府内古図」は、その研究¹⁾によると成立年代は、寛永13年(1634)を遡らず、A類・B類・C類に分類され、その順で新しくなるほど文字情報が増えることが明らかにされている。すなわち、A類には見られない「御蔵場」の名称はC類のみに見られ、万寿寺西側の「柳町」の名称もB・C類、大友館の東北部の「称名寺」の名称は、B類のみ書き込まれている。しかし、「府内古図」に描かれている、4本の南北の街路と5本の東西の街路名についてはいずれの「府内古図」にも記載されていない。このため、近年の研究では様々な仮称が冠されてきた。

そこで、報告書作成にあたり、こうした「府内古図」間の不整合と名称の無い街路の呼び方を統一・解消する必要が生じ、大分川側から「第1南北街路」・「第2南北街路」・「第3南北街路」・「第4南北街路」とした。「街路」の名称を選択したのは、ルイス・フロイスの日本史の訳文が府内の道路を「街路」とされており、都市内の道路の意味でこの名称を使用する。また東西の道路については、御所小路町・名ヶ小路町等の道路名を含む町名があるため、それらについては「御所小路」・「名ヶ小路」とした。



第1-4図 府内古図と街路名称の設定
(府内古図A類をトレース)

註(1) 木村幾多郎「府内古図の成立」『大分市歴史資料館年報1992年度版』大分市歴史資料館 1993年

第2章 中世大友府内町跡第34次調査

第1節 調査の経過と概要

1. 調査の経過

中世大友府内町跡第34次調査区は大分市元町に所在し、標高約6.3mの沖積低地上に立地する。調査地区は水田として利用されていたが、周辺地域は近年宅地として開発が進んでいる。

当該地域は1987年に大分市史編さん委員会により作成された「戦国時代の府内復元図」によると、「魚元店」の一面に該当する地点と推定したが、調査の結果、第2南北街路と万寿寺境内及び万寿寺西側の堀の一部に当たることが判明した。

調査は平成15年7月上旬から平成16年3月までの間、約700㎡の調査を行った。

2. 遺構の概要

本調査区は、後世の開発による削平がかなり進行して、遺構上面の残りはあまりよくない。

検出された主要な遺構は、溝状遺構10条、堀1条、土坑25基、道路状遺構1条、礎石建物跡3棟、石列5条、集石遺構9基、土器集中区4カ所、柱穴および小穴多数である。

溝状遺構は、万寿寺境内を東西に走る溝7条が確認されている。この溝状遺構の一部は国道10号を挟んで東側調査区(第29次調査区)で確認されている溝の西端と考えられる。

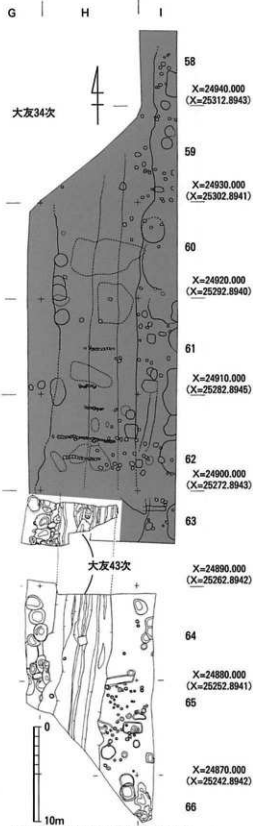
堀は、万寿寺の周囲を巡ると思われる堀の西側部分である。この堀は、平成15年度に、第20次C調査区で万寿寺北側境が確認されている。さらに平成16年度には当調査区の南側隣接地の第43次調査区、平成17年度には第51次調査区で万寿寺堀の北西コーナーが検出されたことで、万寿寺を巡る堀は、西側と北側には存在することが明らかになった。

土坑や礎石建物などは、その大半が万寿寺堀の埋め戻し後の整地層上で確認されていることから、時期は16世紀後半代と推定する。

調査の結果、第34次調査区では、万寿寺の西端の境内の一部と、万寿寺西側の堀、第2南北街路の東側の一部、さらには堀を埋めた後に構築した礎石建物跡や土坑などが確認された。

Y=57870.000
(Y=57648.8392)

Y=57880.000
(Y=57658.8392)



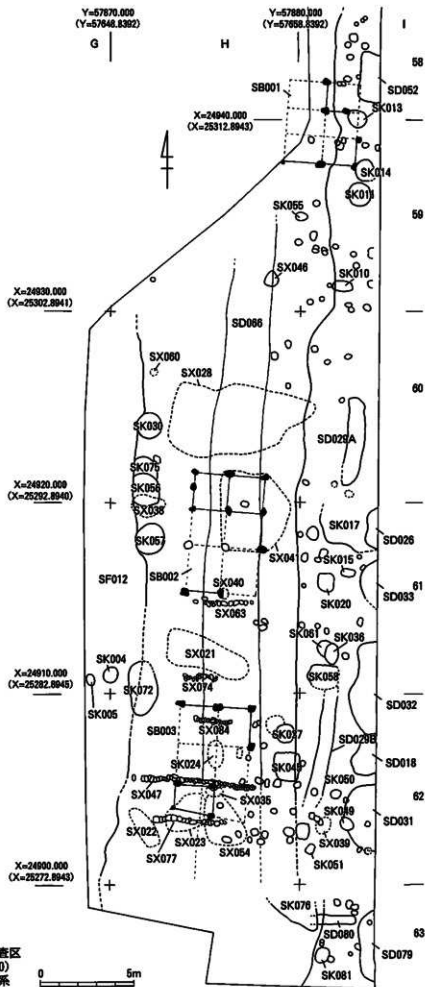
第2-1図 府内町跡第34次調査区位置図 (1/400)

調査期間
2003年7月
上旬～2004年
3月

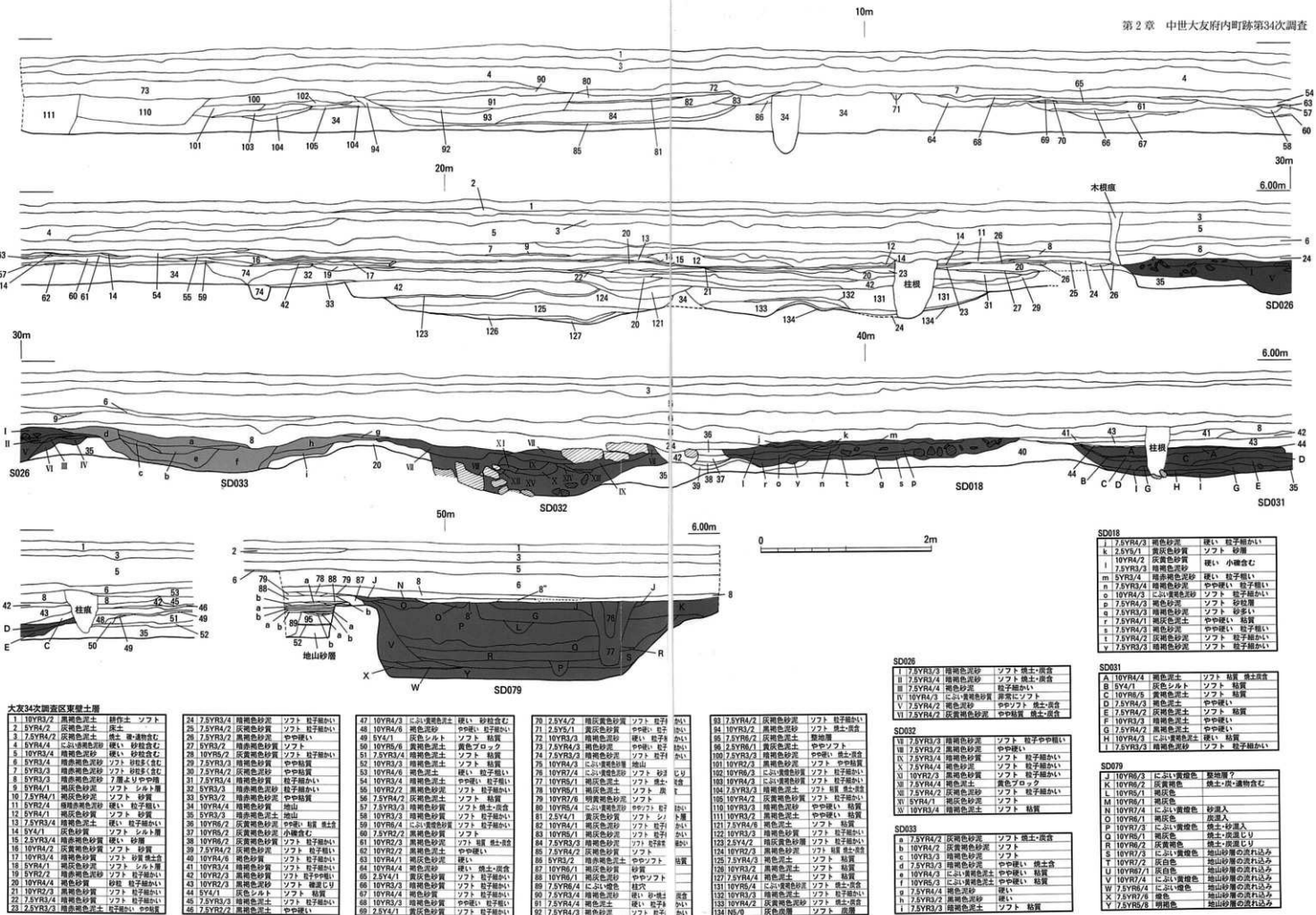
溝状遺構

万寿寺の堀

第1節 調査の経過と概要



第2-2図 府内町跡第34次調査区
遺構配置図 (1/200)
() 内は世界測地系



第 2-3 図 府内町跡第 34 次調査 区東壁土層図 (1/40)

第2-1表 遺構一覧表

本報告書での 遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項	掲載頁
SD029A	S029A	溝状遺構	I61	16世紀末葉	備前系磁鉢	14
SD029B	S029B	溝状遺構	I62	16世紀後葉～末葉	培格郎の把手	14
SD080	S080	溝状遺構	I63	16世紀後葉	焼土層下	17
SD018	S018	溝状遺構	I62	不明	平瓦	17
SD026	S026	溝状遺構	I61	16世紀後葉	軒丸瓦・茶臼	17
SD031	S031	溝状遺構	I62	16世紀後葉	備前系磁鉢	18
SD032	S032	溝状遺構	I61	16世紀後葉	京都系土師器・焼締め陶器等	19
SD033	S033	溝状遺構	I61	16世紀後葉	瀬戸美濃系陶器片	20
SD052	S052	溝状遺構	I58	不明		20
SD079	S079	溝状遺構	I63	16世紀後葉	京都系土師器	21
SD066	S066	堀	H 区全域	16世紀後葉	青磁・白磁・青花・土師貫木簡・信濃の駒・ひとがた・竹筥等	22
SK004	S004	土坑	GH61	16世紀末葉以降	第2南北街道の上	55
SK005	S005	土坑	G61	16世紀末葉以降	第2南北街道の上	55
SK010	S010	土坑	I59	16世紀後葉		55
SK011	S011	土坑	I59	16世紀後葉		56
SK013	S013	土坑	I58・59	16世紀後葉		56
SK014	S014	土坑	I59	16世紀後葉	景德鎮窯系青花碗	56
SK015	S015	土坑	I61	16世紀後葉		57
SK017	S017	土坑	I61	16世紀後葉～末葉		57
SK020	S020	土坑	H62	16世紀後葉～末葉		57
SK027	S027	土坑	H62	16世紀末葉以降		58
SK030	S030	土坑	H60	16世紀後葉～末葉	備前系磁鉢	58
SK036	S036	土坑	I61	16世紀末葉以降		59
SK045	S045	土坑	H62	16世紀末葉前後	青磁・景德鎮窯系青花碗・備前系甕等	59
SK049	S049	土坑	I62	16世紀後葉	瓦質磁鉢・京都系土師器等	61
SK050	S050	土坑	I62	不明		61
SK051	S051	土坑	I62	不明		62
SK055	S055	土坑	HI59	16世紀後葉以降	瀬戸美濃系陶器皿	62
SK056	S056	土坑	H60	16世紀後葉	京都系土師器	63
SK057	S057	土坑	H61	16世紀後葉		64
SK058	S058	土坑	I61	16世紀後葉以降	瀬戸美濃系天目碗	64
SK061	S061	土坑	I62	16世紀末葉前後	石臼	65
SK072	S072	土坑	H61・62	16世紀後葉	漳州窯系青花・京都系土師器・碁石等	65
SK075	S075	土坑	H60	16世紀後葉	景德鎮窯系青花碗	67
SK076	S076	土坑	HI62・63	16世紀末葉	瓦質火鉢	68
SK081	S081	土坑	I63	16世紀末葉		69
SP012	S012	第2南北街道	GH58～63	16世紀後葉		69
SB001	S001	礎石1	GH58・59	16世紀後葉		71
SB002	S002	礎石2	H60・61	16世紀後葉		72
SB003	S003	礎石3	H62	16世紀後葉		74
SX077	S077	石列	H62	16世紀後葉	第1次拡張区の北端・五輪塔部位の大量使用	75
SX047	S047	石列	H62	16世紀後葉	第2次拡張区の北端・五輪塔部位の大量使用	77
SX084	S084	石列	H62	16世紀後葉		79
SX074	S074	石列	H61	16世紀後葉	敷地の区画?	79
SX063	S063	石列	H61	16世紀後葉	敷地の区画?	80
SX021	S021	集石	H61	16世紀後葉	タイ産四耳壺・備前系甕	81
SX022	S022	集石	H62	16世紀後葉	青磁皿・羯輪陶器	82
SX023	S023	集石	H62	16世紀後葉	景德鎮窯系青花碗皿・香炉・錢貨等	83
SX024	S024	集石	H62	16世紀後葉	漳州窯系青花・備前系磁鉢等	87
SX026	S026	集石	H60	16世紀後葉	景德鎮窯系青花碗皿・焼締め陶器・硯・碁石等	88
SX035	S035	集石	H62	16世紀後葉	錢貨	95
SX038	S038	集石	H61	16世紀後葉	備前系甕	95
SX046	S046	集石	H59	16世紀後葉	焼締め陶器等	95
SX054	S054	集石	H62	16世紀後葉	白磁皿・景德鎮窯系青花皿・漳州窯系青花皿等	96
SX039	S039	土器集中区	I62	16世紀後葉	景德鎮窯系青花碗・皿	98
SX040	S040	土器集中区	H61	16世紀後葉	白磁皿・景德鎮窯系青花皿	98
SX041	S041	土器集中区	H61・62	16世紀後葉	青磁・白磁・青花・羯輪陶器・備前系陶器等	99
SX060	S060	土器集中区	M16	16世紀後葉	京都系土師器・在地系土師器	104

第2節 遺構と遺物

1. 溝及び関連遺構

溝状遺構

府内町跡第34次調査では、規模や形状に差はあるが10条の溝状遺構を検出した。この内の7条は、検出位置や形状などからみて万寿寺境内を東西に走る溝状遺構であると思われる。しかし全体の一部の検出のため、溝ではなく土坑の可能性もある。また、この溝の敷数は、当調査区とは国道を挟んで東側に位置する府内町跡第29次調査で確認されている溝状遺構の一部と思われる。いずれも遺構からの遺物の出土量は少なく、詳細な時期は確定しづらい。このため、敷数の溝に関しては現在整理中の大友第29次調査区の溝の時期とは、今後差違を生じる可能性がある。

SD029A (第2-4・6図)

SD029AはI-60区、万寿寺の境内に位置する溝状遺構で、形態から土坑の可能性もある。遺構の規模は長さ4.5m、幅0.85~0.95m、深さ40cm前後の南北に長く伸びる遺構である。主軸方向はN-1°-Eで、ほぼ真北を指す。中央付近には径10~20cmの礫が多量に投げ込まれた状態であった。

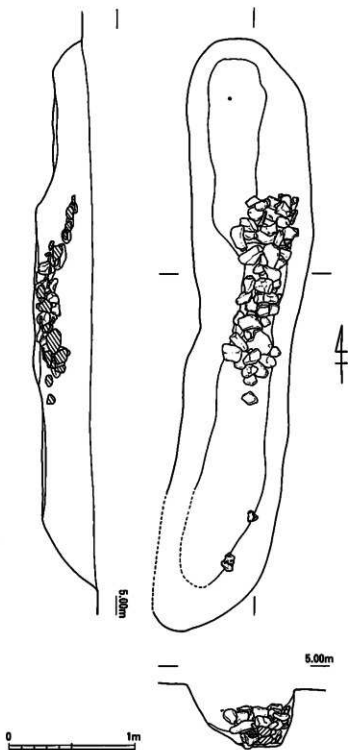
備前系陶器
罎鉢

遺物は、礫群中から多くの平瓦片と備前系陶器破片、判読不明の銭貨1枚が出土している。

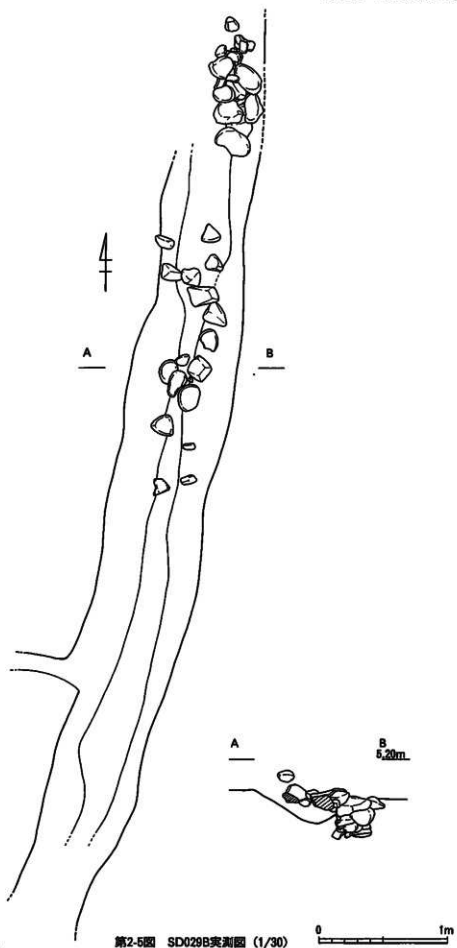
第2-6図1は、備前系陶器の罎鉢で上部を欠いている。内面に放射状罎目と斜め罎目が施されている。近世1期に比定され、16世紀末葉の初産である。

SD029B (第2-5・6図)

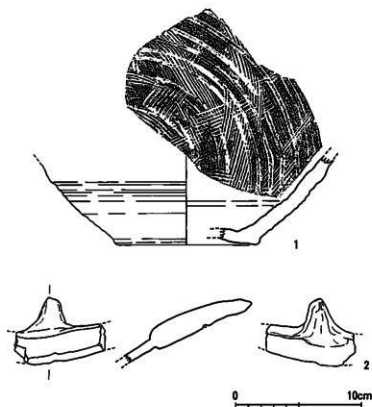
SD029BはI-62区、万寿寺の境内西端に位置する溝状遺構である。規模は長さ約7.4m、幅0.6~0.8m、深さ20cm前後で、両端は消滅しているため全容は不明である。主軸方向はN-12°-Eで南北に伸びる溝である。溝の内部からは径20cm前後



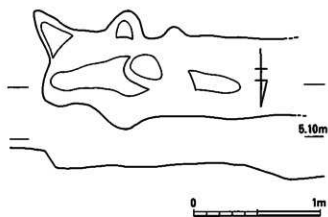
第2-4図 SD029A実測図 (1/30)



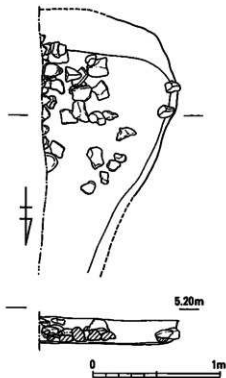
第2-5図 SD029B実測図 (1/30)



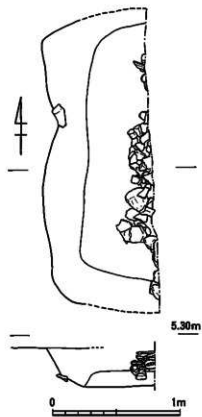
第2-6図 SD029A・029B出土遺物実測図 (1/3)



第2-7図 SD080実測図 (1/30)



第2-8図 SD018実測図 (1/30)



第2-9図 SD026実測図 (1/30)

培烙鍋

の礎群が2ヶ所で確認された。遺物は、礎群中から平瓦片数点と、陶器・瓦質土器が出土している。第2-6図2は、瓦質の培烙鍋の把手である。

SD080 (第2-7図)

SD080は1-63区に位置する溝状遺構で、西側部分はSK076に切られている。残存規模は長さ1.9m、幅0.65～0.9m、深さ10cm前後。主軸方向はほぼ真北で、東西に長く伸びる遺構である。遺物の出土はなく明確な時期の限定はできないが、焼土層下からの検出であり、天正14(1586)年12月の島津侵攻以前の時期と考えられる。

SD018 (第2-8図)

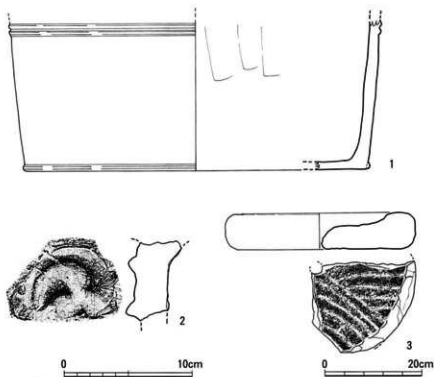
SD018は1-62区に位置する溝状遺構で、隣接調査区(第29次調査区)で検出された溝状遺構の一部と考えられる。万寿寺西側の堀までは約2.5mである。現存規模は東西1.0m、南北2.0m以上、深さ約20cmで溝の西端である。北側はSD032に切られている。遺構内からは多量の礎とともに、平瓦片10数点が出土している。瓦以外の遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

SD026 (第2-9・10図)

SD026は1-61区に位置する溝状遺構である。東側は調査区外に伸びている。規模は東西0.85m、南北2.37m、深さは約30cm、床面はほぼ平坦である。遺構内からは、床面から約10cm浮いた位置で礎や瓦等が出土した。遺構の時期は16世紀後半頃であろう。

火鉢
軒丸瓦
茶臼

第2-10図1は土師質の火鉢底部で、胴部中央付近に2条、底部付近に1条の突帯を持ち、内外面とも丁寧なナデ仕上げを施している。2は軒丸瓦の瓦当破片で、左巻きの三巴文様である。巴文の周縁に珠文を配置している。3は茶臼の上部で、全体の1/8程度が残っている。

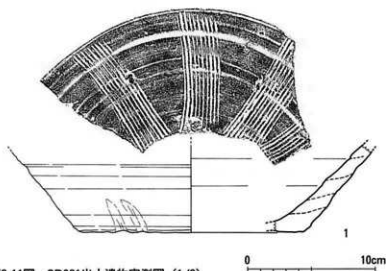


第2-10図 SD026出土遺物実測図 (1/3、1/8)

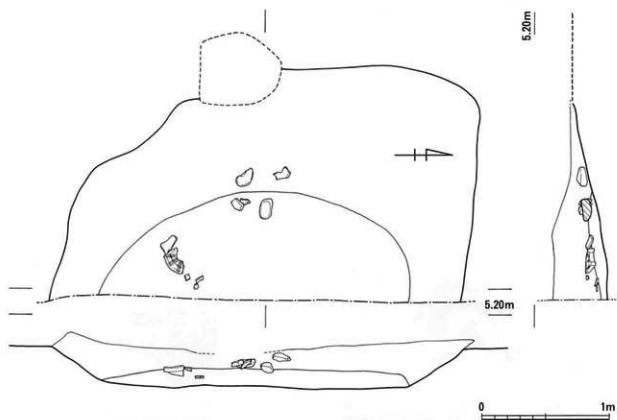
SD031 (第2-11・12図)

SD031は1-62区に位置する溝状遺構である。東側は調査範囲外に延びていて詳細は不明であるが、隣接調査区(第29次調査区)で検出された溝状遺構の一部と考えられる。規模は東西1.2m、南北3.35m、深さは約40cm、床面はほぼ平坦である。遺構内からは、礫とともに陶器片や平瓦・土師器片などが出土している。

第2-11図1は備前系陶器の播鉢で、上部は欠いている。底径は17.4cmで、色調は赤褐色である。内面に10条の放射状播目が施されている。16世紀後半代に比定されよう。



第2-11図 SD031出土遺物実測図 (1/3)



第2-12図 SD031実測図 (1/30)

SD032 (第2-13・14図)

SD032は1-61・62区で検出した大型の溝状遺構である。東側は、調査範囲外に延びていて、隣接調査区(第29次調査区)で検出された溝状遺構の一部と考えられる。規模は東西1.38m、南北4.88m、深さは約20~30cm、床面はほぼ平坦である。溝内からは多量の礫が検出された。特に一片が50~80cm、厚さ20~30cm前後の凝灰岩が、溝の西端を塞ぐように10個体程確認されている。他にも五輪塔の部位や、瓦類などが多量に出土している。

第2-14図1は京都系土師器の皿で、口径12.0cm、器高2.2cmでほぼ完存している。内外面ともナデ仕上げが施されている、口縁部が外反する。埴地編年の2~3期の特徴を示す資料であり、16世紀後半代に比定されよう。2は中国産焼締め陶器壺の胴部下半部分で底径8.8cmである。外面に褐釉を施している。3も中国産焼締め陶器壺の胴部下半部分で底径11.6cmである。内面に褐釉を施している。4・5は軒平瓦の瓦当部の一部である。4は均正唐草文を内区に配し、内区と外区の間には圏線が巡る。5も内区と外区間に圏線を通らし、内区には径7mmほどの珠文を配している。瓦当凹面には、離れ砂が見られる。6は五輪塔部材の空風輪である。凝灰岩製で、風輪部は直線的に開きながら上方へ延び、空輪部も同様に直線的に開きながら上方へ延び、上面を丸く仕上げている。遺構の時期は土坑確認面の状況や出土遺物などからみて、16世紀後半頃と考えられる。

五輪塔

焼締め陶器

褐釉

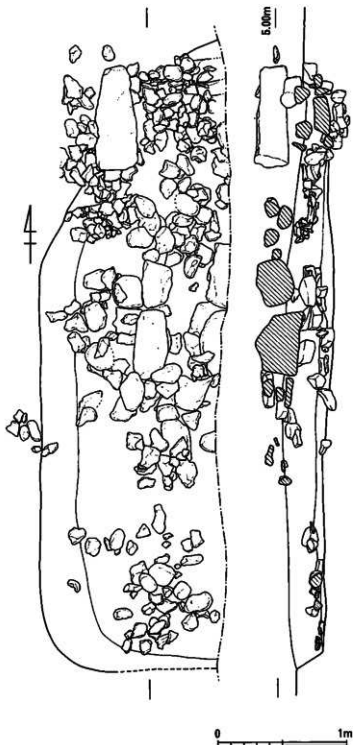
軒平瓦

均正唐草文

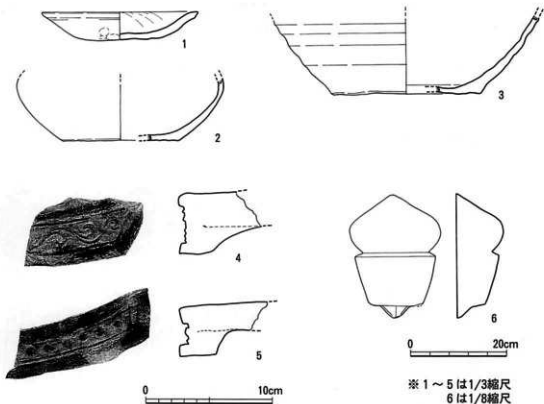
圏線

珠文

空風輪



第2-13図 SD032実測図 (1/30)



第2-14図 SD032出土遺物実測図 (1/3, 1/8)

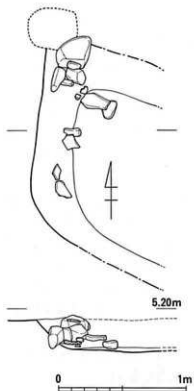
SD033 (第2-15図)

SD033はI-61区で検出した溝状遺構の西端で、東側は調査範囲外に延びていて、詳細は不明である。調査区内での規模は、東西0.95m、南北1.71m、深さは約25cm、床面はほぼ平坦である。溝の北西隅で径20~30cm前後の礫群が検出されている。遺構内からは、礫とともに瀬戸美濃系の陶器片や平瓦片などが出土しているが、いずれも小破片のため、図示できない。遺構の時期は土坑確認面の状況などからみて、16世紀後半頃と思われる。

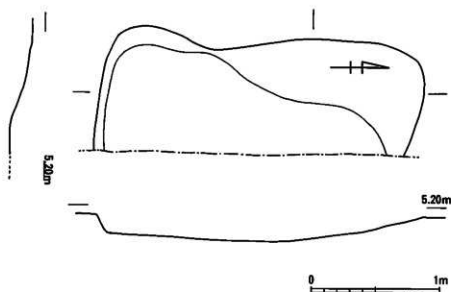
瀬戸美濃系

SD052 (第2-16図)

SD052はI-58区で検出した遺構で、溝状遺構の西端と思われる。東側は調査範囲外に延びていて、詳細は不明である。調査区内での規模は、東西0.95m、南北2.55m、深さは約20cm、床面はほぼ平坦である。遺構内からは、遺物の出土はない。このため、時期の比定はできない。



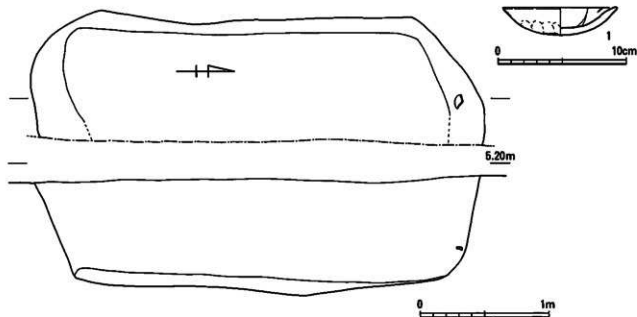
第2-15図 SD033実測図 (1/30)



第2-16図 SD052実測図 (1/30)

SD079 (第2-17図)

SD079は1-63区で検出した遺構で、溝状遺構の西端と思われる。東側は調査範囲外に延びていて、詳細は不明である。調査区内での規模は東西0.95m、南北3.55m、深さは約80～90cm、床面はほぼ平坦である。溝の中からは、京都系土師器が出土した。第2-17図1は京都系土師器の皿で、口径9.0cm、器高2.0cmである。内外面ともにススが付着しており、灯明皿として使用されていた製品であろう。内外面ともナデ仕上げが施されており、外面底部には指圧痕が、内面には「ノ」の字状のナデ仕上げ痕が認められる。口縁部がやや外反し、2～3期の特徴を示す資料と考えられ、16世紀後半代に比定されよう。



第2-17図 SD079実測図及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)

SD066 (第2-18図)

万寿寺西堀 SD066はH-58～63区の中央を南北に走る堀で、本調査区の大半の面積を占める。調査区内での規模は、東西約9m、南北47m、深さは検出面から約2mで、逆台形状をしている。床面の幅は2～3mで、水の流れた様相を示す起伏を持つ。堀の床面から1m位までは、ほぼ全域に粘質の泥炭層が堆積しており、水が溜まっていたことを示している。この層中からは木簡や節、漆器類等、多種有機質遺物
 紀炭層 多様に渡る多くの木製品や、マグロの骨や牛骨等、動植物遺体などの有機質遺物が出土している。
 木簡 遺物は有機質遺物以外にも豊富で、白磁玉取獅子台座^㉙や、青磁燭台^㉚などの陶磁器類や、土師質土器などが多量に出土している。

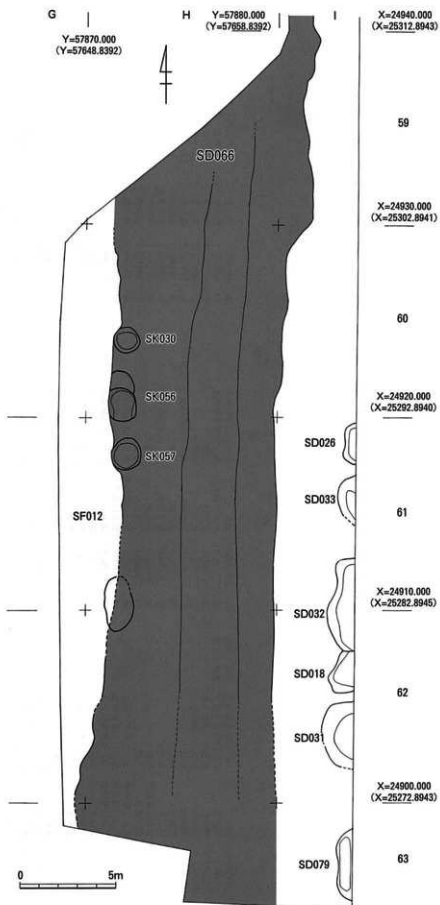
SD066堀の位置は1987年に大分市史編さん委員会が作成した「戦国時代の府内復元図」からみても、万寿寺の西側境に当たる。万寿寺境の堀については、平成14年度に第20次調査区^㉛に於き万寿寺北側の堀の一部が確認・調査されている。平成15年度は当34次調査区、平成16年度は当調査区南側の第43次調査区、さらに翌年の平成17年度には第51次調査区で、万寿寺の堀の北西隅のコーナーに当たる箇所が調査されている。これ以外でも万寿寺西境の堀の調査(第53・60・73次調査)が大分市教育委員会により行われている。

SD066堀の構築時期であるが、堀は西側の街路の一部を切り込んで構築している。この街路には土坑(SK030、SK056など)が掘り込まれているが、堀は土坑も同時に切り込んで掘り下げられている。この土坑は出土遺物から16世紀の後半を過ぎない時期であることから、堀の構築時期は16世紀の後半、1570年代の始め頃には掘り込まれたと考える。その後、当調査区と第43次調査区の一部が埋め立てられ、「屋敷地」として整備されていく。後述するが、当調査区では、埋め立てによる石列が2ヵ所(SX047・077)で確認されている。いずれも石垣の外面を北側に向けており、SX077を整備後に、SX047を整備し、拡幅を行ったものと思われる。なお、第43次調査においては、SX077よりさらに南側に石垣の外面を北側に向けた石列が確認されている。これは別に石垣外面を南側に向けた石列が3ヵ所で確認されている。当地が埋め立て整備後、さらに2回にわたって南北に拡幅された形跡が伺われた。その後、程なくこの堀は全てが埋められ、第2南北街路に面する「西之屋敷」として整備されている。

SD066堀の埋め立てた時期は、堀の中からの出土遺物に涼州窯系青花や近世1期の備前系播鉢がでてくことや、大友義統が天正10(1582)年に発した文章中に、「西之屋敷」に関する記述があり、これらの事からみて少なくとも1580年前後には埋められていた事がわかる。

礎石 この埋め立て後には、当調査区においても3棟分の建物跡と考えられる礎石が検出されている。さらに多数の柱穴も確認されており、「西之屋敷」の存在を裏付ける資料となっている。

註(1) 中世大友府内町跡では第12次調査区と第29次調査区(未報告)でいずれも白磁玉取獅子置物の獅子部分が出土している。
 ・大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内4 中世大友府内町跡第9次・第12次・第18次・第22次・第48次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第9集 2006)
 (2) 中世大友府内町跡では第20次調査区C区で青磁人物燭台の台座部分が出土している。
 ・大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内7 中世大友府内町跡第20次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第16集 2007)
 (3) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内7 中世大友府内町跡第20次調査区』(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第16集 2007)



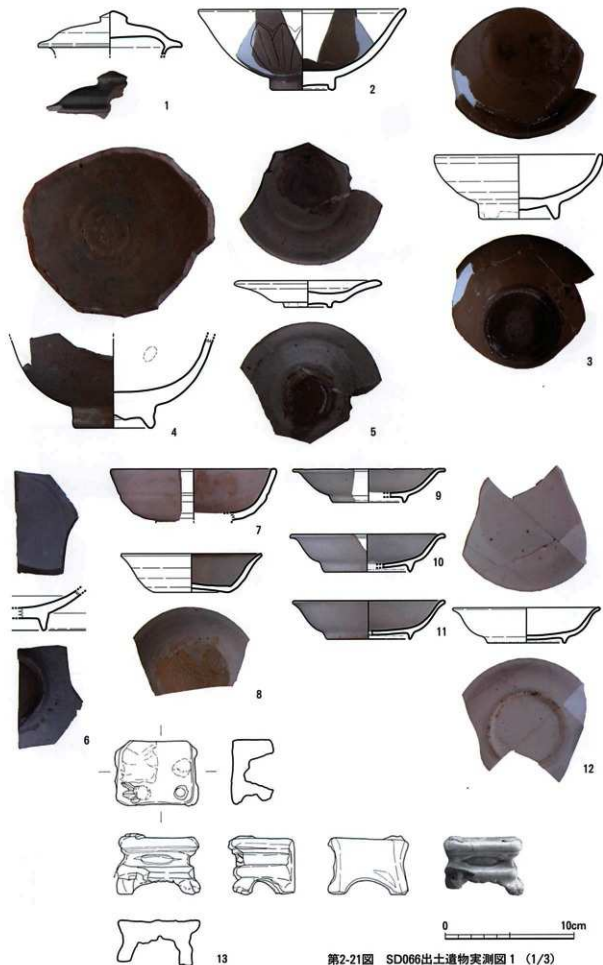
第2-18図 SD066実測図 (1/200)

出土遺物 (第2-21~48図)

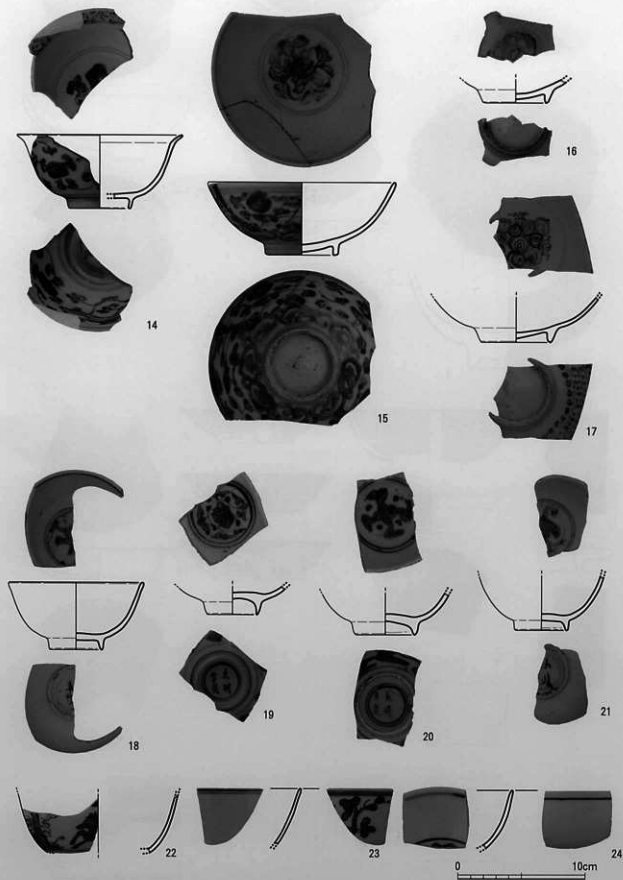
SD066堀からは、当調査区出土の半数以上を占める多量の遺物が出土している。陶磁器類から鉄製品・木製品まで、多種多様である。

陶磁器 (第2-21~28図)

- 宝珠つまみ 龍泉窯系 1~5は青磁である。1は宝珠つまみを有する青磁の盃で15~16世紀代の製品である。内面は露胎である。2は龍泉窯系の青磁碗で、外面に鴛蓮弁が施されている。口縁部は外反している。3も青磁碗で高台に二次的な要因で、煤が付着している。高台は露胎である。4は龍泉窯系の青磁碗で、内面見込みに花文をスタンプしている。15世紀代の製品である。5は中国製の青磁皿で、15世紀代の製品である。見込みは露胎である。
- 6~13は白磁である。6は森田編年の白磁碗Ⅴ類に比定される製品である。見込みに沈線を有している。高台は露胎である。11世紀代の製品であろう。7は碗で、高台を欠損しているため、胴部の立ち上がりは不明である。15世紀代の製品であろう。8は皿でいわゆる口縁端部が口禿になった製品である。口縁部をやや外反させ、底部は露胎である。森田編年の白磁皿Ⅹ類に比定され、13世紀後半代の製品である。9~12は景徳鎮窯系の白磁皿で、森田編年のE群に比定される皿である。口縁端部が外反し、高台畳付部分が露胎となる。いずれも16世紀代の製品である。13は中国製白磁玉取獅子置物の台座である。獅子と脚の一部が欠損している。中世大友府内町跡では、第12次調査区(豊後府内4で報告済み)と第29次調査区(未報告)で、玉取獅子の破片が出土しているが、いずれも同一個体ではない。
- 景徳鎮窯系 14~24は景徳鎮窯系青花の碗である。14は口縁内面に四方禪文、胴部外面には花卉文と鳳凰、見込みに花卉文を描いている。高台内には銘が認められるが、判読できない。小野編年の碗B群に属し、15世紀中頃の製品である。
- 蓮子碗 15~17は小野編年の碗C群に比定され、いわゆる「蓮子碗」の系統に属する製品である。広く開いた胴を持ち、見込みが高台内に凹む器形となる。16世紀前葉の製品である。15は胴部に唐草文、腰に簡略化した蓮弁帯、見込みに花卉文を描いている。また、破損断面には黒漆が認められることから漆継ぎが行われた様子がわかる。16は見込みに花卉文と思われる文様を描いている。17は胴部に丸を三つ結合した模様、見込みに渦文を主体とした文様を描いている。
- 漆継ぎ 18~24は小野編年の碗E群に比定され、いわゆる「饅頭心碗」の系統に属し、16世紀後葉の製品である。18は口縁内外面にそれぞれ界線を持ち、見込みに動物と思われる文様を描いている。高台内には「□□年造」の文字が描かれている。19は胴部外面に唐草文と思われる文様を描き、見込みに団花状の唐草文、高台内には「大明年造」の字款が描かれている。20は胴部外面に鳥と思われる文様を描き、見込みに如意雲、高台内には「大明年造」の字款が描かれている。21は口縁内外面にそれぞれ界線を持ち、見込みに鳥の文様を描いている。高台内には「大明□□」の文字が描かれている。18と21は同一個体の可能性を持つ。22~24は碗の胴部破片である。22は胴部外面に動物を描いている。23は口縁内面に二重、外面に一重の界線を持ち、胴部外面に花文を描いている。24は口縁内外面にそれぞれ界線を持ち、見込みに文様を描いているが、不明である。
- 饅頭心碗 25~30は景徳鎮窯系青花の皿である。25は小野編年の皿E群に比定される製品で、ほぼ完形品である。口縁内外面に一重の界線を持ち、見込みに一重の界線を持つ。26~28は皿B1群に比定され、口縁が外反している。26は胴部内外面とも模様はなく、見込みに花樹と思われる文様を描いている。27・28は胴部外面に唐草文、見込みに花樹と思われる文様を描いている。29は底部がいわゆる「蕃筒底」となるもので、C群に比定される資料である。口縁内面に二重の界線を描き、見込みに花文が描かれている。30はE群の皿で、見込みに○文と花樹と思われる文様を描いている。高台内には二重の界線の中に字款が描かれているが、字の一部で判読できない。
- 蕃筒底



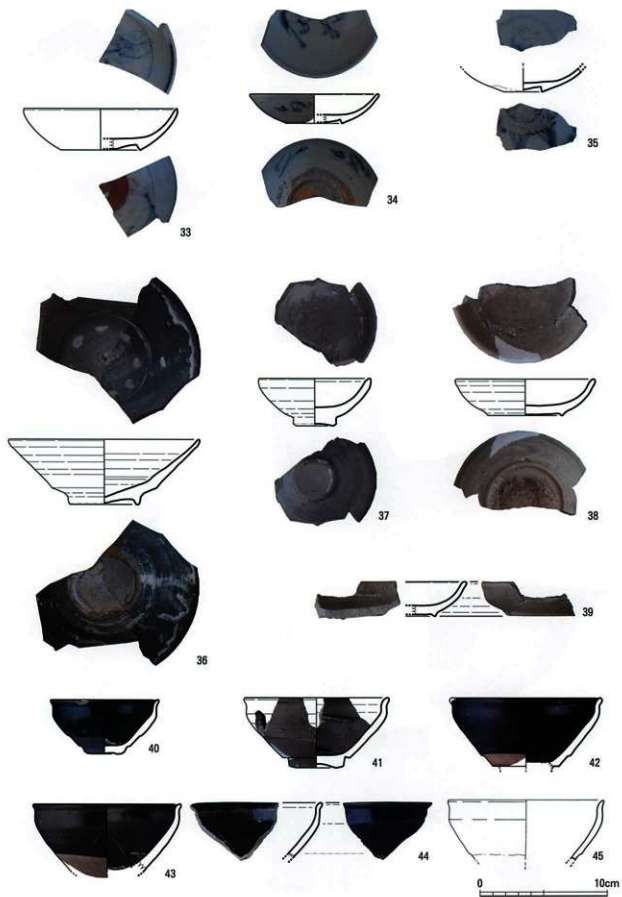
第2-21圖 SD066出土遺物実測圖1 (1/3)



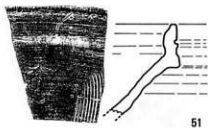
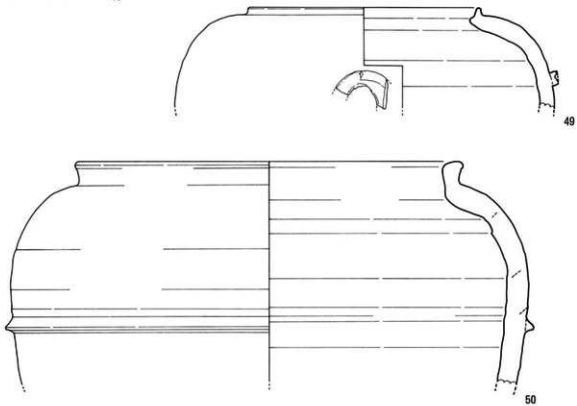
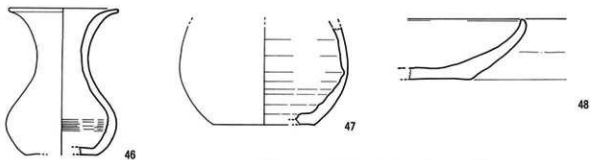
第2-22図 SD066出土遺物実測図2 (1/3)



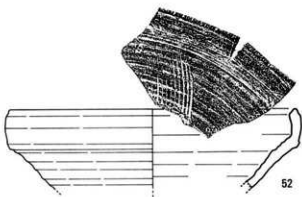
第2-23図 SD066出土遺物実測図3 (1/3)



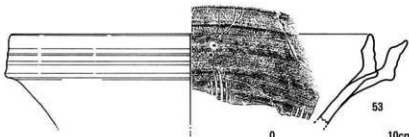
第2-24図 SD066出土遺物実測図4 (1/3)



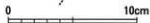
51



52



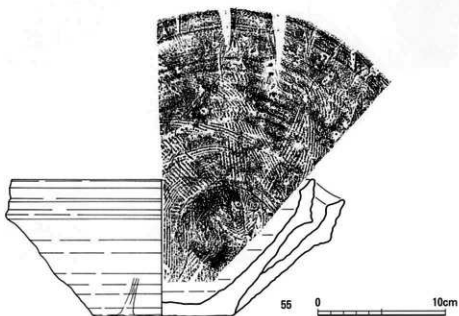
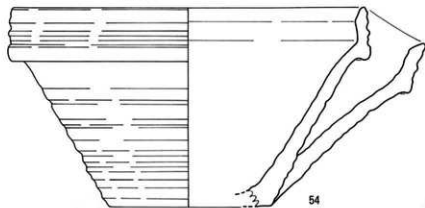
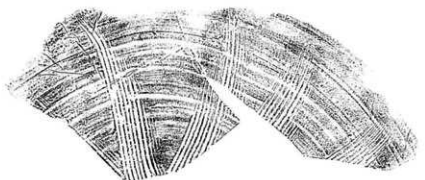
53



第2-25图 SD066出土遗物实测图 5 (1/3)

31は景德鎮窯系青花の盤である。図版等製作後、他の破片と接合したため、文様や全体の大きさが確認できた。口縁の内外面には如意頭を、見込みには龍文を描いている。胴部外面は丸で囲った馬が5箇所に描かれている。高台の外面には半月状の連続文様を施し、高台内には二重の界線が描かれているが、字款部分は欠如している。32は景德鎮窯系青花の鉢で、口縁部の外面に如意頭、胴部には如意頭と葡萄文を5箇所に描いている。口縁部内面と胴部内面には花唐草文を、見込みには判読できないがやはり文様が描かれている。高台の外面には渦文の連続文様を施している。また、この32の破損断面には黒漆が認められることから漆継ぎが行われた様子がわかる。

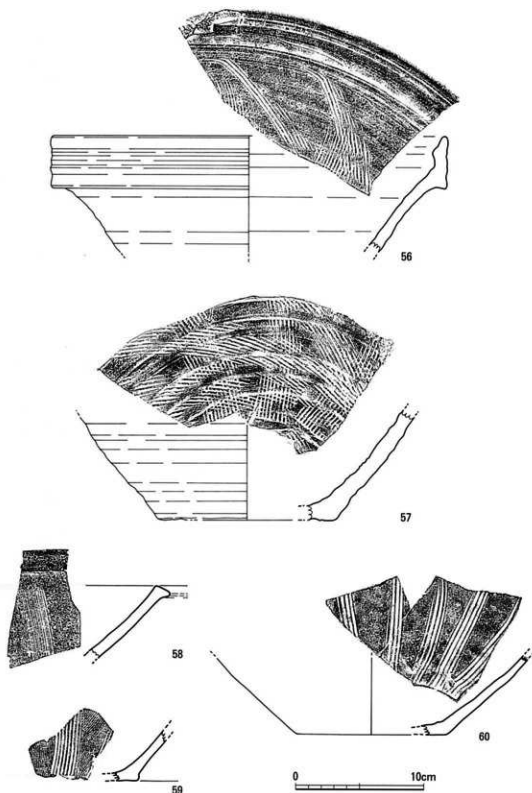
花唐草文
漆継ぎ



第2-26図 SD066出土遺物実測図6 (1/3)

漳州窯系 33~35は中国漳州窯系青花の皿である。底部がいわゆる「碁笥底」となるもので、33は見込みに
 花文あるいは文字と思われる記号を描いている。34は見込みに「寿」、胴部外面には梵字を描いている。
 35は見込みに花文を描いている。

灰青釉陶器碗 36・37は朝鮮王朝産の陶器碗で、36は灰青釉陶器碗である。内面と高台端部に胎土目の痕跡が確



第2-27図 SD066出土遺物実測図7 (1/3)

認でき、見込みが高台内に沈む形態を示している。37は高台に砂目が確認できる。

天目皿

38～45は瀬戸美濃産の製品で、いずれも大窯3期の所産である。38・39は皿で、40～45は天目皿である。

第2-25～27図46～57は備前系陶器である。46は瓶である。ほぼ全面に自然軸がかかっている。47も瓶の胴部である。48は鉢の破片、49は広口壺の破片で、肩部に小さな貫通孔を持つ耳（把手）を有する。肩部には自然軸がかかっている。50も広口壺の破片で、胴部に断面三角形の突帯を貼り付けている。口縁部には降灰が認められる。51～57は摺鉢である。51～54は6～12条の放射状の摺目が施されていて、いずれも中世6期に比定される資料である。55～57は放射状の摺目に加え、ナメ摺目が施されており、近世1期に比定される。58～60は、瓦質土器の摺鉢である。58は内面に細い放射状の摺目が見られる。59はハケ調整の後に、1単位8条の放射状摺り摺目を施している。60は1単位4条の放射状摺目を施している。

61～63は中国焼締め陶器である。61は壺の底部で胴部外面に掲軸を施している。62は罎の口縁から胴部にかけての破片で、胴部外面は掲軸を施している。63も罎の口縁から胴部にかけての破片である。軸葉は認められない。

土師質土器・瓦質土器（第2-29～35図）

灯明皿

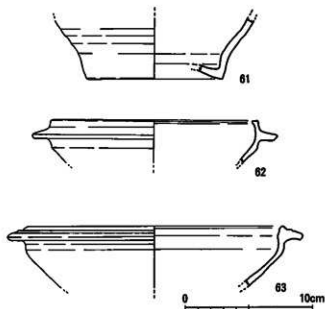
64～133は京都系土師器皿で、口径は8.0～17.0cm、器高は1.7～2.7cmである。いずれも器壁が比較的厚くなり、口縁部外面に強い横ナデが施され、塩地編年の2～3期の特徴を有する製品である。掲載している京都系土師器70点中34点の口縁部や胴部にススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと思われる。

134～137は京都系土師器の坏で口径は10.4～11.8cm、器高は3.2～3.5cmである。底部から口縁部に向け内湾気味に立ち上がり、口縁部外面に強い横ナデが施されている。135・137の口縁部にはススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと思われる。

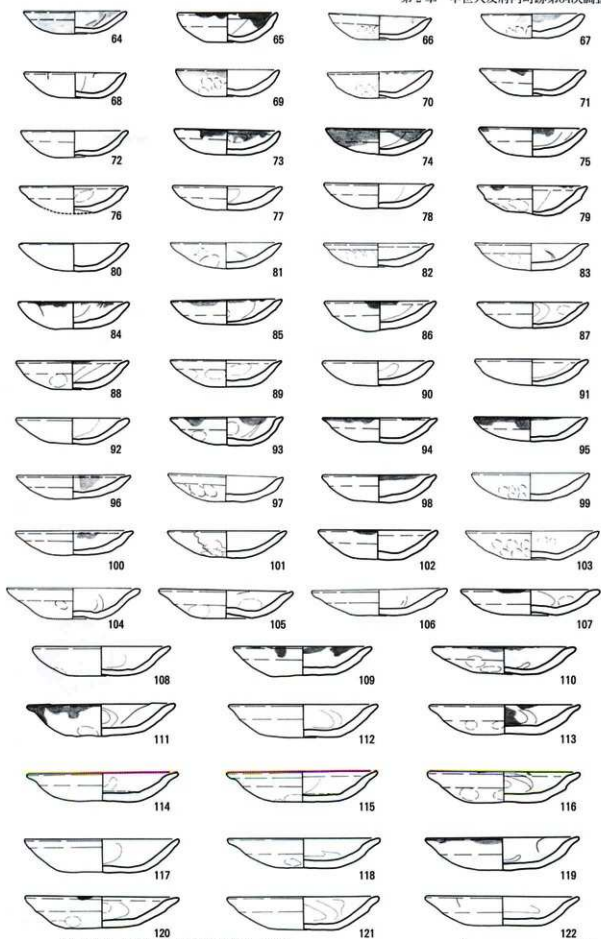
138～148は在地系土師器である。底部にはいずれも糸切り痕が認められる。138はロクロ成形による小皿で、内面にロクロ目を有している。口縁部にはススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと思われる。139は口縁が比較的直線的に立ち上がるロクロ成形による皿である。

140～143もロクロ成形による小皿で、底部の器壁は厚く、口縁部を低く形成している。口径7.7～8.4cm、器高は1.1～1.6cmである。144も皿で、口縁は内湾気味に立ち上がる。145～147は坏である。いずれも口縁はほぼ直線的に立ち上がる。148は底部から口縁部にかけて直線的に開き、内外面とも顕著にロクロ目を残している。

第2-31・32図149～163は土師質土器である。164～172は土師質、173は須恵質あるいは陶器で

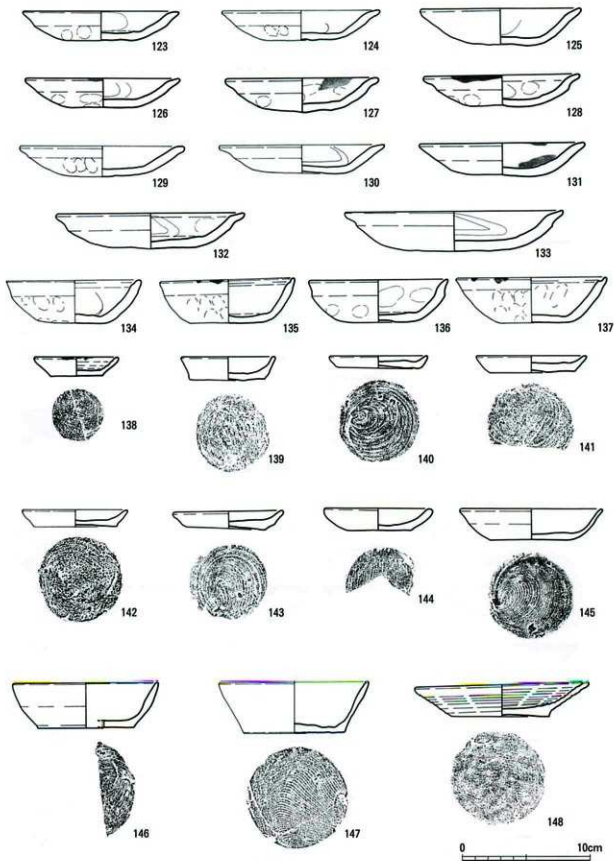


第2-28図 SD066出土遺物実測図8 (1/3)

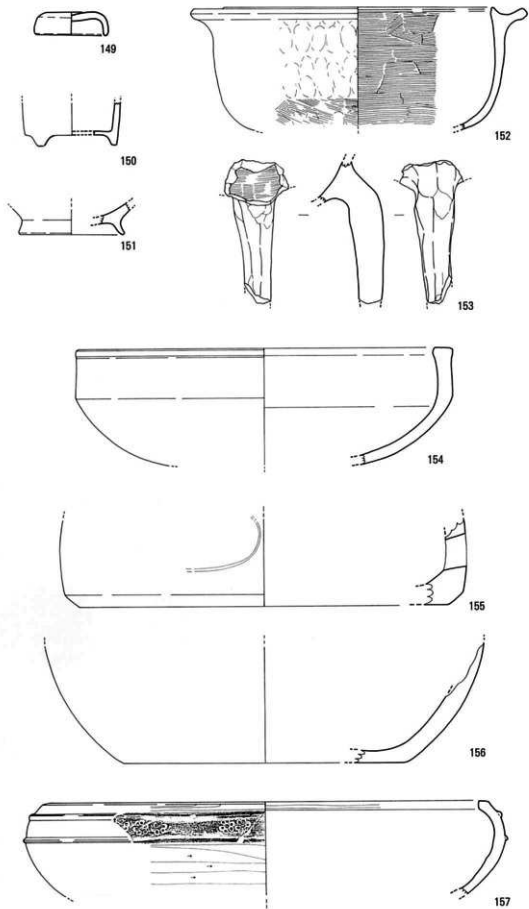


第2-29図 SD066出土遺物実測図9 (1/3)

0 10cm



第2-30図 SD066出土遺物実測図10 (1/3)



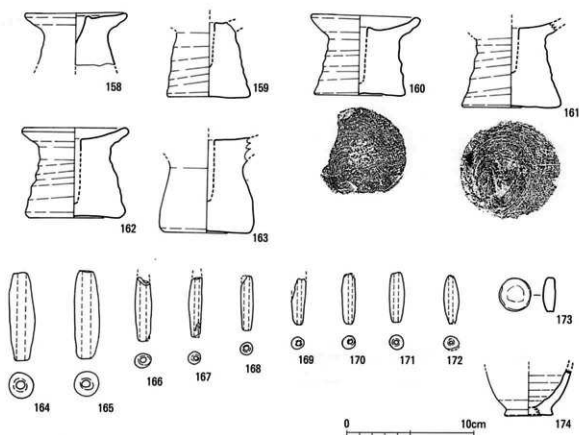
第2-31圖 SD066出土遺物実測図11 (1/3)

第2節 遺構と遺物

焼塩壺の蓋 ある。149は焼塩壺の蓋と考えられる個体で、京都系土師器の胎土を有している。150は三足の香炉で口縁部を欠損する。内外面とも丁寧なナデ仕上げを施している。151は高台付きの坏で、高台を底部外方向に付けている。内外面とも回転ナデを施している。152・153は鍋の胴部と脚部である。152は口径21.0cmで、口縁をし字状に外方に突出させている。内面は全体に横方向の刷毛状工具による調整を施し、外面は胴部全体に指圧痕と、底部付近に横方向の刷毛状工具による調整を施している。また、外面にはスガが付着している。153は脚部で、先端を欠損している。全体にナデ仕上げを行っている。154は播鉢で、ロクロ仕上げである。内外面とも丁寧なへら磨きを施している。155は風炉の底部破片である。内外面とも丁寧なナデ仕上げを施している。底部付近には直径6cm程度の透かし孔が認められる。156・157は火鉢の破片である。156は底部で、脚部分が欠損している。内外面とも平滑なナデを施している。157は口縁から胴部にかけての破片で、口縁下部に2条の断面三角突帯を貼り付けている。この突帯間にスタンプによる梅花文を施している。口縁部分はへら磨き、胴部は横方向のへら削りで仕上げている。

燭台 158～163は燭台である。穿孔はいずれも貫通しない。160・161の底部には糸切り痕が認められる。164～172は土唾である。173は土師質土器を再加工した製品で周辺部に研磨を加え、円形に加工している。遊具として使用された可能性が高いと思われる。174は須恵器或いは陶器の壺の破片と思われる。当時期の製品ではない可能性が高い。

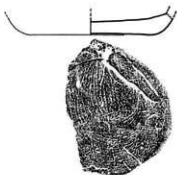
第2-33～35図175～193は瓦質土器である。175は瓦器碗で内外面とも横ナデ痕が確認できる。高台はなく、回転糸切り痕が認められる。176は底部破片であるが、器種は不明である。底部糸切り痕が認められる。177は壺の口縁から胴部にかけての破片である。内外面ともハケ目が認められる。



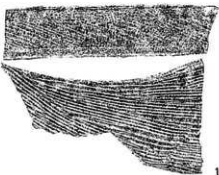
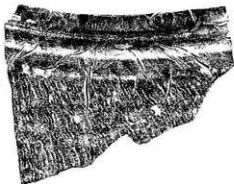
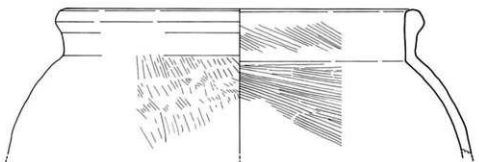
第2-32図 SD066出土遺物実測図12 (1/3)



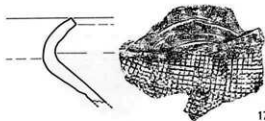
175



176



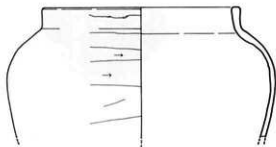
177



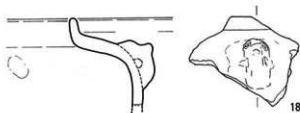
178



179



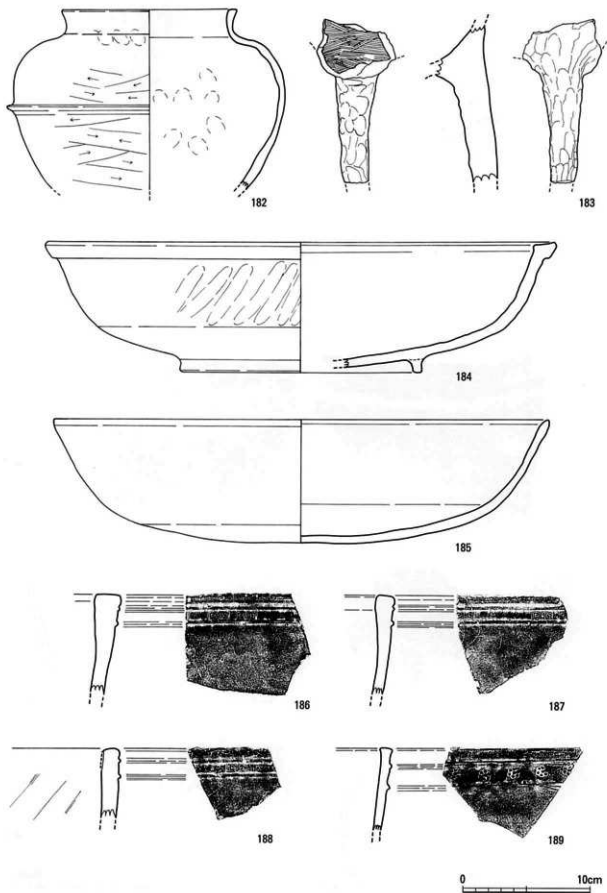
180



181

0 10cm

第2-33图 SD066出土遺物実測図13 (1/3)



第2-34図 SD066出土遺物実測図14 (1/3)

178は甕の口縁の破片である。外面には格子のタタキ目が施されている。179～180は壺の破片である。181・182は羽釜である。181には把手が確認できる。182は内面には横方向のナデと指圧痕、外面に斜めのヘラ削り痕が確認できる。183は脚部で、先端を欠損している。184・185は鉢で、184には、高台が付く。186～189は火鉢の口縁部である。いずれも口縁下部に2条の断面三角突帯を貼り付けている。この突帯間にスタンプによる雷文や梅花文を施している。190～193は火鉢の底部破片である。

雷文

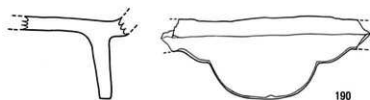
双頭獣手龍雲文

木製品・竹製品 (第2-36～44図)

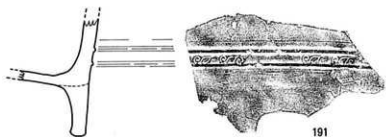
木筒

二百六十入
きへもん

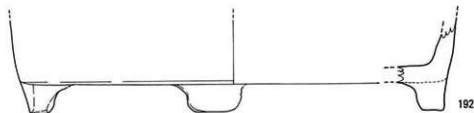
194は木筒と考えられる製品で、表裏で墨書が認められる。下部は欠損している。材質は檜で、長さ9.1cm、最大幅2.1cm、厚さは0.1～0.2mmである。片面は「二百六十入」と記しており、物の個体数を表していると考えられる。もう一方の面には「きへもん」と記していると考えられ、おそらく人の名前「喜衛門」であろう。荷札の一種と考えられる。



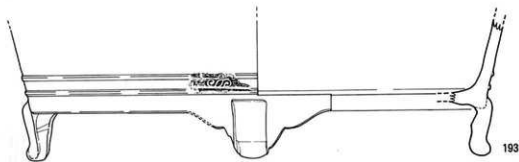
190



191



192



193

第2-35図 SD066出土遺物実測図15 (1/3)



第2節 遺構と遺物

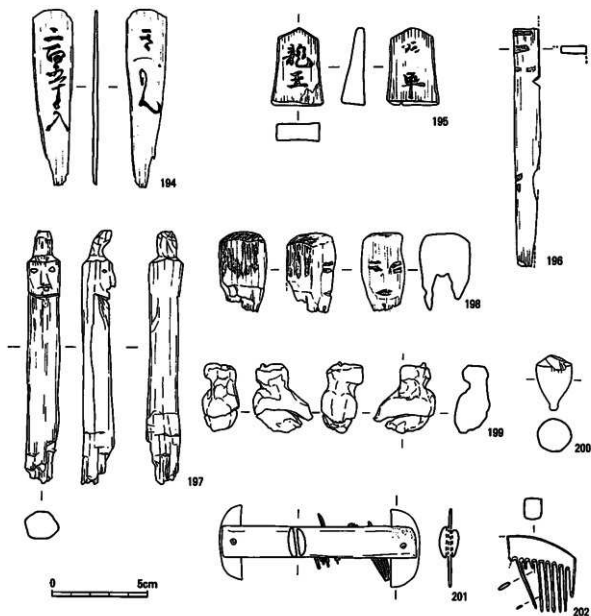
将棋の駒

195は将棋の駒で、表裏に墨書が認められる。材質は檜で長さ4.1cm、幅2.1~2.7cm、厚さは0.5~1.3cmである。表面に「飛車」、裏面は「龍王」と書かれている。

196は木簡あるいは荷札の破片と思われる製品であるが確定はできない。現存で長さ12.3cm、1.3cm、厚み0.4cmで、上下部位とも欠損している。表面で墨痕が四ヶ所で確認できるが、内容等は判別できない。上部から2cmの位置に切り込みを入れている。

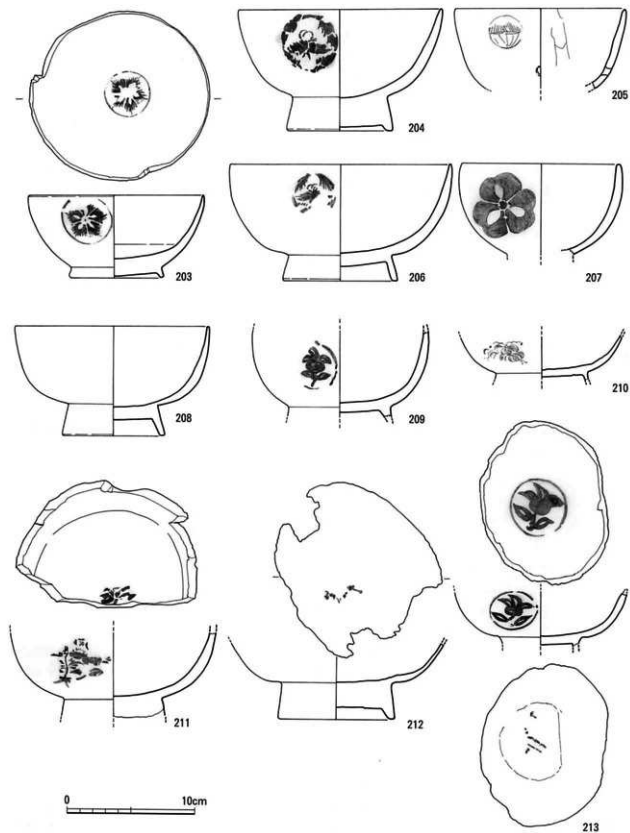
ひとがた

197・198は「ひとがた」の頭部である。197は長さ13.1cmで、材質は檜である。頭部は鳥帽子を冠している。鼻は削り出し、目・口・首の部分は切り込みで表現しているが、墨入れは行なわれていない。また、下半は加工されていない事から、ひな人形などのような首から下を芯として使用した人形の一部と考える。198も材質は檜で、長さ4.1cm、径2.7cmである。目・口は切り込みで表現している。切り込んだ部分の目・口と、眉毛・頭髮は墨を入れて表現している。首の付け根部分は、穿っているため、197とは逆に、支柱等に差し込んでいたと考えられる。

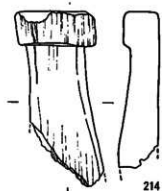


第2-36図 SD066出土遺物実測図16 (1/2)

- 鳥? 199は鳥をかたどったと思われる製品である。材質は榎木と思われる。
- 独楽 200は独楽で、長さ2.8cm、最大幅1.8cmである。芯は削り出している。
- 櫛 201・202は櫛である。201は竹を幅1.6cm、長さ10.2cmに薄く削った2枚の板状の櫛の間に、長さ4.0cm、厚さ0.1cmに満たない竹製の箄(歯)を挟み、両端を釘状のピンで留めている。いわゆる現在の真弧と同じ形をしており、櫛ではない可能性もある。202の材質は柞で、全体のほぼ40%が残っており、材質の残りもよい。箄(歯)の長さは3cm前後で、厚みはほぼ0.1cmである。
- 漆器碗 203～213は漆器碗である。203の材質は「ケヤキ」で、外面は黒漆、内面は赤褐色の漆を施している。内面見込みと胴部外面の3ヵ所に、赤漆で「○」を描き、その中に「花文」を描いている。底部は厚く仕上げている。204の材質は「シイ属」で樹木の確定はできない。内外面とも黒漆を施し、外面の4ヵ所に赤漆で「桐」と思われる花模様を描いている。底部は約2.5cmの厚みを持つ。205は胴部破片で、材質は「桐木」、外面は黒漆、内面は赤漆を施している。外面に赤漆で模様を描いている。206の材質は「クスノキ科」の樹木で、外面は黒漆、内面は赤漆を施している。外面3ヵ所で「桐」と思われる花模様を確認できた。本来は4ヵ所に描いていたと考えられる。ほぼ全体を残しているが、土圧による歪みが認められる。207は口縁から胴部にかけての破片で、材質は不明である。内外面とも黒漆を施している。外面の2ヵ所で「花文」が確認でき、全体では4ヵ所に描いていたと思われる。光沢がまだ残っており、破片部分の残りは非常に良好である。208の材質は「クスノキ科」の樹木で、外面は黒漆、内面は赤漆を施している。残りが非常によく、完形品である。内外面とも模様は描かれていない。209の材質は「クリ」と思われる。内外面とも黒漆を施しているが残りは悪い。外面の3ヵ所に、赤漆で「○」を描き、その中に「花文」が描かれている。210の材質は不明で、外面は黒漆、内面は赤漆を施している。外面3ヵ所に、赤漆で「樹木の葉と茎」と思われる文様が描かれている。211の材質は「けやき」で内外面とも黒漆を施している。内面見込みと、外面3ヵ所に「樹木と種子」と思われる文様を描いている。212は「ブナ科」の樹木で、内外面とも黒漆を施している。見込みと、胴部外面に文様が確認できる。213の材質は「アサダ」と思われる。内外面とも黒漆を施している。内面見込み、高台内と、外面の3ヵ所に209と同じく「○」に「花文」が描かれている。
- 叩貝? 214は農耕具の一種で叩貝ではないかと思われる。下部は破損しており、二次被熱のため、一部焦げ目とスガが付着している。215は小刀などの柄が納まる握りの片方と考えられる。裏面には柄の部分が納まるように長さ8.2cm、幅1.7cm、深さ0.2cmに削り込んだ痕跡が認められる。また、表面の2ヵ所には、二枚の握り部分を結束した痕跡が認められる。幅は0.8cm程度である。216は下部を幅2cm程度削り、さらに残りの部分を斜めに削り取っている。用途不明であるが、形状的には、戸の開閉防止用の留め具の形をしている。
- 下駄 217～220は下駄である。長さは13～20cmである。217には鼻緒を通す穴が穿たれていない無限下駄、いわゆる「草履下駄」である。台の周囲17ヵ所に釘を打ち込んだ痕跡が確認でき、2ヵ所ではまだ釘が残っている。218～219はいずれも鼻緒を装着するための前方の孔(眼)＝「前壺」は台の中心線上に、後方2ヵ所の眼＝「横緒孔」は後側の前方に位置する連壺下駄である。
- しゃもじ 221は「しゃもじ」である。長さは24.4cmで、先端は丸く製作されている。卵形部分には箸が貼り付いている。
- 笮 222～236は箸状木製品である。長さは17～24.5cm前後で、ほとんどが両端部を細く削っている。237は長さ8cm、幅1×2cmの角材である。2ヵ所に釘が残っている。用途は不明である。
- 筒札? 238・239は長さ12cm前後、厚さ0.3cm程の板材である。238は1ヵ所に釘が残っている。筒札と思われるが、詳細は不明である。239は上下2ヵ所に穿孔が施されている。釘穴と思われる。用途は不明である。240も長さ13cm、幅4.6cm、厚さ0.3cmの板材である。表裏面とも幅1cm程のノミ状の工



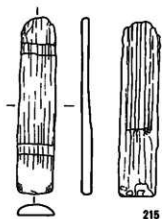
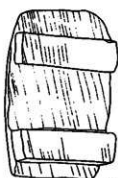
第2-37図 SD066出土遺物実測図17 (1/3)



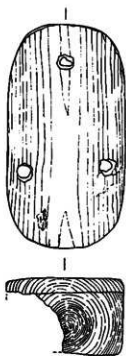
214



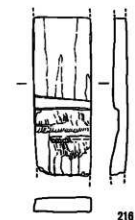
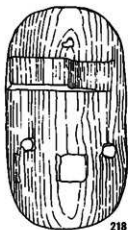
217



215



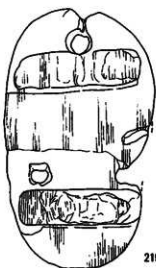
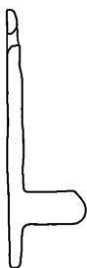
218



216



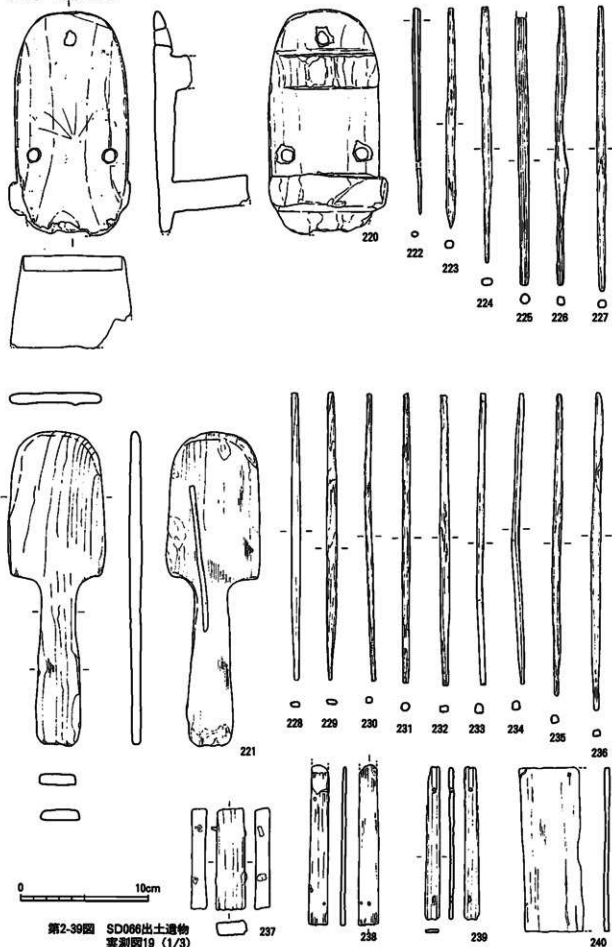
219



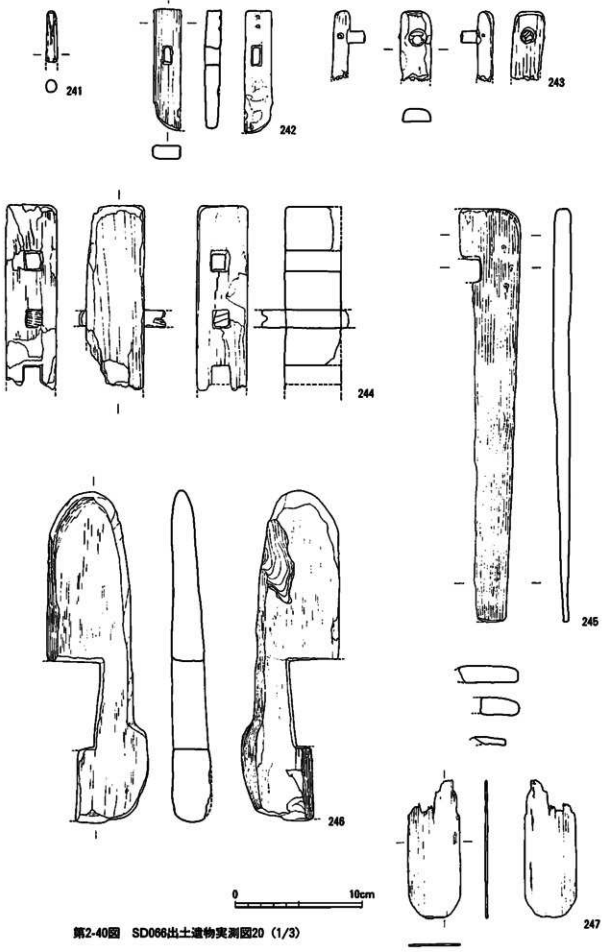
0 10cm

第2-38图 SD066出土遗物实测图18 (1/3)

第2節 遺構と遺物

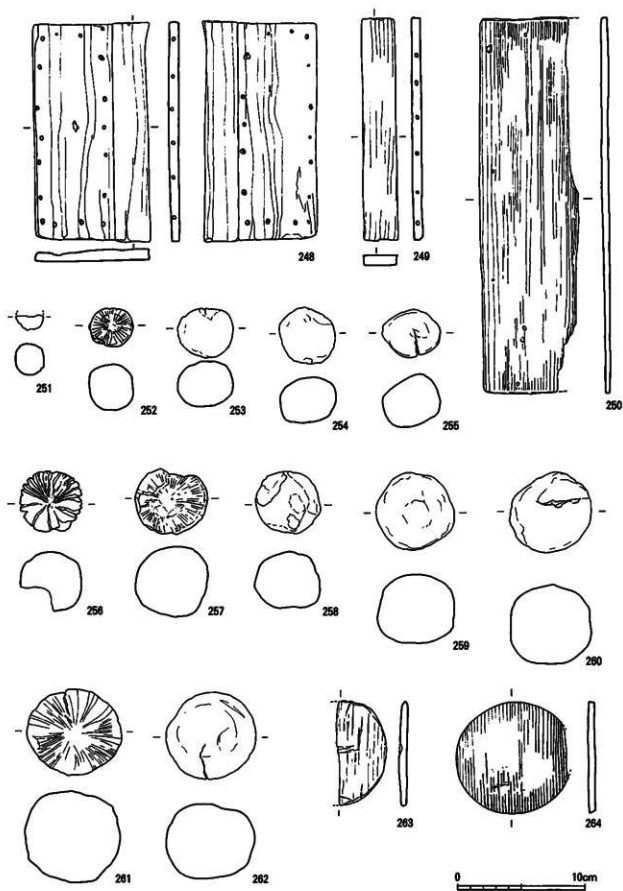


第2-39図 SD066出土遺物
実測図19 (1/3)

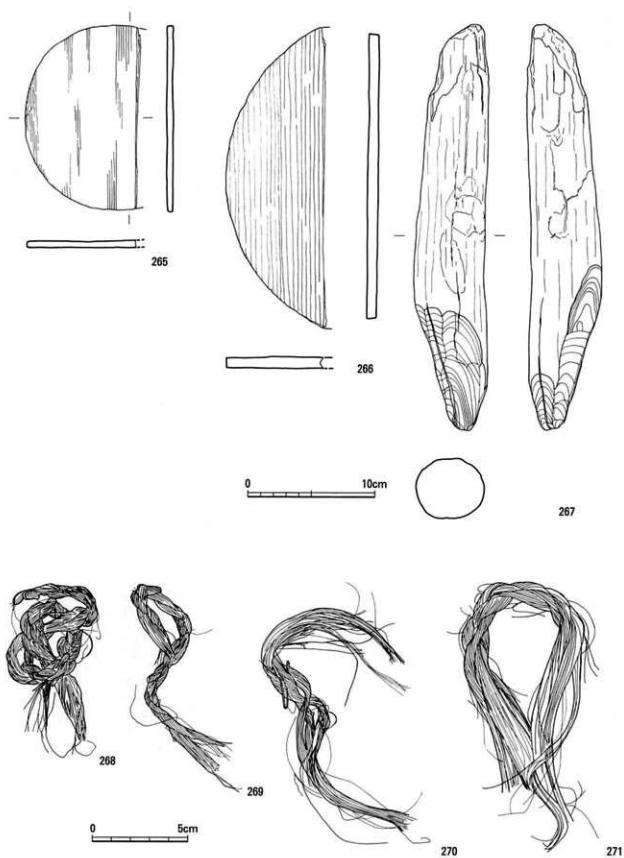


第2-40図 SD066出土遺物実測図20 (1/3)

第2節 遺構と遺物



第2-41圖 SD066出土遺物実測図21 (1/3)



第2-42図 SD066出土遺物実測図22 (1/3, 1/2)

具で平坦に成形している。2ヵ所に穿孔が見られる。荷札と思われる。

荷札
 建築部材
 241～244は、建築部材と思われる。241は一部を欠損しているが長さ4cm、径0.9cmの円柱状の「ほぞ型木製品」である。先端は細く仕上げている。242は長さ9.4cm、厚さ1cmで、半分は欠損していると思われる。先端の一方を丸く面取りし、中央に長さ1.3cm、幅0.7mmの角形の「ほぞ穴」を穿っている。上部の二ヵ所には深さ2mm位の釘穴が見られる。243は一部を欠損しているが、長さ5.5cm、幅2.4cm、厚さ1cmの角を面取りした角材である。この上部に、径1.1cmの円形の「ほぞ穴」を穿って、中に径0.9cm程度の円柱の「ほぞ」を差し込んでいる。また、この「ほぞ」には、抜けないように端から釘を打ち込んでいる。244は一方を欠損しているが、残存部分で長さ14.2cm、幅・厚さ4cmの角柱である。角柱は全ての面で面取りを行っており、長さ1.5cm、幅1.2cm前後の「ほぞ穴」を3ヵ所穿っている。その中の一つには、1.2×1.1cmの「ほぞ」が残っている。

ほぞ



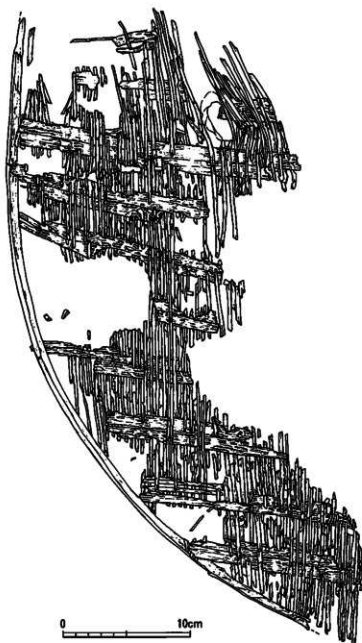
第2-43図 SD066出土遺物実測図23 (1/3)

245は用途不明の木製品である。長さは32.1cmで両面とも面取りを施している。厚さは1.2~0.3cmで、徐々に細く加工している。横方向は欠損しており、本来の幅は不明である。図示した製品の上部に、長さ1.8cm、幅1.4cm以上の「ほぞ穴」を穿っている。上下両方に穿っていたかは破片のため不明である。

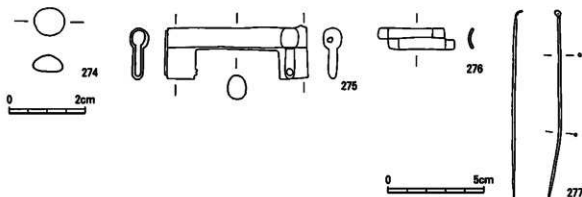
隙

246は隙の一部と考えられる木製品である。長さ25.7cm、厚さ2.5cm前後で、全面に面取りを施している。横方向は欠損しており、本来の幅は不明であるが、先端の削り方からさほど横に広がるとは考えられない。また、中央下部に柄を差し込むための「ほぞ穴」を穿っている。先端は鋭利に削って面取りを行っている。

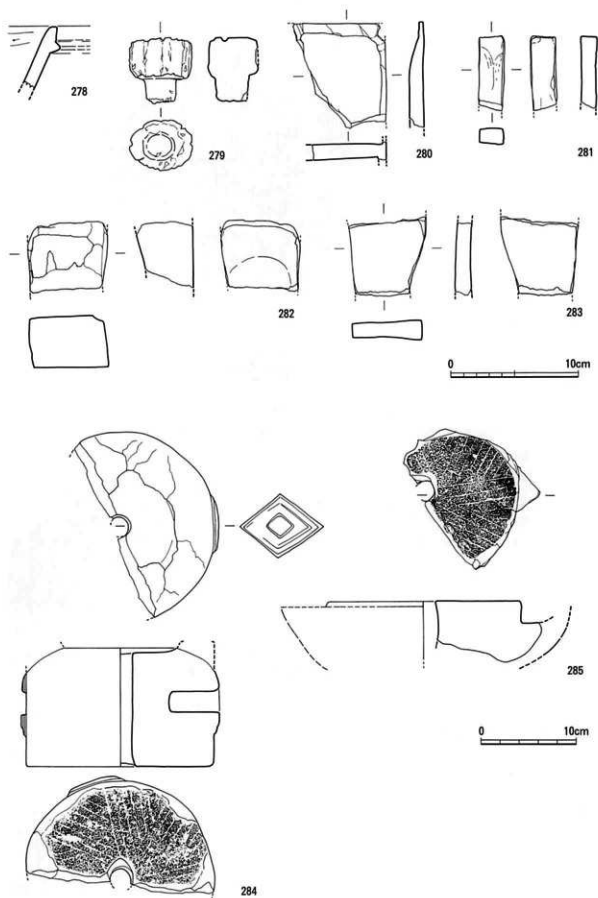
247は一部欠損しているが、長さ10.8cm以上、幅4cm、厚さ0.1cm程の板材である。先端部を丸



第2-44図 SD066出土遺物実測図24 (1/3)

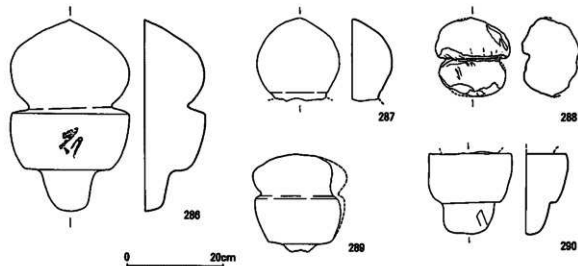


第2-45図 SD066出土遺物実測図25 (1/3, 1/2)



第2-46図 SD066出土遺物実測図26 (1/3、1/4)

- 荷札 　く削っている。また、中央の二ヵ所で釘穴が確認できる。荷札と考えられる製品である。
 248・249は長さ17cm前後の木製品である。248は長さ16.9cm、幅8.9cm、厚さ0.8cmの板材である。表面には縦方向に端と中央にそれぞれ一列、上下にそれぞれ一列の釘穴が貫通している。この内二穴には釘が残っている。また側面にも6ヵ所の釘穴が認められる。249は長さ17.1cm、幅3.6cm、厚さ0.8cmの板材である。この製品には側面に6ヵ所の釘穴が認められる。248・249とも釘穴の位置などから箱様の形をした何らかの製品になるのではないかとと思われるが、この2製品はそれぞれの釘穴の位置が一致せず、接合・復元はできない。
- 箱様 　250は長さ29.0cm、横方向は一部欠損、厚さは0.6cmの板材である。表面には10ヵ所の釘穴が確認できる。荷札の可能性を持つ。
- 荷札 　251～262は杖紐の玉で、大きさは径2.4～7.3cmとさまざまである。
- 杖紐の玉 　263～266は曲物の底である。263は径8.8cmで、全体の半分が残っている。264はほぼ方形である。径は8.8cm、厚さは0.5cmである。265は60%程度の残存で、径14.4cm、厚さ0.5cmである。266は40%程度の残存で、復元径は25.2cm、厚さ0.8cmである。
- 曲物の底 　267は杭で、上方は欠損している。現存する長さは31.4cm、径は最大で5.4cmである。
- 棕綱 　268～271は棕綱毛を編ってつくった縄である。
- 綱籃 　第2-43・44図272・273は竹製の綱籃である。綱籃の横方向の竹の幅は1cmで2枚組み合わせている。この横竹に幅0.3cmで揃えた縦竹を編み込んでいる。272は比較に残りがよく、径40cmである。273の残りは良くないが、272よりやや大きく復元径は約50cmである。
- ガラス製品・銅製品（第2-45図）
- ビーズ 　274はガラス製のビーズで、半円形を呈している。色調は水色である。275は錠前の一部である。
- 錠前 　276は銅製品であるが、用途は不明である。277は銅製の薬匙と考える。薬等の分別に使用していたものであろう。
- 薬匙 　石製品（第2-46・47図）
- 石鍋 　278は滑石製の石鍋の口縁部破片である。口縁外面に突帯を削り出している。内外面ともノミ状工具による削り痕が残っている。279は砂岩製の石製品である。用途は不明である。280は輝緑凝灰岩製、別名赤間石の長方硯で、硯頭の部分である。両面ともに使用している。281～283は磁石である。281は天草石製の携帯用と思われる磁石である。282・283とも上下の欠損部以外は全て擦り面として使用している。284・285は茶臼の上臼と下臼で凝灰岩製である。284の上臼の描目は8分画で副



第2-47図 SD066出土遺物実測図27 (1/8)

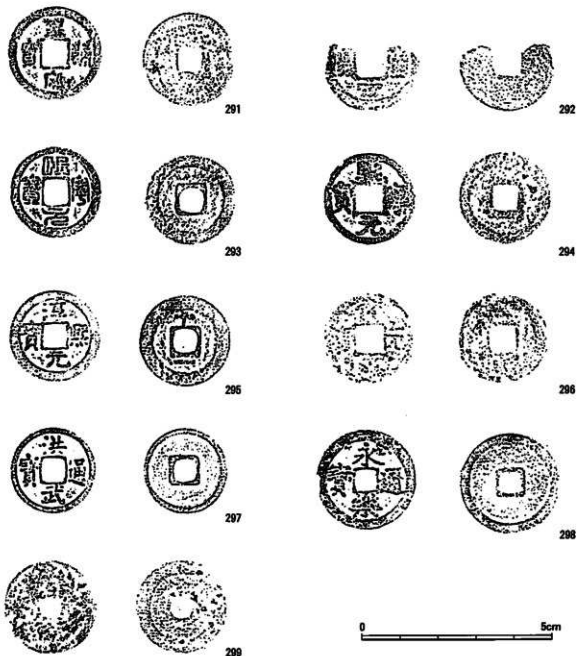
第2節 遺構と遺物

溝は8条である。

五輪塔 第2-47図には五輪塔の部位を提示した。いずれも凝灰岩製である。286・288・289は、空風輪部である。286の風輪には墨書による梵字「カ」が描かれている。287は空輪に墨書が認められるが、判読できない。290は風輪部でやはり墨書が認められるが判読できない。

銭貨 銭貨(第2-48図)

291・292は北宋時代の「皇宋通寶」で、篆書と真書、初鑄年は1038年である。293・294も北宋時代の「熙寧元寶」で、篆書と真書、初鑄年は1068年である。295は南宋時代の「淳熙元寶」で、真書、初鑄年は1174年。296も南宋時代で「咸淳元寶」で真書、初鑄年は1265年。297は明時代の「洪武通寶」で真書、初鑄年は1368年。298も明時代で「永楽通寶」で真書、初鑄年は1408年。299は判読不明である。



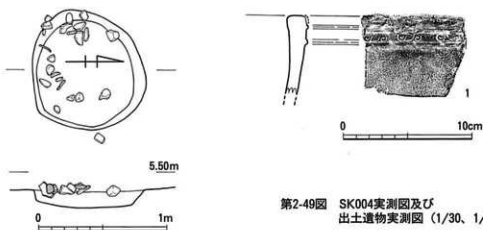
第2-48図 SD066出土遺物実測図28 (1/1)

2. 土坑

第34次調査区では、規模や形状に差はあるが、15基の土坑を検出した。

SK004 (第2-49図)

SK004は、G・H-61区、第2南北街路の上部に位置する遺構である。遺構の形態は径0.9mで、ほぼ円形を呈している。深さは約10～15cmである。埋土は暗赤褐色の砂礫層である。埋土中からは上部で石や土器類が出土している。土器は瓦質の火鉢や焼締め陶器の破片である。第2-49図1は瓦質土器の火鉢口縁部である。口縁下部に二条の突帯を貼り付け、この突帯間に双頭叉手龍雲文のスタンプを施している。遺構の時期は土坑確認面の状況などからみて、16世紀末葉と思われる。



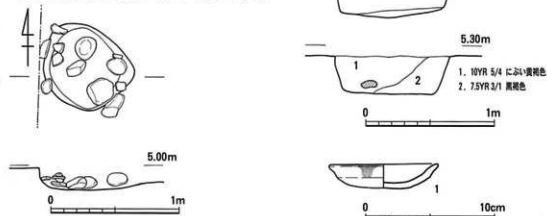
第2-49図 SK004実測図及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)

SK005 (第2-50図)

SK005はG-61区、SK004の西に位置する。SK004と同様に第2南北街路の上部に位置する遺構である。遺構の形態は径0.7mのやや歪な円形を呈している。深さは約10cmで、埋土は暗赤褐色の砂礫層である。遺構内からは径10～20cm前後の礫が出土している。遺物は平瓦の破片四点が出土している。当土坑とSK004は、遺構の形態や規模、埋土の状況などからみて、同時期に構築された遺構と考えられる。構築時期は同様に16世紀末葉と思われる。

SK010 (第2-51図)

SK010は調査区の北側1-59区に位置する。遺



第2-50図 SK005実測図 (1/30)

第2-51図 SK010実測図及び出土遺物実測図 (1/30,1/3)

構の規模は、長径0.9m、短径0.65m、深さは約30cmである。

平面形態は長方形を呈し、主軸方向はほぼ東西を示している。埋土は黄褐色土で炭を含んでいる。土坑内からは、径10~20cmの礫とともに土器・平瓦片数点が出土している。第2-51図1は京都系土師器皿の完形である。口径8.2cm、器高2.0cmで、口縁の内外面ともにススが附着している。灯明皿として機能していたと考える。内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が外反する。塩地編年の2~3期の特徴を示す資料と考えられ、16世紀後半代に比定されよう。他は破片のため図示できなかった。

SK011 (第2-52図)

SK011は調査区の北側

I-59区に位置する。遺

構の規模は、径1.15~

1.35m、深さ約10cmのや

や歪な円形を呈している。

埋土は灰褐色砂泥層の単

一層で、埋土中からは径

10~20cmの礫とともに土

師質土器や瓦質土器の小

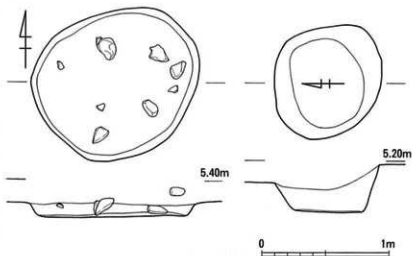
破片が出土しているが、

図示できなかった。遺構

の時期は土坑確認面の状

況などからみて、16世紀

後半頃と思われる。



第2-52図 SK011・013実測図 (1/30)

SK013 (第2-52図)

SK013も調査区の北側

I-58・59区に位置する。遺

構の規模は、径0.8~0.9m、

深さ約20cmの隅丸長方形を

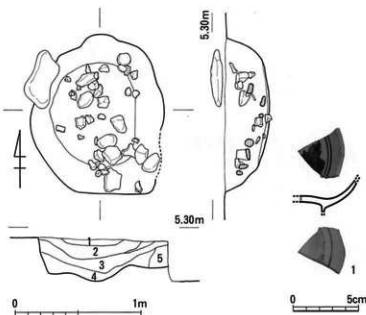
呈している。埋土は褐色泥

土層の単一層で、埋土中か

らは遺物等の出土はなかつ

た。遺構の詳細な時期は不

明である。



SK014 (第2-53図)

SK014はI-59区、SK011

の北側でほぼ並んで検出さ

れた。遺構の規模は、径

1.1~1.2m、深さ約35cmの

やや歪な円形を呈している。

埋土は灰色の砂質土の単一

1. 10YR 5/2 灰黄褐色 スミを含む砂質土
2. 10YR 4/6 褐色 土師片、スミを含む砂質土
3. 10YR 3/1 黒褐色 土師片、スミを含む、粘りのある砂質土
4. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 土師片、スミを含む粘質土
5. 2.5Y 4/2 暗灰黄色 4と同じ 砂のブロックを含む

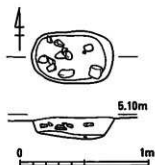
第2-53図 SK014実測図及び出土遺物実測図 (1/30,1/3)

青花碗

層で、埋土中からは径5～20cmの礫とともに、青花碗や土師質土器、瓦などが出土しているが、いずれも小破片である。

萬頭心碗

第2-53図に図示した遺物は中国景徳鎮窯系の青花碗で、小野燾年の碗E群に比定され、いわゆる「萬頭心碗」の系統に属し、16世紀後葉の製品である。見込みには二重の界線と花模様が描かれている。



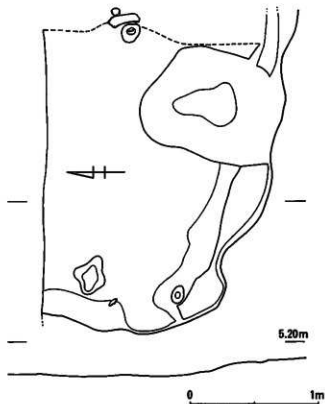
第2-54図 SK015実測図 (1/30)

SK015 (第2-54図)

SK015は調査区の中央東端、I-61区に位置する。遺構の規模は、長径0.62m、短径0.4m、深さ約15cmの隅丸長方形を呈している。主軸方向はほぼ東西を示している。埋土は褐灰色の砂質土層の単層で炭を含んでいる。埋土中からは径5～10cmの礫とともに、青花碗や土師質土器、瓦などが出土しているが、いずれも小破片のため、図示できなかった。

SK017 (第2-56図)

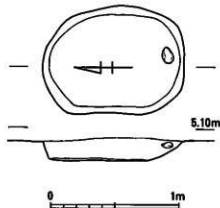
SK017は調査区の中央東端、I-61区北東に位置する。東側は調査区外、北側はトレンチによる削平のため、北東端は確認できない。規模は東西2.5m以上、南北1.8m以上である。深さは約10cmである。遺構内から備前系甕の胴部破片一点が出土したが、遺構の詳細な時期は不明である。



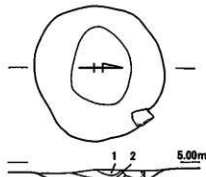
第2-56図 SK017実測図 (1/30)

SK020 (第2-58図)

SK020は調査区の中央東端、I-61区に位置する。SK015の約0.5m西側である。遺構の規模は、長径1.1m、短径0.8m、深さ約20cmの隅丸長方形を呈



第2-58図 SK020・027実測図 (1/30)



1. 10YR 7/2 赤褐色 砂利混じりの砂質土
2. 10YR 5/4 赤褐色 遺物を含まない砂質土
3. 10YR 5/1 赤灰色 砂利混じりの砂質土
4. 7.5YR 4/2 灰褐色 ごく少量の土師質、炭を含む砂質土

している。主軸方向はほぼ南北を示している。土坑内からは径10cm程の石1点が出土している。遺物等の出土もなく、遺構の詳細な時期は不明である。

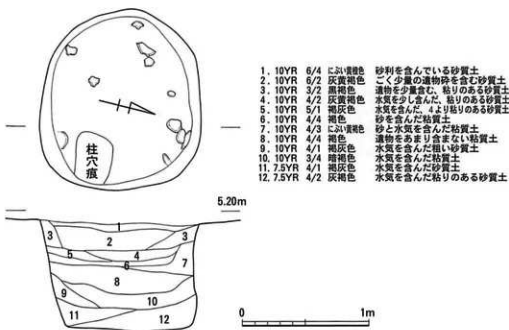
SK027 (第2-56図)

SK027は調査区の南側、H-62区に位置する。SD066の埋没後の遺構である。遺構の規模は、長径1.1m、短径1.0m、深さ約15cmの円形を呈している。土坑内からは平瓦片1点が出土しているが、検出状況の様相から攪乱の可能性もある。遺構の詳細な時期は不明であるが、SD066埋没後、さらには天正14(1586)年12月の島津侵攻後に構築されたものであり、16世紀末葉以降と思われる。

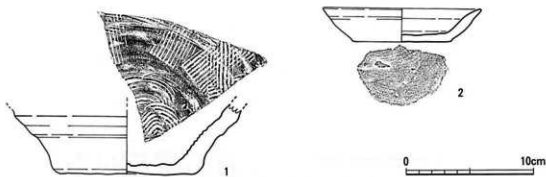
SK030 (第2-57・58図)

掃鉢

SK030はH-60区に位置する。第2南北街路と接して構築されている。規模は、径1.2~1.4m、深さ約85cmの楕円形を呈している。土坑内からは備前陶器2点と土師質土器1点が出土した。第2-58図1は備前系陶器の掃鉢で上部を欠いている。外面には自然釉がかかっている。放射状の掃目に加え、ナナメ掃目が施されており、近世1期に比定される。2は土師質土器皿の破片で、口径12.3cm、底径7.7cm、器高2.6cm。底部は糸切りである。



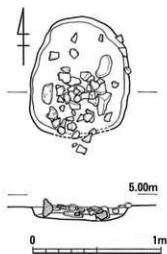
第2-57図 SK030実測図 (1/30)



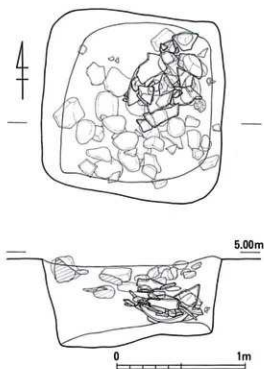
第2-58図 SK030出土遺物実測図 (1/3)

SK036 (第2-59図)

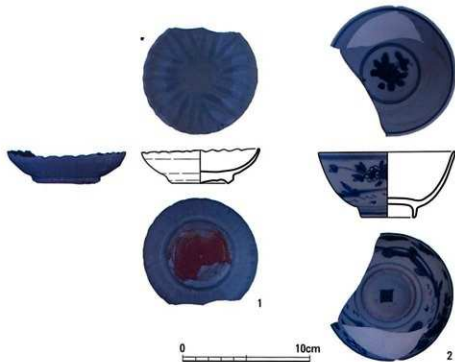
SK036は調査区の中央付近の東側、1-61区に位置する。当土坑の調査後、下から礎石等廃棄土坑が検出されたが、同一遺構かどうかの確認はできなかった。土坑の規模は、長径0.96m、短径0.76m、深さ約10cmで、隅丸方形を呈している。土坑内からは礫とともに多量の平瓦片、焼締め陶器片などが出土しているが、土器等はいずれも小破片や胴部などで図示していない。遺構の詳細な時期は不明であるが、切り合いなどから16世紀末築以降と思われる。



第2-59図 SK036実測図 (1/30)

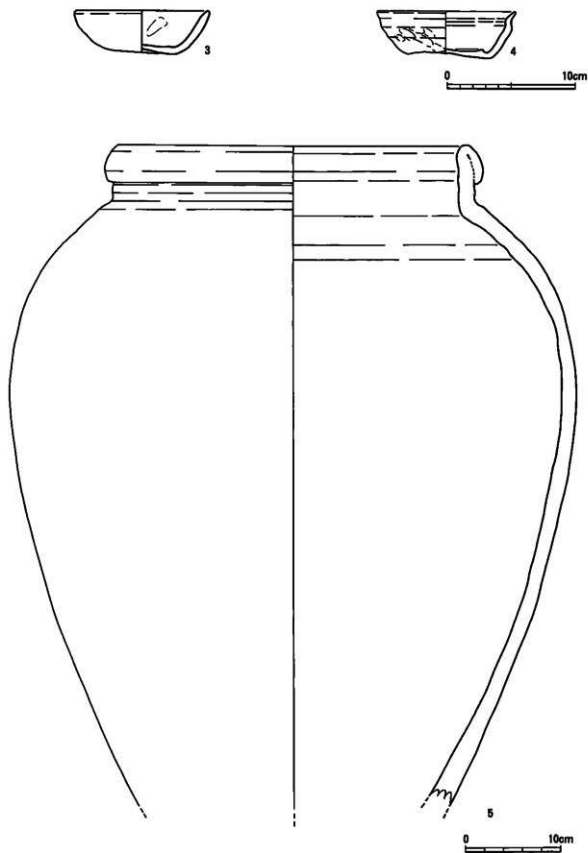


第2-60図 SK045実測図 (1/30)



第2-61図 SK045出土遺物実測図1 (1/3)

第2節 遺構と遺物



第2-62図 SK045出土遺物実測図2 (1/3, 1/4)

SK045 (第2-60~62図)

SK045は調査区の南側、H-63区に位置する。当地区はSD066堀の上に位置する。土坑の規模は、径1.4~1.45m、深さは55~70cmで、方形を呈している。土坑は一度に埋められたような状況を示しており、埋土は暗褐色の泥土層に焼土と炭が混じっている。土坑内からは径20cm前後の多量の石とともに、備前系陶器壺がほぼ1個体分破壊された状況で出土している。また、他にも青磁皿、青花皿、土師質土器等が出土した。この土坑の構築時期であるが、検出状況や出土遺物等からSD066埋没後、さらには天正14(1586)年12月の島津侵攻後に構築されたものであり、16世紀末葉前後と思われる。

輪花皿

第2-61図1は青磁で、中国龍泉窯系の輪花皿である。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形に近い。口径は9.3cm、器高は2.8cmである。15~16世紀代の製品である。2は景德鎮窯系青花の碗である。小野編年の碗E群に比定され、いわゆる「肥頭心碗」の系統に属し、16世紀後葉の製品である。口縁内外面にそれぞれ界線をもち、見込みと胴部外面には花卉様を描いている。また、高台内には「異体字」が描かれている。3・4は京都系土師器の坏で、3は口径10.3cm、器高3.4cm。4は口径10.6cm、器高3.6cmで、内外面ともススが付着している。灯明皿として使用されたと考えられる。5は備前系陶器の壺で、底部を欠いている。口径37.2cmで、胴部最大径は60cmである。

高頭心碗

備前系壺

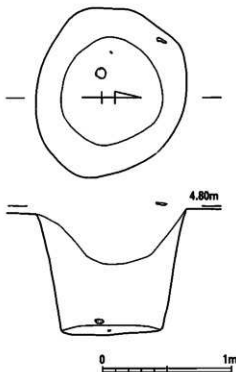
SK049 (第2-63・64図)

SD049は調査区の南東方向1-62区に位置する。SD031の西側部分を切って構築されている。土坑の規模は径1.15~1.3m、深さ約1mで、楕円形を呈している。土坑内からは礎とともに陶器・土師器・鉄器などが出土している。遺構の詳細な時期は不明であるが、16世紀後葉以降と思われる。

第2-64図1は瓦質土器の播鉢の破片である。口径28.6cm(復元)、底径14cm(復元)、器高12.6cmで、内面は斜め方向のハケ調整の後に、4条1単位の縦方向の播目を施している。外面は横方向の斜め方向のハケ調整と指圧痕が明瞭に残っている。

2は土師質土器で、ロクロ成形による小皿である。口縁部を低く形成し、底部の器壁は厚く糸切りである。3は京都系土師器の皿で、口径11.6cm、器高2.6cmで、内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が外反する。塩地編年の2~3期の特徴を示す資料と考えられ、16世紀後半代に比定されよう。4は土師質土器を再加工した製品で周辺部に研磨を加え、円形に加工している。道具として使用された可能性が高いと思われる。径3.5cm、幅0.8cmである。5は釣り針と思われる鉄製品である。長さは2.9cmで、厚さは2mmである。

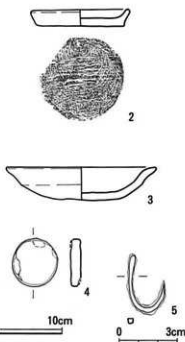
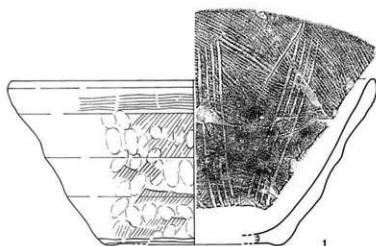
釣り針?



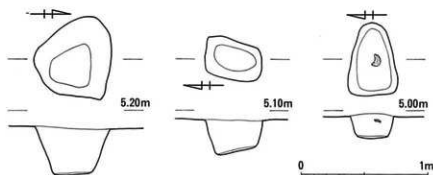
第2-63図 SK049実測図(1/30)

SK050 (第2-65図)

SK050は調査区の南東方向1-62区、SK049の北側約1mに位置する。土坑の規模は、径0.6m、深さ約35cmで、やや歪な円形を呈している。土坑内からは遺物等は確認されなかった。



第2-64図 SK049出土遺物実測図 (1/3, 1/2)



第2-65図 SK050・051・055実測図 (1/30)

SK051 (第2-65図)

SK051は調査区の南東方向 I-62区、SK049の南西約1.5mに位置する。土坑の規模は、長径0.45m、短径0.3m、深さ約25cmで、長方形を呈している。遺物等は出土していない。

SK055 (第2-65・66図)

SK055は調査区の北方向H・I-59区に位置し、SD066堀の埋め立て後に構築された土坑である。規模は、東西0.65m、南北0.2~0.4m、深さ約20cmで、平面形態は変形の長方形を呈している。主軸方位はほぼ東西である。土坑内からは床から約10cmの位置で陶器1点が出土した。第2-66図に提示している製品で、ほぼ完形の瀬戸美濃系の陶器皿である。大窯3期に比定され、時期は16世紀後葉以降である。

瀬戸美濃産

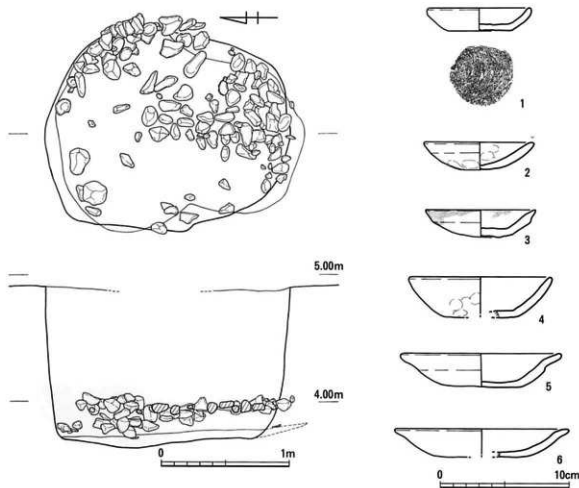


第2-66図 SK055出土遺物実測図 (1/3)

SK056 (第2-67図)

SK056は調査区の西方向H-60区に位置し、第2南北街路を掘り込んで構築している。SD066掘の構築以前の土坑である。規模は、東西1.55m、南北1.9m、深さ1.2mで、平面形態は楕円形を呈している。土坑内は床面直上で、土師質土器や瓦等の遺物が出土している。また床面から約30cm前後浮いた位置(標高4.0m前後)には径10~20cm前後の礫が多量に廃棄されている。土坑は掘られて直ぐに埋められたという状況ではなく、除々に埋没した様相が伺える。土坑の時期は構築状況や出土遺物などから考えて、16世紀後半の早い時期に比定される。

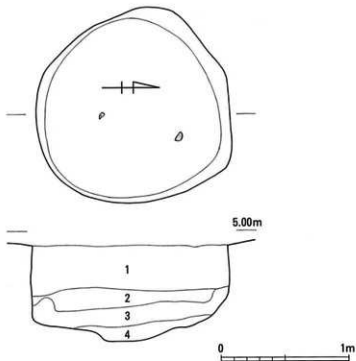
第2-67図に提示している土器が出土遺物で、土師器6点である。これら以外に平瓦片三点が出土している。1は在地系の土師器皿で底部は糸切りである。口径7.6cm、底径5cm、器高1.9cmである。2~6は京都系土師器である。4は坏では皿である。皿の口径は8.2~13.2cm、器高は2.2~2.7cmである。4の京都系土師器の坏は、口径は復元で10.8cm、器高3.2cmである。いずれも内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が外反する。埴地編年の2~3期の特徴を示す資料であり、16世紀後半に比定されよう。2・3の皿は内外面ともススが附着しており、灯明皿として使用していたと思われる。



第2-67図 SK056実測図及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

SK057 (第2-68図)

SK057は調査区の西方向H-61区に位置し、SK056と同様に第2南北街路を掘り込んで構築している。SD066堀の構築以前の土坑である。規模は、径1.5m前後、深さ0.75mで、平面形態は不正円形を呈している。土坑からは青磁や土師器等の遺物が10数点出土しているが、いずれも小破片のため、図示していない。土坑の時期はSK056とほぼ同時期の16世紀後半代の早い時期と思われる。



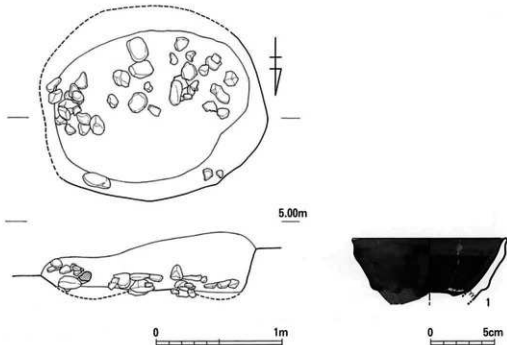
1. 10YR 5/1 褐灰色土 しまり悪く粘性強い、小石・小粒の炭が全身にまばらに混入、褐色の中ブロックも所々見られる。
2. 10YR 4/1 褐灰色土 1よりややしまり良く、粘性も強くなる。混入物の様子は1に類似。
3. 10YR 3/1 黒褐色土 全体にきめの粗い砂が混じる。小石・炭の量は1・2より多い。
4. 10YR 2/1 黒色土 3と類似、下部に向かうほど粘性が強くなる。

SK058 (第2-69図)

SK058は調査区の南西方向I-61区に位置し、SD029Bとほぼ接しているが、SD029Bとともに攪乱を受け、一部消滅している。土坑の規模は、東西1.8m前後、南北1.5m前後、深さ10~45cmで、平面形態は楕円形を呈している。土坑からは陶器や瓦が出土している。第2-69図1は瀬戸美濃系の天目碗で、大窯3期に比定される製品である。時期は16世紀後葉以降であろう。

第2-68図 SK057実測図 (1/30)

天目碗

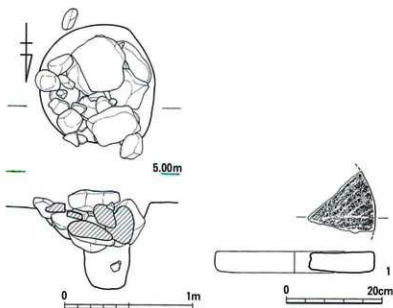


第2-69図 SK058実測図及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

SK061 (第2-70図)

SK061は調査区の中央付近の東側、1-61区に位置する。上部にはSK036が位置しているが、遺構の関係は判断できなかった。規模は、径0.9m、深さ約40cmで、やや歪な円形を呈している。土坑内からは径30~50cm、厚さ10cm前後の礫4~5点と、人頭大の礫10数点が出土している。大型の礫はいずれも表面が平らで、礎石と考えられる。礫とともに石臼と平瓦の破片が出土している。第2-70図1は石臼の破片実測図で、下臼である。復元口径は33.2cm、厚さは4.5cmである。

この土坑の構築時期であるが、検出状況や出土遺物等からSD066埋没後、さらには天正14(1586)年12月の島津侵攻後に構築されたものであり、16世紀末葉前後と思われる。



第2-70図 SK061実測図及び出土遺物実測図 (1/30, 1/8)

SK072 (第2-71・72図)

SK072は調査区の南西方向H-61・62区に位置し、第2南北街路を一部掘り込んで構築している。SD066堀の構築以前の土坑である。規模は、東西1.5m、南北約3m、深さ1.7mで床面はほぼ平坦である。平面形態は楕円形を呈し、埋土は西(第2南北街路側)から堆積している。堆積埋土はいずれも砂や小礫を多く含み、ソフトである。人為的に埋めた埋土ではなく、自然に埋まった様な堆積状況である。土坑内からは床面直上で径20cm前後の礫10点前後、約10~30cm浮いた位置から、青花や土師器等の遺物が出土している。土坑の時期は構築状況などから考えて、16世紀後半代の早い時期に比定される。

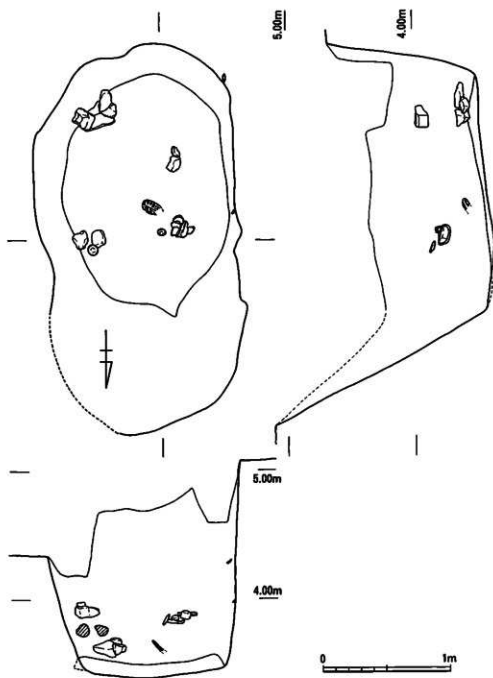
青花皿
草履

第2-72図が出土遺物で、1は中国漳州窯系青花の皿である。口径10.6cm、底径4.4cm、器高2.7cmで約1/2の破片である。口縁部内外面と見込み部分に各一条の界線を施している。2~5は京都系土師器の皿である。口径は2~4が6.3~8.9cm、器高は2.1~2.3cmである。いずれも内外面にススが付着しており、灯明皿として使用していたと思われる。5の京都系土師器皿は、口径は復元で13.1cm、器高2.3cmである。いずれも内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が外反する。塩地編年の2~3期の特徴を示す資料であり、16世紀後半代に比定されよう。6は碁石で蛇紋岩製、色調は黒色である。上面を丸く半円形に加工し、全面研磨している。長さは2.6cm、厚さは0.9cmである。7は土師質土器の火鉢で、底部の破片である。高台の上一条の突帯を貼り付けている。高台もまた貼り付けである。8は凝灰岩製の石製品である。用途は不明である。図示している以外に草鞋と

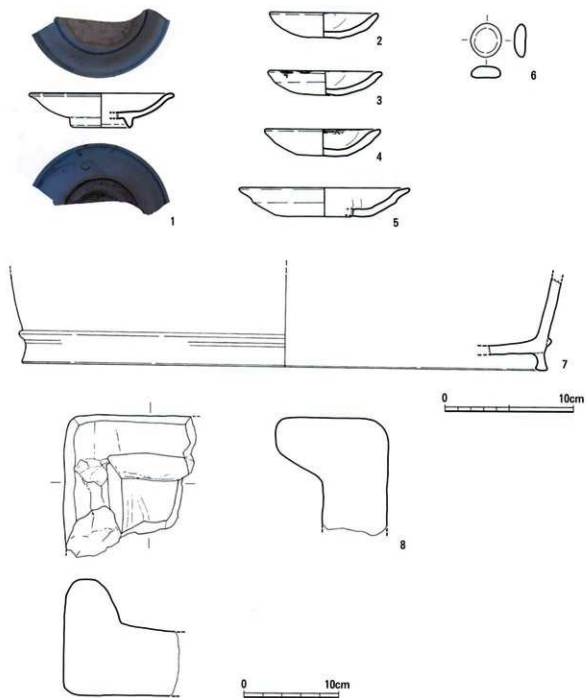
碁石

第2節 遺構と遺物

思われる形状の遺物を確認したが、残りが非常に悪く、図示することができなかった。図示した遺物は土坑の床面直上からの出土ではなく、浮いた状態で出土したことから、流れ込み遺物の可能性を持つ。このため、土坑の構築時期と出土遺物の時期にズレが生じる可能性もある。



第2-71図 SK072実測図 (1/30)

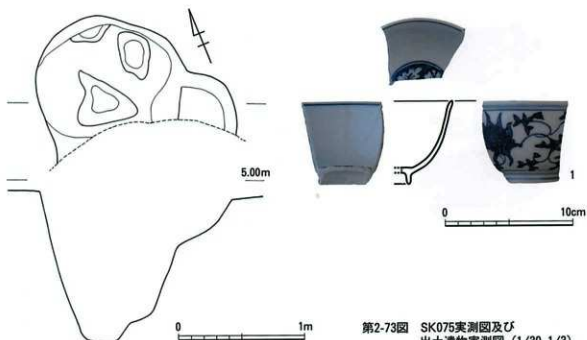


第2-72図 SK072出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

SK075 (第2-73図)

SK075は調査区の南西方向H-60区に位置し、第2南北街路を一部掘り込んで構築している。SD066堀の構築以前の土坑で、SK056に南側部分を切られている。規模は、東西約1.1m、南北は不明、深さ1.1mで床面は除々に狭まり、幅30cm前後である。平面形態は楕円形或いは円形を呈すと思われる。主軸方位はN-23°-Eを示す。土坑内からは床面から約30cm 浮いた位置で中国景徳鎮窯系青花の小環1点が出土している。器高6.5cmで、約1/3の破片である。見込みと胴部外面には花文と見られる文様を描いている。他の遺物の出土はない。遺構の在り方から考えて、当土坑の構築時期はSK075と同様に16世紀後半代の早い時期に比定される。

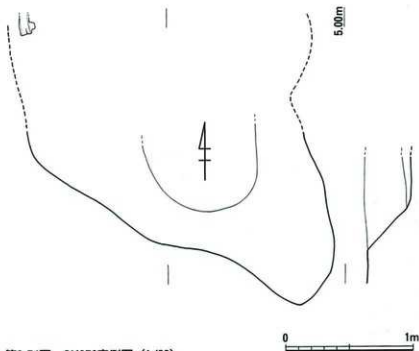
青花小環



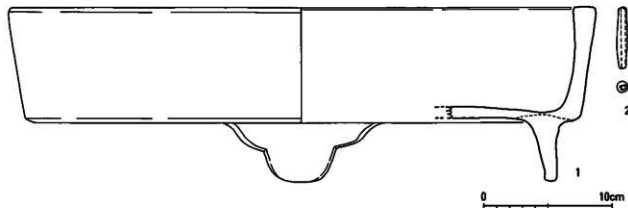
第2-73図 SK075実測図及び
出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

SK076 (第2-74・75図)

SK076は調査区の南端、H・1-63区北東に位置する。北側はトレンチ掘り下げによる削平で、消滅していた。規模は東西約2.2m、深さは約50cmである。平面形態は不明である。埋土に多量の焼土・炭を含んでいる。土坑内から瓦質土器と瓦が出土した。第2-75図1は瓦質土器の火鉢である。口径は復元で46cm、器高は13.4cmである。内外面ともナデ仕上げを行っている。高台は貼り付けで、底部には離れ砂が認められる。2は土錘で、長さ4.8cmである。遺構の詳細な時期は不明であるが、SD066埋没後、さらには天正14(1586)年12月の島津侵攻後に構築されたものであり、16世紀末葉以降と思われる。



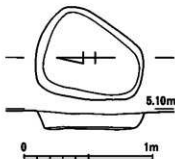
第2-74図 SK076実測図 (1/30)



第2-76図 SK076出土遺物実測図 (1/3)

SK081 (第2-76図)

SK081は調査区の南端、I-63区に位置する。SD066の埋め立て後の遺構である。遺構の規模は長さ0.8m、短径0.6m、深さ約15cmで、やや歪な長方形を呈している。土坑内からの遺物の出土はない。遺構の詳細な時期は不明であるが、SD066埋没後、さらには天正14(1586)年12月の島津侵攻後に構築されたものであり、16世紀末葉以降と思われる。



第2-76図 SK081実測図 (1/30)

3. 道路状遺構

第34次調査区では、街路と考える道路状遺構1条を検出した。この道路状遺構は第2南北街路と考えられるもので、平成14~16年度に府内町跡第11・12・18・22・28次調査で確認された道路の南側部分である。

SF012第2南北街路 (第2-2・77図)

SF012第2南北街路は、調査区の西端G-60・61・62区で検出された(第2-2図)。南北に延びる道路の東側部分で、広いところで幅3m、狭い所で約1m、床面はほぼ平坦で標高は5.3m前後で推移している。西側部分は今回調査対象区外であり、現在は市道となっているため、道路の広がりや西端は確認できなかった。さらにこの市道の下には初瀬井路が走っており、かなりの部分で削平を受けていると予想される。東側部分は、道路上にSK030・SK066やSK057などの土坑が掘り込まれている。また、SD066堀は第2南北街路やSK057土坑などを切り込んで構築されている。これらのことから、当地区にはSD066堀の構築以前から道路状遺構が存在しており、検出時より東にさらに広がっていた事が伺える。

初瀬井路

硬化面

表土・耕作土除去後の検出当初は、第12次調査や第18次調査で確認された第2南北街路の路面とは違い、検出面は全面ガチガチの硬化面であり、新しい時代の遺構と考えていた。また道路側溝や柱列などの施設が確認されなかったこと。さらに当時はSD066堀の存在自体が不明であり、この堀の埋土の堆積状況を、第2南北街路の道路形成埋土と考えていた事もあり、当遺構が街路との認識を持っていなかった。

彫三鳥碗

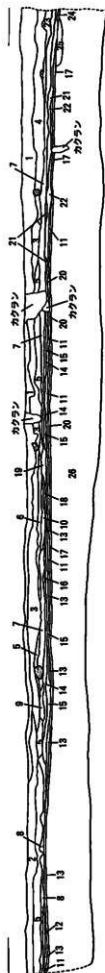
第2南北街路の調査は、調査区内での広がりを確認した後に西壁部分にトレンチを設定し、掘り下げを行った。この土層堆積状況が第2-77図である。耕作土の下には近世の埋土や焼土・炭屑が堆積している。このトレンチ壁面から朝鮮王朝産の「彫三鳥碗」の破片が出土している。道路状遺構

の道路面数は2～5面で、砂質土や粘質土が比較的薄く堆積していて、全体の厚さは10cm前後で推移している。最終面は硬化面で、厚さ3cm前後である。全体的には1層或いは2層が互層となっているが、一部硬化面間に砂層などが間層となっている地点などがみられる。

硬化面の色調は暗褐色～黒褐色で非常に硬く、径0.5～1cm前後の小礫を含んでいる。土器などは含んでいない。

道路状遺構の下層は、粘質でよくしまった褐色の泥土が堆積しており、地山と思われる。遺物等の出土はないが、柱穴等の遺構が確認できる。

第2南北街路の時期であるが、街路自体は16世紀前半頃から存在し、除々に幅等は縮小し、SK057等の土坑が道路上に構築されていく。16世紀後半頃になると万寿寺の西にSD066堀が掘られ、街路の一部が堀となり、道路幅は縮小される。この堀もすぐに埋め戻され、第2南北街路として整備されていくと考える。その後、天正(1586)年12月の島津侵攻に遭い、焦土化するが再び整備され、他地点の状況と同じように、近世初期まで機能していたのではないかと考える。



1	10YR3/4	暗褐色泥土	やや硬い、砂混じり
2	7.5YR2/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
3	5YR2/4	暗褐色泥土	硬い、砂質
4	5YR2/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
5	7.5YR3/4	暗褐色泥土	硬い、砂質
6	7.5YR3/4	暗褐色泥土	硬い、砂質
7	7.5YR3/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
8	5Y4/1	暗褐色泥土	硬い、砂質
9	7.5YR4/8	暗褐色泥土	硬い、砂質
10	7.5YR3/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
11	7.5YR3/4	暗褐色泥土	硬い、砂質
12	10R2/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
13	7.5YR4/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
14	10YR2/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
15	10YR4/1	暗褐色泥土	硬い、砂質
16	10YR2/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
17	10YR3/4	暗褐色泥土	硬い、砂質
18	7.5YR3/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
19	7.5YR3/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
20	10YR3/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
21	10YR4/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
22	5YR4/6	暗褐色泥土	硬い、砂質
23	10YR4/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
24	10YR3/3	暗褐色泥土	硬い、砂質
25	10YR2/2	暗褐色泥土	硬い、砂質
26	7.5YR3/4	暗褐色泥土	硬い、砂質

第2-77図 SF012第2南北街路土層実測図(1/40)

4. 礎石建物跡

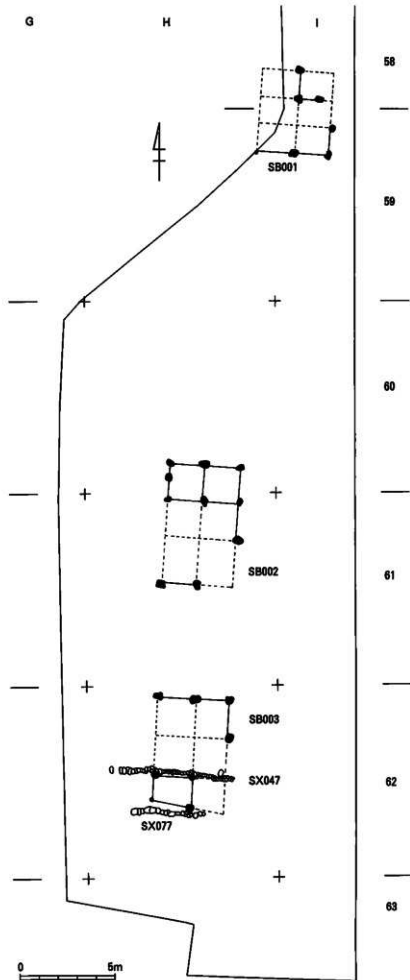
当調査区では、礎石建物跡3棟 (SB001～003) が、いずれも焼土層に覆われた状態で検出されている。

3棟ともSD066編の内部にかかっており、埋め戻し後の構築である。礎石部は一部消滅しているものの、2間×3間の建物跡が復元できる。また、焼土層は堀を中心に厚く堆積しており、かなり大規模な火災が起こったことが推測でき、建物跡はこの大火災により焼失したとみられる。この礎石建物跡周辺には、集石遺構や遺物が集中して出土しており、建物に関連する施設と思われる。

SB001 (第2-79図)

SB001は、調査区の北端H・I-58・59区に位置する建物跡であるが、西側の桁行き部分は調査区外のため、確認できていない。また、礎石の不明な位置もある。このSB001は主軸をN・4°・Eにとる建物跡で、桁行3間、梁行2間と考える。桁行行きが1.45m、梁間は、1.85mと2.0mである。標高は礎石検出面で5.2～5.3mである。礎石は幅30～40cm前後、

大火災



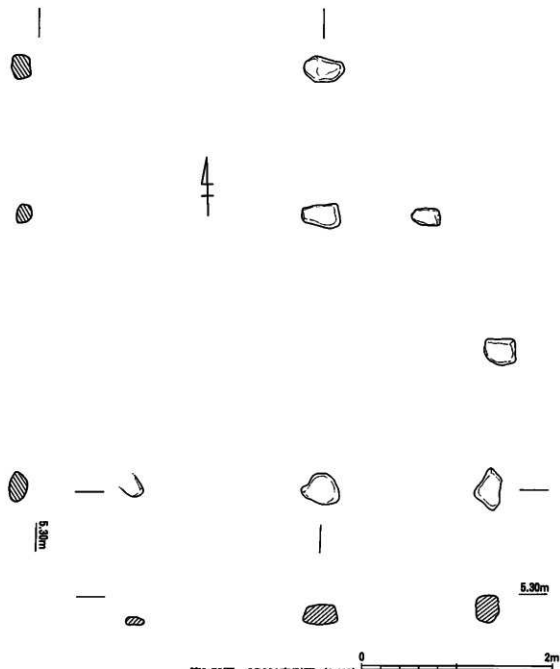
第2-78図 礎石建物跡配置図 (1/200)

第2節 遺構と遺物

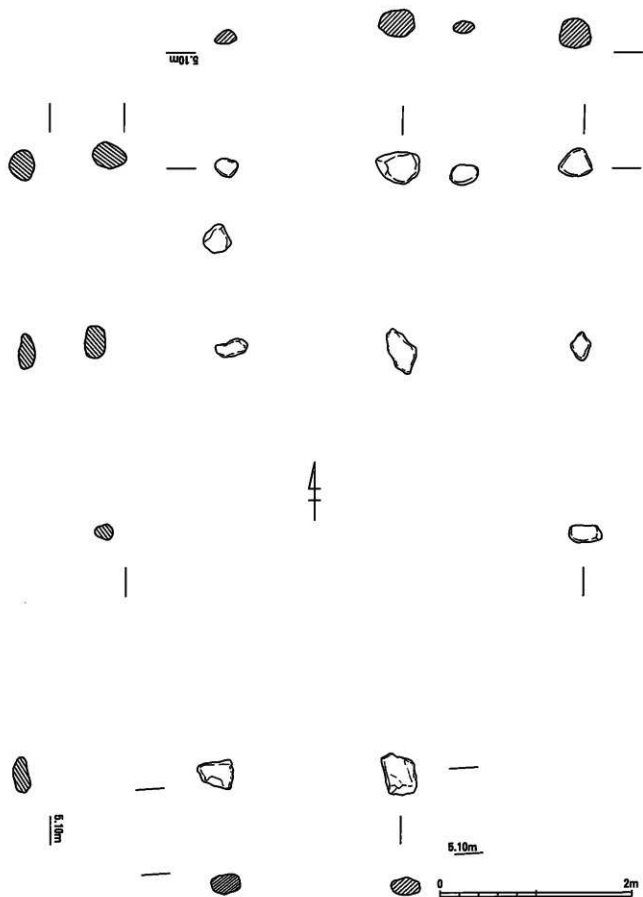
厚さ15~20cmの表面が平らの石を使用している。礎石の掘り込みは検出できなかった。

SB002 (第2-80図)

SB002は調査区の中央H-60・61区に位置する建物跡で、一部礎石の確認できない箇所がある。SD066堀内に堆積している焼土層を掘り下げ中に検出された礎石群である。主軸方位はN・4°・Eを示し、SB001と同方向を向く建物跡である。確認できた桁行は3間、梁行は2間である。桁間は北側1間が1.9m、南2間が2.2m、梁間は、1.85~1.9mである。標高は礎石検出面で4.9~5.0mである。礎石は幅30~40cm前後、厚さ15~30cmの石を使用している。礎石の掘り込みは検出できなかった。



第2-79図 SB001実測図 (1/40)

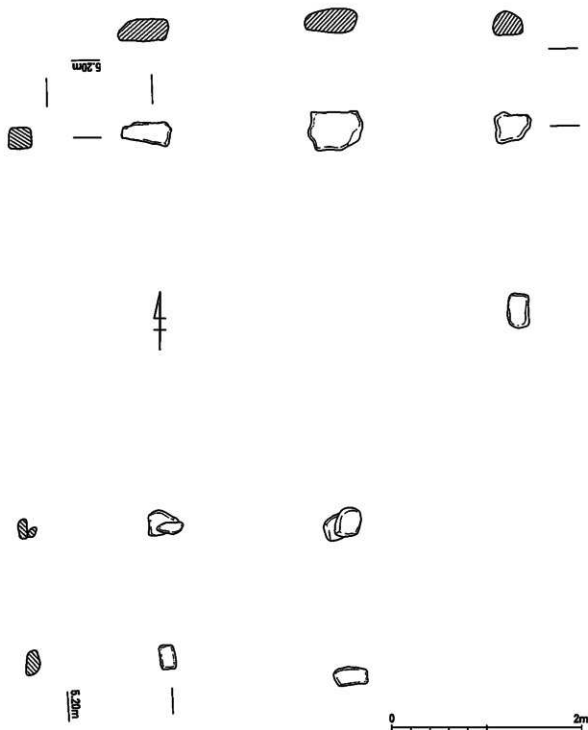


第2-80図 SB002実測図 (1/40)

第2節 遺構と遺物

建物は、第2南北街路とほぼ平行に建てられており、建物の西端から道路までは約2.5mで、直接道路と建物跡は接していない。

また、当建物の南東方向約4mに礎石等の廃棄土坑（SK061）が確認されている。土坑の内部からは礎石と思われる石が出土している。この土坑は当建物跡が消失した後の整地目的で掘られた土坑で、不要になった当建物跡の礎石を廃棄した土坑であろう。



第2-81図 SB003実測図 (1/40)

SB003 (第2-81図)

SB003は調査区の南側H-62区に位置する建物跡で、他の建物跡と同様に一部礎石の確認できない箇所がある。主軸方位は他の2棟の建物と同じで、N-4°-Eを示す。確認できた桁行は3間で、桁間は南側1間が1.6m、北2間が1.9~2.0mである。南側の桁間が他の桁間より狭く、この部分は庇の可能性もある。梁行は2間で、梁間は、1.9m前後である。標高は礎石検出面で4.9~5.0mである。礎石は幅30~60cm前後、厚さ15~30cmで、一部比較的大きな石を使用している。礎石の掘り込みは検出できなかった。

この建物もSB002と同様に、SF012第2南北街路とほぼ平行に建てられており、建物の西端から道路までは約2.5mで、直接道路と建物跡は接していない。

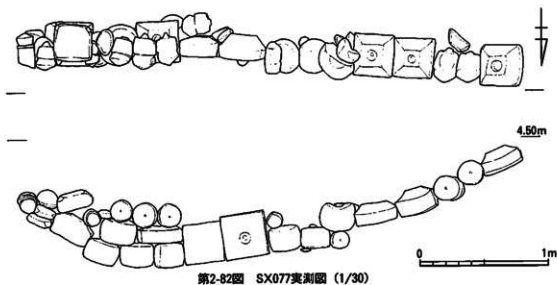
5. 石列

当調査区では5基の石列を検出している。このうちの2基(SX077・047)は、SD066堀の区画を形成するものとして、堀を全面的に埋め戻す以前に構築された施設である。他の3基は堀の埋め戻し後に構築された施設である。

SX077 (第2-78・82~84図)

SX077は調査区の南側H-62区に位置する石列である。万寿寺西の堀の一部を埋め立てて敷地を確保している施設の一部である。主軸方位はほぼ東西を示し、標高は上面で4.5m、最下面で3.5mである。石列の石材には五輪塔の部材を用い、一部隙間の補填に径10cm前後の小礫を利用している。部材は空風・火・水輪を利用している。石列は五輪塔部材を、堀の斜面に沿って粘質の泥炭層の上に弓状に湾曲しながら隙間なく並べ、表面は北側に向いている。構築時の北側の端であろう。この時にはまだ万寿寺の堀全面の埋め立ては行われていなかったと考える。また、次年度に行われた第43次調査では(本報告書 第3章参照)SX077よりさらに南側で、外面を北側にした石列が検出さ

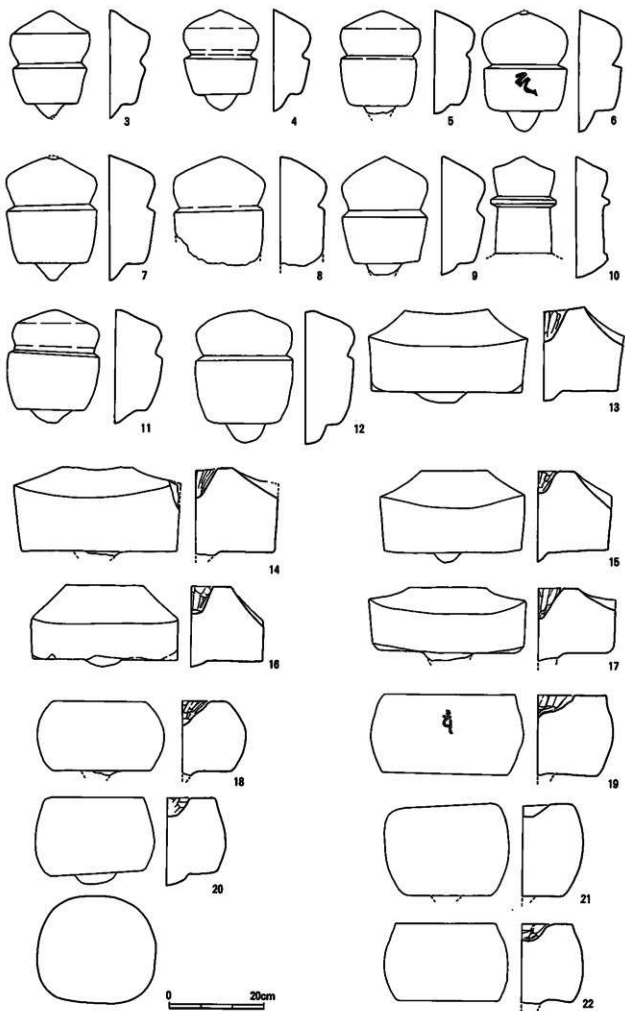
五輪塔部材



第2-82図 SX077実測図 (1/30)



第2-83図 SX077出土遺物実測図 1 (1/3)



第2-84图 SX077出土文物实例图2 (1/8)

第1次拡張区 られている。SX077は、最初に埋め立てられた敷地の第1次拡張区の北端であろう。

第2-83・84図に提示している遺物が出土遺物である。1・2は京都系土師器の皿で、1は口径8.6cm、器高2.0cm、2は口径11.8cm、器高2.2cmで内外面ともススが付着している。灯明皿として使用されていた製品であろう。2点ともほぼ完存している。内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が外反する。塩地編年の2～3期の特徴を示す資料であり、16世紀後半代に比定されよう。第2-84図は石列を構成していた五輪塔の部位である。3～9・11・12はいずれも凝灰岩製の空風輪部である。3・4の風輪部には墨書銘が見られるが判読できない。5の空輪部にも墨書銘があるが判読できない。6は風輪の四方に墨書による梵字「カ」が描かれている。9・11の空風輪部両方に墨書銘が見られるが判読できない。10は宝徳印塔の相輪部で、凝灰岩製である。13～17は五輪塔の火輪部である。いずれも墨書銘は見当たらない。18～22は五輪塔の水輪部である。19には梵字「バン」が陰刻されている。20は水輪の四方に墨書銘が描かれているが判読できない。21にも墨書名が見られるが判読できない。

SX047 (第2-78・85図)

泥炭層

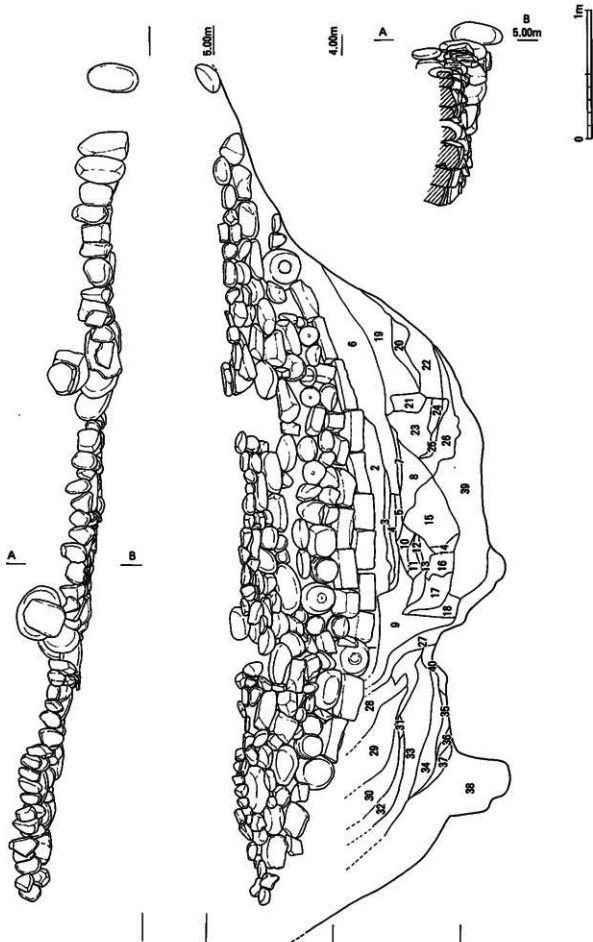
五輪塔

SX047は調査区の南側H-62区、SX077から北へ約2mに位置する石列である。SX077と同様に万寿寺西の堀の一部を埋め立てて敷地を確保している北境の施設の一部である。主軸はほぼ東西方向を示し、標高は上面で5.0m、最下面で3.7mである。石列は堀の西側掘方から斜面に沿って粘質の泥炭層の上に弓状に湾曲しながら隙間なく並べ、面は北側に向けている。石列の石材には下の三段前後に五輪塔を用いている。部位は、水・地輪部を中心に使用している。その上に径40～60cm前後の大型の石と、径20～30cmの小型の石を組み合わせる石列を構築している。石列は丁寧に組み立てられており、北側の表面はほぼ揃っている。

SX047はSX077より北側に位置し、外面を北側にしているため、SX077構築後にさらに拡張した北側の端にあたり、埋め立て地の第2次拡張区の北端である。この時にはまだSD066堀の全体の埋め戻しは行われていなかったと考える。



SX047全景 (北から)



第2-85图 SX047实测图 (1/30)

第2-2表 SX047土層一覧

1	2.5Y3/1	暗灰色粘質	ソフト	粘土類	多量
2	5Y2/2	オリーブ褐色粘土	ソフト	粘土類	遺物含
3	2.5Y4/2	暗灰色粘砂	ソフト	粘土類	
4	10YR2/3	黒褐色粘質	ソフト	粘土類	
5	10YR2/2	黒褐色粘質	ソフト	粘土類	
6	10YR5/2	灰黄褐色粘質	ソフト	粘土類	
7	10YR6/2	灰黄褐色粘質	ソフト	粘土類	
8	2.5Y2/2	オリーブ褐色粘質	ソフト	粘土類	
9	2.5Y2/2	オリーブ褐色粘質	粘土	遺物含	
10	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質	ソフト	粘土類	
11	10YR4/1	黄褐色粘質	ソフト	粘土類	
12	10YR2/2	黒褐色粘質	粘質	礫含	
13	10YR4/1	黄褐色粘質	ソフト	粘土類	
14	10YR5/1	灰褐色粘土	ソフト	粘質	粘土類
15	7.5Y6/2	灰褐色粘砂	ソフト	粘質	粘土類
16	10YR4/2	灰黄褐色粘質	ソフト	粘土類	
17	2.5YR4/2	灰赤色粘質	ソフト	粘土類	
18	2.5YR7/2	暗灰色粘質	ソフト	粘土類	
19	7.5YR6/2	灰褐色粘土	ソフト	粘質	
20	7.5YR6/3	にぶい褐色粘土	ソフト	粘質	

21	2.5Y6/1	黄灰色粘質	ソフト	粘土類	多量
22	2.5Y6/4	にぶい黄褐色粘質	ソフト	粘土類	多量
23	2.5Y6/1	黄灰色粘質	ソフト	粘土類	多量
24	10YR7/4	にぶい黄褐色粘質	ソフト	粘土類	多量
25	10Y7/2	灰白色粘質	ソフト	粘土類	多量
26	10YR5/1	黄褐色粘土	ソフト	粘土類	
27	7.5Y2/2	オリーブ褐色粘土	小礫多量	含	
28	10YR2/3	黒褐色粘土	小礫多量	含	
29	2.5Y5/1	黄灰色粘	灰い	小礫・粘砂	
30	2.5Y3/1	黄褐色粘質	ソフト	粘質	粘土類
31	2.5Y3/1	黄褐色粘質	粘質	粘土類	
32	10YR2/2	黒褐色粘土	ソフト	小礫	多量
33	2.5Y3/1	黄褐色粘土	ソフト	小礫	多量
34	10YR3/3	暗褐色粘土	ソフト	粘土類	
35	10YR3/3	暗褐色粘土	粘質	粘土類	
36	2.5Y3/1	黄褐色粘土	粘質	粘土類	
37	2.5Y3/1	黄褐色粘土	ソフト	粘土類	
38	10YR3/1	暗褐色粘土	粘質	多量	多量
39	10YR6/4	にぶい黄褐色粘土	粘質	小礫多量	含
40	埋山				

SX084 (第2-86図)

SX084は調査区の南側H-62区、SX077から北へ約3m付近に位置する石列である。SX077・047の石列とは違い、万寿寺西側の堀が埋まる途中の施設である。

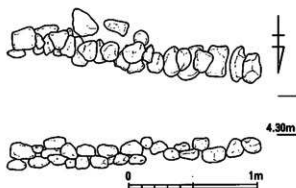
石列は堀の中央に位置し、主軸方位は他の石列と同様にほぼ東西を示す。標高は約4.3mで、径20cm前後、厚さ10cm前後の石を上下2段に重ねて並べている。

SX074 (第2-87・88図)

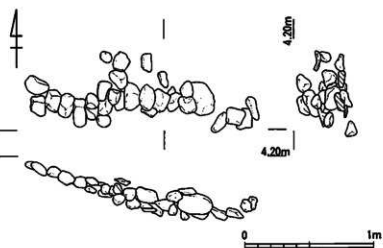
SX074は調査区の南側H-61区、SX084から北へ約2m付近に位置する石列である。やはりSX077・047とは違い、区画的な埋め立て用地を確保するための土留め用の石列ではないと考ええる。ただ、何らかの区画割り用の石列の可能性を持つものであろう。

区画割り

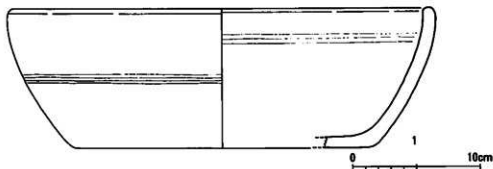
石列はSD066堀の斜面に沿って、西から東方向へ湾曲しながら堀の床面方向へと堆積している。標高は西側が4.3m、東端が3.9mで、泥炭層の上に構築されている。石は、径30cm前後の大型石1点と、10~20cm前後の石を利用している。遺物は石列の中央付近で瓦質土器の鉢の破片が出土した。復元口径は33.8cmで、内外面とも工具による丁寧な横ナデで仕上げられている。底部には離れ砂が見られる。



第2-86図 SX084実測図 (1/30)



第2-87図 SX074実測図 (1/30)



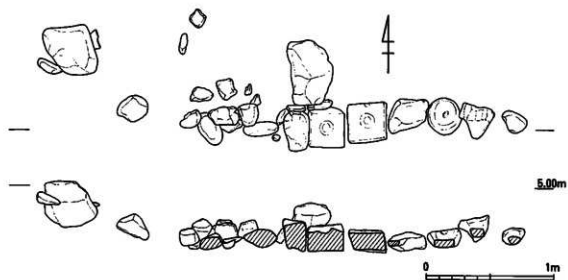
第2-88図 SX074出土遺物実測図 (1/3)

SX063 (第2-89・90図)

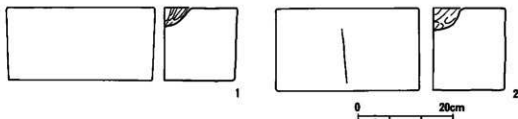
SX063は調査区の中央H-61区、SX074から北へ約4m付近に位置する石列である。区画的な埋め立て用地を確保するための土留め用の石列ではなく、何らかの区画割り用の石列であろう。

石列はSD066堀の中央付近の標高4.5mの位置に、径15~40cm前後の石とともに、五輪塔の水輪・地輪を使用して石列を構築している。万寿寺堀の埋め立て後の構築であり、敷地の区画と思われる。

第2-90図は石列を構築していた凝灰岩製の五輪塔地輪部である。



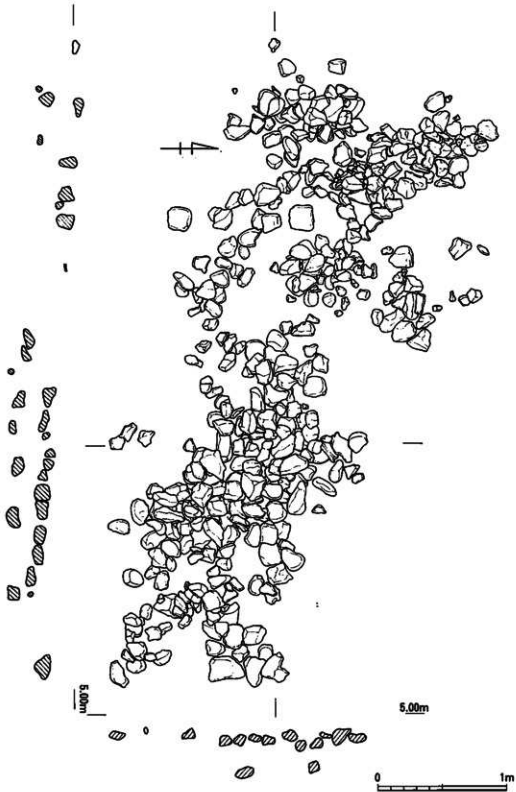
第2-89図 SX063実測図 (1/30)



第2-90図 SX063出土遺物実測図 (1/8)

6. 集石遺構

当調査区では大小9基の集石遺構を検出している。このうちの大型の集石は、SD066堀を埋め戻す際に投げ入れた集石遺構であろう。

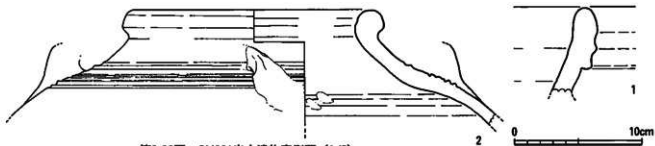


第2-91図 SX021実測図 (1/30)

SX021 (第2-91・92図)

SX021は調査区の中央からやや南側、H-61区に位置する。万寿寺西側の堀の中央で東西5m、南北1.5mの範囲で礎群が確認された。掘り方ラインは確認できなかった。集石上部の標高は4.8mで、第2南北街路から堀に向かって投げ入れた状態を示している。礎群は10~30cm前後の礎で構成されている。万寿寺西側の堀の埋め立ての時に投げ入れた石、或いはその後の建物構築時における基礎部分に敷き込まれた集石であろう。礎群中には被熱した石も見受けられるが、この集石は、焼土層除去中に確認された遺構であり、天正(1586)年12月の島津侵攻後の構築物ではないであろう。遺物は礎群中から陶磁器や土師質土器、瓦類が出土したがいずれも小破片である。第2-92図は図示できた出土遺物である。1はタイ産の焼締め陶器で、メナムノイ窯で生産された四耳壺と思われる壺の口縁部破片である。外面の頸部から胴部にかけて黄白色の白泥を施している。胴部には多条沈線が施されている。把手は1個が残存している。2は備前系陶器壺の口縁部破片である。

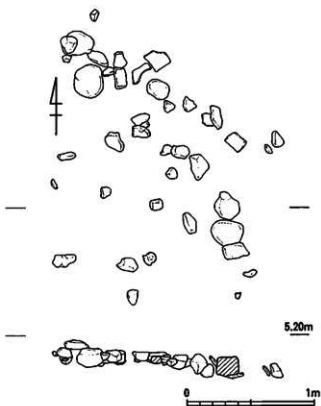
タイ産



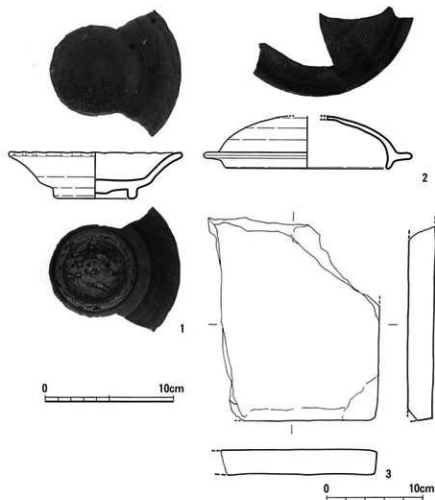
第2-92図 SX021出土遺物実測図 (1/3)

SX022 (第2-93・94図)

SX022は調査区の南西方向、H-62区に位置する。万寿寺西側の堀の西端に当たり、東西2m、南北1.5mの範囲に礎がほぼ散発的に確認された。掘り方ラインは確認できなかった。集石上部の標高は5mで、東に向かって低くなり、第2南北街路から堀に向かって投げ入れた状態を示している。礎群は10~30cm前後の礎で構成されている。万寿寺西側の堀の埋め立ての時に投げ入れた石であろう。遺物は礎群中から陶磁器や土師質土器、瓦類が出土したが、ほとんどが小破片である。第2-94図は図示できた出土遺物である。1は中国製の青磁椀花皿である。復元口径は13.6cm、器高3.6cmで15世紀代の製品である。2は中国製の焼締め陶器蓋である。口径12.9cm、器高3.6cmで16世紀代の製品である。3は埴で両側面とも欠損している。



第2-93図 SX022実測図 (1/30)



第2-94図 SX022出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

SX023 (第2-95~99図)

SX023は調査区の南側、H-62区に位置する。焼土層除去後に確認された遺構である。万寿寺西側の堀の中央部分、SX022の東1mに当たる。東西1.5m、南北2mの範囲に礎や埴が集中して確認された。掘り方ラインは確認できなかった。集石上部の標高は5m、床面は4.8mで平坦である。南側部分の一面に礎の上面に埴を敷き詰めた様相がみられ、上面に灰層が堆積している。当遺構とSB003礎石建物跡が重なることから建物跡に付随する何らかの施設であろう。礎群は10~30cm前後の礎で構成されており、礎の重なりはさほど見られない。

当遺構中からは陶磁器や土師質土器、瓦類など多くの遺物が出土した。第2-96~99図が図示した出土遺物である。1~3は景徳鎮窯系青花である。1は碗で小野編年の碗E群に比定される製品で、いわゆる「艘頭心碗」の系統に属し、16世紀後葉の製品である。胴部外面と見込みに花卉文と思われる文様を描いている。高台内には「異体字」の字款がみられる。2は小野編年の皿B1群に比定され、口縁が外反している。胴部外面には牡丹唐草文、見込みには玉取獅子を描いている。3は碗の口縁部破片で、碗E群に比定される。胴部外面に花卉文と思われる文様を描いている。4は京都系土師器の皿で、口径8.7cm、器高2.1cmでほぼ完存している。内外面ともナデ仕上げが施されており、口縁部が外反する。塩地編年の2~3期の特徴を示す資料と思われる、16世紀後半代に比定されよう。口縁部の内外面にはススの付着が認められ、灯明皿として使用されたものと思われる。

5は瓦質土器の鉢である。内外面とも横ナデを施し、底部は糸切りである。6は土師質土器の香

異体字

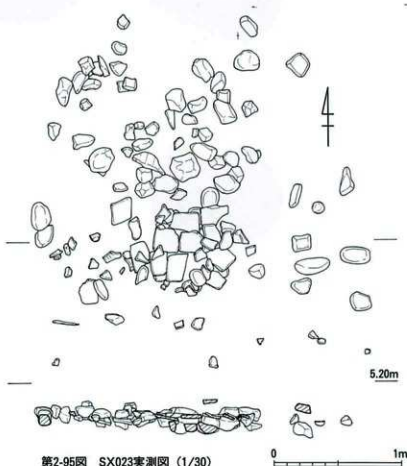
灯明皿

第2節 遺構と遺物

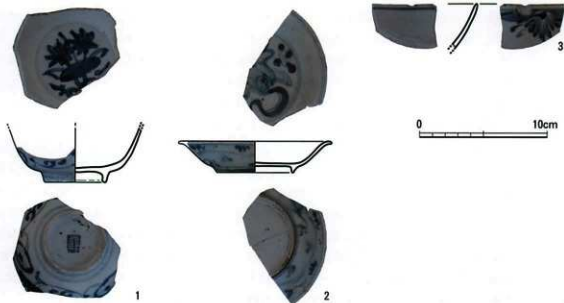
火消し壺

炉である。口縁部外面にはスタンプによる雷文の刻印を施している。復元口径は11.8cmである。7は瓦質土器の火消し壺で、口径は25.2cm、器高は25.9cmである。胴部外面はヘラによるナデを施し、内面は回転横ナデが確認できる。底部はヘラ切りである。8は土師質土器の火鉢である。口径は34.1cm、器高29.5cmで、口縁部外面には2個一単体の双頭巖手龍雲文のスタンプを等間隔に施している。9は丸瓦の破片で、幅14.2cm、厚さ3cmである。外面はナデ仕上げにより、平滑である。内面は布目圧痕が残る。10・11は埴である。10は長さ22.1cm、厚さ3cmである。11は厚さ2.4cmで側面が湾曲することから埴ではない可能性がある。12は銭貨で一部欠損しているが、北宋時代の「熙寧元寶」で、真書、初鑄年は1068年である。

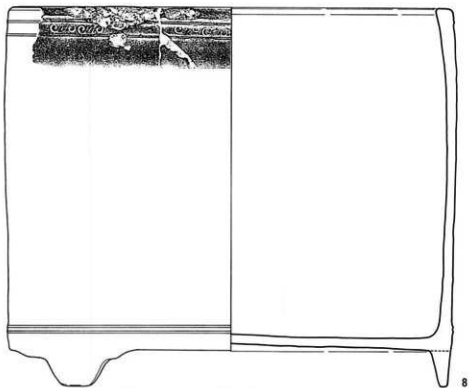
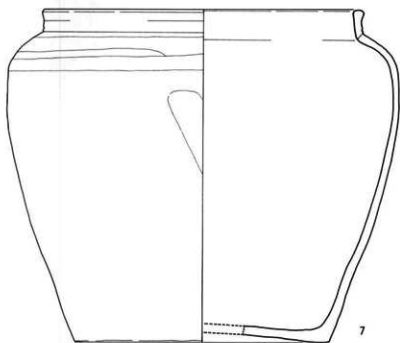
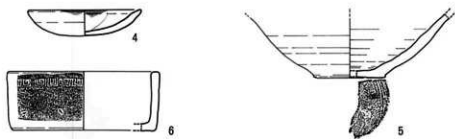
銭貨



第2-95図 SX023実測図 (1/30)

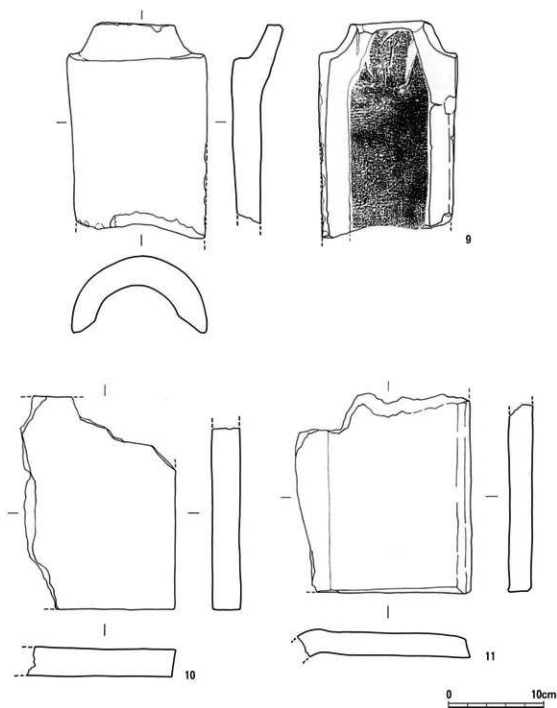


第2-96図 SX023出土遺物実測図1 (1/3)

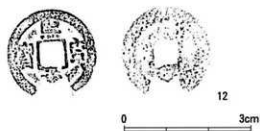


第2-97図 SX023出土遺物実測図2 (1/3)

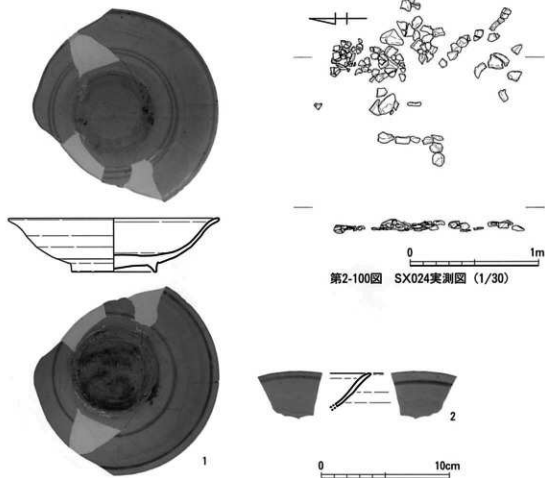
0 10cm



第2-98図 SX023出土遺物実測図3 (1/4)



第2-99図 SX023出土遺物実測図4 (1/1)



第2-100図 SX024実測図 (1/30)

第2-101図 SX024出土遺物実測図1 (1/3)

SX024 (第2-100~102図)

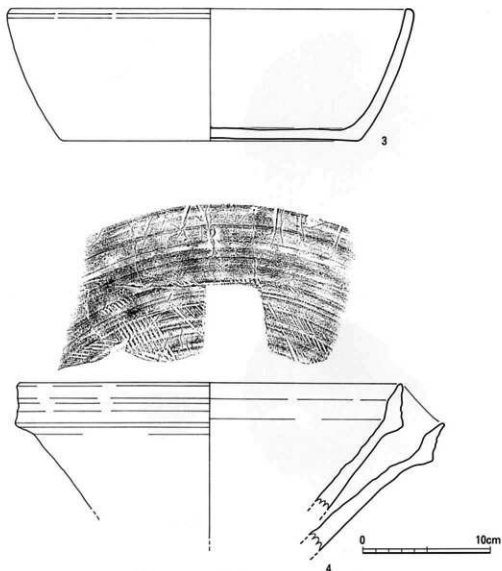
SX024は調査区の南側、H-62区に位置する。焼土層除去後に確認された遺構である。万寿寺西側の堀の中央部分、SX023の北1mである。東西1.3m、南北1.5mの範囲に礫や土器が集中して確認された。掘り方ラインは確認できず、標高4.9~5.0mの範囲に平面的な広がりを持っている。

土器は遺構内で、それぞれ1個体分がほぼまとまった状態で出土している。10~30cm前後の礫で構成されており、西側部分には礫を意図的に並べた様相が伺える。

当遺構はSX023と同様に、SB003礎石建物跡の南側に当たることから、建物跡に付随する何らかの施設であろう。

出土遺物は陶磁器や土師質土器、瓦類など多くの遺物が小破片で出土した。第2-101・102図が出土した遺物である。1・2は中国産漳州窯系青花の皿である。1は北側部分からほぼ1個体分が小破片となって出土した。2は中央付近からの出土であるが、色調等が1と類似しており、同一個体の可能性を持つ。1は口径16.6cm、器高4.2cmで大型である。口縁部の内外面に1条の界線を持つ。見込みは2条の界線を持ち、蛇の目割ぎである。高台は無軸である。3は土師質土器の鉢で、口径31.4cm、器高10.2cmである。内外面ともナデを施している。4は備前系陶器の播鉢である。10条の放射状の播目に加え、ナナメ播目が施されており、近世1期に比定される。

播鉢



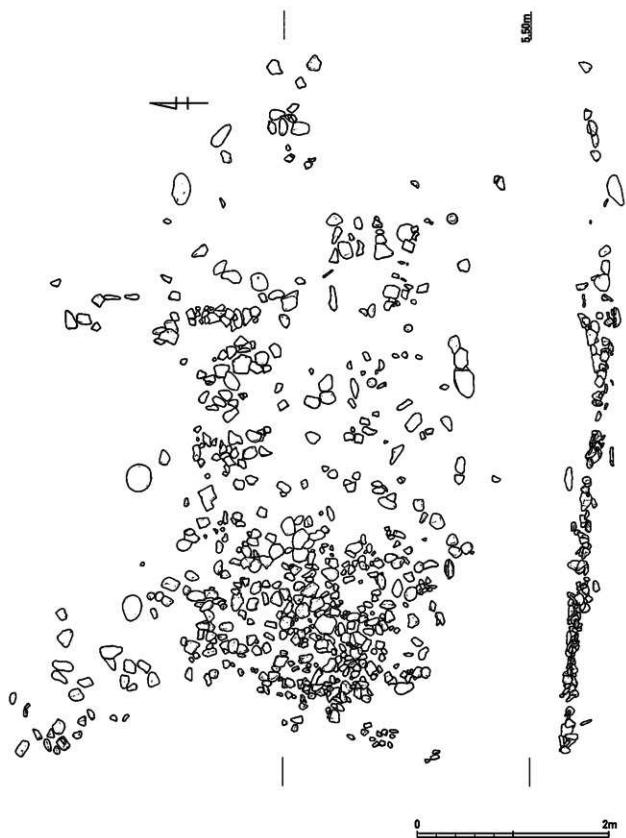
第2-102図 SX024出土遺物実測図2 (1/3)

SX028 (第2-103～108図)

SX028は調査区の中央からやや北側、H-60区の万寿寺西側の堀の中央部分に位置する。焼土層除去後に確認された遺構である。SB002礎石建物跡の北1mに当たる。東西7m、南北4.5mの範囲に礫や埴が集中して検出された。明確な掘り方ラインは確認できなかった。集石部分の床面標高は西が5.0m、東は4.8mで、除々に堀の中央に向かって下がり、第2南北街路方面から堀に向かって投げ入れた状態を示し、上面は5.2m前後ではほぼ平面的な広がりを持っている。堀の埋め立ての時に投げ入れた礫、或いはSB002礎石建物に付随する何らかの施設であろう。当集石の構築時期であるが、上限は万寿寺西側の堀の埋め立て後、或いは埋め立て時の構築であり、下限は焼土層除去中に確認されたことから、天正(1586)年12月の島津侵攻以前の構築物であろう。当集石からは多量の遺物が出土しており、陶磁器や土師質土器、石製品と多岐にわたる。

暗花文

第2-104～108図に復元可能な遺物を図示している。第2-104図は青・白磁と青花である。1は中国産の龍泉窯系の碗である。内面に暗花文が見られる。15世紀代の製品である。2も中国産の龍泉窯系の水差しで径5.2cmの高台を持ち、外面に暗花文が見られる。注ぎ口部分は欠損している。3は中国景德鎮窯系の白磁の皿である。高台部分の破片のため明確ではないが、森田福年の白磁皿E群



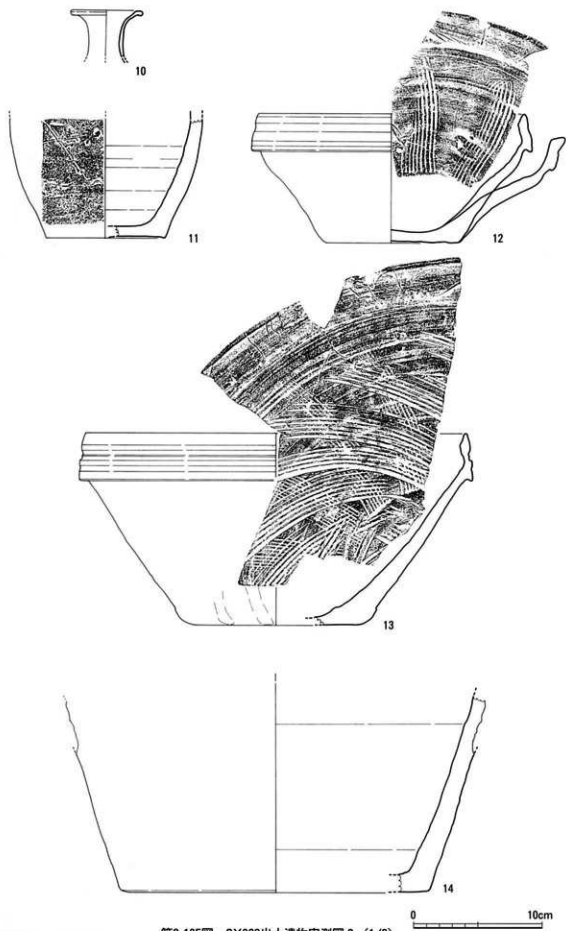
第2-103図 SX028実測図 (1/40)

異体字

に比定される製品であろう。時期は16世紀代である。4～8は中国産景德鎮窯系の青花である。4は碗で小野編年の碗B群に比定される製品である。口縁部内面に四方禪文、胴部外面には牡丹唐草文と思われる文様を、見込にも文様を描いている。高台内には「異体字」の字款がみられる。5は皿でB1群に比定される製品である。口縁部内外面と見込みに文様が認められる。6は碗でE群に比定される製品である。いわゆる「腹頭心碗」の系統に属し、16世紀後葉の製品である。見込と胴部外面に文様が認められる。高台内の字款は認められない。7も碗でE群に比定される製品である。口縁部の内外面に界線が認められる。8は盤である。見込みに動物と思われる文様を描いている。高台の外面には半円状の連続文様を施している。9は中国産漳州窯系の青花碗の底部破片



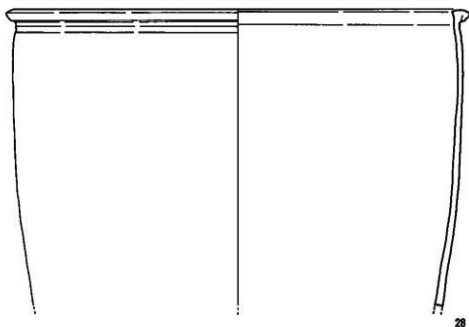
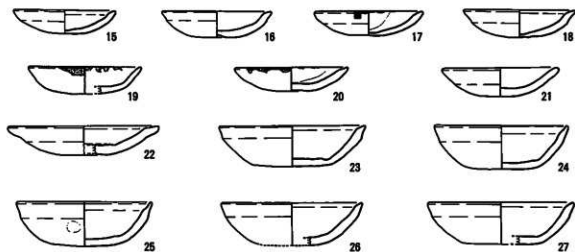
第2-104図 SX028出土遺物実測図1 (1/3)



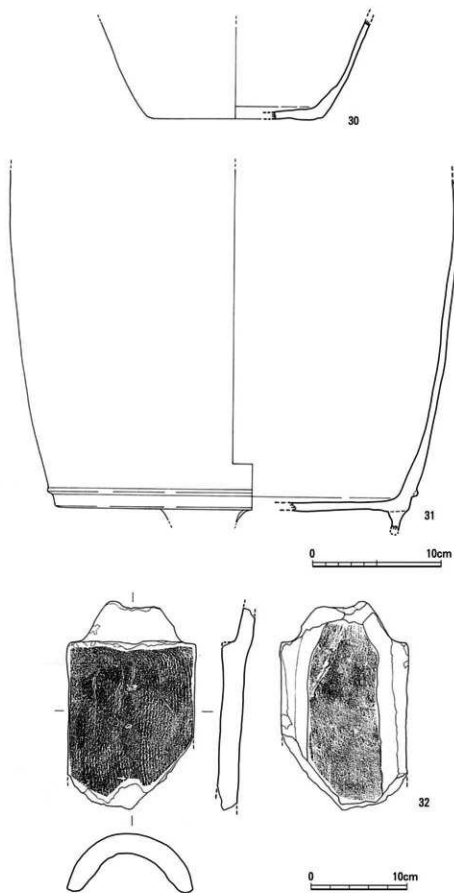
第2-105图 SX028出土遺物実測図2 (1/3)

第2節 遺構と遺物

である。見込みと胴部外面に文様を施している。高台は露胎である。第2-105図は陶器である。10は朝鮮王朝産の焼締め陶器で瓶の口縁部である。外面は襷軸を施している。11は中国産焼締め陶器甕の底部破片である。胴部外面にへう記号が認められる。12～14は備前系陶器である。12はほぼ完形の播鉢である。8条の放射状の播目が施されていて、中世6期に比定される資料である。13も播



第2-106図 SX028出土遺物実測図3 (1/3)

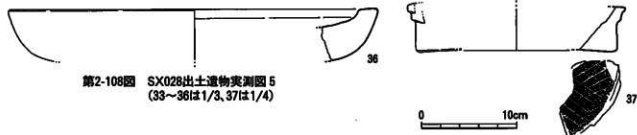
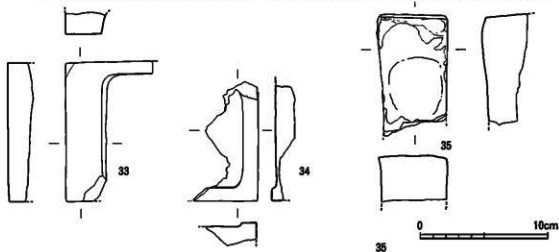


第2-107図 SX028出土遺物実測図4 (1/3, 1/4)

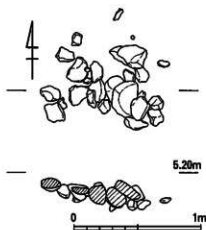
鉢で放射状の播目に加え、ナメ播目が施されており、近世1期に比定される。14は甕の底部破片である。内外面はナデを施しているが、底部は未調整である。第2-106図は土師質土器である。15～27は京都系土師器である。15～22は皿で、口径は7.8～8.8cmが7点、11.6cmが1点、器高は1.9～2.3cmである。23～27は坏である。口径は10.3～11.4cm、器高は3.2～3.5cmである。

15～21の内面或いは外面、もしくは両面にススが付着しており、灯明皿として使用されていた製品であろう。ほとんどの遺物が内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が外反する。埴地編年の2～3期の特徴を示す資料であり、16世紀後半代に比定される。28・29は土師質土器の火鉢で、28は口縁部から胴部にかけての破片で、内外面ともナデを施している。29は底部破片で、胴部下半に2条の突帯を巡らしている。脚が付くと思われるが、残存部分では確認できない。底部には離れ砂が認められる。

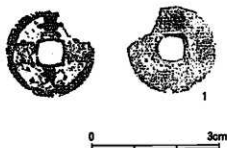
30・31は瓦質土器で、30は鉢の底部破片である。内外面とも横ナデを施している。31は火鉢で、



第2-108図 SX028出土遺物実測図5
(33～36は1/3、37は1/4)



第2-109図 SX035実測図 (1/30)



第2-110図 SX035出土遺物実測図 (1/1)

内外面ともハケによるナデを施している。胴部下方に1条の突帯を巡らし、脚が付く。32は丸瓦の破片で、幅13.0cm、厚さ2.2cmである。外面に縄目痕が認められる。内面は布目圧痕が残る。

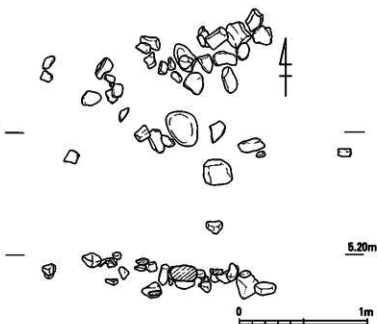
第2-108図は石製品である。

長方硯

33・34は赤間石を使用した長方硯で接点はないが、同一個体と思われる。幅は10.8cmである。

砥石

35は天草石製の砥石で、欠損部以外はいずれも擦り面として使用している。36・37は茶臼の破片である。36は下臼の受け部破片。37は上臼の破片で挽き手穴には縁が付く。

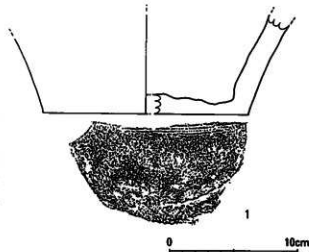


第2-111図 SX038実測図 (1/30)

SX035 (第2-109・110図)

SX035は調査区の南、H-62区に位置する。SX024とSX054の間に位置する集石遺構で、東西1.0m、南北0.7mの範囲に礫が集中して確認された。SB003礎石建物跡の礎石の周辺部に位置することから、礎石を安定させるための礫群の可能性もある。掘り方ラインは確認できなかった。遺物は礫群中から瓦片と銭貨1枚が出土した。第2-110図が出土した銭貨で、一部欠損しているが、北宋時代の「景德元寶」である。初鋳年は1004年で、書体は真書である。

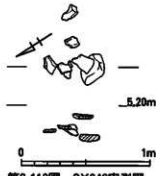
景德元寶



第2-112図 SX038出土遺物実測図 (1/3)

SX038 (第2-111・112図)

SX038は調査区の中央、H-61区で、第2南北街路の側に位置する集石遺構で、東西1.7m、南北1.5mの範囲に礫が集中して確認された。掘り方ラインは確認できなかった。礫は径10~30cm前後で、敷き詰めた状況ではなく、投げ入れた状態を示している。遺物は陶器破片や瓦が出土している。第2-112図は備前系陶器の甕の底部である。



第2-113図 SX046実測図 (1/30)

SX046 (第2-113図)

SX046は調査区の北側H-59区で、径0.6m前後の範囲中に礫と炭と瓦が集合して確認された遺構である。明確な掘り込みラインは認められない。検出面での標高は5.1mである。出土遺物は焼締め陶器の小破片1点と、丸瓦破片4点であった。

SX054 (第2-114~116図)

SX054は調査区の南側H-62区、万寿寺西側の堀の中央部分に位置する。焼土層除去後に確認された遺構で、SX023集石遺構、SB003礎石建物跡と重なる。遺構の範囲は東西3.5m、南北3.2mで、礎と陶磁器の破片がそれぞれ固まって出土した。明確な掘り方ラインは確認できなかった。標高は4.9m前後でほぼ平面的な広がりをもっている。SB003礎石建物に付随する何らかの施設であろう。構築時期の上限は、万寿寺西側の堀の埋め立て後、或いは埋め立て時であり、下限は焼土層除去中に確認されたことから、天正(1586)年12月の島津侵攻以前の構築物である。当集石からは陶磁器や土師質土器などが出土している。

第115・116図に出土した遺物を図示している。1は京都系土師器の皿である。口径8.5cm、器高1.9cmで、内外面ともナデ仕上げが施されている。埴地編年の2~3期の特徴を示す資料と考えられ、16世紀後半代に比定される。第116図は陶磁器類である。2~4は中国製の白磁皿である。2は中国南部地方の製品で、見込みと高台周辺が露胎となる製品である。3・4は森田編年の白磁皿E群に比定される皿である。口径は11.5cmと11.6cmでほぼ同じである。3の色調は白色に近いが、4は灰色を呈している。5~10は中国産の青花である。5は景德鎮窯系の皿で、小野編年のE群に比定される製品である。16世紀後葉の製品である。見込みには山水と鳥、口径部内面には四方禪文、胴部外面には花鳥折枝と思われる文様が描かれている。高台内には「□明年造」の字款が認められる。6~8も景德鎮窯系の皿で、B1群に比定される製品であり、口径が外反している。6の胴部外面には唐草文、見込みには玉取獅子を描いている。7の見込みには花卉文、胴部外面には唐草文が描かれている。6よりくすんでおり、発色が悪い。8は器壁が薄く、見込みに文様を描いているが判読できない。胴部には文様は見られない。9は漳州窯系の皿の破片である。口径部外面に波瀾文帯が描かれている。10は景德鎮窯系青花の小杯である。見込みと胴部外面に文様が描かれている。高台内には「異体字」の字款が認められる。11は瀬戸美濃系天目茶碗で大窯3期に比定される製品である。時期は16世紀後葉である。

露胎

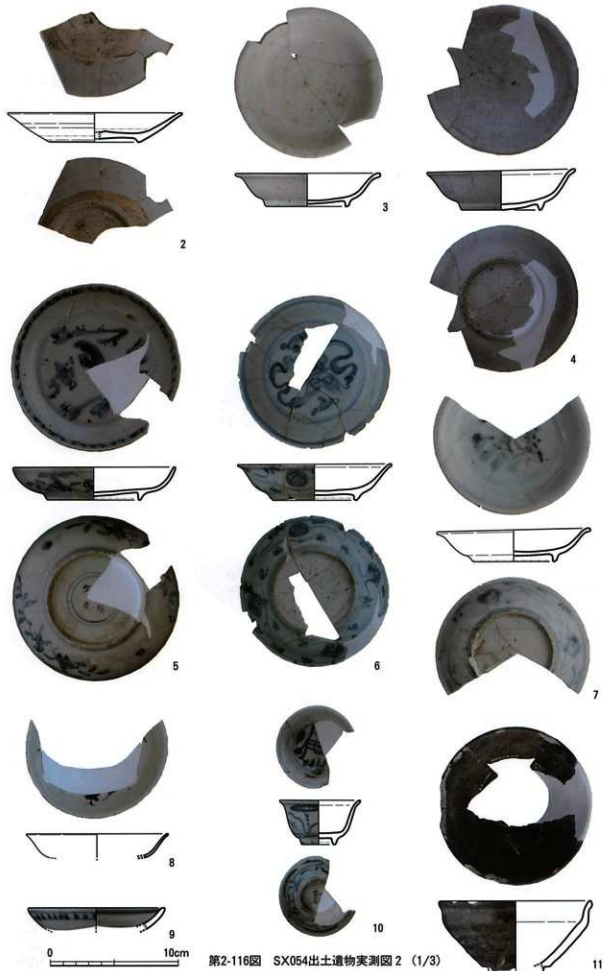
景德鎮窯

漳州窯

異体字

第2-115図 SX054出土遺物
実測図1(1/3)

第2-114図 SX054実測図(1/40)



第2-116图 SX054出土遗物实测图2 (1/3)

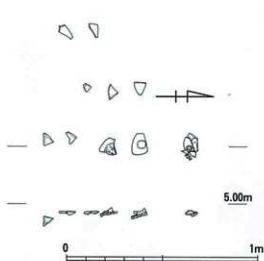
7. 遺物集中区

当調査区では4ヵ所で遺物の集中している、あるいは一括で廃棄されたと思われる箇所が確認された。これ以外にも集石と遺物が同時に出土している箇所もあるが、これは集石遺構として先述している。3ヵ所はSD066堀の中からの検出で、堀の上部から斜面に沿って滑り落ちたと思われる遺構も存在する。

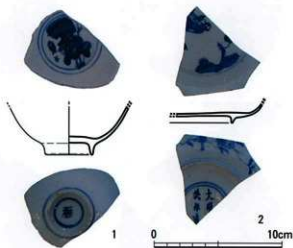
SX039 (第2-117・118図)

青花

SX039は調査区の南東I-62区、堀から東へ1m離れた地点で確認された。約80cm四方のなかに、中国産の青花2個体分が出土した。標高は4.9~5.0mの間である。遺物の周辺からは掘方の痕跡等は検出されなかった。当遺構の時期は出土遺物からみて16世紀後半と考える。第2-118図が出土遺物で、1・2とも景德鎮窯系の製品である。1は碗で小野編年のE群に比定される製品である。見込みには瑞花、高台内には界線を巡らし中に「福」の字款が認められる。2は皿で、やはりE群に比定される製品である。見込みに松樹下人物像、胴部には唐草文が描かれている。高台内には「大明武年造」の字款が認められる。いずれも16世紀後葉の製品である。



第2-117図 SX039実測図 (1/20)



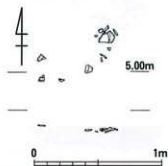
第2-118図 SX039出土遺物実測図 (1/3)

SX040 (第2-119・120図)

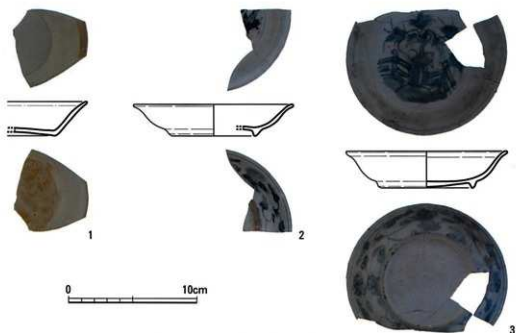
SX040は調査区の中央H-61区、堀の中央付近に位置し、検出時の標高は4.85m前後である。約60cm四方のなかに、中国産の白磁と青花が出土した。遺物の周辺からは掘方の痕跡等は検出されなかった。当遺構の時期は出土遺物から考えると16世紀の前半頃となるが、構築状況などからみると、16世紀の後半代と考える。

口禿の皿

第2-120図が出土遺物で、1は白磁の皿でいわゆる口縁端部が口禿になった製品である。口縁部をやや外反させ、底部は露胎である。森田編年の白磁皿IX類に比定され、13世紀後半代の製品である。2・3は景德鎮窯系の皿である。いずれも小野編年のB1群に比定される製品である。2は見込みに文様、胴部外面に唐草文が認められる。3は見込みに花樹の文様、胴部外面に唐草文が認められる。いずれも16世紀前葉の製品である。



第2-119図 SX040実測図 (1/30)



第2-120図 SX040出土遺物実測図 (1/3)

SX041 (第2-121~125図)

SX041は調査区の中央H-60・61区堀の中央部分で、SB002礎石建物跡と重なる。約5m四方の中に、礎石と礎と多量の土器類が検出された。土器は陶磁器や土師質土器で、ほとんどが小破片となって広範囲で検出された。検出時の標高は礎石の上面とほぼ同じ5m前後である。遺物の周辺からは掘方の痕跡等は検出されなかった。当遺構の時期は、周囲の状況などからみると16世紀の後半代と考える。

第2-122~125図が出土遺物である。第2-122図は青白磁と陶磁器碗である。1~5は中国産の青磁である。1は蓋で、中央に疑宝珠状のつまみを有す。体部外面に劃文がみられる。内面には軸葉は施されていない。2は青磁の鉢で1と同様に、体部外面に劃文がみられ、底部は露胎である。1と2はセット関係である。3は景德鎮窯系の輪花皿である。高台付きは軸刺ぎを行っている。4は碗で高台の内面と外面の一部は露胎である。5はやや小型の碗で底部を欠損している。口径は9.8cmである。6は白磁の皿で森田編年の白磁皿E群に比定される製品で16世紀代の製品である。7は瀬戸美濃系の天目碗の破片で、大窯3期に比定される製品である。時期は16世紀後葉以降であろう。第2-123図は中国産の青花と褐軸陶器である。8~13はいずれも景德鎮窯系の青花の皿である。8は底部がいわゆる「蕃笥底」となるもので、C群に比定される資料である。見込みと外面に文様が施されており、底部外面は露胎となる。9はE群に比定される資料で器壁が薄く造られている。見込みには樹木に止まった鳥の文様を描いている。高台内には字款は認められない。10は大皿で復元口径は18.9cmである。見込みには「鳳凰」を、口縁部内面にも文様を描いている。外面には文様はないが、高台内には字款の痕跡がわずかながら確認できる。11はE群に比定される資料で9の青花皿と同じ文様を描いている。12もE群に比定される資料で、見込みと口縁部の内外面、腰部にそれぞれ1条の界線を有する。高台内には「異体字」の字款が認められる。13もE群に比定される資料で9の青花皿と同じ文様を描いている。14は中国製の褐軸陶器の壺で、器高は17cm以上、口縁部を欠いている。器壁は薄くつくられており、底部は露胎である。第2-124は陶器である。15は中国産褐軸陶器瓶の口縁部破片である。口径は8cmで、外面に褐軸を施している。16~21は備前系の陶器である。16は瓶の口縁から頸部である。口縁部の内外面と頸部にかけては降灰が認められる。17

青磁の蓋
青磁の鉢

鳳凰

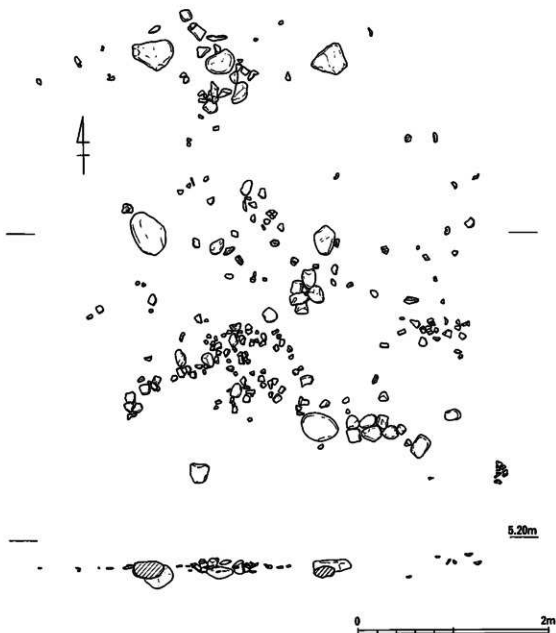
褐軸陶器

第2節 遺構と遺物

播鉢

は壺の底部である。内外面ともロクロによるナデ調整を行っている。底部は未調整である。18も壺である。口径は9.8cm、器高は22.3cmである。胴部外面には5条の播目を巡らしている。19～21は播鉢である。いずれも放射状の播目に加え、ナメ播目が施されており、近世1期に比定される。第2-125図は土師質土器である。22は京都系土師器の皿で、口径7.9cm、器高1.9cmで口縁部内面にススが付着しており、灯明皿として使用されていた製品であろう。内外面ともナデ仕上げが施されており、2～3期の特徴を示す資料である。16世紀後半代に比定される。23は香炉で口縁外面に双頭龍手籠雲文の刻印をスタンプしている。24は火鉢の破片で、胴部外面の下方に2条の突帯を貼り付けている。底部は離れ砂が認められる。25は土鍾で、先端を欠く。

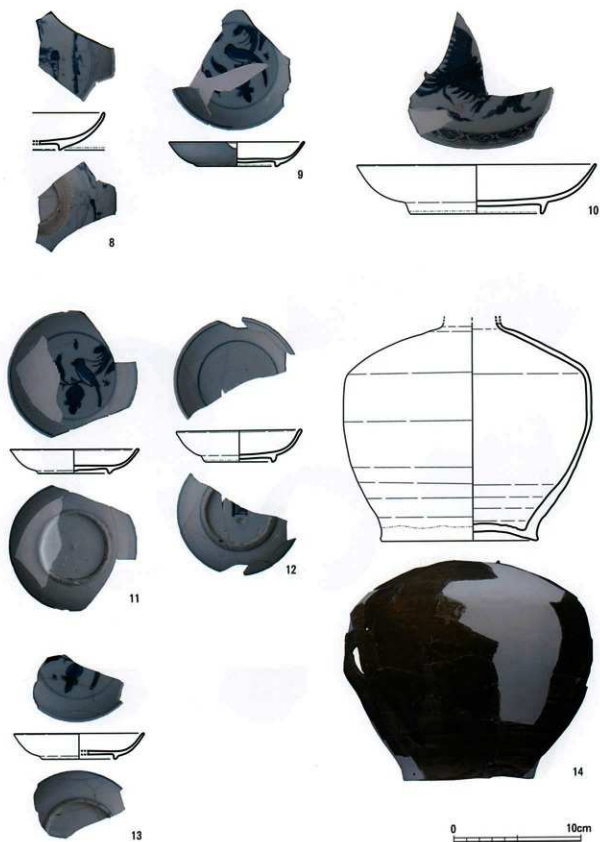
香炉



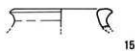
第2-121図 SX041実測図 (1/40)



第2-122図 SX041出土遺物実測図1 (1/3)



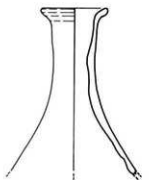
第2-123図 SX041出土遺物実測図2 (1/3)



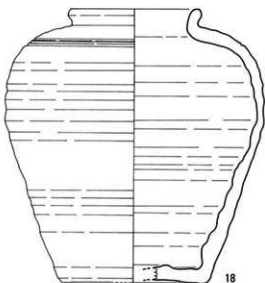
15



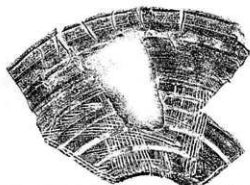
17



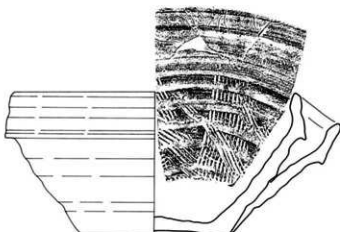
16



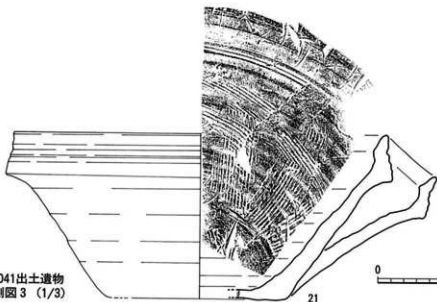
18



19



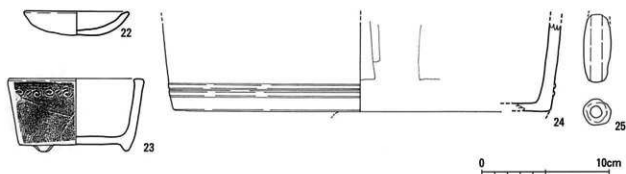
20



21

0 10cm

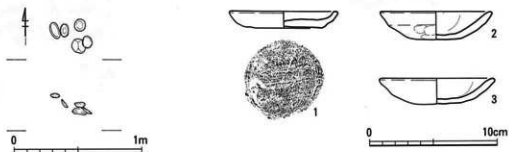
第2-124图 SX041出土遗物
实测图3 (1/3)



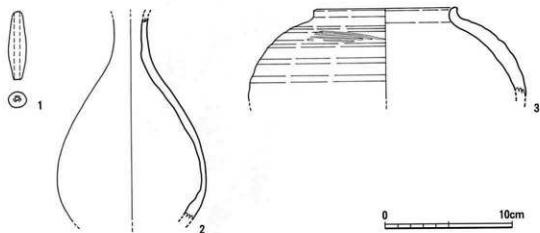
第2-125図 SX041出土遺物実測図 4 (1/3)

SX060 (第2-126図)

SX060は調査区の北西H-60区、堀の西側で確認された。標高は4.6~4.8mで、検出状況から第2南北街路の端から堀の傾斜に沿って斜めに滑り落ちたと思われる。遺物は完形の土師器皿3枚である。1は在地系のロクロ成形による小皿で、底部の器壁が厚く、口縁部を低く形成している。底部は糸切りである。2・3は京都系土師器の皿である。内外面ともナデ仕上げが施されていて、2~3期の特徴を示す資料である。16世紀後半代に比定される。



第2-126図 SX060実測図及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第2-127図 柱穴出土遺物実測図 (1/3)

8. 柱穴出土遺物 (第2-127図)

第127図は柱穴出土の遺物を提示している。柱穴から出土する遺物は、瓦片や土器の小破片がほとんどで、図示できる遺物はごくわずかであった。1・2は万寿寺西側の堀の埋め戻し後に構築された建物の柱跡 (SP-1028) から出土した遺物である。柱穴の埋土には炭を多量に含んでおり、柱痕が確認できる。1は土唾で、長さは5.3cmである。2は備前系陶器の瓶で、頸部から胴部にかけての破片である。頸部外面には降灰が認められる。3は調査区の北端で確認された柱跡からの出土遺物で、備前系陶器壺の上半部である。口径は10.8cmで胴部に櫛目文様を施し、降灰が認められる。

9. 竪地層 (第2-128~145図)

本項目では、遺構以外の包含層や竪地層、攪乱等から出土した遺物のうち、残存度の高いものや注目すべきものを選別して報告する。

陶磁器 (第2-128~134図)

- 青磁人物像燭台頭
首の後方の一部分に灰緑色の軸葉が確認できる。第20次調査C区¹⁾のC-SD01から台座部分が出土している。この遺物は検出時においては、SD066万寿寺西側堀の存在が確認できておらず、H-60区出土遺物として取り上げているが、出土地点は、万寿寺堀の上面にあたり、堀の埋設前後の遺物である。
- 蒔苜底
2は景徳鎮窯系の青磁輪花皿で、裏白である。3も皿で「蒔苜底」を持ち、底部は軸剥ぎである。4~7は中国製の白磁の皿である。4はいわゆる口縁端部が口禿になった製品である。口縁部をやや外反させ、底部は一部軸葉が垂れているが、ほぼ露胎である。森田編年の白磁皿Ⅱ群に比定され、13世紀後半の製品である。5は中国南部地方の窯で焼かれた皿で、見込みと高台は露胎である。6も中国南部地方の窯で焼かれた皿で、見込みには蛇の目刺ぎが見られ、高台内面は露胎である。7は景徳鎮窯系の白磁皿で、森田編年のE群に比定される製品である。口縁端部が外反し、高台登付部分が露胎となる16世紀代の製品である。8~24は中国景徳鎮窯系の青花である。8は小野編年のB1群に比定される皿である。口縁部は外反し、高台には砂が認められる。見込みには内容不明の文様、胴部外面には牡丹唐草文様が認められる。9もB1群に比定される皿である。高台及び高台内に多量の砂が付着している。見込みに十字花文、胴部外面に唐草文が認められる。10もB1群に比定される皿である。焼成不良で文様がはっきりしないが、見込み・胴部外面ともに花卉或いは唐草の文様が描かれている。11もB1群に比定される(大)皿である。見込みには抽象化されたアラベスクと梵字、胴部外面には渦上の密な唐草文様が描かれている。いずれも16世紀前葉の製品である。12はC群に比定される資料で、「蒔苜底」の皿である。見込みには花文様を描き、口縁部外面には波濤文様、胴部には芭蕉葉文を描いている。底部は軸剥ぎである。13もC群に比定される小型の輪花皿である。見込みには蛇の目刺ぎがみられ、内部に文様を描いている。底部は軸剥ぎである。14~17はいずれもE群に比定される皿である。14は口径12.2cmの皿で、見込み・口縁内外面・腰部に一重の界線を巡らしている。高台内には二重の界線を巡らし界線内に「富貴長春」銘の字款が認められる。15の口縁部内面には四方禪文、見込み内には花文様を描いている。高台内には「異体字」の字款が認められる。16は器壁が薄く造られ、見込みには樹木に止まった鳥の文様を描いている。高台内には字款は認められない。SX041遺物集申区で三点同じ文様の青花が出土している。17の見込みには文様が見えるが、破片のため判読できない。口縁内外面と腰部に界線を巡らしている。18はF群に比定されるいわゆる「つば皿」である。丸く内湾する胴部から斜めにつばが付く。高台は登付きの軸葉をへうで削り取っている。見込みには鳥と雲らしき文様、つばの内外面にも文様、

註(1) 大分県教育庁埋蔵文化財センター「豊後府内7 中世大友府内町跡第20次調査区」(大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第16集 2007)

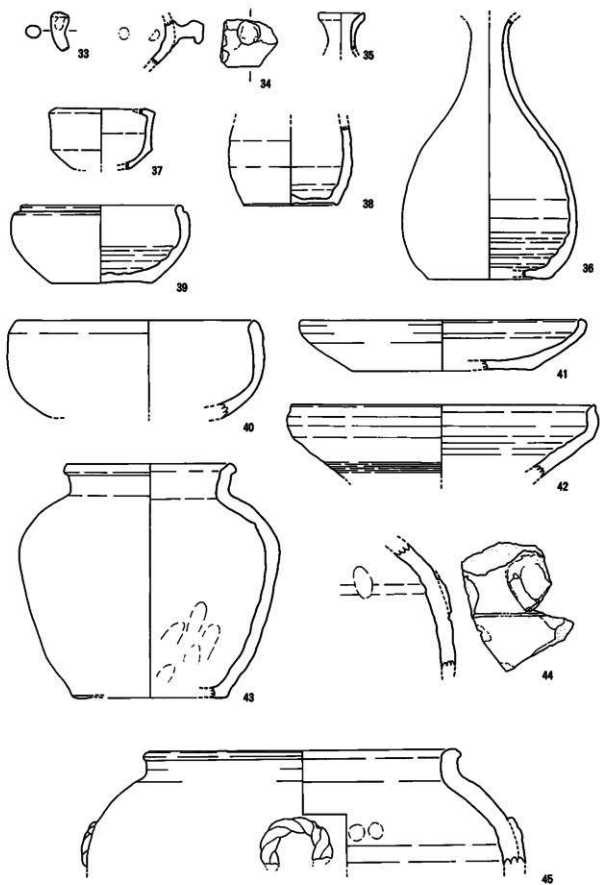


第2-128图 整地层出土物实测图1 (1/3)



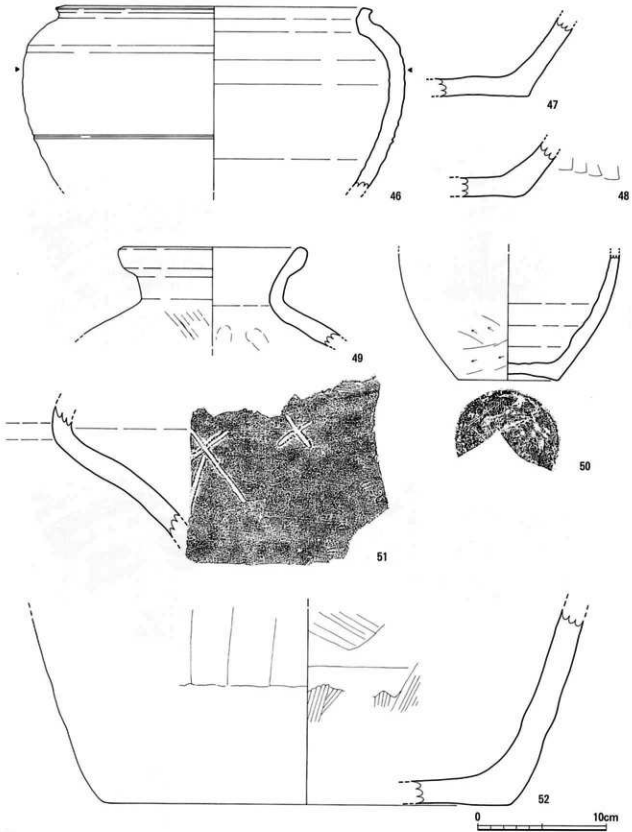
第2-129图 整地层出土遺物実測図2 (1/3)

第2節 遺構と遺物



第2-130圖 整地層出土遺物実測圖3 (1/3)



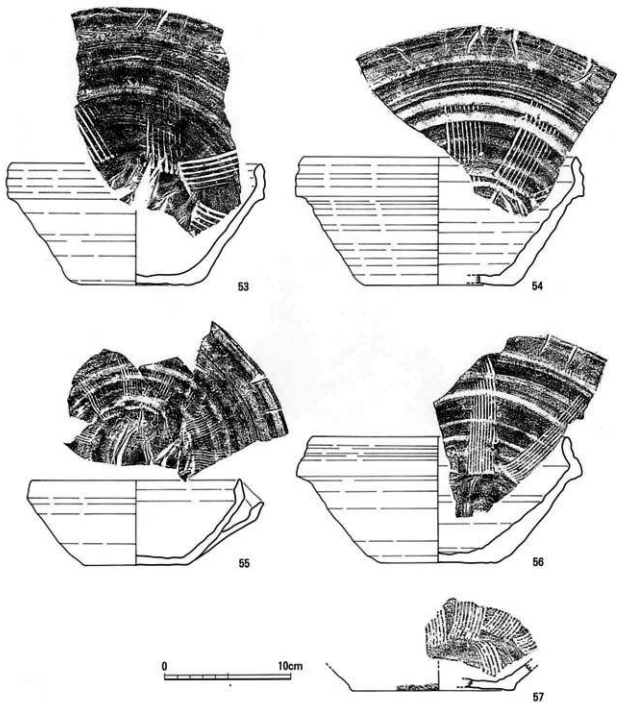


第2-131图 整地層出土遺物実測図4 (1/3)

四方禪文

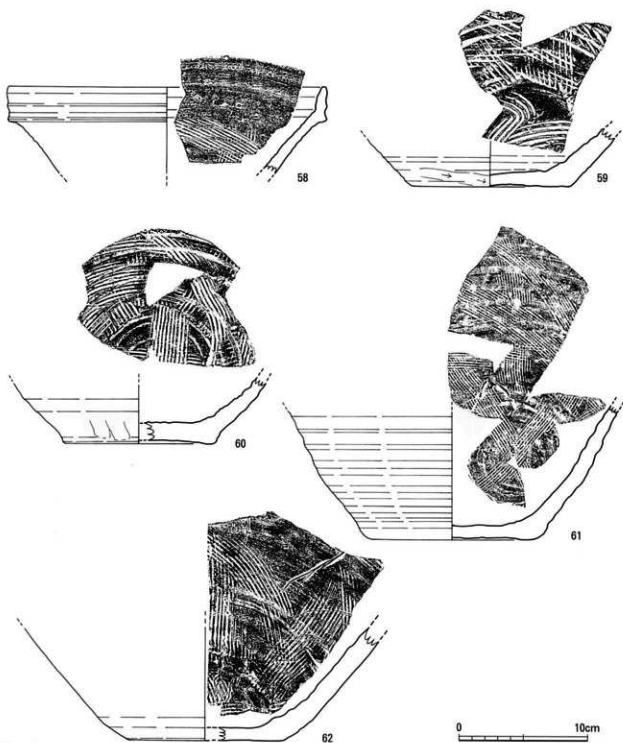
馬・如意雲

胴部には唐草文が描かれている。高台内には二重の界線を巡らし、内に「大明□□」銘の字款を描いている。19～21はE群に比定される青花碗である。19は見込みに花卉の文様、口縁内部に四方禪文、胴部外面に唐草文を描いている。高台内には「異体字」の字款が認められる。20は見込みに如意雲を描き、胴部外面には「馬」と「如意雲」・「波」と思われる文様を描き、高台内には一重の界線を巡らし、「萬福攸同」の字款が認められる。21は小破片で、見込みと胴部外面に文様が認められる。いずれも16世紀後半代の碗でいわゆる「萬頭心」の碗の系統にあたる。22は瓶の肩部分の破片である。「松」と思われる文様を描いている。23・24は青花の小杯である。23の見込みと胴部外面に



第2-132図 整地層出土遺物実測図5 (1/3)

文様を描いている。24は見込みが露胎となり、胴部外面に文様が見られる。25～30は漳州窯系の青花である。25～29はC群青花皿の横倣品と思われる製品で、「碁笥底」の皿である。25と27は見込みと底部は軸剥ぎであり、口縁外部に波濤文帯を描いている。26は見込みと胴部外面に文様を描き、底部は軸剥ぎである。28は見込みに人形化した「寿」と思われる字を描いている。外面には略化し



第2-133図 包含層・整地層出土遺物実測図6 (1/3)

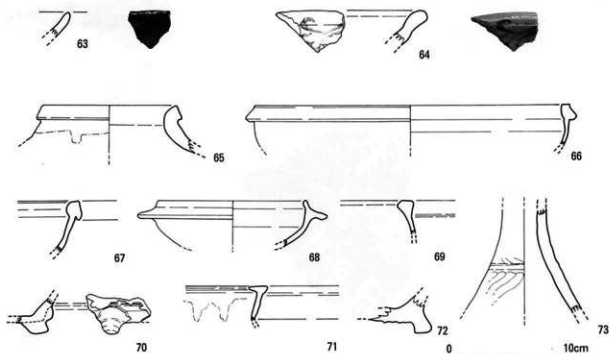
た字のような文様を描いている。底部は軸割ぎである。28は口縁外部に波濤文帯を描いている。29は青花碗である。見込みと高台は露胎である。外面に文様を描いている。31は朝鮮王朝産の彫三島碗である。出土地点は第2南北街路の上面で、復元口径は14.1cmで底部を欠く。32は瀬戸美濃系の天目碗で、大窩3期に比定される製品である。時期は16世紀後葉以降であろう。

第2-130～133図は2点(57・49)を除き全て備前系陶器である。33・34は把手である。35・36・38は瓶の口縁部と胴部～底部の破片である。外面には降灰による自然釉が見られる。37は茶入れと思われる製品である。口縁外面と底部内面には、降灰による自然釉が見られる。胴部に残る形状痕から把手と思われる部分が付いていたと考えられる。39・40・42は鉢の破片である。41は浅鉢である。外面には降灰による自然釉が見られる。43は甕で、内外面ともに降灰による自然釉が見られる。調整は横方向のナデを施し、底部は未調整である。44・45は甕の口縁～肩部にかけての破片で、肩部に把手を有する。46も甕の口縁から胴部にかけての破片で、胴部下半に1条の沈線を有する。外面には降灰による自然釉が見られる。47・48は甕の底部である。48の内面には降灰による自然釉が見られ、外面には縦方向のハケ状の工具痕が残る。49は甕の口縁から胴部にかけての破片で、信楽焼の製品である。口縁部は内外面とも横ナデを施し、胴部外面は斜め方向のハケ調整の後、ナデ調整。内面はナデ調整で、指圧痕が見られる。色調は口縁部が暗赤褐色を呈している。50は壺の胴部から底部にかけての破片である。底部径は7.8cmでへら記号が見られる。51は甕の頸部破片で、2箇所に「へら記号」を入れている。また、外面には降灰による自然釉が見られる。52も甕で、底部破片である。内外面とも工具痕が明瞭に残っている。

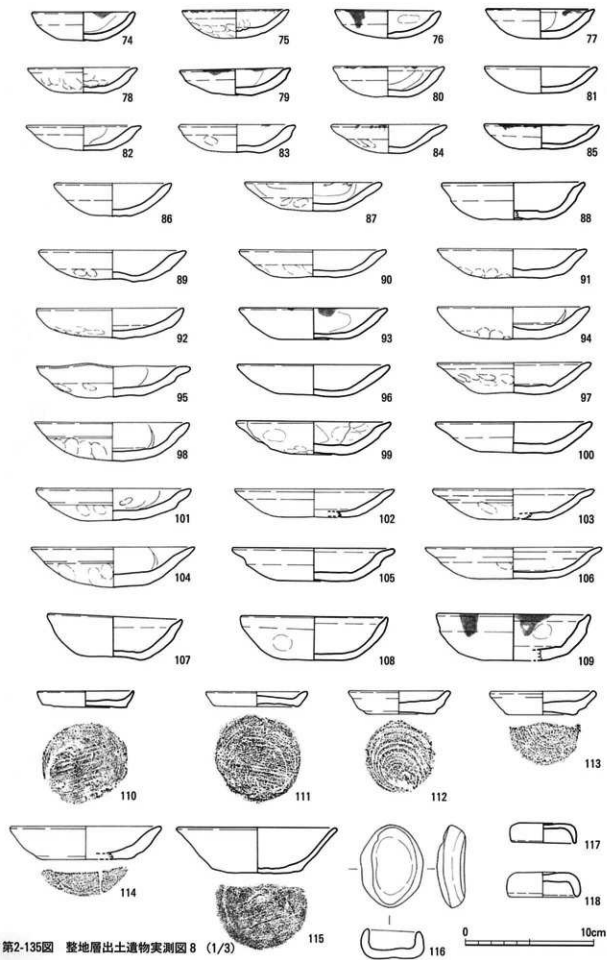
信楽焼

へら記号

第2-132・133図は播鉢である。53～56は、放射状の播目が施されている。播目は7～10条で、いずれも口縁部には降灰による自然釉が見られる。中世6期に比定される資料である。59は瓦質土器播鉢の底部破片である。9条の播目が認められ、内外面ともナデ仕上げである。58～62はいずれも放射状の播目に加え、ナメ播目が施されており、近世1期に比定される。



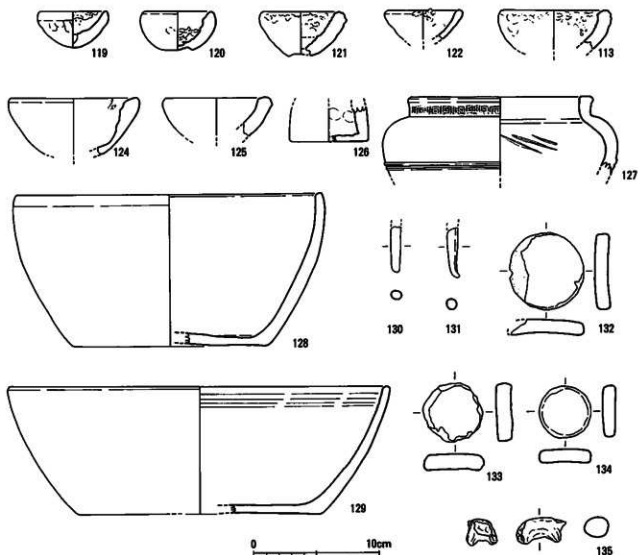
第2-134図 整地层出土遺物実測図7 (1/3)



第2-135图 整地层出土遗物实测图8 (1/3)

第2節 遺構と遺物

黒楽茶碗 第134図は陶器である。63は、軟質施軸陶器碗、通称「黒楽茶碗」と呼ばれている陶器の口縁部である。64は志野焼の口縁部破片である。内外面とも黄白色の施軸を施している。内面に横線が確認できる。65は中国産黒軸陶器の口縁部破片で、内外面とも施軸している。66～69は中国産焼締め陶器碗の口縁部から胴部にかけての破片である。68の胴部外面には褐軸を施している。70・71は華南三彩である。70は香炉の底部で胴部に脚部を貼り付けている。外は淡緑色の釉薬を施しているが内面は無釉である。71は鉢と思われる製品の口縁部である。釉薬を行う前に下地に白化粧土を施し、外面に緑釉をかけている。内面には白化粧土の一部が流れている。72・73は同一個体と考えられる瓶の破片である。72の高台登付以外は施軸しているが、兩個体とも、熱波あるいは火災にあったと思われる、残りは非常に悪く、釉薬を施した部分を含め劣化が激しい。



第2-136図 整地層出土遺物実測図9 (1/3)

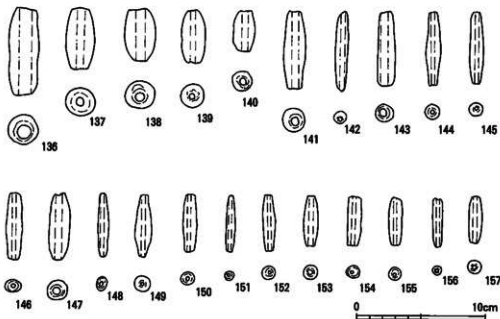
土師質土器・瓦質土器 (第2-135~139図)

京都系土師器 第2-135図は土師質土器の皿や蓋である。74~109は京都系土師器である。74~86は口径7.9cm ~ 9.2cm、器高は1.9~2.6cmの小型の皿である。87~100は口径が10.8~12.0cmにおさまる皿である。101~106は口径12.2~13.7cmの皿である。107~109は京都系土師器の坏で口径は10.3~11.7cm、器高は3.5~3.7cmである。内外面ともナデ仕上げが施されていて、口縁部が反外する遺物がほとんどである。2~3期の特徴を示す資料で、16世紀後半代に比定される。74~87・93・109の内面或いは外面、もしくは両面にススが付着しており、灯明皿として使用されていた製品であろう。110~113は在地系土師器の皿である。ロクロ成形による小皿で、底部の器壁は厚く口縁部を低く形成している。底部は糸切りである。114・115は在地系土師器の坏で底部糸切りである。116は耳皿で、長径6.5cm、短径4.8cm、器高2.2cmである。117・118は焼塩壺の蓋と思える製品であるが、小皿として使用された可能性もある。

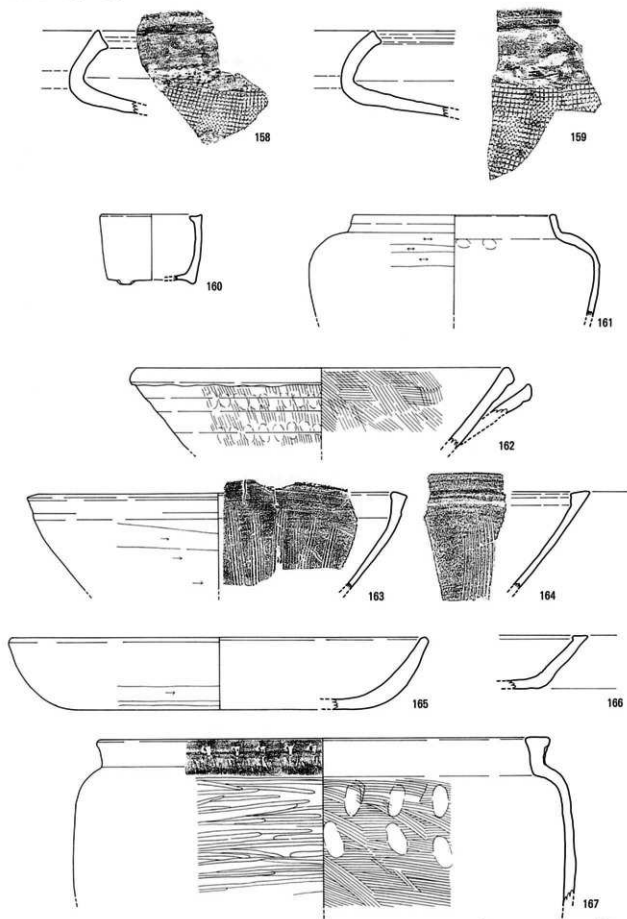
取瓶 第2-136図も土師質土器である。119~125は取瓶である。いずれも碗型で、内面にはガラス状の物質や青灰色の物質、銅銹滓などが付着している。126は風炉である。127は壺で、頸部に雷文の刻印をスタンプしている。胴部には2条の突帯を貼り付けている。口縁部および外面は丁寧なナデ仕上げを施し、内部にはへら削り痕が確認できる。128・129は鉢である。128はナデ仕上げ、129は磨き仕上げを行っている。130・131は脚と思われる破片である。132~134は土師質土器を再加工した製品で周辺部に研磨を加え、円形に加工している。遊技として使用された可能性が高いと思われる。135は手づくねの犬型土製品で、頭部を欠く。安産を祈ったものと思われる。

犬型土製品 第2-137図は土師質土器の土鍾である。長さは3.0~6.8cmである。

格子目叩き 第2-138・139図は瓦質土器である。158・159は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。兩個体とも胴部に格子目の叩きが認められる。160は香炉である。内外面とも丁寧なナデを施している。161は壺である。162は片口鉢で外面は縦方向のハケ目調整を行った後、指押しを行っている。内面は乱雑なハケ目調整を行っている。163・164は播鉢である。163は5条の放射状の罫目が施されている。164は9条の放射状の罫目が施されている。165・166は浅鉢である。165は胴部がやや内湾しながら立ち上がり、166はほぼ直線上に立ち上がる。167は風炉と思われる破片で、口縁部外面に弧線による文様を施している。外面は横方向のミガキを施し、内面は5本一単位のハケによる調整を



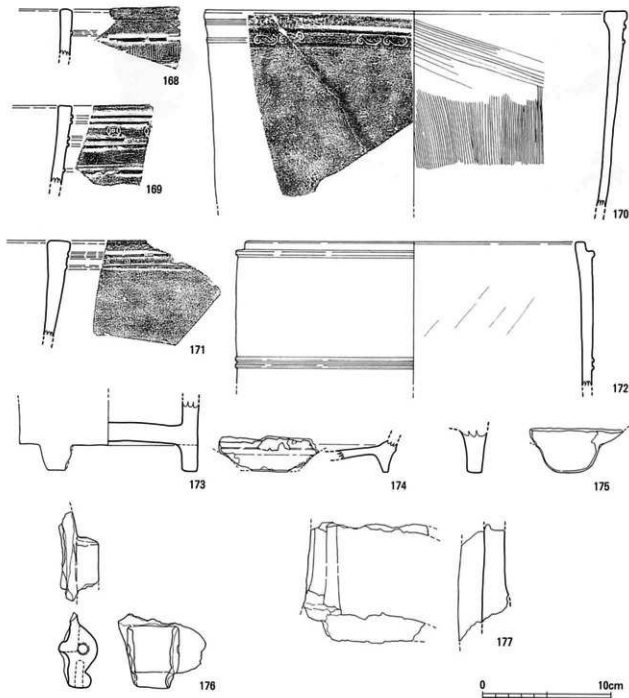
第2-137図 整地層出土遺物実測図10 (1/3)



第2-138図 整地層出土遺物実測図11 (1/3)

0 10cm

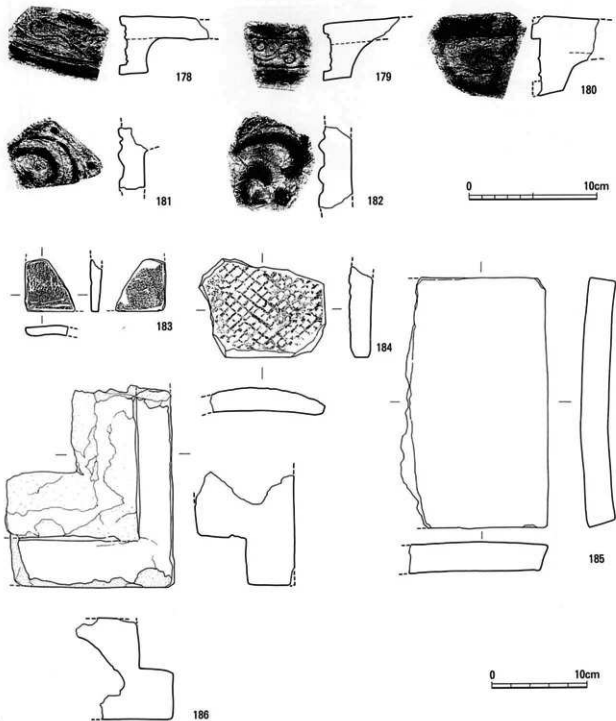
七宝文
 行っている。168～176は火鉢の各部分である。168～172は口縁から胴部にかけての破片である。168・169の口縁下部に二条の突帯を貼り付け、突帯間に雷文のスタンプを刻印している。170はやはり突帯間に双頭蔵手龍雲文を刻印している。169は七宝文の刻印を有している。172は口縁外面に一段の段を有し、胴部に二条の突帯を貼り付けている。173は小型の火鉢で香炉の可能性もある。174～176は火鉢の脚部片である。177は用途不明の瓦質製品である。



第2-139図 整地層出土遺物実測図12 (1/3)

瓦類 (第2-140図)

均正唐草文 第2-140図178～180は軒平瓦の瓦当破片である。いずれも均正唐草文を内区に配し、内区と外区
 菱形花菱文 の間に圓線が巡る。178の中心飾りは菱形花菱文である。瓦当形成は貼り付け技法で、平瓦の裏面
 先端に瓦当の上面を貼り付けている。181・182は軒丸瓦の瓦当破片である。左巻きの三ッ巴文で、
 巴文の周縁に珠文を配している。瓦当形成技法は、軒平瓦と同じである。183は平瓦の一部で、外面
 に繩目痕が残る。184も平瓦で、裏面に格子目が残る。185は埴で、長さ26.2cm、厚さ2.8cmである。
 186は用途不明の瓦である。



第2-140図 整地層出土遺物実測図13 (1/3、1/4)

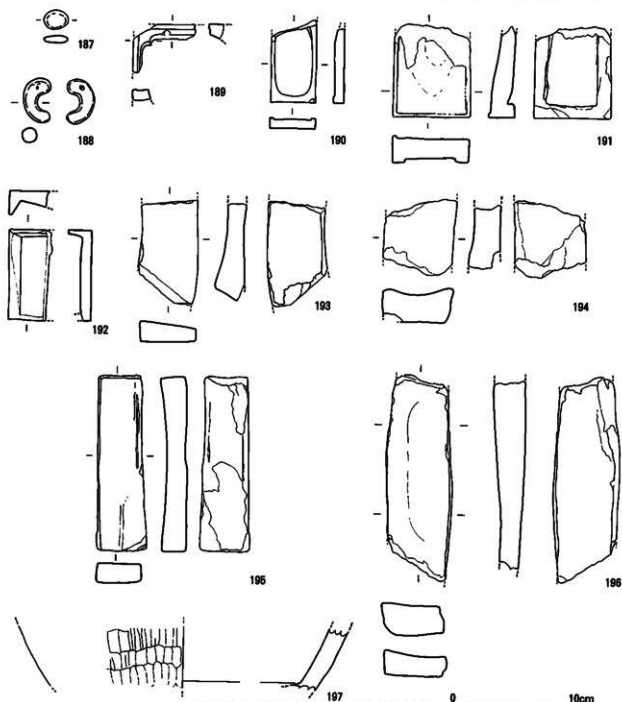
石製品 (第2-141・142図)

蛇紋岩製

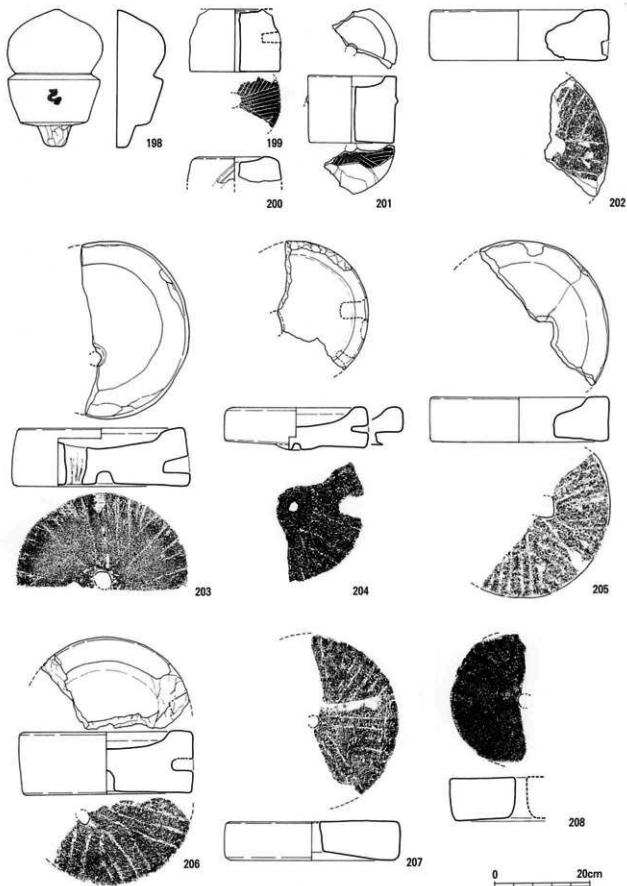
第2-141・142図は石製品である。187は基石で蛇紋岩製、色調は青黒色である。両面は平坦に加工し、全面研磨している。長さは1.8cm、幅1.5cmの楕円形を呈している。188は勾玉で蛇紋岩製、色調は暗緑色である。長さ3.4cm、幅0.9～1.2cm、径1.0cm、重さ10.0gである。古墳時代の遺物であろう。

赤間石

189～192は硯である。いずれも輝緑凝灰岩（赤間石）を使用した長方硯である。189は破片である。190は硯頭を欠損している。191も硯頭を欠損しているが、両面とも陸と海を設けており、陸の中央部は樹の研磨により窪んでいる。192は硯頭も硯尻も残っているが、境の一部が欠損している。193～196は底石である。193・194は天草石で、193は上下の欠損部分以外は全てすり面として使用している。194は表面だけの使用で中央部分が窪んでいる。195・196は緑泥片岩で、表面両側面ともすり



第2-141図 整地層出土遺物実測図14 (1/3)

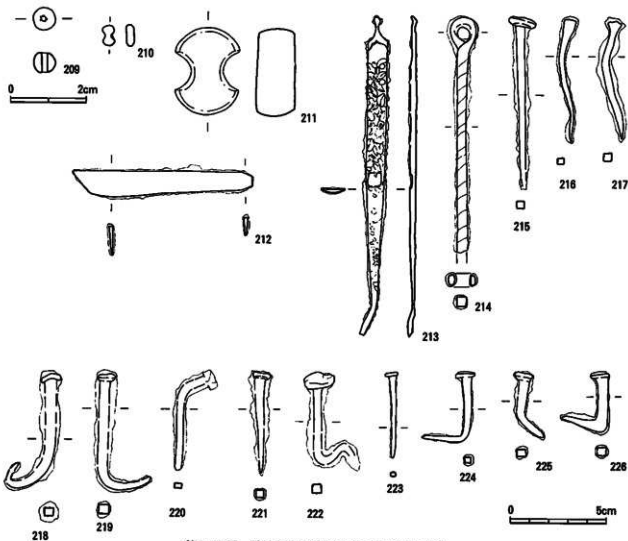


第2-142図 整地層出土遺物実測図15 (1/8)

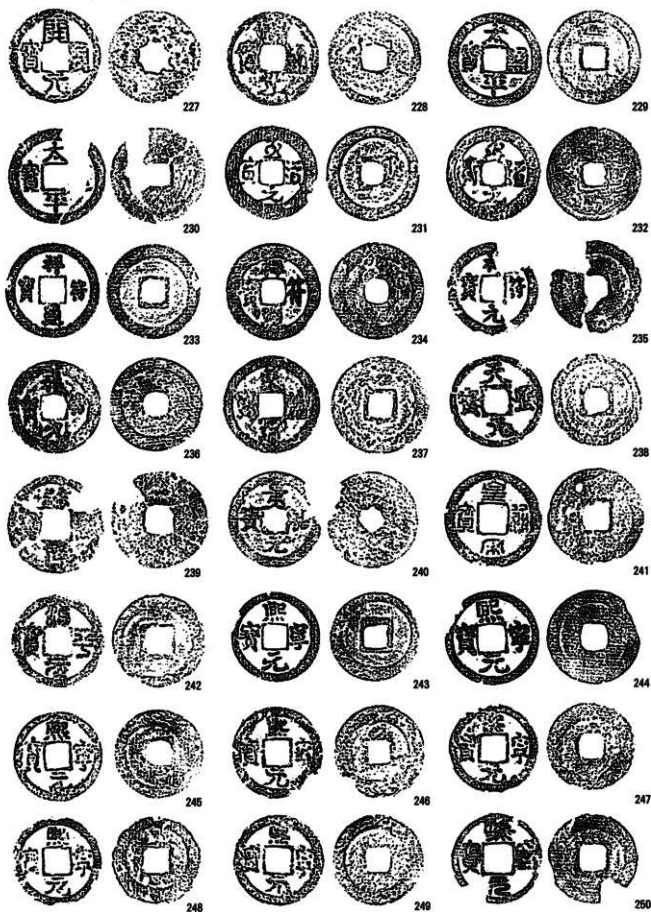
面として使用している。197は滑石製の石鍋胴部で、内面は研磨を施しているが、外面はノミ痕が残る。198は凝灰岩製の五輪塔の空風輪部である。風輪部には墨書による梵字「カ」が描かれている。199～201は茶臼の上臼である。199は安山岩製で挽手穴が残り、8分画、副溝8条である。202～206は上臼である。203は安山岩製で、6分画で副溝5条である。204も安山岩製で8分画、副溝5条。206も安山岩製で、副溝3～5条で分画は不明である。207・208は下臼である。207は安山岩製で6分画、副溝7条。208も安山岩製で8分画、副溝4～7条である。

ガラス・金属製品 (第2-143図)

第2-143図はガラス・金属製品である。209はガラス製の小玉で無色透明である。径0.6cm、高さ0.5cm、重さは0.3gである。210・211は銅形分銅である。210は長さ1.0cm、重量1.3gである。211は長さ4.5cm、重量179.9gで、中世大友府内町跡の調査で出土した銅形分銅の中では、大きさ・重量とも最大である。213は斧で完形品である。長さは16.6cmで表面に草木と思われる装飾が確認できる。214は火箸の捻り部分である。215～226は釘である。錆出が著しく、断面は方形である。ほぼ完形品を図示しており、長さは3.9～9.0cmである。

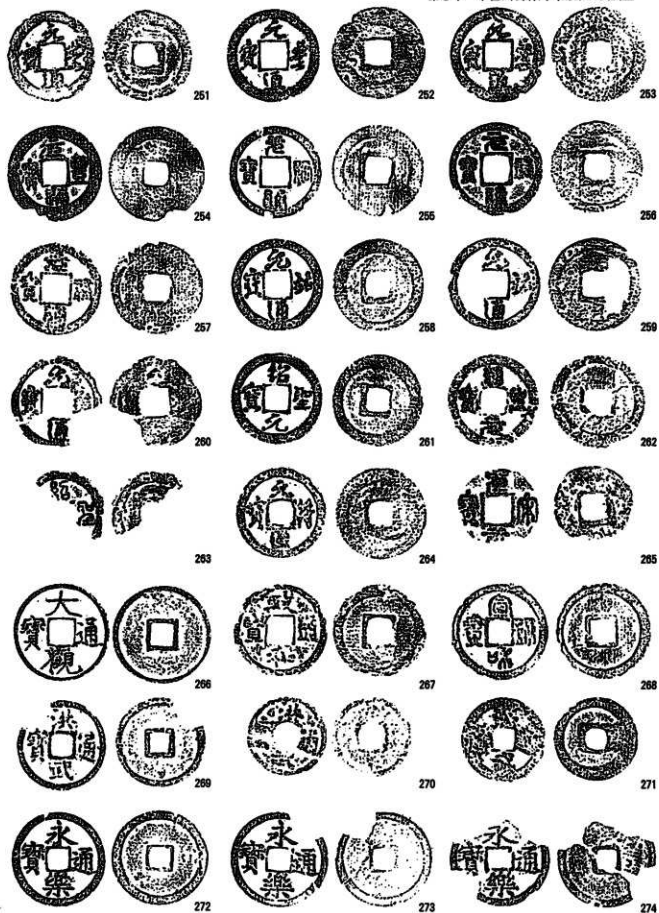


第2-143図 整地層出土遺物実測図16 (1/1,1/2)



第2-144圖 整地層出土遺物実測図17 (1/1)





第2-145圖 整地層出土遺物実測圖18 (1/1)



第3節 小 結

銭貨 (第2-144・145図)

唐 第2-144・145図には判読できる銭貨を提示した。227・228は中国唐代の「開元通寶」で、書体は不明、初鑄年代は621年である。229-230は中国北宋代の「太平通寶」で、書体は真書、初鑄年代は976年である。231・232は「至道元寶」で、書体は行書、初鑄年代は995年である。233・234は「祥符通寶」で、書体は真書、初鑄年代は1008年である。235・236は「祥符元寶」で、書体は235が真書、236が行書、初鑄年代は1008年である。237は「天禧通寶」で、書体は真書、初鑄年代は1017年である。238・239は「天聖元寶」で、書体は238が真書、239が篆書、初鑄年代は1023年である。240は「景祐元寶」で、書体は真書、初鑄年代は1034年である。241は「皇宋通寶」で、書体は篆書、初鑄年代は1038年である。242は「治平元寶」で、書体は篆書、初鑄年代は1064年である。243~250は「熙寧元寶」で、書体は243~249が真書、250が篆書、初鑄年代は1068年である。251~254は「元豐通寶」で、書体は251~253が行書、254が篆書、初鑄年代は1078年である。255~260は「元祐通寶」で、書体は255~257が篆書、258~260が行書、初鑄年代は1086年である。261・262は「紹聖元寶」で、書体は261が行書、262が篆書、初鑄年代は1094年である。263は「紹聖□□」で、書体は篆書、初鑄年代は1094年である。264は「元符通寶」で、書体は行書、初鑄年代は1098年である。265は「聖宋元寶」で、書体は篆書、初鑄年代は1101年である。266は「大觀通寶」で、書体は真書、初鑄年代は1107年である。267は「政和通寶」で、書体は真書、初鑄年代は1111年である。268は「宣和通寶」で、書体は篆書、初鑄年代は1119年である。269~271は中国明代の「洪武通寶」で、書体は真書、初鑄年代は1368年である。272~274は「永樂通寶」で、書体は真書、初鑄年代は1408年である。

明

第3節 小 結 (第2-146・147図)

16世紀後葉 中世大友府内町跡第34次調査区で検出された遺構は、16世紀後葉墳 (第2-146図) と16世紀後葉以降 (第2-147図) の二時期に大別される。この二時期区分は、万寿寺西側に展開する堀 (SD066) に関係する。堀が掘られるまでの時期と、堀の構築以前の時期である。

堀 (SD066) が掘られるまでの時期は、堀の構築以前と、稼働している時期の2期に細分される。堀の構築以前の遺構は堀の東側・万寿寺境内で確認された溝7条で、いずれも検出した溝の東西長は1m前後である。7条全てが万寿寺境内を横切る溝状遺構とは確定できないが、一部は、国道を挟んで東側で行った調査 (大友第29次調査) で検出された溝状遺構の続きと考えられている。出土遺物は少なく、明確な時期設定はできないが、16世紀後葉あるいはそれ以前と考えられる。次に第2南北街路があげられる。当時は第2南北街路として機能していたかどうかの判断はできないが、街路としては既に使用されていたことがわかる。街路の硬化面は1~3面を検出した。また、この上面には粘質土や砂質土がなん層も堆積しており、改修時にかさ上げを繰り返した様相が伺える。この街路の西は調査区外となり、街路西端は確認できなかったが、同時期に当調査区の市道を挟んだ西側で、大友第36次調査が行われている。この調査区では街路状遺構は確認されなかった。このため、街路の西側はこの調査区までは広がっていないと考え、2調査区の位置関係と市道の幅などを考慮して街路幅を推測すると、幅は10mを越えないだろうと思われる。

街路の東側は堀 (SD066) を構築する際に切り込まれている。また、この街路の東では街路上に数基の土坑 (SK030・056等) が掘り込まれており、中からは多量の礫や京都系土師器、備前系埴鉢等が出土している。出土遺物からこれらの土坑の時期は16世紀後半代 (1570年代前後) と考えられる。この土坑も街路とともに堀 (SD066) の構築時には削平を受けていることから、堀の構築時期は16世紀後葉以降の構築物といえる。

堀が稼働している時期の遺構は、当調査区では堀 (SD066) 以外には確定できない。堀の中から岸川系系青花は青磁や白磁などとともに岸川系系青花や近世1期の備前系埴鉢が出土することから、やはり堀の

稼働期は1570年代頃と
考えられる。

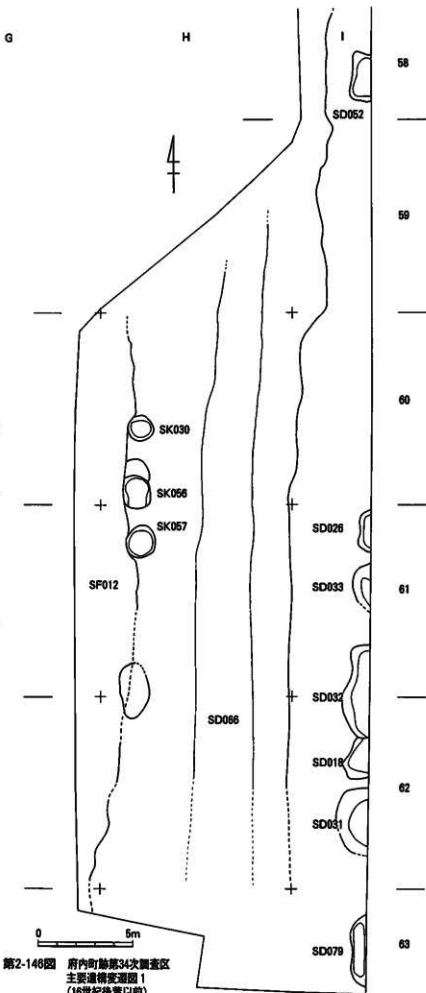
次に16世紀後葉以降の
遺構であるが、これは
堀 (SD066) の埋め
戻し後の遺構である。
これらの遺構は、堀の
埋め立て後から、天正
14 (1586) 年の島津氏
の豊後侵攻以前と、侵
攻後に細分される。

侵攻以前の代表的な
遺構は、石列SX077・
047や礎石建物跡など
があげられる。石列は
堀の一部を埋め立てる
土止めの役をしている。
埋め立ても両脇をそれ
ぞれ2度拡幅し、屋敷
地を除々に広げている。
当調査区ではこの部分
的に埋め立てられた屋
敷地内では、建物の跡
は確認できなかった。
その後、この堀は全て
埋め立てられてしまい、
第2南北街路に面した
「西之屋敷」と呼ばれる
屋敷地へと変貌してい
く。この時に、第2南
北街路も整備されたと
思われる。礎石建物跡
の礎石は3軒分確認さ
れたが、いずれも、全
て埋め戻された後に建
てられた建物である。
また、各々の屋敷の区
画は、埋め戻された堀
の上面だけでなく、万
寿寺の境内にも及んで
いたと思われる。とい
うのもこの建物跡の周

島津氏
豊後侵攻

西之屋敷

礎石建物



第2-146図 府内町跡第34次調査区
主要遺構変遷図1
(16世紀後葉以前)

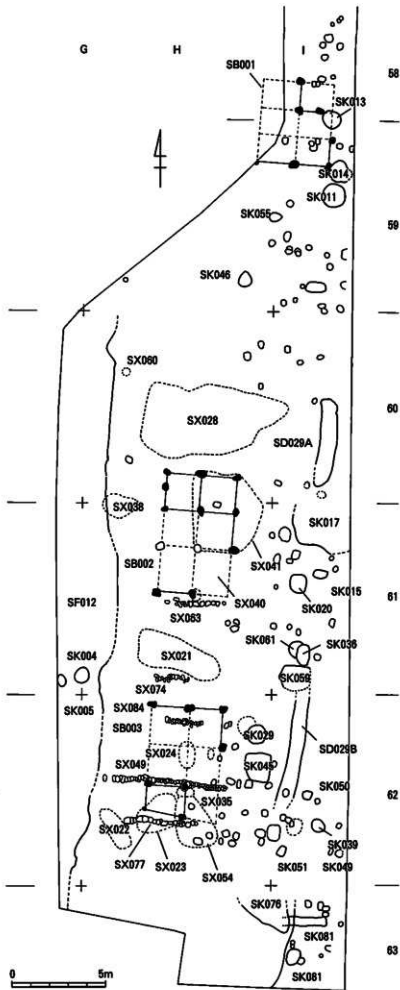
第3節 小 結

町屋の裏手 辺からは町屋の裏手の状況を示す井戸などの検出がないことに起因する。

焼き討ち

その後、島津氏の豊後侵攻で当地を含む府内一带は焼き討ちに遭い、焦土化してしまう。府内の町はいずれ復興した可能性は高いが、当調査区内でその時期に構築された遺構とわかるのはSK045・061などである。いずれも礎石や土器などを廃棄した土坑で、SK045は埋土中に焼土・炭が多量に混入している。さらにSK061は焼土や炭のほかに被熱した礎石を大量に廃棄している。

当調査区においては削平をうけた可能性もあるが、廃棄土坑以外の明確な生活遺構の確認例がなく、島津氏の侵攻後の復興の姿は追えなかった。



第2-147図 府内町跡第34次調査区
主要遺構変遷図2
(16世紀後葉以降)

第3章 中世大友府内町跡第43次調査区

第1節 調査の概要

1. 調査の経過

府内町跡第43次調査は、平成16年6月に開始した。調査区は県事業である庄ノ原佐野線と国道10号線との交差点西側部分にあたる。前年度にこの交差点部分の北側のほぼ3分の2を府内町跡第34次調査として発掘調査しており、府内町跡第43次調査は、その南側の残りの部分にあたる。

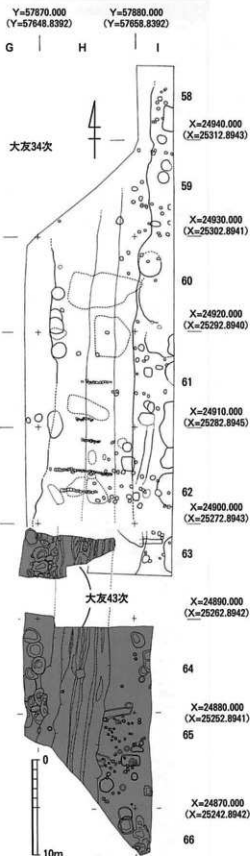
調査範囲は国道10号線に面していたため、2m以上埋め立てられ、中古車販売店が営業していた。また、北側の第34次調査区との境には農業用水路と鉄筋コンクリートで構築された壁で囲まれていた。このため、表土の除去と発掘作業で搬出される土砂は、北側の鉄筋コンクリートの壁の一部を破壊し、そこから行った。

調査区で検出される遺構状況は、前年度に調査した第34次調査区の南側に隣接するため、ほぼ想定出来た。重機による表土除去は、16世紀代の遺構を埋め立て整地し、水田化した基盤層まで行き、その後は人力により掘削を行った。水田基盤層直下には、整地層が堆積しており、それを除去中にも遺構が確認されたが、最終的には、この遺跡の地山である自然堤防を形成する面で全ての遺構が反面した。

こうした作業中、調査区の北隅で礎石建物が検出され、その展開が北側に向かっていることが判明した。しかし、前年の第34次調査では、土砂の搬出の通路等、調査進行上の事情で、南隅のまで調査をすることが出来なかった。そこで、府内町跡第43次調査の一部として、その部分を発掘調査し、両調査区の連続性を持たせた。その結果、明確な礎石建物は確認することは出来なかったが、その基礎固めのための遺構が連続していることが判明した。

また、調査開始後の8月5・6日と後半の12月2・3日に、大分市教育委員会と共同で調査指導者会を開催し、調査の指導を受けた。さらに12月には奈良教育大学の金原正明准教授の土壌分析等を依頼し、調査の指導を受けた。

こうして、府内町跡第43次調査は平成17年の2月末に現場作業を終了した。



第3-1図 府内町跡第43次調査区位置図 (1/400)

土壌分析

第1節 調査の概要

第3-1表 府内町跡第43次調査遺構一覧表

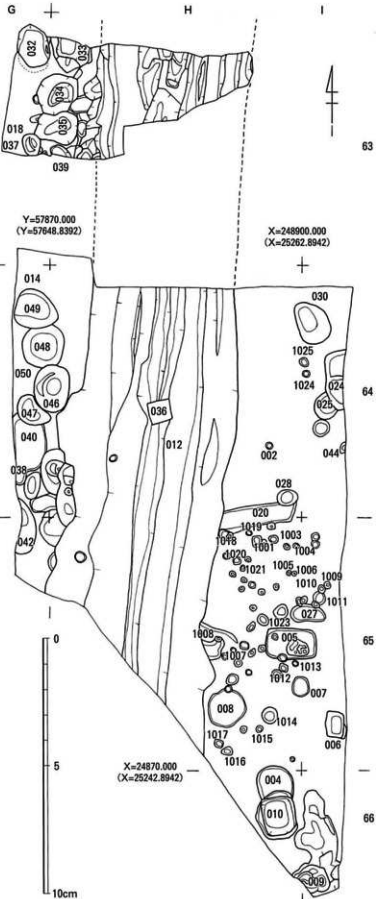
本報告書での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	遺物・特記事項	掲載頁
SK001	S-001	整地層	H-66	16世紀末葉	万寿寺西境の堀の最後の埋め立て	
SK002	S-002	埋納遺構	H-64	16世紀末葉	京都系土師器を合わせた口で埋納	
SX003	S-003	整地層	G-65	16世紀末葉	石と瓦片を敷き詰めている	
SK004	S-004	総治遺構	H-66	16世紀末葉	フイゴ・埴地・ヤットコ	
SK005	S-005		H・I-65	14・15世紀	隅丸方形土坑	
SK006	S-006		I-65	16世紀後葉	方形土坑	
SK007	S-007		H・I-65	14世紀		
SK008	S-008		H-65	16世紀後葉	円形土坑	
SK009	S-009		I-66	14世紀	不定形土坑	
SK010	S-010	廃棄土坑	H-66	15世紀初頭		
SX011	S-011	焼土	H-65	16世紀末葉	天正14年の焼土層	
SD012	S-012	万寿寺西境の堀	H-63～65	16世紀後葉	ガラス環・真鍮の鎖・各種木器他	
SX013	S-013	石積み	H-65	16世紀後葉	SX003の南側の東西方向の石積み	
SP014	S-014	集石	G-64	16世紀末葉	第2南北街路の敷石	
SK015	S-015	大形の土坑	H-64	16世紀末葉	メダイ・京都系土師器	
SX016	S-016	石列	G-64	16世紀末葉	SX003の北側の石列	
SX017	S-017	集石	H-63	16世紀後葉	SD-012を埋める集石	
SP018	S-018	石敷き	G-63	16世紀後葉	第2南北街路の敷石	
SX019	S-019	飯案内	H-64	16世紀後葉	第II期礎石建物の基礎	
SK020	S-020	浅い土坑	H-64・65	15世紀末～16世紀初頭		
SX021	S-021	集石	I-65	16世紀後葉	凝灰岩を含み小規模な集石	
SX022	S-022	石積み	H-64	16世紀後葉	SX017の北側の東西方向の石積み	
SX023	S-023	集石	H-64	16世紀後葉	SD-012を埋める集石	
SK024	S-024	土坑	I-64	14世紀		
SK025	S-025	土坑	I-64	14世紀		
SK026	S-026	浅い土坑	H-65			
SK027	S-027	浅い土坑	I-65			
SK028	S-028	浅い土坑	H-64・65		SK020と切り合う	
	S-029					
SK030	S-030	土坑	I-64	14世紀		
	S-031					
SK032	S-032	廃棄土坑	G-63	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK033	S-033	廃棄土坑	H-63	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK034	S-034	廃棄土坑	H-63	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK035	S-035	廃棄土坑	H-63	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
S E 036	S-036	井戸	H-64	14世紀	曲物・立板横棧	
SK037	S-037	廃棄土坑	H-63	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK038	S-038	廃棄土坑	H-63	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK039	S-039	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK040	S-040	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK041	S-041	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK042	S-042	廃棄土坑	G-65	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK043	S-043	廃棄土坑	H-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK044	S-044	廃棄土坑	I-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK045	S-045	廃棄土坑	H-65	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK046	S-046	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑・指輪	
SK047	S-047	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK048	S-048	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK049	S-049	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SK050	S-050	廃棄土坑	G-64	16世紀後葉	第2南北街路の整備以前の土坑	
SP1001	S-1001	柱穴状土坑	H-65			
SP1002	S-1002	柱穴状土坑	H-65			
SP1003	S-1003	柱穴状土坑	H-65			
SP1004	S-1004	柱穴状土坑	H-65			
SP1005	S-1005	柱穴状土坑	H-65	14世紀	吉備系土師器	
SP1006	S-1006	柱穴状土坑	H-65			
SP1007	S-1007	柱穴状土坑	H-65			
SP1008	S-1008	柱穴状土坑	H-65			
SP1009	S-1009	柱穴状土坑	I-65			
SP1010	S-1010	柱穴状土坑	I-65			
SP1011	S-1011	柱穴状土坑	I-65			
SP1012	S-1012	柱穴状土坑	H-65			
SP1013	S-1013	柱穴状土坑	H-65			
SP1014	S-1014	柱穴状土坑	H-65			
SP1015	S-1015	柱穴状土坑	H-65			
SP1016	S-1016	柱穴状土坑	H-65			
SP1017	S-1017	柱穴状土坑	H-65			
SP1018	S-1018	柱穴状土坑	H-65			
SP1019	S-1019	柱穴状土坑	H-65	16世紀後葉	瀬川高系の青花皿	
SP1020	S-1020	柱穴状土坑	H-65	14世紀		
SP1021	S-1021	柱穴状土坑	H-65			
SP1022	S-1022	柱穴状土坑	H-65	14世紀		
SP1023	S-1023	柱穴状土坑	H-65	14世紀		
SP1024	S-1024	柱穴状土坑	I-64			
SP1025	S-1025	柱穴状土坑	I-64			

2. 遺構の概要

府内町跡第43次調査で検出された遺構は、万寿寺の西側境となる堀を中心に、井戸や土坑・礎石建物が検出された。こうした遺構をほぼ検出順にその概要を述べると、表土除去後に最初に検出されたのは遺構をバックした整地土層である。この土層を掘り下げると、最初に万寿寺境内にあたる場所で土坑や柱穴群検出された。これらの遺構の中には14・15世紀代から16世紀後半の土坑が認められ、フィゴの羽口、埴塙・金鉄などがまぎって出土した土坑も含まれる。

次に検出されたのが、礎石建物遺構、焼土層、瓦や礫を敷詰めた遺構である。こうした遺構は、万寿寺の西側境の堀を埋め立てた範囲の中で検出され、堀が埋め立てられた最後の段階のものであることが理解できた。特に礎石建物の南側に広がる焼土は出土遺物や層位的な関係から、天正14年（1586）の島津氏の府内侵攻時のものと推定した。礎石建物は第2南北街路を入口として建てられており、導入部分は拳大の石が敷詰められていた。瓦や礫を敷詰めた遺構は焼土の南側で検出され、その南側は、万寿寺の堀を横断するように積まれた石積みで区切られていた。

こうした遺構を掘り下げるとさらに下位で、前段階の礎石建物が検出された。この礎石建物は、天正14年の島津氏



第3-2図 府内町跡第43次調査区発掘状態実測図 (1/150)

鍛冶遺構

礎石建物

島津氏侵攻

石積み

五輪塔

侵攻に起因すると考える焼土層より下位にあり、同じ位置に同じように第2南北街路側からを入口にし、導入部分は小石を敷詰めた状況であった。この礎石建物を建設するにあたり、万寿寺の堀がある程度埋まった状態の時期に、堀を東西に横断するように川原石を積上げた石積みが検出された。さらに、その南側には堀の中に川原石を多量に投棄し、埋め立てた状況が検出され、その南端も東西に横断する状況の石積みが確認できた。その南側にも、凝灰岩製の五輪塔などの石塔の部材を上面が平坦になるように並べられ、集中的に埋め立てられた跡も検出された。

こうした、石積みや、埋め立ての石を除去すると、万寿寺の堀を埋め立てる際に最初に構築された南北方向の石積みが検出された。その広がりには、府内町跡第34次調査区と接続する位置に設置したH-63区でも確認され、埋め立て事業の初期の状況が確認された。

また、第2南北街路を覆っていた石敷きを除去し、地山を検出すると、万寿寺の堀に削られた土坑群を検出した。これらの土坑の規模や形状は一定しておらず、中からは土器や陶磁器などが出土し、廃棄土坑の一種と考えられる。その掘削時期は、明らかに第2南北街路整備以前、万寿寺の堀の掘削以前に掘り込まれたことは確実である。

南北方向に掘削された万寿寺の堀の発掘調査は、東側のラインを把握し、礎石建物の調査や、その基礎となる埋め立てられた川原石群や阿蘇溶結凝灰岩製の五輪塔の部材を掘り出しながら進んだ。こうした構築物を除去すると、その下位は低湿地となっており、植物性の部材による漆碗や曲げ物などの遺物や動物骨などが、良好な保存状態で出土した。

井戸

万寿寺の堀の調査を完了し、底面を清掃中検出されたのが、湧水部に曲げ物を置き、立板を方形に組み合わせ井筒とした井戸である。こうした状況から、井戸の掘削時期は、万寿寺の堀以前であることは間違いない。

以上の遺構は、万寿寺の堀の下部で検出された井戸と一部の土坑以外は、出土遺物から16世紀後葉の20数年の間の出来事と考えられる。また、この場所を示すと思われる古文書もあり、そうした資料を合わせて報告を行う。

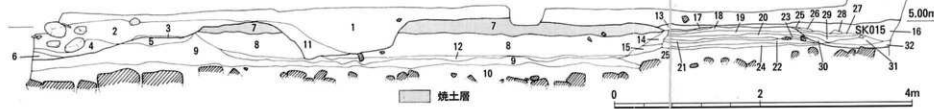
3. 土層

府内町跡第43次調査で観察された土層で、重要なものは、調査区の西側の壁面と万寿寺の堀の南北方向の縦断土層、万寿寺の西境の堀と南北街路との関係を示す土層である。第3-3図に図示した第2南北街路上の街路に沿った土層である。水田基盤層から下位の土層の堆積状況は、焼土層上面に第2南北街路の上面を覆った準大の礫が配石されている。また、SK049の上面に図示している石列は焼土層下で検出された第2南北街路面の敷石である。さらに、その下部で検出されたのが土坑群である。このように、土層図からも土坑群→最初の南北街路の敷石→天正14年（1586）の焼土層→復興後の第2南北街路の敷石の順を見ることが出来る。

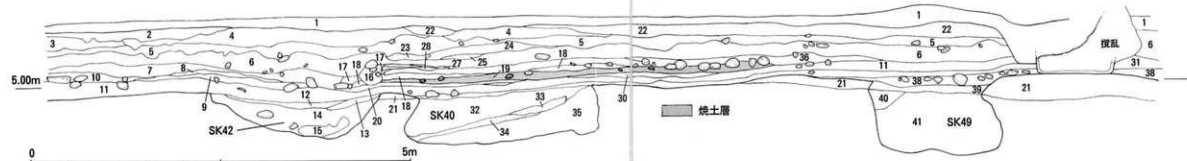
第3-4図は、万寿寺の堀の南北方向の縦断土層であるが、焼土の面から掘り込まれた版築状の土層が観察され、その上面に第2南北街路の焼土層上面の敷石面を入口とする礎石が設置されていた。

また、焼土層の下面は平坦で、焼土層以前と考えられる礎石建物の南側で検出された川原石で埋め立てられた部分の上面にあたる。さらに南端は、焼土層を切って斜めに土層が堆積しており、焼土層形時以後に埋め立てられたことを示している。この部分の上面に瓦と礫を敷詰めた面があり、土層図が切れた部分に石積みが構築されている。

この土層図からは、万寿寺の堀を石積みや川原石で埋め立てたあとに、礎石建物を建て、その南側も川原石で埋め立て基礎とし、その上に土砂でさらに埋め立て平坦面を設ける。そこに島津氏侵攻を受け、その後版築状の基礎を整備し再度礎石建物を建てると同時に、南側も焼土層の上に土砂を乗せて嵩上げし、さらに南に拡張していることが判る。



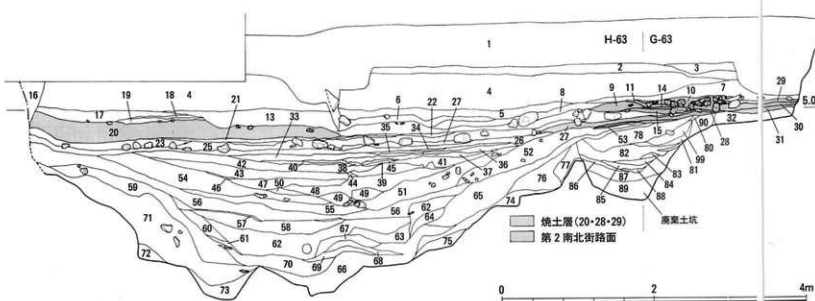
第3-3図 府内町跡第43次調査SK023上部土層実測図(1/50)



第3-4図 府内町跡第43次調査西壁土層実測図(1/50)

- | | | |
|----------------------------------|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 Huse 7.5YR/2/1 黒色(粘質 餅作土) | 14 Huse 2.5Y4/1 黄灰色(遺物・小石の混入する粘質土) | 26 Huse 7.5YR/4/1 灰色(砂利を少し含む砂質土) |
| 2 Huse 7.5YR/6/2 灰褐色(粘質 餅作土) | 16 Huse 10YR/4/2 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 27 Huse 10YR/7/1 灰色(黒い砂質土) |
| 3 Huse 7.5YR/5/2 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 18 Huse 10YR/4/1 暗褐色(灰・砂混入の粘質土) | 28 Huse 7.5YR/1/1 暗灰色(遺物を含む粘質土) |
| 4 Huse 7.5YR/5/2 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 17 Huse 10YR/3/4 暗褐色(粘土を含む粘質土) | 29 Huse 7.5YR/1/1 暗灰色(遺物を含む粘質土) |
| 5 Huse 7.5YR/6/6 黒褐色(遺物を含む粘質土) | 18 Huse 10YR/6/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 30 Huse 7.5YR/1/1 暗灰色(黒い砂質土) |
| 6 Huse 7.5YR/5/4 黒褐色(遺物を含む粘質土) | 19 Huse 10YR/6/2 暗褐色(粘土を主とし砂砂・遺物を含む) | 31 Huse 7.5YR/1/1 暗灰色(砂利を少し含む砂質土) |
| 7 Huse 10YR/6/1 暗褐色(下より粗い砂り少くない) | 20 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・砂質土 面粘土) | 32 Huse 10YR/1/1 暗褐色(小石を含む粘質土) |
| 8 Huse 10YR/6/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 21 Huse 10YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土 地盤) | 33 Huse 10YR/1/1 暗褐色(黒い砂質土) |
| 9 Huse 2.5Y2/2 黒褐色(砂粒を含む粘質土) | 22 Huse 7.5YR/1/1 黒褐色(灰を含む粘質土) | 34 Huse 10YR/2/2 黒褐色(遺物を含む粘質土) |
| 10 Huse 2.5Y2/1 黒褐色(遺物を含む粘質土) | 23 Huse 7.5YR/1/1 黒褐色(遺物を含む粘質土) | 35 Huse 10YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 11 Huse 10YR/7/1 灰褐色(砂利混じりの砂質土) | 24 Huse 7.5YR/4/1 褐色(黒い砂質土 水田土) | 36 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 12 Huse 10YR/5/1 暗灰色(少量の小石が混入) | 25 Huse 7.5YR/1/1 明褐色(灰・砂質土 水田土) | 37 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(遺物を含む粘質土) |

- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------|
| 1 Huse 7.5YR/1/1 暗灰色(粘質土) | 17 Huse 10YR/5/1 暗灰色(遺物を含む粘質土) |
| 2 Huse 7.5YR/2/2 暗灰色(一部粘土を含む粘質土) | 18 Huse 10YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 3 Huse 10YR/1/1 暗褐色(黒い砂質土・粘りを含む) | 19 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 4 Huse 10YR/2/2 灰褐色(灰・砂混入の粘質土) | 20 Huse 10YR/3/4 暗褐色(砂質) |
| 5 Huse 10YR/4/4 暗褐色(砂り少くない粘質土) | 21 Huse 10YR/4/4 暗褐色(砂質) |
| 6 Huse 7.5YR/1/2 灰褐色(灰・粘土・遺物を含む) | 22 Huse 10YR/2/2 暗褐色(粘質) |
| 7 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(粘土・灰・砂・遺物を含む) | 23 Huse 10YR/2/2 暗褐色(粘質) |
| 8 Huse 2.5Y4/2 暗褐色(粘質土) | 24 Huse 10YR/2/2 暗褐色(灰・砂混入の粘質土) |
| 9 Huse 2.5Y3/1 暗褐色(粘質土) | 25 Huse 2.5Y4/1 暗褐色(粘質/砂混入) |
| 10 Huse 2.5Y3/1 暗褐色(黒土の塊を含む粘質土) | 26 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 11 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(粘土を主とし粘土・砂・面粘土) | 27 Huse 10YR/2/2 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 12 Huse 7.5YR/1/1 暗褐色(シルト状で水砂が多い粘質土) | 28 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 13 Huse 10YR/2/2 暗褐色(灰・粘土を含む粘質土) | 29 Huse 7.5YR/1/1 暗褐色(灰・粘土を含む) |
| 14 Huse 10YR/2/2 暗褐色(灰・粘土を主とする粘質土) | 30 Huse 2.5Y4/1 暗褐色(砂質/粘りを含む) |
| 15 Huse 10YR/2/2 暗褐色(灰・粘土を含まない) | 31 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 16 Huse 10YR/3/3 暗褐色(砂粒を含む粘質土) | 32 Huse 10YR/2/2 暗褐色(灰・遺物を含む) |



第3-5図 府内町跡第43次調査G-63南区南壁土層実測図(1/50)

- | | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 1 Huse 7.5YR/4/1 褐色と暗灰色が混じる探掘層 | 31 Huse 10YR/3/1 黒褐色(遺物・緑石粒を含む硬面化面) | 62 Huse 2.5YR/2/1 黒色(水沖を含む粘質土) |
| 2 Huse 7.5YR/5/4 褐色(マンガン)の混入する砂質層 | 32 Huse 10YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 63 Huse 10YR/5/2 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 3 Huse 7.5YR/4/2 灰色(黒い砂質土) | 33 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 64 Huse 10YR/2/2 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 4 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 34 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 65 Huse 10YR/2/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 5 Huse 7.5YR/2/2 黒褐色(砂粒を含む粘質土) | 35 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 66 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 6 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(砂粒を含む粘質土) | 36 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 67 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 7 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(砂粒を含む粘質土) | 37 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 68 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 8 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(砂粒を含む粘質土) | 38 Huse 10YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 69 Huse 2.5YR/2/1 黒色(水沖を含む粘質土) |
| 9 Huse 7.5YR/4/4 褐色(緑石粒を含む粘質土) | 39 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 70 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(砂粒の混じり粘質土) |
| 10 Huse 10YR/5/4 黄褐色(遺物を含む粘質土) | 40 Huse 10YR/4/4 灰褐色(遺物を含む粘質土) | 71 Huse 10YR/2/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 11 Huse 7.5YR/4/4 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 41 Huse 10YR/2/2 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 72 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 12 Huse 10YR/1/1 暗褐色(緑石粒を含む粘質土) | 42 Huse 10YR/4/4 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 73 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰を含む粘質土) |
| 13 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(緑石粒を含む粘質土) | 43 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・緑石粒を含む粘質土) | 74 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰を含む粘質土) |
| 14 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(緑石粒を含む粘質土) | 44 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・緑石粒を含む粘質土) | 75 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・砂粒を含む粘質土) |
| 15 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(緑石粒を含む粘質土) | 45 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・緑石粒を含む粘質土) | 76 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 16 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(緑石粒を含む粘質土) | 46 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・緑石粒を含む粘質土) | 77 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 17 Huse 10YR/4/4 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 47 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) | 78 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(砂粒の混じり粘質土) |
| 18 Huse 10YR/4/4 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 48 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) | 79 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(砂粒の混じり粘質土) |
| 19 Huse 10YR/3/3 明褐色(粘土を主とする) | 49 Huse 9YR/2/1 黄褐色(遺物を含む粘質土) | 80 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(灰・粘土を含む粘質土) |
| 20 Huse 5YR/5/8 明褐色(粘土を主とする) | 50 Huse 9YR/2/1 黄褐色(遺物を含む粘質土) | 81 Huse 7.5YR/3/3 暗褐色(灰・粘土を含む粘質土) |
| 21 Huse 7.5YR/2/2 文相14年の焼土層 | 51 Huse 2YR/1/1 黄褐色(砂利・粘土を含む粘質土) | 82 Huse 10YR/4/4 暗褐色(灰・砂利を含む粘質土) |
| 22 Huse 7.5YR/1/1 暗褐色(遺物と緑石粒を含む粘質土) | 52 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 83 Huse 10YR/4/4 暗褐色(砂質) |
| 23 Huse 10YR/3/3 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 53 Huse 10YR/4/4 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 84 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 24 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 54 Huse 2YR/1/1 黄褐色(遺物・灰・水層を含む泥炭層) | 85 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 25 Huse 10YR/2/2 暗褐色(小石を含む粘質土) | 55 Huse 2.5YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) | 86 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 26 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) | 56 Huse 2YR/1/1 黄褐色(遺物を含む粘質土) | 87 Huse 10YR/1/1 暗褐色(砂質) |
| 27 Huse 10YR/2/2 暗褐色(小石を含む粘質土) | 57 Huse 2YR/1/1 黄褐色(遺物を含む粘質土) | 88 Huse 10YR/1/1 暗褐色(遺物を含む粘質土) |
| 28 Huse 7.5YR/4/3 暗褐色(粘土を含む層 20cm厚) | 58 Huse 2.5YR/2/2 暗褐色(粘土を含む粘質土) | 89 Huse 10YR/4/4 暗褐色(粘りを含む粘質土) |
| 29 Huse 10YR/2/2 暗褐色(粘土を含む層 20cm厚) | 59 Huse 10YR/2/2 灰褐色(灰・水沖・砂粒を含む粘質土) | 90 Huse |
| 30 Huse 7.5YR/2/2 暗褐色(粘土を含む粘質土) | 60 Huse 10YR/1/1 暗褐色(灰・水沖を含む粘質土) | |

第3-5図の土層図には、万寿寺の堀と南北街路との関係を示すもので、第2南北街路下に土坑が掘削されておりその後万寿寺の堀が掘削され、埋め立てられると同時に最初の第2南北街路の整備が行われている。そして島津氏侵攻に起因すると考える焼土層が、堀の上面に形成され、再度第2南北街路が礫を含みながら為上げされ、整備されていることが見て取れる。

第2節 遺構と遺物

1. 井戸

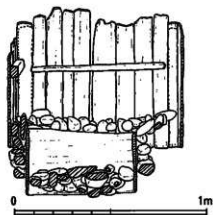
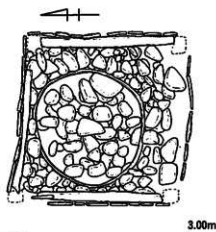
SE036

万寿寺の堀 (SD012) の下面で検出された井戸である。湧水部に直径60cmの曲物を設置し礫を敷詰めている。そしてその周囲は、10枚前後の立板を横棧でつないだ一辺85cmの方形の井戸枠で囲んでいる。曲物と井戸枠の間も小礫で埋めている。

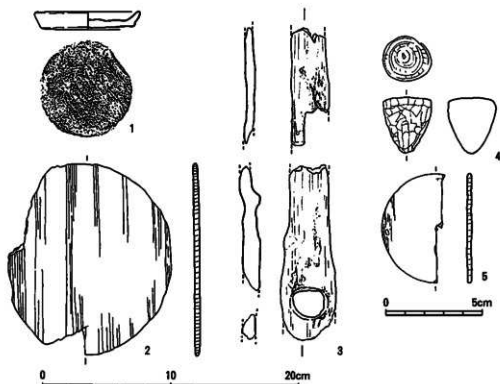
第3-36図に図示した遺物は井戸枠内から出土したものである。1は口径7.8~8.3cmの歪んだ糸切底の在地系土師質土器の皿である。2は直径15cm、5は5.6cmの曲げ物の底と考えられる。3は穴のある扁平な棒状の木器である。4は独楽状に先端を尖らせた木器である。

時期は、井戸の形態や1の皿が出土していることから、14世紀代と考える。

曲物



第3-6図 SE036実測図 (1/20)



第3-7図 SE036出土遺物実測図 (1/50)

2. 溝及び関連遺構

SD012

調査区の中央部で南北方向に検出されたのが、SD012とした万寿寺の西側を区切る堀である。第2南北側に掘り込まれた土坑群を削り構築されており、その規模は、第3-2・3-8図に図示したように検出面での幅6～7mで、深さは約2.1m掘り込まれている。堀の形状は、万寿寺側が堀底から約40度の角度で掘り込まれ、底近くの裾部分で角度を変え、ほぼ垂直になっている。これに対し、西側の第2南北街路方向は、約25度と緩やかである。また、掘り込み面も、東側の万寿寺側が直線的で規格的であるが、西側は不規則である。さらに断面形態は底幅が約1.5mの概ね逆台形であるが、底には南北方向の行く筋もの細い溝が刻まれている。

遺構の規模が大きいこともあり、内部からは多量の遺物が出土している。しかも、底面に近い約1mは水分を多量に含む低湿地状態となっており、植物素材の遺物や、動物骨なども良好な保存状態で出土した。こうした遺物は第3-9～3-35図に図示した。

第3-9・3-10図は貿易陶磁器である。第3-9図1～16、第3-10図1～6は中国産の青花である。第3-9図1は長頸壺の口縁部である。2～8・14・16は碗であり、底部は「饅頭心」の碗の系統であり、小野分類の碗E群にあたる。9～13は皿である。9・10は口縁部が屈曲する「つば皿」で小野分類の皿F群であり、12・15は皿E群である。16は漳州窯系で、1～15は景德鎮窯系である。第3-10図1～5は碁筭底の皿で、小野分類の皿C群である。これらの青花は漳州窯系である。

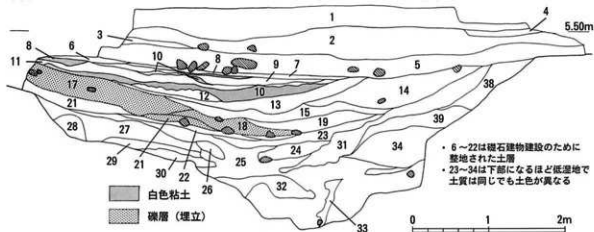
第3-10図7～9は白磁の皿である。口縁部は外反し、畳付き部は露胎となっている。10～17は各種の中国産青磁である。10～12は青磁碗で、14・15は青磁の輪花皿である。第3-10図15は青磁の菊皿で、13は青磁の大皿、17は香炉である。以上の青磁は龍泉窯系であるが、16の青磁は器壁も薄く色調も異なり景德鎮窯系と考える。18・19は朝鮮王朝産陶器である。18は高麗青磁の瓶の胴部と考えられ、19が斗々屋茶碗である。20は中国産褐釉陶器の小壺の口縁部で、耳が付く。21は華南三彩の水注であるが、低湿地に包蔵されていたため、銀化し、特徴的な緑色の色彩は失われており、灰黒色をしている。22は翡翠釉の小皿である。

華南三彩

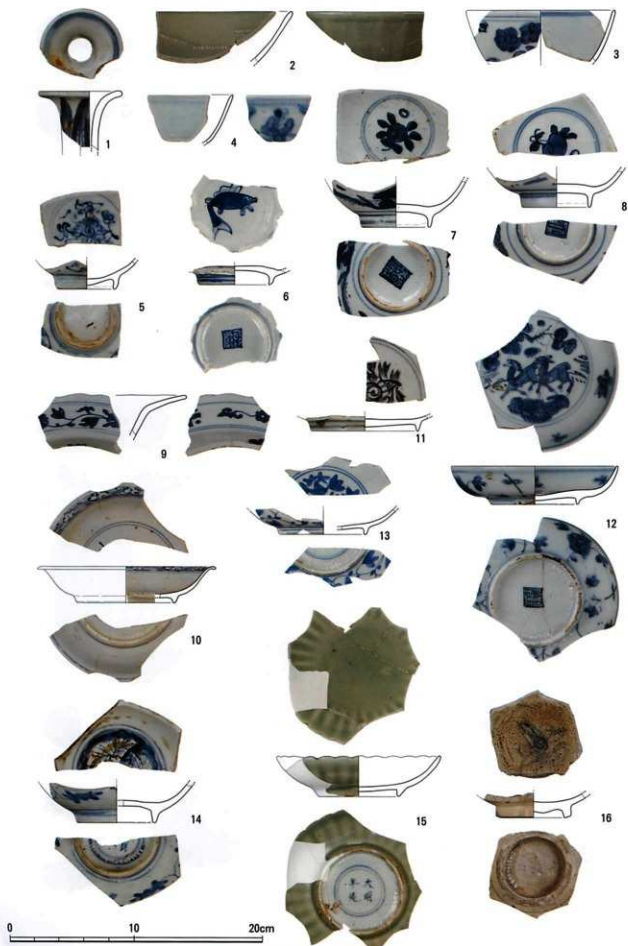
黒薬

焼塩壺

第3-11図1は軟質施釉陶器である黒薬の口縁部である。2は瀬戸美濃産の天目茶碗である。第3-11図3～61、第3-12図1～36は非クロコ系土師質土器である京都系土師器である。第3-11図3～5は小型で口縁部が直立する形態である。焼塩壺の蓋の可能性が高い。京都系土師器は6～18に図示したように口径が約8cmのグループを最小とし、第3-11図28の16cm前後を最大とし五法量に分化している。こうした京都系土師器の中には灯明皿として再利用されたものも多い。また、在地化する



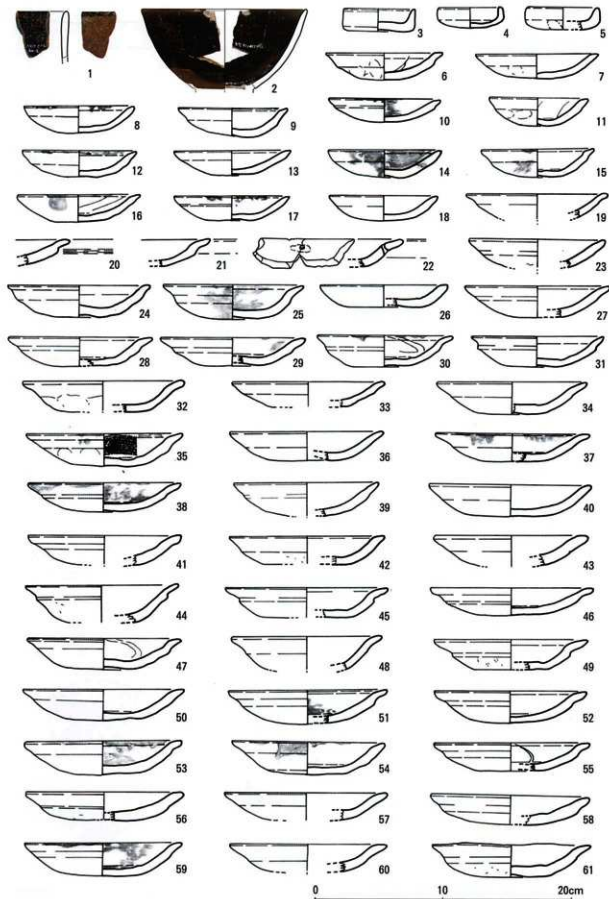
第3-8図 府内町跡第43次調査H-64区北壁土層実測図(1/50)



第3-9図 SD012出土物実測図1 (1/3)

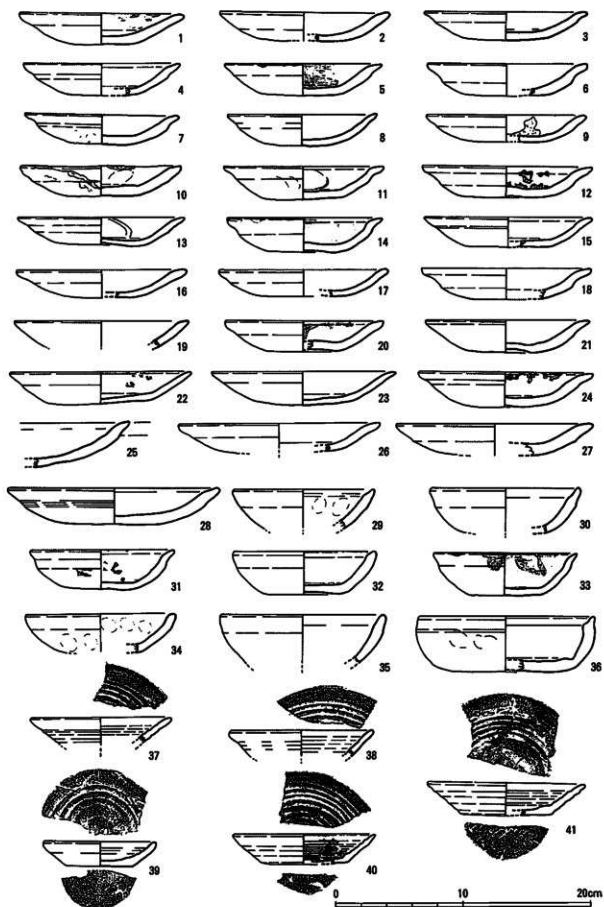


第3-10図 SD012出土遺物実測図2 (1/3)

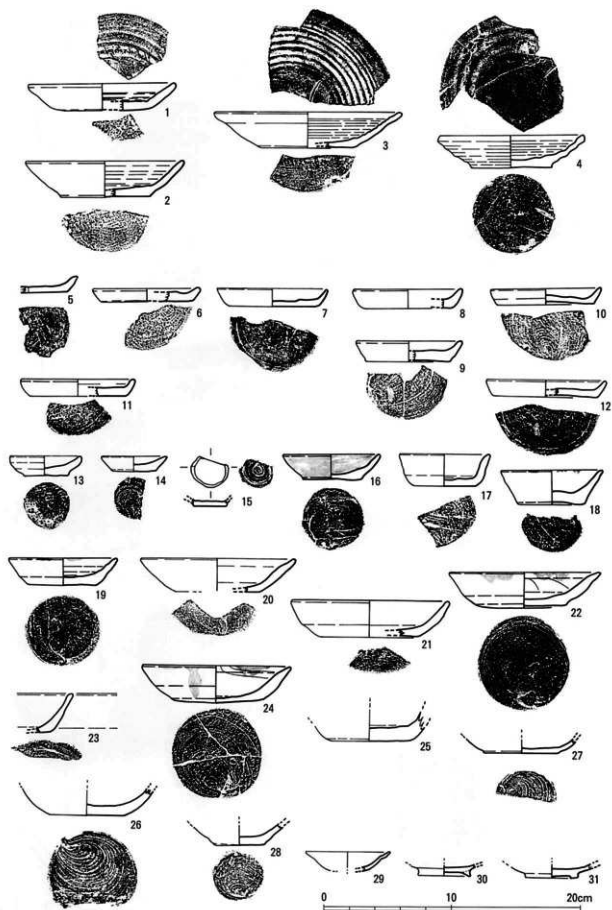


第3-11図 SD012出土遺物実測図3 (1/3)

第2節 遺構と遺物

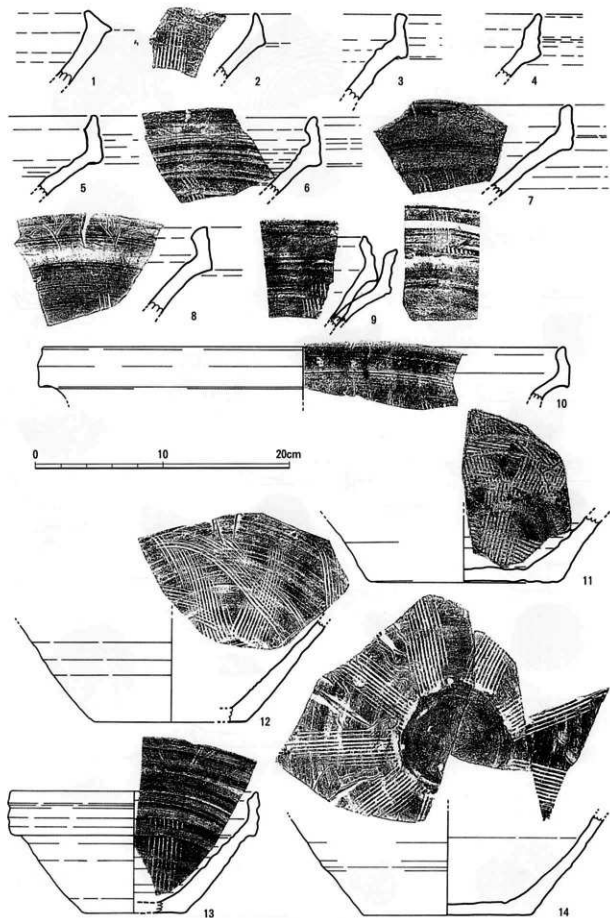


第3-12图 SD012出土遺物実測图4 (1/3)

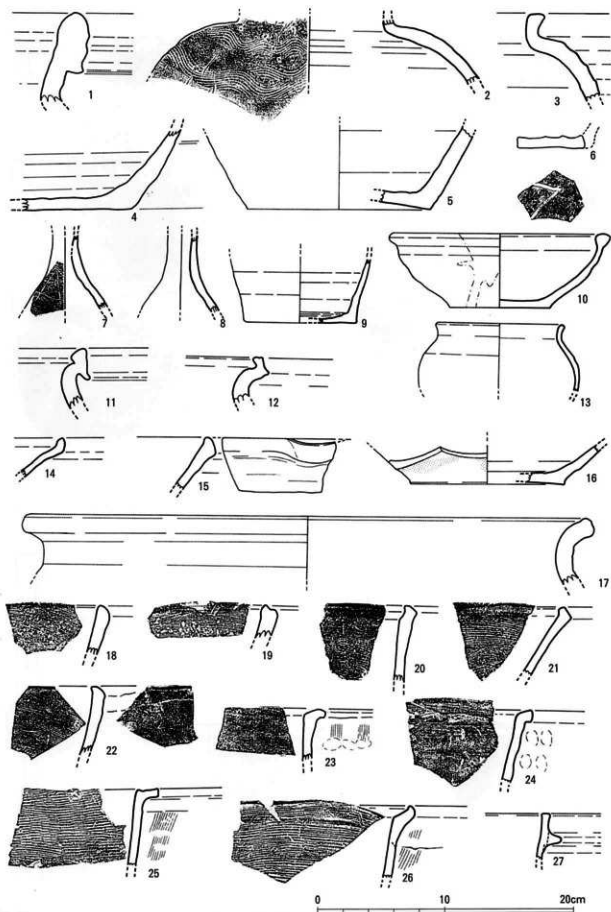


第3-13図 SD012出土遺物実測図5 (1/3)

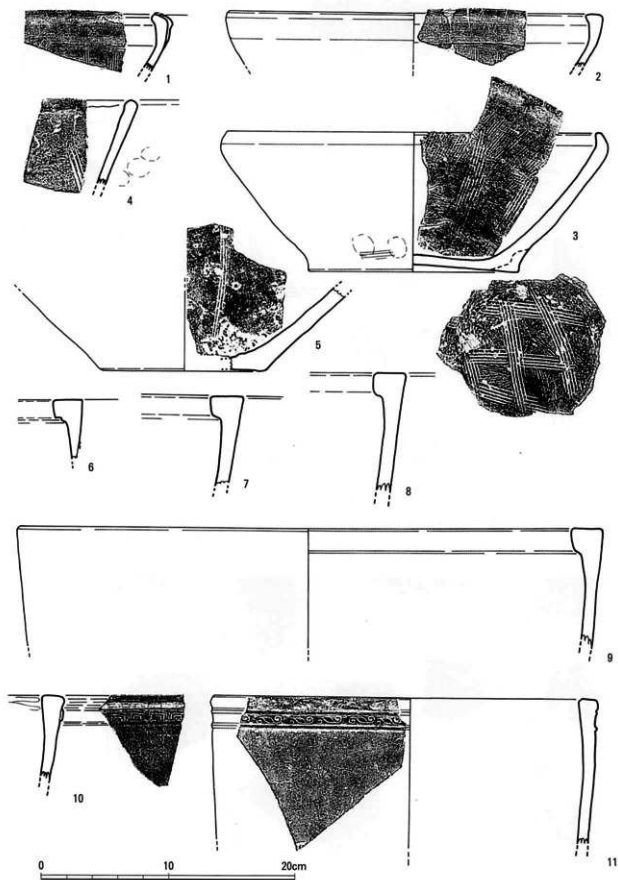
第2節 遺構と遺物



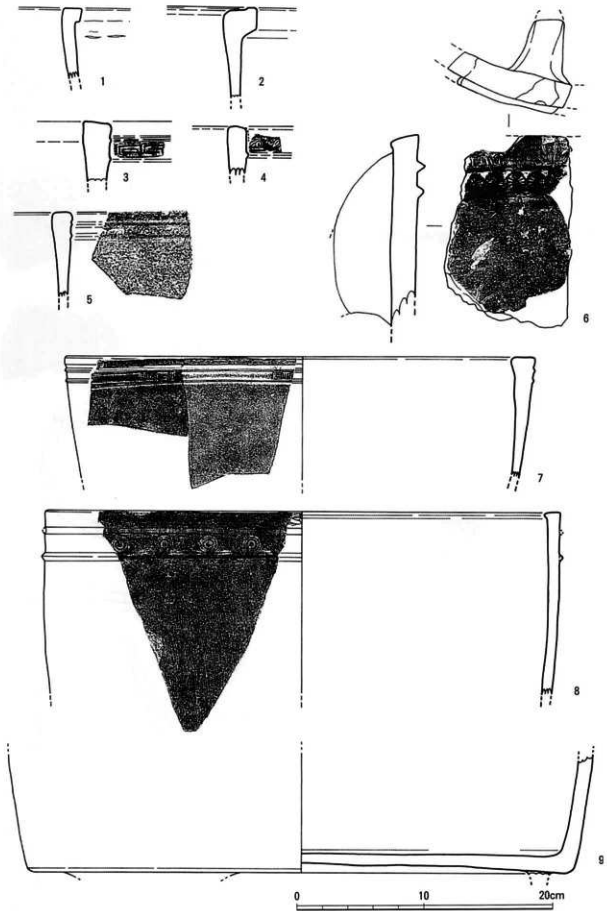
第3-14图 SD012出土遺物実測图6 (1/3)



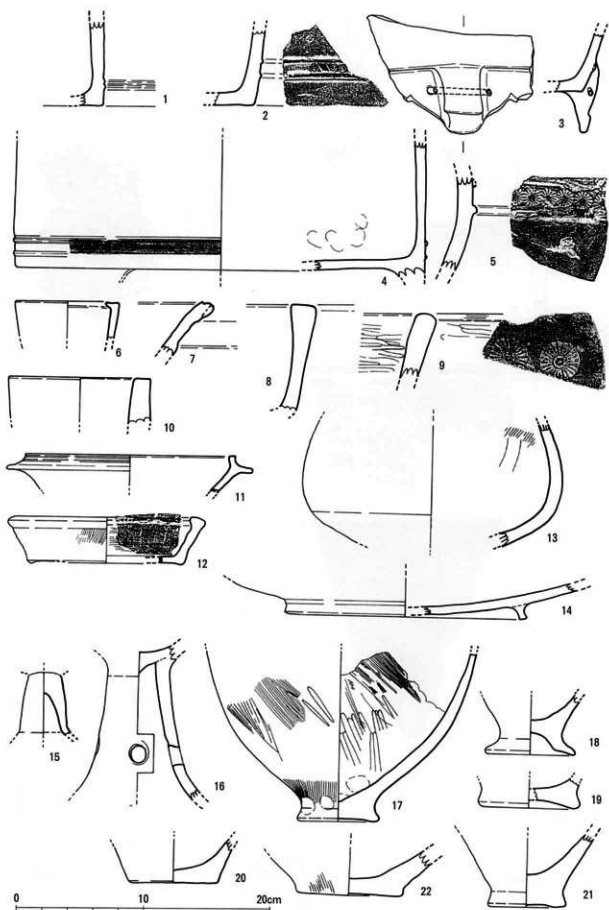
第3-15図 SD012出土遺物実測図7 (1/3)



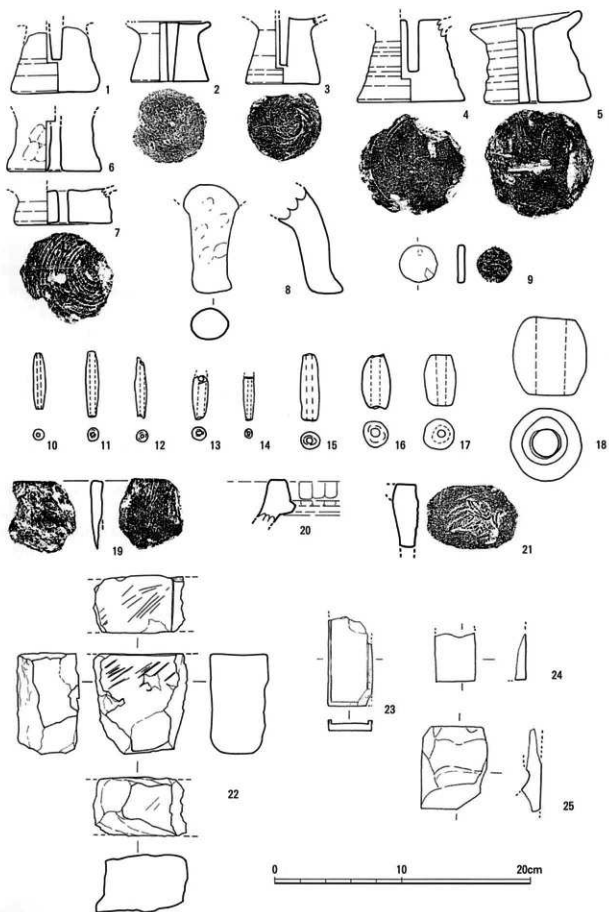
第3-16図 SD012出土遺物実測図8 (1/3)



第3-17図 SD012出土遺物実測図9 (1/3)



第3-18図 SD012出土遺物実測図10 (1/3)



第3-19図 SD012出土物実測図11 (1/3)

に従い、第3-12図29～36のように口径に対し器高が高い環状の形態になるものも出現する。

第3-12図37～41・第3-13図1～4の9点は内面にロクロ目の残る在地系土師質土器である。内面にはラセン状に段が付く。器形は口径に比較すると底径が小さい。こうした土器も口径が9cm前後から15cm前後まで京都系土師器ほど明確ではないが、法量分化が認められる。

第3-13図5～26も在地系土師質土器で、底部は糸切底であるが、口径と底径の差が前述の在地系土師質土器と異なる。機種は口径が小さく器高が低い5～10の皿状のものと、16～26までの口径が大きく器高も高い環状の2種類がある。こうした中、13・14の器形は小型の環の形態をする。

ヘソ皿

27は器壁が薄い糸切底の白色系土師質土器である。29は白色をした薄手の非ロクロ系土師質土器であり、京都系土師器のヘソ皿の可能性が強い。30・31は小さな高台が回り、胎土は白色をしていることから、吉備系土師器と考える。

吉備系土師器

第3-14図は備前焼の擂鉢である。口縁部の形態は各種あり、新旧含まれる。1は口縁端部が肥厚し上方に延びている。2になると口縁外面が拡大し、3になると帯状粘土を巡らせ、4・5の口縁部はその外面に凹線が走り、口縁部内端部にも凹線状に窪む。こうした、口縁部の形態変化に伴い、内面のすり目も変化する。2や14のすり目は、底部から口縁部にかけて放射状に施されている。これに対し、11・12はすり目が、斜め方向に施され、不規則になり、すり目が交差する状態になる。前者のすり目は1～3、後者は4・5の口縁部形態に施される。

第3-15図1～9は備前焼の各器種である。1・4は甕で、2・3・5は甕である。6は平底の底部にヘラ記号がある。7・8は徳利と考えられ、7にはヘラ記号がある。9・13も備前焼と考えられるが、10は貿易陶磁で中国産の焼結陶器の鉢である。11・12は常滑焼の壺の口縁部である。14～16は東播系須恵器の鉢の口縁部である。15には注口部が観察される。17は須恵質土器の甕の口縁部である。18～27は鉢または土鍋の口縁部と考える。口縁部の形態は、18～22は直口するが、23～26は外反する。器面は内面が横方向、外面は縦方向の刷毛目で、外面には指圧痕が残る。27は口縁部外面に鈎が付く土鍋である。

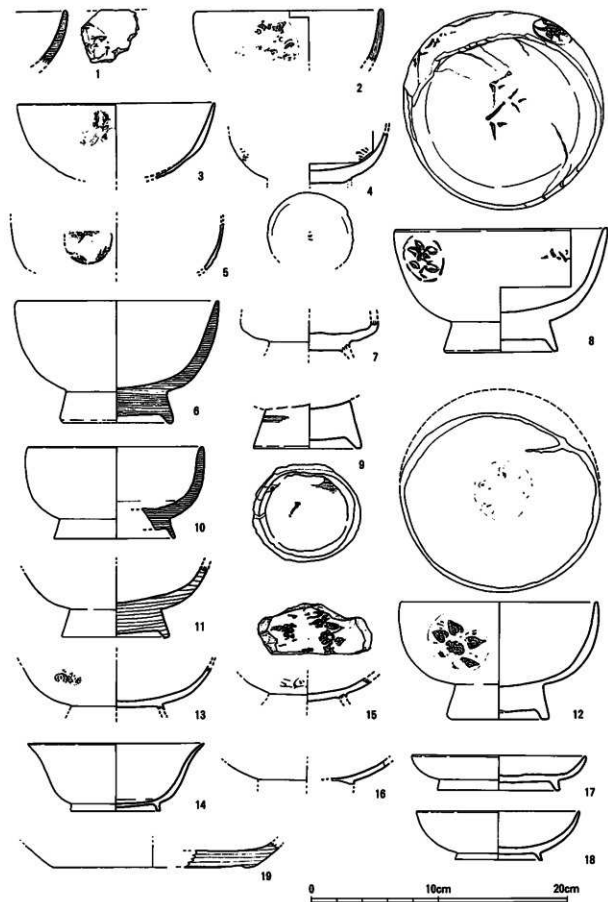
中国産焼結陶器

第3-16図1～5は瓦質土器の擂鉢である。4は口縁部が直口するが、1～3は内湾する。3の内面は刷毛目で器面調整した後、すり目が付けられ、内底部には格子状に施文されている。5は底部から口縁部にかけて放射状にすり目が付けられている。

第3-16図6～11と第3-17図・第3-18図1～4は口縁部が直口する瓦質土器で、火鉢と考える。第3-16図6～9は口縁部内面に向かい断面「コ」の字状に肥厚している。器面は横方向のヘラ磨きで仕上げられている。10・11は口縁部が僅かに肥厚する。外面には平行する二条の断面三角形の細い突帯が走り、その間に、10は雷文が、11は「S」字状の唐草文のスタンプが連続して施文されている。第3-17図1・2は口縁部外面が断面「コ」の字状に肥厚する。3～8は口縁部が肥厚し、その外面に平行する二条の断面三角形の細い突帯が走り、その間に3～5・7は雷文、6は菊花文、8は同心円文のスタンプ文が連続して施文されている。また、6は内面に半月形の耳が付けられている。

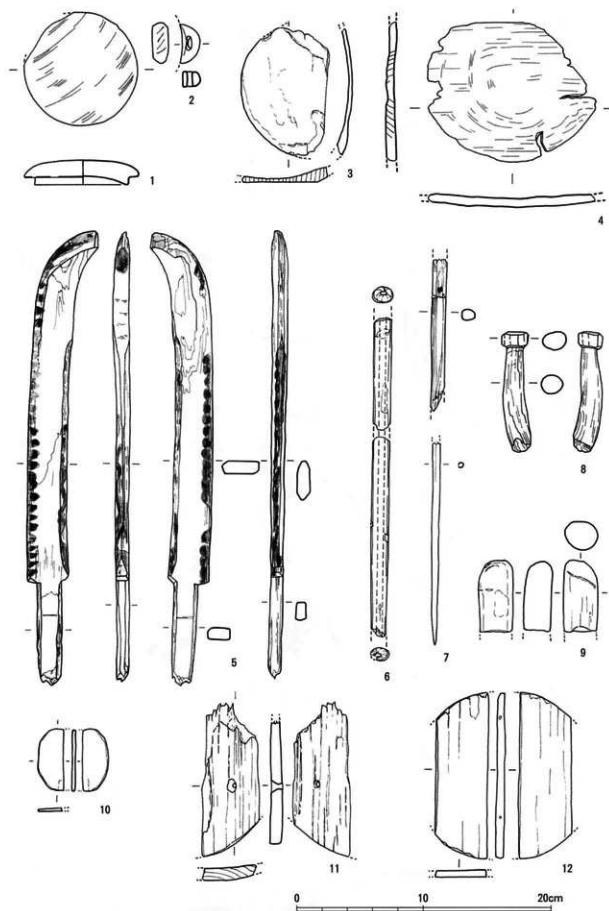
第3-17図9と第3-18図1～4はこうした、口縁部を持つ火鉢の底部である。第3-17図9には文様はないが、脚が付けられていた痕跡が残る。第3-18図1には底部上位に細い断面三角形の突帯が隣接して二条走る。2・4は口縁部外面に付けられる細い突帯とスタンプ文が底部上位に施文されている。4には脚が付き、3は横方向に細い穿孔がある脚が付く。

第3-18図5～14は各種の瓦質土器である。5は内湾する鉢の外面に細い三角突帯が二条走り、その間に菊花文が施文されている。6は口縁部の端部が内側に突き出る香炉である。7～9も鉢と考えられる。8は口径に比較すると器高が低い鉢である。9の外面には菊花文のスタンプが施文されている。10は器壁の厚い口縁部であるが器種は不明である。11は複合口縁状の口縁部をしている。12は口縁部内面が肥厚する小型の鉢である。13は胴部が球状に張る器種である。14は底部に高台が

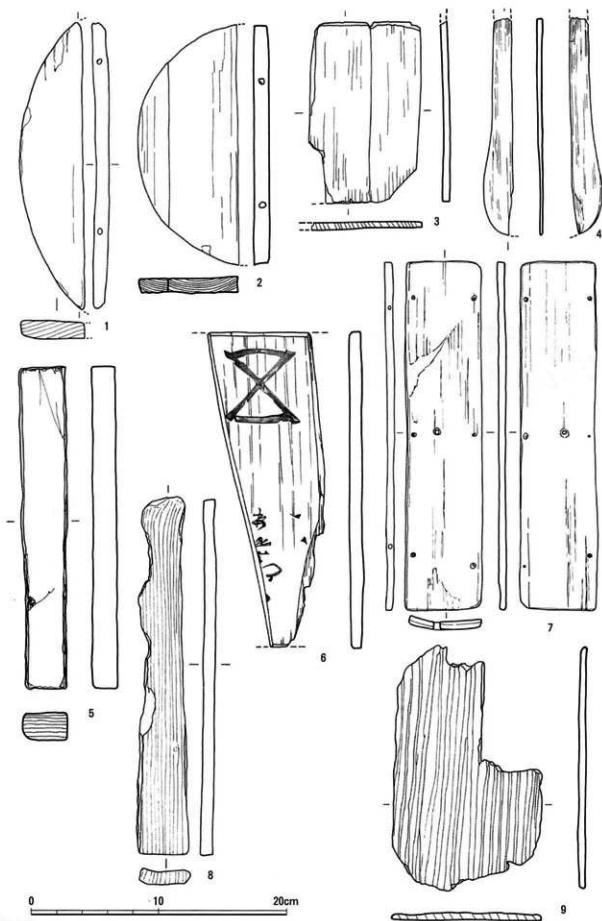


第3-20図 SD012出土遺物実測図12 (1/3)

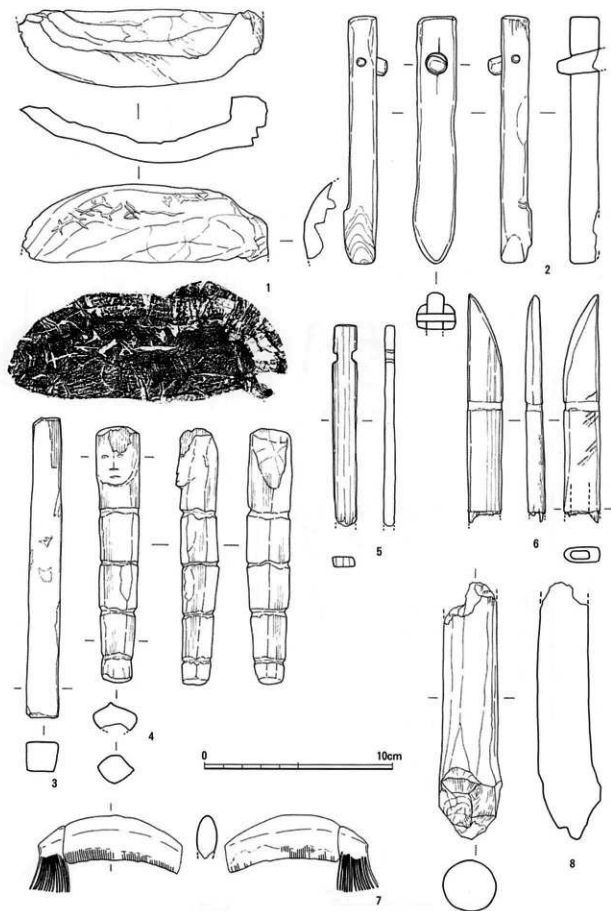
第2節 遺構と遺物



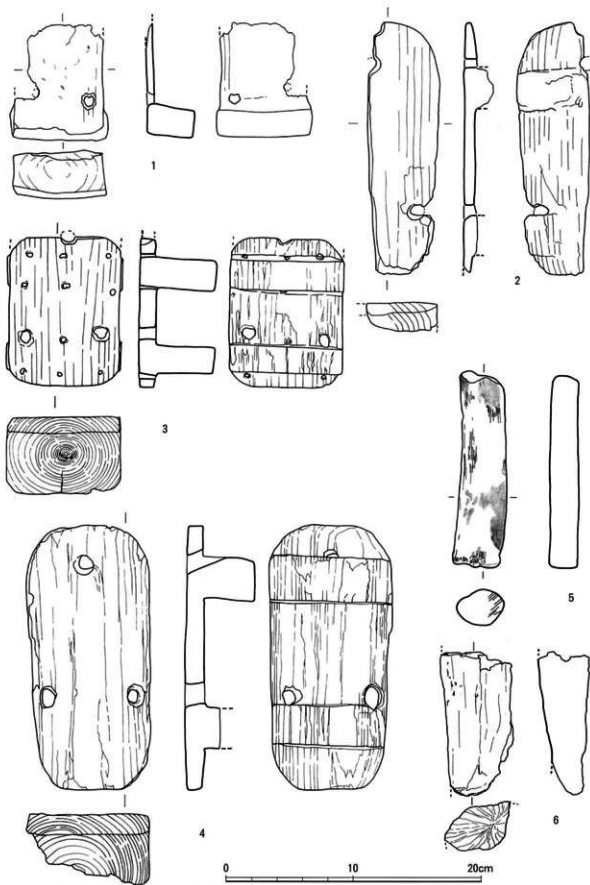
第3-21图 SD012出土遺物実測図13 (1/3)



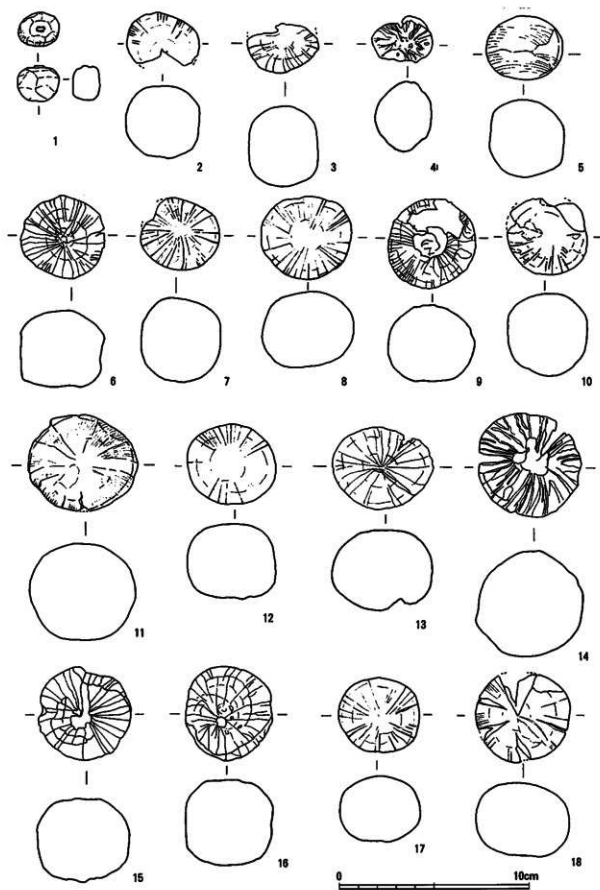
第3-22図 SD012出土遺物実測図14 (1/3)



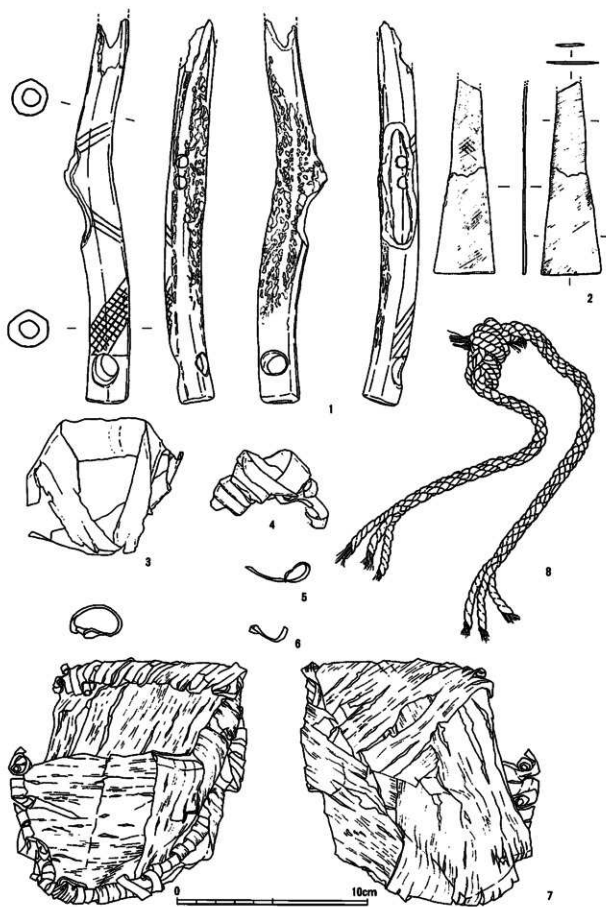
第3-23図 SD012出土遺物実測図15 (1/2)



第3-24図 SD012出土遺物実測図16 (1/3)



第3-25図 SD012出土遺物実測図17 (1/2)



第3-26図 SD012出土遺物実測図18 (1/2)

巡る瓦質土器で、盤と考える。

弥生土器 第3-18図15～21は遺構と直接的な関係はないが、弥生土器である。堀を掘削する際に出土したことも考えられる。15・16は高坏の脚部で、15は脚端部が屈曲し「ハ」の字状に開く。16は中央部に焼成前の円形の穿孔がある。17～21は甕形土器の底部である。器面は磨耗しているものが目立つが、17は内外面が刷毛目調整され、さらに内面はへら磨きされている。18の底部は端部が外側に広がり、脚状になる。22は底部から胴部にかけての角度から壺形土器と考える。

燗台 第3-19図は土製品と石製品である。1～7は燗台と考える遺物で、ロクロ成形により造るためか、底部には糸切痕が残る。胴部は円柱状に仕上げ、外面は撫で調整しているが、一部には凹線状のロクロ目が残る。上面は受け皿のように、罎が広がり、中央部が窪む。その中心に焼成前の穿孔があり、底部まで貫通するものや途中で止まるものもある。同じ万寿寺の北側境になる堀を調査した府内町跡20次C区からは、この穴に木製の芯が刺さったまま出土した。

土器片加工品 8は土鍋の胴と考える。9は6.4gの土器片加工品で糸切底の底部を利用している。10～18は土罐である。形状は紡錘形をしているが、幾つかのサイズがある。10～14は幅が1cm前後で、15の幅は1.5cm、16・17は幅が2.5cm前後、18は6cmである。

石鍋 19・20は滑石製の石鍋である。20は口縁部外面に加工痕が残る、その下位に低い罎が巡る。21は瓦の加工品で、器面には植物をモチーフとした文様が陽刻されている。22は砥石の破片である。観察できる面は全て使用されている。23～25は硯の破片である。23の幅は3.4cmと小型であり、池の部分の欠く、24は硯の一部で、幅が3.1cmと23と同じように小型である。これに対し、25は池の部分のみの破片である。赤灰色をしている。

漆器碗 第3-20図は漆器碗である。1の碗は内面が赤漆、外面は黒漆で、赤漆で笹の文様が描かれている。木材の側面から挟んでいる。2の碗は内外面とも黒漆で、外面に赤漆による文様が描かれている。木材の木口側から挟んでいる。3は内面赤漆、外面黒漆で、赤漆による文様が施文されている。4も内面赤漆、外面黒漆で、赤漆による文様が胴部と底部に施文されている。5の内面は茶色に近い赤漆、外面黒漆で、赤漆による文様が胴部に施文されている。6は全体の器形を知ることが出来る漆碗である。器面の漆は剥がれているが、内面は赤漆で、外面は黒漆であることは判る。胴部の器壁に比較すると底部は厚く、周辺を僅かに高台風に仕上げている。7は土圧で重んだ漆碗である。高台部分と口縁部は欠けるが、内面は赤漆、外面は黒漆を塗布している。8は土圧で重んでいるが、ほぼ完全な形を残す漆碗である。内外とも黒漆で内面の見込み部と外面に赤漆で文様が描かれており、外面は丸囲いに枝に花と葉である。底部の厚さは2.2cmである。9は漆碗の底部である。厚さは2.4cmあり、一部に赤漆の痕跡が残る。10は木地のみで漆を塗った痕跡は認められない。11は口縁部を欠く碗である。内面は赤漆、外面は黒漆が塗布されている。12の漆碗は内外面とも黒漆で、見込み部と、胴部外面に丸で囲まれた中に木の葉状の文様が描かれている。

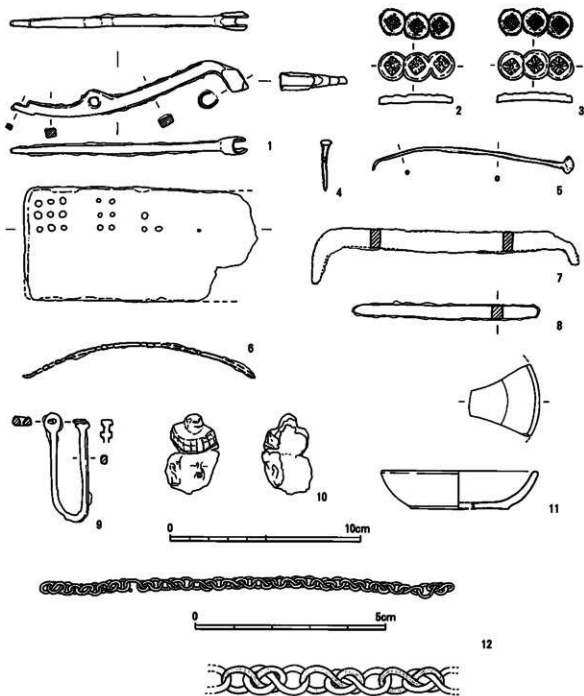
13・15・16は底部の薄い碗である。13は高台を欠くが、内面は茶色、外面は黒色の漆が塗られ、胴部外面に赤漆で文様が描かれている。15も高台を欠くが、内外とも黒漆が塗られ、赤漆で見込み部と外面に木の花や葉と思われる文様が描かれている。16は底部を欠くが内面は茶色の漆、外面は黒漆が塗られている。

14は口縁部が外反する薄手の漆碗である。器面は朱色をした漆を内外面に塗布しており、丁寧な仕上げである。17は漆塗りの高台付きの皿である。内外面とも朱色の漆塗りであるが、底部の高台から内側は黒漆である。18は高台付きの浅い碗である。器面は内外面とも朱色の漆塗りであるが、底部の高台から内側は黒漆である。19は大型の皿状の漆器である。内外面とも黒漆が塗られているが、一部熱を受けた痕跡が認められる。

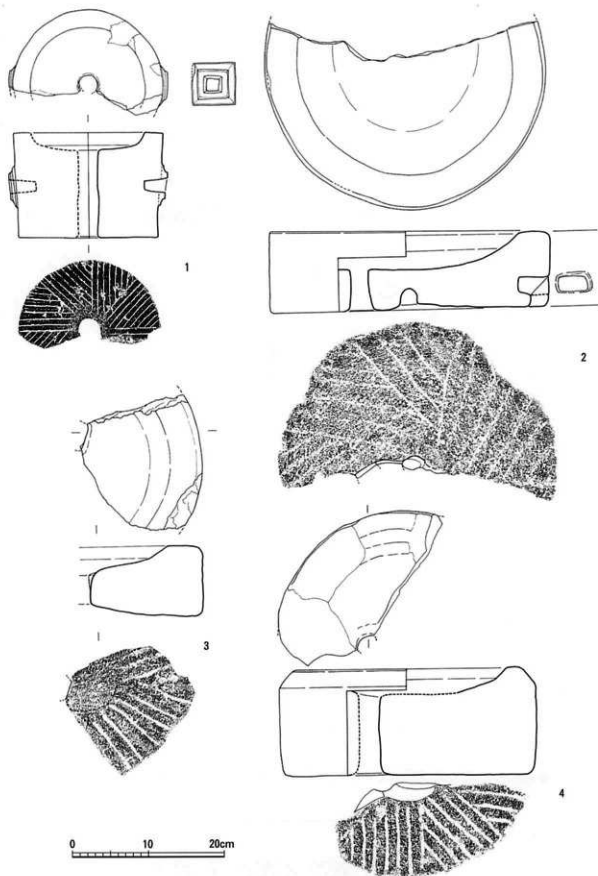
葎筒 第3-21～26図は各種の木器である。第3-21図1は蓋であるが、葎筒の蓋と酷似する。全面に黒漆

木製短刀
 が塗られている。2は木製容器の耳と思われ、穿孔がある。3・4は刺り物の一部と考える。5は木製の短刀である。切っ先は反り、刃部には墨書で刃紋が描かれている。6は中空状態の棒である。7は箸と考える。8は先端が太い木器である。9は男根状をした木器である。10は不明の木片である。11と12は曲げ物の底板と考えられる。12の板の側面には、

第3-22図1・2も曲げ物の底板と考えられる。この2点にも板をつなぐために竹串が2ヶ所、側面に埋め込まれている。3は二つの板をつなぎ合わせた製品である。4は一方の先端がシャモジ状に広がる形態をしている。5は厚さが2cmある部材である。6には墨書と文様が描かれている。7は表面に7ヶ所小さな穴が開けられており、側面にも板を結合するための竹串を埋め込んだ跡が2ヶ所ある。9は板の部材である。



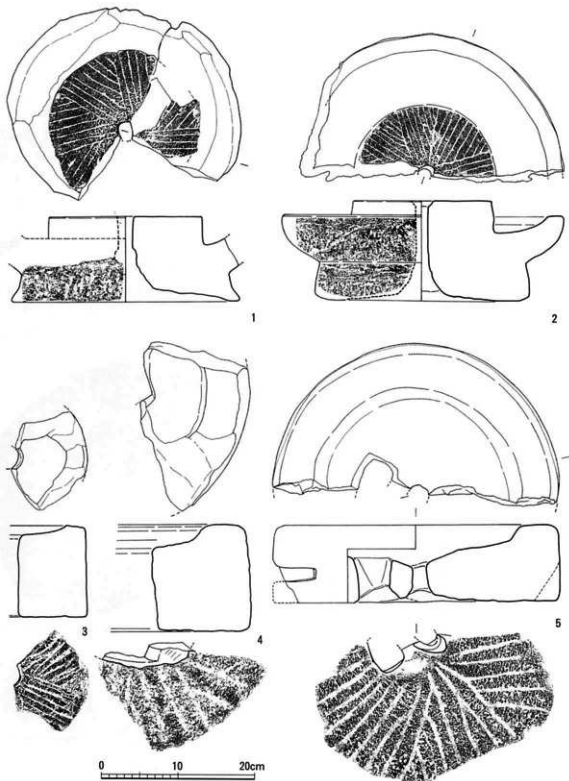
第3-27図 SD012出土遺物実測図19 (1/2, 1/1)



第3-28図 SD012出土遺物実測図20 (1/5)

箱

第3-29図1は列物の一部か、その未製品である。2は一方が鈍く尖り、その反対側には穴が開けられ別の棒を差し込み、さらに横から細い棒を入れて固定している木製品である。3は断面が方形になる棒状の部材である。4は4ヶ所を区切られ、その先端に人面が彫り込まれている。5は一方に両側から挟りがある板片で、荷札の可能性もある。6は中が中空で、刀子を入れる鞘と考えられる。9は櫛である。8は杭と考えられる。



第3-29図 SD012出土遺物実測図21 (1/5)

下駄

第3-24図は下駄を中心とした遺物である。1は両端部を欠く。2は縦方向に半分に割れている。3は歯が二本残るが、先端を欠く。4は歯を一部欠くがほぼ完成形である。1・3・4は木材の中心部を素材として選択している。5・6は断面が円形の棒状の部材である。

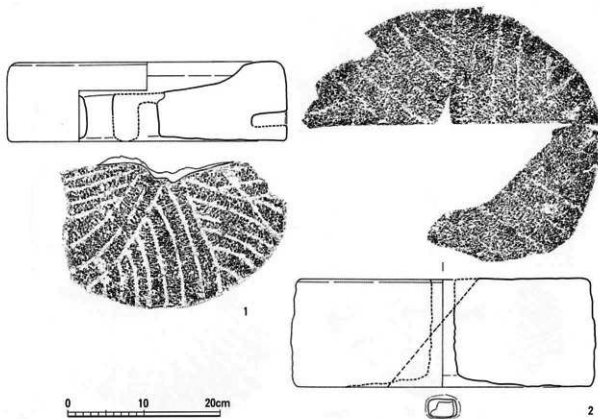
打毬の玉
鹿角製品

第3-25図は木製の玉である。ただ、1は小型であり、図の上位につまみ状の突起が作り出されており、他とは異なる。他は大きさにばらつきがあるものの、極端な大小はない。素材は木材の中心部付近を削り、球形に仕上げている。用途としては遊具が想定され、打毬の玉と考えられている。

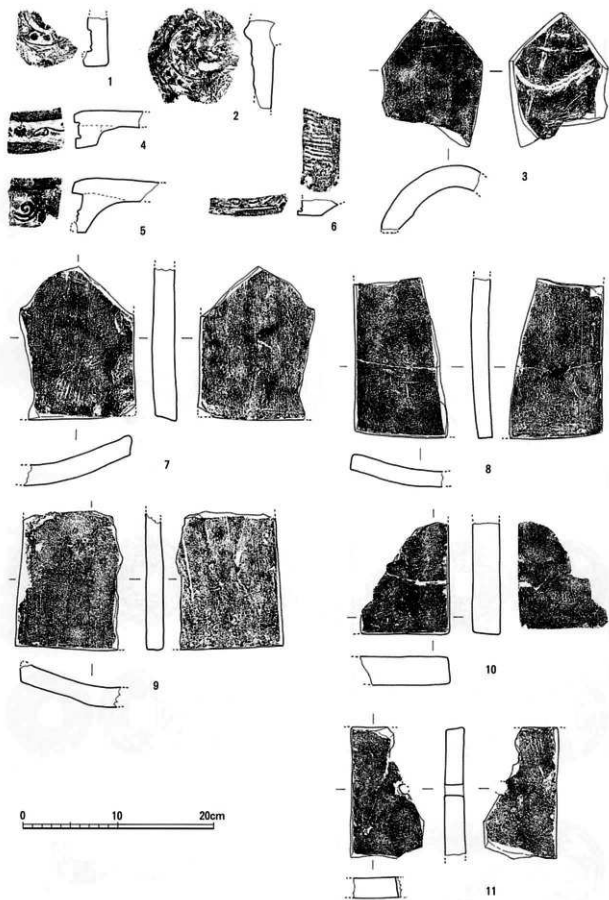
第3-26図は骨角製品や植物製品である。1は鹿角製の製品である。2は一部を欠くが、二等辺三角形に仕上げた扁平な骨角製品である。この2点は第4章の報告に詳細を譲る。3～7は桜の樹皮を加工した製品である。特に7は、幅広の素材を2枚組み合わせ、周辺部を細く切り、棒状のものに巻きつけるように加工している。8は紐である。右捻りにした細い紐3本を左捻りに三つ編み状に組上げ、強度を増したものである。素材は棕櫚と考えられる。

棕櫚の紐
火繩銃
目釘金具
弁

第3-27図は金属製品を中心とした遺物である。1は火繩銃の火銃である。青銅製で、H-63区のSD012上の焼土内から出土した。2・3は刀飾具で、青銅の同じ鋳型で作製された目釘飾りと考える。4も青銅製品で、断面は円形になるビス状の製品である。5は塗金された青銅製の弁である。重んでいるが、先端は尖り、片方は耳掻き状になる。6は扁平で小孔のある鉄製品で、湾曲しており、鍍金具の小札と考える。7はG・H-64区でSD012の上面で出土した鉄製の鍵（カスガイ）である。8は断面方形の鉄製の棒状製品である。U字状に曲げられているが、鍵である基部は穴の開いた円形で、先端は両側に平行に2ヵ所、突起状に張り出す。10も青銅製をしてお十一面観音像青銅製品であるが、一部に金が付着しており、本来は金銅製の十一面観音像と考える。11はH-65の底近くから出土した鉛ガラス製の小皿である。全体の約3分の1が残存している。第4章で分析をしている。12はSD012の下部から出土した真鍮製の鎖である。8の字状に曲げた部品を模式図に



第3-30図 SD012出土遺物実測図22 (1/5)



第3-31図 SD012出土遺物実測図23 (1/4)

図示したように、複雑に組み合わせてつないでいる。

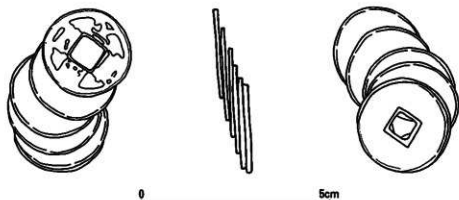
挽臼

第3-28～30図は粉挽臼である。臼は上臼と下臼で構成される。SD012から出土した挽臼には小型で緻密な石材を素材とし、細い条線を刻んだものと、安山岩製の表面の粗い素材を石材とし、太い条線を刻んだ二種類がある。前者は第3-28図1・第3-29図1・2で、下臼には受皿が付く。残りは後者で、中央部から横にずれた位置に供給口があり、中央部には上下の臼をつなぐ芯木を入れる穴が開いている。下臼の上面は中央部がわずかに高く、上臼の下面はそれに合うよう中央部が窪む。

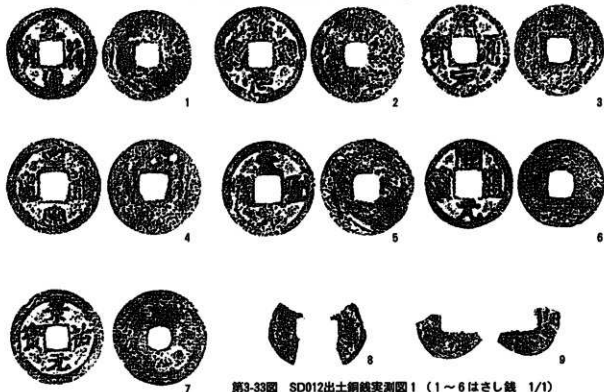
第3-31図は瓦と磚である。1～3は丸瓦、4～9は平瓦で、1・2は巴文、4～6は唐草文のある軒瓦である。4の平瓦には中心飾りが認められる。10・11は磚で、11には穿孔が認められる。

第3-33～35図は銅銭である。1～6は重なって出土し、第3-32図はその出土状態を図化したものである。多くは溝の底の低湿地から出土したものである。

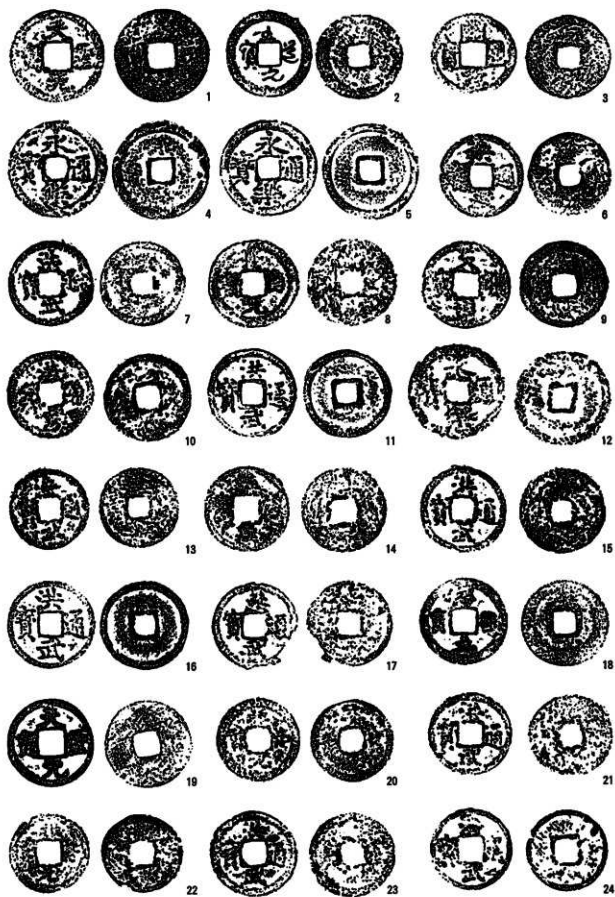
以上の出土遺物から、16世紀後葉を主体としている。特に下部はこの時期が主体であり、古い時期の層は確認できなかった。このことから、SD012は16世紀後葉に掘削され間もなく埋め立てられたものと考えられる。



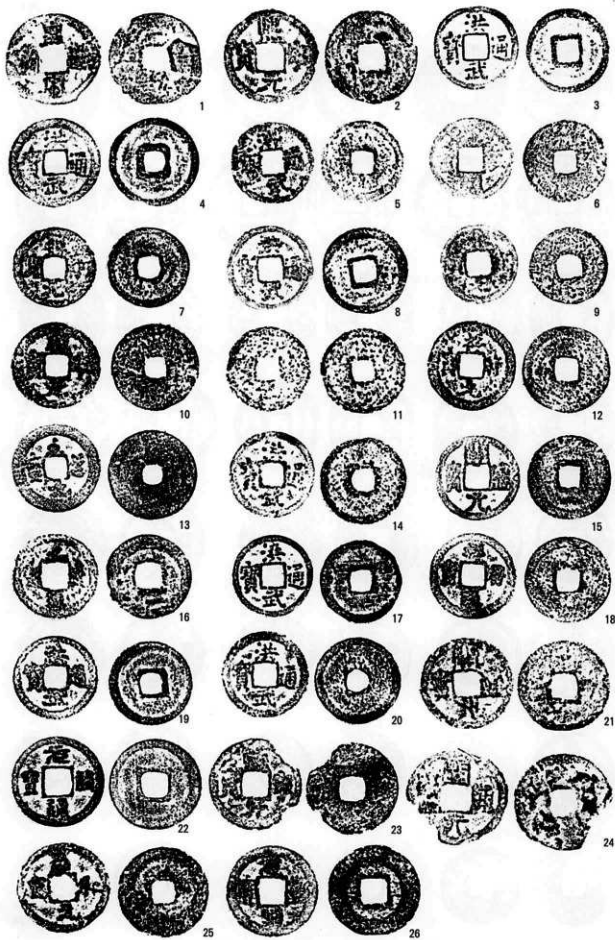
第3-32図 SD012銅銭出土状態実測図 (1/1)



第3-33図 SD012出土銅銭実測図1 (1～6はさし銭 1/1)



第3-34圖 SD012出土銅銭実測圖2 (1/1)

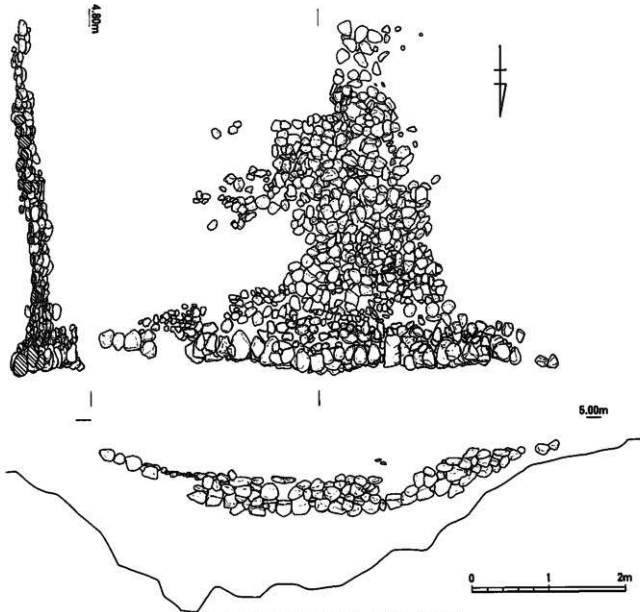


第3-35圖 SD012出土銅錢實測圖3 (1/1)

SX022

第3-36図に図示したSX022は、H-63区で検出された遺構である。この遺構は、次に報告するSX023と同様SD012の埋立て事業の途中に構築されている。SD012の埋立て事業は、まず、土砂で、底面から約半分の1mが埋め立てられている。この部分は、以後地下水に常時浸された低湿地となる。この最初の埋立て事業により、万寿寺の堀は、深さ約1mの窪みとなる。そこに川原石を用いた石積みを東西に堀を区切るように築いている。その規模は東西の長さ6mで、中央部が窪むため、石積みも高くなり、約50cmを測り、両側端になるにつれ低くなる。石積みの石は人頭大の川原石や一部に五輪塔の部材を使用している。その方法は、長楕円形の川原石の主軸を南北方向にとり、積上げている。石積みの面は北側に面していることは明らかである。

後背部にあたる南側の最深部は川原石で埋め立てられ、さらにそれを覆うように粘土が堆積しており、地盤固めをしている。この一連の事業は、万寿寺の堀を埋める作業の中で、初期のものであり、検出された場所や歴史的な位置、第2南北街路との関係から、直接礎石建物を建てるためのものかは不明である。

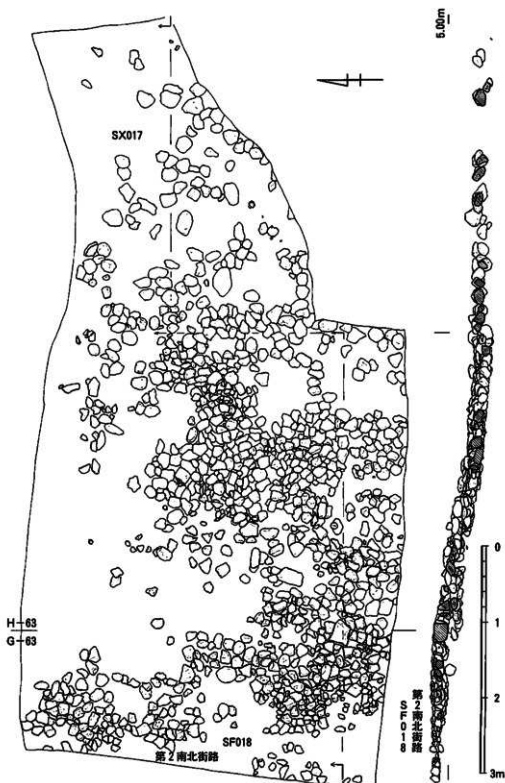


第3-36図 府内町跡第43次調査SX022実測図 (1/50)

第2節 遺構と遺物

さらに、この遺構を覆って、SD012は埋め立てられている。第3-37図はその状況を示したものであるが、第2南北街路の位置には小礫による石敷きが認められ、それから続くように万寿寺側に緩く傾斜するように礫群が広がっている。この状況は、後に報告する万寿寺の堀を埋め立て、最初に建てられた礎石建物の直接的な基礎部分となる。

遺物は、こうした礫群の間から、京都系土師器や貿易陶磁器の破片が出土したが、SD012として



第3-37図 府内町跡第43次調査G・H-63区の万寿寺西側の堀の埋立状況の最上面と第2南北街路の整備状況 (1/50)

取り上げたものが多く、SX022として図示していない。時期は16世紀後葉と考える。

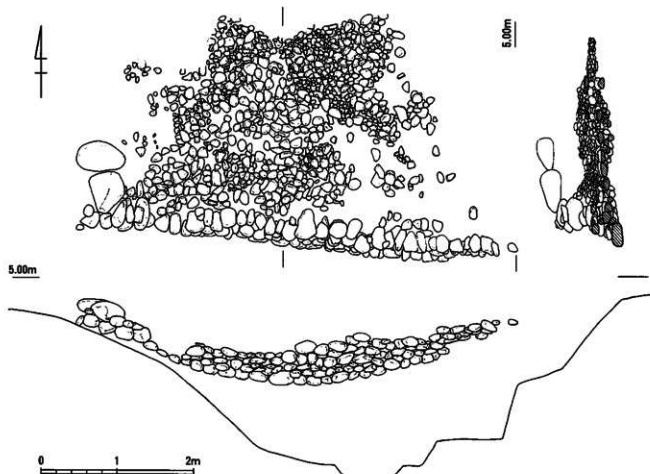
SX023

SX023は第3-38図と第3-61図に図示した遺構で、第3-38図の初期石積みは、SX022と同じく、SD012の埋め立て事業の途中に構築されており、その間隔は12.3mで、北側と南側で対になる可能性が高い。この石積みによる埋めて遺構は、幅を約1.3mまで土砂で埋め立て、中央部が窪んだ状態にし、そこに東西方向に川原石による石垣状の石積み構築して区切る。

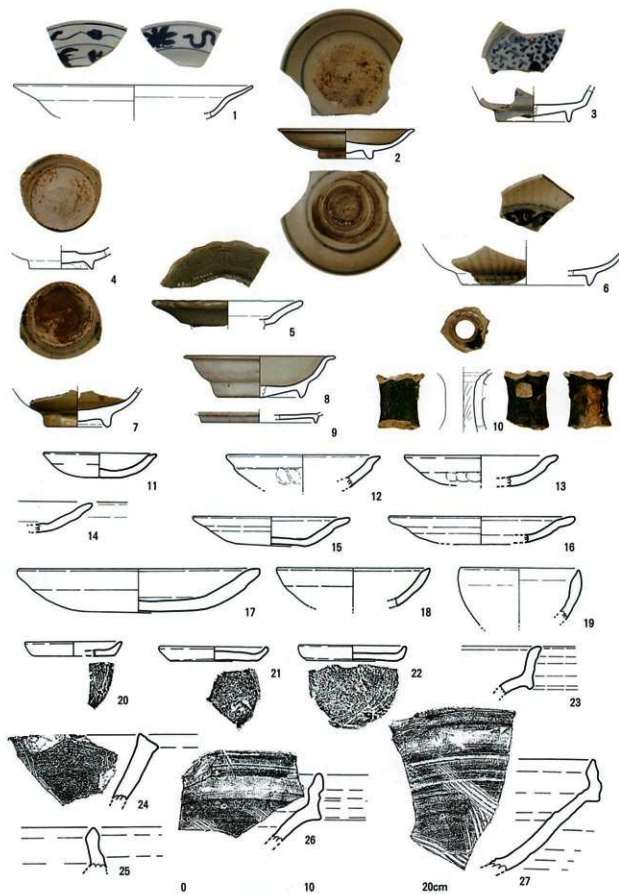
第3-38図（初期石積み）に図示した遺構を構築後、約50cm南側に位置をずらし、東西方向にはほぼ同じ規模の石積み構築する。第3-61図では石積みから北側は初期石積み覆うように隙で埋め立てている。この範囲をⅠ区とすると、次にその南側を約6mにわたり、大小の川原石で埋め立て、南端は第2南北街路から続く東西方向の石積みや石列で区切っている。この部分をⅡ区とする。Ⅲ区はこの南側4.5mで、凝灰岩製の五輪塔の部材で埋め立て、上面は平坦になるように積上っている。Ⅳ区はさらにその南側で、再び川原石で埋め立てている。以上の石による埋め立てはⅠ区からⅣ区の順で、南に拡大しながら行われている。

第3-39～3-59図に図示した遺物は、SX023を構成するⅠ区～Ⅳ区の石積や埋め立ての川原石群内から出土したものである。特に晩石の出土が目立つ。

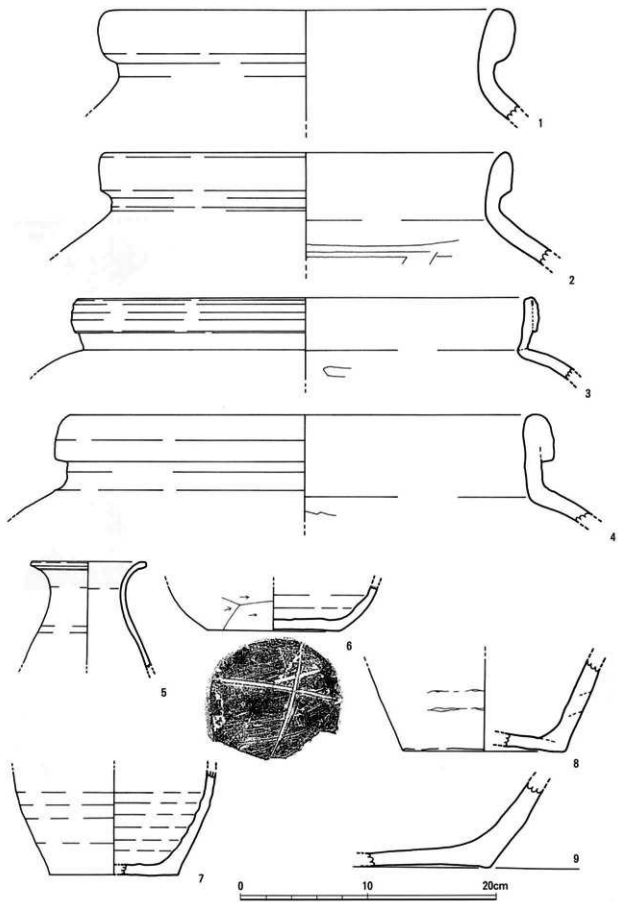
第3-39図1～10は貿易陶磁器である。1は景徳鎮窯系の青花の「つば皿」の口縁部で、小野分類の皿F群である。2は小野分類の皿B2類で漳州窯系である。3は腰が折れる景徳鎮窯系の青花の



第3-38図 府内町跡第43次調査SX023の初期石積実測図 (1/50)

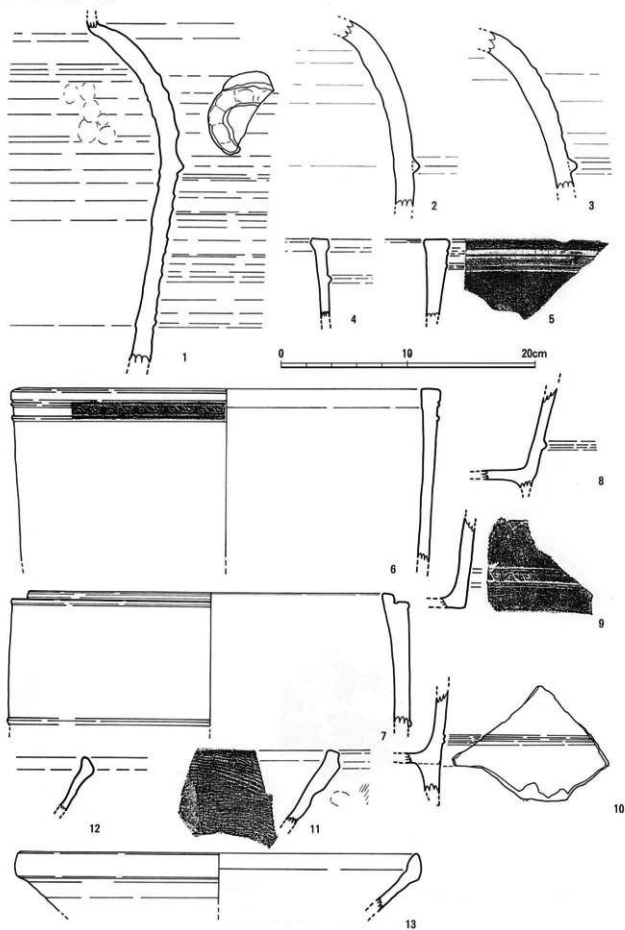


第3-39図 SX023出土遺物実測図1 (1/3)



第3-40図 SX023出土遺物実測図2 (1/3)

第2節 遺構と遺物



第3-41圖 SX023出土遺実測図3 (1/3)

華南三彩

碗である。4・6は潭州窯系で、4は碗の底部で、6は青花の皿の底部で、胴部に縦方向に筋が入り口縁部は輪花状になると思われる。5・7は龍泉窯系の青磁で、5は輪花皿で、7は碗の底部である。8・9は白磁の皿である。10は耳の付く緑色をした長頸壺の頸部で、華南三彩と考えられる。

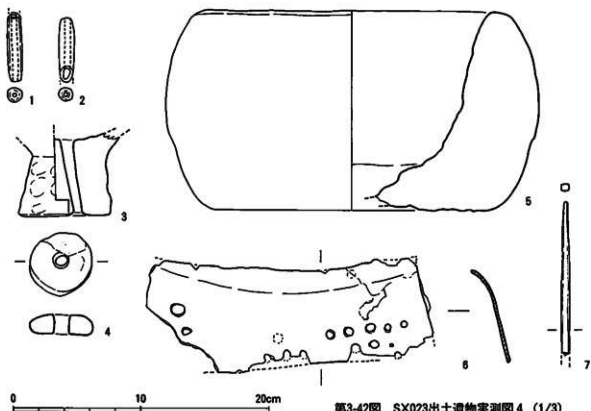
11～19は京都系土師器である。大きさは11～17まで5法量に分かれる皿である。また19は口径に比較し器高が高い碗である。20～21は底部に糸切痕を持つ、在地系土師質土器の皿である。23～27は備前焼の擂鉢である。24は口縁端部が肥厚する古式のものであるが、26・27は口縁部が帯状に立ち上がり、内面の楕目は斜めになり互いに交差する。

水屋壺

第3-40図は備前焼の壺・徳利・大甕である。1～4は壺である。口縁部は直立し、端部が外側に肥厚する。3は玉縁外面を平坦にして、凹線を通らす。5・6は徳利である。6の底部にはへら記号がある。7・8は小型の壺の底部と考える。外面にはロクロ目が残る。9は大甕の底部である。

第3-41図は1～3は備前焼の水屋壺の胴部で、同一個体と考える。器面にはロクロによる凹凸が観察され、肩部和胴部との境界線に断面三角形の突帯が一条通る。また、1には突帯から上位にかけて粘土紐を指押さえて円形に貼付けた文様が認められる。4～10は瓦質土器の火鉢である。4の口縁部は内外に肥厚し、外面に断面三角形の突帯が一条めぐり、5は口縁端部が肥厚し、外面に細い断面三角形の突帯が平行して二条めぐり、その間に雷文のスタンプを連続して施文している。また、6の口縁部にも細い突帯間に唐草文のスタンプが施文されている。同じ文様は9の底部にも認められる。11～13は東播系須恵質土器の鉢で、口縁端部が玉縁状に肥厚する。14の形態は類似するが、内面を刷毛目で器面調整した土師質土器の鉢である。

第3-42図は土製品・金属製品・木製品の資料である。1・2は端部を欠く土鐘である。3はロクロ成形で、柱状に仕上げ、上面を皿状にした蜀台である。上部から斜めであるが細い穴が貫通している。器面には指押痕が残る。4は紡錘車と考える。直径5cmで、土器片利用ではなく、紡錘車として作製している。5は、阿蘇溶結凝灰岩製で、中央部を大きく抉っている。石塔などの仏教関係

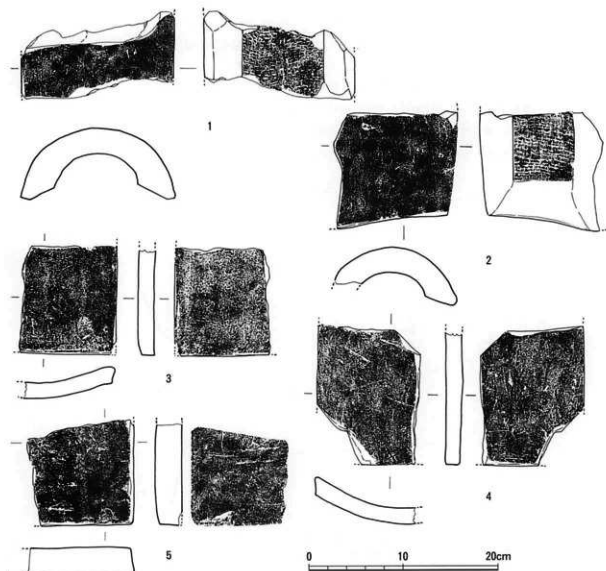


第3-42図 SX023出土遺物実測図 4 (1/3)

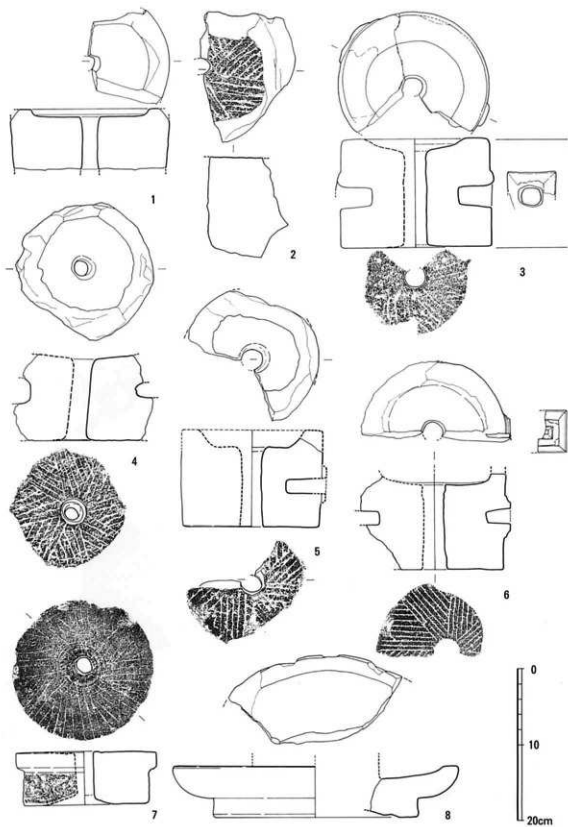
の資料とも考えられる。6は薄い板状の鉄製品である。上位が横方向に屈曲し、下位には小穴が規則的に開けられている。鍔金具と考える。7は遺構の下部から出土した木器で、その形態から箸と考える。

第3-43図は出土した瓦類の資料である。1・2は丸瓦で、外面は縄目叩きの後縦方向のへら撫で、内面は細かな縄目状の圧痕が残されている。幅が寸計できる1は16.2cmであり、2は下端部が4cmの幅で撫でられている。3・4は平瓦で器面は縦方向の撫でて仕上げている。5は埴である。器面は撫でて、厚さは2.8cmで瓦より厚い。

粉挽白 第3-44～3-55図は出土した「粉挽白」の資料である。これらの資料は第3-44～3-46図・第3-47図1～4の緻密な石材で、掃り面には細い切り目が入れられて、下臼には受皿が付くタイプと、掃り面の直径が大きく、掃り面には太い切り目が入れられ、下臼には受皿が付かないタイプの二種類に分類される。第3-44図1は上臼の窪みは残るが掃り面を欠いている。2は下臼で、掃り面は8分画で6～8溝が刻まれている。3の上臼の側面には挽き木を差込む穴が2ヵ所あけられている。掃り面は不明瞭であるが、8分画6溝式と推測される。4も8分画であるが溝は不規則で5～7溝が刻まれている。これに対し、5・6の上臼の掃り面の溝は整然としており、5は8分画6溝式、6は8



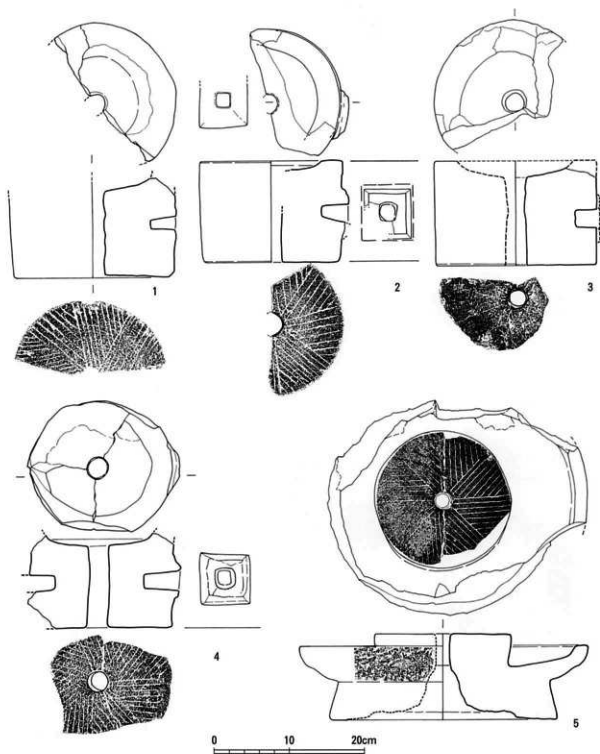
第3-43図 SX023出土瓦・埴実測図 (1/4)



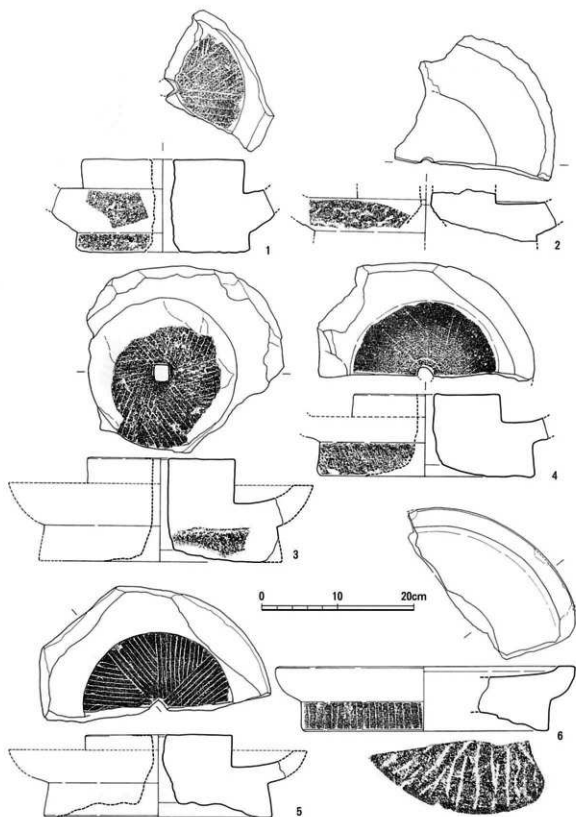
第3-44図 SX023出土挽白美濃陶1 (1/5)

分画10溝式である。7・8は下臼であるが、7は8分画で5～7溝が刻まれている。8は受皿部分の資料である。

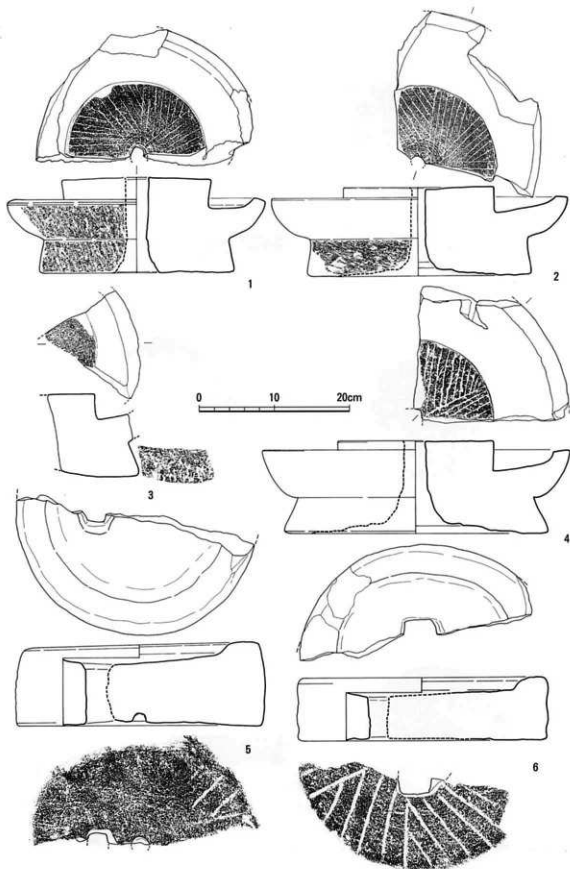
第3-45図1～4は上臼で、4には2ヵ所側面に挽き木を差込む穴が方形の飾り台を設けあげられている。1～3は1ヵ所のみ残されるが、4と同じと考える。1の掃り面は8分画であるが7～11溝が刻まれている。2も8分画であるが、6～10溝が刻まれている。3の掃り面は摩滅しており不



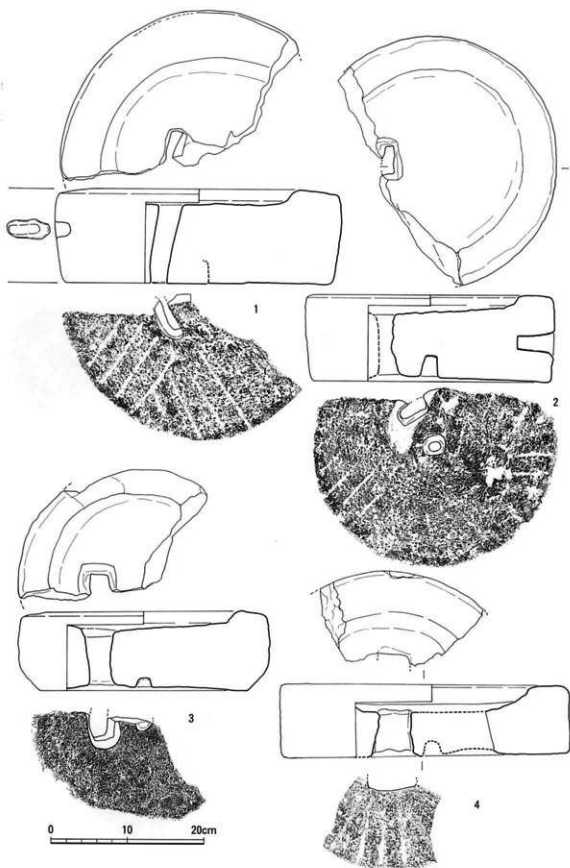
第3-45図 SX023出土挽臼実測図2 (1/5)



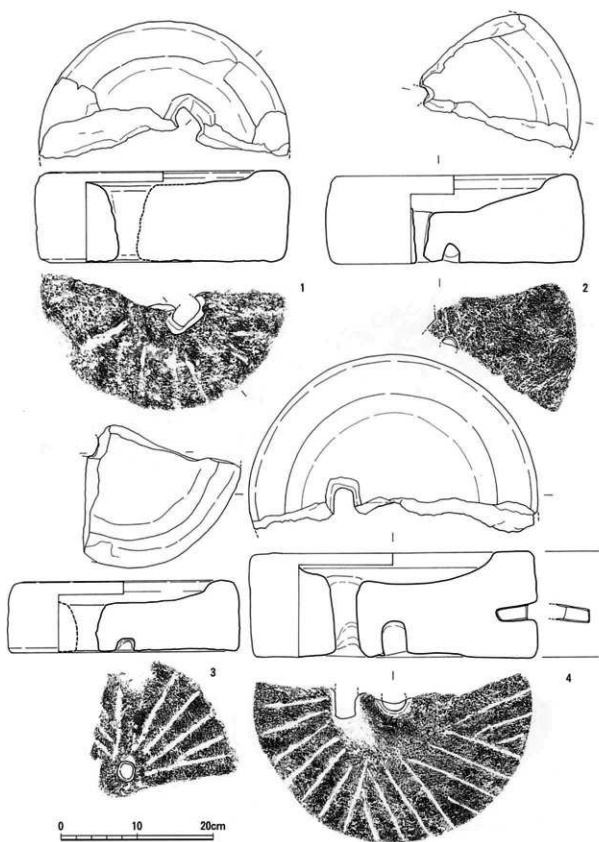
第3-46図 SX023出土挽白実測図3 (1/5)



第3-47図 SX023出土挽白実測図4 (1/5)

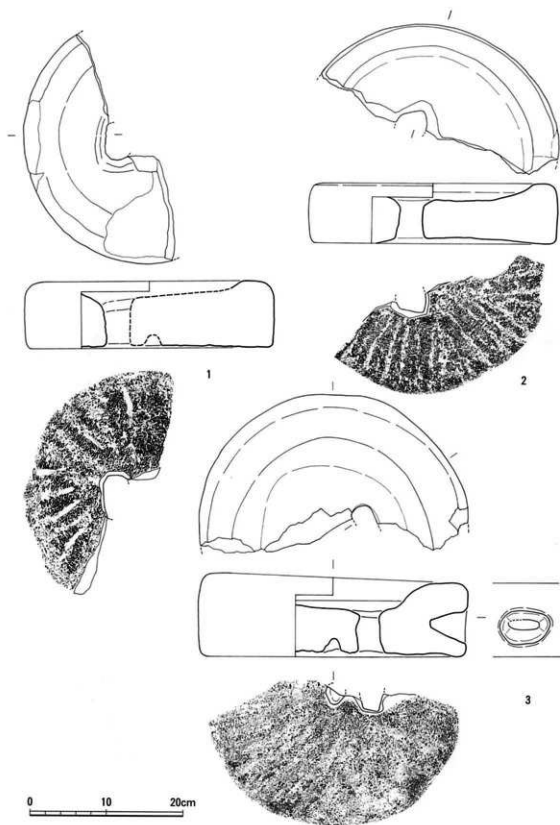


第3-48図 SX023出土挽白実測図5 (1/5)

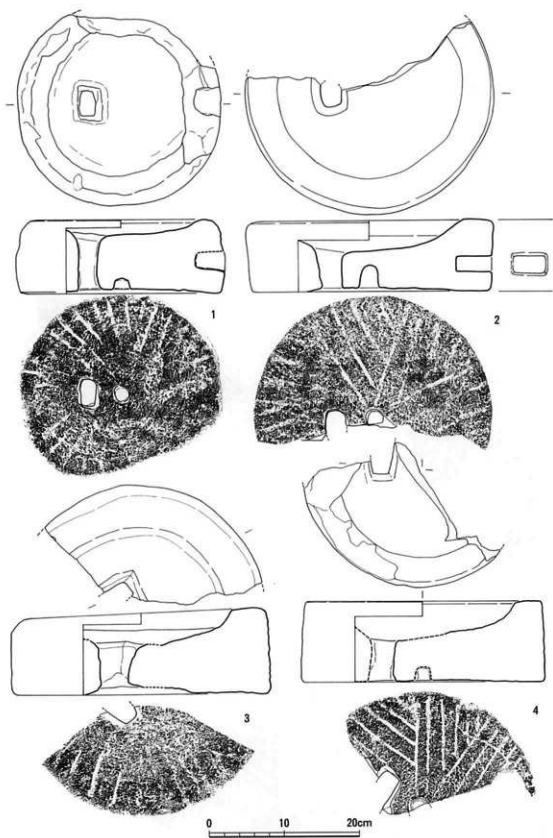


第3-49圖 SX023出土挽白実測圖6 (1/5)

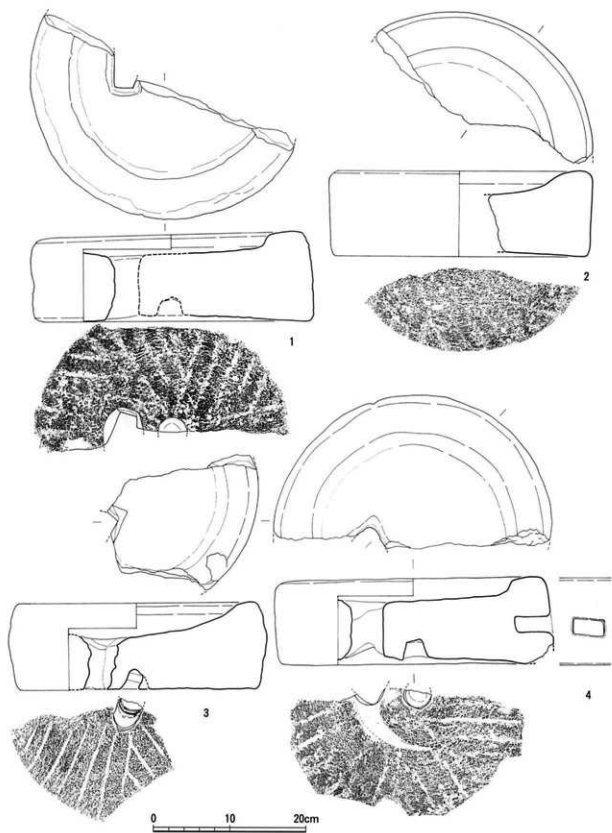
明である。4は7分画で9前後の溝が刻まれている。5は全形がわかる下臼である。外面は粗削りであるが、受皿の径は35cmで、播り面は8分画で8~10溝である。



第3-50図 SX023出土換臼実測図7 (1/5)

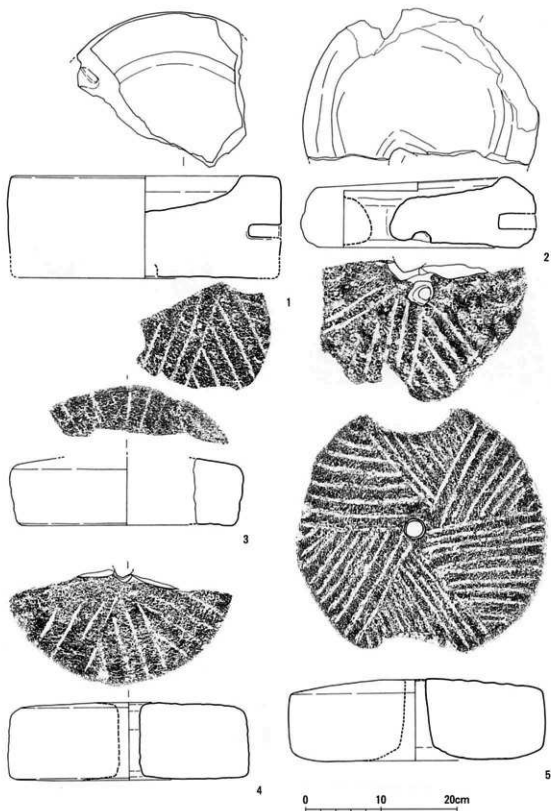


第3-51図 SX023出土挽白美洲図8 (1/5)



第3-52図 SX023出土換白美洲図9 (1/5)

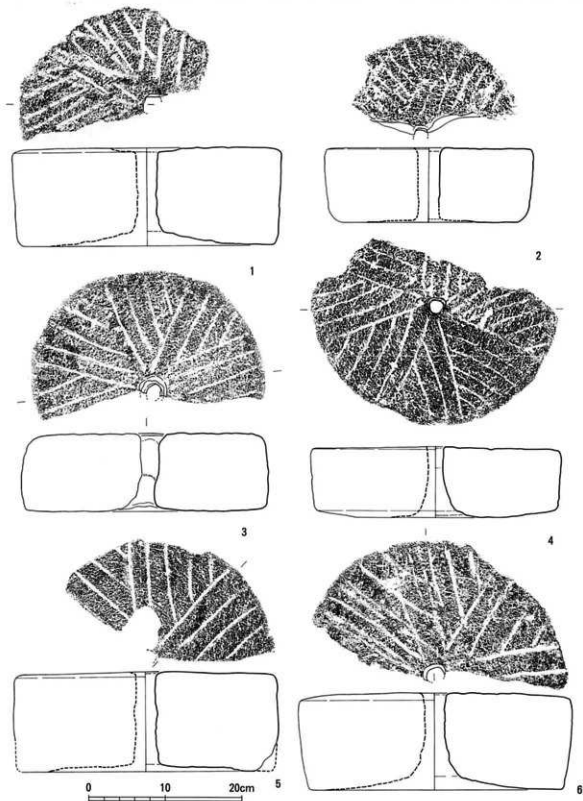
第3-46図の6点は受皿を持つ下臼である。いずれも外面は粗く削られた段階で仕上げられ、6には規則的なノミ目が観察される。1の揺り目が判明する部分は8分画7溝式である。2は不明であるが、3は6分画10~11溝式である。4は厚減しているが、8分画で6又は7溝と思われる。5も



第3-53図 SX023出土挽臼実測図10 (1/5)

8分画で9～11溝が刻まれている。

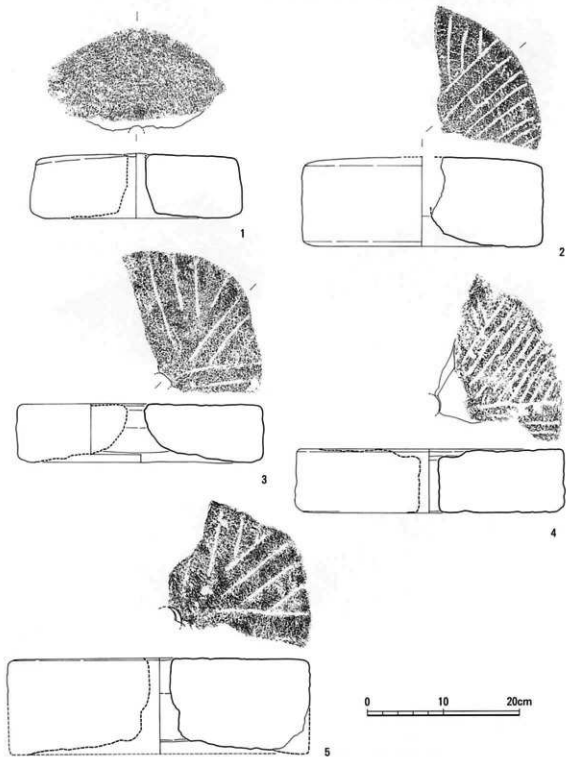
第3-47図1～4は下臼である。1はほぼ半分の資料であるが、播り面は8分画7溝式である。2も判別できる部分では8分画7溝式である。3は小破片で播り面は不明である。4は8分画と想定されるが、判別できる範囲では11溝である。5・6は上臼である。5は供給口と芯棒受が観察でき



第3-54図 SX023出土挽臼実測図11 (1/5)

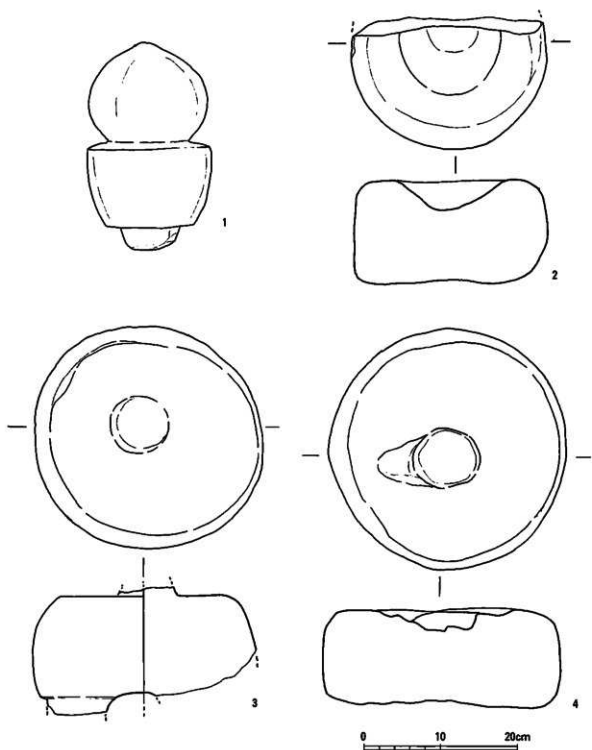
るが、播り面は摩滅しており不明である。6の播り面は6分画5溝式と想定される。

第3-48～3-52図・第3-53図1・2は上臼である。第3-48・3-49図の資料には供給口や芯棒受を見ることができ、1には挽き棒を差込む穴も残されている。1は6分画6溝式と想定される。2は6分画5溝式と想定され、播り面側の供給部には「ものくばり」の溝が付く。3・4は不明である。第3-49図1は凝灰岩製で摩滅しているが6分画と想定できる。2は不明であるが、3は6分画6溝式、4は8分画4溝式と想定されるが、一部が不規則で中心から放射状に溝が刻まれている。また「も



第3-55図 SX023出土挽臼実測図12 (1/5)

のくばり」も明瞭である。第3-50図1・2は凝灰岩製で摩滅しているが6分画である。3は安山岩製であるが、挽き木を差込む穴が側面にある。摩滅しているが6分画である。第3-51図1は摩滅しているが6分画と想定できる。2は8分区4溝式で、1・2の側面には長方形の挽き木を差込む穴がある。3は不明で4は8分画6溝式である。1・3の「ものくばり」は明瞭である。第3-52図1は6分画5溝式であるが、2は不明である。3は4分画の可能性がある。4は6分画5溝式で、側面には挽き木を挿入する方形の穴があり、裾面には「ものくばり」は明瞭である。第3-53図1・



第3-56図 SX023出土石遺品実測図1 (1/5)

第2節 遺構と遺物

2は側面に挽き木を挿入する方形の穴がある。1は8分画6溝式、2は8分画5溝式である。

第3-53図3～5は中央部が高くなる下臼である。4は8分画で4～5溝、5は6分画で8～12溝である。第3-54図の下臼の1は6分画であるが溝が彫り直されており不明である。2も4分画の可能性はある。3は8分画で4～5溝、4も8分画で4～6溝が刻まれており、5は8分画5溝式である。6は8分画で4～5溝であるが、彫り直しが認められる。第3-55図の下臼は小破片で、残された資料からは、1は不明であるが、2は6分画8溝、3は8分画4溝、4は6分画10溝、5は8分画4溝を認めることができる。

五輪塔

第3-56～3-58図は石造物である。第3-56図1は五輪塔の空輪・風輪である。2～3は円形に仕上げられており、2・3は上部から挟られている。3は上面に突起があり、下方には円形の穿孔が認められる。

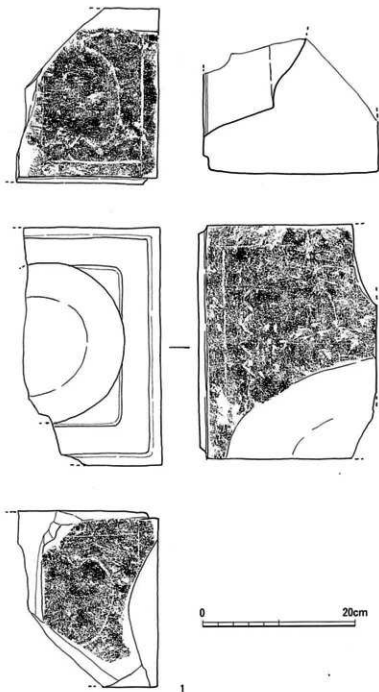
第3-57図は上部を挟った方形の石造物で、残された3面に格狭間が認められる。

格狭間

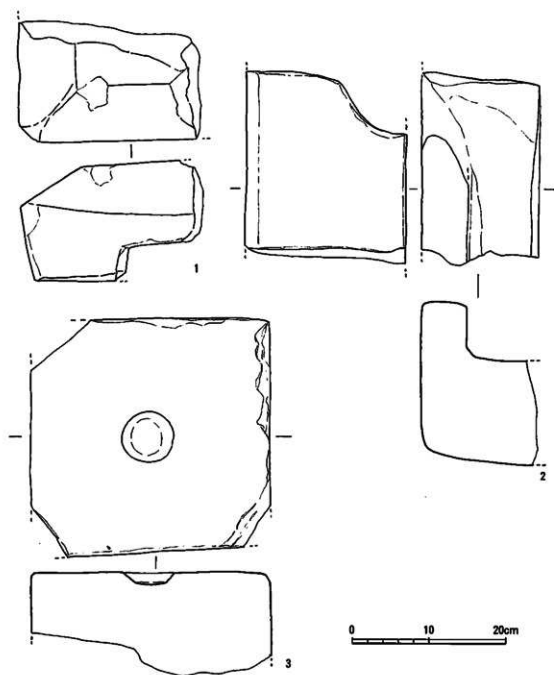
第3-58図1は屋根形、2は箱形に整形されている。3は五輪塔の地輪と考えられる。

第3-59図は出土した銅銭である。銭貨名は不明である。

以上の出土遺物から、SX023が構築された時期は、SD012の埋め立て時期とも関係し、16世紀後葉と考えられる。



第3-57図 SX023出土石造品実測図2 (1/5)



第3-58図 SX023出土石造品実測図 3 (1/5)



第3-59図 SX023出土銅線実測図 (1/1)

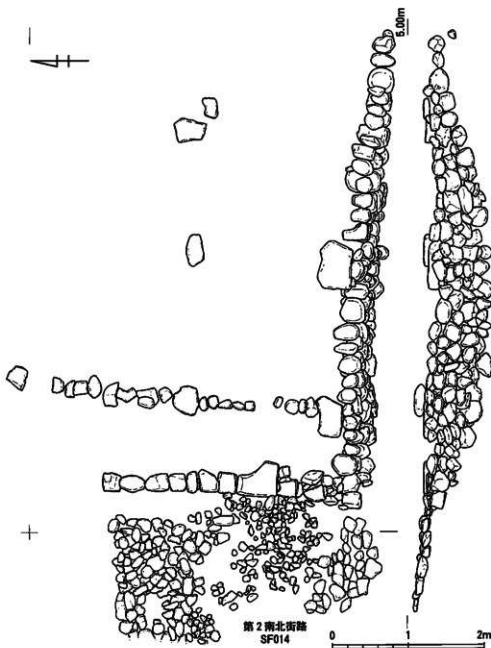
3. 建物及び関連遺構

第1期礎石建物

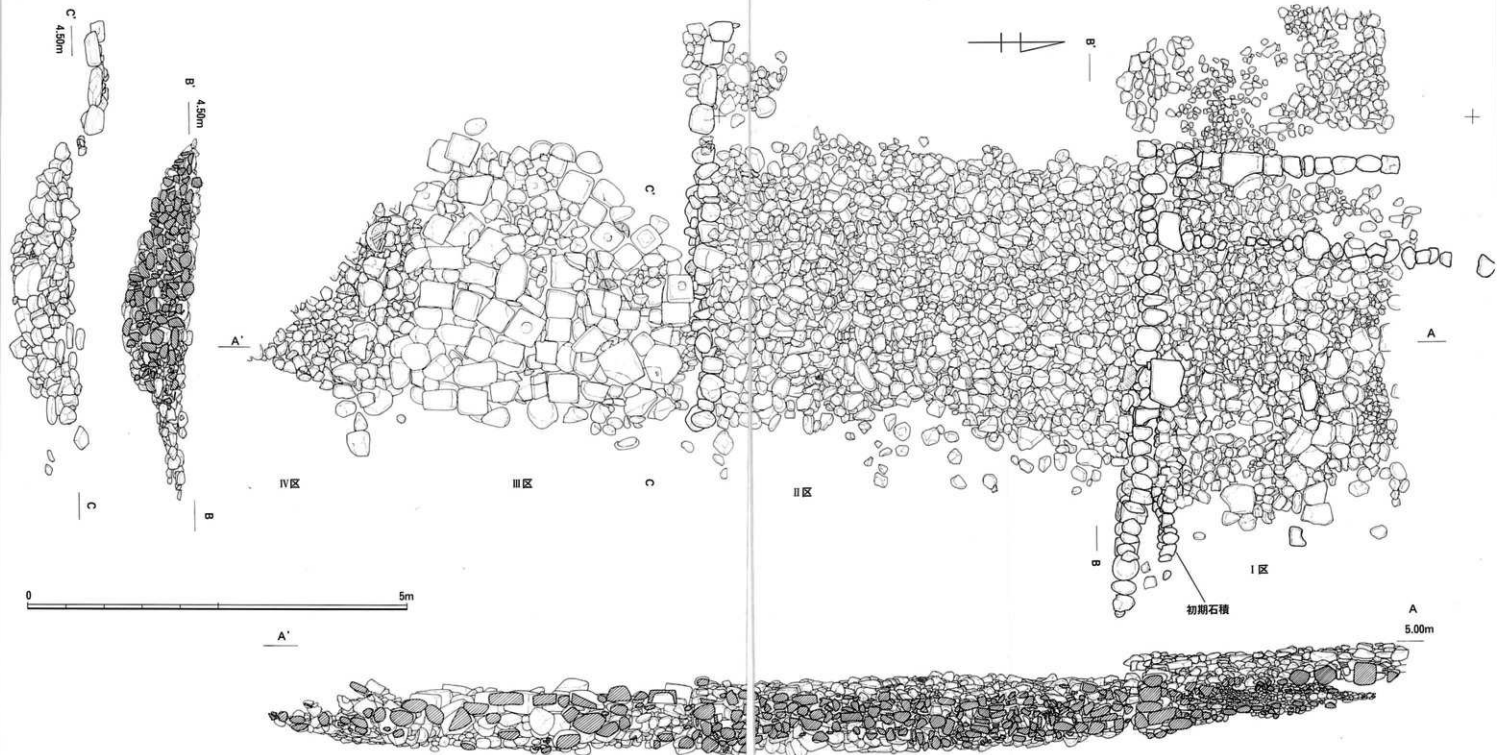
礎石建物

万寿寺の西境の堀は、SX022とSX023を構築し埋め立て事業を行った後に、その部分を覆うように拡張し、東西方向の石積みを行い、第3-60図に図示した第1期礎石建物が構築される。そしてさらに埋立て事業は続く。第3-61図はその状況を実測したものであるが、それによると、SX022とSX023の東西方向の石積みを構築して間もなく、まだ、万寿寺の西境の堀が土砂で埋められ、中央部が窪地状態の時期に、SX023から約50cm南側に位置をずらし、東西方向にほぼ同じ規模の石積みを構築する。石積みから北側は礎で埋め立て、上面は土砂で覆い礎石を据えている。

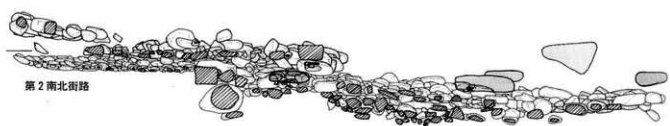
この礎石建物の部分を1区とすると、その南側を約6mにわたり、土砂により埋め立てられた窪



第3-60図 第1期礎石建物実測図 (1/50)



第3-61図 SD012を埋めたSX02 原石・石造品実測図 (1/50)



第2南北街路

第3-62図 第1期礎石建物と第II期礎石建物の垂直差実測図 (1/20)

- ・断面斜線は第2南北街路と埋め立て部
- ・断面濃いトーンは第1期礎石建物
- ・断面薄いトーンは第II期礎石建物



地を大小の川原石で埋め立て、南端は第2南北街路から続く東西方向の石積みや石列で区切っている。第3-4図の南北方向の土層図から判断すると、さらに上砂で埋め立て平地をつくり出している。川原石を敷詰め基礎を安定させた今場所にも礎石建物以外の施設が建っていた可能性が高い。この場所をⅡ区とする。

Ⅲ区はこの南側4.5mで、凝灰岩製の五輪塔の部材で埋め立て、上面は平坦になるように積上げている。Ⅳ区はさらにその南側で、再び川原石で埋め立てている。以上の石による埋め立てはⅠ区からⅣ区の順で、南に拡大しながら行われている。

第Ⅰ期礎石建物は、第2南北街路（SF014）を入口とし、拳大の礎を敷詰めている。建物は東西方向の石積みの西端から北に石列をつくり、さらにその東側に約1m離れて平行に礎石を含む石列をつくらせている。この石列の礎石の間隔は1.95mで、6尺5寸と考える。また、礎石建物の南端と東西方向の石積みはほぼ同じで、石積みの上に据えられた礎石との間隔も6尺5寸である。このように第Ⅰ期礎石建物は第2南北街路から石敷きから二つの石列で区切られた入口構造を持つ建物であることが確認できた。

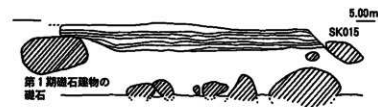
この礎石建物の時期は、Ⅱ区の上面に厚い焼土層（SX017）の堆積が認められる。この焼土層は天正14年（1586）の島津氏の「府内」侵入に起因すると想定されていることから、その直前の遺構と考える。

第Ⅱ期礎石建物

第Ⅱ期礎石建物は第Ⅰ期礎石建物の上に建てられる。その基礎は、第3-65図に図示したように第Ⅰ期礎石建物の位置を掘り下げ、版築状に上砂を積上げている。第3-63図では版築の一部は第Ⅰ期礎石建物の礎石の上面に乗っていることを示している。こうした地業をした上面に礎石を据えている。

また、第Ⅱ期礎石建物の南側は、焼土層の上を上砂で覆い、第Ⅰ期礎石建物の南側の平地を南に約2m拡大し、Ⅲ区とした石遺物で埋め立てた部分に東西方向の石積みを築き、その区切りとしている。さらに、その上面には、瓦片や拳大の川原石を敷詰めている（SX003）。その結果、この部分の平地は、礎石建物の南側の礎石列から約8mとなる。

第Ⅱ期礎石建物は第Ⅰ期礎石建物と同じく、第2南北街路側を入口とする。入口周辺は第Ⅰ期礎石建物の時期より大きな川原石を、第Ⅰ期礎石建物の入口から2列目の礎石を含む石列まで敷き詰め、その先端は人頭大の長楕円形の石を建物側に面を揃えて南北方向に並べている。このラインを



第3-63図 府内町跡第43次調査第Ⅱ期礎石建物の下部南北方向土層実測図 (1/40)

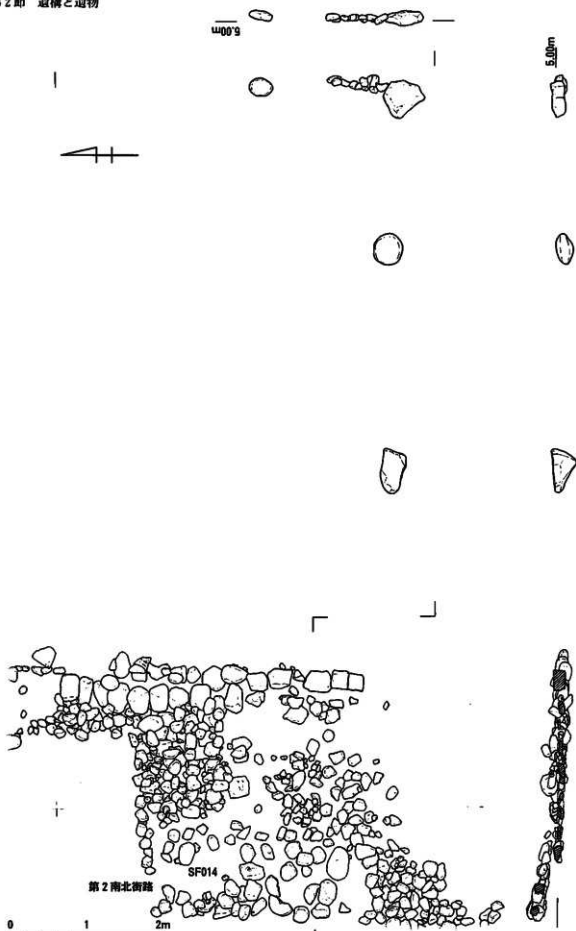


第3-64図 府内町跡第43次調査第Ⅱ期礎石建物の版築内出土銅鏡 (1/1)



第3-65図 府内町跡第43次調査第Ⅱ期礎石建物の下部東西方向土層実測図 (1/40)

第2節 遺構と遺物



第3-66図 府内町跡第43次調査第Ⅱ期礎石建物実測図 (1/50)

西端とし、2.8m-2.8m-2.1mの間隔で東西方向に礎石が配置され、東端の礎石からは準大の石が北に約90cm並べられ、その延長線上に礎石があり、礎石間は1.8mである。東端の礎石列は完全に万寿寺の西境の堀を越え、境内に及んでいる。

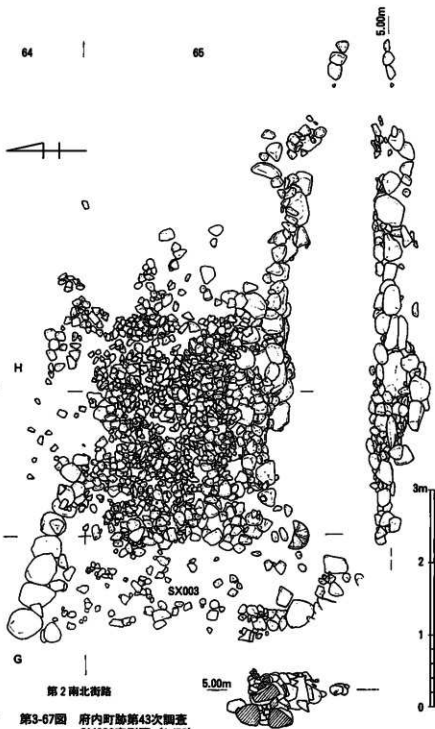
礎石建物の南側は、第2南北街路と直接つながっており、招き入れるように、瓦片や準大の川原石を敷詰めているSX003の北側に、斜め方向の石列が設置されている。

以上のように、第1期礎石建物と第2期礎石建物の関係は、同じ場所での拡張・建替えである。その垂直方向での状況を図示したのが第3-62図で、入口の敷石部で10~20cm、礎石の上面で30cm嵩上げされており、その時期は、第3-3図の第2南北街路の土層図でも確認されるように、島津氏の「府内」侵入に起因する焼土層の上面であり天正14年（1586）以降と考える。

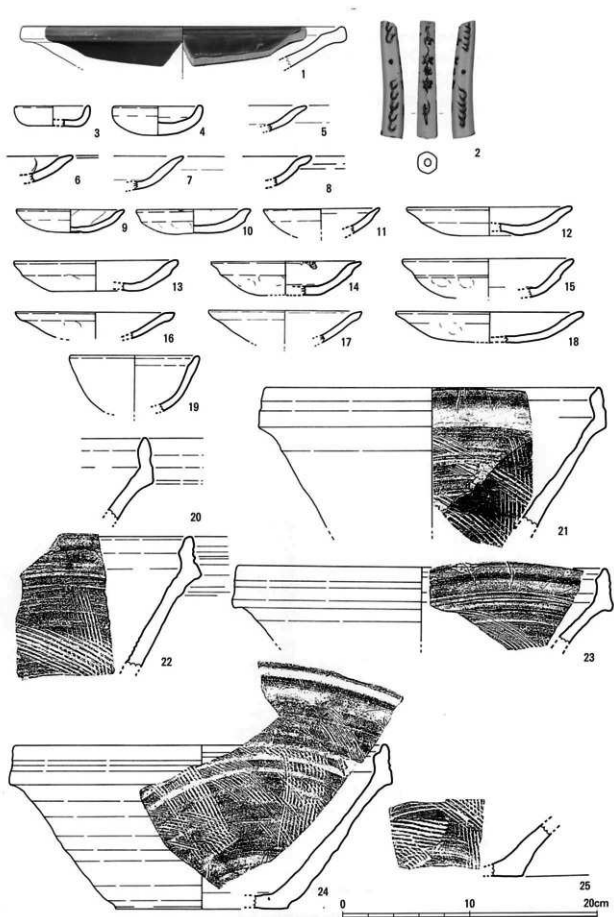
SX003及び石積遺構

先に報告したとおり、第2期礎石建物の南側の平地は、島津氏の府内侵入後、約2m拡張される。その南端は前時期と同様、石積みで区画される。その位置は、凝灰岩製の石造物を埋め立てたⅢ区の中央部にあたり、その上に築かれている。規模は東西方向に約6mで、高さは中央部で約70cmあり、両側が低くなる。石積みは全時期の石より大きく、横長の石の長軸を東西に取りながら、乱雑に積上げている。

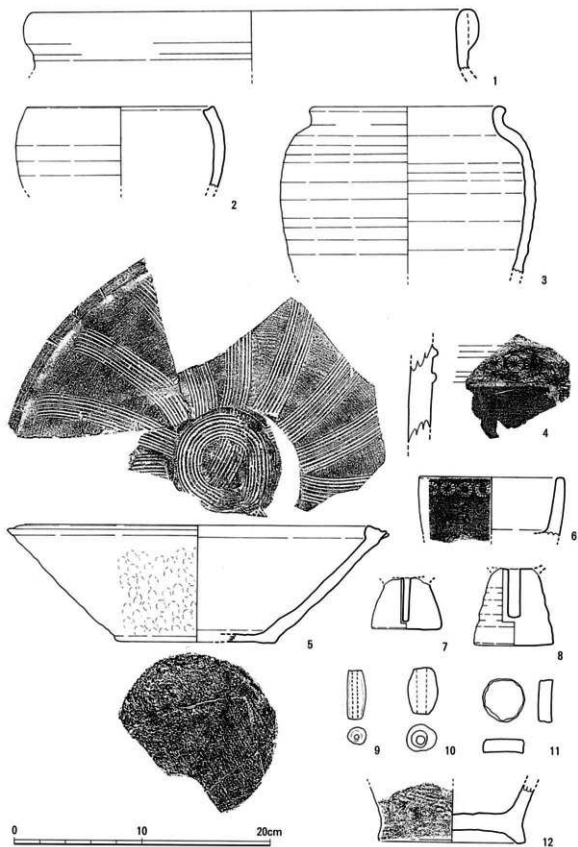
その上面は瓦片や準大の礫を敷き詰め、整地をしており、端



第3-67図 府内町跡第43次調査
SX003実測図 (1/50)



第3-68図 SX003出土遺物実測図1 (1/3)



第3-69図 SX003出土遺物実測図2 (1/3)

第2節 遺構と遺物

には西側を通る第2南北街路に向けて、斜め方向に直径30～40cmの川原石を並べる遺構が確認される。

以下、石積みと整地遺構から出土した遺物をSX003として報告する。

第3-68図の1は龍泉窯系の青磁の皿である。2は景徳鎮窯系の水注の注口部である。ヴィクトリア&アルバート美術館が所蔵するスペイン商人アントニオ＝ベントの紋章があり、底部に「大明嘉靖年製」と書かれた青花紋章文水注の注口部と文様・形態が酷似する。

3～19は京師系土師器である。3は焼塩壺の蓋の可能性もある。非ロクロ系の手捏ね土器で、内面は横撫での後、上に引き上げる。口縁部周辺は横撫でで、底部から胴部にかけて指圧痕が残る。器種は五法壺があり、形態は皿状であるが、19は在地化したもので、器高が高い環形になる。

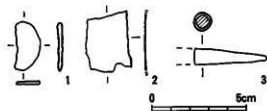
20～25は備前焼の擂鉢である。口縁端部の内側が凹線状に窪む。擂り目は、斜めに施され互いに交差する。第3-69図1～3は備前焼である。1は口縁部が玉縁状に外面が肥厚する甕である。2は鉢で口唇部は平坦である。3は小型の壺である。胴部から胴部にかけての器面にはロクロによる製作痕が残る。

4は火鉢の破片と考える。細い突帯が平行して二条めぐり、その間に菊花文のスタンプが連続して施文される。5は瓦質土器の擂鉢である。口縁部の内側が肥厚し、断面が三角形になる。外面には指圧痕が残る、内面の擂り目は底部を円形に回し、口縁部に向けて放射状に付けられている。6は香炉と思われる瓦質の小型品である。口縁部外面に菊花状のスタンプ文が連続的に施文されている。7・8は燭台と考えられる土製品で、中央に燭燭を支える芯棒を入れる穴がある。9・10は紡錘形の土甕である。14は土師質土器の破片を円形に加工している。15は縄文土器の底部である。

第3-70図1は土師質土器を研磨して加工している。2は薄い青銅製品である。3は端部が尖る鉄製品である。

第3-71図は銅銭である。表面は錆が付着しており判読は困難であるが、1078年初鑄の「元豊通寶」の可能性が高い。

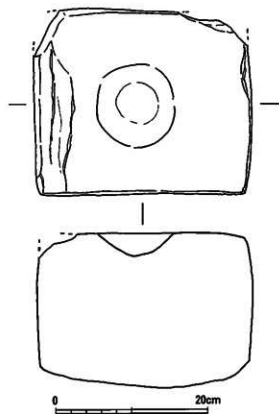
第3-72図は阿蘇溶結凝灰岩産の五輪塔の地輪である。大きさは24cm×28cmで厚



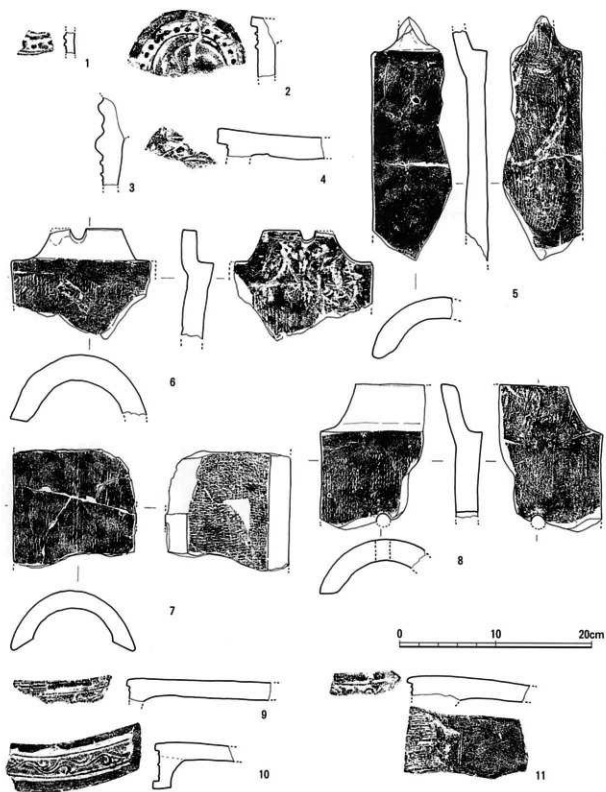
第3-70図 SX003出土金属製品実測図 (1/2)



第3-71図 SX003出土銅銭実測図 (1/1)



第3-72図 SX003出土石造品実測図 (1/5)



第3-73図 SX003出土瓦・埴実測図 (1/4)

さは20cmである。上面の中央部が皿状に窪む。

第3-73図は敷詰められた状態で出土した瓦の資料である。1～8は丸瓦である。1～4は軒丸瓦で、巴文と朱文で文様が構成されている。5は玉縁が残る丸瓦である。外面は縄目叩きをナデで消しており、内面には布目とコビキ痕が残る。6は短い玉縁部分で、中央部が抉れている。幅は約15cmである。8も玉縁部分であるが、釘穴が観察される。5以外の丸瓦の外面も縄目叩きで整形され、ナデで仕上げている。内面は6の内面は布目痕、7は横方向の細かい縄目が観察される。8にはコビキ痕と布目が認められる。

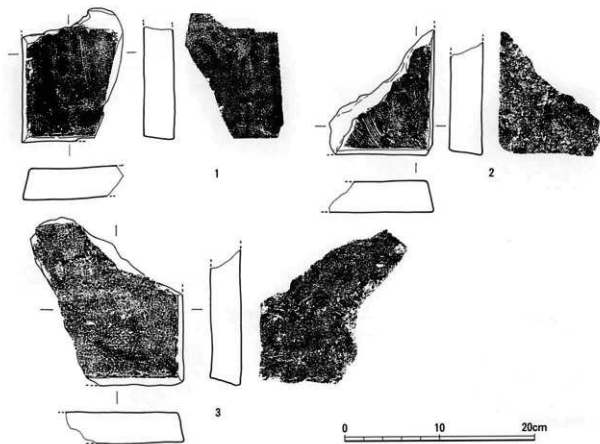
唐草文

9～11は軒平瓦である。瓦当の文様は唐草文で構成されている。また、11には下方に粘土を貼り付け、瓦当面を形成するため、粘土を付着するための刻み目が付けられている。

埴

第3-74図は瓦と同じく敷詰められた状態で出土した埴である。図示した埴の器壁は瓦より厚く3cm以上ある。器面調整はナデで仕上げられているが、2にはコビキ痕が残る。

SX003の時期は、層位が、焼土層より上位にあることから天正14年（1586）の直後と考えられ、第Ⅱ期礎石建物と同じ時期と考えることができる。また、敷詰められていた瓦や埴は、その時に破壊された万寿寺のものである可能性が高い。



第3-74図 SX003出土埴実測図（1/4）

4. 土坑

府内町跡第43次調査では時期や形態、規模の大小、出土遺物の多寡など、多様な土坑が検出された。ここでは、それらを発掘調査時の調査順序に従って報告を行う。このため、時期については前後する。また、後で報告する柱穴と土坑の区別は、形態や規模によるが、特に規定は行っていない。

SK002

埋納

SK002はH-64区の万寿寺域内にあたる場所の水田基盤跡下で確認した整地層を掘り下げる際に、合せ口状態になった京都系土師器2点を検出した。この遺物の掘り込みは明瞭ではなかったが、直径47cm、深さ8cmの浅い円形の小土坑が確認できた。すなわち、この小土坑に京都系土師器に何かを収め、同じ形態のもので蓋をして埋納した状態と言える。調査時は中は空間であったが、内容は不明である。

第3-76図に図示した2点の京都系土師器は、1が蓋、2が身であった。蓋・身とも口径が16cmとほぼ同じであり、器高は蓋である1が3.3cmで、2の身が2.9cmである。2点とも口縁部が撫でて仕上げられ、最後に上方に引き上げられた跡が残り、胴部には指ん痕が認められる。これらは五法量に分化する京都系土師器の最大となるタイプで、器壁も厚いことから、16世紀末葉と考える。

SK004

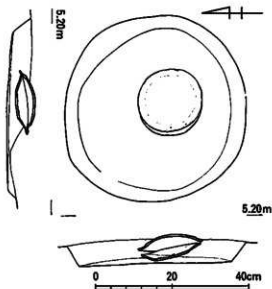
鍛冶
金床石

金刺

SK004は調査区の南端、H-66で検出された土坑である。規模は南北1.7m、東西1.4mの小判形をしており、深さは10cm前後である。床面はほぼ平坦で、遺構内からは鍛冶に関連する遺物が集中的に出土した。すなわち、南東隅には金床石と想定される平坦面を持つ角ばった川原石が据えられており、その西側からは大小の増場が2点出土した。また北寄りでは半分に割れた状態でフィゴの羽口が検出された。そして、こうした遺物に囲まれるように中央部から金刺（やっこ）が出土した。しかし、床面には焼土等の跡はなく、遺構内の土砂を水洗したが金属片等を確認することは出来なかった。

第3-77図に出土遺物を図示したが、1は3の増場の側で出土した京都系土師器である。2～4は増場であるが、2・3は小型で片口が形成されている。4は前2点に比較すると大型である。いずれも焼成が悪いためか脆い。内側には溶解物等の付着を認めることは出来ず、未使用の可能性もある。

5・6はフィゴの羽口であるが、



第3-75図 府内町跡第43次調査SK002実測図 (1/10)

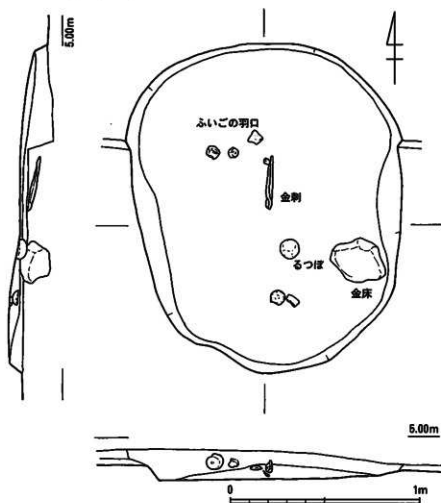


第3-76図 SK002出土遺物実測図 (1/3)

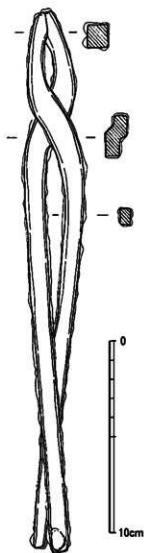
第2節 遺構と遺物

先端は2次焼成を受けている。5は破片であるが、6は接合して完形品となった。第3-78図は金刺であるが、サビに包まれているが、全長28.5cmである。交差する部分の結合構造は不明である。

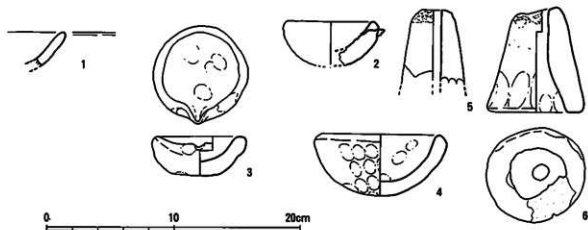
遺構の時期は、1の京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉と考える。



第3-77図 府内町跡第43次調査SK004実測図 (1/20)



第3-78図 SK004出土鉄製品実測図 (1/2)



第3-79図 SK004出土遺物実測図 (1/3)

SK005

SK005はH-65-I-65の間で検出された遺構である。規模は東西1.8m、南北1.2mの隅丸方形をしており、深さは15cm前後である。床面はほぼ平坦であるが、中央部には大小2ヶ所の堀込みがある。この掘り込みはSK005に伴うか、前後関係があるかは不明である。また、遺構の北西部には単大の礫が8個集めて検出している。

出土遺物は小破片で図化していないが、糸切底の在地系土師質土器が多く、14・15世紀と考えられる。第3-80図は「祥◇元寶」と判読できる。

SK006

SK006は調査区の東寄りのI-65で検出された土坑である。検出面での規模は、東西0.7m、南北1.0mの長方形であるが、深さは、平坦な床面まで70cmである。遺構内は半分埋まった状態で時点で礫が多量に投げ込まれた状態で検出された。遺物もこうした礫と一緒に出土し、廃棄土坑の可能性が強い。

掲軸陶器

第3-83図はその出土遺物である。1は中国産と考えられる掲軸陶器の壺の口縁部である。2・3は京都系土師器である。4は内面にロクロ目のある糸切底の在地系土師質土器である。5は口径30.7cmの土鍋と考える。器面は刷毛目を用い、内面は横方向、外面は縦と横方向に調整されて、口縁外面は横撫である。また、内面には1対の内耳状の突起が付けられており、そこには2ヶ所ずつ、紐を通す穴が穿かれている。

土鍋
内耳

この遺構の時期は、2・3の京都系土師器が出土していることから16世紀後半と考える。



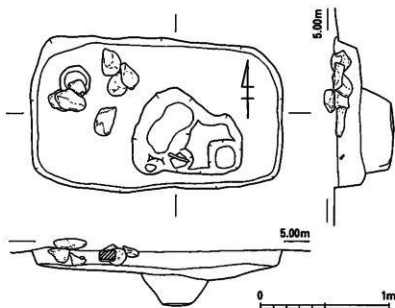
第3-80図 SK005出土銅鏡実測図 (1/1)

SK007

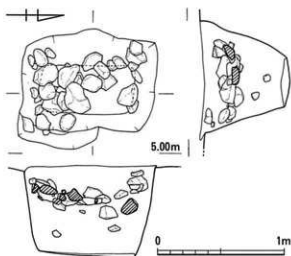
SK007はSK005の南側で検出された小型の土坑である。規模は南北80cm、東西63cmの小判形をしており、検出面からの深さは3cm前後と浅い。床面は平坦である。

出土した遺物は第3-85図に図示した。この遺物は、完形品の在地系土師質土器の皿であるが、遺構の形態を確認できた面より上位で出土し、床面から浮いた状態である。口径は8cm、器高0.7cmで底部には糸切底である。

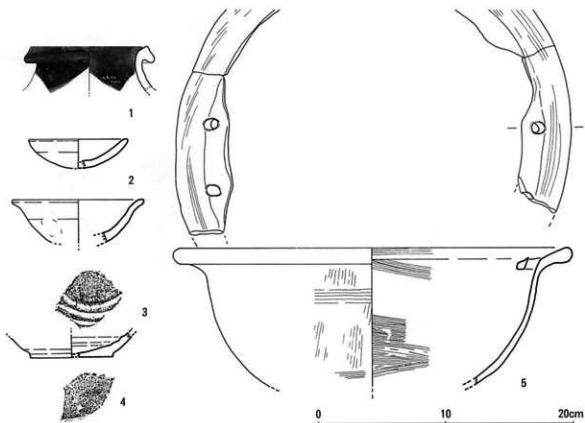
SK007の時期は、この在地系土師質土器の皿が伴うと考えると14世紀代である。



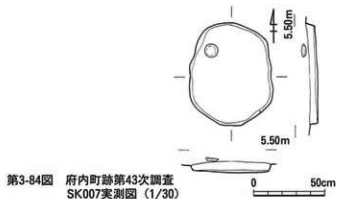
第3-81図 府内町跡第43次調査SK005実測図 (1/30)



第3-82図 府内町跡第43次調査SK006実測図 (1/30)



第3-83図 SK006出土遺物実測図 (1/3)



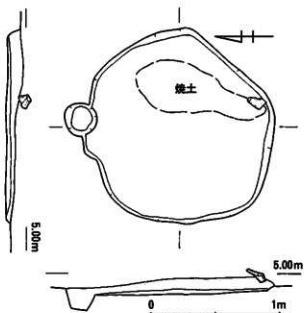
第3-84図 府内町跡第43次調査
SK007実測図 (1/30)



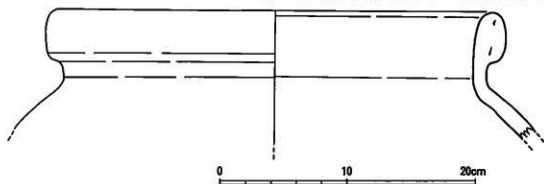
第3-85図 SK007出土遺物実測図 (1/3)

SK008

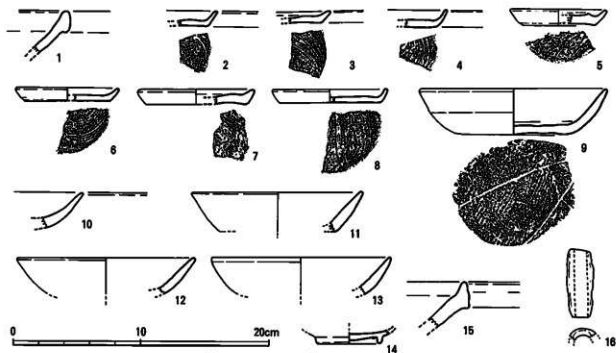
SK008はH-65で検出された遺構である。規模は東西1.5m、南北も1.5mの円形に近い形態をしている。深さは10cm前後で、床面は平坦である。検出面からやや下位の東寄りで焼土層が確認されたが、床面からは浮いている。出土遺物は少ないが、焼土層の上面から第3-87図に図示した備前焼の甕の口縁部が出土した。この甕は口縁部が外側に肥厚し、玉縁状になっており、16世紀後葉と考える。



第3-86図 府内町跡第43次調査SK008実測図 (1/30)



第3-87図 SK008出土遺物実測図 (1/3)



第3-88図 SK009出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

SK009

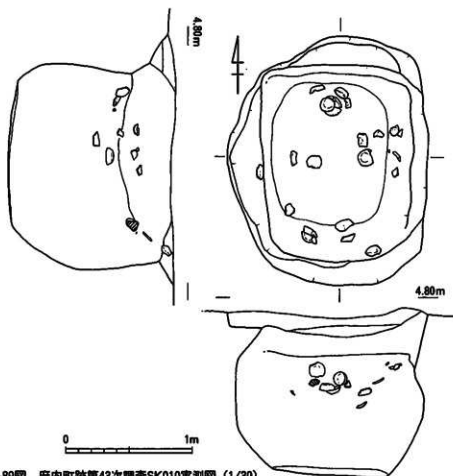
SK009は調査区の南端のI-66で検出された不定形な掘り込みである。出土した遺物を第3-88図に12世紀代の白磁 図示した。1は口縁部が玉縁状になる12世紀代の白磁の碗である。2～13は糸切底の在地系土師質土器である。中でも2～8は口径が8cm前後で、器高は1cmに満たない皿である。これに対し、9～13は口径が14cm前後で器高が3cm以上になる坏である。口縁部の形態は、底部に近い方の器壁が吉備系土師器 厚く、口縁端部が尖る。14は白色をした高台を持つ土師質土器で、吉備系土師器と考える。15の口縁部は外面が肥厚し、断面三角形になる東播系の須恵質土器の鉢である。16は紡錘形をした土鍾の破片である。

SK009の時期は主体を占めるのが在地系土師質土器の形態から14世紀代と考える。

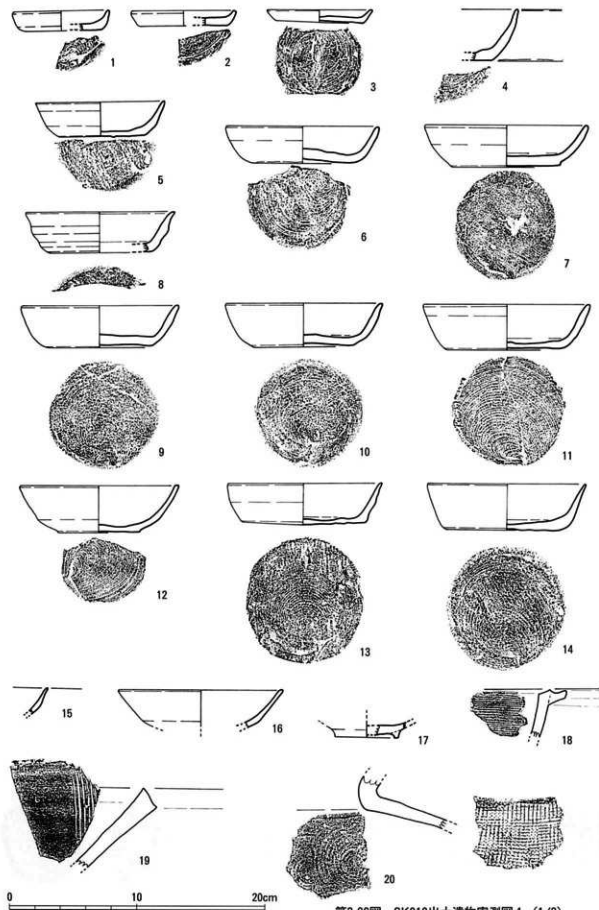
SK010

SK010はSX004の南半分を精査中に検出された遺構である。検出面は南北1.9m、東西1.6mの不定形をしていたが、掘り下げると、南北1.5m、東西1.3mの方形になり、深さは1.2mに達する。床面は平坦であるが、壁は抉れ、袋状になる。

遺構内からは第3-90図に図示した遺物が流れ込んだ状況で出土した。1～3は口径が8cm前後で器高も1cm程度の底部に糸切底のある在地系土師質土器の皿である。4・6～11・13・14は口径が12～13cmで、器高は3cm以上、底径は8～9cm前後の環形をしている。器壁の形態は、8・13・14は底部近くが厚く、口縁端部が尖り外反する。また、9～11は胴部中位が最も厚くなる。一方5は口径が10cm前後で、皿と坏の中間形態をしている。こうした器形に対し、12は口径が12.4cmである



第3-89図 府内町跡第43次調査SK010実測図 (1/30)



第3-90図 SK010出土遺物実測図1 (1/3)

のに対し、底径は6.4cmで約半分である。このため碗形をしている。

吉備系土師器 15～17は白色の胎土をしており、16の口径は13cm、17の底径5cmの吉備系土師器である。18は口縁部外面に罫が付く土鍋である。19は口縁端部が肥厚した備前焼の播鉢の資料である。20は外面が格子叩き、内面が同心円叩きの須恵質土器の甕である。亀山焼きの可能性もある。第3-91図の1～4は口縁部が肥厚し断面が三角形になる東播系須恵質土器の鉢である。3の口径は27.7cm、4の底径は8cmである。5は土鍾である。

SK010の時期は、備前焼の播鉢や在地系土師質土器の8・13・14から15世紀初頭と考える。

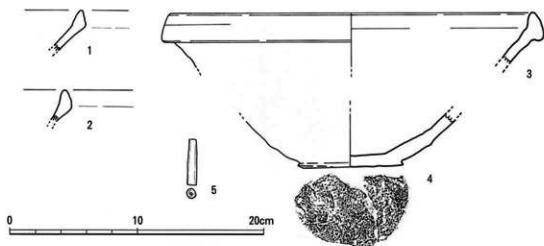
SX011

第1期礎石建物の南側で検出された焼土層をSX011とし、出土遺物を報告する。焼土層は第1期礎石建物の南側の平地の大部分を覆っていた。第3-93図1は口縁部が外反する青花皿B2群である。「一因」の墨書 2は青花皿C群である。3・4は白磁である。2・3の底部の露胎部に「一因」の墨書が認められる。5は口縁部が肥厚した焼繪陶器の鉢である。

6は糸切底の在地系土師質土器である。7は白色系の土師質土器で器壁は薄く、内面にロクロ目が残る。8～10は京都系土師器である。11・12は瓦質土器で、11は皿で、12は火鉢である。13・14は備前焼で、13は大甕の口縁部で、肩部にへう描きがある。14は水屋甕の口縁部である。15は刷毛目調整のある楕円形の土師質土器であるが、扁平であり容器とは考えられない。16は紡錘形の土鍾である。17は甕の破片である。

視

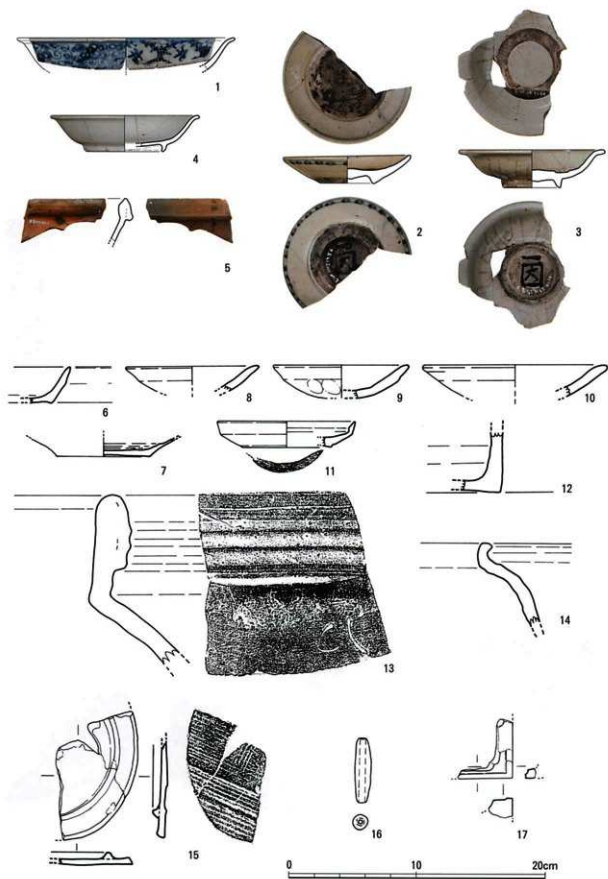
第3-92図は出土した銅銭である。1は「元祐通寶」、2は「紹聖元寶」、3は「元豐元寶」である。



第3-91図 SK010出土遺物実測図2 (1/3)



第3-92図 SX011出土銅銭実測図 (1/1)



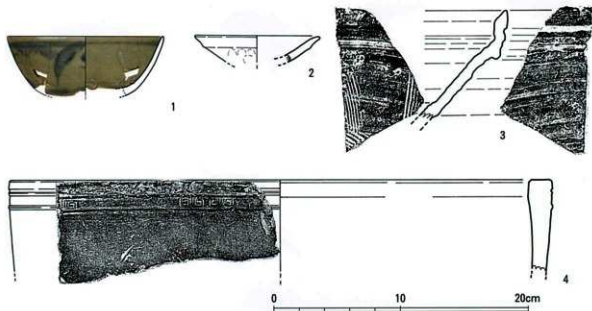
第3-93図 SK011出土遺物実測図 (1/3)

SK013

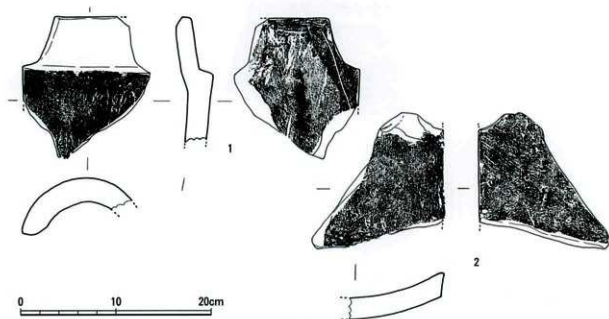
SX003の石積みの南側をSK013とし、遺物を取り上げた。第3-94図1は漳州窯系の青花碗である。2は京都系土師器で、3は備前焼の播鉢で、内面には斜めに交差する播り目が認められる。4は平瓦である。第3-95図は挽臼の破片で8分区4溝が想定できる。第3-98図1は五輪塔の空輪、2は水輪である。

第3-95図は瓦で、1は丸瓦の玉縁部である。外面は縄目叩きの後撫でで、内面は布目が付く。2は平瓦である。第3-97図は挽臼の破片で8分区4溝が想定できる。第3-98図1は五輪塔の空輪、2は水輪である。

SK013は2の京都系土師器や3の備前焼の播鉢から、16世紀後葉から末葉と考える。



第3-94図 SK013出土遺物実測図 (1/3)



第3-95図 SK013出土瓦実測図 (1/4)

SF014

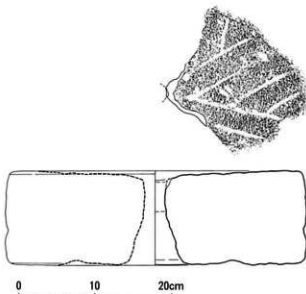
第II期礎石建物の入口にあたる第2南北街路の敷石周辺をSF014とし、第3-99図に図示した。1は景德鎮窯系の青花碗E群である。2は白磁である。3～5は在地系土師質土器である。3は口径6.8cmの皿で、4・5は坏である。6は斜め掃り目のある備前焼の播鉢である。7・8は瓦質土器で、7の口縁部には細い突帯がめぐり、その上位に菊花文のスタンプが連続的に施文されている。8は肩部に耳が付く。9は東播系須恵質土器の鉢の底部である。10は弥生土器の底部である。11は紡錘形の土鍾である。12～15は挽臼の下臼である。12・13の溝は不明であるが、14は6分画で5～9の溝が刻まれている。15は8分区5溝式である。第3-100図1は埴で、2は平瓦である。

挽臼

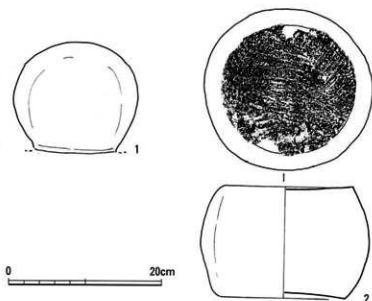
SF014の時期は6の備前焼の播鉢時期から、16世紀後葉から末葉と考える。



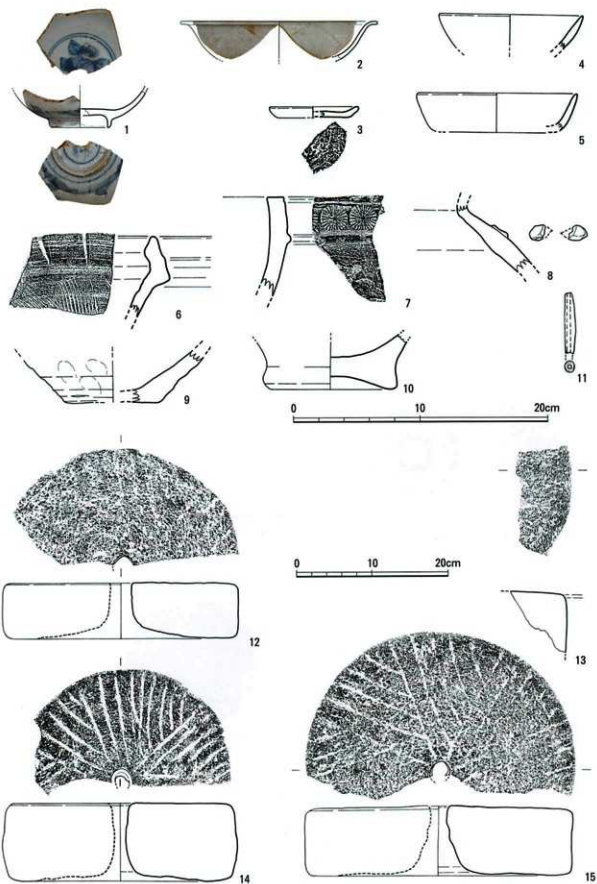
第3-96図 SK013出土銅銭実測図 (1/1)



第3-97図 SK013出土挽臼実測図 (1/5)



第3-98図 SK013出土石遺品実測図 (1/5)



第3-99図 SF014出土遺物実測図 (1/3) 挽臼 (1/5)

SK015

第II期礎石建物を検出中に調査区北側の壁に沿って約20cm程度の浅い掘り込みが検出された。北側は調査区外に続き、西側は不明である。遺構は版築状の土層を切っており、遺構内からは礎が多く検出された。遺構内からは第3-102～3-108図のように多種多様な遺物が出土した。第3-102図1～17は貿易陶磁器である。1は呉洲赤絵の碗である。3・4は青花碗E群の底部である。5は青花皿F群で、口縁部は輪花状になる。6の見込みには花の文様が描かれている。7の底部には「治」の字が認められる。8は漳州窯系の皿であるが、底部は鉄軸が付着し、チョコレートボトム状になっている。9は青花の小杯である。10は青花皿E群である。11の見込みは蛇の目輪割き状である。12・13は荖苧底で青花皿C群である。2～7・9・10は景德鎮窯系と考えるが、1・8・11～13は漳州窯系である。16は合子で、14・15・17は白磁である。

第3-102図18～34と第3-103図1～7は京都系土師器である。18は焼塩壺の蓋の可能性ある。19～31・34・第3-103図1・2は口径が8cm前後と12cm前後の二つの法量の皿に分けられるが、第3-102図32・33・第3-104図5～7は器高が3cm以上になる碗の形態になる。器面調整は手捏であるため、撫であるが、22の底部には刷毛目状の調整痕が残されている。

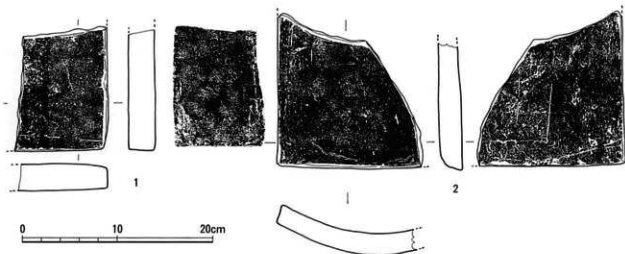
第3-103図8は口径9.8cmの在地区土師質土器の皿である。9～11は備前焼で、9は壺の口縁部、10は口径24.4cmの皿である。11は大甕の底部である。12は茶道具の風炉の足である。13は瓦質土器の楯鉢である。14は東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。15は土鍋の足と考える。16～23は紡錘形の土錘であるが、22・23は大型でタイプが異なる。24は紡錘車として作製された土製品である。25は断面方形の鉄器である。26は砥石である。

第3-105図は出土した銅線である。1は「淳化元寶」、2は「嘉祐通寶」、3は「元豊通寶」、4は「永樂通寶」、5は「皇宋通寶」、6は「洪武通寶」、7は「聖宋元寶」、8は「嘉祐通寶」と判読できる。

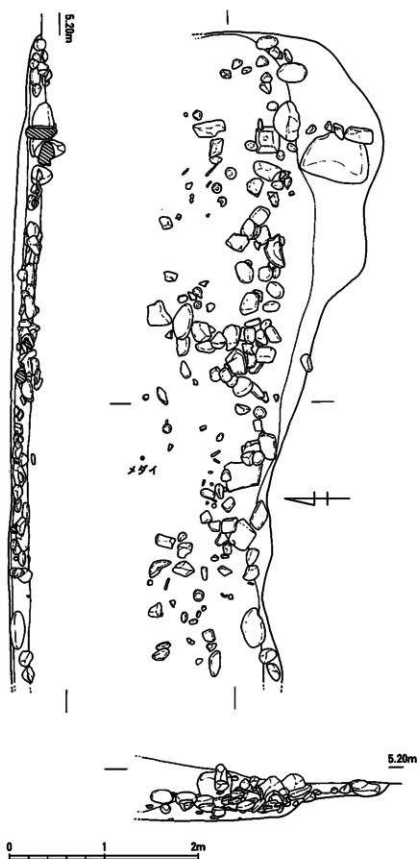
第3-104図は石造品で、1は五輪塔の火輪部分である。2は石材を屋根形に刻んでいる石造品の一部と考える。いずれも阿蘇凝灰岩製である。

第3-106図は青銅製品で、縦1.6cm、横1.3cmを測る。上位には横方向から小さな穴が通り、紐を形成している。キリシタン遺物のメダイと考える。

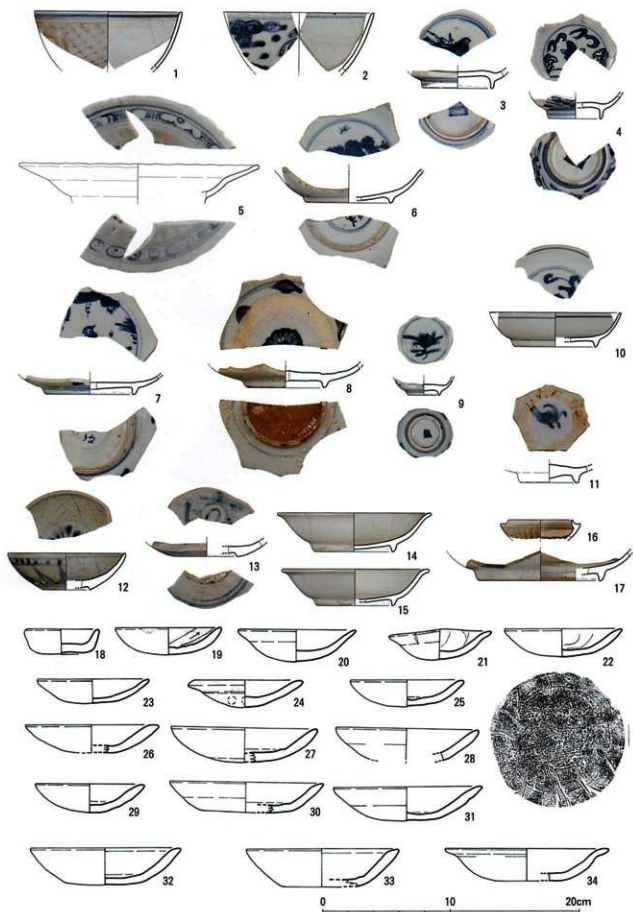
第3-107図は鉄製品である。1は円形で縁の断面が三角形になる製品の半分と考えられる。器種は不明である。2は直径8.4cmの器部分を持つ杓子である。柄の長さは3cm残されている。



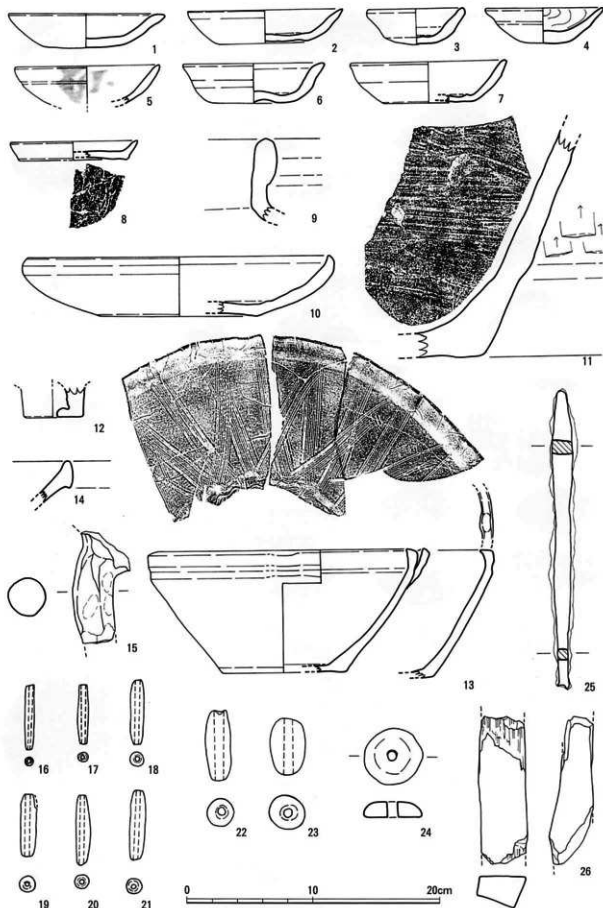
第3-100図 SF014出土瓦・埴実測図(1/4)



第3-101図 府内町跡第43次調査SK015実測図 (1/40)



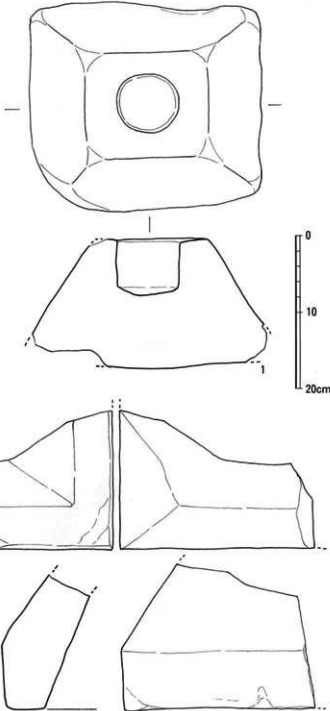
第3-102図 SK015出土遺物実測図1 (1/3)



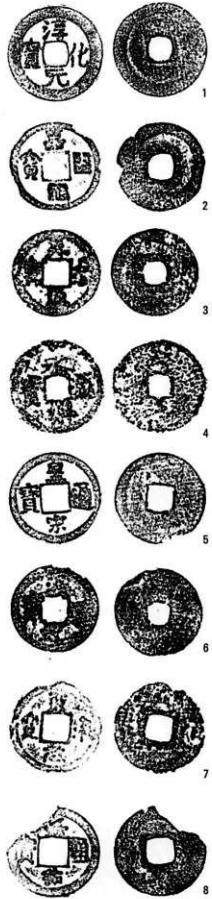
第3-103図 SK015出土遺物実測図2 (1/3)

第3-108図は挽き臼である。1は上臼で、供給口が残されている。播り目は、6分画5溝と想定できる。2は受皿を持つ下臼である。外面は粗い仕上げであり、播り面は8分画で6～8の溝が刻まれており、茶臼と考える。

SK015は遺構の切りあい関係から見ても、天正14年(1586)以降と考えられる第Ⅱ期礎石建物より新しく、府内町跡第43次調査の中でも最も新しい遺構のひとつと考えられ、16世紀末葉と想定する。



第3-104図 SK015出土石造品実測図 (1/5)



第3-105図 SK015 出土銅銭
実測図 (1/1)

SF018

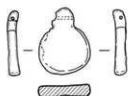
H-63の掘さげを行う際、第2南北街路の上面から礫に混じり遺物が出土した。これをSF018はとして報告する。南に約5m離れた位置のSF014とした遺物群と同じと考える。

第3-109図1～3は紡錘形の土鍾である。4は糸切底の在地系土師質土器である。5～9は備前焼で、5は播鉢、6は徳利、7・8は甕で、9はその底部である。10は瓦質土器の鉢と考える。11は瓦質土器の火鉢の底部であろうか。12は滑石製石鍋の口縁部である。13は柱状にし、上面を広くした燗台である。14は弥生土器の甕形土器の底部である。

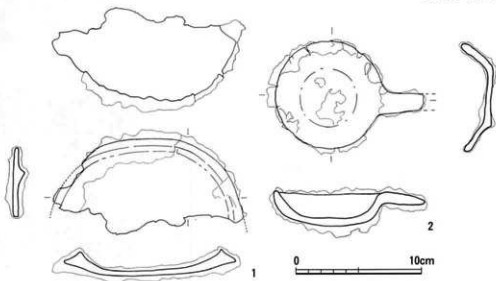
石鍋
燗台

第3-110図は埴である。撫で仕上げであるが、コビキ痕が残されている。

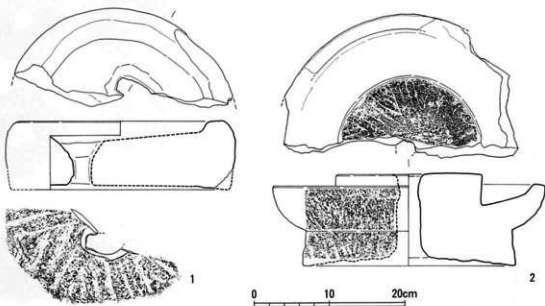
第3-111図は2点の銅銭である。1は「紹平通寶」と



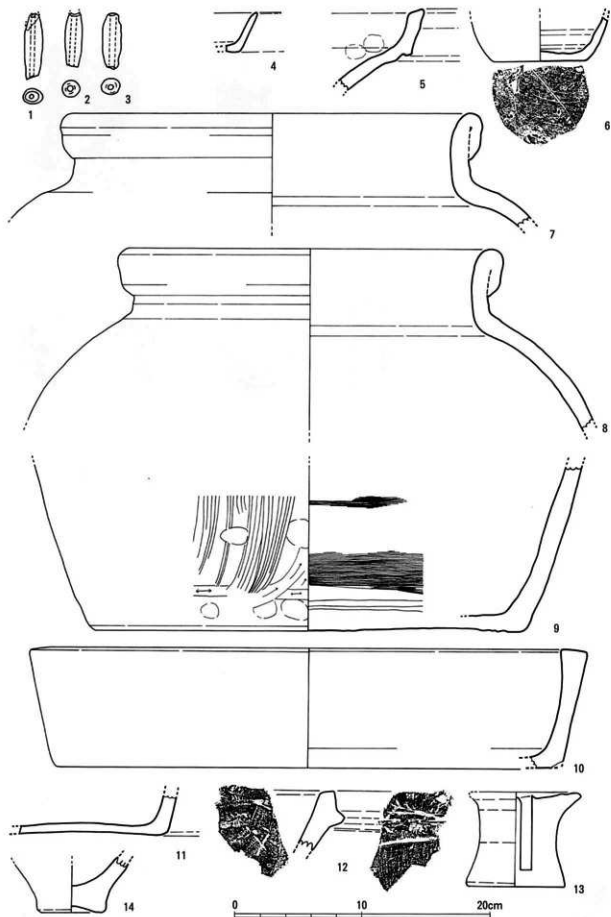
第3-106図 SK015出土メダイ
実測図 (1/1)



第3-107図 SK015出土鉄器実測図 (1/3)



第3-108図 SK015出土焼白実測図 (1/5)

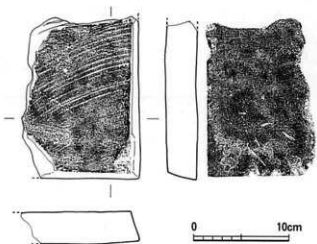


第3-109図 SF018出土遺物実測図1 (1/3)

読めるが、2は摩滅とサビで判読不明である。

第3-112図は挽臼である。1は上臼で、挽き手を差込む穴が菱形の台座を拵え開けられている。播り目は8分画8溝式で、茶臼と思われる。2も上臼で、挽き手の穴が認められる。3は小片で不明である。4は受皿の付く下臼で、1と組み合う。

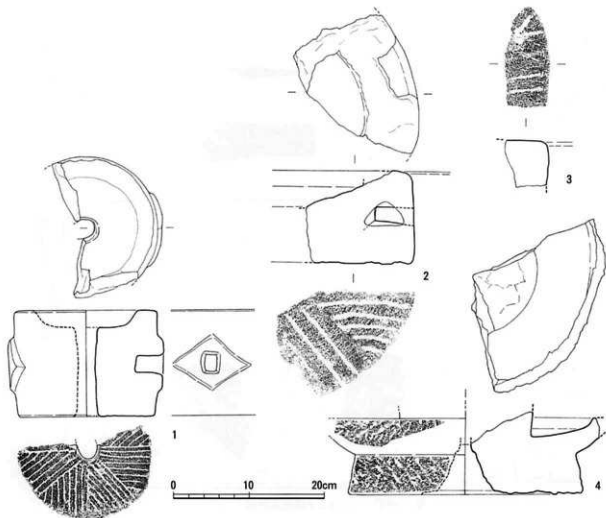
SF018からは多様な遺物が出土するが、時期は16世紀後葉から末葉と考える。



第3-110図 SF018出土瓦実測図 (1/4)



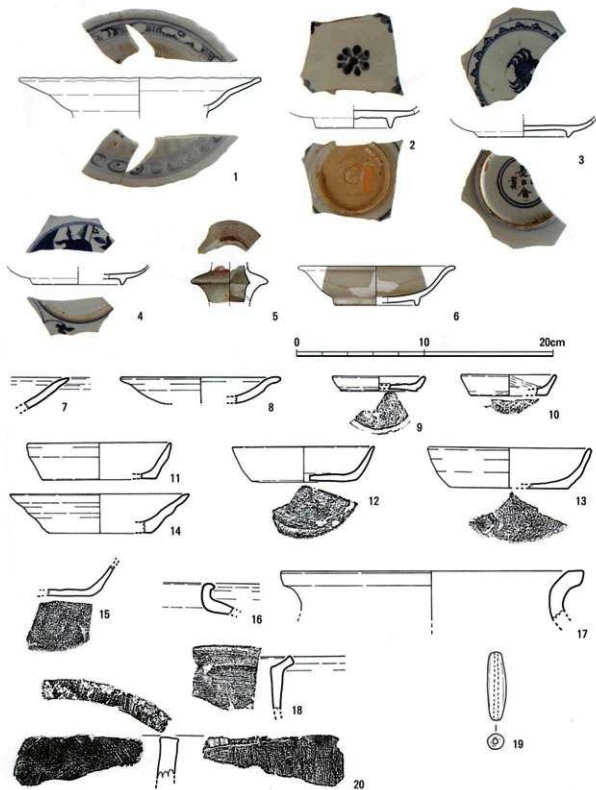
第3-111図 SF018出土銅銭 (1/1)



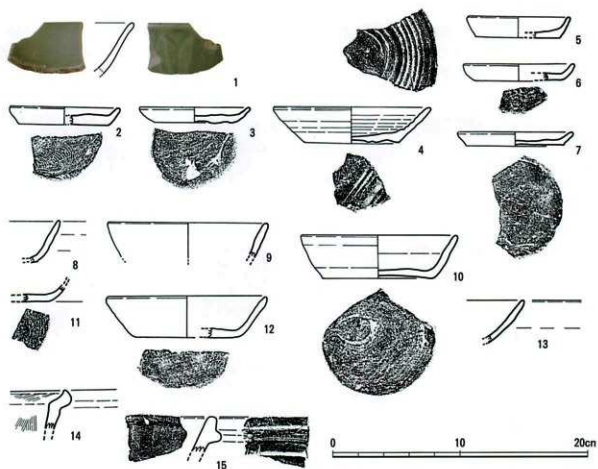
第3-112図 SF018出土遺物実測図 2 (1/5)

SK019

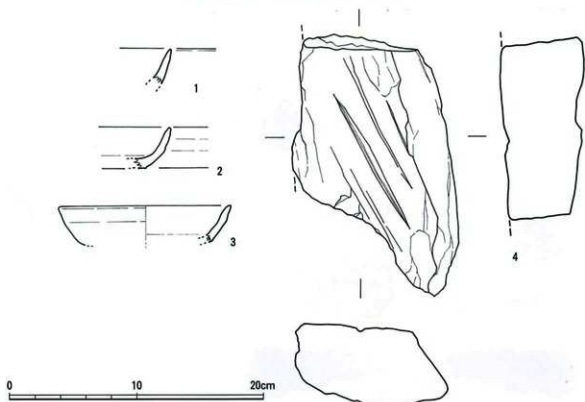
第Ⅱ期礎石建物の基礎の版築状況の土層を確認し、第3-63・3-65図の土層図を作成した。その掘り下げの際出土したものをSK019として第3-113図に報告する。すなわち、この遺物は第Ⅱ期礎石建物の基礎の版築を行う際に混入したものと理解できる。



第3-113図 SK019出土遺物実測図 (1/3)



第3-114図 SK020出土遺物実測図 (1/3)



第3-115図 SK021出土遺物実測図 (1/3)

1はSK015と接合した資料で、「つば皿」となる青花皿F群で、口縁部は輪花状になる。2は高台内側が露胎となっている。3は見込みに蟹が描かれている。2～4も青花皿で、3・4は景德鎮窯系であるが、1・2は漳州窯系である。5は呉洲赤絵で、器形はクンディーの口縁部近くと考える。6は白磁である。

7・8は京都系土師器である。9～15は糸切底の在地系土師質土器である。9・10は口径が7cm程度の皿状であるが、11～14は口径が12cm前後で、器高が3cm前後の坏形となる。16は備前焼で水屋裏の口縁部と考える。17は瓦質土器の甕である。18は刷毛目で器面調整された土鍋である。19は紡錘形の土鍾である。20は滑石製の石鍋の破片である。

SK019の時期は、古い時期の遺物も出土しているが、状況から考えると16世紀後葉から末葉と考える。

SK020

SK020はH-64とH-65の境で検出された細長い土坑である。東西3.1m、南北0.8mで、深さは20cm前後である。西の端はSD012から切られている。

第3-114図は出土した資料であるが、1は鎗連弁のある龍泉窯系碗である。2・3・5～13は在地系の土師質土器である。このうち、2・3・5～7の5点は口径が8～9cmで、器高は1.0～1.5cm、底径は7cm前後の皿である。8～13は口径が12cm前後で、器高が3cm以上ある坏に器形が分化している。これらはいずれも、底部が糸切底である。4もまた、糸切底の在地系土師質土器であるが、内面にロクロ回転によるせん状の段が生じている。また、器形は口径12.5cmに比較すると7.5cmと底径は小さく、逆大形状になる。14は口縁部が屈曲し、器面を刷毛目調整した土鍋である。15は外面に削り出しの突帯が付く滑石製の石鍋である。第3-119図1の銅銭も出土している。

SK020の時期は、14世紀代の遺物も多いが、編年上新しい4の在地系土師質土器とすると、15世紀末から16世紀初頭と考える。

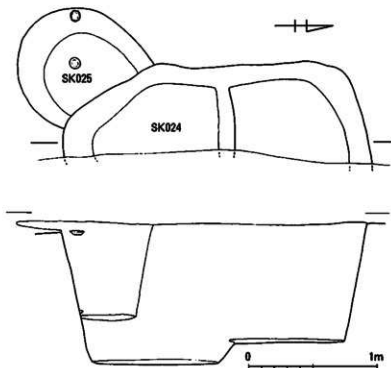
SX021

H-65とI-65の間で集石が検出された。この周辺で出土した遺物をSX020として第3-115図に報告する。

1～3は在地系土師質土器である。3の口縁部の径は13.4cmであり、2・3の器壁は中位が最大となっている。4は磁石であるが、中央部が鋭く3条の溝が形成されている。

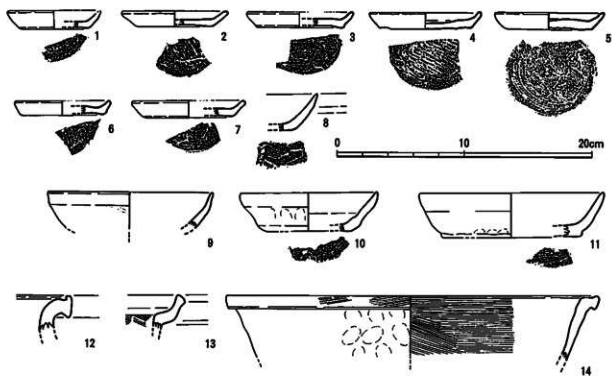
SK024

SK024はI-64で検出された土坑で半分は調査区の東壁にかかり、調査できなかった。確認された遺物の

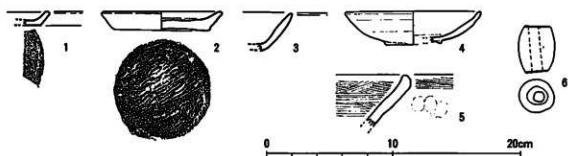


第3-116図 府内町跡第43次調査SK024・025実測図(1/30)

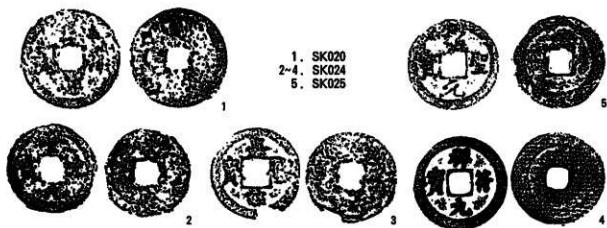
第2節 遺構と遺物



第3-117図 SK024出土遺物実測図 (1/3)



第3-118図 SK025出土遺物実測図 (1/3)

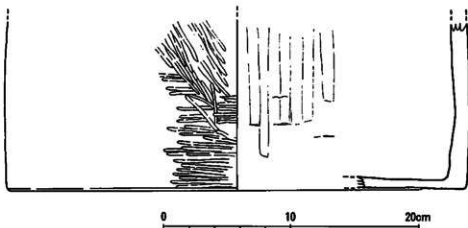


第3-119図 SK020・024・025出土銅銭実測図 (1/1)

規模は、南北2.42m、東西は0.7m以上で、深さは南半分が1.1mであるが、北半分は若干浅く、0.95mであった。

常滑焼

出土した遺物は第3-117図に図示した。遺物の主体は在地系土師質土器である。これらはロクロを使用し、底部には糸切痕が残る。形態は1～7が口径8cm前後で、器高が1cm強の皿と、8～11の口径が10～14cmで、器高が3cm前後の杯が認められる。この他、12は常滑焼の甕の口縁部であり、13・14は土鍋と考える。14は口径29cmで、内面が横方向の刷毛目、外面には指圧痕が全面に残る。



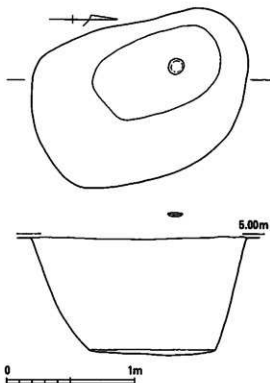
第3-120図 SK026出土遺物実測図 (1/3)

SK025

SK025は東北部をSK024と切りあった関係で検出された。確認できる遺構の規模と形態は、検出面では南北約1m、東西約1mの円形をしている。深さは、約80cmで床面は平坦である。

出土した遺物は第3-118図に図示した。この遺構からの出土遺物も土師質土器が主体を占める。1・2は在地系土師質土器の皿で、2の口径は9.4cm、器高1.5cmである。3は小片であるが杯で、器壁は口縁部下が最大になる。4は口径10.6cm、器高2.5cmで、小さい高台が付く。胎土は白色で、吉備系土師器である。5は内面が刷毛目、外面が指圧痕で調整された土鍋と考える。6は紡錘形の大形の土鍾である。また、第3-119図は出土した銅銭である。

切りあうSK024とSK025の関係は、土層では確認できなかった。遺物の内容から見ても、両者とも14世紀代であることは間違いない。ただ、14世紀初頭に編年されている吉備系土師器を中心に考えると、SK025が古くなる。



第3-121図 SK030実測図 (1/30)

SK026

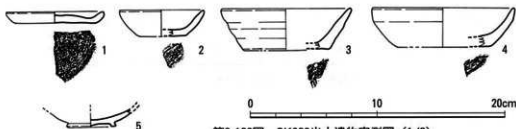
SK026はH-65の東側で検出された柱穴群の上面にあった浅い掘り込みである。遺物は第3-120図に図示した瓦質土器が出土した。底部の直径は39cmで、器面は、内面が縦方向、外面の底部近くが横方向その上位は斜め方向にヘラ磨きされている。器種は火鉢と考える。

SK030

SK030はI-64で検出された土坑である。規模は南北1.8m、東西1.2mの楕円形をしており、検出面からの深さは0.9mで、平坦な床面に達する。壁はやや斜めである。遺物は遺構上面で在系土師質土器が出土したほか、内部からも同様の土器が出土した。

第3-122図がそれであるが、1は皿で、3・4は杯である。2は口径は小さいものの、器高は皿より高く、小形の杯と考える。5は小さい高台がめぐる白色の土器で、吉備系土師器と考える。

SK030の出土遺物は、隣接するSK024やSK025と遺物の内容が同じであり、14世紀代に同じ目的で掘られた可能性がある。

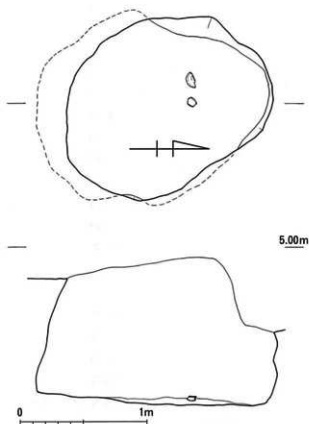


第3-122図 SK030出土遺物実測図 (1/3)

SK032

SK032はG-63の第2南北街路の整地土を全て除去した後で検出された土坑である。確認できた規模は、検出面で南北1.6m、東西1.4mの不整円形をしているが、深さは1.1mあり、床面は平坦で、断面がフラスコ状になる。

主要な出土遺物は第3-128図の1・2に図示した。1は口縁部に圈線のみ描かれた漳州窯系の碗である。2は京都系土師器である。このことから、この土坑が掘削された時期は16世紀後葉と考える。



第3-123図 府内町跡第43次調査SK032実測図 (1/30)

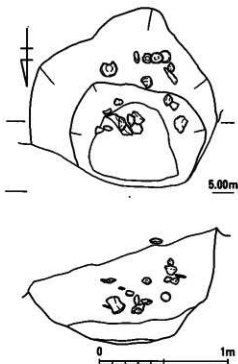
SK033

SK033もSK032と同様、第2南北街路の整地土を全て除去した後で検出された土坑である。さらに、SD012から東側を削られている。このため残された土坑の規模は、南北1.4m、東西1.4mの不整形円形をしている。検出面から床面までの深さは90cmで、実測図では掘鉢状であるが、検出時はオーバーハング気味であった。

遺構内からは第3-128図3～17の遺物が廃棄された状態で出土した。1～9は口径が8.1cm～9.4cmで、京都系土師器の最小のグループに属する。また、10～12の口径は12.0～12.8cmであり、13・14の口径は13.6～14cm、15の口径は16cmで最大のグループとなる。このように、SK033には各サイズの京都系土師器が廃棄されている。

東播系須恵質土器 16は口縁部を肥厚し、屈曲させた東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。17は口縁外端部を肥厚した土鍋と考える。口径は37.8cmで、外面はヘラ削りの痕跡が残り、内面はヘラで横方向に磨かれている。

SK033の時期は、京都系土師器から16世紀後葉と考えられるが、同じ時期の遺構が複雑に切りあっており、同じ土器型式の中での遺構の順序は明確である。

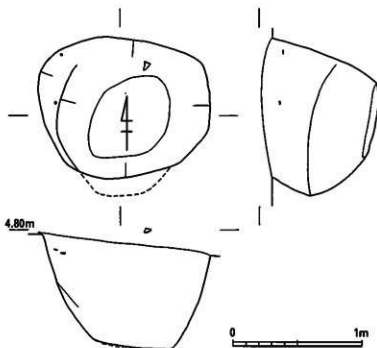


第3-124図 府内町跡第43次調査
SK033実測図 (1/30)

SK034

SK034はSK033の南側の第2南北街路下の土坑である。遺構の規模は南北1.1m東西1.4mの楕円形で、遺構の深さは検出面から80cmで、南側が抉れている。遺構内からの遺物は第3-128図18～21に図示した。18は樟州窯系の青花皿で、19は白磁である。20・21は京都系土師器である。

以上の遺物から、SK034の時期は、16世紀後葉と考えられる。



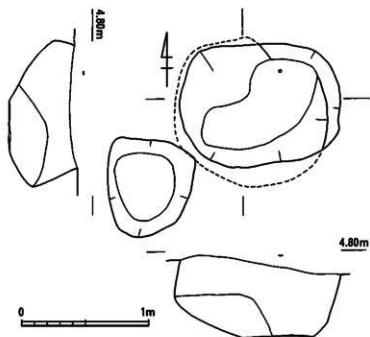
第3-125図 SK034実測図 (1/30)

SK035

SK035はSK034の南側に隣接して検出された土坑である。検出された経過は、SK032～SK034と同じで、第2南北街路下で確認された。遺構の規模は、南北0.9m、東西1.3mで小判形をしている。検出面からの深さは50cmで、東側の壁以外は抉れ、断面形は袋状になる。床面は平坦な部分が狭く、丸底状に近くなる。

出土遺物は第3-128図22・23の京都系土師器等が認められる。22は口径が11.4cm、器高2.3cmで、手握ね製作のため器面全体は横撫でで仕上げられている。23はこれより大きく、口径は14.4cmである。口縁部外面は強い指撫でのため、段が生じている。

SK035の時期は、これらの京都系土師器から16世紀後葉と考える。



第3-126図 府内町跡第43次調査SK035実測図 (1/30)

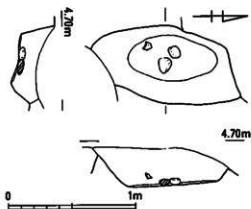
SK037

SK037はSK035の南西部に隣接して検出された南北0.8m、東西0.7mの小土坑である。深さは約30cmで、床面は平坦である。出土遺物は第3-128図の24の16世紀後葉の京都系土師器が出土している。

SK039

SK039はG-64の第2南北街路下で検出された土坑である。複雑に切り合う土坑群の中で確認できる規模は、南北1.1m、東西0.6mの長楕円形で、深さは約30cmで床面から礎を検出した。

出土遺物は第3-128図の25の景徳鎮窯系の青磁碗がある。内面の状況から輪花状の口縁部になると想定でされる。

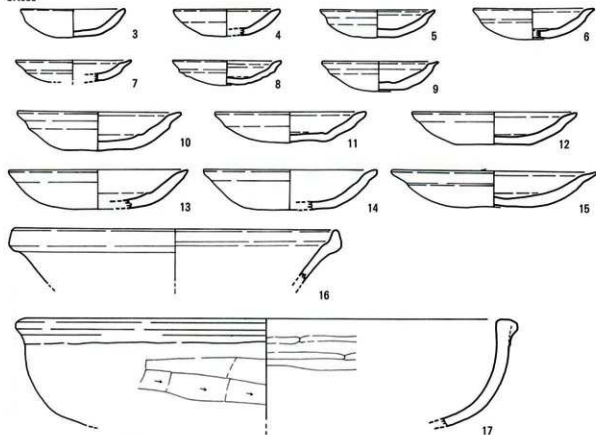


第3-127図 府内町跡第43次調査SK039実測図 (1/30)

SK032



SK033



SK034



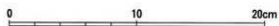
SK035



SK037



SK039

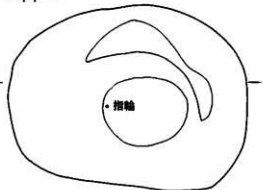


第3-128図 SK032・033・034・035・037・039出土物実測図 (1/3)

SK040

SK040もG-64の第2南北街路下で検出された浅い土坑である。主要出土遺物は第3-134図1～3であるが、1は焼成の悪い龍泉窯系の青磁碗である。2は京都系土師器、3は糸切底の在地系土師質土器である。

時期は、京都系土師器が出土していることから16世紀後葉と考える。



SK043

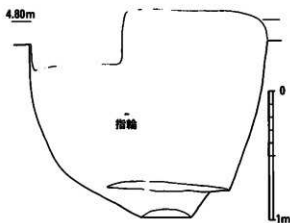
SK043もG-64の第2南北街路下で検出された浅い土坑で、さらに東側をSD012で切られている。出土遺物は第3-134図4～7の京都系土師器が出土している。このため、時期は16世紀後葉と考える。

SK044

SK044はI-64の調査区東壁近くで検出された柱穴状の遺構である。出土遺物は第3-134図8の14世紀代の坏がある。

SK046

SK046はG-64の第2南北街路下で検出された土坑である。規模は南北1.9m、東西1.4mで検出面からの深さは1.6mである。床面は平坦面が小さく丸底に近い。断面は袋状になる。

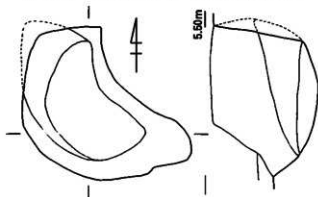


第3-129図 府内町跡第43次調査SK046実測図(1/30)

出土遺物は第3-134図に9～12に図示した。9は潭州窯系の青花碗である。10は京都系土師器で、11は備前焼の播鉢である。注目されるのは12の指輪である。内径1.6cm×1.5cmで横筋の入った二重のリングで作製され、方形の台座が付く。

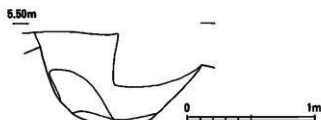
指輪

時期は潭州窯系の碗や京都系土師器が出土していることから、16世紀後葉と考える。



SK047

SK047もG-64の第2南北街路下で検出された土坑である。規模は南北1.1m、東西1.3mで、検出面からの深さは約80cmである。不

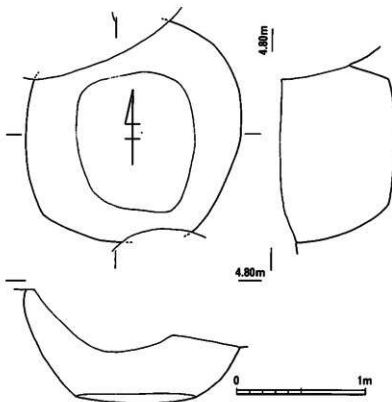


第3-130図 府内町跡第43次調査SK047実測図(1/30)

定形な形状の土坑である。遺物はほとんど出土しなかった。

SK048

SK048 もG-64の第2南北街路下で検出された土坑で、SK046に南側を切られる。また、北側もSK049に切られる。確認できる規模は、東西1.7m、南北1.7mの不整形円形で、検出面からの深さは90cmである。床面の平坦部は小さく、壁はオーバーハング気味になる。



第3-131図 府内町跡第43次調査SK048実測図 (1/30)

第3-134図13~17は主要な出土遺物であるが、13は景德鎮窯系の青花壺である。

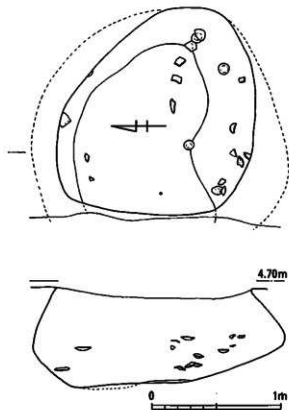
14~17は京都系土師器である。

時期は、京都系土師器がまとまって出土していることから16世紀後半と考える。

SK049

SK049も第2南北街路下で検出された土坑で、SK048を切る。土坑の西側は調査区外となる。確認できる規模は、南北1.5m、東西1.6mの不整形円形である。検出面からの深さは70cmで、壁はオーバーハングするため、断面は袋状になる。

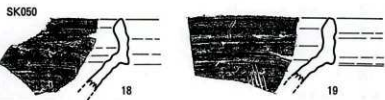
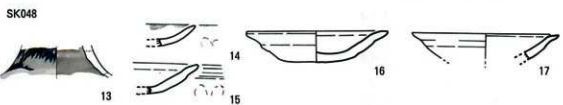
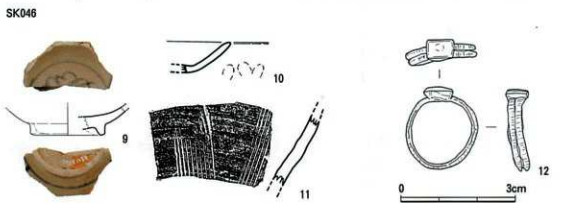
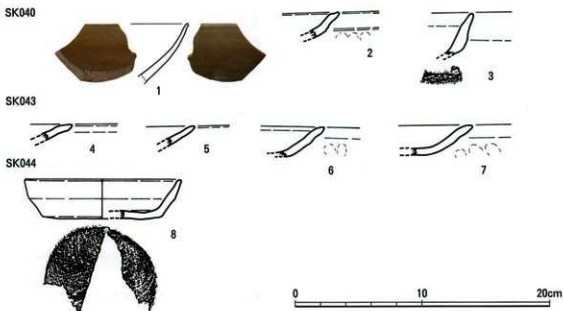
土坑内からは多くの貿易陶磁や銅銭など、多くの遺物が出土した。第3-135~3-137図は主要な遺物である。第3-135図1・2は内外面に圏線が一条走る漳州窯系の青花碗である。3は景德鎮窯系の青花碗である。4は漳州窯系の青花皿である。5は内外面に圏線が一条走る漳州窯系の青花碗で、蛇の目釉刺ぎと考えられる。6・7も漳州窯系の碗である。8はつば皿で、漳州窯系と考



第3-132図 府内町跡第43次調査SK049実測図 (1/30)



第3-133図 SK043・046出土銅銭実測図 (1/1)



第3-134図 SK040・043・044・046・048・050出土遺物実測図 (1/3)

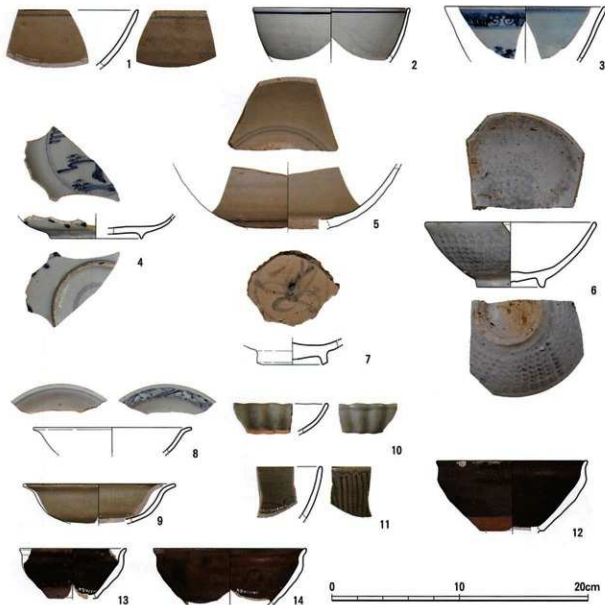
える。9は白磁で、10は景德鎮窯系の青磁の輪花皿である。11は龍泉窯系の剣先連弁である。12～14は瀬戸美濃系の天目茶碗である。

第3-136図は京都系土師器を主体とした遺物である。1～20は京都系土師器である。1～3は口縁部の小片である。口径が復元できる中で、4～9の口径は9cm前後であり、京都系土師器の中で最小グループを形成するものである。10～17・19は口径が12～13cmで、五法量に分化する京都系土師器の中で中位のグループである。そして、18の口径は15cm、20が16cmで、最大グループとなる。

21は在地系土師質土器で口径は8.4cm、器高2.1cmで、底部には糸切痕が残る。22は備前焼の播鉢で、内面の播り目は、底部から放射状に口縁部に向けて延びる。

23は中央に穴がある青銅製品の半分である。24は鉛製の可能性が強い金属製品である。両者とも器種不明である。25は鉄製品である。長さは37.2cmで、断面は方形をしている。先端は尖り、基部は9cmの範囲でらせん状に捻られている。そして端部は環状に曲げられ、別の鉄輪が付いている。この輪はもう一本のものと連結するものと想定され、火箸と考えられる。

第3-137図は出土した銅銭である。1は「紹聖元寶」、2・3は重なって出土した「永樂通寶」、

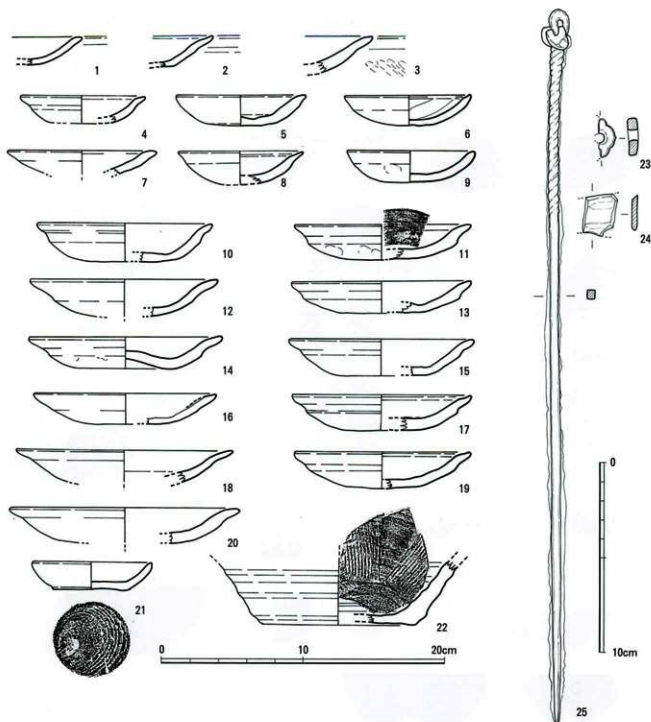


第3-135図 SK049出土遺物実測図1 (1/3)

第2節 遺構と遺物

4・6は「元豊通寶」、5は「元符通寶」でこの3枚も重なって出土した。7・10は「元祐通寶」、8は「至道元寶」、9・12は「咸平元寶」、11・13・18は「元豊通寶」、14は「通」と「寶」のみ判読できる。15は「皇宋通寶」、16は「嘉祐通寶」、17は「永樂通寶」である。以上のほか、判読不明や状態の悪い銅銭が3枚出土している。

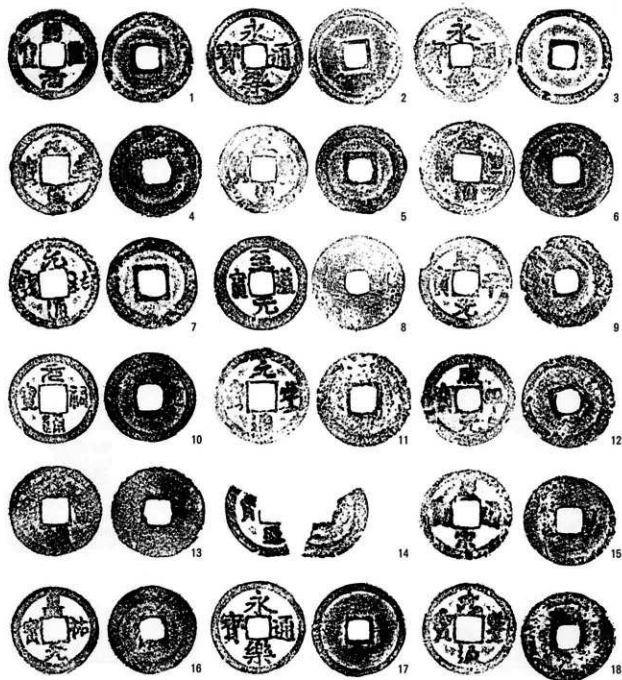
SK049からは、京都系土師器や漳州窯系陶磁器がまとまって出土することから、16世紀後葉と考える。



第3-136図 SK049出土遺物実測図2 (1/3)

SK050

SK050は第2南北街路下で、SK046・SK047・SK048と調査区の西壁に囲まれた範囲で、浅い窪みがあった。遺物は第3-134図の18・19の備前焼の播鉢がある。播り目は明確ではないが、口縁部の形態から16世紀後葉と考える。



第3-137図 SK049出土銅銭実測図(1/1)

5. 柱穴状遺構

府内町跡第43次調査区は中央部にSD012とした万寿寺の西境の掘りか掘削されているため柱穴のような小さな遺構は、万寿寺側で集中的に検出された。特に、H-65・I-65で約50基の柱穴状の遺構を検出した。これらは、掘立柱建物として、組み合わせることは出来なかった。

こうした柱穴状の遺構に対しては、S1001と千番台から名称を付けた。こうして調査した結果、柱穴状遺構からは遺物も出土し、時期を決定付ける有力な証拠となった。

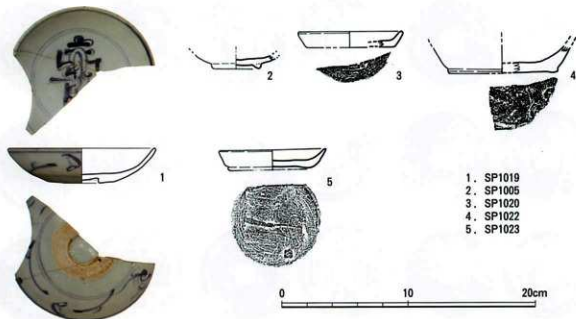
第3-138図にそうした遺物を図示した。SP1019はSK020の南側で検出された、直径30cmの柱穴状遺構である。出土した遺物は1の青花皿である。底部は露胎で、蕃筒底となっており、青花皿C群に属する。漳州窯系である。16世紀後葉と考える。

SP1005はH-65で検出された柱穴状遺構である。出土した資料である2は径が3.7cmの断面三角形吉備系土師器の小さい高台が付く椀で、胎土が白色をしており、吉備系土師器と考えられる。時期は14世紀初頭に位置づけられている土器である。

SP1020はH-65でSD012の近くで検出された直径約40cmの柱穴状遺構である。出土した資料は3で、在地系の土師質土器である。口径は8cm、器高が1.2cm、底径7cmの皿である。底部は糸切で切り離されている。時期は14世紀代と考える。

SP1022はH-65の中央部で検出された柱穴状遺構である。出土遺物である4は在地系土師質土器の底部である。底部は8.6cmで、糸切痕が残る。口径が13cm前後の環と想定する。時期は14世紀代と考える。

SP1023はSP1022のやや南で検出された直径55cmの大型の柱穴状遺構である。5は出土した在地系土師質土器である。口径は8.5cmで、器高は1.6cm、底径は6.8cmの皿で、時期は14世紀代と考える。



1. SP1019
2. SP1005
3. SP1020
4. SP1022
5. SP1023

第3-138図 小土坑出土遺物実測図 (1/3)

6. その他

中世大友府内町跡第43次調査では、これまで報告した遺構以外に、様々な状況で遺物が出土した。前項でもそれらをSXとして遺構番号を付け報告を行ってきた。ここでは、H-63で万寿寺の西境の堀を検出中に確認した、天正14年(1586)の島津氏侵攻に起因すると推測されている焼土層をSX017とし、そこから出土した遺物を報告する。ちなみに、この層は第1期礎石建物の南側に調査したSX011と同じと考える。

SX017(第3-5図20層)

H-63を掘り下げ、万寿寺の西境の堀であるSD012を検出中に、厚い焼土層を検出した。この焼土層は厚い所では20cm以上堆積しており、多くの遺物を含んでいた。また、この焼土層の平面的な広がり、H-63の調査区の南寄りの全域に及んでいた。この焼土層をSX017としたが、第3-5図の土層で観察されたように、第2南北街路の整備は、二度行われており、焼土の堆積はその間に生じたと理解できる。すなわち、最初の街路整備の上面と焼土層の下面が同じ面であることが土層観察で明らかになった。そして、二度目の第2南北街路の整備はその上に土砂を乗せて整備していることも判明した。このことは、H-64の調査で、第1期礎石建物と第2期礎石建物の間に嵩上げ事業が行われていたことと符合する。

出土した主要遺物は第3-139・3-140図に図示した。第3-139図の1～10は貿易陶磁器である。1は青花の「つば皿」でⅢF群に分類されている。景徳鎮窯系と考えられる。2も同類の皿で、1・2とも胴部に銘文が見られる。3は青花ⅢE群で、底部に「福」の文字が書かれている。景徳鎮窯系と考える。4は青花ⅢEでB2群の底部である。5・6は文様構成や青花の色調などから4と同じ個体、もしくは同じ五枚組と考えられる。以上の3点は漳州窯系と考える。7は底部を欠くが漳州窯系の蒜筒底の皿でC群に分類されている。8の青花ⅢEは底部に「富貴佳器」の文字が書かれている。9も先の4～6と同じ組になる皿である。

10～13は京都系土師器である。10は口径8.5cmで、最小のタイプである。11・13は口径が11.6cm～11cmである。12の口径は14.4cmである。14は口径10.4cm、器高1.9cm、底径7cmの在地系土師質土器である。15・16は同一個体、あるいは同じ形態の瓦質土器の皿である。口縁部は尖り、内側に稜線を形成する。底部は上げ底状になり、糸切り底である。口径は、15が11cm、16が12cmである。

船徳利
信楽系の壺

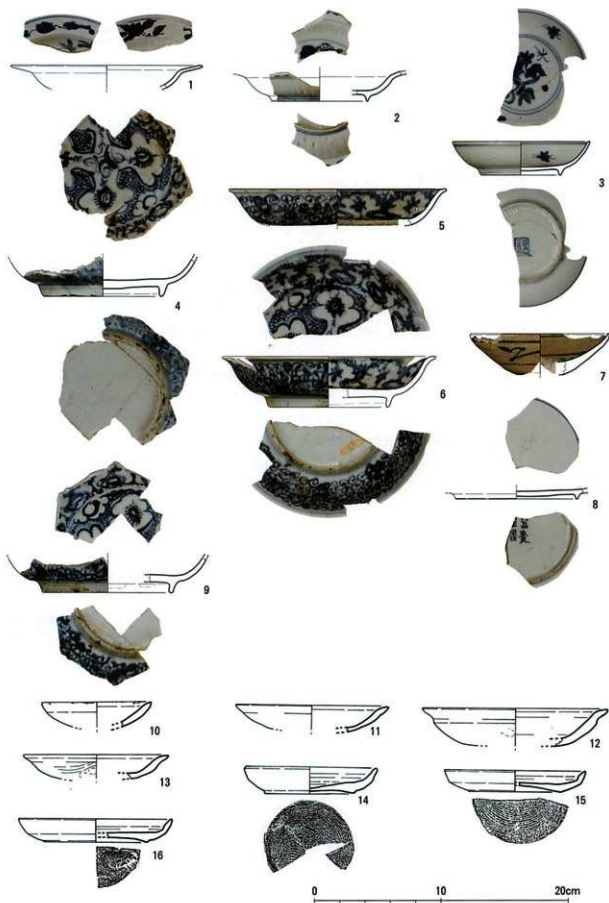
第3-140図1は器壁が薄く朝鮮王朝系の船徳利である。2は信楽系の壺の口縁部で肩部が肥厚し、玉縁状になる。3～5・7は備前焼である。3・4は同じ個体の可能性が強く、鉢と考える。胴部にへう描きがある。5は内外面にロクロによる成形痕が残る壺である。底径は14.8cmである。7は底部の資料である。

道案型風炉

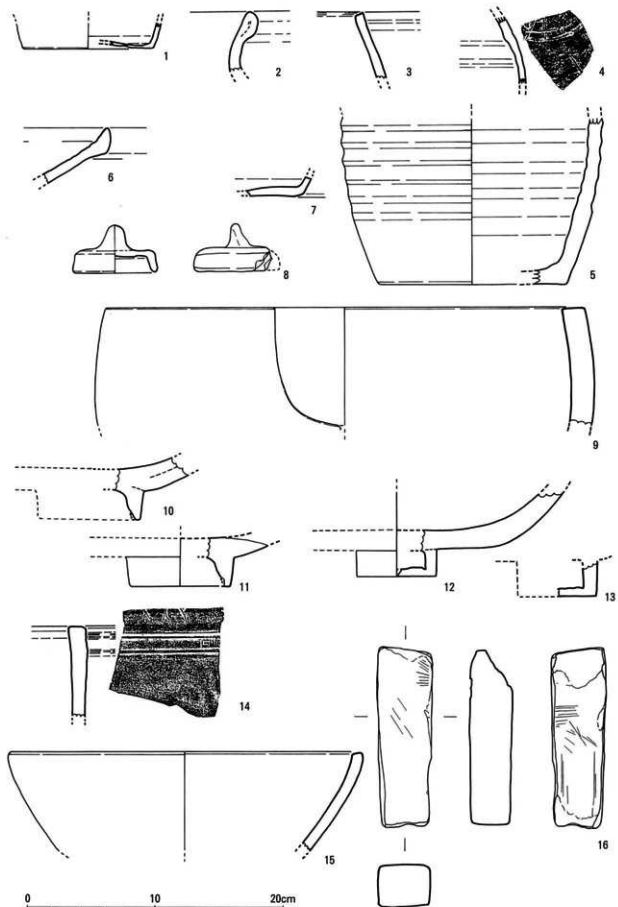
5は口縁部が肥厚して、断面が三角形になる特徴を持つ東播系須恵質土器の鉢の口縁部である。8は土師質土器であるが、つまみ状の突起が付き、蓋と考えられる。9～13は明褐色をした瓦質土器で、道案型風炉の破片である。9は口縁部から胴部にかけての資料である。口径は37.2cmで、正面が大きく「U」字状に抉れている。また、この風炉には脚が少なくとも3ヶ所付くが、10～13がそれである。脚の径は11が8cm、12は6.2cmである。9と12の破片から器高を推測すると約22cmはあると思われる。

14は口縁部外面に細い平行突帯を二条通らせ、その間に雷文を疎らに施文している。火鉢と考える。15も口径17.6cmの瓦質土器の鉢である。16は砥石である。SD012の第3-27図1で報告した火縄銃の火鉢もこの層からの出土である。

SX017が形成された時期は出土遺物の京都系土師器や、漳州窯系遺物などからSX011と同じ16世紀後半と推測される。



第3-139図 SK017出土遺物実測図1 (1/3)



第3-140图 SK017出土遺物実測図2 (1/3)

7. 包含層出土遺物

府内町跡第43次調査では近世の水田基盤層までを重機で除去し、それから下層は移植コナで遺構に注意を払いながら掘り下げを行った。その間は整地土層となっており、多様な遺物が出土した。そこで、ここでは、そうした中から注目される遺物を抽出して報告する。

第3-141図に図示した資料はH-63から出土した資料である。既にSX017の上層ととらえることが出来るが、新旧の遺物が混在している。

1～8は京都系土師器である。1～4は口径が9cm代であるが、5・6は口径12cm前後、7は15cm弱である。8の形態は口縁部が立ち、環状になる。9は口縁部下が肥厚する在地系土師質土器である。10は細い断面三角形の高台が付く吉備系土師器の底部である。

11～15は備前焼で、11は播鉢で、12は大甕の口縁部である。13は長頸壺の口縁部である。14は直口する口縁部で、15は胴部に指押さの浮文が部分的に付く特殊な容器である。16～19は瓦質土器の火鉢である。17は肥厚した口縁部の外面に細い突帯が二条走り、その間に腰手文のスタンプが施文されている。20は紡錘形の土甕である。

形状青銅製品 21～25は金銅製品で、21は獣形の青銅製品である。22～25も青銅製品で、何らかの製品の部品と考えられ、特に25は断面が方形で頭が半球形でビスと思われる。

第3-142～3-143図と第3-144図1～6の大部分は貿易陶磁器である。第3-142図1～5は景德鎮窯系の青花碗で、底部の形態から碗E群である。6・7は景德鎮窯系の青花皿で、7は皿E群である。8・9は涼州窯系の碗である。10は青花皿F群の「つば皿」で景德鎮窯系である。11・13・15は涼州窯系の皿で、15は大形である。12は青花の蓋である。14は青花長頸壺である。16は白磁の小杯である。

第3-143図1は青磁の碗で、2は香炉である。3は瓶で、4は胴部の腰が張る形態で、香炉の可能性がある。5は青磁の皿で、6は輪花皿である。7は青磁の大皿である。以上は龍泉窯系である。

朝鮮王朝産 8は梅瓶で景德鎮窯系の青白磁である。9・10は朝鮮王朝産の陶磁器で、9は刷毛目と思われる。華南三彩 10は白泥の入った象嵌の青磁である。11は中国産と思われる焼締陶器である。12は華南三彩の水注の蓋と考える。13・16は瀬戸美濃系の皿である。14は中国産の褐陶陶器である。15は軟質施軸陶器と言われる黒染の小片である。17は暗緑色をした陶器で唐津系と考えられる。18は鉄軸で文様を描かれた皿である。絵唐津と思われる。

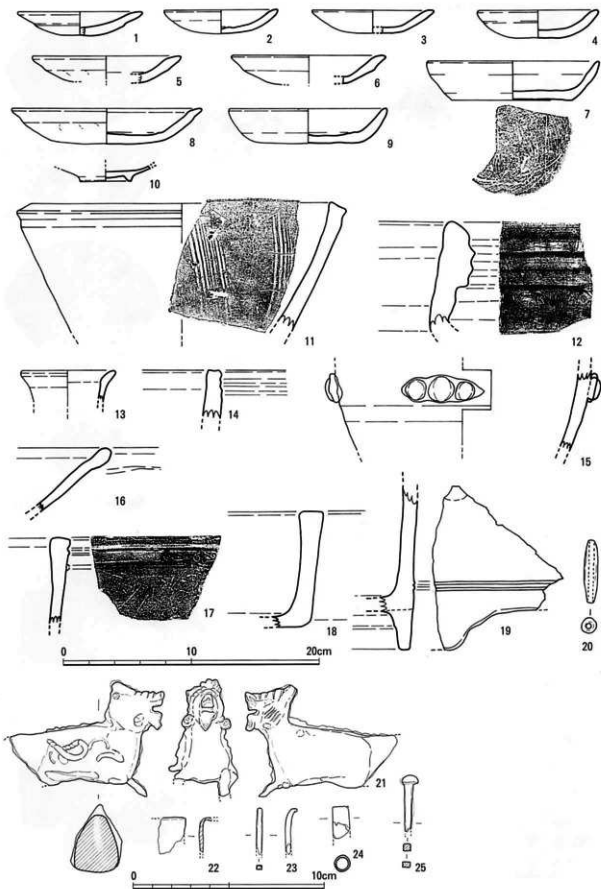
第3-144図1・2は口縁部と底部を欠く中国産黒軸陶器である。3～5は中国産と推測される焼締め陶器の鉢の口縁部である。5は播鉢で、掘り目を見ることが出来る。6は朝鮮王朝産の船徳利である。7も小型の陶磁器である。

8～27は京都系土師器である。口径は一部を除き9cm前後で、豊後府内から出土する京都系土師器の中で最小のグループに属する。これらの土器は儀礼に使用される以外に、9・16・18に見られるように口縁部にスガが付着しており、灯明皿として再利用している。

第3-145図1～39も京都系土師器である。1～28は口径が12cm前後で、先に報告したグループより大きく、豊後府内の中でも中位のグループである。これ以外は、29・30・32の口径が13～14cm前後、33は15.4cmと最大クラスになっている。また、34～39は本来皿形の京都系土師器が在地化し、器高が高くなり環状になっている。

40～39は在地系土師質土器である。口径は6～9cmまであり、口縁部の形態も様々である。しかし、器高は1～2cm程度で皿状である。底部は糸切り底で、49などは底部の器壁が厚く、本来の意味を失いつつある。

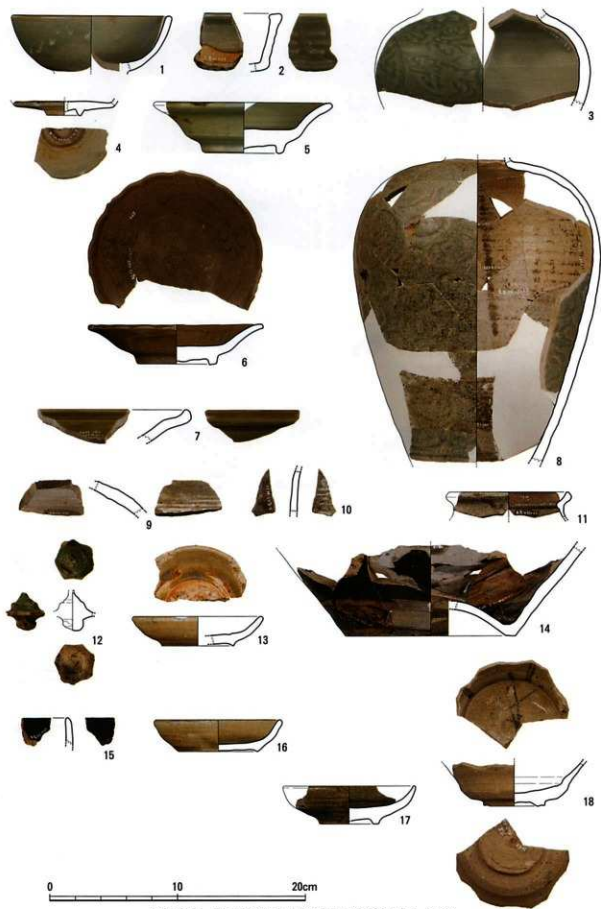
第3-146図1～10も在地系土師質土器である。前図で報告した皿状とは異なり、口径は12～13cm前後で、器高は3cmを越えるものも多く、環形をしている。口縁部の形態も、1～3は口縁部下が



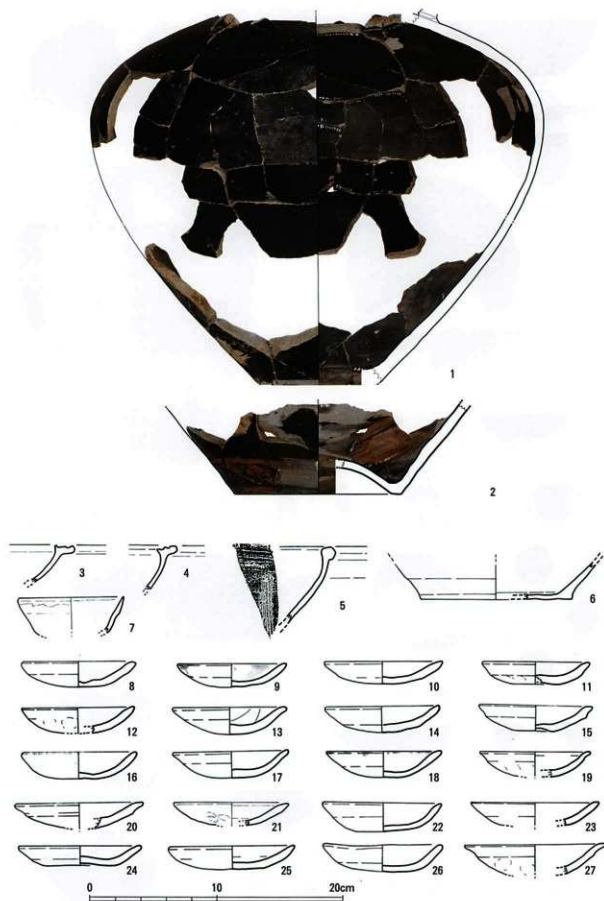
第3-141图 H-63区出土遺物実測図 (1/3)



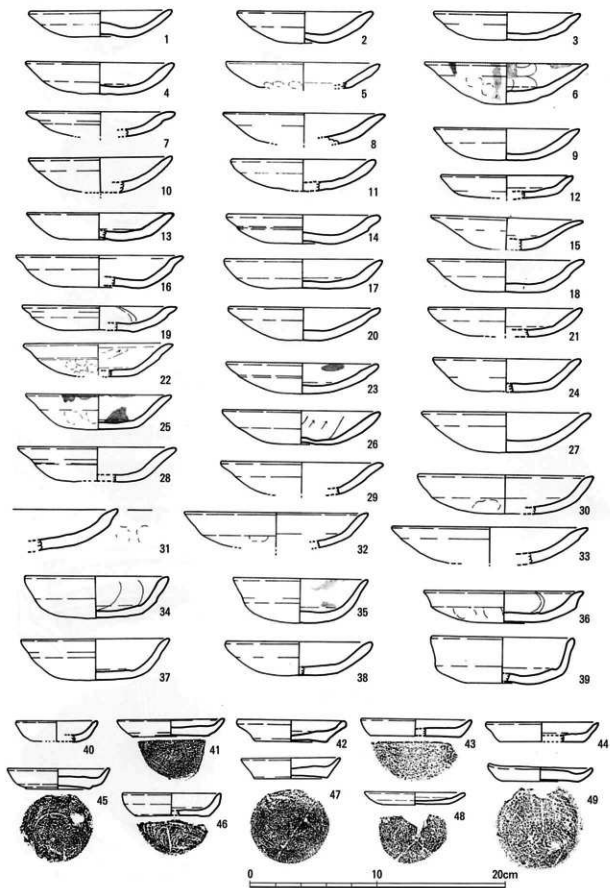
第3-142図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図1 (1/3)



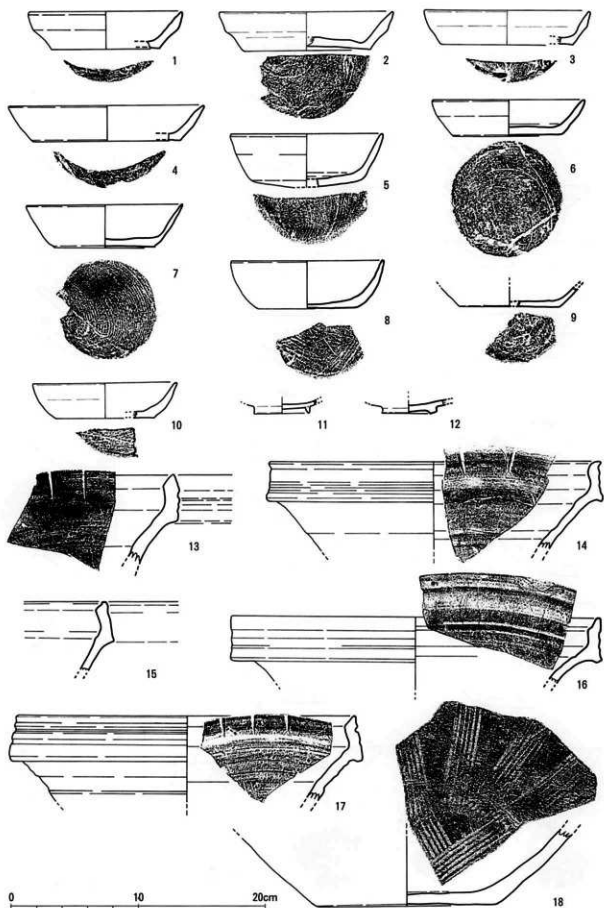
第3-143図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図2 (1/3)



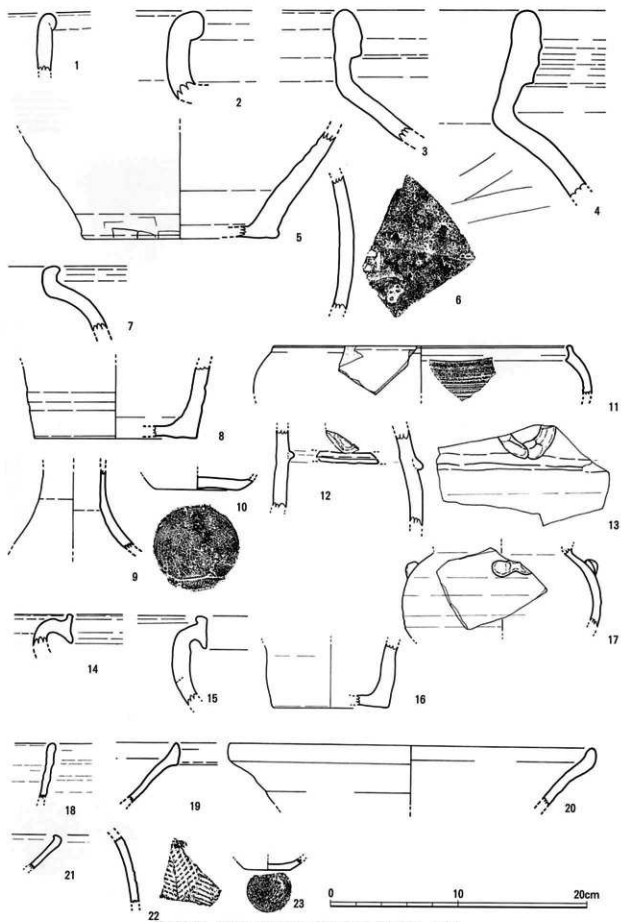
第3-144図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図3 (1/3)



第3-145図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図4 (1/3)

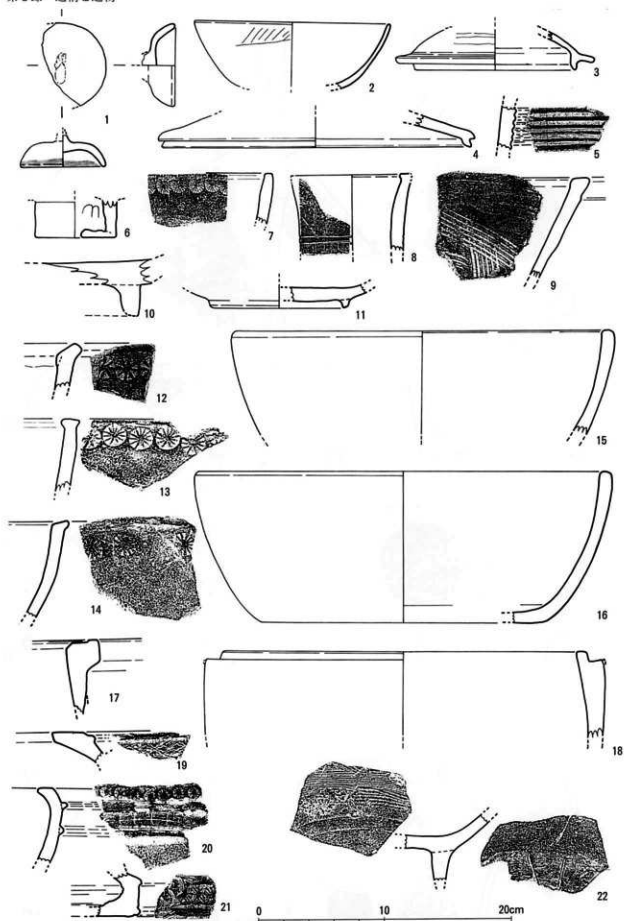


第3-146図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図5 (1/3)

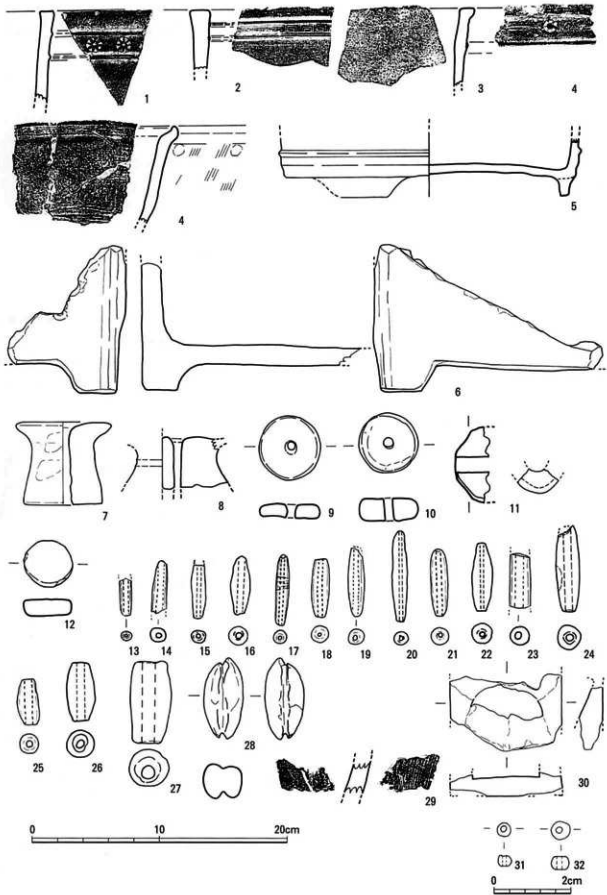


第3-147図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図6 (1/3)

第2節 遺構と遺物



第3-148図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図7 (1/3)



第3-149図 府内町跡第43次調査出土遺物実測図8 (1/3, 1/1)

第2節 遺構と遺物

肥厚し、断面が三角形になるが、4・8・10は底部近くが厚く、口縁端部が尖る。これらも底部は吉備系土師器 糸切底である。11・12は底部に径4cm程度の低い高台を付ける土師質土器で、胎土が白く、吉備系土師器である。

13~18は備前焼の擂鉢である。13~18の口縁部は、蕾状に立ち上がり、外面に数条の凹線が廻る。また、口縁外端部は尖り、内側は斜めか、16のように窪む。内面の擂り目は、18の底部が口縁部に向けて放射状に付けられているが、13・16・17にわずかに見られる擂り目は斜めで、互いに交差するタイプである。

第3-147図1~13も備前焼の各器種である。1~4は壺・甕の口縁部で、5はその底部で、6は胴部である。7は水屋甕の口縁部で、11~13はその胴部である。8・11は水指等の特殊な器種の可能性がある。9は徳利で、10は底部と思われる。17は肩部に耳が付く小型の甕である。

14・15は常滑焼の甕の口縁部であり、16は信楽焼と考えられる。

18~23は中世の須恵質土器で、18は口縁部が直口する。19・20は東播系須恵質土器の鉢である。21・23須恵質で硬く焼締められており、備前焼の可能性が高い。22は叩きで調整された甕の胴部である。

第3-148図は、瓦質土器の各器種である。1は上部に摘みと考えられる突起があり、蓋と考える。2は瓦器碗である。3は身受け部が形成されており、蓋と考える。4も蓋の可能性が高い。5は外面を連続した凹線が飾る鉢である。6は風炉の脚である。7は口縁部に菊花文、8は胴部に雷文のスタンプが施文されている。9は斜めに交差する擂り目を持つ瓦質土器の擂鉢である。10~22は各種の鉢である。10・11・22は脚や高台である。12~14の口縁部外面には菊花文のスタンプが施文されており、19~21は菊花文や雷文・格子文等のスタンプが施文されている。

第3-149図1~6も瓦質土器の鉢である。1~3の口縁部外面には二条の細い突帯が廻り、その間に菊花文や雷文等のスタンプが施文されている。5はその底部であり、火鉢と思われる。4は土師質であり、土鍋と考えられる。6は方形の火鉢の底部で、脚が付く。

第3-150図1~10は土製の場台である。上面に平坦な受け部を持ち、中央に芯棒を立てる孔があけられている。9・10は紡錘車である。11はフィゴの羽口の先端である。12は凝灰岩を整形した石製品である。13~28は土鍾である。28以外は紡錘形で、重畳と形態で数種類に分類できる。28は長軸方向に溝が入る有溝土鍾である。29は滑石製土鍾、30は硯の破片である。31・32はガラス製の小玉である。

第3-151図は金属製品である。1は斧状の製品で柄を装着する穴がある。2は鉄製の鏡前である。

3は板状の鉄製品である。4は刀子と考える。5は先端が尖る棒状の鉄製品で、火箸と思われる。

6は断面が方形の棒状の鉄製品である。7は銅製品で茎の可能性が高い。8は鉄製で、刃部があり

刀子と考える。9は鉄製の鐙である。10・13・17は板状の銅製品で、11は刀装具の銅製のはばきで

ある。12は分銅で、現状は0.8gを測る。14は断面三角形の鉄製の飾り金具と思われる。15・23は

青銅製品である。16・19は同じ場所からの出土で同一器種を構成していた可能性がある。20は棒状

の青銅製である。18と24は同じ場所から出土した青銅製品で、24の紐状の部分に18が通っていた可

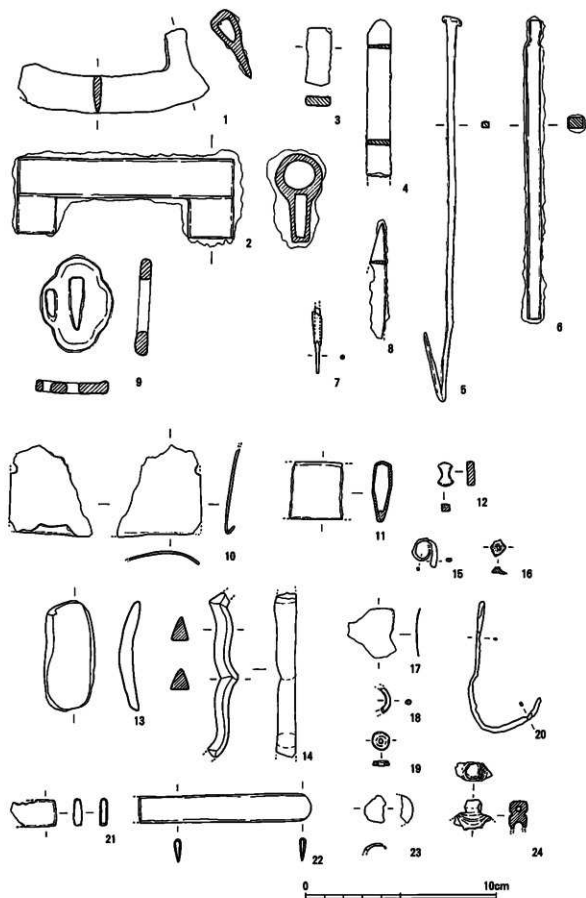
能性がある。22は銅製で小柄と考える。

第3-151~3-152図は出土した銅銭である。銭貨名は不明なものもあるが、第3-151図4は「祥符元

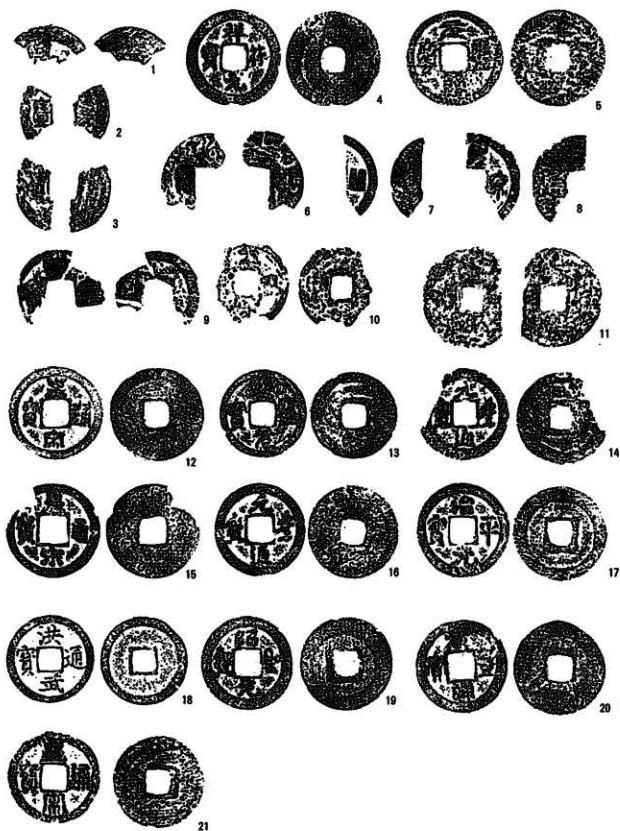
資」、5・14・16・20は「元豊通寶」、6は「嘉祐通寶」、8は「聖宋元資」、9は「熙寧元資」、12・15・21は「皇宋通寶」、13・19は「紹元通寶」、17は「治平元資」、18は「洪武通寶」である。

第3-152図で判読できるのは、1・8・16・17が「元豊通寶」、2・3は「淳化元資」、4・14・15は「元祐通寶」、5・20は「天聖元資」、6・7・18は「紹聖元資」、12・23は「皇宋通寶」、19は「聖宋元資」、22は「洪武通寶」、24・25は「天禧通寶」、26は「政和通寶」である。

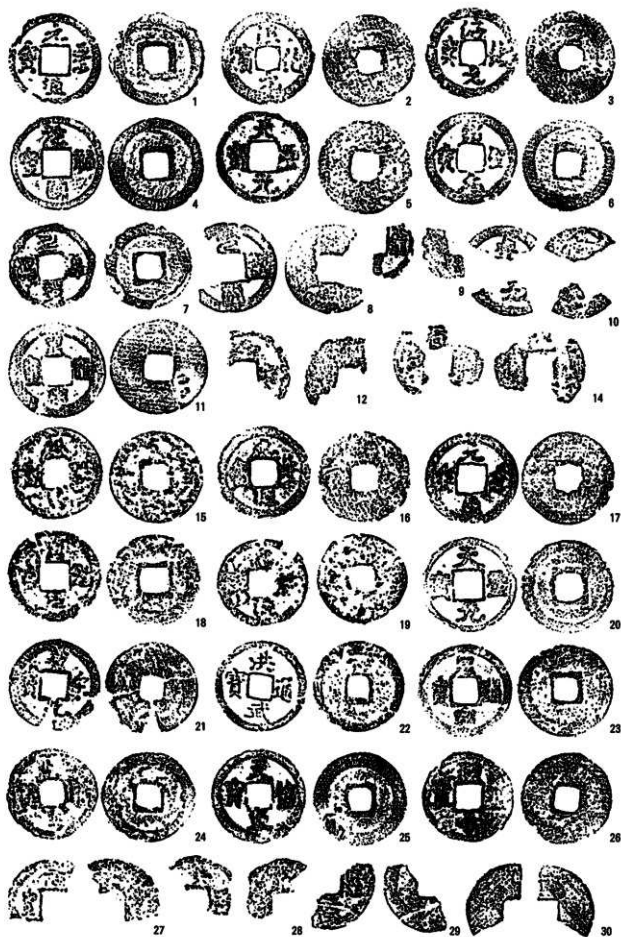
第3-153・3-154図は瓦である。1~3は軒丸瓦で、巴文と朱文で構成される文様を持つ。4~8は



第3-150図 府内町跡第43次調査出土金属器実測図 (1/2)

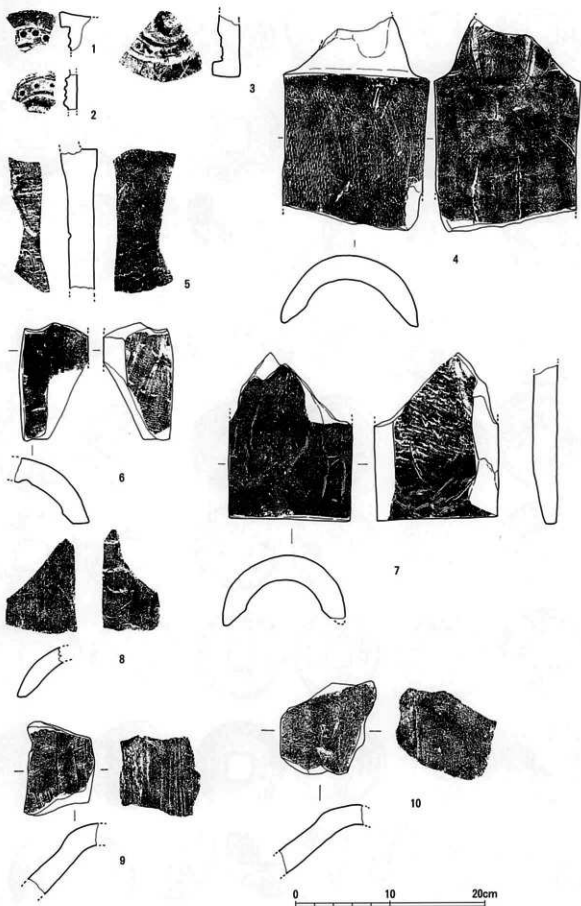


第3-151圖 府内町跡第43次調査出土銅銭実測圖1 (1/1)

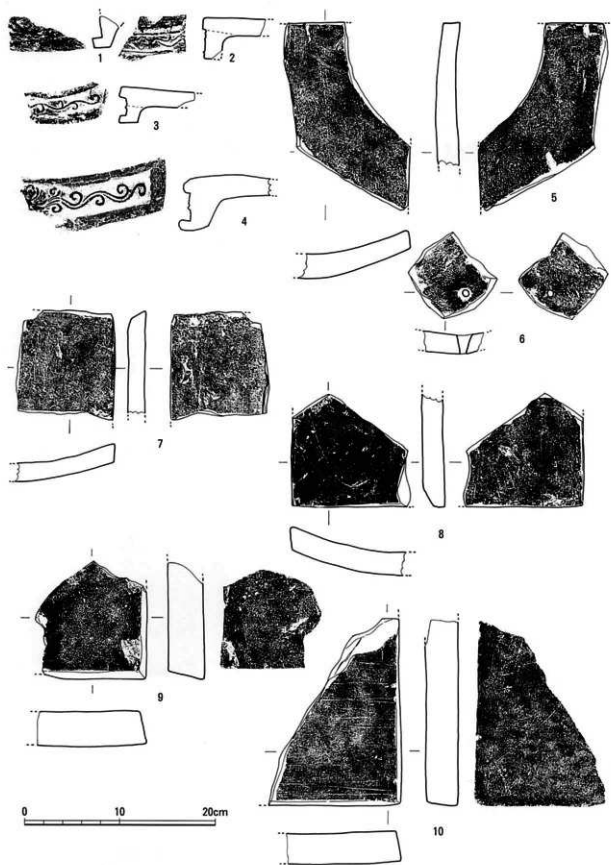


第3-152圖 府内町跡第43次調査出土銅銭実測図2 (1/1)

第2節 遺構と遺物



第3-153図 府内町跡第43次調査出土瓦実測図 (1/4)



第3-154図 府内町跡第43次調査出土瓦・埴実測図 (1/4)

第2節 遺構と遺物

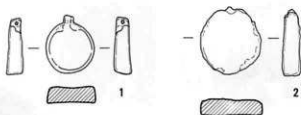
丸瓦で、4は玉縁部であり、幅は15cmである。外面は縄目叩きで、内面には布目がある。5は内面に本州タイプの吊紐、6・8には九州タイプの吊紐の痕跡が残る。7は幅が13.2cmで、内面には横方向の縄目状の圧痕が残る。9・10は屋根を覆う雁振瓦である。

第3-154図は平瓦と埴である。1～4の軒平瓦は唐草文で文様が描かれている。5～8の平瓦は撫でて仕上げられているが、8にはコビキ痕が残る。7には釘穴が開けられている。9・10は埴で、厚さは3cmを越える。

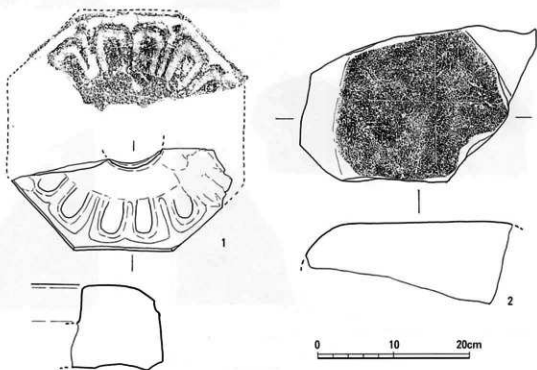
メダイ 第3-155図はメダイと考えられる青銅製品である。1は縦1.5cm、横1.3cm、厚さ0.4cm、重さ5.3gで、紐を通す孔がある完形品である。2は縦1.7cm、横1.6cm、厚さ0.5cm、重さ4.6gで、紐を通す孔は欠損している。

無縫塔 第3-156図は石製品である。1は阿蘇溶結凝灰岩製で、一辺が13.2cmの八角形をした無縫塔の台座である。中央部には柱部を受けるための直径9.4cmの孔があり、その周辺には連弁が刻まれている。

2は扁平な安山岩の川原石の中央に、細い線で十字が刻まれている。他の地区の出土状態から、礎石・目当 礎石の柱を据えるための目当てと考える。



第3-155図 府内町跡第43次調査出土メダイ実測図 (1/1)



第3-156図 府内町跡第43次調査出土石造品及び礎石実測図 (1/5)

第3節 小 結

府内町跡第43次調査は狭い調査面積であるが、万寿寺の西側と第2南北街路の状況を明らかにすることができた。第2章で報告した北に連続する第34次調査と結果は同じであるが、この調査区では最終段階として、天正14年(1586)の島津氏侵攻以後の状況を確認することができた。ここでは、第2章と重複する部分もあるが、第3章の小結として、遺構を時系列的に追ひ、その変遷を明らかにしたい。

万寿寺創建

最古の遺構は、14世紀代の井戸と土坑と柱穴状土坑がある。井戸は曲物と立板と横棧で構成され、万寿寺の西境の堀であるSD012を完掘した際、床面で検出した。土坑や柱穴状土坑は、SD012の東側の万寿寺側で検出された。万寿寺の創建は徳治元年(1306)と伝えられており、こうした遺構は近い時期にあたる。しかし、万寿寺北西部にあたる府内町跡20次調査では、16世紀の後半の区画溝より東に約20mの位置で断面逆台形の南北方向の区画性の強い14世紀代の溝を約60mにわたり検出している。そして、この溝から西側から大規模な遺構は検出されず、この溝が、創建当時の西境の堀と考えた。また、境内である府内町跡29・35次調査では遺物を多く含む土坑や柱穴状土坑を集中的に検出することは出来なかった。

そこで、府内町跡第43次調査で検出された14世紀代の遺構を見ると、SK009・SK010・SK024・SK025・SK030は不定形な土坑で、SK009・SK010から流れ込んだ状況で遺物が出土し、廃棄土坑の可能性が高い。また井戸が存在することなど、16世紀後半の町屋敷跡と類似しており、万寿寺創建当時は寺域ではなかった可能性が高い。

検出された遺構で、次の時期は16世紀後葉の遺構群であるが、可能性として16世紀前葉の時期がある。明確な遺構としては検出されていないが、万寿寺の北側境の堀を調査した府内町跡第20次調査C区では、16世紀後葉の大規模な堀の底の方万寿寺側で、この時期の遺物がまともに出土する溝を検出した。16世紀後葉の堀が掘削される前に、万寿寺を囲む堀があった可能性が高い。

そこで、府内町跡第43次調査の堀を見ると、万寿寺側の壁は傾斜が急で面は平坦である。これに対し、第2南北街路側は傾斜が緩やかで、面も不揃いである。確証はないが、16世紀前葉のこの堀を西に拡張した可能性がある。

土坑群

16世紀後葉は遺物からは判断できないが、遺構の切り合いや土層観察から4時期がある。この時期で最初に作られるのは、第2南北街路面に掘り込まれたSK032～SK035・SK037～SK043・SK045～SK050の土坑群である。これらは、第2南北街路が整備される以前に連続して掘り込まれている。形状や規模は様々であり、遺構内からの出土遺物も多くはないが、SK033やSK049からは、まとまった量の京都系土師器が出土している。こうしたことから、廃棄土坑と考える。

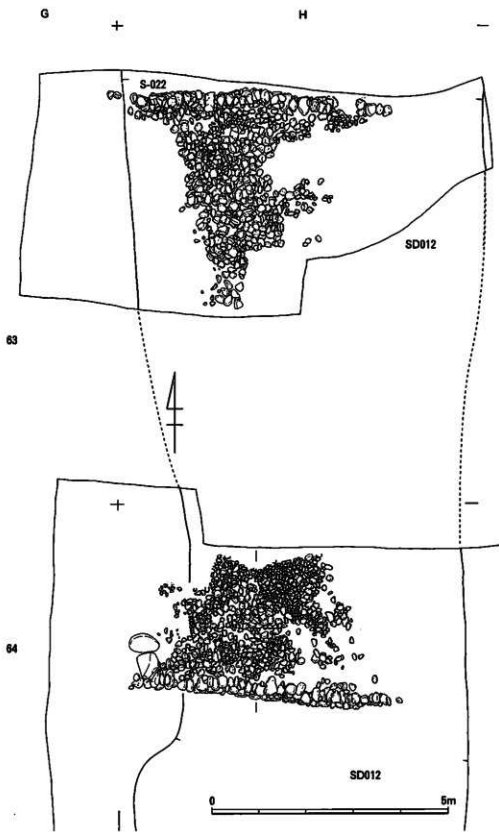
廃棄土坑

万寿寺堀の拡張

次に築かれるのがSD012の万寿寺西境の堀である。この堀は、先に述べたように、16世紀前葉にあった堀を西側の第2南北街路側に拡張した可能性が高い。このことは第3-5図の土層観察やSK033やSK043・SK045の東側が削られて掘り込まれていることも判る。すなわち、万寿寺の西側の境は、創建時にはこの堀より東側にあったが、16世紀前葉に拡大され、16世紀後葉にその境の堀がさらに西側に拡張され、大規模化したと考えられる。

石積み

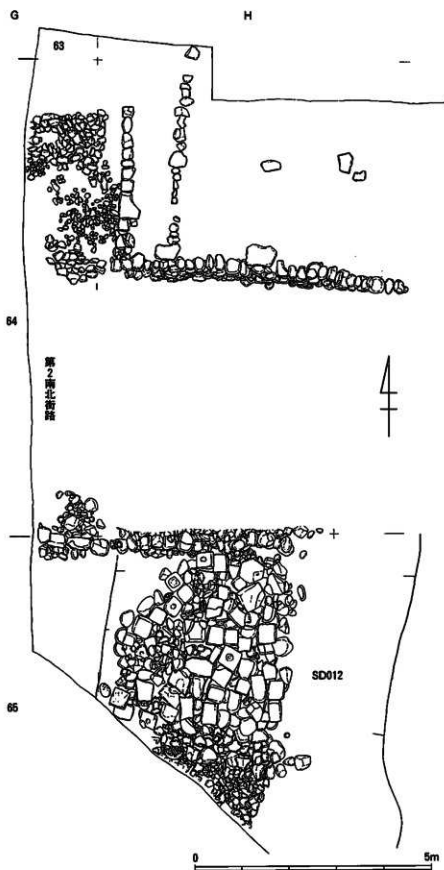
ところが、この堀も時間を置かず、埋められている。その経過は、深さ約2mの堀を中央部が窪む、緩いU字状になるまで、土砂で半分程度埋める。次にこの窪みを埋めるため、中部が最も高くなる東西方向の石積みを北側と南側に築く。その中心となるのは、現在水路となっている地籍園境であり、「府内古園」を現在の地図上に復元した際、万寿寺の南境と想定したラインにあたる。このラインから南で検出された4ヶ所の石積みは、南に面を揃えており、北で検出された4ヶ所の石積みは、北に面を揃え、それぞれ、南北方向に拡張しながら、埋め立地業を行っている。石積みによる埋め立ての基準となるこのラインは、万寿寺の第2南北街路側からの入口等、寺院構造とも関



第3-157圖 府内町跡第43次調査初期石積み (1/80)



第3-158図 府内町跡第43次調査万寿寺西側の塚の埋立て状況 (SX023) と礎石建物 (1/80)



第3-159図 府内町跡第43次調査第1期礎石建物 (1/80)



第3-160圖 府内町跡第43次調査第Ⅱ期礎石建物 (1/80)

連していることも考えられる。

鎌や挽臼による
埋め立て
この石積みによる埋め立てが最初に行われたのが第3-157図の範囲である。石積みの間は鎌や挽臼の破片を投棄してその空間を埋めている。この石積みも直ぐに改められ、第3-158図のように、それを覆うように南側に隣接して同じ構造の石積みが築かれている。そして、その南側には多量の川原石で埋め立地業を行い、さらに南側は阿蘇溶結凝灰岩製の五輪塔の部材で埋め立てが行われ、上面は平坦にしている。これに連続して南側に再び川原石で埋め立てる行為を行っている。

第1期礎石建物
こうして、万寿寺の堀を埋め立てて造られたのが、第3-159図の第1期礎石建物である。この建物が造られるのとはほぼ同時期から、第2南北街路の整備が開始されている。第1期礎石建物は入口を第2南北街路側に取り、その入口付近は石敷きで整備されている。それに続いて礎石建物の西境と街路とを区切る石列と、それに並行する礎石を含む石列があり、入口の構造を示している。

地長押
この礎石建物の南側の多量の川原石で埋め立てられた範囲は土砂で覆われ、約6mの幅で平地が形成されている。この場所は礎石建物より若干低くなり、南側を敷み石で区切る。この石積みは西に延び第2南北街路とつながっている。この部分にも礎石によらない、転ばし根太や地長押など直接横材を地面に並べた構造の建物があった可能性も考えられる。

ところがこの第1期礎石建物を覆うように、第3-3・3-4図の土層図やSX011・SX017とした焼土層が形成されている。この焼土層は出土遺物の時期等から天正14年(1第3-160図の586)の島津氏の府内侵攻に起因すると理解されている。また、その火災の状況は当時「府内」にいた宣教師の記録にも残されている。¹⁾ 第1期礎石建物もこの時期に焼失したと想定される。

第2期礎石建物
島津氏の府内侵攻後、「府内」は復興しており、それを証明するのが第3-160図の第2期礎石建物である。この建物は、第1期礎石建物の直上に建てられている。基礎は版築状に薄い土砂の層を形成し、第1期礎石建物の礎石の上に乗っている。この版築で、嵩上げを行い、それに礎石を据えている。この建物も第2南北街路を入口としており、第1期礎石建物の入口に敷かれていた敷石の上に土砂を置き、再び大きな石で敷石をしている。この敷石は第1期礎石建物の礎石を含む石列の上面まで続いており、その先端には人頭大の石が並べられ、街路と礎石建物の西境となっている。

礎石建物は、奥行きが8mで、埋め立てた万寿寺の西境の堀を越え、東端は万寿寺境内に達している。礎石の間隔は東西が2.8m-2.8m-2.1mで、東端の礎石からは拳大の石が北に約90cm並べられ、その延長線上に礎石があり、礎石間は1.8mで、これが建物の東端と想定できる。

この建物の南側には、第1期礎石建物の時期と同様に、平地が形成されている。その状況は、前時期に生じた焼土を埋め立て、嵩上げしている。また、南に2m拡張し、凝灰岩の石造りで上面が平坦になるよう埋め立てた部分の上に南北方向の石積みを築き南の境としている。そして、埋め立てた部分の上面は、瓦片や拳大の川原石を敷詰め補強している。

第2南北街路との関係は、この瓦片や川原石を敷き詰めた部分の北端から第2南北街路に向けて斜めに人頭大より大きい川原石を並べ、導入路状にしている。この部分にも第1期礎石建物の時期と同様に建物があった可能性がある。

以上のように、府内町跡第43次調査では万寿寺の西境の14世紀から16世紀までの変遷を明らかにすることが出来た。この場所は、天正10年(1582)に大友義統が家臣の柴田礼能に対し発給した文書で「一、万寿寺築地之内并西之屋敷両所、令所望候之事。一、一府万寿寺町屋敷無残所預置候事。…」の記述がある場所と想定され、注目される場所でもある。

註(1) 松田毅一・川崎純太「完訳フロイス日本史 8 大友宗麟の陣」中央公論新社 2000年

第4章 自然科学的分析

第1節 大友城下町跡34次・43次調査出土の動物遺存体

丸山真史（京都大学大学院人間・環境学研究科）

松井 章（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

1. 概要

第34次調査のSD066、第43次調査で検出したSD012から出土した動物遺存体および骨角器を報告する。これらの出土地点は萬寿寺の西側の堀にあたり、その埋土が湿地環境にあったため、動物遺存体の保存に恵まれたと考えられる。保存状態は概ね良いが、ビビアナイトが析出しているものや、乾燥によって亀裂が生じ、脆弱な状態になっているものも含まれる。これらの動物遺存体は発掘中に肉眼で確認して採集したもので、フルイを用いた埋土の水洗選別は行っていない。出土した動物遺存体は破片数にして253点を数え、伴出する陶磁器や古文書の記録から1560年から1582年の間に投棄されたものと限定される。これらの破片のうち、種類と部位を同定できたのは216点にのぼり、その内訳は哺乳類が137点と最多で63.4%を占め、次いで貝類37点、魚類25点、鳥類16点、両生類1点と続く。なお、以下に記載する魚類の体長は、奈良文化財研究所所蔵の標準体長の記録がある現生骨格標本と比較して推定した値である。

2. 種類別の特徴

a 貝類

ニキウズガイ科 SD066から35点出土している。保存状態に恵まれず、表面の風化が著しく、種の同定には至らないが、同科のキサブ属に類似する。

ミミガイ科 SD066から1点出土している。本科にはミミガイ、クロアワビ、トコブシなどが含まれる。破片となっており種の特定は難しいが、大きさなどの特徴からアワビ属である可能性が高い。アカニシ SD066から1点出土しており、殻高114.2mm、殻幅98.9mmを測る。

b 魚類

マダイ SD012から前頭骨が2点、上後頭骨、前上顎骨（左）、角舌骨（右）、基鰭骨（棘条部結合）が1点ずつ、計6点が出土している。前頭骨のうち1点は、正中線上で真二つに切断する「兜割」にされている。大きさは、いずれも体長30cm以上であり、大きくても60cm程度と推定される。

タイ科 SD012から、主上顎骨（右）が1点のみ出土している。関節部が破損しており、種の同定には至らないが、大きさは少なくとも体長50cm以上と推定される。

マグロ属 SD012から椎骨が6点、SD066から椎骨が10点、計16点が出土している。大きさは、いずれも1m以上の大型のものである。

フグ科 SD012から前鰓蓋骨（左）が1点、部位名不明が1点、計2点が出土している。大きさは、いずれも体長40cmから50cm程度と推測される。

c 両生類

カエル類 SD012から大型のカエルの脛・腓骨（左）が1点のみ出土している。骨端部が破損しており、全体の大きさは不明であるが、トノサマガエルより大きな個体である。

d 鳥類

カラス属 SD012から大腿骨（右）が1点、SD066から脛足根骨（右）が1点、計2点が出土している。脛足根骨は近位端が癒合中の若い個体である。

アビ科 SD012から脛足根骨（右）、足根中足骨（右）が1点ずつ、計2点が出土している。足根中足骨は、遠位端が人為的に切断されている可能性があるが、切断面が明瞭ではない。

カモ科 SD012から、マガモと同大の橈骨（右）が1点のみ出土している。

キジ科 SD012から上腕骨（右）が3点、胸骨、尺骨、大腿骨、脛足根骨が1点ずつ、計7点が出土している。胸骨は、竜骨突起基部に少なくとも7カ所に切傷が見られる。

ニワトリ SD012から上腕骨（左）、大腿骨（左）、足根中足骨（右）が1点ずつ、SD066から上腕骨（左）が1点、計4点が出土している。

● 哺乳類

イヌ SD012から上腕骨（左3右1）、尺骨（左1右3）が4点ずつ、下顎骨（左1右1）、橈骨（左1右1）が2点ずつなど、計16点が出土している。上腕骨の2点、尺骨1点は骨端部が癒合していない幼獣である。左下顎骨は下顎枝前位部に2条、筋突起下部に3条の切傷が見られる。長谷部言人（1952）のイヌの大きさの分類に従うと、下顎骨2点が中小型、尺骨2点が中級、橈骨1点が中大級となる。SD066から上腕骨（左）が1点のみ出土しており、長谷部の分類に従うと中級となる。

タヌキ SD012から、下顎骨（左）が1点のみ出土している。

ネコ SD012から上腕骨（右）が1点、SD066から頭蓋骨、上腕骨（右）、橈骨（右）、尺骨（右）が1点ずつの計4点が出土している。SD066から出土している上腕骨、橈骨、尺骨は同一個体であり、上腕骨の近位端が癒合途上で、橈骨と尺骨の遠位端は癒合していない幼獣である。

ウマ SD012から橈骨（左）、基節骨、顎骨から遊離した切歯が1点ずつ、計3点が出土している。Goody（1976）の齢査定に従うと、切歯の咬耗状態から10歳前後の個体と推測される。

ウシ SD012から肩甲骨（左）、癒合した橈骨と尺骨（左）が1点ずつ、SD066から肩甲骨（右）、癒合した橈骨と尺骨（右）などが1点ずつの計5点、SD066から上腕骨（右）が1点のみ出土している。

イノシシ SD012から椎骨が10点、下顎骨が6点（左1右1左右4）、頭蓋骨が4点、上腕骨などが1点ずつ、計25点が出土している。頭蓋骨2点、椎骨4点の椎体板、脛骨の遠位端、寛骨は癒合していない幼獣である。下顎骨は臼歯の萌出と咬耗の状況から2点が幼獣、1点が若獣、2点が成獣と推定される。肋骨と上腕骨の骨幹部に切傷が見られ、椎骨の椎体前位部、後位部が切断されている。SD066から下顎骨（左右）、肋骨（右）、大腿骨（右）などが1点ずつ、計5点が出土している。

下顎骨は、臼歯の咬耗状況から成獣と推定される。大腿骨は遠位端が癒合していない幼獣であり、骨幹部前位面に9条の切傷が見られる。肋骨は、ネズミの咬痕が見られる。

ニホンジカ SD012から椎骨が17点、中足骨（左3右3）が6点、肋骨（右）が5点、大腿骨（左1右3）、脛骨（左2右2）が4点ずつ、肩甲骨（左）、上腕骨（左2右1）が3点ずつなど計53点が出土している。椎骨5点の椎体板、脛骨2点、大腿骨2点は、骨端部が癒合していない幼獣である。肩甲骨1点の遠位部に切傷と叩き切った痕跡が、肋骨の近位部に叩き切った痕跡が見られ、椎骨8点の棘突起や椎体は切断されている。SD066から肩甲骨（左2）、脛骨（左1右1）などが2点ずつ、橈骨（左）、中手骨（左）などが1点ずつ、計13点が出土している。橈骨と脛骨の1点は骨端部が癒合していない幼獣である。肩甲骨1点には近位部に径4.3mmの穴があいており、縁辺には骨増殖が見られる。

ネズミ科 SD012から、寛骨（左）が1点のみ出土している。

ヒト SD012から上腕骨（左1左?1）が2点、尺骨（左）が1点、



第4-1図 ヘラ状製品の加工痕

計3点が出土している。尺骨は4、5歳のもものと推定される(註1)。

3. 骨角器の特徴

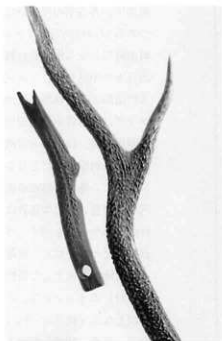
へら状製品 SD012から、扁平な撥形を呈するへら状製品が1点出土している。製品の表面には鹿角の髄に特有の海绵状組織が残ることから、鹿角の中心部を利用したと考えられる。残存で最大長が100.8mm、最大幅が31.2mm、最も薄い部分が1.0mmを測る。製品の両面に、幅が最も広い端部から中央まで、短軸方向に平行条線が多数残る(第3-1図)。また、片面はほぼ一定方向の、他面は二方向の粗い研磨痕が見られる。おそらく、鹿角の最も太い部分の角座上部から第1分枝部の間で素材を切り出し、適度な厚みに縦割りにして板材とした後、撥形に成形し、さらに磨いて薄くしたと考えられる。

オモゲー(面盤) SD012から、鹿角製の棒状製品が1点出土している。これを馬具の一種であるオモゲーと判断した。本例はニホンジカの中でも比較的小さな鹿角(左)を利用し、残存長199.8mmと最大径21.4×18.7mmを測る。鹿角の第2尖の分枝部を中心にして、上下210mm程度を切り出し、素材とする(第3-2図)。製品の中央よりやや上部にあたる第2尖の切断面から、ノミ状の工具で海面質を抉って除去し、反対側の自然面に正中線に平行する直径6.8mmの円孔が、4mmの間隔をあけて2つ穿たれている。鹿角の太くなる下部から約1cmおいて、また第2尖の2孔の中央部から約10cmの位置に、正中線に対して直交する直径14mmの円孔を穿っている。

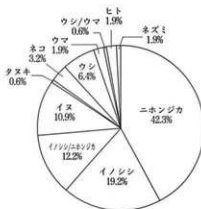
上端部は破損しているが、第2尖の2孔の中央部から約6cmの位置に、下端と同方向に円孔を穿った痕跡が見られる。枝角の上下、第2尖基部の海绵質は意図的に除去され、内部が中空となる。ニホンジカの枝角は左右に分かれて生えるが、いずれも第2尖の分枝部からそれぞれ湾曲して上方へと延びる。その湾曲の内側面が装着時にウマの頬にあたるように意図されており、下端と上端の孔の周辺を平坦に研磨し、それ以外は自然面のままの顆粒を残す。外側面には十字方向にヤスリ様、あるいは砥石様の研磨具で鹿角表面の顆粒を除去し、平滑面を作る。さらに平滑面上に第2尖の除去部を挟んで、それぞれ3本の平行する沈線を長軸に対して斜方に刻み、下端部の円孔上部には6×12本の沈線を直交させて格子状にして装飾文様とする。上端部は破損しているが、下端部と同様の格子文様の一部が残っていることから、中央部の2孔を軸として線対称の文様が施されたと考えられる。

4. 考察

ニホンジカとイノシシは、皮革、骨角器、食料などに利用される貴重な動物資源であり、主要な狩猟対象となってきた。日本の食文化史上、古代から肉食が忌避されてきたという固定観念が定着していたが、近年では文



第4-2図 オモゲーと鹿角



第4-3図 哺乳類遺存体の組成

献史学、考古学の両分野によって肉食が考えられていた以上に普及していたことが明らかにされつつある(松井1987)。イノシシやニホンジカ以外にイヌも食用となったことが、広島県草戸千軒町遺跡などから出土した夥しい数のイヌの遺存体から明らかにされている(茂原・松井1995)。また、西日本の中世では、ニホンジカを素材とした骨角器の製作が盛んであり、草戸千軒町遺跡や兵庫県大物遺跡では、利用部位や製作工程、分業化などが明らかにされ、中世後半(戦国期)から近世にかけて、牛馬骨が骨角器の素材となることも分かっている(久保・松井2001、丸山・松井2006)。大阪府東遺跡、兵庫県若宮遺跡では、牛馬骨が多数出土し、これらの遺跡では牛馬の皮剥ぎ、四肢の解体、骨角器の素材となる骨、角、蹄の採取など一貫した斃牛馬処理が行われた。江戸時代前半から中頃に、斃牛馬処理が皮田、糞多によって集約的に担われるようになると、それまで土坑、溝、河川に投棄された牛馬骨は効率よく大量に集めることが可能となり肥料としての価値が生じ、牛馬骨が遺跡から姿を消すようになった(松井2004)。このように西日本の中近世の動物遺存体研究は、食文化史だけでなく、部落史、経済史、産業史といった分野に進展を見せつつある。

本遺跡から出土した動物遺存体は哺乳類が最も多く、なかでもニホンジカが466点と卓越する。それに対してイノシシは、ニホンジカの約半数の30点にとどまるが、最少個体数はそれぞれ5個体で同数となる(註2)。さらにイノシシとニホンジカの部位別の破片数を比較すると、ニホンジカは、胴部(椎骨、肋骨)が最も多く、次いで後肢(寛骨、大腿骨、脛骨、踵骨、距骨、中足骨)、前肢(肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、中手骨)と続き、頭部(頭蓋骨、下顎骨)は少ない。それに対してイノシシは、胴部が最も多いが、四肢より頭部の方が多という点で異なる。動物の全身骨格のなかで、歯牙は最も残存しやすい部位であるが、それを含めてもニホンジカの頭部は少ない。ニホンジカのオスの枝角は、骨角器の素材として利用されるため、解体の際に頭部が別に扱われた可能性がある。ニホンジカの中手骨と中足骨も骨角器の素材として重要であり、中手骨は少ないが、中足骨は多く出土している。メスの頭蓋骨も見あたらなことから、骨角器の素材となる鹿角のついたオスの頭蓋骨や中手骨だけが遺跡から持ち去られたとは考えにくい。ニホンジカ、イノシシともに中軸骨が多いのは、一個体に椎骨や肋骨が多数あるため、両種とも最小個体数に対する椎骨、肋骨の破片数は少ない。ニホンジカもイノシシも頸椎と胸椎が多く、腰椎と尾椎が少ない。ニホンジカは胸椎が頸椎の3倍を数えるが、イノシシは頸椎と胸椎がほぼ同数である。また、ニホンジカとイノシシとを区別できなかった椎骨も、そのほとんどが胸椎である。ニホンジカとイノシシの椎骨には、刃物によって切断された痕跡が見られ、特にニホンジカには胸椎と関節する肋骨の近位部に刃物を叩きつけた傷跡が多く、この部分で椎骨と肋骨を切り離したと考えられる。このほか胸椎の棘突起が切断されているものも多く、胴部が解体されたことは明らかであり、胸椎および肋骨に付着した肉が注意深く取り外され食用になったと考えられる。また、椎骨の部位による出土量の差異は、肉をとるための技術的な問題によって違いが生じたとも考えられる。ニホンジカの四肢骨は、付着する肉量が多い肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨の出土が多いが、肉量の少ない中足骨も無視できない出土量である。肩甲骨の遠位部に切傷、距骨の前位面中央の内側、外側に叩き切った傷跡が見られる。距骨は肉量の多い大腿骨や脛骨と肉量の少ない中足骨、指骨の間にあり、肉の多い部位とそうでない部位を切り離したと考えられる。イノシシの四肢骨は前肢、後肢ともニホンジカ同様に肉量の多い部位が一様に出土しており、大腿骨の近位部から骨幹部にかけて切傷が多数見られる。このように、ニホンジカとイノシシの骨に見られる傷跡は、胴部、四肢から肉を得るためについたものと考えられる。

イヌは17点と哺乳類のなかでニホンジカ、イノシシに次いで多く出土しており、最少個体数にして4個体となる。出土した下顎骨のうち1点は、下顎枝や関節突起に切傷が見られる。この解体痕は、肉を食用としたことを示唆する。また、ウマの指骨には刃物で叩き切ろうとした痕跡が見られ

る。このような傷は腰や鞍帯が付着する部分だけでなく、骨幹部にも見られる。そのような傷は、遺跡から出土する動物遺存体に見出すことは多くない。動物の解体に熟練した者は経験的な解剖学的知識から、骨に無駄な傷をつけることなく解体して肉を取り外すことができ、逆に解剖学的知識の乏しい者が大型哺乳類の解体を行った際に、骨に大きな傷を残した可能性が考えられる。このウマの指骨に見られる傷は、食用となった直接的な証拠にはならないが、その可能性が示唆される。このほかのウシ、タヌキ、ネコは出土量が乏しく、解体痕も見られず、食用となったか明らかではない。

出土した鳥類はキジ科とニワトリの2種類が多く、キジ科の胸骨に切傷が多数見られ、食用になったと考えられる。また、カラス属、アビ科、カモ科が出土しており、アビ科やカモ科は食料とされた可能性が高い。しかし、カラス属が食料となったのか現代の常識からすると疑問であるが、韓国のように医薬品として重用することが伝わっていたのかもわからない。両生類のカエルも溝を埋めた時に埋没したのか、食用となったのか、現段階ではどちらとも決めかねる。水産資源では貝類と魚類が出土しており、いずれも食用となるものばかりである。貝類はニキウズガイ科、ミミガイ科、アカニシが出土しており、これらは遺跡から一般的に出土する種類であるが、全体的に出土量が少ない。キザガ類が37点と集中的に出土しているが、一箇体の肉量が少なく、一回の使用量が多かったと考えれば、出土量の差はそれほど大きくない。魚類はマダイ、タイ科、マグロ属、フグ科が出土しており、なかでもマグロ属が多い。これら4種類に出土は限定されるが、フルイを用いた土壌の水洗選別をしていないため、小型の魚類が見逃された可能性がある。また、イワシ、アジなどの小さく薄い骨は、イヌなどが飲み込むことや土壌中で容易に分解されることを考えると、大きな骨だけが出土したとも考えられる。瀬戸内、大阪湾岸の中近世遺跡では、マダイが多く出土するのが一般的だが、本遺跡では大型魚のマグロ属が最も多く、重要な魚種であったことが窺える。西日本の中世遺跡では、堺環濠都市遺跡や草戸千軒町遺跡からマグロ属の椎骨が出土しているが、出土量は少ない。津久見市の保戸島はマグロ漁が盛んなことで著名であり、それは明治以降のこととされるが、豊後水道から太平洋にかけて、中世にはすでにマグロ漁の好漁場となっていたと推測される。

動物遺存体と場所を同じくして、人骨も出土している。中世の神奈川県由比ヶ浜南遺跡、兵庫県大物遺跡では、居住や農耕に適さない海岸砂丘やその後背湿地から、多量の食用となった哺乳類や鳥類の骨に混じって、人骨が散乱状態で出土している。人骨のなかには、骨端部に犬の咬痕が見られるものや、何らかの原因により破損したものが少なくない。このことから遺体が野晒しにされていたことが推定される。本遺跡から出土した人骨には、明確なイヌの咬痕は見られないが、いずれも骨端部が破損しており、これらの人骨も埋葬されることなく、白骨化した後に埋没したと考えられる。

出土した骨角器のうちオモゲーとした棒状製品は、日本の考古資料として初めての出土例であろう。民俗学の下野敏美はオモゲーと呼ぶ、20cmから30cmの長さの板状の民具が南島に分布し、そうした木製のオモゲーが縄文時代に移入されたと考えられていた小型馬に装着されてきたもので、古墳時代に移入された中型馬に装着されていた金属製の衝^{ウツ}に先行するものと考えた(下野1994)。一般的な馬具は金属製の衝を馬の前臼歯と切歯、または犬歯との間に通して人間の意図を馬に伝える。それに対してオモゲーは板状、あるいは棒状の2本の金属器か鹿角製品で鼻面を挟み、その締め付け具合によって馬を制御しようとするものである。増田精



第4-4図 シェトランドの馬具の模式図

一は植輪馬に表現された頭絡の中に、銜を持たない種類の馬具があると考え、中国北方の青銅器時代の遺跡から出土する、両端の孔が同方向、中央の孔がそれらと直交する「異方向三孔」を特徴とする骨角器や青銅器を、オモゲーと機能を共にする馬具と考えた(増田1994)。小田木治太郎も、天理参考館所蔵の中国北方の青銅器時代の遺跡から出土した可能性の高い骨角器の中に、轡と呼ぶ馬具と思われる鹿角製品が存在することを報告している(小田木1995)。さらに小野山節は小田木の紹介した天理参考館所蔵品や、江戸時代の『古今要覧稿』に描かれる拍子の記録をもとに、同方向三孔の板状の拍子木と呼ばれる馬具の方が古く、異方向三孔のオモゲー様の馬具は現状では近現代に成立したと考えた(小野山2002)。中村潤子はそうした馬具の議論を整理し、拍子、拍子木と称されるものの中に、手綱固定式の面繫が含まれていることを区別して、オモゲー様の馬具を「挟棒面繫」と称することを提唱し、自身で鎌倉時代後期の『石山寺縁起絵巻』の天津の市の場面に描かれた4頭の馬のうち、1頭の鼻面に長い棒状のものが装着されていることを見出し、これが挟棒面繫であろうことを指摘した(中村2003)。この報告者の一人である松井章は、かつて小田木治太郎から天理参考館所蔵の東北アジア出土の骨角器の材質鑑定を依頼されて以来、骨角製馬具についての関心を持ち、2006年にシュトゥットの郷土博物館の展示品に、泥炭の採掘に従事させられていたポニーの馬具が異方向三孔のオモゲーに酷似することを見出した(第4-4図)。そして、この大友城下町跡から出土した鹿角製品を一見し、即座にオモゲー様の馬具と考えるに至った(註3)。

5. まとめ

本遺跡では哺乳類が最も多く出土しており、その大部分を占めるニホンジカ、イノシシ、イヌの骨にはそれぞれ解体痕が見られることや散乱状態で出土していることから、これらが食用となったことが明らかとなった。哺乳類だけでなく貝類、魚類、鳥類の多くが食用であり、大友城下町における食生活の一端を垣間見ることができた。これら食用となった動物遺存体に混じって、幼児を含む人骨が多くはないが出土したことは、城下町においても、野晒しになった遺体が溝に投棄されていたことを示すだろう。このように動物遺存体が出土した溝は、城下町の生ゴミや人間の遺体が投棄される場所でもあったことが分かる。また、出土した骨角器のうち鹿角製の棒状製品が、馬具の一種であるオモゲーと考えられる。オモゲーは南島に分布する民俗資料として注目されてきたが、日本の考古資料として初めての出土例と考えられる貴重な資料と言える。

謝 辞

本報告のオモゲーについて執筆するにあたり、小野山節氏、小田木治太郎氏、川野和明氏から馬具についてご教示を賜った。各氏への感謝の意を表してここに記す。

参考文献

- 小田木治太郎 1995 「いわゆる“中国北方青銅文化”の鹿角製馬具」
『天理参考館時報』8 pp.77-90
- 小野山節 2002 「棒状鏡板と拍子木・オモゲー 馬の制御具の起源に関連させて」
『考古学ジャーナル』483 pp.7-11
- 久保和十・松井章 2001 「角・骨・皮に関する生産」『図解・日本の中世遺跡』小野正敏編
東京大学出版会 pp.122-125
- 茂原信生・松井章 1995 「草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 pp.289-312
- 下野敏見 1994 『日本列島の比較民俗学』吉川弘文館 340pp.

- 中村潤子 2003「機能から見た馬の挾棒面繫?考古資料と民具の間?」
『考古学に学ぶ2-同志社大学考古学シリーズ』7 pp.805-816
- 長谷部晋人 1962「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁pp.146-150
- 増田精一 1996『日本馬事文化の源流』芙蓉出版
- 松井 章 1987「養老観牧令の考古学的考察」『信濃』第39巻第4号pp.231-256
- 松井 章 2004「近世初頭における斃牛馬処理システムの変容」『文化の多様性と比較考古学』
考古学研究会50周年記念論集 考古学研究会pp.407-416
- 丸山真史・松井章 2006「動物資源の利用と変遷 -骨角器と皮革の生産-」
『鎌倉時代の考古学』高志書院pp.281-292
- Driesch, Angela von den 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Site*, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology
- Goody, P.C. 1976 *Horse Anatomy* J. A. Allen, London.
- Grant, Annie 1982 'The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates' *Ageing and sexing animal bones from archaeological sites*.
BAR British Series 109, pp.91-108

註(1) 橋本裕子氏(奈良文化財研究所客員研究員)のご教示による。

註(2) 左右の部位ごとの出土数のうち、最も多い数を最小個体数とするが、破片数の多い個体が過小に、少ない種類が過大に算定されるという欠点がある。

註(3) 同様の骨角器が、大分県臼杵城下町跡の同年代の遺構から出土していることを大分県埋蔵文化財センターの坂本嘉弘氏よりご教示を頂いており、追って報告したい。

第4-3表 イヌの下顎骨計測表

計測項目	計測点	番番 No.	通番	
			124	125
下顎骨全長 (1)	id-goc	1	113.7	118.6+
下顎骨全長 (2)	id-cm	2	113.2	-
下顎枝高	kr-gov	7	41.6	41.6
下顎枝幅	Minimum	11	23.8	28.4
下顎体高 (1)	M2 後部	16	20.6	21.4
下顎体高 (2)	M1 中央	17	18.9	18.9
下顎体高 (3)	P4M1 間	18	17.3	17.8
下顎体厚	M1 中央下方	25	12.3	11.8
咬筋高深	-	-	6.1	4.4

単位はmm・計測項目は茂原(1995)に準ずる

第4-4表 イノシシの下顎骨計測表

計測項目	24 下顎付	148 下顎付	151 下顎付
1	246.6	259.7	-
2	-	279.4	-
3	81.9	88.9	-
4	165.5	172.6	-
5	166.2	186.0	-
6	116.2	124.2	-
7	112.2	-	-
7a	95.1	98.8	104.4
8	60.7	66.1	68.9
9	64.4	-	-
9a	47.8	32.9	36.5
11	43.58	49.9	-
12	73.57	82.2	-
14	-	106.8	-
15	-	121.7	-
16a	44.9	47.7	50.0
16b	42.8	45.8	55.5
16c	42.7	44.2	-

単位はmm・計測項目はDriess(1976)に準ずる

第4-5表 イノシシの各臼歯の咬耗段階および計測値

通番	項目	左						右						
		M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3	
143 上顎	咬耗段階	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	j-k	e-f	d-e
	歯冠長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14.0	17.0	29.4
	歯冠幅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13.0	14.7	16.4
24 下顎	咬耗段階	d	e	j	f	-	-	-	-	f	j	e	d	
	歯冠長	28.9	16.7	13.9	10.8	-	-	-	10.3	12.0	13.9	17.3	28.0	
	歯冠幅	13.7	12.4	10.6	8.1	-	-	-	5.6	7.8	10.5	12.3	13.9	
147 下顎	咬耗段階			e	d(dP4)	dP3	dP2	-	-	d(dP4)	e			
	歯冠長	未明出	未明出	16.6	17.2	9.6	8.0	7.4	9.7	17.5	14.2	未明出	未明出	
	歯冠幅			10.5	8.7	4.8	3.3	3.1	4.6	7.9	10.3			
148 下顎	咬耗段階	c	d-f	l	e	-	-	-	-	e	l	e	c	
	歯冠長	31.7	17.2	13.7	13.4	-	-	8.1	10.0	13.4	13.8	17.8	30.6	
	歯冠幅	14.1	13.9	10.8	8.9	-	-	4.6	5.6	9.0	11.3	13.5	13.7	
149 下顎	咬耗段階			c	f(dP4)	dP3	dP2	dP2	dP3	f(dP4)	c			
	歯冠長	未明出	未明出	16.8	15.8	8.7	9.4	8.1	9.8	16.1	16.5	未明出	未明出	
	歯冠幅			9.8	8.5	4.9	3.8	3.7	4.8	8.6	9.7			
150 下顎	咬耗段階			a-b	f(dP4)	dP3	dP2	-	-	-	-	-	-	
	歯冠長	未明出	未明出	14.7	15.5	9.7	7.4	-	-	-	-	-	-	
	歯冠幅			9.2	7.5	4.5	3.1	-	-	-	-	-	-	
151 下顎	咬耗段階	-	-	-	-	-	-	-	-	f	k-l	g	d	
	歯冠長	-	-	-	-	-	-	-	10.0	11.8	14.3	18.3	33.8	
	歯冠幅	-	-	-	-	-	-	-	6.3	9.6	11.6	14.2	14.6	

単位はmm・咬耗段階はGrant(1982)に準ずる

第1節 大友城下町跡34次・43次調査出土の動物遺存体

第4-6表 動物遺存体一覧表 (1)

通番	次数	遺構	大分類	小分類	部位	部分	左右	計測	備考	写真
1	34	SD036	鳥網	ニワトリ	足指中足骨	完形	右	GL81.0, Bp14.5, Bd15.3		1-18
2	34	SD036	哺乳類	イヌ?	大顎骨?	-	-			
3	34	SD036	哺乳類	イノシシ	中手骨	完形	左			
4	34	SD036	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	近位	左		穿孔?	
5	34	SD036	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	近位	右		穿孔?	
6	34	SD066	鹿足綱	アカニシ	股骨	股骨・股体	-			
7	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			1-4
8	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			
9	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			
10	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			
11	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			
12	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			
13	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			1-3
14	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			1-1
15	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			1-2
16	34	SD066	鹿骨魚綱	マダロ属	椎骨	椎体	-			
17	34	SD066	鳥網	カラス属	軽足指骨	完形	右	GL87.3, Bd9.2	癒合中(近位)	1-21
18	34	SD066	鳥網	ニワトリ	上腕骨	完形	左	GL84.3, Bp23.9, Bd18.1		1-19
19	34	SD066	哺乳類	イヌ	上腕骨	完形	左	GL143.3, Bd28.2	切傷?	
20	34	SD066	哺乳類	ネコ	頭蓋骨	破片	-			
21	34	SD066	哺乳類	ネコ	上腕骨	完形	右	GL87.4, Bp13.9, Bd16.2	癒合中(近位)	2-9
22	34	SD066	哺乳類	ネコ	尺骨	近位端・遠位部	右	DPA9.8, SDO6.3	未癒合(遠位)	2-11
23	34	SD066	哺乳類	ネコ	腕骨	近位端・遠位部	右	Bd7.4	未癒合(遠位)	2-10
24	34	SD066	哺乳類	イノシシ	下顎骨	下顎体	左右		成獣	3-中
25	34	SD066	哺乳類	イノシシ	椎骨	椎体	-		椎体癒合中	
26	34	SD066	哺乳類	イノシシ	肋骨	完形	右		咬痕	
27	34	SD066	哺乳類	イノシシ	尺骨	完形	左	DPA45.0, SDO36.9	切傷?	4-12
28	34	SD066	哺乳類	イノシシ	大顎骨	近位部・遠位端	右	Bd49.3	未癒合(遠位)・切傷	4-13
29	34	SD066	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	完形	右			
30	34	SD066	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	上腕骨	近位部・遠位部	左			
31	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨	ほぼ完形	左	GLP38.0	径4.3mmの穴・治癒痕	5-5
32	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨	遠位	左	GLP38.7		
33	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	近位部・遠位部	左			
34	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	近位部・遠位端	右	Bd37.6		
35	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	腕骨	完形	左	Bp34.9	未癒合(遠位)	
36	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	完形	左	GL182.2, Bp27.5, Bd29.5		
37	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	大顎骨	近位部・遠位端	右			5-8
38	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	大顎骨	完形	左	GL226.5, Bp61.8, Bd51.5		5-9
39	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	近位部・遠位部	右		未癒合(遠位)	
40	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	完形	左	GL288.2, Bp57.4, Bd33.2		5-12
41	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	完形	右		切傷・明切傷	5-17
42	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	近位端・遠位部	右	Bp20.6		
43	34	SD066	哺乳類	ニホンジカ	種子骨	完形	右			
44	34	SD066	哺乳類	ウシ	肩甲骨	近位部・遠位部	右			
45	34	SD066	哺乳類	ウシ	大顎骨	近位部・遠位部	左			
46	34	SD066	哺乳類	ウシ	椎骨	椎体	-			
47	34	SD066	哺乳類	ウシ	肋骨	完形	右	GL249.9, Bp70.8, Bd56.5		
48	34	SD066	哺乳類	ウシ	肋骨・尺骨	ほぼ完形	右	GL275.4, Bp71.3, Bd64.3		
49	34	SD077	哺乳類	ウシ	上腕骨	ほぼ完形	右	Bd70.6		
50	34	Tトレンチ	鹿足綱	アワビ類	殻質	殻体	-		SD066内	
51	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
52	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
53	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
54	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
55	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
56	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
57	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
58	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
59	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
60	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
61	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
62	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
63	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
64	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
65	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
66	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
67	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
68	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	
69	34	Tトレンチ	鹿足綱	ニシキウズガイ科	殻質	殻体・殻体	-		ネコ骨類?	

第4-7表 動物遺存体一覧表 (2)

通番	次数	遺構	大分類	小分類	部位	部分	左右	計測	備考	写真	
70	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
71	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
72	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
73	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
74	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
75	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
76	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
77	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
78	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
79	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
80	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
81	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
82	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
83	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
84	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
85	34	トレンチ	瓶足網	ニシキウズガイ科	波管	殻軸・殻体	-		キヤブ類?		
86	43	SD012	硬骨魚類	フグ科	前縁蓋骨	ほぼ完形	左			1-8	
87	43	SD012	硬骨魚類	フグ科	部位名不明	ほぼ完形	-			1-9	
88	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属	椎骨	尾椎	-				
89	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属	椎骨	尾椎	-				
90	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属	椎骨	尾椎	-				
91	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属	椎骨	尾椎	-				
92	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属	椎骨	尾椎	-				
93	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属	椎骨	尾椎	-				
94	43	SD012	硬骨魚類	マゴロ属?	椎骨	尾椎	-		切断・カッオ?		
95	43	SD012	硬骨魚類	マダイ	前上顎骨	完形	左			1-7	
96	43	SD012	硬骨魚類	マダイ	前頭骨	一部欠損	-			1-6	
97	43	SD012	硬骨魚類	マダイ	前頭骨	右半分	-		別測	1-5	
98	43	SD012	硬骨魚類	マダイ	上後頭骨	一部欠損	-				
99	43	SD012	硬骨魚類	マダイ	角点骨	ほぼ完形	右				
100	43	SD012	硬骨魚類	マダイ	基鱗骨+棘	輪形	右				
101	43	SD012	硬骨魚類	タイ科	手上顎骨	前位部欠損	右				
102	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
103	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
104	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
105	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
106	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
107	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
108	43	SD012	硬骨魚類	不明	鰓条竹飲索	完形	-				
109	43	SD012	硬骨魚類	不明	椎骨	尾椎?	-		マゴロ属?		
110	43	SD012	両生類	カエル類	軽足骨	骨幹部	右				
111	43	SD012	鳥綱	アビ科	軽足骨	一部欠損	左		切断?	1-11	
112	43	SD012	鳥綱	アビ科	足根中足骨	完形	右	GL73.8, Bp13.0, Bd10.0		1-10	
113	43	SD012	鳥綱	カモ科	脛骨	完形	左	GL70.5, Bd6.7, Dip14.7, Dd6.1		1-20	
114	43	SD012	鳥綱	カラス属	大脛骨	完形	右	GL61.5, Bp11.6, Bd12.2		1-22	
115	43	SD012	鳥綱	キジ科	脛骨	一部欠損	-		切傷	1-13	
116	43	SD012	鳥綱	キジ科	上脛骨	ほぼ完形	右	GL75.0, Bp21.1, Bd16.2			
117	43	SD012	鳥綱	キジ科	上脛骨	ほぼ完形	右	GL73.8, Bp20.2, Bd14.8			
118	43	SD012	鳥綱	キジ科	上脛骨	完形	右	GL74.6, Bp20.7, Bd15.4		1-16	
119	43	SD012	鳥綱	キジ科	尺骨	ほぼ完形	右	GL76.5, Bp10.1, Bd9.2		1-15	
120	43	SD012	鳥綱	キジ科	大脛骨	完形	右	GL67.8, Bp13.8, Bd13.4		1-14	
121	43	SD012	鳥綱	キジ科	軽足骨	ほぼ完形	右	GL98.9		1-12	
122	43	SD012	鳥綱	ニワトリ	上脛骨	近位部・遠位端	左	Bd17.5			
123	43	SD012	鳥綱	ニワトリ	大脛骨	一部欠損	左	Bd19.4		切断?	
124	43	SD012	哺乳綱	イヌ	下顎骨	ほぼ完形	左		切傷	2-1	
125	43	SD012	哺乳綱	イヌ	下顎骨	ほぼ完形	右			2-2	
126	43	SD012	哺乳綱	イヌ	肩骨	近位部・遠位端	左	GLP27.3		2-3	
127	43	SD012	哺乳綱	イヌ	上脛骨	近位部・骨幹部	左	Bd27.8			
128	43	SD012	哺乳綱	イヌ	上脛骨	近位部	左				
129	43	SD012	哺乳綱	イヌ	上脛骨	近位端	右	Bp27.7		未組合(近位)	
130	43	SD012	哺乳綱	イヌ	上脛骨	近位部・遠位端	右	Bd30.6		未組合(近位)	2-4
131	43	SD012	哺乳綱	イヌ	尺骨	完形	右	GL167.2, DPA23.8, SDO21.0			
132	43	SD012	哺乳綱	イヌ	尺骨	近位端・骨幹部	左	DPA23.8			
133	43	SD012	哺乳綱	イヌ	尺骨	近位端・遠位部	右	DPA23.6, SDO21.3		未組合(遠位)	2-5
134	43	SD012	哺乳綱	イヌ	尺骨	完形	右	GL167.1, DPA25.6, SDO20.2			2-6
135	43	SD012	哺乳綱	イヌ	脛骨	完形	左	GL156.2, Bd22.8			2-8
136	43	SD012	哺乳綱	イヌ	脛骨	近位端・遠位部	右	Bp17.4			2-7
137	43	SD012	哺乳綱	イヌ	中手骨	完形	右				
138	43	SD012	哺乳綱	イヌ	掌骨	掌骨I・掌骨II	左				

第1節 大友城下町跡34次・43次調査出土の動物遺存体

第4-8表 動物遺存体一覧表 (3)

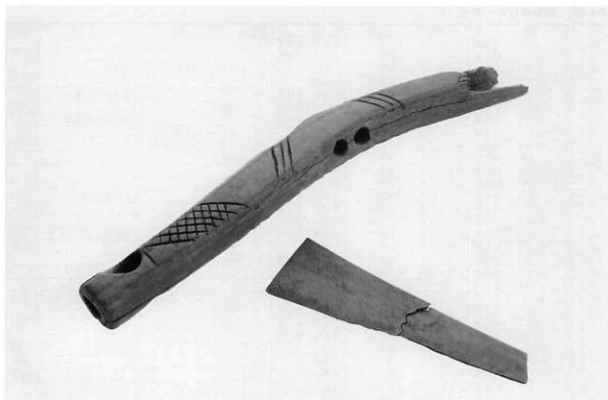
通番	次数	遺構	大分類	小分類	部位	部分	左右	計測	備考	写真
139	43	SD012	哺乳類	イヌ	大腸骨	近位端・骨幹部	右		140と接合	
140	43	SD012	哺乳類	イヌ	大腸骨	骨幹部	右		1139と接合	
141	43	SD012	哺乳類	タヌキ	下顎骨	下顎体・筋突起	左			2-12
142	43	SD012	哺乳類	ネコ	上腕骨	ほぼ完形	右	GL97.6, Bp16.8, Bd19.2		4.1
143	43	SD012	哺乳類	イノシシ	頭蓋骨	上顎骨	右			
144	43	SD012	哺乳類	イノシシ	頭蓋骨	上顎骨	右			
145	43	SD012	哺乳類	イノシシ	頭蓋骨	側頭骨	左		幼獣	
146	43	SD012	哺乳類	イノシシ	頭蓋骨	頭頂骨	左		未結合	
147	43	SD012	哺乳類	イノシシ	下顎骨	結合部・下顎体	左右		第二後臼歯未萌出開始	4-4.5
148	43	SD012	哺乳類	イノシシ	下顎骨	ほぼ完形	左右		成獣・歯列乱れ	3-左
149	43	SD012	哺乳類	イノシシ	下顎骨	ほぼ完形	左右		第二後臼歯未萌出	3-右
150	43	SD012	哺乳類	イノシシ	下顎骨	ほぼ完形	左		幼獣	4.3
151	43	SD012	哺乳類	イノシシ	下顎骨	結合部・下顎体	右		成獣	4-2
152	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-			
153	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-			4.7
154	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	頸椎	-		椎体未結合	4-8
155	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	頸椎	-		椎体未結合	
156	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-		椎体癒合中	4.9
157	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-		椎体癒合中	4-10
158	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-		椎体未結合	
159	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-		椎体未結合	
160	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-		切断	
161	43	SD012	哺乳類	イノシシ	椎骨	胸椎	-			
162	43	SD012	哺乳類	イノシシ	肋骨	完形	左		切包	
163	43	SD012	哺乳類	イノシシ	口甲骨	骨幹部・遠位端	右	GLP40.2, SILC30.6		
164	43	SD012	哺乳類	イノシシ	上腕骨	完形	左	GL189.6, Bp49.0, Bd44.2	切包	4-11
165	43	SD012	哺乳類	イノシシ	肩骨	肩骨	右		幼獣	4.6
166	43	SD012	哺乳類	イノシシ	肋骨	遠位部	右		未癒合(遠位)	
167	43	SD012	哺乳類	イノシシ?	椎骨?	椎骨?	-			
168	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	近位部・骨幹部	右		未癒合(遠位)	
169	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
170	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
171	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
172	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
173	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
174	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
175	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
176	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
177	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	腰椎?	-		切断?	
178	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	椎骨	腰椎?	-		切断	
179	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	近位端・遠位部	左			
180	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	近位端・遠位部	左			
181	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	近位部・骨幹部	右			
182	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	近位部・骨幹部	右		未癒合(遠位)	
183	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	骨幹部・遠位部	-			
184	43	SD012	哺乳類	イノシシ/ニホンジカ	肋骨	骨幹部・遠位部	-			
185	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	頭蓋骨	脳骨・額骨	左			
186	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	歯槽骨	上顎MI	右			
187	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	下顎内・筋突起	右			5-1
188	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	頸椎	-		切断	
189	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	頸椎	-		切断	
190	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	頸椎	-			
191	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	頸椎	-			
192	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		椎体未癒合	5-2
193	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		椎体未癒合・切断	
194	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	5.3
195	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
196	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-			
197	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-			
198	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-			
199	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		切断	
200	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		椎体癒合中・切断	
201	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		椎体未癒合	
202	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		椎体未癒合	
203	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	胸椎	-		椎体未癒合・切断	
204	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	椎骨	腰椎	-			
205	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	近位端	右			
206	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	近位端・遠位部	右			
207	43	SD012	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	近位端・遠位部	右		明切包	

第4-9表 動物遺存体一覧表 (4)

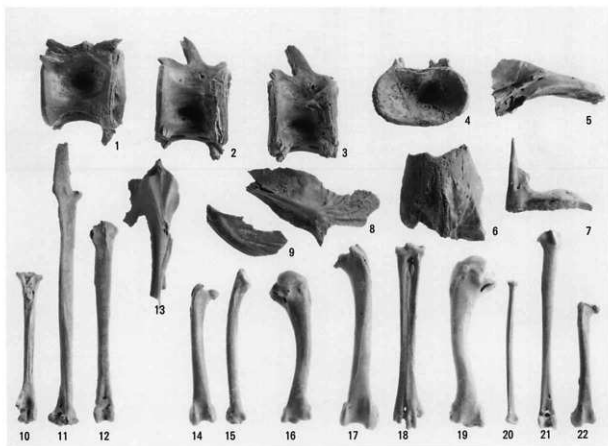
通番	次数	遺骨	大分類	小分類	部位	部分	左右	計測	備考	写真
208	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	肋骨	近位端・遠位部	右			
209	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	肋骨	近位端・骨幹部	右			
210	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	1) 甲片	完形	左	HS187.5.GLP40.5	切傷?	5-4
211	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	1) 甲片	ほぼ完形	左			
212	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	1) 甲片	骨幹部・遠位端	左		切傷・明切傷	
213	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	近位部・遠位端	左	Bd35.3		5-6
214	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	骨幹部・遠位端	左		遠位端内側欠損	
215	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	完形	右	GL174.8.Bp43.6.Bd35.2		
216	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	腕骨	完形	右	GL198.2.Bp36.1.Bd32.1		5-7
217	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	腕骨	近位端・骨幹部	左	Bp31.6		
218	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	腸骨・座骨	左			
219	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	腸骨・座骨	右			
220	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	大腸骨	近位部・遠位部	左		未癒合(近位)	
221	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	大腸骨	骨幹部・遠位端	右	Bd47.6		
222	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	大腸骨	遠位部・骨幹部	右			
223	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	大腸骨	遠位部・遠位部	右		未癒合(近位・遠位)	5-10
224	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	完形	左	GL247.7.Bp51.2.Bd29.9		5-11
225	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	近位端・骨幹部	左	Bp44.3		
226	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	近位部・骨幹部	右		未癒合(近位)	
227	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	近位部・骨幹部	右		未癒合(近位)	
228	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	完形	左	GL194.8.Bp23.3.Bd28.0	前位近位部を剥む?	5-14
229	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	骨幹部・遠位端	左	Bd25.1		
230	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	骨幹部・遠位端	右	Bd28.6		5-13
231	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	骨幹部・遠位端	右			
232	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	完形	右			5-18
233	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	指骨	基礎骨	右			5-16
234	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	指骨	基礎骨	右			5-15
235	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ	種子骨	完形	-			
236	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ?	椎骨	胸椎	-			
237	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ?	椎骨	胸椎	-			
238	43	SD012	哺乳綱	ニホンジカ?	肋骨	骨幹部・遠位部	左			
239	43	SD012	哺乳綱	ウシ	1) 甲片	ほぼ完形	左	GLP68.3.LG58.9.BG51.5		
240	43	SD023A	哺乳綱	ウシ	腕骨・尺骨	近位部・遠位部	左	腕骨 Bp63.2	咬痕(尺骨)	
241	43	SD012	哺乳綱	ウシ/ウマ	海綿骨	破片	-			
242	43	SD012	哺乳綱	ウマ	海綿骨	切面	-		10歳前後	
243	43	SD012	哺乳綱	ウマ	腕骨	ほぼ完形	左			
244	43	SD012	哺乳綱	ウマ	指骨	基礎骨	-		明切傷	
245	43	SD012	哺乳綱	ネズミ科	寛骨	完形	左			
246	43	SD012	哺乳綱	ヒト	上腕骨	近位部・遠位部	左			
247	43	SD012	哺乳綱	ヒト	上腕骨	近位部・遠位部	左?			
248	43	SD012	哺乳綱	ヒト	尺骨	近位部・骨幹部	左		未癒合(近位)	
249	43	SD012	哺乳綱	不明	四肢骨	破片	-			
250	43	SD012	哺乳綱	不明	四肢骨	破片	-			
251	43	SD012	哺乳綱	不明	四肢骨	破片	-			
252	43	SD012	哺乳綱	不明	四肢骨	破片	-			
253	43	SD012	哺乳綱	不明	四肢骨	破片	-			

計測項目はDriech (1976) に準ずる

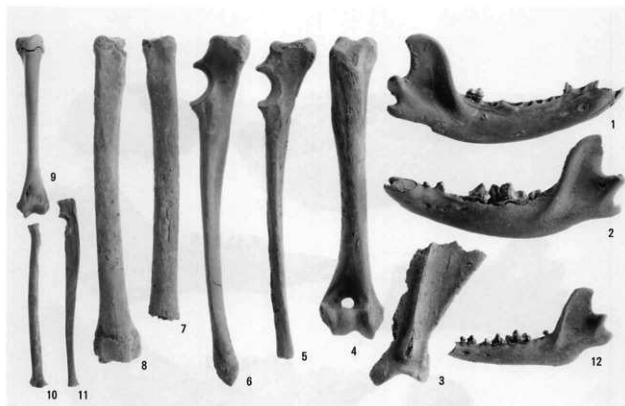
SD036・SD023はSD012と7トレンチ・SD077はSD066と同じ扱い



第4-5図 骨角器



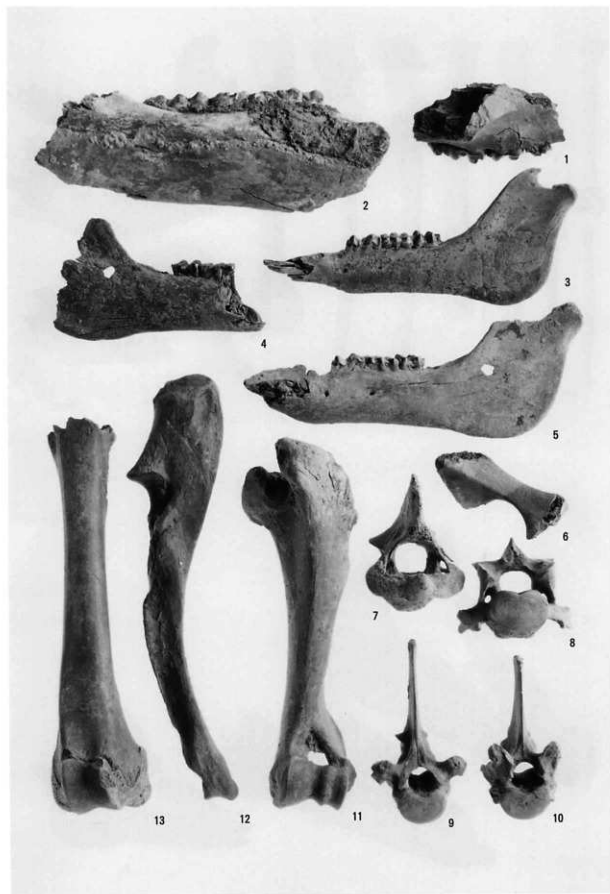
第4-6図 動物遺存体(1) 魚類・鳥類



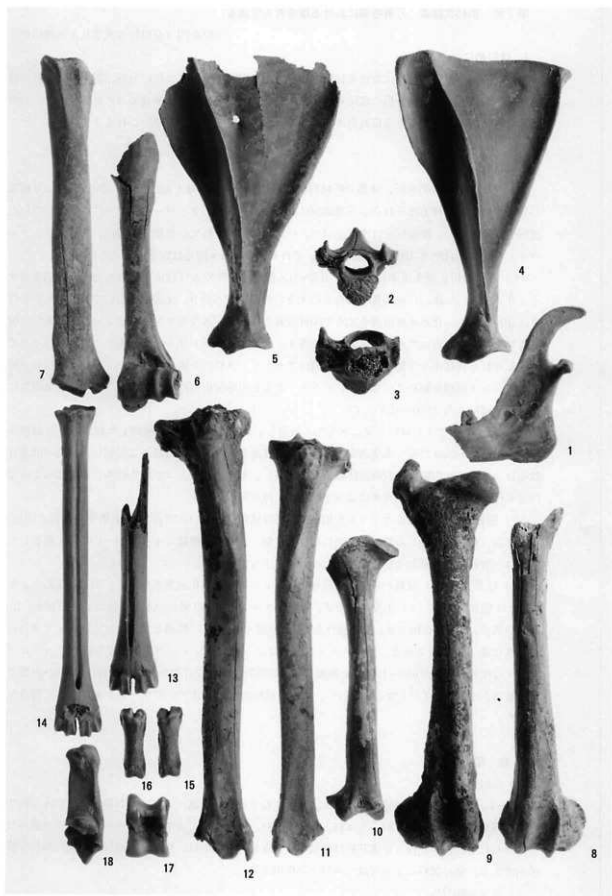
第4-7図 動物遺存体 (2) イヌ・ネコ・タヌキ



第4-8図 動物遺存体 (3) イノシシ下顎骨



第4-9図 動物遺存体(4) イノシシ



第4-10図 動物遺存体 (5) ニホンジカ

第2節 第43次調査、万寿寺堀における環境考古学調査

金原正明(奈良教育大学)古環境研究所

1. はじめに

大友府内町跡第43次調査における16世紀の万寿寺の堀跡において、花粉分析、寄生虫卵分析、種実同定、樹種同定、珪藻分析の環境考古学分析を行い、環境、植生、植栽等の考察を行った。分析と同定は、古環境研究所と奈良教育大学環境考古学研究室で行い、金原がこれをまとめた。

2. 試料と方法

花粉分析、寄生虫卵分析、珪藻分析試料は、第43次調査の万寿寺堀、H-63、S-012南壁より採取した32点であり、種実はそれらから等間隔に採取した9試料とタッパーとバケツに採取されていた試料を対象とした。樹種同定は木製品44点、バケツに採取されていた加工木20点、木片49点、タッパーとバケツの自然木103点を対象とした。それぞれの分析・同定は以下の方法で行った。

(1) 花粉分析、寄生虫卵分析: 1) 0.5%りん酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎する。2) 水洗した後、0.5mmの篩で塵などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。4) 水洗後サンプルを2分する。5) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。6) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。7) 検鏡はアセトリシス処理を施したプレパラートを花粉分析、アセトリシス処理を施していないプレパラートを寄生虫卵分析のためにプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行う。

(2) 種実同定: 1) 試料全量に水を加え放置し、泥化を行う。2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

(3) 樹種同定: 試料は、カミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(年目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40~1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(4) 珪藻分析: 1) 試料から1mlを秤量する。2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。4) 残渣をマイクロベットのカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。プレパラートは生物顕微鏡で600~1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

3. 結果

1) 花粉分析

下部から中部(1帯~VI帯)にかけて、樹木花粉ではエノキ属-ムクノギが優占し、草本花粉ではイネ科が優占し、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、タンポポ亜科などが伴われる。樹木花粉と草本花粉は増減を繰り返す。VI帯では、マツ属複雑維管束亜属の増加が特徴的である。他に試料によってはベニバナが検出される。

2) 寄生虫卵分析

下部から中部(試料16~32)にかけて、寄生虫卵は検出され、回虫卵、鞭虫卵が多く、肝吸虫卵、

異形吸虫卵、カビラリアが試料によって伴われる。また、3回の消長を示す。

3) 珪藻分析

下部より、I帯では、水生珪藻の*Achnanthes hungarica*が優占するが、陸生珪藻が多く、中一真塩性種が伴われる。II帯では*Achnanthes hungarica*が減少し、陸生珪藻、中一真塩性種がやや増加する。IV帯になると、陸生珪藻の*Navicula contenta*や*Navicula mutica*が優占する。中一真塩性種はほとんど検出されない。最上位のIV帯では陸生珪藻が多いが、水生珪藻の*Nitzschia palea*なども増加する。

4) 種実同定

下部より、試料①からイネ類、アワ1、イネ科2、スゲ属49、カヤツリグサ科4、アカザ属1、ナデシコ科17、カタバミ属9、シソ属5が検出された。試料②からニワトコ1、イネ類、スゲ属4、カヤツリグサ科2、アカザ属2、ナデシコ科7、カタバミ属10、チドメグサ属1、シソ属1、試料③からイネ類、カヤツリグサ科5、イグサ科1、アカザ科1、ヒユ科2、ナデシコ科20、カタバミ属12、アブラナ科1、シソ属1が検出された。試料④からイネ類、イネ科2、スゲ属2、カヤツリグサ科1、タデ属1、アカザ属2、ザクロソウ1、ナデシコ科281、カタバミ属4、アブラナ科5、セリ亜科2が検出された。試料⑤からイネ類、オオムギ1、コムギ1、カヤツリグサ科7、ヒユ属1、ナデシコ科9、カタバミ属1、アブラナ科1、イヌホオズキ1、タカサブロウ3が検出された。試料⑥からイネ類、カヤツリグサ科1、ナデシコ科1、カタバミ属5、ウリ類1、タカサブロウ1が検出され、試料⑦からカワツルモ1、イネ類、アカザ属2、ナデシコ科7、カタバミ属9、試料⑧からイネ類、イネ果実1、カヤツリグサ科2、ナデシコ科3、キンボウゲ属5、タカサブロウ1、試料⑨からイネ類、カヤツリグサ科4、タデ属1、アカザ科1、ヒユ科1、ザクロソウ1、ナデシコ科7、カタバミ属5、イヌホオズキ1が検出された。タッパーからはウメ1、イネ類、イネ科1、カヤツリグサ科1、タデ属3、ナデシコ科3、カタバミ属3、イヌホオズキ1、タカサブロウ113が同定され、バケツからマツ属複雑管束亜属26、ウメ4、モモ1、イネ類、イネ科3、ホタルイ属1、アカザ科1、ヒユ科1、ナデシコ科3、キンボウゲ属5、カタバミ属1が同定された。

5) 樹種同定

木製品44点は、モミ属1点、マツ属複雑管束亜属7点、スギ1点、ヒノキ3点、クマシデ属1点、クリ7点、ツブラジイ2点、シイ属1点、コナラ属アカガシ亜属2点、ムクノキ5点、ケヤキ1点、クスノキ科1点、ウツギ属1点、サクラ属4点、サクラ属?1点、カエデ属?1点、ミズキ属2点、ミズキ属?1点、ハイノキ属1点、不明1点であった。加工木20点は、モミ属1点、マツ属複雑管束亜属1点、スギ13点、ヒノキ3点、ヒノキ科1点、シイ属1点であった。その内、棒状ないし板状を呈する加工木は、スギとヒノキであった。木片49点は、モミ属1点、マツ属複雑管束亜属23点、スギ6点、ヒノキ2点、ヒノキ科1点、クリ3点、コナラ属アカガシ亜属3点、ムクノキ3点、エノキ属2点、クスノキ科1点、サカキ1点、ヒサカキ属1点、タケ亜科2点であった。

自然木103点の内、タッパー①～⑥の49点は、マツ属複雑管束亜属14点、スギ1点、ヤナギ属1点、クマシデ属1点クリ2点、ツブラジイ3点、コナラ属コナラ節2点、コナラ属クスギ節4点、コナラ属アカガシ亜属1点、ムクノキ12点、エノキ属7点、シキミ1点、クスノキ科2点、ウツギ属4点、サクラ属3点、ネムノキ5点、カエデ属2点、ヤブツバキ1点、ヒサカキ属1点、ミズキ属3点、ネジキ1点、エゴノキ1点、タケ亜科1点、障孔材1点、散孔材1点であった。またH-64、バケツの34点は、マツ属複雑管束亜属4点、クリ2点、ツブラジイ1点、コナラ属アカガシ亜属4点、ムクノキ7点、シキミ1点、クスノキ科1点、サクラ属2点、ネムノキ1点、カエデ属2点、ヒサカキ属1点、であった。また竹サンプル2点は、タケ亜科であった。

4. 考 察

(1) 万寿寺廟周辺の植生と景観、植栽

周辺は草本が多く、イネ科を主にアカザ科・ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が生育し、樹木ではエノキ属・ムクノキが多い。種実からみてもナデシコ科やカタバミ属の乾燥した路傍等に多い草本が多く、他にイネ科、アカザ科、ヒユ科、ザクロソウ、キンボウゲ属、チドメグサ属、アブラナ科、シソ属、イヌホオズキ、タカサブロウなど同様の環境に生育する草本が生育していた。花粉でやや多いクワ科・イラクサ科もカナムグラなどの土手など人為地に生育する草本であったと考えられる。水生植物のホタルイ属、スゲ属、カヤツリグサ科、コナギ、イグサ科、タデ属、セリ亜科、カワツルモなどは、堀に生育し、これらの生育から堀は湿地から浅い水域を呈していたとみられる。

樹木ではエノキ属・ムクノキの花粉が多いが、自然木からムクノキが比較的多く生育していたとみられ、他にマツ属複雑維管束亜属の自然材と花粉もやや多く、アカマツないしクロマツも生育していた。他に花粉と木材からみて、ヤナギ属、クマシデ属、クリ、ブラジイ、コナラ属コナラ節、コナラ属クスギ節、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属、シキミ、クスノキ科、ウツギ属、サクラ属、ネムノキ、カエデ属、ヤブツバキ、ヒサカキ属、ミズキ属、ネジキ、エゴノキが、堀の周辺に生育していたと考えられる。鳥に食べられ種実が散布する樹木が多く、自然に生育した可能性も高いが、多いムクノキやマツ類、サクラ類などは植栽された可能性が考えられる。

堀の中部では花粉でマツ属複雑維管束亜属が増加するが、地域的なアカマツ二次林の増加とみなされる。上部は花粉が検出されず、分解される乾燥した環境になったと考えられる。

(2) 食用植物、有用植物、食生活について

食用植物としてはウメ、モモ、イネ、アワ、オオムギ、コムギ、ウリ類、ソバ属が同定された。ペニバナの花粉が検出され、染色や紅として薬用として利用されていた。寄生虫卵は回虫卵、鞭虫卵が多く、肝吸虫卵、異形吸虫卵は少なく、特に魚類について、淡水魚で感染する吸虫類が少ない。これは寄生虫の感染のない海水魚を多く摂食していたからと考えられる。

(3) 万寿寺廟の環境

下部(試料16~試料32)は、寄生虫卵の密度が比較的高く、糞便による汚染がみられる。多少消長を示し、この変化は堀の再掘削や底ざらえとの関連もあると考えられる。糞便がこの堀にかなり投棄されていたものと考えられる。珪藻群集では、陸生珪藻がやや多いが水生珪藻も伴われ、湿地から滞水するような状況であったとみられる。流水性種がほとんど出現せず、水はほとんど流れていなかったと推定される。中〜真塩性種がやや出現し、やや塩分濃度があり、生活排水が流れ込んでいたとみなされる。特に珪藻Ⅱ帯では、中〜真塩性の珪藻が増加する。調査でも動物の遺体も含む廃棄された遺物が多量に出土し、ゴミ捨て場の様相を呈し、矛盾しない。また、花粉群集では下部において、樹木花粉と草本花粉の3回の消長があり、樹木が春から初夏咲きで、草本が秋咲きが多いことから、季節性を示している可能性が高い。

上部になると、陸生珪藻の占める割合が高くなり、湿地ないし湿った環境になる。好清水性種も多く、比較的汚濁のない湿地となる。堀が宅地化する時期とみられる。最上部では、流水不定性種の水生珪藻も出現し、水田のような曖昧な水域や湿地となる。

参考文献

- 中村純(1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として、第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純(1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。

東北地理, 42, p.73-88.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—。

植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.

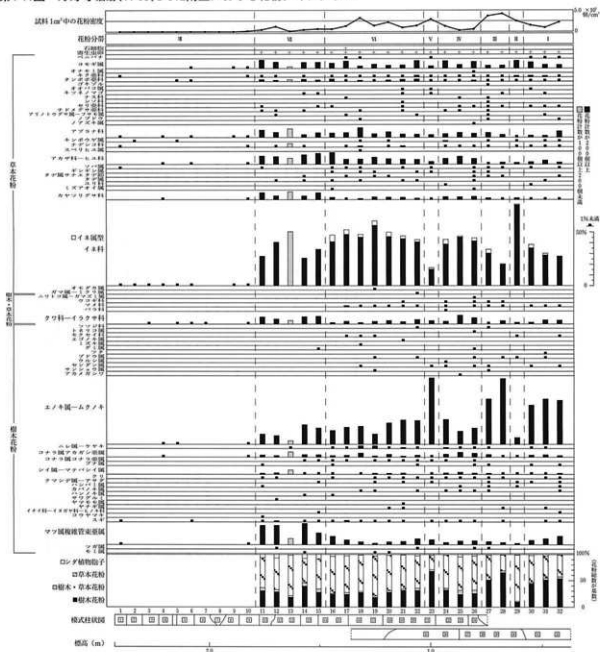
小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27, p.1-20.

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

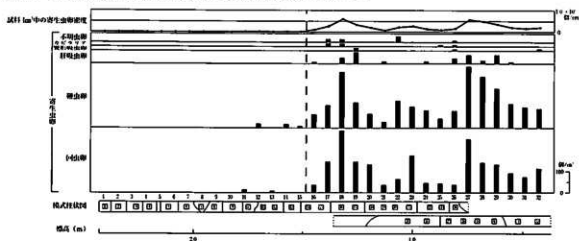
佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.

佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞, 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.

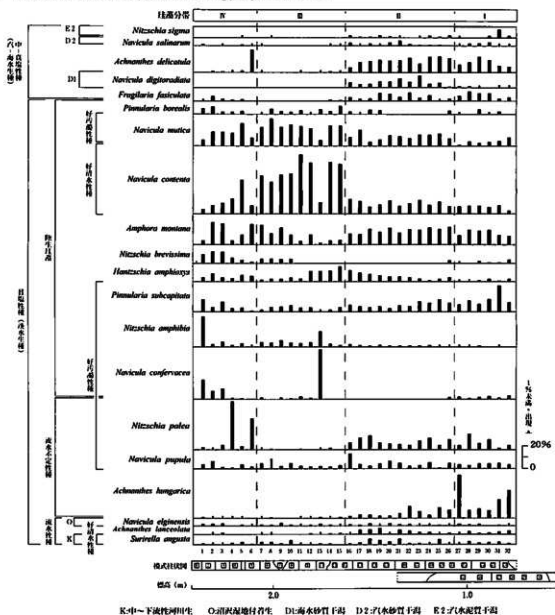
第4-11図 万寿寺堀跡、H-63、S-012兩壁における花粉ダイアグラム



第4-12図 万寿寺堀跡、H-63、S-012南壁における寄生虫卵ダイアグラム

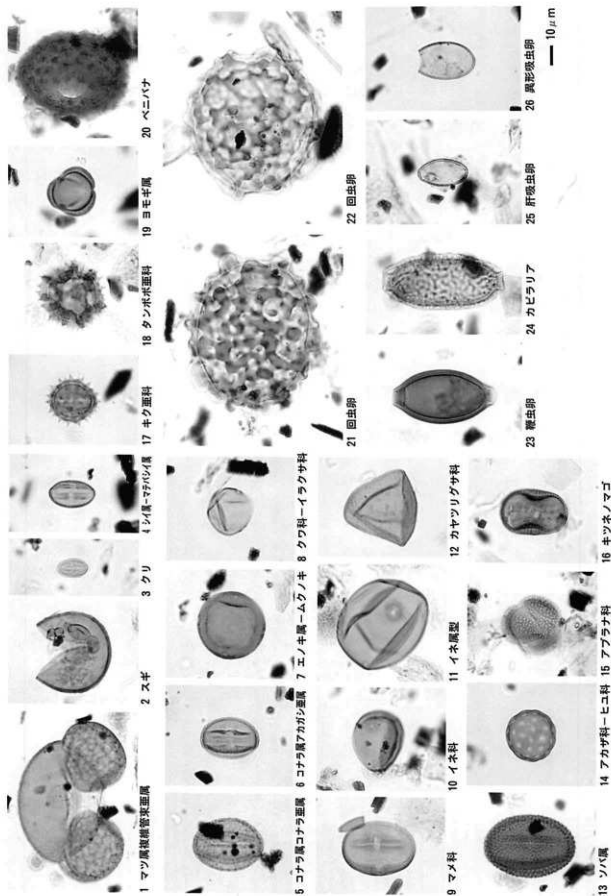


第4-13図 万寿寺堀、H-63、S-012南壁における主要建藻ダイアグラム

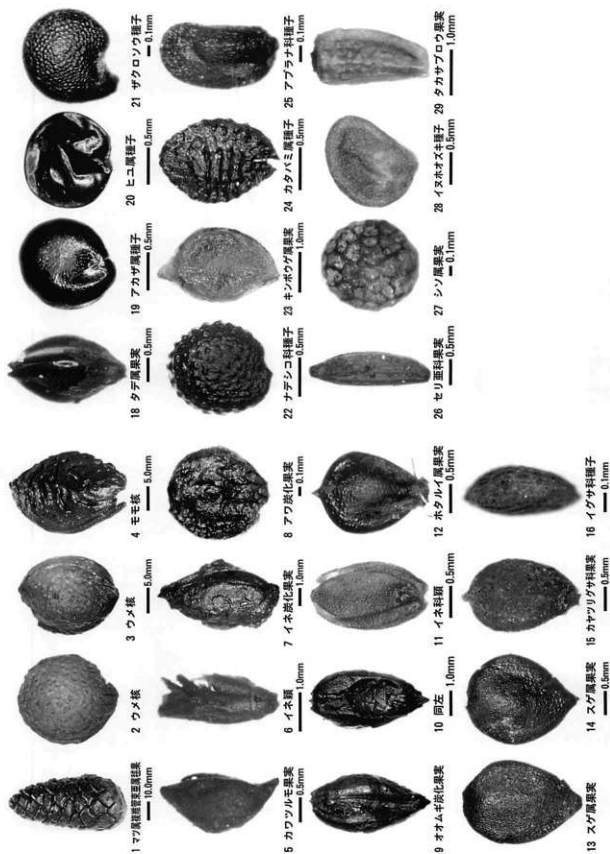


第4-14表 万寿寺堀、H-63、S-012における建造物分析結果①

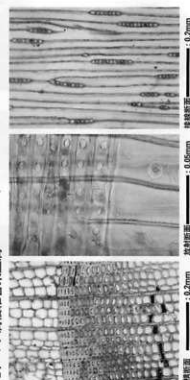
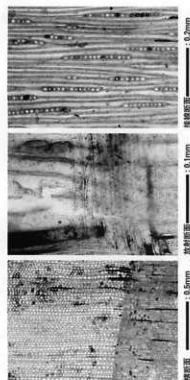
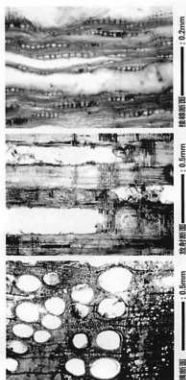
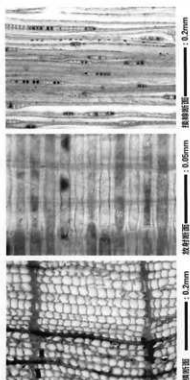
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32			
分類(主軸)																																			
瓦地盤 (原土主軸)																																			
<i>Artemisia vulgaris</i>	1	2	1	1	5								3	1	3								5				1	1							
<i>Artemisia vulgaris</i>	3	1	2	2	3	2	3	4	1	1	4	3	4	6	10	9	6	7	14	33	18	9	26	21	130	21	24	19	46	66					
<i>Artemisia vulgaris</i>	3	1	2	6	8	3	8	8	4	13	1	2	4	3	3	6	16	11	9	16	4	4	2	13	2	3	9	5	6	7	3				
<i>Artemisia vulgaris</i> v. <i>arvensis</i>	1																					1													
<i>Asplenium adnigrum</i>	10	58	55	12	27	57	54	33	47	26	10	28	5	12	14	28	27	39	30	46	33	42	37	45	37	43	29	38	35	36	24	21			
<i>Asplenium adnigrum</i>	1	1	1	1	2																														
<i>Calamagrostis sibirica</i>	6	1	1	1	2																														
<i>Calamagrostis sibirica</i>	3	1	3	1	2	3	4	3	2	1	1	8	4	1	4	2	1	1	4	11	9	4	1	4	1	1	1	1	2	4					
<i>Carex sp.</i>																																			
<i>Cyperus sp.</i>																																			
<i>Cyperus sp.</i>	6	1	1	1	1	2	2														2		3		2	1	2	1							
<i>Cyperus sp.</i>	3	2																																	
<i>Cyperus sp.</i>	1																				2														
<i>Echinochloa crusgalli</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>	1	2		2	1	2	5	3																		1	1	1							
<i>Fraxinus excelsior</i>	1	2		2	1	2	5	3																		1	1	1							
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			
<i>Fraxinus excelsior</i>																																			



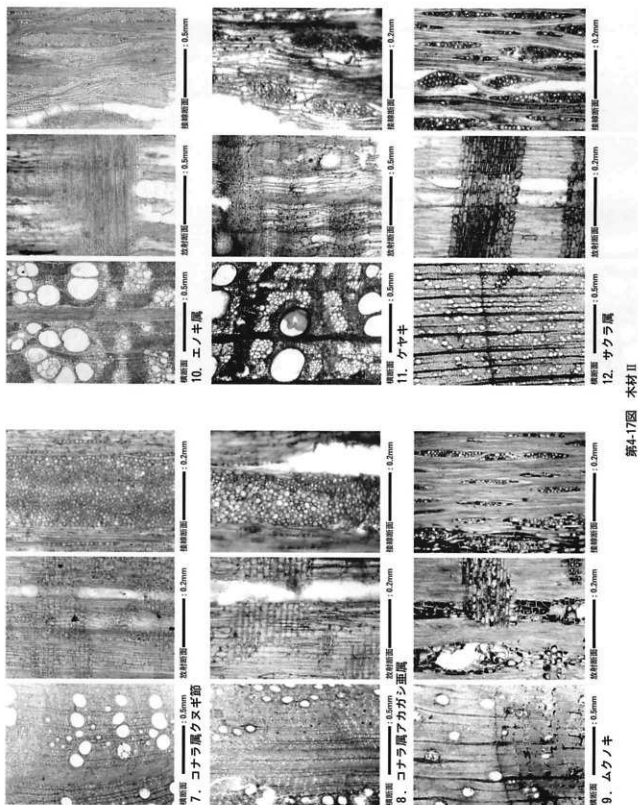
第4-14図 花粉・胞子



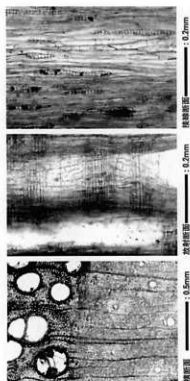
第4-15図 種実



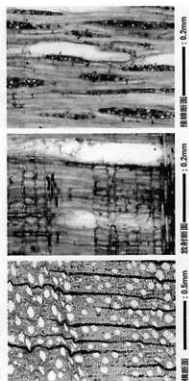
第4-16図 木材1



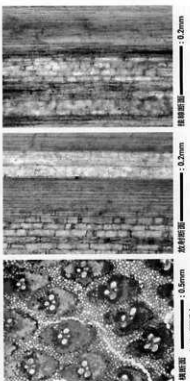
第4-17図 木材II



13. ノムノキ



14. ミズ牛蒡



15. タケ亜科

第3節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

魯禮彦・平尾良光

(別府大学大学院 文学研究科)

1. はじめに

大分県に位置する中世大友府内町跡は大分県教育庁埋蔵文化センターが調査している中世大友氏の城下町跡である。遺跡がある大分市には九州の有力な戦国大名であった大友氏の守護所がおかれていたところである。大友義鎮は貿易からの利益を得るために南蛮貿易を含む活発な対外交流を行っており、中世大友府内町跡からも中国、朝鮮半島、東南アジアからの遺物が数多く出土した。また、大友義鎮がキリスト教の布教を許可し、キリシタン大名になったことを示すように、中世大友府内町跡からはキリスト教との関連があると考えられるメダイ、ロゼリオなども出土した¹⁾。

最近になって日本全国からキリスト教との関連が考えられる遺跡や遺物が発見されることによって、キリスト教関係の遺物や伝来などに関する研究も活発に行われるようになった。特に、残っている文献記録に大部分を依存した既研究に比べ、最近では文献記録を基に遺跡・遺物自体に焦点を合わせる研究が進んでいる。その中には科学的な方法を採用した研究も含まれており、このことは文献記録からでは得られない情報までに接近できることで大きな意味があるともいえる。中世大友府内町跡の場合、2005年度より遺跡から出土した遺物に関する科学的な研究が行われ、その結果、中世大友府内町跡出土のキリスト教関連の遺物には東アジアではない材料が利用された可能性があることが明らかになった。それ以降、同遺跡から出土した遺物に関して化学組成・鉛同位体比分析などの研究が持続的に行われている。

本論文ではその継続した研究の一環として、中世大友府内町跡の34次・43次調査区から出土した遺物に関して化学組成と鉛同位体比分析を行い、出土した遺物の成分構成と材料産地の推定を行うことにした。

2. 資料

今回測定した資料は中世大友府内町跡の34次・43次調査区から出土した15点の金属製品である。15点の資料にはメダイ、指輪のようなキリスト教関係の遺物をはじめ、火挟み、分銅、銅釘、鍍前などの生活用品も含まれており、当時の生活様相が推測できる製品として重要な意味があるともいえる。

これらの資料15点に関して表面の化学組成を蛍光X線法で測定し、鉛同位体比を用いた材料の産地推定のために鉛を微量採取して測定用の試料とした。

3. 鉛同位体比の原理²⁾

地球が誕生したのは45.6億年前とされている。そして、この時にすべての元素の同位体組成は地球上で各元素毎にある値になっていて、その値は地球のどこでも同じ値であったとされている。ほとんどの元素の同位体比は時間が経っても変化しなかったが、例外的なくつかの元素は変化した。鉛はその例外的な元素の一つである。

鉛(Pb)には²⁰³Pb、²⁰⁵Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁸Pbの同位体があり、地球が誕生した時にできた岩石中に他の元素と一緒に含まれていた。時間が経つと岩石中に含まれていた²³⁸Uは²⁰⁶Pbに、²³⁵Uは²⁰⁷Pbに、²³²Thは²⁰⁸Pbに変化する。よって、U(ウラン)とTh(トリウム)が減少した量だけ鉛の量は増えてくる。各鉛同位体の量は岩石中のU、Th、Pbの量比および岩石中でPbとU、Thが共存していた時間の長さによって、それぞれの増加量が異なるため、鉛同位体比の違いとして表わすことができる。

それ故、同位体の量が地球の誕生から変わっていない²⁰⁶Pb量と、変化した²⁰³Pb、²⁰⁵Pb、²⁰⁷Pb量と

の比を調査し、これを世界の鉛鉱山の同位体比と比較することによって鉛の産地の違いを判別することができる。

4. 分析方法

採取したサビ試料に関して鉛同位体比を次のように測定した。試料をアルコールで洗浄し、石英製ピッカーに入れ、少量の硝酸で溶解した。これを蒸留水で約5mlに希釈し、直流2Vで電気分解した。約1日の時間をかけて電気分解を続け、析出した二酸化鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。この溶液から0.2μgの鉛を分取し、リン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せた。以上のように準備したフィラメントを質量分析計（別府大学に設置されているサーモフィッシャーサイエンティフィック社の表面電離型質量分析計MAT262）の中にセットし、条件を整え、鉛同位体比を1200°Cで測定した。また、同一条件で標準鉛試料NBS-SRM981を測定し、規格化した。

5. 測定値の表し方³⁾

鉛同位体比測定の結果を理解するため、資料の同位体比を次のように示した。鉛には²⁰³Pb、²⁰⁵Pb、²⁰⁷Pb、²⁰⁹Pbの独立した4つの同位体があり、同位体比は²⁰³Pb/²⁰⁵Pb、²⁰³Pb/²⁰⁷Pb、²⁰³Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁹Pb、²⁰³Pb/²⁰⁷Pb、²⁰³Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁹Pb、²⁰³Pb/²⁰⁷Pb、²⁰³Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁹Pb、²⁰³Pb/²⁰⁷Pb、²⁰³Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁷Pb、²⁰⁵Pb/²⁰⁹Pb、²⁰⁷Pb/²⁰⁹Pb (B式図) と²⁰³Pb/²⁰⁷Pb—²⁰³Pb/²⁰⁹Pb (A式図) という2つの図を用いた表現方法を利用して測定結果を図化した。

中国の前漢時代、後漢時代・三国時代の銅鏡を分析して、これらを図中にプロットすると、前漢時代の銅鏡と後漢・三国時代の銅鏡の材料が、はっきり区分されて分布した。そこで前漢時代の銅鏡が分布した領域を、他の出土資料と比較して華北産材料の領域 (AとA') と表し、後漢時代・三国時代の銅鏡が分布する領域を華南産材料の領域 (BとB') と表した。

日本産材料の領域を設定する場合、西暦6世紀頃までの遺物で日本産の材料を用いたと断定できる資料は今のところ確認できていないので、8世紀以降に作られた銭貨と現代の鉛鉱山が示す分布を日本産材料の領域 (CとC') とした。

朝鮮半島産材料の領域には、朝鮮半島で製作されたと考えられる多鈕細文鏡を用い、それらが示す分布領域を朝鮮半島産材料の範囲 (DとD') とした。

鉛材料の産地は当然鉛鉱山が示す値から設定するべきであるが、文化財資料が製作された当時に利用された鉱山を探すことは無理であり、現実的にも限界がある。そのため、文化財資料が製作された当時の鉛材料を資料から取り、それを基準に領域を仮定し、設定した。この仮定した領域は弥生時代資料だけでなく後の時代の資料の判別にも利用でき、今までは矛盾がないようにみられる。

6. 化学組成

今回の測定試料15点の金属製品に関してその化学組成を蛍光X線分析法で測定した。測定は別府大学に設置されているHORIBA MESA-500Sおよびセイコーインスツルメンツ (株) 製ポータブル蛍光X線分析装置SEA200、SIIナノテクノロジー (株) 製蛍光X線分析計SEA1200VXで行った。その化学組成を第4-16表でまとめた。なお、これらの測定は資料の表面鉛を含んだままで行ったため、金属組成そのものとは異なる可能性がある。化学組成を調べた結果、ほとんどの資料は純銅あるいは銅と鉛、銅と鉛と錫、銅と錫、鉛と錫の合金であることがわかった。銅にスズあるいは鉛を混ぜると溶融温度が低くなり、流動性がよくなるため、鋳造しやすくなる。鉛成分の比率が比較的高いことは鉛が銅より手に入りやすかったため、あるいは鋳造しやすいうように融点を下げたためであ

ると考えられる。

測定の中で真鍮製の製品3点が確認されたことが注目される。チェーン、錠前、薬匙?は80%~90%の銅に10~20%の亜鉛が含まれており、これらが真鍮の中でも丹銅であることがわかった。特に、亜鉛がほぼ20%含まれているチェーンと薬匙?は黄色を帯びている。古代ローマの人々は真鍮を装身具や宝石などに利用し、16世紀のヨーロッパでは真鍮を皿など家庭用の装飾品を作ることに利用されたという。現在では8~20%の亜鉛を含む真鍮の場合、その色相が美しく延性が良いため、装飾品や金代用品などとして利用されている。中世大友府内町跡34次・43次調査区から出土したこれらの資料も当時、金の代用としての真鍮で作られ、権力と富の象徴としての機能をもっていたかもしれない。

7. 鉛同位体比の測定結果

測定資料15点に関して鉛同位体比測定の結果を第4-17表にまとめ、第4-19~22図に示した。15点の資料の中で、資料番号2、5、7、10、11、13、14は中国の華南産材料の領域に位置した。ただし、資料番号11は同じ華南産材料の領域内でも華南領域に位置した他資料とは少し離れたところに分布しており、材料が異なる可能性がある。そして、資料番号2と13、資料番号7と10は誤差範囲に位置するので類似した材料で同一あるいはかなり近い時期に製作された可能性が考えられる。

資料番号1はN領域に分布し、今のところではその産地を推定することはできない。N領域は東アジアではないところで、今までの研究成果によると東南アジアにその産地がある可能性が考えられる。

資料番号3、4、6、8、9、12、15は第4-19・20図と第4-21・22図で同じ領域に分布しなかったため、その産地を推定することはできなかった。ただし、資料番号3は華南産材料の可能性もある。そうすると、資料番号3に使われた材料は華南産材料でも他資料に使われた材料とは異なる材料である可能性が考えられる。資料番号6、12、15は第4-19・20図では華南産材料の領域の近くに位置したが、第4-21・22図ではN領域の中に分布した。これら3点の資料は互いに誤差範囲内で重なって分布し、同一の材料である可能性が高い。資料番号4、8、9は両図で分布する領域が異なり、これに関しては今後より数多くの資料が研究された後に考え直す必要がある。

8. 考察

今回の鉛同位体比測定の結果をより深く理解するために、これまでに測定された中世大友府内町跡出土の金属製品の測定結果と比較し、第4-23~26図に示した¹⁴⁾。これまで測定された資料は設定された東アジアの領域あるいはN領域にそのほとんどが位置した。特に、N領域の中にいくつかの資料が分布し、中世大友府内町跡から出土した金属製品にはN領域という未知の産地の材料が確実に利用されたことがわかった。これはN領域の材料あるいはN領域の材料で作られた製品が外国のどこからか日本へ搬入されたことを示唆している。

今回の研究で最も注目されるのは資料番号6、12、15が分布する位置である。今まで測定された資料と今回の資料を比較してみると、資料番号6、12、15が位置するところに既分析された資料のいくつか重なって分布することがわかった。このことはこれらの資料が同一の材料を利用した可能性があることを意味し、その材料は新たな未知の産地の存在を示唆しているかもしれない。これに関しては今後より数多くの資料が分析され、同じところに位置する結果が見つかるのならば、その時に再考察する必要がある。

第3節 中世大友府内町跡出土金属製品に関する自然科学調査

※参考文献

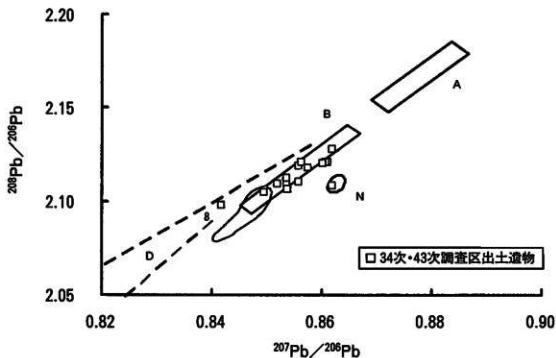
- 1) 大分市教育委員会、2006「中世大友再発見フォーラムⅡ：府内のまちな宗廟の栄華」
大分市教育委員会文化財課
- 2) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と製造」鶴山堂（東京）P31～P33
- 3) 平尾良光編、1999「古代青銅の流通と製造」鶴山堂（東京）P35～P39
- 4) 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2006「豊後府内4-第3分冊」
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第9集 P205～P212
- 5) 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007「豊後府内6」
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第15集 P303～P310
- 6) 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2007「豊後府内7」
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第16集 P324～P331

第4-16表 中世大友府内町跡34次・43次調査区から出土した金属製品の化学組成（％）

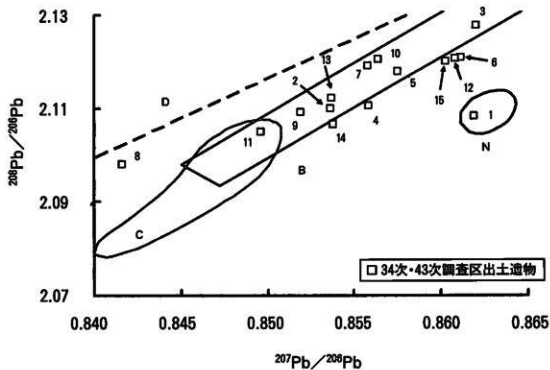
番号	資料名	出土	Cu	Sn	Pb	Fe	As	備考	測定番号	掲載図
1	メダイ	43次調査SK015	1.2	0.3	98.0	0.8	<0.1		BP1029	第3-106図
2	メダイ	43次調査H-65	94.0	0.2	0.1	5.2	0.4		BP1030	第3-155図 1
3	メダイ	43次調査H-65	1.2	0.3	98.0	0.9	<0.1		BP1031	第3-155図 2
4	指輪	43次調査SK046	0.1	58.0	40.0	1.8	0.1		BP1233	第3-134図 2
5	チェーン	43次調査SD012	79.0	<0.1	0.5	0.7	0.1	Zn 19.0	BP1234	第3-27図12
6	火鉢み	43次調査SX017	38.0	0.6	45.0	16.0	0.1		BP1235	第3-27図 1
7	不明銅製品	43次調査区	95.0	0.2	2.4	0.8	0.6		BP1425	第3-150図15
8	鏡前	34次調査SD066	87.0	0.4	1.9	0.6	0.4	Ag 0.8	BP1428	第2-45図275
9	不明銅製品	34次調査SD066	81.0	12.0	<0.1	6.6	0.3	Zn 9.6	BP1429	第2-45図276
10	駒小仏	43次調査SD012	34.0	34.0	27.0	1.2	0.2	Ag 0.6	BP1430	第3-27図10
11	分銅	43次調査H-64	14.0	33.0	46.0	4.5	1.1	Ag 0.9	BP1435	第3-150図12
12	銅釘	43次調査SD012	88.0	0.4	8.5	1.5	1.1	Zn 1.0	BP1436	第3-27図 4
13	ハバキ	43次調査H-65	91.0	6.6	0.8	0.5	1.4		BP1437	第3-150図11
14	小柄	43次調査I-66	32.0	48.0	17.0	1.1	1.9		BP1440	第3-150図22
15	粟匙?	34次調査SD066	77.0	<0.1	2.8	0.8	0.1	Zn 19.0	BP1442	第2-45図277

第4-17表 中世大友府内町跡34次・43次調査区から出土した金属製品の鉛同位体比値

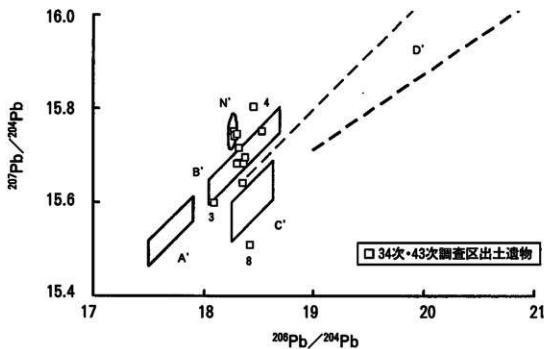
番号	資料名	出土	²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁷ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁸ Pb	²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁸ Pb	²⁰⁷ Pb/ ²⁰⁸ Pb	²⁰⁶ Pb/ ²⁰⁹ Pb	測定番号	掲載図
1	メダイ	43次調査SK015	18.274	15.751	38.528	0.8619	2.1083	BP1029	第3-106図
2	メダイ	43次調査H-65	18.369	15.680	38.757	0.8596	2.1099	BP1030	第3-155図 1
3	メダイ	43次調査H-65	18.094	15.597	38.500	0.8620	2.1278	BP1031	第3-155図 2
4	指輪	43次調査SK046	18.463	15.802	38.967	0.8559	2.1105	BP1233	第3-134図 2
5	チェーン	43次調査SD012	18.325	15.714	38.812	0.8575	2.1180	BP1234	第3-27図12
6	火鉢み	43次調査SX017	18.282	15.743	38.776	0.8611	2.1210	BP1235	第3-27図 1
7	不明銅製品	43次調査区	18.327	15.684	38.835	0.8558	2.1190	BP1425	第3-150図15
8	鏡前	34次調査SD066	18.427	15.508	38.658	0.8416	2.0979	BP1428	第2-45図275
9	不明銅製品	34次調査SD066	18.357	15.638	38.717	0.8519	2.1091	BP1429	第2-45図276
10	駒小仏	43次調査SD012	18.311	15.682	38.830	0.8564	2.1205	BP1430	第3-27図10
11	分銅	43次調査H-64	18.540	15.751	39.027	0.8496	2.1050	BP1435	第3-150図12
12	銅釘	43次調査SD012	18.285	15.740	38.777	0.8608	2.1206	BP1436	第3-27図 4
13	ハバキ	43次調査H-65	18.368	15.681	38.795	0.8537	2.1121	BP1437	第3-150図11
14	小柄	43次調査I-66	18.384	15.696	38.725	0.8538	2.1065	BP1440	第3-150図22
15	粟匙?	34次調査SD066	18.304	15.746	38.805	0.8602	2.1200	BP1442	第2-45図277
誤差			±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006		



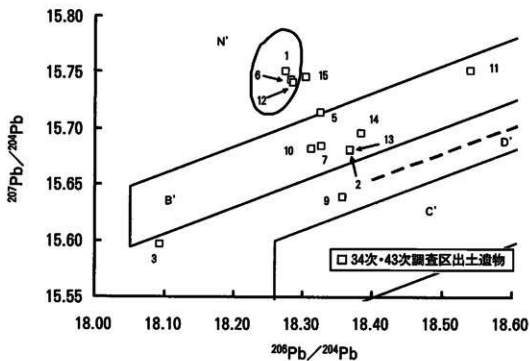
第4-19図 中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)



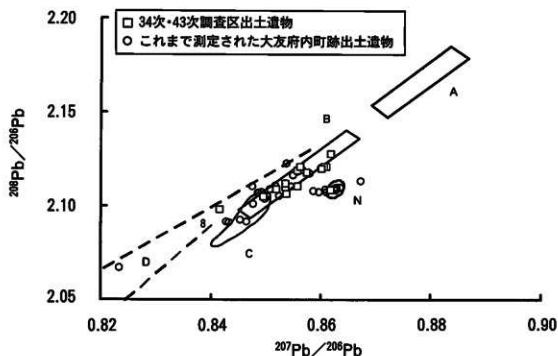
第4-20図 第4-19図の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)



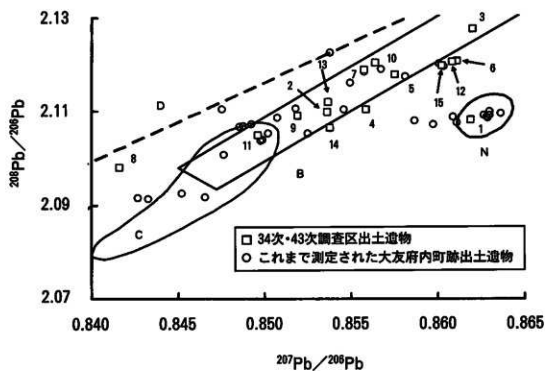
第4-21図 中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ ・ $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



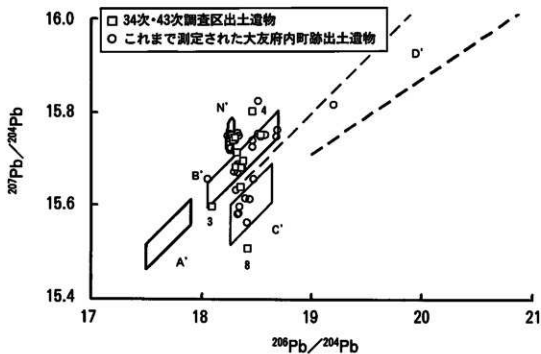
第4-22図 第4-21図の拡大図
($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ ・ $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



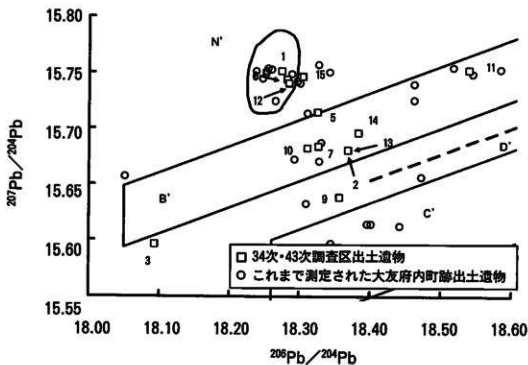
第4-23図 今回の資料とこれまで測定された中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)



第4-24図 第4-23図の拡大図
($^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ - $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$)



第4-25図 今回の資料とこれまで測定された中世大友府内町跡出土の金属製品の鉛同位体比 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)



第4-26図 第4-25図の拡大図 ($^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ - $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$)

第5章 総括

「万寿寺築地之内并西之屋敷」と府内町跡第34・43次調査一

府内町跡34・43次調査は、「府内」最大の寺院であり、五山十刹に列せられた万寿寺の西境とその周辺を調査範囲とした。この場所については、天正10年（1582）に大友義統が家臣の柴田礼能に対し発給した「一、万寿寺築地之内并西之屋敷両所、令所望候之事。一、一府万寿寺町屋敷無残所預置候事。……」の記述がある文書が残されている。そこで、本章ではこの文書の表す「万寿寺築地之内并西之屋敷」の一部が、今回の発掘調査で検出された遺構と想定し、その意義を報告する。

1. 永禄年間（1558～1570）の「府内」

二階崩れの乱

大友家21代、大友義統は、天文19年（1550）、「府内」の大友館で起こった二階崩れの乱で父大友義隆を失い、家督を継承する。以後、ポルトガル船の定期的な来港を受け、キリスト教布教を許可するなど、「府内」を拠点に、領国支配を行う。その一方弘治2年（1556）には家臣の謀叛が起こり、その鎮圧を行い、一時的に「府内」を離れる事態が生じている。その状況については1557年の宣教師の記録に「国主（大友義統）は謀叛を指図した大身数名をころさせ、……この四句節の時期に、我らは殺され、家々が焼かれようとしたために、たいそう動揺した。すなわち、国王はその地から5里の所にある彼の城に身を置き、盗賊は多いが、彼らに対する裁きも牢獄もなく、……国主は（人を介して）我らの身は我らで護るべきであり、かの地より我らを援助することはできぬ、甚だ遺憾であると伝えてきた。この頃、全市で自警が行われ、我らも同じことを始めた。」¹⁾と述べている。

全市で自警

この事件が契機となったためか、大友義統は永禄年間の初頭頃から、活動の拠点を「府内」から南に約28km離れた「臼杵」に移転し、そこに城を構え政庁としている。その結果、「府内」は領主不在の都市となる。領主不在となった「府内」は先の宣教師の報告の状況になったことは想像に難くない。

今回の発掘調査で、第2南北街路下で検出された廃棄土坑群は、16世紀後葉と想定される遺構群の中でも最も古い時期にあたる。この場所は、整備はされていないものの、万寿寺の西側を通り、大友館の東側を抜け、町の北部へ至る「府内」を貫く主要街路部で、天文年間以前から機能していた公的な施設である。ところが、廃棄土坑群はこの街路の中央部分に列を成して掘削されており、街路機能に影響を与えていたことが想定できる。

このように、府内町跡第34・43次調査で明らかになった、16世紀後葉の遺構群の中で、古い時期に属する第2南北街路下の廃棄土坑群、万寿寺の堀の拡張は、「府内」から領主が不在となった永禄年間に掘削されたものと想定する。

また、万寿寺の堀が、西に拡張し、街路中央部に掘り込まれた廃棄土坑を切っている状況は、領主不在の都市での治安の悪化を表しており、先の宣教師の報告の「我らの身は我らで護るべきであり」の万寿寺が行った具体的な行動としてとらえることが出来る。

仙石秀久
おとな

さらに、領主不在になった「府内」では「この頃、全市で自警が行われ、」と町衆の自治組織の誕生あるいは成長とも想定できる宣教師の報告もある。永禄年間には本格的に長期にわたり、「府内」は領主が不在となる。その中で秩序維持のための町衆組織が強化されたことが想定でき、天正14年（1586）に、島津氏侵攻に対し、豊臣秀吉の命で「府内」を訪れた仙石秀久の記録の自治組織と想定されている「其町のおとな共」につながるものと考えられる。²⁾

註(1) 松田毅一監修「1557年10月29日付 ヴィレラ書簡」『十六・七世紀イエズス会日本報告集第3期第1巻』同朋社 1997年

(2) 鹿毛敏夫「戦国大名の外交と都市・流通」思文閣出版 2006年

2. 元亀年間から天正10年頃の万寿寺

元亀から天正10年頃にかけての万寿寺については、火災の記録が多く見られる。

工藤帯刀 江戸時代の記録であるが、元亀元年（1570）1月21日に、大友義鎮近習の侍工藤帯刀が臼杵で狼藉を働き、「府内」万寿寺に逃げ込み、それを通った義鎮の兵200余人が万寿寺に乱入し、火を放ち、全焼したと記録されている。

万寿寺火災 また、天正9年（1581）のこととして「豊後の府内の市では、巡察師が同所を出発した二、三日後に……ある事件が生じた。万寿寺は、その市の最良の場所にあり、豊後の国中でもっとも主要な寺院で、建築や収入においてもっとも豪勢であったが、我らの臼杵の教会の礎石が置かれた同じ週に、一夜、突如として火災を起こし、その壮大な建築物は何一つ残らずごとごとく焼滅した。」¹¹と記述されている。

そして、天正13年（1585）に過去の出来事として、領地四ヶ園を喪失し、経済的に困窮した時、「殿は密かに、府内の町において主要な僧院であり、（豊後の）園中でもっとも著名な寺院である万寿寺に放火するよう命ぜられ、そしてその莫大な収入を、戦争において戦に奉仕した貧しい武士や兵士に配分なされた」¹²と述べている。

万寿寺 以上の万寿寺炎上に関する記述のうち、宣教師の記録である天正9年と天正13年は、時系列的には矛盾無い。しかし、元亀元年については永禄12年（1569）9月まで「府内」に在住し、翌年の元亀元年の10月末頃日本を離れた宣教師であるガルバス=ビレラの1571年10月6日の書簡に「豊後園において国王の居住せる府内という市に多数の大なる僧院あり。特に二つは基だ立派にして、その一つは〔万寿寺ならん〕坊主150人を有し、収入多く、寺は建築後年を経たるがゆえに新しからざれども、地所甚だ広く。うちに多数の庭園あり、果物ならびに醬菹、その他目をたのしませしむるもの植えたり。この僧院は豊後の諸王の墓所にして、これがため収入豊なり。彼等は教壇より説経をなし、朝夕祈禱の定時あり、国王の庇護を被るがゆえに基だ傲慢にして、各種の罪を犯して躊躇せず。……」と焼失前の万寿寺境内の様子を報告している。¹³万寿寺が元亀元年1月に炎上していたら、その10ヶ月後に日本を離れる間に、情報は伝わるはずであり、そのことが書簡で触れられておらず、2度の火災がない限り、万寿寺炎上は天正9年の出来事と考えられる。

さらに、炎上後の万寿寺についてもフロイスの日本史には「府内のかの主要な寺院がふたたび勢力を伸ばすことがないようにと、国王フランシスコの助言によるものと思われるが、嫡子（義統）は、同寺が有していた収入を幾人かの貴人たちに配分し、その地所を、さしあたっては一人のキリシタンの貴人に授与した。……国王と嫡子および我らイエズス会員の念頭には、かの寺院が得來、司祭たちの住居となり、同寺院が悪魔の礼拝の場でなく、ゆくゆくデウスの礼拝所となるようにとの願いがあったからである。」¹⁴と述べている。

3. 柴田礼能と「府内」

万寿寺炎上についての宣教師たちの報告は、天正6年（1578）の耳川の戦いで、島津氏に敗北し、困窮した中で、万寿寺の収入を得るために、放火したと伝えられる以外に、キリシタンたちの思惑も垣間見える。また、「さしあたっては一人のキリシタンの貴人に授与した」との記述については、関連する日本側の文書が残されており、より具体的にその状況を知ることが出来る。

柴田礼能 それは、天正10年（1582）正月22日に大友義統が家臣の柴田礼能に発給したもので、次のように命じられている。

註(1) 松田毅一・川崎純太『光沢フロイス 日本史10 大村純忠・有馬晴信篇Ⅱ』2000年 中央公論新社

(2) 村上直次郎訳『イエズス会日本通信 下』新泉館蔵書2 雄松堂出版 1969年

(3) 松田毅一・川崎純太『光沢フロイス 日本史8 大友宗麟篇Ⅲ』2000年 中央公論新社

(4) (1)と同じ

(大友義統) (花押)

條々

- 一、万寿寺築地之内并西之屋敷両所、令所望候之事。
- 一、一府万寿寺町屋敷無残所預置候事。
- 一、百姓中前々之證文有之、毎事礼能可被任存分事。
- 一、諸成敗之事、縦雖為人被官、至主人相理、礼能可被任存分事。
- 一、町役并点馬諸公事等之事、如前々可被勵馳走事。
- 一、地下人等雖余内訴、曾而不可有許容事。
- 一、苦役等之事、聊無緩可有所動之事。

以上

天正十年正月廿二日

柴田筑前入道殿¹⁾

柴田礼能については、渡辺澄夫の研究²⁾によれば、キリシタンの家臣であり、フロイスの日本史に「柴田リイノ」として登場し、「キリシタンの貴人」・「豊後のヘラクレス」と身分の高さや武人としても賞賛されている。古文書でも天正8年(1580)の田原親賢の乱で国東の田原親家の補佐約として派遣され、その功績に対し、大友義統・義統の連名で西国東郡臼野荘60貫分の知行を預けている。そして、天正10年の前述の文書である。渡辺によると、「百姓・地下人他人の被官人等に対する成敗、町役・点馬諸公事・区役等の勤仕を命じられているのは、府内の代官職・檢断職等を帯する府内町奉行ともいふべき重職であろう。」と述べている。

ところで、町奉行の誕生については、小島道裕³⁾は、家臣団と統合され城下町に居住するようになった直属商工業者で形成する町を、領主が直接管理するための職掌として「町奉行」が登場すると論じている。また、仁木宏⁴⁾は町奉行に「対応するのが、町民側の結成した町組織である。そして、多くの城下町において、超組織の基盤となったのが両側町であった。」と述べており、天正14年に見られる「おとな」・町奉行・「府内古図」に描かれる両側町の関係が、「府内」では領主不在の永禄年間に誕生、成長したことも考えられる。

4. 「万寿寺築地之内并西之屋敷」と礎石建物群

今回の府内町跡第34・43次調査の場所や検出された遺構が、先の古文書と関連すると思われる部分がある。それは柴田礼能が領主である大友義統から、所望された「万寿寺築地之内并西之屋敷両所」、残すことなく預け置かれた「万寿寺町屋敷」である。後者についてはすでに支配権を持つ大友義統が、柴田礼能に「万寿寺町屋敷」を預ける主旨の内容であり、「府内古図」に描かれた万寿寺南の五重塔周辺の西側に寺小路町の名称があり、「万寿寺町屋敷」との関連が想定される。

これに対し、前者は支配・管理権を持つ柴田礼能に対し「万寿寺築地之内并西之屋敷両所」を大友義統に渡すような内容と理解できる。柴田礼能が「万寿寺築地之内并西之屋敷両所」の支配・管理権を持っているとすれば、「万寿寺築地之内」については、この文書が発給される前に「さしあたっては一人のキリシタンの貴人に授与した」とフロイスの日本史に記述されている、天正9年10月頃に発生した炎上後の万寿寺のことを示すと考えられる。

また、「井」にもう一つ所望されたのが「西之屋敷」である。名称は、「大友館」の北側に「御北町」、西側に「御西町」があるように、相対的な位置関係を示す名称である。本書で報告してい

註(1) 大友松野文書『大分県史料25』1964年

(2) 渡辺澄夫『増補改訂 豊後大友氏の研究』第一法規 1981年

(3) 小島道裕『戦国・織豊期の城下町 城下町における「町」の成立』『日本都市史入門 Ⅱ 町』東京大学出版会 1990年

(4) 仁木宏『空間・公・共同体-中世都市から近世都市へ-』吉本出版 1997年

るように、万寿寺の西側では礎石建物群が検出された。この建物群は、万寿寺の西側に建ち並んだ建物群であり、「西之屋敷」と理解することも可能である。しかも、この建物群は永禄年間に拡幅された万寿寺の西境に堀を埋め立て建設されている。すなわち、大友家が支配する中世都市「府内」の中で、万寿寺及び、付属の堀はその領域外と考えられ、そこを宅地として埋め立てて開発し、屋敷を建設したなら、その支配権・管理権は、それを施主した人物にあると考えられる。そうすると、その屋敷を所望された柴田礼能は、施主した人物、あるいは近い位置にいたと想定することが出来る。

以上のことから、天正10年正月12日以前の「万寿寺築地之内」と「西之屋敷」は柴田礼能が支配権を持っていたことが理解できる。

「キリシタンの貴人」である柴田礼能は、天正8年頃までは国東を中心に、大友義頼・義統の命で活躍していたが、二年後には、「府内」の町奉行的な役職に抜擢されている。その間、「府内」のキリシタン達が敵視して、その場所に教会施設の移設を考えていた万寿寺が、巡察師ヴェリナーノが都から戻って来る時期にあわせた天正9年10月頃の「臼杵の教会の礎石が置かれた同じ週」というメモリアルな時期に炎上している。さらに、ヴェリナーノは天正8年(1580)10月に「府内」に学院を建てる際、従来の土地に対し「同所の我等の土地は気に入らないので、我等は移転することを切に希望し」と記述しており¹⁾、キリシタン達にとって「万寿寺は、その市(府内)の最良の場所にあり」であった。

こうした、背景から考えると、万寿寺の炎上は、防御施設である堀を埋め立て屋敷地化するなど、万寿寺に対するキリシタン達の侵略行為の延長線上と考えられ、その中心人物こそ柴田礼能であった可能性が強い。

なお、柴田礼能は、フロイスの日本史によると島津氏が豊後国に侵入した天正14年(1586)12月、臼杵市街地での戦いで、親子共々、討ち死にをしている。

以上のように、府内町跡第34・43次調査で明らかになった礎石建物群は、古文書資料に登場する「萬寿寺西之屋敷」に該当する可能性が強い。発掘調査の成果は、「萬寿寺西之屋敷」の成立する経過を、具体的に明らかにしたことになる。また、街路に掘り込まれた廃棄土坑や堀の拡幅は、当時の「府内」の状況を示している。府内町跡第34・43次調査は、歴史的事象を伝える古文書資料を、発掘調査による考古資料の側から深めることができ、大きな成果を上げることが出来たと言える。

注(1) 松田毅一完訳『日本巡察記』東洋文庫(229) 1973年

遺物觀察表

遺物観察表 1 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)①

神田No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.	
				口径	底径	器高				
第2-6図	1	陶器	播鉢	偏前	-	(10.6)	-	SD029A		
	2	瓦質土器	焙烙鍋	在地	-	-	-	SD029B	把手	
第2-10図	1	土師質土器	火鉢	在地	-	(27.0)	-	SD026		
第2-11図	1	陶器	播鉢	偏前	-	(17.4)	-	SD031		
	2	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.2	SD032		
第2-14図	1	陶器	盃	中国	-	(8.8)	-	SD032		
	2	陶器	盃	中国	-	(11.6)	-	SD032		
	3	陶器	盃	中国	-	(11.6)	-	SD032		
第2-17図	1	京都系土師器	皿	在地	9.0	-	2.0	SD079	灯明皿	
	2	青磁	蓋	中国	(11.3)	-	-	SD066		
第2-21図	1	青磁	碗	中(鹿龍泉窯系)	(16.4)	4.8	6.3	SD066	緑滲存	
	2	青磁	碗	中国	(13.2)	5.6	5.0	SD066		
	3	青磁	碗	中(鹿龍泉窯系)	-	6.0	-	SD066		
	4	青磁	皿	中国	(11.6)	3.7	2.1	SD066	見込目は釉割き	
	5	白磁	碗	中国	-	-	-	SD066	V類	
	6	白磁	碗	中国	(13.0)	-	-	SD066		
	7	白磁	皿	中国	(11.0)	5.8	3.0	SD066	IX類	
	8	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	(12.0)	(5.6)	2.6	SD066	E群	
	9	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	(12.2)	6.7	2.9	SD066	E群	
	10	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.6	3.0	SD066	E群	
第2-22図	11	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	(11.5)	6.1	2.7	SD066	E群	
	12	白磁	皿	中国	-	-	4.2	SD066	玉取獅子	
	13	白磁	台座	中国	(13.0)	4.8	5.8	SD066	B群	
	14	青花	碗	中国(景德鎮窯)	15.0	5.4	5.8	SD066	C群 漆継ぎ	
	15	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	4.8	-	SD066	C群	
	16	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	5.4	-	SD066	C群	
	17	青花	碗	中国(景德鎮窯)	(10.6)	4.0	5.2	SD066	E群 高台内[「二年造」]	
	18	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	2.9	-	SD066	E群 高台内[「大明年造」]	
	19	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	4.6	-	SD066	E群 高台内[「大明年造」]	
	20	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	4.0	-	SD066	E群 高台内[「大明年造」]	
	21	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD066	E群	
	22	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD066	E群	
	23	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD066	E群	
	24	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SD066	E群	
第2-23図	25	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.3	5.8	2.6	SD066	E群	
	26	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(16.8)	(10.0)	3.5	SD066	B 1群	
	27	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	2.5	SD066	B 1群		
	28	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	2.4	SD066	B 1群		
	29	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(9.9)	(2.4)	2.7	SD066	C群	
	30	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	(7.4)	-	SD066	E群	
	31	青花	盤	中国(景德鎮窯)	-	(16.8)	5.8	SD066		
	32	青花	鉢	中国(景德鎮窯)	(29.4)	13.4	9.2	SD066	漆継ぎ	
	33	青花	皿	中国(漳州窯)	(12.1)	(6.2)	3.3	SD066	C群 青花皿の模倣品	
	34	青花	皿	中国(漳州窯)	(10.2)	(4.4)	2.3	SD066	C群 青花皿の模倣品	
第2-24図	35	青花	皿	中国(漳州窯)	-	(3.0)	-	SD066	C群 青花皿の模倣品	
	36	陶器	碗	朝鮮王朝	(15.0)	5.4	5.1	SD066	灰青釉陶器碗 見込みに粘土目	
	37	陶器	碗	朝鮮王朝	(9.0)	3.0	3.7	SD066	高台に砂目	
	38	陶器	皿	瀬戸美濃	(11.0)	5.9	2.8	SD066	大窯3期	
	39	陶器	皿	瀬戸美濃	-	-	2.7	SD066	大窯3期	
	40	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(8.6)	2.7	4.3	SD066	大窯3期	
	41	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(11.6)	(4.2)	5.5	SD066	大窯3期	
	42	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(12.0)	-	-	SD066	大窯3期	
	43	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(11.6)	-	-	SD066	大窯3期	
	44	陶器	天目碗	瀬戸美濃	-	-	-	SD066	大窯3期	
	45	陶器	天目碗	瀬戸美濃	(12.2)	-	-	SD066	大窯3期	
	第2-25図	46	陶器	瓶	偏前	8.4	(5.6)	11.4	SD066	
		47	陶器	瓶	偏前	-	(8.0)	-	SD066	
		48	陶器	鉢	偏前	-	-	4.6	SD066	
49		陶器	盃	偏前	(18.2)	-	-	SD066		
50		陶器	盃	偏前	(30.4)	-	-	SD066		
51		陶器	播鉢	偏前	-	-	-	SD066	中世6期	
52		陶器	播鉢	偏前	(22.2)	-	-	SD066	中世6期	
53		陶器	播鉢	偏前	(27.9)	-	-	SD066	中世6期	
54		陶器	播鉢	偏前	(28.0)	(13.2)	15.5	SD066	中世6期	
第2-26図		55	陶器	播鉢	偏前	23.5	11.0	10.7	SD066	近世1期
	56	陶器	播鉢	偏前	(30.6)	-	-	SD066	近世1期	
	57	陶器	播鉢	偏前	-	(14.0)	-	SD067	近世1期	
第2-27図	58	瓦質土器	播鉢	在地	-	-	-	SD066		
	59	瓦質土器	播鉢	在地	-	-	-	SD066		
	60	瓦質土器	播鉢	在地	-	(11.8)	-	SD066		
	61	陶器	盃	中国	-	(10.6)	-	SD066		
第2-28図	62	陶器	瓶	中国	(16.0)	-	-	SD066		
	63	陶器	瓶	中国	(19.8)	-	-	SD066		
	64	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	1.7	SD066	灯明皿	
第2-29図	65	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	2.3	SD066	灯明皿	
	66	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	1.8	SD066	灯明皿	
	67	京都系土師器	皿	在地	8.0	-	1.9	SD066	灯明皿	

遺物観察表 2 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)②

神宮No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No.	
				口径	底径	器高				
	68	京都系土師器	甗	在地	8.0	-	2.1	SD066		
	69	京都系土師器	甗	在地	8.0	-	2.1	SD066	灯明皿	
	70	京都系土師器	甗	在地	8.2	-	2.0	SD066	灯明皿	
	71	京都系土師器	甗	在地	8.1	-	2.1	SD066	灯明皿	
	72	京都系土師器	甗	在地	8.2	-	2.1	SD066		
	73	京都系土師器	甗	在地	8.1	-	2.0	SD066	灯明皿	
	74	京都系土師器	甗	在地	8.2	-	2.1	SD066	灯明皿	
	75	京都系土師器	甗	在地	8.2	-	2.3	SD066	灯明皿	
	76	京都系土師器	甗	在地	8.4	-	-	SD066		
	77	京都系土師器	甗	在地	8.4	-	1.9	SD066		
	78	京都系土師器	甗	在地	8.4	-	2.0	SD066		
	79	京都系土師器	甗	在地	8.4	-	2.4	SD066	灯明皿	
	80	京都系土師器	甗	在地	8.4	-	2.2	SD066		
	81	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.0	SD066		
	82	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	1.8	SD066		
	83	京都系土師器	甗	在地	8.8	-	2.1	SD066		
	84	京都系土師器	甗	在地	8.5	-	2.2	SD066	灯明皿	
	85	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.0	SD066	灯明皿	
	86	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.4	SD066	灯明皿	
	87	京都系土師器	甗	在地	8.5	-	2.1	SD066		
	88	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.3	SD066	灯明皿	
	89	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.1	SD066		
	90	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.0	SD066		
	91	京都系土師器	甗	在地	8.7	-	2.1	SD066		
	92	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.1	SD066		
	93	京都系土師器	甗	在地	8.6	-	2.3	SD066	灯明皿	
	94	京都系土師器	甗	在地	8.8	-	2.0	SD066	灯明皿	
	95	京都系土師器	甗	在地	8.7	-	2.0	SD066	灯明皿	
	96	京都系土師器	甗	在地	8.9	-	1.9	SD066	灯明皿	
	97	京都系土師器	甗	在地	9.0	-	2.0	SD066		
	98	京都系土師器	甗	在地	8.7	-	2.3	SD066	灯明皿	
	99	京都系土師器	甗	在地	9.0	-	2.1	SD066		
	100	京都系土師器	甗	在地	9.2	-	2.0	SD066	灯明皿	
	101	京都系土師器	甗	在地	9.1	-	2.1	SD066		
	102	京都系土師器	甗	在地	9.6	-	2.3	SD066	灯明皿	
	103	京都系土師器	甗	在地	10.4	-	2.2	SD066		
	104	京都系土師器	甗	在地	10.4	-	2.4	SD066		
	105	京都系土師器	甗	在地	10.2	-	2.3	SD066		
	106	京都系土師器	甗	在地	10.6	-	2.0	SD066		
	107	京都系土師器	甗	在地	10.6	-	2.1	SD066	灯明皿	
	108	京都系土師器	甗	在地	10.6	-	2.3	SD066		
	109	京都系土師器	甗	在地	10.7	-	2.4	SD066	灯明皿	
	110	京都系土師器	甗	在地	11.0	-	2.2	SD066	灯明皿	
	111	京都系土師器	甗	在地	11.3	-	2.5	SD066	灯明皿	
	112	京都系土師器	甗	在地	11.5	-	2.6	SD066		
	113	京都系土師器	甗	在地	11.5	-	2.4	SD066	灯明皿	
	114	京都系土師器	甗	在地	11.6	-	2.5	SD066		
	115	京都系土師器	甗	在地	11.6	-	2.4	SD066		
	116	京都系土師器	甗	在地	11.6	-	2.5	SD066	灯明皿	
	117	京都系土師器	甗	在地	11.9	-	2.7	SD066		
	118	京都系土師器	甗	在地	11.8	-	2.4	SD066		
	119	京都系土師器	甗	在地	11.8	-	2.6	SD066	灯明皿	
	120	京都系土師器	甗	在地	11.8	-	2.7	SD066	灯明皿	
	121	京都系土師器	甗	在地	11.7	-	2.7	SD066		
	122	京都系土師器	甗	在地	11.8	-	2.4	SD066		
	123	京都系土師器	甗	在地	11.7	-	2.3	SD066		
	124	京都系土師器	甗	在地	12.6	-	2.3	SD066		
	125	京都系土師器	甗	在地	12.3	-	3.0	SD066		
	126	京都系土師器	甗	在地	11.9	-	2.3	SD066	灯明皿	
	127	京都系土師器	甗	在地	11.9	-	2.8	SD066	灯明皿	
	128	京都系土師器	甗	在地	12.0	-	2.5	SD066	灯明皿	
	129	京都系土師器	甗	在地	12.9	-	2.4	SD066		
	130	京都系土師器	甗	在地	13.1	-	2.2	SD066		
	131	京都系土師器	甗	在地	12.8	-	2.7	SD066	灯明皿	
	132	京都系土師器	甗	在地	14.6	-	2.8	SD066		
	133	京都系土師器	甗	在地	17.0	-	3.2	SD066		
	134	京都系土師器	坏	在地	10.4	-	3.2	SD066		
	135	京都系土師器	坏	在地	10.6	-	3.3	SD066	灯明皿	
	136	京都系土師器	坏	在地	(10.8)	-	3.3	SD066		
	137	京都系土師器	坏	在地	11.8	-	3.5	SD066	灯明皿	
	138	在地系土師器	甗	在地	6.4	4.1	1.6	SD066	灯明皿	
	139	在地系土師器	甗	在地	7.3	5.9	1.9	SD066		
	140	在地系土師器	甗	在地	7.7	6.1	1.1	SD066		
	141	在地系土師器	甗	在地	8.4	6.6	1.4	SD066		
	142	在地系土師器	甗	在地	8.0	6.4	1.3	SD066		

遺物観察表 3 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)③

棟号No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No
				口径	底径	器高			
第2-30区	143	在地系土師器	皿	在地	8.4	6.0	1.6	SD066	
	144	在地系土師器	皿	在地	8.2	5.1	1.8	SD066	
	145	在地系土師器	皿	在地	10.9	6.2	2.5	SD066	
	146	在地系土師器	杯	在地	(11.2)	(7.5)	3.5	SD066	
	147	在地系土師器	杯	在地	11.8	8.0	3.9	SD066	
	148	在地系土師器	皿	在地	13.4	7.7	2.7	SD066	
第2-31区	149	在地系土師器	蓋	在地	5.4	-	1.9	SD066	
	150	土師質土器	香炉	在地	-	(6.8)	-	SD066	
	151	土師質土器	埴	在地	-	(8.0)	-	SD066	
	152	土師質土器	埴	在地	(21.0)	-	-	SD066	
	153	土師質土器	鍋の脚	在地	-	-	-	SD066	
	154	土師質土器	漆鉢	在地	(29.4)	-	-	SD066	
第2-32区	155	土師質土器	風巾	在地	-	(28.8)	-	SD066	
	156	土師質土器	火鉢	在地	-	(22.0)	-	SD066	
	157	土師質土器	火鉢	在地	(35.0)	-	-	SD066	
	158	土師質土器	燗台	在地	7.5	-	-	SD066	
	159	土師質土器	燗台	在地	-	6.4	-	SD066	
	160	土師質土器	燗台	在地	8.2	7.2	6.2	SD066	
第2-33区	161	土師質土器	燗台	在地	-	7.7	-	SD066	
	162	土師質土器	燗台	在地	8.0	7.0	7.0	SD066	
	163	土師質土器	燗台	在地	-	6.8	-	SD066	
	174	須恵系・高麗?	甕	在地	-	(3.8)	-	SD066	
	175	瓦質土器	埴	在地	16.0	7.5	6.0	SD066	
	176	瓦質土器	?	在地	-	(9.9)	-	SD066	
第2-34区	177	瓦質土器	壺	在地	(28.0)	-	-	SD066	
	178	瓦質土器	甕	在地	-	-	-	SD066	
	179	瓦質土器	壺	在地	-	(17.0)	-	SD066	
	180	瓦質土器	壺	在地	(15.4)	-	-	SD066	
	181	瓦質土器	羽釜	在地	-	-	-	SD066	
	182	瓦質土器	鍋	在地	(15.6)	-	-	SD066	
第2-35区	183	瓦質土器	鍋の脚	在地	-	-	-	SD066	
	184	瓦質土器	鉢	在地	(40.0)	(19.0)	(10.1)	SD066	
	185	瓦質土器	鉢	在地	(38.8)	-	(9.5)	SD066	
	186	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD066	
	187	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD066	
	188	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD066	
第2-49区	189	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD066	
	190	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD066	
	191	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SD066	
	192	瓦質土器	火鉢	在地	-	(33.0)	-	SD066	
	193	瓦質土器	火鉢	在地	-	(35.4)	-	SD066	
	1	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	SK004	
第2-51区	1	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.0	SK010	
第2-53区	1	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	-	-	-	SK014	E群
第2-58区	1	陶器	漆鉢	備前	-	(10.4)	-	SK030	
	2	在地系土師器	皿	在地	12.3	7.7	2.6	SK030	
第2-61区	1	青磁	皿	中国(龍泉窯系)	9.3	5.2	2.6	SK045	輪花皿
	2	青花	碗	中国(景徳鎮窯)	10.7	4.0	5.2	SK045	E群
	3	京都系土師器	杯	在地	10.3	5.5	3.4	SK045	
第2-62区	4	京都系土師器	杯	在地	10.6	6.6	3.6	SK045	灯明皿
	5	陶器	甕	備前	37.2	-	-	SK045	
	1	陶器	漆鉢	備前	(28.6)	(14.0)	12.8	SK049	
第2-64区	2	在地系土師器	皿	在地	7.5	6.3	1.3	SK049	
	3	京都系土師器	皿	在地	11.6	-	2.6	SK049	
	1	在地系土師器	皿	瀬戸・美濃	10.4	5.8	1.9	SK055	大宮3期
第2-66区	1	陶器	皿	在地	7.6	5.0	1.9	SK056	
	2	京都系土師器	皿	在地	8.2	-	2.2	SK056	灯明皿
	3	京都系土師器	皿	在地	(8.5)	-	2.2	SK056	灯明皿
	4	京都系土師器	杯	在地	(10.8)	-	3.2	SK056	
	5	京都系土師器	皿	在地	12.0	-	2.7	SK056	
	6	京都系土師器	皿	在地	(13.2)	-	2.3	SK056	
第2-69区	1	陶器	天目碗	瀬戸・美濃	(12.1)	-	-	SK058	大宮3期
	1	青花	皿	中国(漳州窯)	(11.4)	(4.4)	2.7	SK072	
	2	京都系土師器	皿	在地	8.3	-	2.1	SK072	灯明皿
	3	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	2.1	SK072	灯明皿
	4	京都系土師器	皿	在地	8.9	-	2.3	SK072	灯明皿
	5	京都系土師器	皿	在地	(13.1)	-	2.3	SK072	
第2-72区	7	土師質土器	火鉢	在地	-	(41.0)	-	SK072	
	1	青花	小杯	中国(景徳鎮窯)	-	-	6.5	SK075	
	1	瓦質土器	火鉢	在地	(46.0)	(42.0)	13.4	SK076	
第2-83区	1	京都系土師器	皿	在地	8.6	-	2.0	SX077	
	2	京都系土師器	皿	在地	11.8	-	2.2	SX077	灯明皿
第2-88区	1	瓦質土器	鉢	在地	(33.8)	(23.0)	10.7	SK074	
第2-92区	1	陶器	壺	タイ(メナムノイ窯)	(20.6)	-	-	SX021	
	2	陶器	甕	備前	-	-	-	SX021	

遺物観察表 4 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)④

採区No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺物名	備考	図説No.		
				口径	底径	器高					
第2-94区	1	青磁	皿	中国	(13.6)	5.6	3.6	SX022	椀花皿		
	2	陶器	蓋	中国	12.9	-	3.6	SX022			
第2-96区	1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	4.8	-	SX023	E群 異体字		
	2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(12.2)	(6.2)	2.5	SX023	B1群		
	3	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SX023	E群		
	4	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	2.1	SX023	灯明皿		
第2-97区	5	瓦質土器	鉢	在地	-	5.3	-	SX023			
	6	土師質土器	香炉	在地	(11.8)	(11.0)	4.6	SX023			
	7	瓦質土器	火消し壺	在地	(25.2)	(20.0)	25.9	SX023			
	8	土師質土器	火鉢	在地	34.1	34.7	29.5	SX023			
第2-101区	1	青花	皿	中国(漳州窯)	16.6	6.6	4.2	SX024			
	2	青花	皿	中国(漳州窯)	-	-	-	SX024			
第2-102区	3	瓦質土器	鉢	在地	(31.4)	(23.2)	10.2	SX024			
	4	陶器	搥鉢	備前	(30.2)	-	-	SX024			
	1	青磁	碗	中国(龍泉窯系)	-	(4.9)	-	SX028			
第2-104区	2	白磁	水注	中国(龍泉窯系)	-	5.1	-	SX028			
	3	白磁	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SX028	E群		
	4	青花	碗	中国(景德鎮窯)	12.2	5.1	6.4	SX028	B群		
	5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SX028	B1群		
	6	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	5.0	-	SX028	E群		
	7	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SX028	E群		
	8	青花	盤	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SX028			
	9	青花	碗	中国(漳州窯)	-	5.7	-	SX028			
	10	陶器	瓶	朝鮮王朝	(5.4)	-	-	SX028			
第2-105区	11	陶器	甕	中国	(9.2)	-	-	SX028			
	12	陶器	搥鉢	備前	20.7	10.2	10.1	SX028			
	13	陶器	搥鉢	備前	(29.8)	(13.5)	15.0	SX028			
	14	陶器	甕	備前	-	(24.2)	-	SX028			
第2-106区	15	京都系土師器	皿	在地	7.8	-	1.9	SX028	灯明皿		
	16	京都系土師器	皿	在地	(8.4)	-	2.1	SX028	灯明皿		
	17	京都系土師器	皿	在地	8.4	-	2.0	SX028	灯明皿		
	18	京都系土師器	皿	在地	8.7	-	2.2	SX028	灯明皿		
	19	京都系土師器	皿	在地	(8.7)	-	2.2	SX028	灯明皿		
	20	京都系土師器	皿	在地	(8.8)	-	1.8	SX028	灯明皿		
	21	京都系土師器	皿	在地	8.8	-	2.3	SX028	灯明皿		
	22	京都系土師器	皿	在地	(11.6)	-	2.3	SX028			
	23	京都系土師器	坏	在地	(11.4)	-	3.2	SX028			
	24	京都系土師器	坏	在地	(10.3)	-	3.5	SX028			
	25	京都系土師器	坏	在地	(10.4)	-	3.5	SX028			
	26	京都系土師器	坏	在地	11.0	-	(3.3)	SX028			
	27	京都系土師器	坏	在地	11.3	-	3.3	SX028			
	28	土師質土器	火鉢	在地	35.2	-	-	SX028			
29	土師質土器	火鉢	在地	-	(30.2)	-	SX028				
第2-107区	30	瓦質土器	鉢	在地	-	(13.7)	-	SX028			
	31	瓦質土器	火鉢	在地	-	(27.6)	-	SX028			
第2-112区	1	陶器	甕	備前	(16.0)	-	-	SX038			
第2-115区	1	京都系土師器	皿	在地	8.5	-	1.9	SX054			
	2	白磁	皿	中国南部	(13.8)	(7.4)	2.3	SX054			
第2-116区	3	白磁	皿	中国	11.5	6.4	2.6	SX054	E群		
	4	白磁	皿	中国	11.6	6.2	3.1	SX054	E群		
	5	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.8	6.6	2.6	SX054	E群 高台内「明年造」		
	6	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.2	6.6	2.8	SX054	B1群		
	7	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.0	6.3	2.6	SX054	B1群		
	8	青花	皿	中国(景德鎮窯)	11.2	-	-	SX054	B1群		
	9	青花	皿	中国(漳州窯)	(10.8)	-	-	SX054	C群青花皿の模倣品		
	10	青花	小鉢	中国(景德鎮窯)	6.4	2.6	3.5	SX054			
	11	陶器	天目碗	瀬戸美濃	12.0	-	-	SX054			
	第2-118区	1	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	3.6	-	SX009	大業3期	
		2	青花	碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	SX009	E群 高台内「明」武年造	
1		白磁	皿	中国	-	-	2.7	SX040	既取		
第2-120区	2	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(12.6)	(6.6)	2.5	SX040	B1群		
	3	青花	皿	中国(景德鎮窯)	12.6	7.0	2.9	SX040	B1群		
	1	青磁	蓋	中国	7.3	-	3.3	SX041			
第2-122区	2	青磁	鉢	中国	14.7	7.8	4.0	SX041	輪花皿		
	3	青磁	皿	中国	-	-	-	SX041			
	4	青磁	碗	中国	(13.4)	6.1	5.7	SX041			
	5	青磁	碗	中国	9.8	-	-	SX041			
	6	白磁	皿	中国	(15.1)	-	-	SX041	E群		
	7	陶器	天目碗	瀬戸美濃	-	-	-	SX041	大業3期		
	8	青花	皿	中国(景德鎮窯)	-	-	2.9	SX041	C群		
第2-123区	9	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(10.8)	6.4	1.9	SX041	E群		
	10	青花	(大)皿	中国(景德鎮窯)	(18.9)	(10.5)	4.0	SX041			
	11	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.1	5.6	1.9	SX041	E群		
	12	青花	皿	中国(景德鎮窯)	10.0	5.4	2.5	SX041	E群		
	13	青花	皿	中国(景德鎮窯)	(10.2)	(5.7)	2.0	SX041	E群		

遺物観察表 5 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑤

採回No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No.	
				口径	底径	器高				
第2-123区	14	陶器 壺	中国	-	12.4	-	SX041			
	15	陶器 瓶	中国	(8.0)	-	-	SX041			
	16	陶器 瓶	備前	(4.9)	-	-	SX041			
第2-124区	17	陶器 壺	備前	-	9.6	-	SX041			
	18	陶器 壺	備前	9.8	11.4	22.3	SX041			
	19	陶器 搦鉢	備前	(20.8)	(9.2)	10.8	SX041			
	20	陶器 搦鉢	備前	22.0	11.5	10.9	SX041			
	21	陶器 搦鉢	備前	(29.0)	(12.6)	12.9	SX041			
第2-125区	22	京都系土師器 皿	在地	7.9	-	1.9	SX041	灯明皿		
	23	土師質土器 香炉	在地	10.4	8.7	5.1	SX041		6	
	24	土師質土器 火鉢	在地	-	(29.6)	-	SX041			
第2-126区	1	在地系土師器 皿	在地	8.4	6.0	1.4	SX60			
	2	京都系土師器 皿	在地	8.6	-	2.2	SX60			
	3	京都系土師器 皿	在地	8.8	-	2.1	SX60			
第2-127区	2	陶器 瓶	備前	-	-	-	SP1028			
	3	陶器 壺	備前	(10.8)	-	-	SP1036			
	1	青磁 燗台	中国	-	-	-	-	青磁人物像燗台の類		
	2	青磁 皿	中国(景德鎮窯)	11.4	5.2	2.6	整地層	輪花皿裏白		
	3	青磁 皿	中国	(9.4)	2.6	2.8	整地層	C群		
	4	白磁 皿	中国	11.2	5.5	3.2	整地層	B類		
	5	白磁 皿	中国南部	(13.3)	(6.8)	2.6	整地層			
	6	白磁 皿	中国南部	11.1	6.0	3.0	整地層			
	7	白磁 皿	中国南部	(11.2)	(6.0)	2.9	整地層			
	8	青花 皿	中国(景德鎮窯)	-	-	2.8	整地層	B 1群		
第2-128区	9	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(9.4)	(4.4)	2.1	整地層	B 1群		
	10	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(12.6)	(7.2)	2.6	整地層	B 1群		
	11	青花 (大)皿	中国(景德鎮窯)	-	-	3.8	整地層	B 1群		
	12	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(9.9)	3.0	2.8	整地層	C群		
	13	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(6.6)	(2.9)	1.7	整地層	C群 輪花皿		
	14	青花 皿	中国(景德鎮窯)	12.2	6.9	3.0	整地層	E群 高台内「富貴長巻」		
	15	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(10.5)	(6.1)	2.5	整地層	E群		
	16	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(10.6)	(6.4)	1.9	整地層	E群		
	17	青花 皿	中国(景德鎮窯)	(9.6)	(5.2)	2.5	整地層	E群		
	18	青花 (大)皿	中国(景德鎮窯)	(14.4)	(7.0)	2.6	整地層	F群 高台内「大明」		
第2-129区	19	青花 碗	中国(景德鎮窯)	(14.2)	5.3	7.3	整地層	E群 高台内に異体字		
	20	青花 碗	中国(景德鎮窯)	(12.1)	4.8	6.0	整地層	E群 高台内「萬福收同」		
	21	青花 碗	中国(景德鎮窯)	-	-	-	整地層	E群		
	22	青花 瓶	中国(景德鎮窯)	-	-	-	整地層			
	23	青花 小坏	中国(景德鎮窯)	(6.0)	2.4	3.0	整地層			
	24	青花 小坏	中国(景德鎮窯)	(6.2)	-	-	整地層			
	25	青花 皿	中国(漳州窯)	(10.4)	4.0	2.6	整地層	C群青花皿の模倣品		
	26	青花 皿	中国(漳州窯)	(10.4)	(2.2)	2.3	整地層	C群青花皿の模倣品		
	27	青花 皿	中国(漳州窯)	(8.6)	3.9	2.2	整地層	C群青花皿の模倣品		
	28	青花 皿	中国(漳州窯)	(10.4)	(4.2)	2.8	整地層	C群青花皿の模倣品		
29	青花 皿	中国(漳州窯)	(10.0)	(3.7)	3.0	整地層	C群青花皿の模倣品			
30	青花 碗	中国(漳州窯)	-	5.0	-	整地層				
第2-130区	31	陶器 碗	朝鮮王朝	(14.1)	-	-	整地層	彫三鳥輪		
	32	陶器 天目碗	瀬戸・美濃	(12.1)	4.6	6.1	整地層	大塚3期		
	33	陶器 肥手	備前	-	-	-	整地層			
	34	陶器 肥手	備前	-	-	-	整地層			
	35	陶器 瓶	備前	3.6	-	-	整地層			
	36	陶器 瓶	備前	-	(9.6)	-	整地層			
	37	陶器 茶入れ?	備前	-	-	-	整地層			
	38	陶器 瓶	備前	-	(7.6)	-	整地層			
	39	陶器 鉢	備前	(12.2)	(8.0)	6	整地層			
	40	陶器 鉢	備前	(9.4)	-	-	整地層			
第2-131区	41	陶器 洗鉢	備前	(22.6)	(14.0)	3.9	整地層			
	42	陶器 鉢	備前	(23.6)	-	-	整地層			
	43	陶器 甕	備前	(13.0)	(12.0)	18.1	整地層			
	44	陶器 甕	備前	-	-	-	整地層			
	45	陶器 甕	備前	(25.0)	-	-	整地層			
	46	陶器 甕	備前	(23.4)	-	-	整地層			
	47	陶器 甕	備前	-	-	-	整地層			
	48	陶器 甕	備前	-	-	-	整地層			
	49	陶器 壺	信楽	(14.0)	-	-	整地層			
	50	陶器 壺	備前	-	7.8	-	整地層			
第2-132区	51	陶器 甕	備前	-	-	-	整地層			
	52	陶器 甕	備前	-	(32.0)	-	整地層			
	53	陶器 搦鉢	備前	(19.6)	(9.0)	9.4	整地層			
	54	陶器 搦鉢	備前	(21.3)	(11.8)	10.0	整地層			
	55	陶器 搦鉢	備前	(16.0)	(8.0)	6.6	整地層			
	56	陶器 搦鉢	備前	(20.0)	(9.0)	9.8	整地層			
	57	瓦質土器 搦鉢	在地	-	(12.6)	-	整地層			
	58	陶器 搦鉢	備前	(25.6)	-	-	整地層			
	第2-133区	59	陶器 搦鉢	備前	-	(12.4)	-	整地層		

遺物観察表 6 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑥

排阻No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No.	
				口径	底径	器高				
第2-130区	60	陶器	備前	-	(11.8)	-	整地層			
	61	陶器	備前	-	(13.2)	-	整地層			
	62	陶器	備前	-	12.2	-	整地層			
	63	陶器	碗	京都・大阪	-	-	整地層	軟質蓋輪陶器(黒系系)		
	64	陶器	碗	美濃	-	-	整地層	志野地		
第2-134区	65	陶器	志	中国	(10.6)	-	整地層	黒輪陶器		
	66	陶器	罎	中国	(24.8)	-	整地層			
	67	陶器	罎	中国	-	-	整地層			
	68	陶器	罎	中国	(11.6)	-	整地層			
	69	陶器	鉢	中国	-	-	整地層			
	70	華南三彩	香炉(圓)	中国	-	-	整地層			
	71	華南三彩	鉢	中国	-	-	整地層			
	72	陶器	瓶	中国?	-	-	整地層			
	73	陶器	瓶	中国?	-	-	整地層	同一個体の可能性有り		
	第2-135区	74	京都系土師器	罎	在地	7.9	-	2.3	整地層	灯明皿
75		京都系土師器	罎	在地	8.4	-	2.2	整地層	灯明皿	
76		京都系土師器	罎	在地	8.1	-	2.2	整地層	灯明皿	
77		京都系土師器	罎	在地	8.4	-	2.4	整地層	灯明皿	
78		京都系土師器	罎	在地	8.4	-	2.0	整地層		
79		京都系土師器	罎	在地	8.6	-	2.2	整地層	灯明皿	
80		京都系土師器	罎	在地	8.8	-	2.3	整地層	灯明皿	
81		京都系土師器	罎	在地	8.6	-	2.1	整地層	灯明皿	
82		京都系土師器	罎	在地	9.0	-	1.9	整地層		
83		京都系土師器	罎	在地	9.2	-	2.1	整地層	灯明皿	
84		京都系土師器	罎	在地	9.1	-	2.2	整地層	灯明皿	
85		京都系土師器	罎	在地	8.8	-	2.0	整地層	灯明皿	
86		京都系土師器	罎	在地	9.2	-	2.6	整地層		
87		京都系土師器	罎	在地	10.8	-	2.2	整地層	灯明皿	
88		京都系土師器	罎	在地	(11.0)	-	2.9	整地層		
89		京都系土師器	罎	在地	11.6	-	0.2	整地層	灯明皿	
90		京都系土師器	罎	在地	11.6	-	2.1	整地層		
91		京都系土師器	罎	在地	11.8	-	2.2	整地層		
92		京都系土師器	罎	在地	11.4	-	2.6	整地層		
93		京都系土師器	罎	在地	11.5	-	2.5	整地層	灯明皿	
94		京都系土師器	罎	在地	11.8	-	2.5	整地層		
95		京都系土師器	罎	在地	12.0	-	2.4	整地層		
96		京都系土師器	罎	在地	11.8	-	2.5	整地層		
97		京都系土師器	罎	在地	11.9	-	2.5	整地層		
98		京都系土師器	罎	在地	12.0	-	3.0	整地層		
99		京都系土師器	罎	在地	11.9	-	2.6	整地層		
100		京都系土師器	罎	在地	11.9	-	2.7	整地層		
101		京都系土師器	罎	在地	12.2	-	2.5	整地層		
102		京都系土師器	罎	在地	(12.6)	-	2.2	整地層		
103		京都系土師器	罎	在地	12.3	-	2.4	整地層		
104		京都系土師器	罎	在地	12.8	-	3.1	整地層		
105		京都系土師器	罎	在地	(12.6)	-	2.6	整地層		
106		京都系土師器	罎	在地	13.7	-	2.5	整地層		
107		京都系土師器	罎	在地	(10.3)	-	3.7	整地層		
108		京都系土師器	罎	在地	11.3	-	3.5	整地層		
109	京都系土師器	罎	在地	(11.7)	-	3.6	整地層	灯明皿		
110	在地系土師器	罎	在地	7.5	6.7	1.3	整地層			
111	在地系土師器	罎	在地	8.0	6.5	1.1	整地層			
112	在地系土師器	罎	在地	8.0	5.5	1.8	整地層			
113	在地系土師器	罎	在地	8.4	5.5	1.8	整地層			
114	在地系土師器	罎	在地	(11.8)	(7.6)	2.6	整地層			
115	在地系土師器	罎	在地	12.2	7.2	3.7	整地層			
116	土師質土器	耳皿	在地	6.5	-	2.2	整地層			
117	土師質土器	蓋	在地	4.9	-	1.6	整地層			
118	土師質土器	蓋	在地	5.3	-	1.9	整地層			
第2-136区	119	土師質土器	埴壇	在地	(5.1)	-	2.8	整地層		
	120	土師質土器	埴壇	在地	(5.0)	-	3.0	整地層		
	121	土師質土器	埴壇	在地	(6.4)	-	3.3	整地層		
	122	土師質土器	埴壇	在地	(5.6)	-	-	整地層		
	123	土師質土器	埴壇	在地	(8.0)	-	-	整地層		
	124	土師質土器	埴壇	在地	(9.8)	-	-	整地層		
	125	土師質土器	埴壇	在地	(8.2)	-	-	整地層		
	126	土師質土器	瓶	在地	-	(6.1)	-	整地層		
	127	土師質土器	壺	在地	(14.4)	-	-	整地層		
	128	土師質土器	鉢	在地	(23.9)	(15.2)	11.8	整地層		
	129	土師質土器	鉢	在地	(29.8)	(19.2)	9.9	整地層		
	130	土師質土器	脚?	在地	-	-	-	整地層		
	131	土師質土器	脚?	在地	-	-	-	整地層		
	第2-138区	158	瓦質土器	甕	在地	-	-	-	整地層	
		159	瓦質土器	甕	在地	-	-	-	整地層	
160		瓦質土器	香炉	在地	(7.8)	(7.0)	5.4	整地層		

遺物観察表 7 第34次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑦

採因No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No	
				口徑	底徑	器高				
第2-138区	161	瓦質土器	壺	在地	(15.8)	-	-	整地層		
	162	瓦質土器	片口鉢	在地	(29.4)	-	-	整地層		
	163	瓦質土器	甕	在地	(29.8)	-	-	整地層		
	164	瓦質土器	甕	在地	-	-	-	整地層		
	165	瓦質土器	浅鉢	在地	(33.0)	(22.4)	5.6	整地層		
	166	瓦質土器	浅鉢	在地	-	-	4.2	整地層		
	167	瓦質土器	火鉢	在地	(35.6)	-	-	整地層		
第2-139区	168	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	整地層		
	169	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	整地層		
	170	瓦質土器	火鉢	在地	(30.0)	-	-	整地層		
	171	瓦質土器	火鉢	在地	-	-	-	整地層		
	172	瓦質土器	火鉢	在地	(24.6)	-	-	整地層		
	173	瓦質土器	火鉢	在地	-	(14.0)	-	整地層		
	174	瓦質土器	火鉢脚	在地	-	-	-	整地層		
	175	瓦質土器	火鉢脚	在地	-	-	-	整地層		
	176	瓦質土器	火鉢脚	在地	-	-	-	整地層		
	177	瓦質土器	不明	在地	-	-	-	整地層		

遺物観察表 8 第34次調査区遺物観察表(土製品)

採因No	遺物No	品種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図説No		
					長さ	幅	孔径	厚さ						
第2-32区	164	土鍋	土師器		長さ	6.9	幅	2.0	孔径	0.7	24.5	SD066		
	165	土鍋	土師器		長さ	6.9	幅	1.9	孔径	0.7	25.1	SD066		
	166	土鍋	土師器		長さ	-	幅	1.3	孔径	0.5	7.7	SD066		
	167	土鍋	土師質		長さ	-	幅	1.0	孔径	0.4	5.1	SD066		
	168	土鍋	土師質		長さ	4.3	幅	1.0	孔径	0.4	4.0	SD066		
	169	土鍋	土師質		長さ	-	幅	1.0	孔径	0.4	3.9	SD066		
	170	土鍋	土師質		長さ	3.9	幅	1.1	孔径	0.3	4.6	SD066		
	171	土鍋	土師質		長さ	3.9	幅	1.2	孔径	0.4	5.7	SD066		
	172	土鍋	土師質		長さ	3.7	幅	1.2	孔径	0.3	4.3	SD066		
	173	円盤状加工品	土師質		長さ	2.6	短径	2.5	厚さ	0.9	6.9	SD066		
第2-64区	4	円盤状加工品	土師質		長さ	3.6	短径	3.5	厚さ	0.8	9.2	SK049		
	2	土鍋	土師質		長さ	4.8	幅	0.9	孔径	0.3	3.2	SK076		
第2-125区	25	土鍋	土師質		長さ	-	幅	2.2	孔径	0.9	22.4	SX041		
第2-127区	1	土鍋	土師質		長さ	5.3	幅	1.4	孔径	0.5	9.5	SP1028		
第2-136区	132	円盤状加工品	土師質		長さ	5.9	短径	5.8	厚さ	1.0	47.4	整地層		
	133	円盤状加工品	土師質		長さ	4.6	短径	4.5	厚さ	1.1	33.0	整地層		
	134	円盤状加工品	土師質		長さ	4.0	短径	4.0	厚さ	1.0	21.6	整地層		
	135	大型土製品	土師質		長さ	-	幅	-	高さ	-	-	整地層		
	136	土鍋	土師質		長さ	6.8	幅	2.3	孔径	0.9	37.2	整地層		
	137	土鍋	土師質		長さ	4.7	幅	2.3	孔径	0.6	23.0	整地層		
	138	土鍋	土師質		長さ	3.9	幅	2.4	孔径	0.7	22.9	整地層		
	139	土鍋	土師質		長さ	4.1	幅	1.8	孔径	0.4	14.4	整地層		
	140	土鍋	土師質		長さ	3.0	幅	1.6	孔径	0.5	18.4	整地層		
	141	土鍋	土師質		長さ	6.0	幅	1.7	孔径	0.5	16.6	整地層		
第2-137区	142	土鍋	土師質		長さ	6.2	幅	1.0	孔径	0.4	6.4	整地層		
	143	土鍋	土師質		長さ	5.7	幅	1.4	孔径	0.6	12.3	整地層		
	144	土鍋	土師質		長さ	3.6	幅	1.2	孔径	0.3	8.1	整地層		
	145	土鍋	土師質		長さ	5.5	幅	1.1	孔径	0.3	5.9	整地層		
	146	土鍋	土師質		長さ	5.3	幅	1.3	孔径	0.3	7.3	整地層		
	147	土鍋	土師質		長さ	5.2	幅	1.1	孔径	0.5	14.4	整地層		
	148	土鍋	土師質		長さ	4.9	幅	0.9	孔径	0.3	4.3	整地層		
	149	土鍋	土師質		長さ	4.9	幅	1.3	孔径	0.3	7.3	整地層		
	150	土鍋	土師質		長さ	4.5	幅	1.1	孔径	0.2	5.0	整地層		
	151	土鍋	土師質		長さ	4.4	幅	0.8	孔径	0.2	2.2	整地層		
	152	土鍋	土師質		長さ	4.4	幅	1.0	孔径	0.3	4.3	整地層		
	153	土鍋	土師質		長さ	3.9	幅	1.1	孔径	0.4	5.4	整地層		
	154	土鍋	土師質		長さ	3.8	幅	1.0	孔径	0.3	4.6	整地層		
	155	土鍋	土師質		長さ	3.7	幅	1.0	孔径	0.3	4.3	整地層		
	156	土鍋	土師質		長さ	3.8	幅	0.7	孔径	0.2	2.4	整地層		
	157	土鍋	土師質		長さ	3.6	幅	1.0	孔径	0.4	4.0	整地層		

遺物観察表 9 第34次調査区遺物観察表(木製品)①

採因No	遺物No	品種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図説No	
					長さ	幅	厚さ	孔径					
第2-36区	194	木簡(荷札)	ひのき	-	長さ	9.1	幅	2.1	厚さ	0.2	2.5	SD066	巻頭3
	195	付根の駒	ひのき	-	長さ	4.1	幅	2.3	厚さ	0.7	8.9	SD066	巻頭3
	196	木筒?	こうまき	-	長さ	12.3	幅	1.3	厚さ	0.4	4.2	SD066	巻頭3
	197	ひとがた	ひのき	頭部	長さ	13.1	幅	1.7	厚さ	1.7	25.2	SD066	巻頭3
	198	ひとがた	ひのき	頭部	長さ	4.1	幅	2.1	厚さ	2.6	14.1	SD066	巻頭3

遺物観察表10 第34次調査区遺物観察表(木製品)②

採区No.	遺物No.	品名	材質	部位			寸法(単位cm)			重量(g)	通称名	備考	図表No.
				部位	高さ	幅	厚さ	長さ	幅				
第2-36区	199	鳥?	えのき?	-	高さ 4.1	幅 2.3	厚さ 1.7	9.0	SD066			6	
	200	独楽		-	長さ 2.8	幅 1.8	-	5.0	SD066				
	201	桶	竹組	-	長さ 10.6	幅 4.1	-	-	SD066			5	
	202	桶	いすのき	-	長さ 4.0	幅 3.6	厚さ 0.9	5.2	SD066			5	
	203	漆器碗	けやき	口径	13.6	高径径	6.9	器高 6.4	SD066			5	
	204	漆器碗	しいん	口径	16.2	高径径	8.4	器高 9.3	SD066			5	
	205	漆器碗	きり	口径	(13.4)	高径径	-	器高 -	SD066				
第2-37区	206	漆器碗	くすのき材	口径	(17.4)	高径径	9.0	器高 9.0	SD066				
	207	漆器碗	龍孔材	口径	(12.4)	高径径	-	器高 -	SD066				
	208	漆器碗	くすのき?	口径	15.0	高径径	8.0	器高 8.5	SD066				
	209	漆器碗	くり?	口径	-	高径径	-	器高 -	SD066				
	210	漆器碗	けやき	口径	-	高径径	-	器高 -	SD066	二次焼熱スチッチ			
	211	漆器碗	けやき	口径	-	高径径	-	器高 -	SD066				
	212	漆器碗	ふな科	口径	-	高径径	9.2	器高 -	SD066				
第2-38区	213	漆器碗	あさだ?	口径	-	高径径	-	器高 -	SD066				
	214	叩貝?		長さ	13.5	幅 4.7	厚さ 2.8		SD066				
	215	刀の柄		長さ	(13.4)	幅 2.9	厚さ 0.8		SD066				
	216	不明木製品		長さ	(12.2)	幅 4.6	厚さ 1.1		SD066				
	217	下駄		長さ	13.0	幅 8.0	高さ 4.8		SD066			6	
	218	下駄		長さ	17.2	幅 9.3	高さ 5.8		SD066				
	219	下駄		長さ	20.1	幅 11.3	高さ 5.8		SD066				
	220	下駄		長さ	17.2	幅 9.3	高さ 5.8		SD066				
	221	しゃもじ		長さ	24.4	幅 7.3	厚さ 0.7		SD066				
	222	箸		長さ	(15.4)	径 0.4			SD066				
	223	箸		長さ	17.5	径 0.6			SD066				
	224	箸		長さ	19.8	径 0.5			SD066				
	第2-39区	225	箸		長さ	(20.7)	径 0.7			SD066			
226		箸		長さ	21.5	径 0.5			SD066				
227		箸		長さ	22.0	径 0.6			SD066				
228		箸		長さ	22.3	径 0.7			SD066				
229		箸		長さ	22.3	径 0.8			SD066				
230		箸		長さ	22.3	径 0.4			SD066				
231		箸		長さ	22.4	径 0.6			SD066				
232		箸		長さ	22.5	径 0.7			SD066				
233		箸		長さ	22.6	径 0.8			SD066				
234		箸		長さ	22.5	径 0.7			SD066	釘 2 本有り			
235		箸		長さ	23.4	径 0.6			SD066	釘 1 本所			
236		箸		長さ	24.5	径 0.7			SD066	釘穴 2 本所			
第2-40区		237	部材	用途不明	長さ	8.0	幅 2.2	厚さ 1.1		SD066			
	238	筒札?		長さ	(12.5)	幅 1.5	厚さ 0.3		SD066	ほぞ穴有り			
	239	筒札?		長さ	12.0	幅 1.0	厚さ 0.3		SD066	ほぞ有り			
	240	筒札?		長さ	13.0	幅 4.6	厚さ 0.3		SD066	ほぞ・ほぞ穴有り			
	241	建築部材	ほぞ	長さ	(4.0)	幅 0.9	径 0.9		SD066				
	242	建築部材	用途不明	長さ	9.4	幅 2.1	厚さ 1.0		SD066	一部欠損			
	243	建築部材	用途不明	長さ	(5.5)	幅 2.4	厚さ 1.0		SD066				
	244	建築部材	用途不明	長さ	(14.2)	幅 4.4	厚さ 4.4		SD066	釘穴 24 本所			
	245	部材	用途不明	長さ	32.1	幅 (4.7)	厚さ 1.4		SD066	釘穴 6 本所			
	246	筒?		長さ	25.7	幅 (6.4)	厚さ 2.5		SD066				
	247	筒札?		長さ	(10.8)	幅 4.0	厚さ 0.1		SD066				
	248	板材	用途不明	長さ	16.9	幅 8.9	厚さ 0.8		SD066				
	249	板材	用途不明	長さ	17.1	幅 3.6	厚さ 0.8		SD066				
第2-41区	250	板材	用途不明	長さ	29.0	幅 (7.7)	厚さ 0.6		SD066				
	251	杖の玉		長径	2.4	短径 2.1			SD066				
	252	杖の玉		長径	3.6	短径 3.4			SD066				
	253	杖の玉		長径	4.3	短径 3.5			SD066				
	254	杖の玉		長径	4.4	短径 3.5			SD066				
	255	杖の玉		長径	4.6	短径 3.7			SD066				
	256	杖の玉		長径	4.8	短径 4.7			SD066				
	257	杖の玉		長径	5.6	短径 5.4			SD066				
	258	杖の玉		長径	5.1	短径 4.3			SD066				
	259	杖の玉		長径	6.1	短径 5.3			SD066				
	260	杖の玉		長径	6.3	短径 6.2			SD066				
	261	杖の玉		長径	7.3	短径 6.7			SD066				
	262	杖の玉		長径	7.0	短径 5.9			SD066				
第2-42区	263	曲物底		径	8.8	厚さ 0.6			SD066				
	264	曲物底		径	8.8	厚さ 0.5			SD066				
	265	曲物底		径	14.4	厚さ 0.5			SD066				
	266	曲物底		径	(23.3)	厚さ 0.8			SD066				
	267	杭		長さ	(31.4)	幅 5.4			SD066				
	268	縄	棕櫚	毛	長さ 27.7	幅 1.2		7.4	SD066				
	269	縄	棕櫚	毛	長さ 18.4	幅 0.7		2.9	SD066				
第2-42区	270	縄	棕櫚	毛	長さ 20.3	幅 1.1		3.0	SD066				
	271	縄	棕櫚	毛	長さ 29.2	幅 1.3		7.2	SD066				
	272	網籠	竹	径	-				SD066				
第2-44区	273	網籠	竹	径	40.0				SD066			6	

遺物観察表11 第34次調査区遺物観察表(石製品)

探区No.	遺物No.	品種	材質	部位		寸法(単位cm)			重量(g)	遺構名	備考	図版No.		
第2-10区 第2-14区	3	茶臼	輝石安山岩	上臼	幅	(37.6)	厚さ	7.4	軸穴径	-	SD026			
	6	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	25.5	幅(空)	-	幅(風)	18.8	SD032			
	276	石製品	滑石	口縁	口径	-	底径	-	器高	-	SD066			
	280	硯	赤間石		長さ	5.0	幅	4.9	厚さ	4.0	34.1	SD066		
	281	砥石	天草石		長さ	(7.7)	幅	(5.8)	厚さ	1.2		SD066	両面使用	
	282	砥石			長さ	(5.6)	幅	4.3	厚さ	1.2	30.3	SD066		
	283	砥石			長さ	(6.1)	幅	6.1	厚さ	1.5	215.6	SD066		
	284	茶臼	凝灰岩	上臼	幅	20.8	厚さ	12.2	軸穴径	2.2	78.6	SD066		
	285	茶臼	凝灰岩	下臼	幅	-	厚さ	-	軸穴径	2.2	848.9	SD066		
	286	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	40.0	幅(空)	24.3	幅(風)	24.7		SD066	墨書「カ」	
第2-47区	287	五輪塔	凝灰岩	空輪	長さ	17.1	幅(空)	17.3	幅(風)	-	SD066	墨書有り(確認不能)		
	288	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	16.1	幅(空)	(15.3)	幅(風)	13.7	SD066			
	289	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	20.2	幅(空)	(19.8)	幅(風)	(18.8)	SD066			
	290	五輪塔	凝灰岩	風輪	長さ	16.7	幅(空)	-	幅(風)	17.1	SD066	墨書有り(確認不能)		
	第2-70区 第2-72区	1	茶臼		下臼	幅	(33.2)	厚さ	4.5	軸穴径	-	SK061		
		6	礬石	蛇紋岩		長さ	2.6	幅	-	厚さ	0.9	8.4	SK072	
8		手水鉢?	凝灰岩		長さ	-	幅	-	高さ	12.1		SK072		
3		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	22.3	幅(空)	16.8	幅(風)	15.3		SK077		
4		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	20.8	幅(空)	15.6	幅(風)	15.3		SK077	墨書有り(確認不能)	
5		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	21.3	幅(空)	16.9	幅(風)	16.1		SK077	墨書有り(確認不能)	
6		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	(25.0)	幅(空)	17.8	幅(風)	17.4		SK077	風輪1方に墨書有り	
7		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	(25.7)	幅(空)	18.8	幅(風)	18.8		SK077		
8		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	(22.0)	幅(空)	19.4	幅(風)	18.8		SK077		
9		五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	24.2	幅(空)	18.3	幅(風)	17.9		SK077	空風輪に墨書	
第2-84区	10	宝篋印塔	凝灰岩	相輪	長さ	(20.0)	幅	13.6			SK077			
	11	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	23.5	幅(空)	17.6	幅(風)	19.2		SK077	空風輪に墨書	
	12	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	27.7	幅(空)	20.0	幅(風)	20.6		SK077		
	13	五輪塔	凝灰岩	火輪	長さ	17.0	幅(火)	33.3			SK077			
	14	五輪塔	凝灰岩	火輪	長さ	17.4	幅(火)	35.0			SK077			
	15	五輪塔	凝灰岩	火輪	長さ	17.0	幅(火)	30.3			SK077			
	16	五輪塔	凝灰岩	火輪	長さ	15.2	幅(火)	30.5			SK077			
	17	五輪塔	凝灰岩	火輪	長さ	13.5	幅(火)	33.0			SK077			
	18	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	14.3	幅(水)	26.4			SK077			
	19	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	16.4	幅(水)	31.8			SK077			
	20	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	15.4	幅(水)	25.0			SK077			
	21	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	19.5	幅(水)	26.0			SK077			
第2-90区	22	五輪塔	凝灰岩	水輪	長さ	16.2	幅(水)	24.0			SK077			
	1	五輪塔	凝灰岩	地輪	長さ	17.0	幅	30.0			SX063			
	2	五輪塔	凝灰岩	地輪	長さ	14.0	幅	31.0			SX063			
	33	硯	赤間石		長さ	10.8	幅	-			SX028			
	34	硯	赤間石		長さ	-	幅	-			SX028	同一個体の可能性有り		
	35	砥石	天草石		長さ	-	幅	5.6	厚さ	-		SX028		
	36	茶臼		下臼	幅	(38.6)	厚さ	-	軸穴径	-		SX028		
	37	茶臼		上臼	幅	(21.0)	厚さ	4.6	軸穴径	-		SX028		
	187	礬石	蛇紋岩		長さ	1.8	幅	-	厚さ	-	10.0		整地層	古墳時代
	188	写玉	蛇紋岩		長さ	3.2	幅	1.2	厚さ	-			整地層	
第2-141区	189	硯	赤間石		長さ	-	幅	-	厚さ	-		整地層		
	190	硯	赤間石		長さ	-	幅	3.6	厚さ	7.5		整地層		
	191	硯	赤間石		長さ	-	幅	6.0	厚さ	2.0		整地層	両面使用	
	192	硯	赤間石		長さ	7.0	幅	7.0	厚さ	1.8		整地層		
	193	砥石	天草石		長さ	-	幅	4.4	厚さ	1.3		整地層		
	194	砥石	天草石		長さ	-	幅	5.5	厚さ	2.1		整地層		
	195	砥石	緑泥片岩		長さ	13.5	幅	3.4	厚さ	1.5	186.1		整地層	
	196	砥石	緑泥片岩		長さ	16.0	幅	5.2	厚さ	342.9		整地層		
	197	石製品	滑石	胴部	口径	-	底径	-	器高	-		整地層		
	198	五輪塔	凝灰岩	空風輪	長さ	28.2	幅(空)	19.8	幅(風)	19.2		整地層	風輪に墨書「カ」	
第2-142区	199	茶臼	安山岩	上臼	幅	19.0	厚さ	12.8	軸穴径	2.0		整地層		
	200	茶臼	安山岩	上臼	幅	-	厚さ	-	軸穴径	2.2		整地層		
	201	茶臼		上臼	幅	(18.4)	厚さ	18.7	軸穴径	-		整地層		
	202	白		上臼	幅	(37.4)	厚さ	10.5	軸穴径	-		整地層		
	203	白	安山岩	上臼	幅	37.0	厚さ	12.0	軸穴径	3.5		整地層		
	204	白	安山岩	上臼	幅	(30.4)	厚さ	8.4	軸穴径	2.0		整地層		
	205	白	安山岩	上臼	幅	(37.4)	厚さ	9.8	軸穴径	-		整地層		
	206	白	安山岩	上臼	幅	35.0	厚さ	13.0	軸穴径	3.0		整地層		
	207	白	安山岩	下臼	幅	37.0	厚さ	8.1	軸穴径	-		整地層		
	208	白	安山岩	下臼	幅	(27.0)	厚さ	9.0	軸穴径	-		整地層		

遺物観察表12 第34次調査区遺物観察表(ガラス製品)

探区No.	遺物No.	品種	材質	部位		寸法(単位cm)			重量(g)	遺構名	備考	図版No.
第2-45区	274	玉	ガラス		径	0.8	高さ	0.4	0.5	SD066		
第2-143区	209	玉	ガラス		径	0.6	高さ	0.5	0.3	整地層		

遺物観察表13 第34次調査区遺物観察表(金属製品)

採掘No.	遺物No.	品種	材質	部位	寸法(単位cm)				重量(g)	遺構名	備考	図版No.		
					長さ	幅	径	厚さ						
第2-45図	275	錠前	銅	-	長さ	7.4	幅	2.6	径	1.2	32.8	SD066		
	276	銅製品	銅	-	長さ	3.4	幅	1.1	径	0.2	3.6	SD066		
	277	銅造?	銅	-	長さ	9.8	-	-	径	0.2	1.4	SD066		6
第2-64図	5	鈎刀針?	鉄	-	長さ	2.9	幅	0.2	径	-	1.5	SK049		
	210	分銅	銅	-	縦	1.0	横	0.6	厚さ	0.4	1.3	整地層		6
第2-143図	211	分銅	銅	-	縦	4.5	横	3.3	厚さ	2.0	179.9	整地層		6
	212	刀子	鉄	-	長さ	(9.4)	幅	1.4	厚さ	0.2	-	整地層		6
	213	弁	鉄	-	長さ	16.6	幅	0.9	厚さ	0.3	23.9	整地層		
	214	火箸	鉄	-	長さ	-	-	-	径	0.5	-	整地層		
	215	釘	鉄	-	長さ	9.0	-	-	径	0.4	11.6	整地層		
	216	釘	鉄	-	長さ	6.5	-	-	径	0.5	4.8	整地層		
	217	釘	鉄	-	長さ	6.5	-	-	径	0.4	7.5	整地層		
	218	釘	鉄	-	長さ	8.3	-	-	径	0.5	12.3	整地層		
	219	釘	鉄	-	長さ	7.5	-	-	径	0.5	13.4	整地層		
	220	釘	鉄	-	長さ	5.3	-	-	径	0.4	6.4	整地層		
	221	釘	鉄	-	長さ	5.2	-	-	径	0.4	5.1	整地層		
	222	釘	鉄	-	長さ	7.6	-	-	径	0.5	16.0	整地層		
	223	釘	鉄	-	長さ	(4.4)	-	-	径	0.3	1.9	整地層		
	224	釘	鉄	-	長さ	5.9	-	-	径	0.3	4.7	整地層		
	225	釘	鉄	-	長さ	3.9	-	-	径	0.5	2.7	整地層		
226	釘	鉄	-	長さ	5.5	-	-	径	0.5	5.3	整地層			

遺物観察表14 第34次調査区遺物観察表(瓦)

採掘No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.		
				長さ	幅	厚さ	高さ					
第2-10図	2	軒丸瓦	瓦当	長さ	-	幅	-	厚さ	3.0	SD026		
	4	軒平瓦	瓦当	長さ	-	幅	4.6	厚さ	-	SD032		
	5	軒平瓦	瓦当	長さ	-	幅	3.7	厚さ	(1.7)	SD032		
第2-94図	3	塼		長さ	-	幅	-	厚さ	2.7	SX022		
	9	丸瓦		長さ	-	幅	14.2	厚さ	3.0	SX023		
第2-98図	10	塼		長さ	-	幅	-	厚さ	2.4	SX023		
	11	塼		長さ	-	幅	-	厚さ	3.0	SX023		
第2-107図	32	丸瓦		長さ	-	幅	13.4	厚さ	2.1	SX028		
	178	軒平瓦	瓦当	長さ	-	幅	4.5	厚さ	-	整地層		
第2-140図	179	軒平瓦	瓦当	長さ	-	幅	4.5	厚さ	-	整地層		
	180	軒平瓦	瓦当	長さ	-	幅	5.6	厚さ	-	整地層		
	181	軒丸瓦	瓦当	長さ	-	幅	-	厚さ	2.0	整地層		
	182	軒丸瓦	瓦当	長さ	-	幅	-	厚さ	2.6	整地層		
	183	平瓦		長さ	-	幅	-	厚さ	1.2	整地層		
	184	平瓦		長さ	-	幅	-	厚さ	2.5	整地層		
	185	塼		長さ	26.2	幅	-	厚さ	2.8	整地層		
	186	?		長さ	-	幅	-	高さ	(10.6)	整地層		

遺物観察表15 第34次調査区遺物観察表(銅銭)

種別No	遺物No	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(mm)	書体	遺構名	備考	図説No
第2-48区	291	皇宋通寶	1038	北宋	2.2	2.45	篆書	SD066		
	292	皇宋通寶	1038	北宋	1.7	2.45	真書	SD066	「皇」部分欠損	
	293	熙寧元寶	1068	北宋	2.8	2.40	篆書	SD066		
	294	熙寧元寶	1068	北宋	2.8	2.40	真書	SD066		
	295	淳化元寶	1174	南宋	3.7	2.40	真書	SD066	裏に「一」	
	296	咸淳元寶	1265	南宋	1.8	2.40	真書	SD066	裏に「二」	
	297	洪武通寶	1368	明	2.6	2.20	真書	SD066		
	298	永樂通寶	1408	明	3.7	2.60	真書	SD066		
	299	不明	-	-	2.9	2.45	不明	SD066	鑄で判読不能	
	第2-99区	12	熙寧元寶	1068	北宋	2.3	2.40	真書	SX023	一部欠損
第2-110区	1	景德元寶	1004	北宋	1.9	2.40	真書	SX035	一部欠損	
	227	開元通寶	621	唐	1.6	2.45	不明	整地層	鑄と変色が見られる	
第2-144区	228	開元通寶	621	唐	1.9	2.40	不明	整地層	星形孔	
	229	太平通寶	976	北宋	1.9	2.50	真書	整地層		
	230	太平通寶	976	北宋	1.6	2.40	真書	整地層	一部欠損	
	231	至道元寶	995	北宋	2.8	2.45	行書	整地層	3枚重ねの1枚	
	232	至道元寶	995	北宋	3.2	2.45	行書	整地層	3枚重ねの1枚	
	233	祥符通寶	1008	北宋	2.6	2.50	真書	整地層		
	234	祥符通寶	1008	北宋	2.3	2.50	真書	整地層	擦れて読みづらい	
	235	祥符元寶	1008	北宋	1.8	2.40	真書	整地層	一部欠損	
	236	祥符元寶	1008	北宋	2.0	2.50	行書	整地層		
	237	天禧通寶	1017	北宋	2.0	2.55	真書	整地層		
	238	天禧元寶	1023	北宋	2.9	2.40	真書	整地層	一部欠損	
	239	天聖元寶	1023	北宋	1.9	2.50	篆書	整地層		
	240	景祐元寶	1034	北宋	2.1	2.50	真書	整地層	星形孔	
	241	皇宋通寶	1038	北宋	2.2	2.55	篆書	整地層		
	242	治平元寶	1064	北宋	2.2	2.40	篆書	整地層		
	243	熙寧元寶	1068	北宋	2.0	2.35	真書	整地層		
	244	熙寧元寶	1068	北宋	2.1	2.50	真書	整地層		
	245	熙寧元寶	1068	北宋	2.8	2.30	真書	整地層		
246	熙寧元寶	1068	北宋	2.9	2.40	真書	整地層			
247	熙寧元寶	1068	北宋	3.3	2.30	真書	整地層	錆付着		
248	熙寧元寶	1068	北宋	1.8	2.30	真書	整地層			
249	熙寧元寶	1068	北宋	2.6	2.40	真書	整地層			
250	熙寧元寶	1068	北宋	1.7	2.40	篆書	整地層	一部欠損		
第2-145区	251	元豊通寶	1078	北宋	2.5	2.40	行書	整地層		
	252	元豊通寶	1078	北宋	2.2	2.45	行書	整地層		
	253	元豊通寶	1078	北宋	1.9	2.45	行書	整地層		
	254	元豊通寶	1078	北宋	2.2	2.50	篆書	整地層		
	255	元祐通寶	1086	北宋	2.5	2.40	篆書	整地層		
	256	元祐通寶	1086	北宋	2.1	2.40	篆書	整地層	擦れて読みづらい	
	257	元祐通寶	1086	北宋	2.4	2.40	篆書	整地層		
	258	元祐通寶	1086	北宋	2.5	2.40	行書	整地層		
	259	元祐通寶	1086	北宋	2.0	2.40	行書	整地層		
	260	元祐通寶	1086	北宋	1.5	2.40	行書	整地層	一部欠損	
	261	紹聖元寶	1094	北宋	2.4	2.40	行書	包含層		
	262	紹聖元寶	1094	北宋	1.5	2.30	篆書	整地層		
	263	紹聖(二)	1094	北宋	0.8	-	篆書	整地層	1/2欠損	
	264	元符通寶	1098	北宋	2.5	2.40	行書	整地層		
	265	聖宋元寶	1101	北宋	1.8	2.00	篆書	整地層	周りが削られている	
	266	大觀通寶	1107	北宋	3.0	2.55	真書	整地層		
	267	政和通寶	1111	北宋	2.0	2.45	真書	整地層		
268	宣和通寶	1119	北宋	3.2	2.50	篆書	整地層	3枚重ねの1枚		
269	洪武通寶	1368	明	2.6	2.35	真書	整地層	一部欠損		
270	洪武通寶	1368	明	1.6	2.00	真書	整地層	小平銭?		
271	洪武通寶	1368	明	2.8	2.22	真書	整地層	小平銭?		
272	永樂通寶	1408	明	1.9	2.50	真書	整地層			
273	永樂通寶	1408	明	1.9	2.50	真書	整地層	一部欠損		
274	永樂通寶	1408	明	1.5	2.55	真書	整地層	一部欠損		

遺物観察表16 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)①

採回No.	遺物No.	器種	生跡地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.	
				口径	底径	器高				
第3-7区	1	土師器	在 地	8.0	1.3	7.0	SD006			
	1	青花	環	-	-	-	SD012			
	2	青花	長頸壺	景徳鎮窯系	6.4	-	-	SD012		
	3	青花	碗	景徳鎮窯系	-	-	-	SD012		
	4	青花	碗	景徳鎮窯系	11.5	-	-	SD012		
	4	青花	碗	景徳鎮窯系	-	-	-	SD012		
	5	青花	碗	漳州窯系	-	4.4	-	SD012		
	6	青花	碗	景徳鎮窯系	-	5.4	-	SD012	見込みに魚文	
	7	青花	碗	景徳鎮窯系	-	5.2	-	SD012		
	8	青花	碗	景徳鎮窯系	-	5.2	-	SD012		
	9	青花	皿	景徳鎮窯系	-	-	-	SD012		
	10	青花	皿	漳州窯系	14.0	7.6	2.8	SD012		
	11	青花	皿	漳州窯系	-	8.4	-	SD012		
	12	青花	皿	景徳鎮窯系	12.8	6.6	3.0	SD012		
	13	青花	皿	景徳鎮窯系	-	8.6	-	SD012		
	14	青花	皿	景徳鎮窯系	-	6.0	-	SD012		
15	青磁	皿	景徳鎮窯系	12.6	6.3	3.1	SD012	大明年製		
16	青花	碗	漳州窯系	-	5.8	-	SD012			
第3-9区	1	青花	皿	漳州窯系	9.5	3.1	2.8	SD012		
	2	青花	皿	景徳鎮窯系	9.6	3.2	2.7	SD012		
	3	青花	皿	漳州窯系	-	3.6	-	SD012		
	4	青花	皿	漳州窯系	-	3.0	-	SD012		
	5	青花	皿	漳州窯系	-	3.2	-	SD012		
	6	青花	碗	景徳鎮窯系	10.3	-	-	SD012		
	7	白磁	皿	中国	11.2	5.6	3.2	SD012		
	8	白磁	皿	中国	11.6	6.5	2.7	SD012		
	9	白磁	皿	中国	15.4	-	-	SD012		
	10	青磁	碗	龍泉窯系	12.2	5.2	5.8	SD012	焼成が悪く黄褐色	
	11	青磁	碗	龍泉窯系	-	4.0	-	SD012		
	12	青磁	鉢	龍泉窯系	-	-	-	SD012		
	13	青磁	皿	龍泉窯系	-	-	-	SD012		
	14	青磁	皿	龍泉窯系	14.0	6.8	2.9	SD012	輪花皿	
	15	青磁	皿	龍泉窯系	12.0	5.9	3.1	SD012	輪花皿	
	16	青磁	皿	景徳鎮窯系	-	-	-	SD012	着紫色	
第3-10区	17	青磁	香炉	龍泉窯系	7.0	-	-	SD012		
	18	高麗青磁	瓶	朝鮮王朝	-	-	-	SD012		
	19	陶器	碗	朝鮮王朝	-	-	2.3	SD012		
	20	褐釉陶器	壺	中国	3.5	-	-	SD012	耳付き	
	21	華南三彩	水注	中国	-	-	-	SD012	銀化している	
	22	華南三彩	小皿	中国	-	5.0	-	SD012	着紫軸	
	1	軟質黒釉陶	碗	国産	-	-	-	SD012	黒茶	
	2	大口	碗	瀬戸・美濃	13.6	-	-	SD012		
	3	土師器	皿	京都系土師器	5.6	5.4	1.8	SD012	焼塩の蓋?	
	4	土師器	皿	京都系土師器	5.1	-	1.6	SD012	焼塩の蓋?	
	5	土師器	皿	京都系土師器	5.6	-	1.7	SD012	焼塩の蓋?	
	6	土師器	皿	京都系土師器	9.3	-	2.1	SD012		
	7	土師器	皿	京都系土師器	9.8	-	1.9	SD012		
	8	土師器	皿	京都系土師器	8.9	-	2.1	SD012	スス付着	
	9	土師器	皿	京都系土師器	8.8	-	2.2	SD012		
	10	土師器	皿	京都系土師器	9.0	-	1.8	SD012	スス付着	
11	土師器	皿	京都系土師器	8.0	-	2.2	SD012			
12	土師器	皿	京都系土師器	9.2	-	2.0	SD012	スス付着		
13	土師器	皿	京都系土師器	9.3	-	1.9	SD012			
14	土師器	皿	京都系土師器	9.1	-	2.1	SD012	スス付着		
15	土師器	皿	京都系土師器	9.0	-	2.2	SD012	スス付着		
16	土師器	皿	京都系土師器	9.2	-	2.2	SD012	スス付着		
17	土師器	皿	京都系土師器	9.3	-	2.0	SD012	スス付着		
第3-11区	18	土師器	皿	京都系土師器	8.8	-	2.0	SD012		
	19	土師器	皿	京都系土師器	11.2	-	-	SD012		
	20	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SD012		
	21	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SD012		
	22	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SD012		
	23	土師器	皿	京都系土師器	10.9	-	-	SD012		
	24	土師器	皿	京都系土師器	11.4	-	2.4	SD012		
	25	土師器	皿	京都系土師器	11.2	-	2.5	SD012	スス付着	
	26	土師器	皿	京都系土師器	10.2	-	1.8	SD012		
	27	土師器	皿	京都系土師器	11.5	-	2.3	SD012		
	28	土師器	皿	京都系土師器	11.4	-	2.3	SD012		
	29	土師器	皿	京都系土師器	11.4	-	2.2	SD012	スス付着	
	30	土師器	皿	京都系土師器	10.8	-	2.5	SD012	スス付着	
	31	土師器	皿	京都系土師器	10.4	-	2.4	SD012		
	32	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.5	SD012		
	33	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	2.0	SD012		
34	土師器	皿	京都系土師器	11.9	-	2.1	SD012			
35	土師器	皿	京都系土師器	12.3	-	2.5	SD012			
36	土師器	皿	京都系土師器	12.3	-	2.3	SD012			

遺物観察表17 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)②

探検No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図55No.	
				口径	底径	器高				
第3-11区	37	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	2.2	SD012	スス付着	
	38	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	2.2	SD012	スス付着	
	39	土師器	皿	京都系土師器	11.7	-	-	SD012		
	40	土師器	皿	京都系土師器	12.9	-	2.5	SD012		
	41	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	-	SD012		
	42	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	-	SD012		
	43	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	-	SD012		
	44	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	-	SD012		
	45	土師器	皿	京都系土師器	13.0	-	2.4	SD012		
	46	土師器	皿	京都系土師器	12.9	-	2.1	SD012		
	47	土師器	皿	京都系土師器	12.3	-	2.5	SD012		
	48	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	-	SD012		
	49	土師器	皿	京都系土師器	12.1	-	2.3	SD012		
	50	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.4	SD012		
	51	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.6	SD012	スス付着	
	52	土師器	皿	京都系土師器	12.1	-	2.4	SD012		
	53	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	2.6	SD012	スス付着	
	54	土師器	皿	京都系土師器	12.1	-	2.5	SD012	スス付着	
	55	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	2.1	SD012		
	56	土師器	皿	京都系土師器	12.3	-	-	SD012		
	57	土師器	皿	京都系土師器	8.3	-	2.1	SD012		
58	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	2.3	SD012			
59	土師器	皿	京都系土師器	12.5	-	2.5	SD012	スス付着		
60	土師器	皿	京都系土師器	12.5	-	-	SD012			
61	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.5	SD012			
第3-12区	1	土師器	皿	京都系土師器	13.1	-	2.4	SD012	スス付着	
	2	土師器	皿	京都系土師器	13.7	-	2.2	SD012		
	3	土師器	皿	京都系土師器	13.0	-	2.2	SD012		
	4	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	2.5	SD012		
	5	土師器	皿	京都系土師器	12.7	-	2.4	SD012		
	6	土師器	皿	京都系土師器	12.9	-	2.5	SD012		
	7	土師器	皿	京都系土師器	12.1	-	2.2	SD012		
	8	土師器	皿	京都系土師器	12.1	-	2.4	SD012		
	9	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.1	SD012		
	10	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.4	SD012		
	11	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	2.3	SD012		
	12	土師器	皿	京都系土師器	13.5	-	2.5	SD012	スス付着	
	13	土師器	皿	京都系土師器	13.2	-	2.1	SD012		
	14	土師器	皿	京都系土師器	12.5	-	2.7	SD012	スス付着	
	15	土師器	皿	京都系土師器	13.3	-	2.3	SD012		
	16	土師器	皿	京都系土師器	13.2	-	2.1	SD012		
	17	土師器	皿	京都系土師器	13.3	-	2.1	SD012		
	18	土師器	皿	京都系土師器	13.2	-	2.4	SD012		
	19	土師器	皿	京都系土師器	13.9	-	-	SD012		
	20	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.4	SD012	スス付着	
	21	土師器	皿	京都系土師器	13.0	-	2.5	SD012		
	22	土師器	皿	京都系土師器	14.4	-	2.6	SD012		
	23	土師器	皿	京都系土師器	14.7	-	2.6	SD012		
	24	土師器	皿	京都系土師器	13.8	-	2.8	SD012	スス付着	
	25	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SD012		
26	土師器	皿	京都系土師器	16.0	-	-	SD012			
27	土師器	皿	京都系土師器	15.8	-	-	SD012			
28	土師器	皿	京都系土師器	17.8	-	-	SD012			
29	土師器	皿	京都系土師器	11.3	-	-	SD012			
30	土師器	杯	京都系土師器	11.6	-	-	SD012			
31	土師器	杯	京都系土師器	11.4	-	2.8	SD012			
32	土師器	杯	京都系土師器	11.1	-	3.3	SD012			
33	土師器	杯	京都系土師器	11.3	-	3.3	SD012			
34	土師器	杯	京都系土師器	11.5	-	-	SD012			
35	土師器	杯	京都系土師器	12.8	-	-	SD012			
36	土師器	杯	京都系土師器	13.5	-	4.4	SD012			
37	土師器	杯	在壇	11.3	-	-	SD012			
38	土師器	杯	在壇	11.2	-	-	SD012			
39	土師器	杯	在壇	8.8	5.1	1.9	SD012			
40	土師器	杯	在壇	11.3	6.6	2.4	SD012			
41	土師器	杯	在壇	12.3	7.1	2.6	SD012			
第3-13区	1	土師器	杯	在壇	11.6	6.4	2.1	SD012		
	2	土師器	杯	在壇	14.4	7.0	2.8	SD012		
	3	土師器	杯	在壇	12.4	7.6	2.8	SD012		
	4	土師器	杯	在壇	11.2	6.1	2.5	SD012		
	5	土師器	皿	在壇	-	-	1.3	SD012		
	6	土師器	皿	在壇	8.4	7.2	1.0	SD012		
	7	土師器	皿	在壇	8.5	1.3	6.1	SD012		
	8	土師器	皿	在壇	8.6	7.0	1.5	SD012		
	9	土師器	皿	在壇	8.2	6.6	1.6	SD012		

遺物観察表18 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)③

押図No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No	
				口径	底径	器高				
第3-13区	10	土師器	皿	在地	8.6	7.6	1.2	SD012		
	11	土師器	皿	在地	9.0	7.4	1.4	SD015		
	12	土師器	皿	在地	9.5	8.2	1.3	SD013		
	13	土師器	杯	在地	5.7	3.6	1.5	SD012		
	14	土師器	杯	在地	5.0	3.4	1.1	SD012		
	15	土師器	杯	在地	-	-	-	SD012		
	16	土師器	杯	在地	7.7	4.7	1.9	SD012	内面スチフ着	
	17	土師器	杯	在地	7.0	4.8	2.5	SD012		
	18	土師器	杯	在地	7.8	5.2	2.7	SD012		
	19	土師器	杯	在地	8.5	5.3	2.1	SD012		
	20	土師器	杯	在地	12.0	6.6	2.1	SD012		
	21	土師器	杯	在地	12.4	7.3	2.8	SD012		
	22	土師器	杯	在地	11.6	7.0	2.6	SD012		
	23	土師器	杯	在地	-	-	3.0	SD012		
	24	土師器	杯	在地	11.6	7.0	2.7	SD012		
	25	土師器	杯	在地	-	6.5	-	SD012		
	26	土師器	杯	在地	-	8.1	-	SD012		
	27	土師器	杯	在地	-	4.6	-	SD012		
	28	土師器	杯	在地	-	4.0	-	SD012		
	29	土師器	杯	京師系土師器	6.6	-	-	SD012	ヘソ皿?	
	30	土師器	杯	吉備系	-	4.0	-	SD012	吉備系土師器	
	31	土師器	杯	吉備系	-	4.1	-	SD012	吉備系土師器	
	第3-14区	1	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		2	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		3	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		4	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		5	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		6	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		7	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		8	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
		9	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SD012	
10		陶器	楕鉢	備前焼	41.0	-	-	SD012		
11		陶器	楕鉢	備前焼	-	14.6	-	SD012	交差注目	
12		陶器	楕鉢	備前焼	-	11.8	-	SD012	交差注目	
13		陶器	楕鉢	備前焼	19.2	8.1	9.5	SD012		
14		陶器	楕鉢	備前焼	13.0	-	-	SD012		
第3-15区	1	陶器	大甕	備前焼	-	-	-	SD012	頸部の径12.5cm	
	2	陶器	壺	備前焼	-	-	-	SD012		
	3	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	SD012		
	4	陶器	大甕	備前焼	-	-	-	SD012		
	5	陶器	壺	備前焼	-	14.4	-	SD012		
	6	陶器	徳利	備前焼	-	-	-	SD012	底部にヘラ記号	
	7	陶器	徳利	備前焼	-	-	-	SD012	ヘラ記号	
	8	陶器	徳利	備前焼	-	-	-	SD012		
	9	陶器	壺?	備前焼	-	8.8	-	SD012		
	10	焼締陶器	鉢	4号	16.5	7.7	5.7	SD012		
第3-16区	11	陶器	甕	常滑焼	-	-	-	SD012		
	12	陶器	甕	常滑焼	-	-	-	SD012		
	13	陶器	壺	国内産	10.0	-	-	SD012		
	14	須恵質土器	鉢	東播系	-	-	-	SD012		
	15	須恵質土器	鉢	東播系	-	-	-	SD012		
	16	須恵質土器	鉢	東播系	-	12.0	-	SD012		
	17	須恵質土器	鉢	東播系	44.0	-	-	SD012		
	18	土師・瓦質	鉢	在地	-	-	-	SD012		
	19	土師・瓦質	鉢	在地	-	-	-	SD012		
	20	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012		
	21	土師・瓦質	鉢	在地	-	-	-	SD012		
	22	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012		
	23	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012		
	24	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012		
25	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012			
26	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012			
27	土師・瓦質	土鍋	在地	-	-	-	SD012			
第3-17区	1	瓦質土器	楕鉢	防長系	-	-	-	SD012		
	2	瓦質土器	楕鉢	防長系	41.0	-	-	SD012		
	3	瓦質土器	楕鉢	防長系	29.4	16.4	10.8	SD012		
	4	瓦質土器	楕鉢	防長系	-	-	-	SD012		
	5	瓦質土器	楕鉢	防長系	-	13.1	-	SD012		
	6	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SD012		
	7	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SD012		
	8	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SD012		
	9	瓦質土器	火鉢	国内産	42.2	-	-	SD012		
	10	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SD012	雷文スタンプ	
11	瓦質土器	火鉢	国内産	28.2	-	-	SD012	獣手スタンプ		
第3-17区	1	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SD012		

遺物観察表19 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)④

種別No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No	
				口径	底径	器高				
第3-17区	2	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012			
	3	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	雷文スタンプ		
	4	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	戴手文スタンプ		
	5	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	戴手文スタンプ		
	6	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	内頁・菊花文		
	7	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	雷文スタンプ		
	8	瓦質土器	火鉢	国内産	33.5	-	SD012			
	9	瓦質土器	火鉢	国内産	38.2	-	SD012	同心円文		
	9	瓦質土器	火鉢	国内産	-	42.0	-	SD012		
第3-18区	1	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012			
	2	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012			
	3	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	戴手文		
	4	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012			
	5	瓦質土器	火鉢	国内産	32.5	-	SD012	戴手文		
	6	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	SD012	菊花文		
	7	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	SD012			
	8	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	SD012			
	9	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	SD012	菊花文		
	10	瓦質土器	鉢	国内産	11.2	-	SD012			
	11	瓦質土器	鉢	国内産	16.8	-	SD012			
	12	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	SD012			
	13	瓦質土器	鉢	国内産	13.8	12.2	3.7	SD012		
	14	瓦質土器	甕?	国内産	-	19.0	-	SD012		
第3-39区	15	弥生土器	高坏	国内産	-	-	SD012	古墳時代		
	16	弥生土器	高坏	国内産	-	-	SD012			
	17	弥生土器	甕	在池	-	6.5	-	SD012		
	18	弥生土器	甕	在池	-	7.0	-	SD012		
	19	弥生土器	甕	在池	-	7.5	-	SD012		
	20	弥生土器	甕	在池	-	6.9	-	SD012		
	21	弥生土器	甕	在池	-	6.1	-	SD012		
	22	弥生土器	甕	在池	-	8.0	-	SD012		
	1	青花	皿	景徳鎮系	18.5	-	-	SX023		
	2	青花	皿	漳州系	10.8	4.3	2.3	SX023		
	3	青花	碗	景徳鎮系	-	5.6	-	SX023		
4	青花	碗	漳州系	-	4.6	-	SX023			
5	青磁	皿	龍泉系	11.9	-	-	SX023			
6	青磁	皿	漳州系	-	9.8	-	SX023			
7	青磁	碗	龍泉系	-	4.7	-	SX023			
8	白磁	皿	中国	12.0	6.6	3.3	SX023			
9	白磁	皿	景徳鎮系	-	9.0	-	SX023	青花の底部		
10	華南・彩	壺	中国	-	-	-	SX023			
第3-40区	11	土師器	皿	京都系土師器	8.8	-	1.9	SX023		
	12	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	-	SX023		
	13	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	-	SX023		
	14	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SX023		
	15	土師器	皿	京都系土師器	12.5	-	2.3	SX023		
	16	土師器	皿	京都系土師器	14.6	-	-	SX023		
	17	土師器	皿	京都系土師器	19.0	-	3.3	SX023		
	18	土師器	碗	京都系土師器	12.0	-	-	SX023		
	19	土師器	碗	京都系土師器	9.4	-	-	SX023		
	20	土師器	皿	在池	7.4	6.2	1.1	SX023		
	21	土師器	皿	在池	8.6	6.4	1.1	SX023		
	22	土師器	皿	在池	8.6	7.2	1.2	SX023		
	23	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SX023		
	24	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SX023		
25	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SX023			
26	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SX023			
27	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SX023			
第3-41区	1	陶器	甕	備前焼	30.0	-	-	SX023		
	2	陶器	甕	備前焼	31.1	-	-	SX023		
	3	陶器	甕	備前焼	70.0	-	-	SX023	図面は1/6	
	4	陶器	甕	備前焼	36.4	-	-	SX023		
	5	陶器	徳利	備前焼	-	9.0	-	SX023		
	6	陶器	徳利	備前焼	-	10.4	-	SX023		
	7	陶器	壺	備前焼	-	10.1	-	SX023		
	8	陶器	壺	備前焼	-	12.6	-	SX023		
	9	陶器	大甕	備前焼	-	-	-	SX023		
第3-41区	1	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	SX023		
	2	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	SX023		
	3	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	SX023		
	4	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SX023		
	5	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SX023		
	6	瓦質土器	火鉢	国内産	33.4	-	-	SX023		
	7	瓦質土器	火鉢	国内産	28.5	-	-	SX023		
	8	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SX023		
	9	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SX023		

遺物観察表20 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑤

採区No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No
				口径	底径	器高			
第3-41区	10	瓦質土器 火鉢	国内産	-	-	-		SX023	
	11	瓦質土器 火鉢	国内産	-	-	-		SX023	
	12	須恵質土器 鉢	東播磨	-	-	-		SX024	
	13	須恵質土器 鉢	東播磨	31.3	-	-		SX025	
	1	青磁 皿	龍泉窯系	24.4	-	-		SX003	
	2	青花 水注	景德鎮窯系	-	-	-		SX003	
	3	土師器 皿	京都系土師器	5.8	-	1.5		SX003	
	4	土師器 皿	京都系土師器	7.0	-	2.3		SX003	
	5	土師器 皿	京都系土師器	-	-	-		SX003	
	6	土師器 皿	京都系土師器	-	-	-		SX003	
	7	土師器 皿	京都系土師器	-	-	-		SX003	
第3-68区	8	土師器 皿	京都系土師器	-	-	-		SX003	
	9	土師器 皿	京都系土師器	8.4	-	1.8		SX003	
	10	土師器 皿	京都系土師器	9.0	-	1.9		SX003	
	11	土師器 皿	京都系土師器	9.0	-	-		SX003	
	12	土師器 皿	京都系土師器	13.0	-	2.2		SX003	
	13	土師器 皿	京都系土師器	12.8	-	2.4		SX003	
	14	土師器 皿	京都系土師器	11.8	-	2.6		SX003	
	15	土師器 皿	京都系土師器	13.4	-	-		SX003	
	16	土師器 皿	京都系土師器	12.4	-	-		SX003	
	17	土師器 皿	京都系土師器	12.2	-	-		SX003	
	18	土師器 皿	京都系土師器	15.1	-	2.3		SX003	
第3-69区	19	土師器 碗	京都系土師器	10.2	-	-		SX003	
	20	陶器 搦鉢	備前焼	-	-	-		SX003	
	21	陶器 搦鉢	備前焼	26.6	-	-		SX003	
	22	陶器 搦鉢	備前焼	-	-	-		SX003	
	23	陶器 搦鉢	備前焼	29.1	-	-		SX003	
	24	陶器 搦鉢	備前焼	29.2	13.5	12.7		SX003	
	25	陶器 搦鉢	備前焼	-	-	-		SX003	
	1	陶器 甕	備前焼	35.8	-	-		SX003	
	2	陶器 鉢	備前焼	15.6	-	-		SX003	
	3	陶器 盃	備前焼	16.4	-	-		SX003	
	第3-76区	4	瓦質土器 火鉢	国内産	-	-	-		SX003
5		瓦質土器 搦鉢	国内産	31.9	13.4	9.7		SX003	
6		瓦質土器 香炉	国内産	12.0	-	-		SX003	
12		土器 深鉢	縄文土器	12.2	-	-		SX003	
1		土師器 皿	京都系土師器	16.0	-	3.3		SK002	
2		土師器 皿	京都系土師器	16.0	-	2.9		SK002	
3		土師器 皿	京都系土師器	-	-	-		SK004	
第3-79区		2	土師器 埴埴	在地	6.8	-	3.9		SK004
		3	土師器 埴埴	在地	7.4	-	3.5		SK004
		4	土師器 埴埴	在地	10.4	-	4.8		SK004
		1	褐輪陶器 盃	中国	9.0	-	-		SK006
	2	土師器 皿	京都系土師器	7.8	-	2.3		SK006	
	3	土師器 皿	京都系土師器	10.2	-	-		SK006	
	4	土師器 坏	在地	-	6.4	-		SK006	
	5	土師器 土鍋	国内産	30.7	-	-		SK006	
	第3-85区	1	土師器 皿	在地	7.9	6.1	1.5		SK007
		2	陶器 甕	備前焼	34.1	-	-		SK008
		1	白磁 碗	中国	-	-	-		SK009
2		土師器 皿	在地	-	-	-		SK009	
3		土師器 皿	在地	-	-	-		SK009	
4		土師器 皿	在地	-	-	-		SK009	
5		土師器 皿	在地	-	-	-		SK009	
6		土師器 皿	在地	7.4	5.4	1.2		SK009	
7		土師器 皿	在地	8.0	6.4	1.0		SK009	
8		土師器 皿	在地	9.0	7.8	1.1		SK009	
第3-88区		9	土師器 皿	在地	9.0	8.0	1.0		SK009
	10	土師器 坏	在地	-	-	-		SK009	
	11	土師器 坏	在地	-	-	-		SK009	
	12	土師器 坏	在地	14.0	-	-		SK009	
	13	土師器 坏	在地	14.0	-	-		SK009	
	14	土師器 坏	在地	13.4	-	-		SK009	
	15	土師器 坏	吉備系土師器	-	5.2	-		SK009	
	1	須恵質土器 鉢	東播磨	-	-	-		SK009	
	第3-90区	1	土師器 皿	在地	7.6	6.0	1.5		SK010
		2	土師器 皿	在地	8.2	6.6	1.2		SK010
		3	土師器 皿	在地	8.3	6.8	1.0		SK010
4		土師器 坏	在地	-	-	-		SK010	
5		土師器 坏	在地	10.2	6.8	2.7		SK010	
6		土師器 坏	在地	12.0	8.0	2.9		SK010	
7		土師器 坏	在地	12.8	8.1	3.3		SK010	
8		土師器 坏	在地	11.0	8.3	3.2		SK010	
9		土師器 坏	在地	12.5	8.5	3.2		SK010	
10		土師器 坏	在地	12.5	8.5	3.5		SK010	
11		土師器 坏	在地	13.0	9.0	3.5		SK010	

遺物観察表21 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑥

神代No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No.
				口径	底径	器高			
第3-90区	12	土師器	環	在地	12.4	6.4	3.6	SK010	
	13	土師器	環	在地	12.2	9.2	3.2	SK010	
	14	土師器	環	在地	12.6	9.2	3.5	SK010	
	15	土師器	環	吉備系土師器	-	-	-	SK010	
	16	土師器	環	吉備系土師器	13.0	-	-	SK010	
	17	土師器	環	吉備系土師器	-	5.0	-	SK010	
	18	土師器	土師	国内産	-	-	-	SK010	
	19	陶器	擂鉢	備前焼	-	-	-	SK010	
	20	須恵質土器	甕	鳥山系?	-	-	-	SK010	
第3-91区	1	須恵質土器	鉢	東播系	-	-	-	SK010	
	2	須恵質土器	鉢	東播系	-	-	-	SK010	
	3	須恵質土器	鉢	東播系	27.7	-	-	SK010	
	4	須恵質土器	鉢	東播系	-	8.0	-	SK010	
第3-93区	1	青花	皿	漳州窯系	16.8	-	-	SK011	
	2	青花	皿	漳州窯系	9.9	4.2	2.1	SK011	
	3	青花	皿	漳州窯系	11.2	4.3	2.9	SK011	
	4	白磁	皿	中国	11.6	6	2.8	SK011	
	5	焼締陶器	鉢	中国	-	-	-	SK011	
	6	土師器	環	在地	-	-	-	SK011	
	7	土師器	環	白色系	-	7.2	-	SK011	
	8	土師器	皿	京都系土師器	10.4	-	-	SK011	
	9	土師器	皿	京都系土師器	10.6	-	-	SK011	
	10	土師器	皿	京都系土師器	14.4	-	-	SK011	
	11	瓦質土器	皿	国内産	10.8	7	2.0	SK011	糸切底
	12	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SK011	
	13	陶器	甕	備前焼	-	-	-	SK011	
	14	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	SK011	
第3-94区	1	青花	碗	漳州窯系	12.0	-	-	SK013	
	2	土師器	皿	京都系土師器	9.8	-	-	SK013	
	3	陶器	擂鉢	備前焼	-	-	-	SK013	
	4	瓦質土器	火鉢	国内産	42.1	-	-	SK013	
第3-99区	1	青花	碗	景徳鎮窯系	-	4.4	-	SP014	
	2	白磁	皿	中国	15.4	-	-	SP014	
	3	土師器	皿	在地	6.8	5.5	0.8	SP014	
	4	土師器	環	在地	11.2	-	-	SP014	
	5	土師器	環	在地	12.4	-	3.0	SP014	
	6	陶器	擂鉢	備前焼	-	-	-	SP014	
	7	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	SP014	
	8	瓦質土器	甕	国内産	-	-	-	SP014	耳付き
	9	須恵質土器	鉢	東播系	-	7.2	-	SP014	
	10	菅生土器	甕	在地	-	9.2	-	SP014	
第3-102区	1	青花	碗	景徳鎮窯系	11.4	-	-	SK015	赤繪
	2	青花	碗	景徳鎮窯系	11.7	-	-	SK015	
	3	青花	碗	景徳鎮窯系	-	5.3	-	SK015	
	4	青花	碗	景徳鎮窯系	-	4.1	-	SK015	
	5	青花	皿	景徳鎮窯系	18.4	-	-	SK015	
	6	青花	皿	漳州窯系	-	6.6	-	SK015	
	7	青花	皿	景徳鎮窯系	-	6.8	-	SK015	
	8	青花	皿	漳州窯系	-	6.0	-	SK015	チョコレートボトム状
	9	青花	小杯	景徳鎮窯系	-	2.4	-	SK015	
	10	青花	皿	景徳鎮窯系	10.1	6.2	2.7	SK015	
	11	青花	碗	漳州窯系	-	4.6	-	SK015	蛇の目輪割ぎ
	12	青花	皿	漳州窯系	9.2	3.8	2.8	SK015	
	13	青花	皿	漳州窯系	-	4.8	-	SK015	
	14	白磁	皿	中国	12.1	6.2	3.0	SK015	
	15	白磁	皿	中国	11.6	6	2.8	SK015	
	16	白磁	合子	中国	5.0	-	-	SK015	
	17	白磁	皿	中国	-	9.4	-	SK015	
18	土師器	皿	京都系土師器	5.9	-	1.9	SK015		
19	土師器	皿	京都系土師器	8.2	-	2.1	SK015		
20	土師器	皿	京都系土師器	9.5	-	2.7	SK015		
21	土師器	皿	京都系土師器	8.8	-	2.5	SK015		
22	土師器	皿	京都系土師器	9.2	-	2.1	SK015		
23	土師器	皿	京都系土師器	8.8	-	1.9	SK015		
24	土師器	皿	京都系土師器	8.7	-	2.1	SK015		
25	土師器	皿	京都系土師器	8.9	-	2.0	SK015		
26	土師器	皿	京都系土師器	10.4	-	2.1	SK015		
27	土師器	皿	京都系土師器	11.6	-	2.6	SK015		
28	土師器	皿	京都系土師器	11.2	-	-	SK015		
29	土師器	皿	京都系土師器	8.4	-	2.2	SK015		
30	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	2.3	SK015		
31	土師器	皿	京都系土師器	11.6	-	2.6	SK015		
32	土師器	碗	京都系土師器	11.8	-	2.8	SK015		
33	土師器	碗	京都系土師器	12.1	-	3.0	SK015		
34	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.5	SK015		

遺物観察表22 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑦

採掘No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No
				口径	底径	器高			
第3-103区	1	土師器	皿	京都系土師器	13.2	-	2.6	SK015	
	2	土師器	皿	京都系土師器	12.3	-	2.6	SK015	
	3	土師器	椀	京都系土師器	7.5	-	2.7	SK015	
	4	土師器	椀	京都系土師器	9.5	-	2.7	SK015	
	5	土師器	椀	京都系土師器	11.2	-	-	SK015	
	6	土師器	椀	京都系土師器	11.2	-	3.1	SK015	
	7	土師器	椀	京都系土師器	12.4	-	3.2	SK015	
	8	土師器	皿	在地	9.8	8.5	1.4	SK015	
	9	陶器	壺	備前焼	-	-	-	SK015	
	10	陶器	皿	備前焼	24.4	10.8	4.6	SK015	
	11	陶器	大甕	備前焼	-	-	-	SK015	
	12	瓦質土器	風がの脚	国内産	-	4.8	-	SK015	風がの脚
	13	瓦質土器	楕鉢	国内産	21.2	9.8	9.4	SK015	
	14	須恵質土器	鉢	東播磨系	-	-	-	SK015	
	15	土師器	土鍋	国内産	-	-	-	SK015	土鍋の脚
第3-109区	4	土師器	環	在地	-	-	-	SF018	
	5	陶器	楕鉢	備前焼	-	-	-	SF018	
	6	陶器	徳利	備前焼	-	7.3	-	SF018	
	7	陶器	壺	備前焼	31.0	-	-	SF018	
	8	陶器	壺	備前焼	28.2	-	-	SF018	
	9	陶器	大甕	備前焼	-	33.0	-	SF018	
	10	瓦質土器	鉢	国内産	43.6	39.7	9.2	SF018	
	11	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	SF018	
	14	弥生土器	甕	在地	-	5.4	-	SF018	
	1	青花	皿	景徳鎮系系	18.4	-	-	SK019	SK015第3-102区 5 と 接合
	2	青花	皿	徳州系系	-	5.9	-	SK019	
	3	青花	椀	景徳鎮系系	-	6.9	-	SK019	
	4	青花	椀	景徳鎮系系	-	6.9	-	SK019	
	5	青花	注口	中国	-	-	-	SK019	タンディー
6	白磁	皿	中国	12.2	6.4	3.1	SK019		
7	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK019		
8	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	-	SK019		
9	土師器	皿	在地	7.1	6.0	1.2	SK019		
10	土師器	皿	在地	7.2	5.8	1.6	SK019		
11	土師器	環	在地	11.2	8.6	2.9	SK019		
12	土師器	環	在地	11.0	8.2	2.7	SK019		
13	土師器	環	在地	12.6	9.0	3.1	SK019		
14	土師器	環	在地	13.4	8.0	3.0	SK019		
15	土師器	環	在地	-	-	-	SK019		
16	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	SK019		
17	須恵質土器	甕	国内産	23.5	-	-	SK019		
18	土師器	土鍋	国内産	-	-	-	SK019		
第3-114区	1	青磁	碗	龍泉窯系	-	-	-	SK020	編連弁
	2	土師器	皿	在地	8.6	7	1.4	SK020	
	3	土師器	皿	在地	8.6	6.2	1.2	SK020	
	4	土師器	環	在地	12.5	7.5	2.9	SK020	
	5	土師器	皿	在地	8.0	6.6	1.6	SK020	
	6	土師器	皿	在地	8.6	6.8	1.3	SK020	
	7	土師器	皿	在地	9.0	7.6	1.1	SK020	
	8	土師器	環	在地	-	-	-	SK020	
	9	土師器	環	在地	12.6	-	-	SK020	
	10	土師器	環	在地	12.3	8.8	3.3	SK020	
	11	土師器	環	在地	-	-	-	SK020	
	12	土師器	環	在地	12.6	8.2	3.2	SK020	
	13	土師器	環	在地	-	-	-	SK020	
	14	土師器	土鍋	国内産	-	-	-	SK020	
第3-115区	1	土師器	環	在地	-	-	-	SK021	
	2	土師器	環	在地	-	-	3.1	SK021	
	3	土師器	環	在地	13.4	-	-	SK021	
	1	土師器	皿	在地	7.0	5.4	1.3	SK024	
	2	土師器	皿	在地	8.2	6	1.2	SK024	
第3-117区	3	土師器	皿	在地	8.4	7	1.2	SK024	
	4	土師器	皿	在地	8.8	7.1	1.3	SK024	
	5	土師器	皿	在地	8.5	6.7	1.3	SK024	
	6	土師器	皿	在地	7.4	6.6	1.1	SK024	
	7	土師器	皿	在地	8.6	6.8	1.2	SK024	
	8	土師器	環	在地	-	-	2.8	SK024	
	9	土師器	環	在地	12.8	-	-	SK024	
	10	土師器	環	在地	10.8	6.8	2.8	SK024	
	11	土師器	環	在地	14.4	11.6	3.4	SK024	
	12	陶器	甕	常滑焼	-	-	-	SK024	
	13	土師器	土鍋	国内産	-	-	-	SK024	
14	土師器	土鍋	国内産	29.0	-	-	SK024		
第3-118区	1	土師器	皿	在地	-	-	1.1	SK025	
	2	土師器	皿	在地	9.4	7.6	1.5	SK025	

遺物観察表23 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑧

棟号No.	遺物No.	器種		生産地	法量(単位cm)			遺物名	備考	図説No.
					口径	底径	器高			
第3-1188区	3	土師器	環	在地	-	-	3.0	SK025		
	4	土師器	環	吉備系土師器	10.6	4.6	2.5	SK025		
	5	土師器	鉢	国内産	-	-	-	SK025		
第3-1200区	1	瓦質土器	大鉢	国内産	39.0	-	-	SK026		
	2	土師器	環	在地	9.4	6.6	0.9	SK030		
第3-1228区	1	土師器	環	在地	6.4	3.9	2.0	SK030		
	2	土師器	環	在地	10.2	6.8	3.2	SK030		
	3	土師器	環	在地	11.0	7.4	3.0	SK030		
	4	土師器	環	在地	-	-	-	SK030		
	5	土師器	環	吉備系土師器	-	3.8	-	SK030		
第3-1288区	1	青花	碗	漳州窯系	19.9	-	-	SK032		
	2	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.7	SK032		
	3	土師器	皿	京都系土師器	8.6	-	2.1	SK033		
	4	土師器	皿	京都系土師器	8.2	-	2.1	SK033		
	5	土師器	皿	京都系土師器	9.1	-	2.1	SK033		
	6	土師器	皿	京都系土師器	9.4	-	2.3	SK033		
	7	土師器	皿	京都系土師器	9.0	-	-	SK033		
	8	土師器	皿	京都系土師器	8.4	-	1.9	SK033		
	9	土師器	皿	京都系土師器	8.9	-	2.3	SK033		
	10	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	3.1	SK033		
	11	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	2.4	SK033		
	12	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.5	SK033		
	13	土師器	皿	京都系土師器	14.0	-	3.0	SK033		
	14	土師器	皿	京都系土師器	13.6	-	3.1	SK033		
	15	土師器	皿	京都系土師器	16.0	-	2.8	SK033		
	16	須恵質土器	鉢	東播系	25.3	-	-	SK033		
	17	瓦質土器	鉢	国内産	37.3	-	-	SK033		
18	青花	皿	漳州窯系	-	-	-	SK034			
19	白磁	皿	中国	-	-	2.0	SK034			
20	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK034			
21	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK034			
22	土師器	皿	京都系土師器	11.4	-	2.3	SK035			
23	土師器	皿	京都系土師器	14.4	-	-	SK035			
24	土師器	皿	京都系土師器	13.2	-	2.2	SK037			
25	青磁	碗	龍泉窯系	-	5.4	-	SK039			
第3-1348区	1	青磁	碗	龍泉窯系	-	-	-	SK040		
	2	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK040		
	3	土師器	環	在地	-	-	-	SK040		
	4	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK043		
	5	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK043		
	6	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK043		
	7	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK043		
	8	土師器	環	在地	12.2	9.3	3.1	SK044		
	9	青花	碗	漳州窯系	-	5.8	-	SK046		
	10	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK046		
	11	陶器	搦鉢	備前焼	-	-	-	SK046		
	13	青花	長頸瓶	景德鎮窯系	-	-	-	SK048		
	14	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK048		
	15	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK048		
	16	土師器	皿	京都系土師器	11.2	-	2.5	SK048		
	17	土師器	皿	京都系土師器	11.5	-	-	SK048		
	18	陶器	搦鉢	備前焼	-	-	-	SK050		
19	陶器	搦鉢	備前焼	-	-	-	SK050			
第3-1358区	1	青花	碗	漳州窯系	-	-	-	SK049		
	2	青花	碗	景德鎮窯系	12.2	-	-	SK049		
	3	青花	碗	景德鎮窯系	12.5	-	-	SK049		
	4	青花	皿	漳州窯系	-	7.1	-	SK049		
	5	青花	碗	漳州窯系	-	-	-	SK049		
	6	青花	碗	漳州窯系	13.1	5.2	5.0	SK049		
	7	青花	碗	漳州窯系	-	5.6	-	SK049		
	8	青花	皿	景德鎮窯系	12.2	-	-	SK049		
	9	青白磁	皿	中国	11.8	-	-	SK049		
	10	青磁	皿	龍泉窯系	-	-	-	SK049		
	11	青磁	碗	龍泉窯系	-	-	-	SK049		
	12	天目	碗	瀬戸・美濃	11.6	-	-	SK049		
	13	天目	碗	瀬戸・美濃	8.2	-	-	SK049		
	14	天目	碗	瀬戸・美濃	11.9	-	-	SK049		
第3-1368区	1	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK049		
	2	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK049		
	3	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	SK049		
	4	土師器	皿	京都系土師器	8.6	-	1.9	SK049		
	5	土師器	皿	京都系土師器	9.1	-	2.1	SK049		
	6	土師器	皿	京都系土師器	8.9	-	2.1	SK049		
	7	土師器	皿	京都系土師器	10.1	-	-	SK049		
	8	土師器	皿	京都系土師器	8.6	-	-	SK049		
	9	土師器	皿	京都系土師器	9.0	-	2.2	SK049		

遺物観察表24 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑨

採収No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位:cm)			遺構名	備考	図取No.
				口径	底径	器高			
第3-136区	10	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	2.7	SK049	
	11	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	2.5	SK049	布目付着
	12	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	2.7	SK049	
	13	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.2	SK049	
	14	土師器	皿	京都系土師器	13.4	-	2.2	SK049	
	15	土師器	皿	京都系土師器	13.0	-	2.5	SK049	
	16	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.2	SK049	
	17	土師器	皿	京都系土師器	12.8	-	2.5	SK049	
	18	土師器	皿	京都系土師器	15.0	-	-	SK049	
	19	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	2.6	SK049	
	20	土師器	皿	京都系土師器	16.0	-	-	SK049	
	21	土師器	坏	在地	8.4	5.3	2.0	SK049	
22	陶器	攝鉢	備前焼	-	10.6	-	SK049		
第3-138区	1	青花	皿	景德鎮系系	11.5	2.8	2.7	SP1019	
	2	土師器	坏	古備系土師器	-	3.7	-	SP1005	
	3	土師器	皿	在地	8.0	7	1.2	SP1020	
	4	土師器	皿	在地	-	8.6	-	SP1022	
	5	土師器	坏	在地	8.5	6.8	1.6	SP1023	
第3-139区	1	青花	皿	景德鎮系系	14.8	-	-	SX017	
	2	青花	皿	景德鎮系系	-	7.6	-	SX017	
	3	青花	皿	景德鎮系系	10.6	6.1	2.6	SX017	
	4	青花	皿	景德鎮系系	-	9.2	-	SX017	
	5	青花	皿	景德鎮系系	12.7	-	-	SX017	
	6	青花	皿	景德鎮系系	17.2	9.3	-	SX017	
	7	青花	皿	濠州系系	10.6	-	-	SX017	
	8	青花	皿	景德鎮系系	-	9.4	-	SX017	
	9	青花	皿	景德鎮系系	-	10.0	-	SX017	
	10	土師器	皿	京都系土師器	8.5	-	-	SX017	
	11	土師器	皿	京都系土師器	11.6	-	-	SX017	
	12	土師器	皿	京都系土師器	14.4	-	-	SX017	
	13	土師器	皿	京都系土師器	11.0	-	-	SX017	
	14	瓦質土器	皿	国内産	10.4	7	1.9	SX017	
	15	瓦質土器	皿	国内産	11.0	7.2	1.6	SX017	
	16	瓦質土器	皿	国内産	12.0	8	1.8	SX017	
第3-140区	1	須恵質土器	德利	朝鮮王朝	-	10.2	-	SX017	
	2	陶器	壺	信楽焼?	-	-	-	SX017	
	3	陶器	鉢	備前焼	-	-	-	SX017	
	4	陶器	德利	備前焼	-	-	-	SX017	
	5	陶器	壺	備前焼	-	14.8	-	SX017	
	6	須恵質土器	鉢	東播系	-	-	-	SX017	
	7	陶器	壺	備前焼	-	-	-	SX017	
	8	土師器	壺	国内産	-	-	-	SX017	
	9	瓦質土器	風印	国内産	37.2	-	-	SX017	道安型
	10	瓦質土器	風印	国内産	-	-	-	SX017	
	11	瓦質土器	風印	国内産	-	7.9	-	SX017	
	12	瓦質土器	風印	国内産	-	6.2	-	SX017	
	13	瓦質土器	風印	国内産	-	-	-	SX017	
	14	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	SX017	
	15	瓦質土器	鉢	国内産	27.6	-	-	SX017	
第3-141区	1	土師器	皿	京都系土師器	9.8	-	1.8	H-63	
	2	土師器	皿	京都系土師器	9.0	-	1.9	H-63	
	3	土師器	皿	京都系土師器	9.4	-	1.8	H-63	
	4	土師器	皿	京都系土師器	9.4	-	2.2	H-63	
	5	土師器	皿	京都系土師器	1.6	-	-	H-63	
	6	土師器	皿	京都系土師器	12.2	-	-	H-63	
	7	土師器	皿	京都系土師器	14.8	-	2.8	H-63	
	8	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	2.7	H-63	
	9	土師器	坏	在地	13.4	9.2	3.0	H-63	
	10	土師器	坏	古備系土師器	-	4	-	H-63	
	11	陶器	攝鉢	備前焼	25.8	-	-	H-63	
	12	陶器	大甕	備前焼	-	-	-	H-63	
	13	陶器	長頸甗	備前焼	7.4	-	-	H-63	
	14	陶器	鉢	備前焼	-	-	-	H-63	
	15	陶器	水屋甗	備前焼	-	-	-	H-63	
	16	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-63	
	17	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-63	
	18	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-63	
	19	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-63	
第3-142区	1	青花	碗	景德鎮系系	13.2	-	-	H-63	
	2	青花	碗	景德鎮系系	12.0	-	-	H-63	
	3	青花	碗	景德鎮系系	12.6	5	6.2		
	4	青花	碗	景德鎮系系	-	-	-		見込み目魚紋
	5	青花	碗	景德鎮系系	-	4.2	-	H-63	
	6	青花	碗	景德鎮系系	-	-	-	H-65	
	7	青花	皿	景德鎮系系	11.7	6.3	2.8	H-65	

遺物観察表25 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)⑩

棟号No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図説No
				口径	底径	器高			
第3-142区	8	青花 碗	漳州窯系	-	5.5	-			
	9	青花 皿	景德鎮窯系	-	4.2	-	H-65		
	10	青花 皿	景德鎮窯系	-	-	-	H-63		
	11	青花 皿	漳州窯系	-	7.6	-	H-65		
	12	青花 壺蓋	景德鎮窯系	4.0	-	-	H-63		
	13	青花 皿	漳州窯系	-	6.6	-			
	14	青花 長頸壺	景德鎮窯系	-	7.6	-			
	15	青花 大皿	漳州窯系	-	14.4	-			
	16	白磁 小杯	中国	-	2.8	-	H-65		
	1	青磁 碗	龍泉窯系	12.4	-	-			
	2	青磁 香炉	龍泉窯系	-	-	-	H-65		
	3	青磁 梅瓶	龍泉窯系	-	-	-			
	4	青磁 碗	龍泉窯系	-	2.7	-	H-65		
	5	青磁 皿	龍泉窯系	13.8	6	3.9			
	6	青磁 皿	龍泉窯系	13.4	6.1	3.1	H-65		
	7	青磁 皿	龍泉窯系	-	-	-	H-63		
8	青磁 梅瓶	龍泉窯系	-	-	-				
9	陶器 瓶	朝鮮王朝	-	-	-	刷毛目			
10	陶器 瓶	朝鮮王朝	-	-	-	象嵌			
11	陶器 壺	朝鮮王朝	9.2	-	-	H-63			
12	華南三彩 水注蓋	中国	-	-	-				
13	陶器 皿	瀬戸・美濃	10.0	5.5	2.3	H-63			
14	黒釉陶器 壺	中国	-	13	-	H-63			
15	軟質黒釉陶 碗	国内産	-	-	-	H-63	黒塗		
16	陶器 皿	瀬戸・美濃	9.8	6.1	2.4	H-65			
17	陶器 皿	唐津	10.1	4.6	3.0	H-66			
18	陶器 皿	唐津	-	4.8	-	H-65	鉄絵		
第3-143区	1	黒釉陶器 壺	中国	-	-	-			
	2	黒釉陶器 壺	中国	-	-	-			
	3	焼締陶器 鉢	中国	-	-	-			
	4	焼締陶器 鉢	中国	-	-	-	H-65		
	5	焼締陶器 搦鉢	中国	-	-	-	I-64		
	6	陶器 徳利	朝鮮王朝	-	12	-	H-66	船徳利	
	7	陶器 碗	国内産	8.2	-	-	I-66		
	8	土師器 皿	京都系土師器	9.0	-	2.0			
	9	土師器 皿	京都系土師器	8.6	-	2.3	H-65		
	10	土師器 皿	京都系土師器	9.2	-	1.7	H-65		
	11	土師器 皿	京都系土師器	8.7	-	1.8	H-65		
	12	土師器 皿	京都系土師器	8.4	-	1.9	H-64		
	13	土師器 皿	京都系土師器	9.0	-	2.1	H-65		
	14	土師器 皿	京都系土師器	9.3	-	1.7	H-65		
	15	土師器 皿	京都系土師器	8.9	-	2.0			
	16	土師器 皿	京都系土師器	9.0	-	2.0	G-65		
	17	土師器 皿	京都系土師器	9.1	-	2.1	H-65		
	18	土師器 皿	京都系土師器	9.3	-	1.9	H-65		
	19	土師器 皿	京都系土師器	8.6	-	1.9	G-65		
	20	土師器 皿	京都系土師器	10.2	-	-	H-65		
	21	土師器 皿	京都系土師器	9.2	-	-	H-65		
	22	土師器 皿	京都系土師器	9.4	-	2.4	I-65		
	23	土師器 皿	京都系土師器	10.0	-	-	I-65		
	24	土師器 皿	京都系土師器	9.6	-	1.5	I-65		
	25	土師器 皿	京都系土師器	10.1	-	1.8	H-64		
	26	土師器 皿	京都系土師器	9.6	-	1.9	H-64		
	27	土師器 皿	京都系土師器	11.0	-	2.3	H-64		
第3-145区	1	土師器 皿	京都系土師器	11.2	-	2.0	H-65		
	2	土師器 皿	京都系土師器	10.6	-	2.4	H-65		
	3	土師器 皿	京都系土師器	11.5	-	2.1	G-64		
	4	土師器 皿	京都系土師器	11.6	-	2.5	H-64		
	5	土師器 皿	京都系土師器	12.2	-	-	H-65		
	6	土師器 皿	京都系土師器	12.8	-	3.2	H-65		
	7	土師器 皿	京都系土師器	11.6	-	-	H-64		
	8	土師器 皿	京都系土師器	12.8	-	-			
	9	土師器 皿	京都系土師器	13.0	-	2.5	H-64		
	10	土師器 皿	京都系土師器	11.4	-	-	H-64		
	11	土師器 皿	京都系土師器	11.4	-	2.4	H-64		
	12	土師器 皿	京都系土師器	10.5	-	-	H-65		
	13	土師器 皿	京都系土師器	11.4	-	2.1	H-66		
	14	土師器 皿	京都系土師器	12.0	-	2.5	H-64		
	15	土師器 皿	京都系土師器	11.8	-	2.5	H-65		
	16	土師器 皿	京都系土師器	13.0	-	2.5	G-64		
	17	土師器 皿	京都系土師器	12.4	-	2.3	H-65		
	18	土師器 皿	京都系土師器	12.2	-	2.5	H-64		
	19	土師器 皿	京都系土師器	12.0	-	1.9	H-65		
	20	土師器 皿	京都系土師器	12.1	-	2.6	H-65		
	21	土師器 皿	京都系土師器	12.0	-	3.2	H-64		

遺物観察表26 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器)①

採区No.	遺物No.	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図取No.	
				口径	底径	器高				
第3-145区	22	土師器	皿	京都系土師器	11.9	-	-	H-65		
	23	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	2.4	H-64		
	24	土師器	皿	京都系土師器	11.6	-	2.6	H-64		
	25	土師器	皿	京都系土師器	11.4	-	2.6	I-64		
	26	土師器	皿	京都系土師器	12.4	-	2.6	H-65		
	27	土師器	皿	京都系土師器	12.0	-	2.6	H-64		
	28	土師器	皿	京都系土師器	12.6	-	2.7	H-65		
	29	土師器	皿	京都系土師器	13.0	-	-	H-65		
	30	土師器	皿	京都系土師器	13.6	-	3.0	H-65		
	31	土師器	皿	京都系土師器	-	-	-	-		
	32	土師器	皿	京都系土師器	14.4	-	-	H-66		
	33	土師器	皿	京都系土師器	15.4	-	-	H-64		
	34	土師器	杯	京都系土師器	11.0	-	3.3	I-65		
	35	土師器	杯	京都系土師器	10.6	-	3.4	I-65		
	36	土師器	杯	京都系土師器	12.5	-	2.4	I-64		
	37	土師器	杯	京都系土師器	11.6	-	3.2	I-64		
	38	土師器	杯	京都系土師器	11.8	-	2.6	H-64		
	39	土師器	杯	京都系土師器	11.2	-	3.6	G-65		
	40	土師器	皿	在地	6.4	-	1.6	I-64		
	41	土師器	皿	在地	8.4	5.9	1.3	-		
	42	土師器	皿	在地	8.6	5.8	1.7	H-66		
	43	土師器	皿	在地	9.4	7.2	1.3	H-64		
	44	土師器	皿	在地	8.8	6.6	1.5	I-66		
	45	土師器	皿	在地	8.1	5.0	1.6	H-65		
	46	土師器	皿	在地	7.6	5.8	1.8	H-65		
	47	土師器	皿	在地	7.9	5.8	1.6	I-64		
	48	土師器	皿	在地	8.0	5.6	0.9	-		
	49	土師器	皿	在地	8.2	6.0	1.1	H-64		
	第3-146区	1	土師器	杯	在地	12.0	8.4	2.9	I-64	
		2	土師器	杯	在地	13.8	10	2.9	I-64	
		3	土師器	杯	在地	13.0	10.4	2.6	I-64	SP1025
		4	土師器	杯	在地	15.2	11.4	2.8	I-66	
		5	土師器	杯	在地	12.0	7.9	4.1	I-66	
		6	土師器	杯	在地	12.0	8.5	2.9	I-64	
		7	土師器	杯	在地	12.2	7.8	3.4	I-64	
		8	土師器	杯	在地	12.2	8	3.6	H-65	
		9	土師器	杯	在地	7.8	-	-	G-64	
		10	土師器	杯	在地	11.2	7.6	2.7	I-64	
		11	土師器	杯	吉備系土師器	-	4.4	-	I-64	
		12	土師器	杯	吉備系土師器	-	4.2	-	H-66	
13		陶器	擂鉢	備前焼	-	-	-	H-65		
14	陶器	擂鉢	備前焼	26.4	-	-	H-64			
15	陶器	擂鉢	備前焼	-	-	-	G-64			
16	陶器	擂鉢	備前焼	29.0	-	-	G-65			
17	陶器	擂鉢	備前焼	27.8	-	-	H-65			
18	陶器	擂鉢	備前焼	-	14.2	-	H-65			
第3-147区	1	陶器	壺	備前焼	-	-	H-65			
	2	陶器	壺	備前焼	-	-	H-65			
	3	陶器	壺	備前焼	-	-	H-64・65			
	4	陶器	大甕	備前焼	-	-	G-65			
	5	陶器	大甕	備前焼	-	15.2	-	H-64		
	6	陶器	大甕	備前焼	-	-	H-63	記号		
	7	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-			
	8	陶器	鉢	備前焼	-	-	-			
	9	陶器	鉢	備前焼	-	12.9	-	-		
	10	陶器	徳利	備前焼	6.5	-	-	H-65		
	11	陶器	鉢	備前焼	23.2	-	-	I-64		
	12	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	H-65		
	13	陶器	水屋甕	備前焼	-	-	-	I-66		
	14	陶器	甕	常滑焼	-	-	-	H-64		
	15	陶器	甕	常滑焼	-	-	-	-		
16	陶器	鉢	信楽焼?	-	9.2	-	H-65			
17	陶器	壺	備前焼	-	-	-	H-65			
18	焼締陶器	鉢	国内産	-	-	-	H-65			
19	須恵質土器	鉢	東播系	-	-	-	H-66			
20	須恵質土器	鉢	東播系	24.5	-	-	-			
21	焼締陶器	鉢	国内産	-	-	-	H-65			
22	土師器	甕	国内産	-	-	-	-			
23	須恵質土器	徳利	備前焼	-	-	-	H-65			
第3-148区	1	瓦質土器	蓋	国内産	6.2	-	-	I-64		
	2	瓦質土器	碗	国内産	15.5	-	-	I-64		
	3	瓦質土器	蓋	国内産	12.6	-	-	H-65		
	4	瓦質土器	蓋	国内産	24.8	-	-	H-64		
	5	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-65		
	6	瓦質土器	風炉	国内産	6.4	-	-	H-65		

遺物観察表27 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑫

神区No	遺物No	器種		生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No	
					口径	底径	器高				
第3-148区	7	瓦質土器	香印	国内産	-	-	-	H-65			
	8	瓦質土器	香印	国内産	9.8	-	-	H-65			
	9	瓦質土器	捺鉢	国内産	-	-	-	H-65			
	10	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-64			
	11	瓦質土器	鉢	国内産	-	10.5	-	H-64			
	12	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-65			
	13	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-				
	14	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-				
	15	瓦質土器	鉢	国内産	29.5	-	-	H-64			
	16	瓦質土器	鉢	国内産	32.1	22.1	10.9	1-64			
	17	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	G-64			
	18	瓦質土器	鉢	国内産	27.9	-	-	H-65			
	19	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-				
	20	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-				
	21	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-65			
	22	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	1-65			
	第3-149区	1	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	H-65		
		2	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-			
		3	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	G-64		
		4	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	1-66		
		5	瓦質土器	火鉢	国内産	23.0	-	-	H-64		
		6	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	H-64		

遺物観察表28 第43次調査区遺物観察表(土製品)①

神区No	遺物No	品種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No	
				最大径	長さ	幅	厚さ				
第3-19区	1	燗台	上面径	-	底径	6.7	器高	-	SD012		
	2	燗台	上面径	6.6	底径	6.0	器高	4.6	SD012		
	3	燗台	上面径	-	底径	5.9	器高	-	SD012		
	4	燗台	上面径	-	底径	8.4	器高	-	SD012		
	5	燗台	上面径	8.7	底径	8.3	器高	7.0	SD012		
	6	燗台	上面径	-	底径	7.2	器高	-	SD012		
	7	燗台	上面径	-	底径	7.3	器高	-	SD012		
	8	土鍋		-	-	-	-	-	SD012		
	9	土器片加工		直径	3.0	厚さ	0.3	-	SD012		
	10	土鍋		最大径	0.9	長さ	4.9	重量	3.1g	SD012	
	11	土鍋		最大径	1.1	長さ	5.2	重量	5.1g	SD012	
	12	土鍋		最大径	1.1	長さ	-	重量	-	SD012	
	13	土鍋		最大径	1.3	長さ	-	重量	-	SD012	
	14	土鍋		最大径	0.9	長さ	-	重量	-	SD012	
	15	土鍋		最大径	1.5	長さ	5.1	重量	10.5g	SD012	
	16	土鍋		最大径	2.2	長さ	4.1	重量	17.7g	SD012	
	17	土鍋		最大径	3.0	長さ	3.9	重量	24.4g	SD012	
	18	土鍋		最大径	5.8	長さ	6.0	重量	158.7g	SD012	
第3-42区	1	土鍋	最大径	1.2	長さ	-	重量	6.8g	SX023		
	2	土鍋	最大径	1.2	長さ	-	重量	5.4g	SX023		
	3	燗台	上面径	-	底径	7.1	器高	-	SX023		
第3-69区	7	燗台	上面径	-	底径	3.7	器高	-	SX003		
	8	燗台	上面径	-	底径	6.6	器高	6.4	SX003		
	9	土鍋	最大径	1.4	長さ	4.0	重量	7.8g	SX003		
第3-70区	10	土鍋	最大径	2.5	長さ	3.8	重量	21.0g	SX003		
	11	土器片加工	最大径	3.4	-	-	重量	17.5g	SX003		
	1	土器片加工	長さ	5.0	幅	3.1	厚さ	0.3	SX003		
第3-79区	5	フイゴ	羽口	長さ	-	最大径	最小径	-	SK004		
	6	フイゴ	羽口	長さ	8.1	最大径	最小径	3.7	SK004		
第3-88区	16	土鍋	最大径	-	長さ	5.3	重量	-	SK009		
	5	土鍋	最大径	3.4	長さ	0.7	重量	1.8	SK010		
第3-91区	15	風切道具?	数瓦板	最大径	長さ	長さ	厚さ	0.5	SK011		
	16	土鍋	最大径	5.4	長さ	2.7	重量	3.8	SK011		
第3-99区	11	土鍋	最大径	0.9	長さ	4.5	重量	2.8	SK014		
	16	土鍋	最大径	0.7	長さ	4.9	重量	2.3g	SK015		
	17	土鍋	最大径	0.9	長さ	4.5	重量	2.9g	SK015		
	18	土鍋	最大径	1.0	長さ	5.0	重量	6.9g	SK015		
	19	土鍋	最大径	1.3	長さ	4.9	重量	6.3g	SK015		
	20	土鍋	最大径	1.1	長さ	5.5	重量	7.7g	SK015		
	21	土鍋	最大径	1.2	長さ	5.4	重量	7.0g	SK015		
	22	土鍋	最大径	2.1	長さ	5.4	重量	19.9g	SK015		
	23	土鍋	最大径	2.8	長さ	4.9	重量	31.5g	SK015		
	1	土鍋	最大径	1.5	長さ	4.9	重量	8.4g	SK018		
第3-109区	2	土鍋	最大径	1.3	長さ	4.2	重量	6.7g	SK018		
	3	土鍋	最大径	1.5	長さ	4.2	重量	5.9g	SK018		
	13	燗台	上面径	8.5	底径	7.6	器高	5.8	SK018		
第3-113区	19	土鍋	最大径	1.4	長さ	5.3	重量	10.2g	SK019		

遺物観察表29 第43次調査区遺物観察表(土製品)②

押収No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)					遺構名	備考	図版No.	
				最大径	長さ	底径	器高	重量				
第3-118図	6	土罐		最大径	2.9	長さ	3.6	重量	28.0g	SK025		
	20	土罐		最大径	1.2	長さ	4.9	重量	6.7g	H-63		
	23	不明		長さ	2.4	厚さ	0.3	重量	1.2g	H-63	陶器製? 陶器製?	
第3-149図	7	燗台		上面径		底径		器高		H-64		
	8	燗台		上面径		底径		器高		H-64		
	9	紡錘車		直径	5.0	厚さ	0.9	重量	33.3g	H-64		
	10	紡錘車	羽口	直径	4.7	厚さ	1.7	重量	50.5g	H-64		
	11	フイゴ	羽口							H-66		
	13	土罐		最大径	0.8	長さ	2.9	重量	5.4g	H-65		
	14	土罐		最大径	1.2	長さ	4.2	重量	6.7g	H-65		
	15	土罐		最大径	1.1	長さ	4.1	重量	4.7g	H-64		
	16	土罐		最大径	1.6	長さ	4.6	重量	9.4g	I-65		
	17	土罐		最大径	1.0	長さ	5.4	重量	19.9g	G-64		
	18	土罐		最大径	1.4	長さ	4.5	重量	9.4g	I-65		
	19	土罐		最大径	1.2	長さ	5.4	重量	8.2g	H-64		
	20	土罐		最大径	1.2	長さ	7.1	重量	9.1g	H-66		
	21	土罐		最大径	1.3	長さ	5.2	重量	11.2g	I-64		
	22	土罐		最大径	1.6	長さ	5.3	重量	12.7g	H-64		
	23	土罐		最大径	1.6	長さ	4.2	重量	12.4g	H-65		
	24	土罐		最大径	2.0	長さ	6.1	重量	19.2g			
25	土罐		最大径	1.7	長さ	3.8	重量	10.4g	I-64			
26	土罐		最大径	2.2	長さ	4.6	重量	20.7g	H-65			
27	土罐		最大径	3.2	長さ	6.5	重量	52.8g	H-64			
28	土罐		最大径	3.1	長さ	6.3	重量	41.8g	H-66			

遺物観察表30 第43次調査区遺物観察表(石製品)①

押収No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)					遺構名	石質	備考	図版No.
				最大径	長さ	底径	器高	重量				
第3-198図	19	石鍋	口縁部	幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012	滑石	
	20	石鍋	口縁部	幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012	滑石	
	21			幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		スタンプ
	22	砥石		幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		
	23	硯		幅	3.3	長さ	-	厚さ	0.9	SD012		
	24	硯		幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		
第3-288図	25	硯	池	幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		
	1	挽き臼	上臼	直径	19.5			厚さ	13.9	SD012	和泉砂岩系	茶臼
	2	挽き臼	上臼	直径	37.1			厚さ	10.6	SD012	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	9.3	SD012	安山岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	33.9			厚さ	13.9	SD012	安山岩	
第3-298図	1	挽き臼	下臼	直径	20.0	受径	-	厚さ	11.0	SD012	和泉砂岩系	茶臼
	2	挽き臼	下臼	直径	18.1	受径	36.7	厚さ	14.0	SD012	安山岩	茶臼
	3	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	11.9	SD012	凝灰岩	茶臼
	4	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	13.7	SD012	安山岩	
	5	挽き臼	上臼	直径	37.3			厚さ	10.0	SD012	安山岩	
第3-308図	1	挽き臼	上臼	直径	36.8			厚さ	10.2	SD012	安山岩	
	2	挽き臼	下臼	直径	37.3			厚さ	14.4	SD012	安山岩	
第3-428図	4	紡錘車		直径	4.9	厚さ	1.7	重量	21.7g	SX023	凝灰岩	
	5	石製容器		直径	21.3	底径	21.5	器高	15.6	SX023	凝灰岩	
	1	挽き臼	上臼	直径	20.4			厚さ	-	SX023	凝灰岩	茶臼
	2	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	-	SX023	凝灰岩	茶臼
	3	挽き臼	上臼	直径	19.5			厚さ	14.3	SX023	安山岩	茶臼
第3-448図	4	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	-	SX023	安山岩	茶臼
	5	挽き臼	上臼	直径	18.5			厚さ	12.6	SX023	安山岩	茶臼
	6	挽き臼	上臼	直径	20.1			厚さ	-	SX023	和泉砂岩系	茶臼
	7	挽き臼	下臼	直径	18.3	底径	16.4	厚さ	7.1	SX023	凝灰岩	茶臼
	8	挽き臼	下臼	直径	-	底径	27.5	受径	37.4	SX023	安山岩	茶臼
	1	挽き臼	上臼	直径	21.7			厚さ	-	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	19.1			厚さ	13.5	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	21.2			厚さ	18.9	SX023	安山岩	
第3-458図	4	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	-	SX023	安山岩	
	5	挽き臼	下臼	直径	18.1	受径	38.1	厚さ	11.7	SX023	和泉砂岩系	底径30.0cm
	1	挽き臼	下臼	直径	21.3	受径	-	厚さ	12.2	SX023	安山岩	底径25.8cm
	2	挽き臼	下臼	直径	18.1	受径	-	厚さ	-	SX023	和泉砂岩系	
	3	挽き臼	下臼	直径	19.5	受径	40.0	厚さ	-	SX023	安山岩	底径21.8cm
	4	挽き臼	下臼	直径	18.6	受径	-	厚さ	10.6	SX023	和泉砂岩系	底径28.0cm
第3-468図	5	挽き臼	下臼	直径	19.4	受径	-	厚さ	10.8	SX023	和泉砂岩系	底径30.0cm
	6	挽き臼	下臼	直径	-	受径	39.0	厚さ	-	SX023	砂岩	底径32.1cm
	1	挽き臼	下臼	直径	19.6	受径	34.0	厚さ	12.5	SX023	安山岩	底径25.6cm
	2	挽き臼	下臼	直径	20.0	受径	39.4	厚さ	12.0	SX023	凝灰岩	底径29.9cm
	3	挽き臼	下臼	直径	-	受径	-	厚さ	-	SX023	凝灰岩	
	4	挽き臼	下臼	直径	20.2	受径	41.0	厚さ	12.0	SX023	安山岩	底径35.0cm

遺物観察表27 第43次調査区遺物観察表(土器・陶磁器類)⑫

押図No	遺物No	器種	生産地	法量(単位cm)			遺構名	備考	図版No	
				口径	底径	器高				
第3-148図	7	瓦質土器	香炉	国内産	-	-	-	H-65		
	8	瓦質土器	香炉	国内産	9.8	-	-	H-65		
	9	瓦質土器	罎鉢	国内産	-	-	-	H-65		
	10	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-64		
	11	瓦質土器	鉢	国内産	-	10.5	-	H-64		
	12	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-65		
	13	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-			
	14	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-			
	15	瓦質土器	鉢	国内産	29.5	-	-	H-64		
	16	瓦質土器	鉢	国内産	32.1	22.1	10.9	I-64		
	17	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	G-64		
	18	瓦質土器	鉢	国内産	27.9	-	-	H-65		
	19	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-			
	20	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-			
	21	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	H-65		
	22	瓦質土器	鉢	国内産	-	-	-	I-65		
	第3-149図	1	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	H-65	
		2	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-		
		3	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	G-64	
		4	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	I-66	
		5	瓦質土器	火鉢	国内産	23.0	-	-	H-64	
		6	瓦質土器	火鉢	国内産	-	-	-	H-64	

遺物観察表28 第43次調査区遺物観察表(土製品)⑬

押図No	遺物No	品種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No	
				口径	底径	器高	重量				
第3-198図	1	燗台	上面径	-	底径	6.7	器高	-	SD012		
	2	燗台	上面径	6.6	底径	6.0	器高	4.6	SD012		
	3	燗台	上面径	-	底径	5.9	器高	-	SD012		
	4	燗台	上面径	-	底径	8.4	器高	-	SD012		
	5	燗台	上面径	8.7	底径	8.3	器高	7.0	SD012		
	6	燗台	上面径	-	底径	7.2	器高	-	SD012		
	7	燗台	上面径	-	底径	7.3	器高	-	SD012		
	8	土鍋	脚	-	-	-	-	-	SD012		
	9	土器片加工	直径	3.0	厚さ	0.3	-	-	SD012		
	10	土鍋	最大径	0.9	長さ	4.9	重量	3.1g	SD012		
	11	土鍋	最大径	1.1	長さ	5.2	重量	5.1g	SD012		
	12	土鍋	最大径	1.1	長さ	-	重量	-	SD012		
	13	土鍋	最大径	1.3	長さ	-	重量	-	SD012		
	14	土鍋	最大径	0.9	長さ	-	重量	-	SD012		
	15	土鍋	最大径	1.5	長さ	5.1	重量	10.5g	SD012		
	16	土鍋	最大径	2.2	長さ	4.1	重量	17.7g	SD012		
	17	土鍋	最大径	3.0	長さ	3.9	重量	24.4g	SD012		
	18	土鍋	最大径	5.8	長さ	6.0	重量	158.7g	SD012		
第3-428図	1	土鍋	最大径	1.2	長さ	-	重量	6.8g	SX025		
	2	土鍋	最大径	1.2	長さ	-	重量	5.4g	SX025		
	3	燗台	上面径	-	底径	7.1	器高	-	SX003		
第3-609図	7	燗台	上面径	-	底径	5.7	器高	-	SX003		
	8	燗台	上面径	-	底径	6.6	器高	6.4	SX003		
	9	土鍋	最大径	1.4	長さ	4.0	重量	7.8g	SX003		
	10	土鍋	最大径	2.5	長さ	3.8	重量	21.0g	SX003		
第3-704図	11	土器片加工	最大径	3.4	-	-	重量	17.5g	SX003		
	1	土器片加工	長さ	5.0	幅	3.1	厚さ	0.3	SX003		
第3-796図	5	フイゴ	羽口	長さ	-	最大径	最小径	-	SK004		
	6	フイゴ	羽口	長さ	8.1	最大径	7.6	最小径	3.7	SK004	巻頭4
第3-888図	16	土鍋	最大径	-	長さ	5.3	重量	-	SK009		
第3-911図	5	土鍋	最大径	3.4	長さ	0.7	重量	1.8	SK010		
第3-938図	15	罎伊造貝?	最大径	-	長さ	-	重量	0.5	SK011		
	16	土鍋	最大径	5.4	長さ	2.7	重量	3.8	SK011		
第3-999図	11	土鍋	最大径	0.9	長さ	4.5	重量	2.8	SK014		
	16	土鍋	最大径	0.7	長さ	4.9	重量	2.3g	SK015		
	17	土鍋	最大径	0.9	長さ	4.5	重量	2.5g	SK015		
	18	土鍋	最大径	1.0	長さ	5.0	重量	6.9g	SK015		
	19	土鍋	最大径	1.3	長さ	4.9	重量	6.3g	SK015		
	20	土鍋	最大径	1.1	長さ	5.5	重量	7.7g	SK015		
	21	土鍋	最大径	1.2	長さ	5.4	重量	7.0g	SK015		
	22	土鍋	最大径	2.1	長さ	5.4	重量	19.9g	SK015		
	23	土鍋	最大径	2.8	長さ	4.9	重量	31.5g	SK015		
	第3-1098図	1	土鍋	最大径	1.5	長さ	4.9	重量	8.4g	SK018	
		2	土鍋	最大径	1.3	長さ	4.2	重量	6.7g	SK018	
3		土鍋	最大径	1.5	長さ	4.2	重量	5.9g	SK018		
第3-1138図	13	燗台	上面径	8.5	底径	7.6	器高	5.8	SK018		
	19	土鍋	最大径	1.4	長さ	5.3	重量	10.2g	SK019		

遺物観察表29 第43次調査区遺物観察表(土製品)②

採回No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.			
				最大径	長さ	厚さ	重量						
第3-118回	6	土鐘		最大径	2.9	長さ	3.6	重量	28.0g	SK025			
	20	土鐘		最大径	1.2	長さ	4.9	重量	6.7g	H-63			
第3-141回	23	不明		長さ	2.4	厚さ	0.3	重量	1.2g	H-63	陶器製?	陶器製?	
	7	燭台		上面径		底径		器高		H-64			
	8	燭台		上面径		底径		器高					
	9	紡錘車		直径	5.0	厚さ	0.9	重量	33.3g	H-64			
	10	紡錘車	羽口	直径	4.7	厚さ	1.7	重量	50.5g	H-64			
	11	フイゴ	羽口							H-66			
	13	土鐘		最大径	0.8	長さ	2.9	重量	5.4g	H-65			
	14	土鐘		最大径	1.2	長さ	4.2	重量	6.7g	H-65			
	15	土鐘		最大径	1.1	長さ	4.1	重量	4.7g	H-64			
	16	土鐘		最大径	1.6	長さ	4.6	重量	9.4g	I-65			
	第3-149回	17	土鐘		最大径	1.0	長さ	5.4	重量	19.9g	G-64		
18		土鐘		最大径	1.4	長さ	4.5	重量	9.4g	I-65			
19		土鐘		最大径	1.2	長さ	5.4	重量	8.2g	H-64			
20		土鐘		最大径	1.2	長さ	7.1	重量	9.1g	H-66			
21		土鐘		最大径	1.3	長さ	5.2	重量	11.2g	I-64			
22		土鐘		最大径	1.6	長さ	5.3	重量	12.7g	H-64			
23		土鐘		最大径	1.6	長さ	4.2	重量	12.4g	H-65			
24		土鐘		最大径	2.0	長さ	6.1	重量	19.2g				
25		土鐘		最大径	1.7	長さ	3.8	重量	10.4g	I-64			
26		土鐘		最大径	2.2	長さ	4.6	重量	20.7g	H-65			
27		土鐘		最大径	3.2	長さ	6.5	重量	52.8g	H-64			
28		土鐘		最大径	3.1	長さ	6.3	重量	41.8g	H-66			

遺物観察表30 第43次調査区遺物観察表(石製品)①

採回No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	石質	備考	図版No.	
				幅	長さ	厚さ	重量					
第3-19回	19	石網	口縁部	幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012	滑石	
	20	石網	口縁部	幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012	滑石	
	21			幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		スタンプ
	22	紙石		幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		
	23	硯		幅	3.3	長さ	-	厚さ	0.9	SD012		
	24	硯		幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		
	25	硯	池	幅	-	長さ	-	厚さ	-	SD012		
第3-28回	1	挽き臼	上臼	直径	19.5	直径	-	厚さ	13.9	SD012	相模砂岩系	茶臼
	2	挽き臼	上臼	直径	37.1	直径	-	厚さ	10.6	SD012	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	-	直径	-	厚さ	9.3	SD012	安山岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	33.9	直径	-	厚さ	13.9	SD012	安山岩	
第3-29回	1	挽き臼	下臼	直径	20.0	受径	-	厚さ	11.0	SD012	相模砂岩系	茶臼
	2	挽き臼	下臼	直径	18.1	受径	36.7	厚さ	14.0	SD012	安山岩	茶臼
	3	挽き臼	上臼	直径	-	直径	-	厚さ	11.9	SD012	凝灰岩	茶臼
第3-30回	4	挽き臼	上臼	直径	-	直径	-	厚さ	13.7	SD012	安山岩	
	5	挽き臼	上臼	直径	37.3	直径	-	厚さ	10.0	SD012	安山岩	
	1	挽き臼	上臼	直径	36.8	直径	-	厚さ	10.2	SD012	安山岩	
	2	挽き臼	下臼	直径	37.3	直径	-	厚さ	14.4	SD012	安山岩	
	第3-42回	4	紡錘車		直径	4.9	厚さ	1.7	重量	21.7g	SX023	凝灰岩
5		石製容器		直径	21.3	底径	21.5	器高	15.6	SX023	凝灰岩	
1		挽き臼	上臼	直径	20.4	直径	-	厚さ	-	SX023	凝灰岩	茶臼
第3-44回	2	挽き臼	上臼	直径	-	直径	-	厚さ	-	SX023	凝灰岩	茶臼
	3	挽き臼	上臼	直径	19.5	直径	-	厚さ	14.3	SX023	安山岩	茶臼
	4	挽き臼	上臼	直径	-	直径	-	厚さ	-	SX023	安山岩	茶臼
	5	挽き臼	上臼	直径	18.5	直径	-	厚さ	12.6	SX023	安山岩	茶臼
	6	挽き臼	上臼	直径	20.1	直径	-	厚さ	-	SX023	相模砂岩系	茶臼
	7	挽き臼	下臼	直径	18.3	底径	16.4	厚さ	7.1	SX023	凝灰岩	茶臼
	8	挽き臼	下臼	直径	-	底径	27.5	受径	37.4	SX023	安山岩	茶臼
	1	挽き臼	上臼	直径	21.7	直径	-	厚さ	-	SX023	安山岩	
第3-45回	2	挽き臼	上臼	直径	19.1	直径	-	厚さ	13.5	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	21.2	直径	-	厚さ	18.9	SX023	凝灰岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	-	直径	-	厚さ	-	SX023	安山岩	
	5	挽き臼	下臼	直径	18.1	受径	38.1	厚さ	11.7	SX023	相模砂岩系	底径30.0cm
第3-46回	1	挽き臼	下臼	直径	21.3	受径	-	厚さ	12.2	SX023	安山岩	底径22.8cm
	2	挽き臼	下臼	直径	18.1	受径	-	厚さ	-	SX023	相模砂岩系	
	3	挽き臼	下臼	直径	19.5	受径	40.0	厚さ	-	SX023	安山岩	底径21.8cm
	4	挽き臼	下臼	直径	18.6	受径	-	厚さ	10.6	SX023	相模砂岩系	底径28.0cm
	5	挽き臼	下臼	直径	19.4	受径	-	厚さ	10.8	SX023	相模砂岩系	底径30.0cm
	6	挽き臼	下臼	直径	-	受径	39.0	厚さ	-	SX023	砂岩	底径32.1cm
第3-47回	1	挽き臼	下臼	直径	19.6	受径	34.0	厚さ	12.5	SX023	安山岩	底径25.6cm
	2	挽き臼	下臼	直径	20.0	受径	39.4	厚さ	12.0	SX023	凝灰岩	底径29.9cm
	3	挽き臼	下臼	直径	-	受径	-	厚さ	-	SX023	凝灰岩	
	4	挽き臼	下臼	直径	20.2	受径	41.0	厚さ	12.0	SX023	安山岩	底径35.0cm

遺物観察表31 第43次調査区遺物観察表(石製品)②

探検No	遺物No	品種	部位		寸法(単位cm)				遺構名	石質	備考	図説No
第3-47回	5	挽き臼	上臼	直径	31.5			厚さ	10.9	SX023	安山岩	
	6	挽き臼	上臼	直径	32.9			厚さ	8.3	SX023	安山岩	
第3-48回	1	挽き臼	上臼	直径	36.1			厚さ	12.2	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	31.8			厚さ	11.4	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	32.1			厚さ	10.4	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	38.1			厚さ	8.8	SX023	安山岩	
第3-49回	1	挽き臼	上臼	直径	32.3			厚さ	11.8	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	33.1			厚さ	11.4	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	30.1			厚さ	9.3	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	37.2			厚さ	13.7	SX023	安山岩	
第3-50回	1	挽き臼	上臼	直径	32.1			厚さ	8.9	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	32.5			厚さ	7.9	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	35.1			厚さ	10.9	SX023	凝灰岩	
第3-51回	1	挽き臼	上臼	直径	28.1			厚さ	10.1	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	31.4			厚さ	9.8	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	38.2			厚さ	10.4	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	33.6			厚さ	11.1	SX023	安山岩	
第3-52回	1	挽き臼	上臼	直径	36.5			厚さ	11.6	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	33.6			厚さ	11.1	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	上臼	直径	32.2			厚さ	11.3	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	上臼	直径	37.2			厚さ	10.6	SX023	安山岩	
第3-53回	1	挽き臼	上臼	直径	33.5			厚さ	13.4	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	30.6			厚さ	7.9	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	下臼	直径	30.5			厚さ	-	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	下臼	直径	31.5			厚さ	10.1	SX023	安山岩	
第3-54回	5	挽き臼	下臼	直径	33.2			厚さ	10.7	SX023	安山岩	
	1	挽き臼	下臼	直径	35.0			厚さ	12.7	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	下臼	直径	26.2			厚さ	9.8	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	下臼	直径	31.6			厚さ	10.0	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	下臼	直径	32.3			厚さ	9.1	SX023	安山岩	
	5	挽き臼	下臼	直径	33.8			厚さ	13.0	SX023	安山岩	
第3-55回	6	挽き臼	下臼	直径	35.5			厚さ	12.8	SX023	安山岩	
	1	挽き臼	下臼	直径	28.3			厚さ	8.3	SX023	安山岩	
	2	挽き臼	下臼	直径	31.5			厚さ	11.7	SX023	安山岩	
	3	挽き臼	下臼	直径	32.2			厚さ	7.5	SX023	安山岩	
	4	挽き臼	下臼	直径	35.0			厚さ	8.4	SX023	安山岩	
第3-56回	5	挽き臼	下臼	直径	38.4			厚さ	12.5	SX023	安山岩	
	1	五輪塔	空願輪	直径	16.1	長さ	27.1			SX023	凝灰岩	
	2	五輪塔	水輪	直径	25.2			厚さ	13.5	SX023	凝灰岩	
	3	五輪塔	水輪	直径	29.9			厚さ	17.0	SX023	凝灰岩	
第3-57回	4	五輪塔	水輪	直径	31.1			厚さ	12.8	SX023	凝灰岩	
	1	石造品	幅	31.4	高さ	22.9				SX023	凝灰岩	
	1	石造品	幅	-	高さ	-				SX023	凝灰岩	
第3-58回	2	石造品	幅	-	高さ	21.0				SX023	凝灰岩	
	3	五輪塔	地輪	幅	30.6	高さ	-			SX023	凝灰岩	
第3-72回		五輪塔	地輪	幅	27.9			厚さ	20.5	SX003	凝灰岩	
第3-93回	17	硯	長さ	-	幅	-				SK011		
第3-97回		挽き臼	下臼	直径	38.2			厚さ	12.3	SK013	安山岩	
第3-98回	1	五輪塔	空輪	直径	16.0			厚さ	16.0	SK013	凝灰岩	
	2	五輪塔	上座	上径	17.4	中径	22.0	下径	16.9	SK013	凝灰岩	厚さ14.6
第3-99回	12	挽き臼	下臼	直径	-			厚さ	-	SK014	安山岩	
	13	挽き臼	下臼	直径	30.5			厚さ	7.3	SK014	安山岩	
	14	挽き臼	下臼	直径	29.2			厚さ	10.2	SK014	安山岩	
	15	挽き臼	下臼	直径	35.2			厚さ	9.2	SK014	安山岩	
	24	紡錘車	最大径	4.6	厚さ	1.2	重量	41.2g		SK015	蛇紋岩	
第3-103回	26	砥石	幅	3.7	厚さ	2.5				SK015		両端を欠く
	1	五輪塔	火輪	幅	30.4	高さ	16.6			SK015	凝灰岩	
第3-104回	2	家形石造品	屋根部	幅	-	高さ	-			SK015	凝灰岩	
第3-108回	1	挽き臼	上臼	直径	30.1			厚さ	-	SK015	安山岩	
	2	挽き臼	下臼	直径	19.0	受径	35.0	器高	-	SK015	安山岩	底径28.0cm
第3-109回	12	石鍋	口径	-			厚さ	1.5		SK018	滑石	
	1	挽き臼	上臼	直径	18.5			厚さ	14.0	SK018	砂岩	
	2	挽き臼	上臼	直径	-			厚さ	-	SK018	安山岩	
	3	挽き臼	下臼	直径	-			厚さ	-	SK018	安山岩	
第3-112回	4	挽き臼	下臼	直径	17.3	受径	-	厚さ	-	SK018	細粒砂岩系	底径31.0cm
	20	石鍋	口径	-	器高	-	厚さ	1.3		SK019	滑石	
第3-114回	15	石鍋	口径	-	器高	-	厚さ	1		SK020	滑石	
第3-115回	4	砥石	長さ	18.2	幅	12.3		厚さ	6.4	SK021		溝有り
第3-140回	16	砥石	長さ	7	幅	2.1		厚さ	1.7	SX017	天草石	
	12	石製メソコ	長さ	3.6	厚さ	1.2	重量	11.8g		H-84	凝灰岩	
第3-149回	29	石鍋								I-64	滑石	
	30	硯	池	幅	8.8							
第3-156回	1	無印塔	中台	一辺	13.2	幅	31.5	厚さ	11.2		凝灰岩	八角形
	2	礎石		長さ	29.5	幅	19.5	厚さ	11.2	SD012	安山岩	十字の礎

遺物観察表32 第43次調査区遺物観察表(植物製品)

挿図No.	遺物No.	品種	寸法(単位cm)						遺構名	備考	図版No.
第3-26図	3	木皮製品	長さ	-	幅	2.1	厚さ	0.2	SD012	板の皮	
	4	木皮製品	長さ	-	幅	-	厚さ	2.0	SD012	板の皮	
	5	木皮製品	長さ	-	幅	-	厚さ	0.1	SD012	板の皮	
	6	木皮製品	長さ	-	幅	-	厚さ	0.1	SD012	板の皮	
	7	木皮製品	長さ	-	幅	-	厚さ	0.1	SD012	板の皮	
	8	種	長さ	-	幅	-	厚さ	6.4	SD012	種膜	図版13

遺物観察表33 第43次調査区遺物観察表(木製品・骨角器)①

挿図No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)						遺構名	備考	図版No.
				直径	長さ	幅	厚さ	器高	底径			
第3-7図	2	曲物	底	直径	15.0	厚さ	0.3	-	-	SE036		
	3	木片	-	-	-	-	-	-	SE036	自然木?		
	4	不明	-	直径	2.5	長さ	3.0	-	-	SE036		
	5	曲物	底	直径	5.8	厚さ	0.2	-	-	SE036	独葉状	
	1	漆桶	口縁部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012		
第3-20図	2	漆桶	口縁部	口径	14.6	底径	-	器高	-	SD012	ケヤキ	
	3	漆桶	口縁部	口径	15.4	底径	-	器高	-	SD012	ケヤキ	
	4	漆桶	胴部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012		
	5	漆桶	胴部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012		
	6	漆桶	完形品	口径	-	底径	-	器高	-	SD012	ケヤキ	
	7	漆桶	胴部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012		
	8	漆桶	完形品	口径	16.4	底径	8.8	器高	9.5	SD012	ブナ属	
	9	漆桶	底部	口径	-	底径	8.4	器高	-	SD012		
	10	漆桶	胴部	口径	16.0	底径	8.8	器高	9.5	SD012	クスノキ科	
	11	漆桶	底部	口径	-	底径	6.6	器高	-	SD012	ブナ属	
	12	漆桶	胴部	口径	15.6	底径	6.8	器高	9.1	SD012	ケヤキ	
	13	漆桶	胴部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012		
	14	漆桶	完形品	口径	13.8	底径	7.0	器高	5.3	SD012	ケヤキ?	
	15	漆桶	胴部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012		
	16	漆桶	胴部	口径	-	底径	-	器高	-	SD012	クスノキ科	
	17	漆皿	完形品	口径	13.8	底径	9.8	器高	2.8	SD012	タブノキ	
	18	漆桶	完形品	口径	13.0	底径	7.0	器高	3.9	SD012	ケヤキ	
	19	漆盤	底部	口径	-	底径	16.0	器高	-	SD012		
	第3-21図	1	普通蓋	底	直径	9.1	底径	7.3	器高	2.0	SD012	図版13
2			耳	長さ	-	幅	-	厚さ	1.1	SD012		
3		割り物		長さ	-	幅	-	厚さ	0.3	SD012		
4		割り物		長さ	-	幅	-	厚さ	0.4	SD012		
5		木製長刀		長さ	35.3	幅	3.2	厚さ	1.0	SD012	ミニチュア	
6		棒		長さ	-	幅	-	厚さ	1.5	SD012	ストロー状	
7		箸		長さ	-	幅	-	厚さ	1.1	SD012		
8				長さ	9.4	幅	1.9	厚さ	-	SD012		
9		男根状木製品		長さ	5.8	幅	2.7	厚さ	-	SD012		
10				長さ	4.8	幅	2.1	厚さ	0.2	SD012		
第3-22図	11	曲物	底	径	-	幅	-	厚さ	-	SD012		
	12	曲物	底	径	13.4	幅	-	厚さ	-	SD012		
	1	曲物	底	径	-	幅	-	厚さ	1.4	SD012		
	2	曲物	底	径	-	幅	-	厚さ	1.1	SD012		
	3	板		長さ	-	幅	-	厚さ	0.6	SD012		
	4	杓文字状		長さ	-	幅	-	厚さ	0.4	SD012		
	5	板		長さ	25.3	幅	3.7	厚さ	2.2	SD012		
	6	板		長さ	24.8	幅	-	厚さ	1.0	SD012	墨書 モミ属	
	7	板		長さ	27.3	幅	-	厚さ	0.7	SD012		
	8	板		長さ	27.9	幅	-	厚さ	0.9	SD012		
第3-23図	9	板		長さ	-	幅	-	厚さ	0.6	SD012		
	1	割り物		長さ	19.5	幅	-	厚さ	1.3	SD012		
	2	組み物		長さ	19.3	幅	2.9	厚さ	2.2	SD012		
	3	角材		長さ	25.5	幅	2.5	厚さ	2.3	SD012		
	4	人形		長さ	20.1	幅	3.5	厚さ	3.0	SD012		
	5	筒札?		長さ	15.8	幅	1.9	厚さ	8.0	SD012		
	6	鞘		長さ	18.5	幅	2.8	厚さ	1.4	SD012		
	7	棒		長さ	11.2	幅	6.0	厚さ	1.6	SD012		
	8	杭		長さ	20.2	幅	4.2	厚さ	4.2	SD012		
	第3-24図	1	下駄		長さ	-	幅	7.5	厚さ	0.6	SD012	
2		下駄		長さ	20.1	幅	-	厚さ	1.1	SD012		
3		下駄		長さ	-	幅	8.8	厚さ	1.5	SD012	図版13	
4		下駄		長さ	20.9	幅	9.5	厚さ	1.5	SD012		
5		木片		長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SD012		
6		木片		長さ	18.5	幅	2.8	厚さ	4.0	SD012		
第3-25図	1			長さ	2.9	幅	3.2	厚さ	2.1	SD012	組み付き	
	2	木球		長軸	5.8	短軸	5.6			SD012		
	3	木球		長軸	6.4	短軸	5.5			SD012		
	4	木球		長軸	5.4	短軸	4.4			SD012		
	5	木球		長軸	6.1	短軸	5.9			SD012		

遺物観察表34 第43次調査区遺物観察表(木製品・骨角器)②

採収No.	遺物No.	品名	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.				
				長軸	短軸	幅	厚さ							
第3-2500	6	木球		長軸	5.8	短軸	6.6		SD012					
	7	木球		長軸	6.4	短軸	6.3		SD012					
	8	木球		長軸	7.3	短軸	5.7		SD012					
	9	木球		長軸	6.8	短軸	5.9		SD012					
	10	木球		長軸	6.4	短軸	6.3		SD012					
	11	木球		長軸	8.3	短軸	7.3		SD012					
	12	木球		長軸	7.0	短軸	5.8		SD012					
	13	木球		長軸	7.8	短軸	6.4		SD012					
	14	木球		長軸	8.3	短軸	8.3		SD012					
	15	木球		長軸	7.2	短軸	6.8		SD012					
	16	木球		長軸	6.8	短軸	6.7		SD012					
	17	木球		長軸	6.3	短軸	5.3		SD012					
	18	木球		長軸	7.4	短軸	5.7		SD012					
	第3-2600	1	骨角器		長さ	20.3	幅	2.4	厚さ	-	SD012	鹿角製	第4-5図	図版14
	第3-4200	2	骨角器		長さ	11.0	幅	5.4	厚さ	-	SD012		第4-5図	
	第3-4200	7	箸		長さ	-	幅	-	厚さ	0.6	SX025			

遺物観察表35 第43次調査区遺物観察表(ガラス製品)

採収No.	遺物No.	品名	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.			
				口径	底径	器高	重量						
第3-2700	11	皿		口径	7.3	底径	5.0	器高	2.0	SD012			巻頭4
第3-14900	31	小玉		長さ	0.3	幅	0.4	重量	0.2g	H-66			
	32	小玉		長さ	0.3	幅	0.5	重量		H-66			

遺物観察表36 第43次調査区遺物観察表(金属製品)①

採収No.	遺物No.	品名	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.			
				長さ	幅	厚さ	重さ						
第3-2700	1	鉄砲	火抜き	長さ	12.5	幅	0.7	厚さ	0.5	SD012	青銅製	分析	巻頭4
	2	目釘飾り		長さ	4.0	幅	1.5	厚さ	0.4	SD012	青銅製		
	3	目釘飾り		長さ	4.0	幅	1.5	厚さ	0.4	SD012	青銅製		
	4	青銅製品		長さ	2.6	幅	0.3	厚さ	0.3	SD012		分析	
	5	弁		長さ	11.0	幅	0.3	厚さ	0.3	SD012	鍍金		図版14
	6	甲冑	小札	長さ	12.3	幅	5.8	厚さ	0.2	SD012			図版14
	7	錠		長さ	14.0	幅	1.1	厚さ	0.6	SD012			図版13
	8	鉄器		長さ	9.8	幅	0.7	厚さ	0.6	SD012			
	9	錠		長さ	11.0	幅	0.5	厚さ	0.4	SD012			
	10	十一面観音	頭部	長さ	4.3	幅	2.3	厚さ	-	SD012	青銅製	分析	巻頭4
	12	鎧		長さ	11.0	幅	-	厚さ	-	SD012	真鍮製	分析	
	第3-4200	6	甲冑	小札	長さ	11.1	幅	3.6	厚さ	0.1	SX023	図は2/3	
第3-7000	2	青銅製品		長さ	2.8	幅	2.1	厚さ	0.1	SX003			
	3	鉄器		長さ	3.8	幅	0.9	厚さ	0.9	SX003			
第3-7800	1	金剛		長さ	29	厚さ	0.9	重さ	171.8g	SK004			巻頭4
第3-10300	25	不明鉄器		長さ	11.3	幅	0.7	重さ	19.5g	SK015			
第3-10600	2	メッキ		長さ	1.6	厚さ	0.3	重さ	4.1g	SK015	横1.3cm	分析	
第3-10700	1	鑓先のへら?		長さ	15.3	厚さ	0.3	重さ	203.0g	SK015			
2	鉄釘子		長さ	12.1	厚さ	0.4	重さ	149.4g	SK015				
第3-13400	12	指輪		縦	2.3	横	1.9	重さ	1.8g	SK046	内径1.55cm	分析	巻頭4
第3-13600	23	銅製花巻の耳		長さ	1.9	厚さ	0.5	重さ	2.3g	SK049	銅製		
	24	不明		長さ	1.9	厚さ	0.3	重さ	10.7g	SK049			
	25	火箸		長さ	37.2	厚さ	0.5	重さ	42.3g	SK049	鉄		
第3-14100	21	彫形青銅品		長さ	8	厚さ	3.5	重さ	83.7g	H-63	幅5.3cm		
	22	銅製品		長さ	1.9	厚さ	0.2	重さ	2.3g	H-63			
	24	銅製品		長さ	1.9	厚さ	0.9	重さ	2.1g	H-63			
	25	銅釘		長さ	3	厚さ	0.4	重さ	3.6g	H-63			
	1	手斧		長さ	10.0	幅	3.8	重さ	41.3g	H+g-64	鉄製品		
2	鍔前		長さ	11.2	幅	4.6	重さ	157.2g	H-64				
3	鉄製品		長さ	3	幅	1.3	重さ	3.5g					
4	小刀		長さ	8.2	幅	1.3	重さ	14.1g	I-64				
5	火箸		長さ	23.8	幅	0.3	重さ	17.9g	g-64				
6	錠		長さ	15.5	幅	0.7	重さ	29.1g	H-66				
7	銅製品		長さ	3.3	幅	0.2	重さ	1.1g	H-64				
8	剣先		長さ	6	幅	0.8	重さ	2.8g	H-64	鉄製品			
第3-15000	9	鐙		長さ	5	幅	4.2	重さ	25.8g	H-65			図版14
	10	銅製品		長さ	4.5	幅	4.1	重さ	9.9g	H-64			
	11	はばき		長さ	3.1	幅	2.5	重さ	10.4g	H-65		分析	
	12	分割		長さ	1.2	幅	0.8	重さ	0.8g		重さ	分析	
	13	銅製品		長さ	5.7	幅	2.7	重さ	58.1g				
	14	鉄製品		長さ	8.5	幅	1.2	重さ	33.1g	I-64			
	15			長さ		幅		重さ				分析	
	16	銅製品		長さ	0.8	幅	0.8	重さ	0.1g	H-65			
	17	銅製品		長さ	2.5	幅	2.3	重さ	2.3g	H-64			

遺物観察表37 第43次調査区遺物観察表(金属製品)②

種別No.	遺物No.	品種	部位	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.		
				長さ	幅	厚さ	重さ					
第3-150図	18	銅製品		長さ	1.6	幅	0.3	重さ	0.4g	H-65		
	19	銅製品		長さ	0.9	幅	0.3	厚さ	0.1g	H-65		
	20			長さ	6.5	幅	0.1	重さ	4.2g	H-65		
	21	小刀	柄	長さ	2.4	幅	1.3	重さ	1.3g	I-66		
	22	小刀	柄	長さ	9	幅	1.3	重さ	13.4g	H-64	SD012	分析
	23	銅製品		長さ	1.4	幅	1	厚さ	1.1g			
	24	銅製品		長さ	1.9	幅	1.5	重さ	4.5g	H-65		
第3-155図	1	メダイ		長さ	1.5	幅	1.3	重さ	5.3g	H-63		分析
	2	メダイ		長さ	1.7	幅	1.6	重さ	4.6g	H-65	紐を欠く	分析

遺物観察表38 第43次調査区遺物観察表(瓦)

種別No.	遺物No.	名称	寸法(単位cm)				遺構名	備考	図版No.	
			長さ	幅	厚さ	重さ				
第3-31図	1	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.8	SD012	巴文
	2	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SD012	巴文
	3	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SD012	本州タイプの釣り紐
	4	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.7	SD012	唐草文
	5	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2	SD012	唐草文
	6	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2	SD012	唐草文
	7	平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SD012	
	8	平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.9	SD012	
	9	平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.9	SD012	
	10	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	2.9	SD012	
	11	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SD012	釘穴有り
第3-43図	1	丸瓦	長さ	-	幅	16.2	厚さ	2.8	SX023	
	2	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.8	SX023	
	3	平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.6	SX023	
	4	平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.6	SX023	
	5	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	2.8	SX023	
第3-73図	1	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.2	SX003	巴文と珠文
	2	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.9	SX003	巴文と珠文
	3	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.3	SX003	巴文と珠文
	4	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SX003	巴文と珠文
	5	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SX003	
	6	丸瓦	長さ	-	幅	15.0	厚さ	2.8	SX003	
	7	丸瓦	長さ	-	幅	13.3	厚さ	2.1	SX003	
	8	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.5	SX003	釘穴有り
	9	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.8	SX003	唐草文
	10	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.9	SX003	唐草文
	11	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.0	SX003	唐草文
第3-74図	1	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	3.2	SX003	
	2	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	3.4	SX003	
	3	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	3.2	SX003	
第3-95図	1	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.3	SK013	
	2	平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.2	SK013	
第3-100図	1	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	2.9	SK014	
	2	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	2.3	SK014	
第3-110図	1	セン	長さ	-	幅	-	厚さ	3.3	SK018	
	2	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	-	H-65	珠文と巴文
第3-153図	2	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.3	I-64	珠文と巴文
	3	軒丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.4	H-65	珠文と巴文
	4	丸瓦	長さ	-	幅	15.8	厚さ	2.5		
	5	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.8	H-65	九州タイプの吊り紐
	6	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.6	H-65	九州タイプの吊り紐
	7	丸瓦	長さ	-	幅	13.2	厚さ	2.6	H-65	
	8	丸瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.8	H-65	九州タイプの吊り紐
	9	瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.0	H-66	
	10	瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.1	H-66	
	第3-154図	1	軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	-	H-65
2		軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.9	H-65	唐草文
3		軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.8	H-64	唐草文
4		軒平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.1		中心飾りと唐草文
5		平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.4	H-63	
6		平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	1.8	H-63	
7		平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.0	H-65	
8		平瓦	長さ	-	幅	-	厚さ	2.1	H-65	
9		セン	長さ	-	幅	-	厚さ	3.4	H-64	
10		セン	長さ	-	幅	-	厚さ	3.8	H-64	

遺物観察表39 第43次調査区遺物観察表(銅銭)①

押込No	遺物No	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(cm)	書体	遺構名	備考	図説No
第3-338区	1	大行通寶	1068年	北宋	2.8	2.4	行書	SD012	1~6はさし銭状態	
	2	熙寧元寶	1068年	北宋	2.9	2.5	篆書	SD012		
	3	紹定通寶	1228年	南宋	2.9	2.4		SD012		
	4	阜寧通寶	1038年	北宋	3.1	2.5	篆書	SD012		
	5	大聖元寶	1023年	北宋	2.7	2.5	真書	SD012		
	6	開元通寶	621年	唐	2.8	2.3		SD012		
	7	景祐元寶	1034年	北宋	3.0	2.5		SD012		
	8	-	-	-	-	-	-	SD012		
	9	-	-	-	-	-	-	SD012		
第3-348区	1	大聖元寶	1023年	北宋	2.5	2.3	真書	SD012		
	2	寧道元寶	995年	北宋	3.0	2.5	草書	SD012	2~4は重なって出土	
	3	開元通寶	621年	唐	2.0	2.2		SD012		
	4	水滸通寶	1408年	明	4.5	2.6		SD012		
	5	水滸通寶	1408年	明	2.6	2.6		SD012	5~7は重なって出土	
	6	洪武通寶	1368年	明	2.8	2.2		SD012		
	7	洪武通寶	1368年	明	2.9	2.2		SD012		
	8	景德元寶	1004年	北宋	2.9	2.4		SD012	8~10は重なって出土	
	9	大順通寶	1017年	北宋	2.1	2.3		SD012		
	10	洪武通寶	1368年	明	2.5	2.3		SD012		
	11	洪武通寶	1368年	明	3.5	2.4		SD012		
	12	水滸通寶	1408年	明	3.3	2.6		SD012	12~13は重なって出土	
	13	洪武通寶	1368年	明	1.8	2.1		SD012		
	14	洪武通寶	1368年	明	2.3	2.3		SD012	孔がいびつ 判読困難	
	15	洪武通寶	1368年	明	2.4	2.3		SD012		
	16	洪武通寶	1368年	明	2.7	2.3		SD012	16~19は集中出土	
	17	洪武通寶	1368年	明	2.7	2.3		SD012		
	第3-358区	18	祥符元寶	1008年	北宋	2.5	2.3	真書	SD012	
19		大聖元寶	1023年	北宋	2.1	2.3	真書	SD012		
20		祥符元寶	1008年	北宋	1.7	2.2	真書	SD012	20~24は集中出土	
21		洪武通寶	1368年	明	2.4	2.2		SD012		
22		祥符元寶	1008年	北宋	1.8	2.1		SD012		
23		洪武通寶	1368年	明	4.0	2.5	真書	SD012	判読困難	
24		洪武通寶	1368年	明	2.1	2.1		SD012		
1		阜寧通寶	1038年	北宋	2.2	2.5	篆書	SD012		
2		熙寧元寶	1068年	北宋	3.0	2.5	真書	SD012		
3		洪武通寶	1368年	明	2.6	2.3		SD012	3~10は集中出土	
4		洪武通寶	1368年	明	3.2	2.4		SD012		
5		洪武通寶	1368年	明	2.4	2.2		SD012		
6		元祐通寶	1086年	北宋	1.7	2.2	篆書	SD012		
7		祥符元寶	1008年	北宋	1.3	2.2	真書	SD012	判読困難	
8		洪武通寶	1368年	明	2.8	2.3		SD012		
9		祥符元寶	1008年	北宋	1.8	2.1	真書	SD012	判読困難	
10		咸平元寶	998年	北宋	2.5	2.3		SD012		
11		洪武通寶	1368年	明	2.9	2.3		SD012		
12		祥符元寶	1008年	北宋	2.4	2.4		SD012	12~20は集中出土	
13		寧道元寶	995年	北宋	3.1	2.4	草書	SD012		
14		洪武通寶	1368年	明	3.0	2.3		SD012		
15		開元通寶	621年	唐	2.4	2.3		SD012		
16		元豐通寶	1078年	北宋	2.5	2.3	行書	SD012	判読困難	
17		洪武通寶	1368年	明	1.9	2.2		SD012		
18		祥符通寶	1008年	北宋	2.7	2.3		SD012	判読困難	
19		洪武通寶	1368年	明	2.9	2.2		SD012		
20	洪武通寶	1368年	明	3.8	2.3		SD012			
21	開元通寶	621年	唐	3.2	2.5		SD012	丸孔		
22	元祐通寶	1086年	北宋	3.4	2.4		SD012	判読困難		
23	熙寧元寶	1068年	北宋	2.4	2.5	篆書	SD012	判読困難		
24	開元通寶	621年	唐	1.8	2.4		SD012			
25	至和元寶	1054年	北宋	3.2	2.5	真書	SD012	判読困難		
26	元豐通寶	1078年	北宋	1.8	2.5	篆書	SD012			
第3-568区	1	-	-	-	-	-	-	SX023		
	2	-	-	-	-	-	-	SX023		
第3-648区		元豐通寶	1078年	北宋	2.0	2.5		1期遺構		
第3-718区		元豐通寶	1078年	北宋	1.9	2.3		SX003		
第3-808区		祥?元寶	-	-	1.4	2.5		SK005		
第3-928区	1	元祐通寶	1086年	北宋	2.9	2.5	篆書	SX011		
	2	紹聖元寶	1094年	北宋	2.4	2.4	篆書	SX011		
	3	元豐通寶	1078年	北宋	1.8	2.3	篆書	SX011		
第3-968区		政和通寶	1111年	北宋	2.8	2.5	篆書	SK013		
	1	淳化元寶	990年	北宋	2.9	2.5	真書	SK015		
	2	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.2	2.4	篆書	SK015		
第3-1058区	3	元豐通寶	1078年	北宋	2.1	2.3	行書	SK015		
	4	水滸通寶	1408年	明	1.7	2.5		SK015		
	5	阜寧通寶	1038年	北宋	2.6	2.4	真書	SK015		
	6	洪武通寶	1368年	明	1.8	2.4		SK015		
	7	聖宋元寶	1101年	北宋	2.2	2.4	篆書	SK015		
	8	嘉祐通寶	1056年	北宋	1.6	2.5		SK015		

遺物観察表40 第43次調査区遺物観察表(銅銭)②

押込No.	遺物No.	銭貨名	初鋳造年	国・王朝名	重さ(g)	直径(cm)	書体	遺構名	備考	図説No.
第3-111図	1	紹平通寶	1434年	後黎	1.7	2.5	-	SP018	安南銭	
	2	-	-	-	-	-	-	SP018		
第S-119図	1	天祐通寶	1017年	北宋	3.7	2.6	真書	SK020	判読困難	
	2	聖宋元寶	1101年	北宋	2.7	2.4	-	SK024	判読困難	
	3	嘉祐通寶	1056年	北宋	2.1	2.4	真書	SK024	2・3は重なって出土	
	4	祥符通寶	1008年	北宋	3.0	2.5	-	SK024		
	5	元豐通寶	-	-	2.6	2.5	-	SK025		
第S-133図	1	皇宋通寶	1038年	北宋	2.2	2.5	篆書	SK043		
第S-137図	2	-	-	-	-	-	-	SK046		
	1	紹聖元寶	1094年	北宋	3.3	2.4	篆書	SK049		
	2	水英通寶	1408年	明	3.5	2.6	-	SK049	2・3は重なって出土	
	3	水英通寶	1408年	明	3.6	2.6	-	SK049		
	4	元豐通寶	1078年	北宋	3.1	2.5	行書	SK049	4～6は重なって出土	
	5	元符通寶	1096年	北宋	3.2	2.4	行書	SK049		
	6	元豐通寶	1078年	北宋	2.5	2.4	篆書	SK049		
	7	元祐通寶	1086年	北宋	2.4	2.5	行書	SK049		
	8	聖道元寶	995年	北宋	2.8	2.5	真書	SK049		
	9	咸平元寶	998年	北宋	2.3	2.5	-	SK049	青石上月	
	10	元祐通寶	1086年	北宋	3.2	2.4	行書	SK049		
	11	元豐通寶	1078年	北宋	3.2	2.5	行書	SK049		
	12	咸平元寶	998年	北宋	2.5	2.5	篆書	SK049		
	13	元豐通寶	1078年	北宋	2.0	2.5	篆書	SK049		
	14	-	-	-	-	-	-	SK049		
	15	皇宋通寶	1038年	北宋	2.2	2.5	真書	SK049		
	16	嘉祐通寶	1056年	北宋	3.1	2.4	真書	SK049		
17	水英通寶	1408年	明	3.2	2.5	-	SK049			
18	元豐通寶	1078年	北宋	2.4	2.5	行書	SK049			
第3-151図	1	不明	-	-	-	-	-	H-63	焼土層直下	
	2	不明	-	-	-	-	-	I-65	「寶」	
	3	不明	-	-	-	-	-	I-65		
	4	祥符元寶	1008年	北宋	2.5	2.5	真書	H-63		
	5	元豐通寶	1078年	北宋	1.9	2.5	篆書	H-63		
	6	不明	-	-	-	-	-	H-64		
	7	不明	-	-	-	-	-	H-64		
	8	不明	-	-	-	-	-	H-64	「聖宋・・・」	
	9	不明	-	-	-	-	-	H-64	「咸平元寶」?	
	10	不明	-	-	-	-	-	H-65		
	11	不明	-	-	-	2.6	-	調査区一塚		
	12	皇宋通寶	1038年	北宋	2.3	2.5	篆書	調査区一塚		
	13	不明	-	-	-	-	-	調査区一塚	「・元寶」	
	14	元豐通寶	1078年	北宋	2.0	2.5	篆書	H-65		
	15	皇宋通寶	1038年	北宋	2.1	2.5	真書	H-64		
	16	元豐通寶	1078年	北宋	3.1	2.4	行書	H-64		
	17	治平元寶	1054年	北宋	2.5	2.5	真書	I-64		
	18	洪武通寶	1368年	明	2.6	2.4	-	H-66		
19	紹聖元寶	1094年	北宋	2.9	2.5	行書	調査区一塚			
20	元豐通寶	1078年	北宋	2.5	2.5	行書	調査区一塚			
21	皇宋通寶	1038年	北宋	3.2	2.4	篆書	調査区一塚			
第3-152図	1	元豐通寶	1078年	北宋	2.1	2.5	行書	H-63		
	2	淳化元寶	990年	北宋	2.6	2.5	行書	H-63		
	3	淳化元寶	990年	北宋	2.3	2.4	草書	H-63		
	4	元祐通寶	1086年	北宋	2.4	2.5	篆書	H-63		
	5	天聖元寶	1023年	北宋	2.4	2.5	真書	H-63		
	6	紹聖元寶	1094年	北宋	1.9	2.5	行書	H-64		
	7	紹聖元寶	1094年	北宋	2.0	2.4	行書	H-64		
	8	元豐通寶	1078年	北宋	1.6	2.4	篆書	H-64	逆に表示	
	9	-	-	-	-	-	-	調査区一塚	「寶」	
	10	-	-	-	-	-	-	H-64	「祥」と「元」	
	11	皇宋通寶	1038年	北宋	1.9	2.5	真書	H-64		
	12	-	-	-	-	-	-	H-64		
	13	欠番	-	-	-	-	-	-		
	14	元祐通寶	1086年	北宋	1.1	2.5	篆書	H-64		
	15	元祐通寶?	1086年	北宋	2.9	2.5	篆書	H-64	判読困難	
	16	元豐通寶	1078年	北宋	2.5	2.5	行書	H-64	焼土面	
	17	元豐通寶	1078年	北宋	3.0	2.5	行書	H-65	星形孔	
	18	紹聖元寶	1094年	北宋	3.1	2.5	篆書	H-65		
	19	紹聖元寶	1094年	北宋	1.5	2.5	-	H-65	判読困難	
	20	天聖元寶	1023年	北宋	2.4	2.5	真書	H-65		
21	不明	-	-	-	1.9	2.4	行書	「元」「通」「寶」		
22	洪武通寶	1368年	明	4.4	2.4	-	H-65			
23	皇宋通寶	1038年	北宋	2.9	2.5	篆書	I-65			
24	天祐通寶	1017年	北宋	1.8	2.5	真書	H-65			
25	天祐通寶	1017年	北宋	2.3	2.5	真書	調査区一塚			
26	政和通寶	1111年	北宋	1.9	2.5	篆書	調査区一塚			
27	不明	-	-	-	-	-	H-65	「元」と「寶」		
28	不明	-	-	-	-	-	H-65	洪武通寶か?		
29	不明	-	-	-	-	-	H-65			
30	不明	-	-	-	-	-	I-65			

写 真 图 版



調査区全景 (南から)



SD029B 溝状遺構



SD032 溝状遺構



SD033 溝状遺構



SD066 堀



SD066 堀 59-60区間土層



SD066 堀 木製品出土状況



SD066 堀 土師器及び箸出土状況



SK010 土坑



SK011 土坑



SK014 土坑



SK015 土坑



SK036 土坑



SK045 土坑



SK056 土坑



SK072 土坑



SX077 石列



SX063 石列



SX047 石列



SX047 石列及び下部土層



SX084 石列



SX074 石列



SX021 集石



SX022 集石



SX023 集石



SX023 集石



SX024 集石



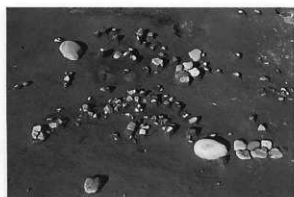
SX028 集石



SX054 集石



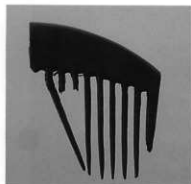
SX040 遺物集中区



SX041 遺物集中区



SX060 遺物集中区



SD066出土櫛
(2-36-202)



SD066出土櫛 (2-36-201)



SD066出土漆器椀 (2-37-203)



SD066出土漆器椀 (2-37-204)



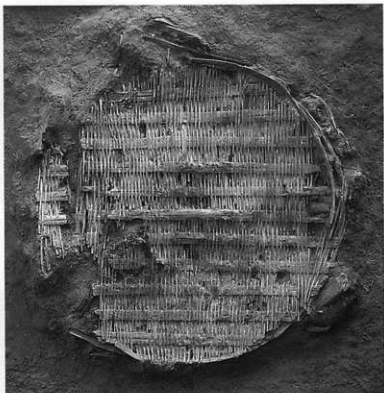
SD066出土草鞋



SD066出土草鞋



SD066出土葉匙?
(2-45-277)



SD066出土竹製網籃 (2-43-272)



SD066出土草履下駄 (2-38-217)



SD066出土鳥形人形? (2-36-199)



整地層出土 蕨形銅 (2-143-210・211)



SX041出土香炉 (2-124-23)



豊後府内の万寿寺跡と第2南北街路



府内町跡第43次調査区と「府内」



SD012 完掘状況



SD012 完掘状況 2



SD012の底面で検出されたSE026の井戸



SE036の井戸



SX022の石積み



SX017の埋め立て石



SX023の初期石積みと裏側の埋め立て石



SX023の初期石積み



SD012とSX023の初期石積み



SX023のⅠ区石積みと手前Ⅰ区石積み



SX023の石積みと埋立ての石群



SX023のⅠ区石積みと第Ⅰ期と第Ⅱ期の礎石建物



SX023のⅡ区と境の石積み



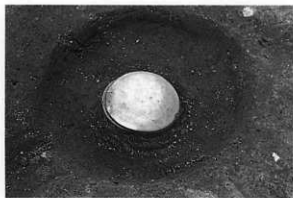
第Ⅰ期礎石建物



第Ⅰ期礎石建物の入口部分



第Ⅰ期礎石建物の入口部分と第Ⅱ南北街路



SK002 埋立遺構



SK004 鍛冶遺構



SK005



SK006



SK007



SK010



SK024



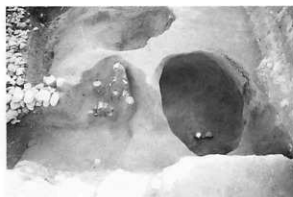
SK025



SK032



SK033



SK032とSK033



SK046の指輪出土状況



SK048



SK049



H-63区の土坑群と南壁



SF018 (第2南北街路)の敷石整備



SK023のⅠ区とⅡ区の境の石積み



第Ⅱ期礎石建物の南北街路からの入口



第Ⅱ期礎石建物の第2南北街路からの入口(北から)



第Ⅱ期礎石建物の基礎の版築状遺構と
その下部の第Ⅰ期礎石建物の礎石



第Ⅱ期礎石建物の東端の礎石と石列



SX011(焼土層) 遺物出土状況



SX023の上部の土層1



SX023の上部の土層2



SX003 敷石状況



SX003の石積み (西から)



SX003の石積み (南から)



SX003の石積みとSX023の埋立



棕櫚出土状況



下駄出土状況



鍵出土状況



碁笥蓋出土状況



鹿角製品出土状況



罎(小札)出土状況



矛(金銅製)出土状況



木製品出土状況



曲物出土状況



刀の鐔出土状況



火縄銃の火鉄み出土状況



漆桶出土状況

報 告 書 名 抄 録

ふりがな	ぶんごふない 8 ちゅうせいおおもふないまちあとだい34・43じちょうさ
書名	豊後府 8 中世大友府内町跡第34・43次調査
副書名	一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	4
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第23集
編著者名	坂本嘉弘・友岡信彦
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977
発行年月日	2008年3月25日

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
ちゅうせいおおもふないまちあとだい34次調査 中世大友府内町跡 城下町跡	おおいだし 大分市 ろくぼうきまち 六坊北町	201	51	33° 13' 35"	131° 37' 5"	2003年 7月9日 ～ 2004年 3月29日	700㎡	一般国道 10号古国府 拡幅事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ちゅうせいおおもふないまちあとだい34次調査 中世大友府内町跡 城下町跡	包含層 ほか	中世 14世紀～ 16世紀	廃棄土坑 万寿寺の西側の堀 街路遺構 井戸 礎石建物	在地系土師質土器の坏 京都系土師器 貿易陶磁器 ガラス皿 真鍮製の鎖 漆碗 木製品 動物骨	16世紀後葉の短い期間に 街路に廃棄土坑が掘削、 万寿寺の堀の拡幅、埋立、 礎石建物の建設と街路の 整備を施行。

要 約	<p>府内町跡34・43次調査は「府内古図」に描かれる万寿寺の西側にあたる。調査の結果、万寿寺の西側を区切る幅約8m、深さ約2mの大規模な堀を検出した。しかも堀は埋め立てられ、礎石建物群が建てられてた。この建物は天正10年に大友義統が家臣に発給した文書の「萬寿寺築地之内并西之屋敷」の記述に該当する可能性が強いと考えられる。また、堀は西側の街路を削り取り拡幅しており、さらに街路には廃棄土坑群が掘り込まれている。こうした一連の人々の行動は、十六世紀後葉の「府内」の政治状況を反映していると考えることが出来る。</p>
-----	--

豊後府内 8

中世大友府内町跡第34・43次調査区

一般国道10号古国府拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第23集

平成20年3月25日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113

大分市中判田字ビワノ門1977番地

TEL (097) 597-5675

印刷 刷 有限会社 中央印刷

〒870-0021

大分市顕徳町2丁目2-38

TEL (097) 532-3805
